

S09地区のとある指揮官 と戦術人形達の和やかな 日常と殺伐とした日 常

アウル スペランツァ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄血との攻防における最前線に位置するS09地区

そこには様々な基地があり、指揮官がいる

これはそのうちの1つの基地で起こる指揮官と人形達のネタとガチが入り交じる日常の物語である

※クロスオーバー要素はオリ主にのみかかっており、世界観に影響は及ぼしません：
のつもりだったんだけどなあ

がつつり他の作品のキャラを出すことにしました（´ω´）

あとうちの基地は基本的にフリー素材です、著しいキャラ崩壊等さえなければご自由

にお使いください

目次

キャラ&施設紹介

オリキャラ紹介（随時更新予定）

1

クロスオーバーキャラ紹介&独自設定

16

部隊&組織紹介

27

序章

始まりの日

34

基地の案内

40

地獄の特訓の始まり

53

訓練の様子：格闘訓練編

75

ライフル型No.2の登場！

87

モシんちゃんとM200ママ

97

休日の指揮官

109

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

pa

part 1

127

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

pa

part 2

142

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

pa

part 3

154

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

pa

part 4

171

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

pa

part 5

187

療養中の指揮官と諜報部隊の暗躍

小話その2	大活躍だよかりちゃん	座学3日目	三時間目	728
！でも…	座学3日目	四時間目	745	
座学2日目	一時間目	座学3日目	五時間目	757
座学2日目	二時間目	小話その5	クレアの実力	769
座学2日目	三時間目	小話その6	やっちゃったね、MDR	
座学2日目	四時間目	ちゃん…		786
座学2日目	五時間目	実践編：格闘訓練その①		806
悪魔の詩殺人事件		指揮官1日好き勝手権限	その1	
小話その3	緊急訓練	830		
小話その4	一〇〇式のもう1つの顔	実践編：格闘訓練その②		846
座学3日目	一時間目	実践編：空挺訓練		858
座学3日目	二時間目	実践編：狩猟訓練①		870
		小話その7	PPKお嬢様の御戯れ	

実践編：狩猟訓練②	890
実践編：狩猟訓練③	920
幕間：スカーレットの訓練方針	939
訓練の終わり	950

キャラ&施設紹介

オリキャラ紹介（随時更新予定）

スカレット・ミツチエル指揮官

性別：女

年齢：34

身長：187cm

階級：中佐

得意な銃種：SR（対物ライフルからDMRまでなんでも）、HG
イメージ画像

S09地区にある基地の1つの指揮官を勤める人物

紅い長髪をサイドよりのポニーテールに纏めている

右目に縦に走る傷跡があり、それをサングラスで隠しているが隠しきれていない

基本的にグリフィンの制服を着ておらず、白シャツに赤ネクタイ、黒のデニムに黒スニーカーを履いており、丈の短い白いモッズコートを良く着ている

全身から歴戦の猛者特有の「凄味」を発しており、怖がられることもしばしば
そしてその度に落ち込んでいる

しかしその気になれば気配を完全に断ち、闇や群衆に溶け込むことも出来る

第三次世界大戦によって滅んだアメリカの出身

今となつては非常に珍しいアメリカ人の生き残りであり、隠密特殊部隊ゴーストに所属していた

アメリカ軍でもその存在を知る者は殆どおらず、その中でもスカレットは優秀で過去にはたった4人でボリビアの強大な麻薬カルテルを解体した実績を持つ

大戦前に極秘任務で自身のスポッターと共にロシアへと渡つていたため核爆弾の投下から生き残れた

そのスポッターは現在スカレットの基地で後方幕僚兼ガンズミスとして仕事に就いている

L115A3を愛用するスカウトスナイパーであり、その実力は折り紙付き

最高で2800mを撃ち抜いた記録もあり、アメリカで1番のスナイパーだと称されることもあるが極秘の部隊に所属しているために表にその記録や賞賛が出てくることはなかった

スナイパーであるにも関わらず肉弾戦も相当に得意であり、良く訓練所でトンプソンと殴り合っている様子が見られ、この基地の名物となりつつある

中にはその勝敗で賭けをしている人形もいるとかいらないとか：

大戦後、崩壊したアメリカに戻ることも出来ずに困惑していた所をクルーガーに誘われグリフィンに入社した

ヘリアントスとも仲が良いらしく、よく一緒に酒を飲んでいる

スカレットも未婚であり、ヘリアントスと共に合コンに行くが全敗中

2人して合コンの敗北者と言われている

性格は明るくて気さく

戦術人形を人形としてではなく人間として扱い、差別的なことは一切しない

人形達と一緒に戦地へ赴き共に戦うという他の指揮官からすると信じられないようなことをやってのける人物

替えの効きにくい指揮官が戦場で鉄血と直接銃撃戦をやるなんてとんでもないこと

であるため、それを普通にやるスカレットは本社から問題児扱いされている

しかしそれ以上に本人が優秀であることに加えて教練技術にも長けている為に彼女の率いる部隊は鉄血から恐れられている

その優秀さから問題行為は特別に許可、もとい黙認されている

最前線のS09地区の基地を任されており、鉄血を退けて背後にある街を守っている

クレア・ウィリアムズ（旧姓：リード）

性別：女

年齢：32

身長：162cm

階級：中尉

得意な銃種：SMG、SR

イメージ画像

スカーレットと20年前に知り合った時から数々の戦場を共にした親友であり、現在スカーレットが指揮官を勤める基地で後方幕僚とガンスマスを兼任している人物。ガンスマスとしての能力は異常で、兵士でありながらクラス3メンテナンスを可能とするほど。

金髪碧眼の美人で長い髪をスカーレットのように結ばずに下ろしているが、これは今はもう戦地へ赴くことが殆どないためである。

服装は仕事中はスーツをしっかりと着ており、オフの時は割とゆつたりとした服を着る。

しかしどんな時でもタートルネックのインナーを着て首を隠している。

これは過去に負った負傷で首の左側に縫合した跡が残っており、それを見せないようにする為である。

スカーレットと同じくアメリカ人の生き残りで特殊部隊「ゴースト」に所属していたスカーレットから全幅の信頼を寄せられており、彼女が極秘任務でロシアへと渡った際に連れていったスポッターとはクレアのこと。

ゴーストでは主にスカーレットのスポッターとして彼女の狙撃のサポートを行うと同時に、スコープと人差し指のみに意識を集中させて無防備となるスカーレットの護衛を行っていた。

それ以外にも気配を殺して敵地へ直接潜入し、情報の抜き取りや破壊工作といったことも得意とする

他には愛銃のMPXを持って突撃し、敵の陣形を崩したり攪乱射撃や制圧射撃等も得意としていた

性格は基本的に穏やかで、笑顔を絶やすことなく接しやすい

しかし怒った時もその笑顔を崩すことなく怒りのオーラを発するので場合によつてはスカーレット以上に怖い

因みに既婚者であり、子供もいる

彼女が前線に出なくなったのはそんなクレアを戦場に出したくはないというスカーレットの厚意によるもの

本人もそれには納得しており、自ら戦地から離れることを選択した

夫もアメリカ人でクレアがロシアに渡った際に一緒に着いてきた

合コンに敗北したスカーレットが稀にクレアに恨み言を言ってきたりはするがそれはご愛嬌ということで本人は気にせずお酒を勧め、愚痴を聞いてあげている

そして酔い潰れたスカーレットをベッドまで運んで寝かせてあげるまでがワンセットになりつつある

イーサン・ウイリアムズ

性別：男

年齢：36

身長：178 cm

階級：大尉

得意な銃種：AR、GPMG

イメージ画像

クレアの夫でありスカレットとも親交が深く、元ゴースト隊員

現在はスカレットが指揮官を務める基地にて人形の整備士として働いている

兵士でありながらかなり専門的なエンジニアとしても活動していた経験を活かして戦術人形のマインドマップ等の構造も独学で解析、習得している天才

服装が基本スーツ、常に穏やかな笑みと雰囲気を含んでいる、コンピューターに精通している、キレるとやばいなど色々クレアに似たところがある

違うのは常に目を閉じていて目を開くのは本当にやばい緊急事態か本気でキレた時

のみであること、それとキレた時には雰囲気を一変させて周囲におどろおどろしい殺意を放つ点など

戦闘においては主にARやGPMG等を用いて突撃や後退、制圧に防衛など様々な作戦を遂行するオールマイティ型

だが本質的に隠密作戦へ従事する部隊に居たため近、中距離での狙撃能力には目見張るものがある

またクレアと同様機械工作にも秀でているためクラス2メンテナンスを戦場でいとも簡単に行うほど

その為か愛用しているRS556やMG338等はクレアと協力して☑全て☑のパーツを独自に製作したカスタムパーツへと変更している

これには流石にスカーレットもドン引きした模様

だが今となってはクレアと同様の理由で第一線に出ることはまずない

仕方ないことではあるが折角作った自身の愛銃が活躍しないことには少し寂しさを覚えている

とは言え人を殺さなくて良くなったことに安心感を感じたりもしていて複雑な心境となっている

ライアン・ウイリアムズ

性別：男

年齢：8

身長：115 cm

階級：なし

得意な銃種：なし

イーサンとクレアの子供

基本的に穏やかな両親とは違ってかなり活発で元気いっぱいな男の子

だが両親の教育が良いのか周囲の人に対して礼節を持ちながら接することが可能、しかしスカーレットに対してだけは例外で滅茶苦茶容赦なく暴言を吐く

これは何もスカーレットを軽視してゐるわけではなく、スカーレット本人が「何のしがらみにも囚われず、ありのままの素を曝け出せる相手が居た方がいいだろ」と自分からその役を買って出ているからであり、口には出さないがライアンはスカーレットに感謝している

その為か両親よりもスカーレットに懐いていのではないかと思われることもあるほど

基本的に基地には居らずウイリアムズ家の家にいるが、両親は彼を一人にしたくはな

いと考えているため家には常に使用人を置いてある

その使用人もライアンに対してかなり親身になって接するのでライアンにとっては第二の母親くらいに思っている

スカーレットの厚意によってウイリアムズ夫婦は毎月最後の1週間を家で過ごすことが可能であり、その時は2人も兵士という肩書を捨ててただの親としてライアンとの時間を物凄く大切にしているのもありライアンは両親に対して疎遠感を感じたりはしていない

また、その際にライアンは1度基地へ来て両親を迎えてから家に帰るがこれはスカーレットに会いに来て遊んで欲しいがための我儘でもある

因みに普段ライアンを基地へと送るのは家にいる使用人が行うが、稀に両親のどちらかが行うこともあるようだ

基本的にやんちゃでスカーレットへの態度から粗暴な印象を持たれるが、その実両親やスカーレットに憧れていて将来は自分も立派な兵士になりたいと思っっている

しかし3人からするとそれは望んでおらず、戦いとは無縁に育って欲しいと思っっているため衝突することもしばしば

それでも兵士を志して止まないのには理由があり、それはいずれ引退して老いていく両親やスカーレットを自分の手で守りたいという強い思いがあるから

だが素直じゃない性格が災いしてその想いを打ち明けることは出来ないでいる

スカーレットは何となく気付いている節もあるが、恥ずかしさ程度をも乗り越えられない意思の弱さでは必ず後悔する結果になると確信しているため、そのことを自分から聞くことはしないし誘導して言わせたりも一切しない

彼が銃を握るためには自身の素直じゃない性格や恥ずかしさ等を乗り越え、その上で両親とスカーレットに自分の覚悟を…意思の強さを見せつけて認められないといけな
いだろう

20式自動小銃

性別：女

年齢：製造から約9ヶ月

身長：167cm

階級：なし

得意な銃種：AR

イメージ画像

IOPからS地区総隊指令基地へ特別に派遣されている試作人形

外見は明るくて活発なお姉さんというイメージで作られており、性格もそれに合わせて明るくて基本的に接し易い

しかしスカーレットの影響が若干嗜虐嗜好を拗らせている面がある為、興が乗ると敵を痛ぶろうとする残虐性も持つ

彼女の元となった銃は水辺での戦闘を想定した造りとなっているが、今の世の中では海戦など起こることはないだろうと後回しにされてきた

しかしそれでも何かしらの有用性があるかもしれないとのことで試作され、その価値を見極めて適切な訓練が施せる者の下へ……となった時点で真つ先にスカーレットの名が挙げられたことにより当基地に仮配属されている

己の半身となるARによる牽制や奇襲、防衛など何でも卒なく熟す万能性を持ちながら水辺での戦闘では右に出る者が居ない程の適応力を見せつける

それは水中銃として開発された戦術人形達を上回る程のものであり、スカーレットが Navyseals に所属していた頃の経験をも色濃く受け継いだ人形である

またナイフ術にも長けており両手にナイフを持つという特殊な戦闘法を好む

変幻自在な軌道を描くそのナイフから逃れるのは非常に困難であり、それに完璧に対

処出来るのはミレニアム8の面々など極一部に留まる程完成度が高い

その上彼女は戦闘時に趣味の悪い不気味な仮面を付けることを好み、返り血で染まり切っているのもあつて精神の弱い者であればその姿を見ただけで竦み上がるだろう

元となった銃は2020年に今は亡き日本の自衛隊にて正式採用されたアサルトライフル

島国である日本の特性を鑑みて防錆性と排水性に拘られており、前身の89式と比べて大幅なモダンイズが図られている

全体的に良い銃ではあるのだが、問題点も勿論ある

例えばセレクターレバー、これまでの89式ではセーフ、フル、3点、セミとなっていたのだが20式ではセーフ、セミ、フルとなっている

ぶつちやけ今までの89式が可笑しいだけではあるのだが、軍隊に於いてセレクターの操作が変わるといふのは大変なことであり当然慣れない内はセレクターポジションミスによる暴発等の事故が多発する

更に20式のセレクターレバーはセーフからセミまでは45°であるのだが、何故かフルに入れるにはそこから更に90°。程レバーを動かさなくてはならなくなっている

こうなった理由として考えられるのは2つ、一つ目はフルに入れるのに必要な距離を伸ばすことで簡単にフルオートで撃てないようにしたかったという理由

気持ちには分からなくはないがハッキリ言つて意味がない、意味がないどころか万が一にも本当に戦争になつた時に切り替えのし難さや戦闘時のハイストレスな状況下によつて切り換えきれずに中途半端な位置で止まつてしまつた際に故障するリスク等を抱えるだけなので問題点でしかない

2 2つ目は後々3点バーストを入れたいから空けているという理由

これも気持ちは分からなくもないのだが一つ目と同様意味がなく、寧ろ問題を抱えることになる

3 3点バーストには一切の利点が存在せず、その上整備の困難さやら単価の上昇やらのリスクがある為やめておいた方が無難だ

更に日本は銃の開発に消極的な為そんな隙間を作つておいたところでどうせ作ることはない、だつたら最初からない方がマシである

次に問題点として挙げられるのはストック、構想段階ではストックが少々窪んでいる形をしていたのだが完成したのは逆の膨らんだストック

恐らく見た目的にSCARをパクつたと言われるのが嫌だつたのだろうが、そんなことは気にせず作るべきであつた

ストックに関しては折り畳み機能が存在しないという最新のアサルトライフルとしてはあまり考えられないデメリットも存在するが、これに関しては微妙だ

ストックが折り畳めなくともそこまで困る場面というのは意外と存在しない、確実に困ると言えるのは空挺時位のものであろう

他にもかなり狭い場所に侵入したり潜水艦による浸透を行う際にも困るかもしれないが、完全隠密行動を求められるような特殊任務を請け負う特殊作戦群は元から日本の開発した銃など使わないので問題はない

彼らはHKが大好きなので20式ではなく普通にHK416やMP7を使っている
悪い意味で日本らしさのある、優れてはいるが手放しに褒めることの出来ない銃というものが総評であろうか

クロスオーバーキャラ紹介&独自設定

『VOICEEROID』より

原作（原作と言って良いのか微妙ですが）から5年後ということになっているので皆元の設定より5歳上にしております

そうしないと流石に今作との関り上違和感がすごいので…（それでも矛盾が生じてますが）

結月ゆかり

性別：女

年齢：22

武器：HG

紫色でショートの髪型をした成人女性

体型はスレンダーでそのほっそりとした容姿はまるでモデルのようである
つまりド貧乳でありUMP45とは気が合うであろう

元V・S・の所属で実働部隊の作業員

V・S・の隊員の中では珍しい女性である上に数少ない銃器を所持していた

使用するのには主にグロッグで中でもサブコンパクトで45口径モデルのG30を愛用している

作業員として隠密を主体として動くが近接での銃撃戦も得意としており、その実力は敵からも賞賛されるほど

実は詳細な産まれが分かっている孤児

ある時V・S・が運営する孤児院の玄関に置き去りにされていたところを発見され、そのままそこで引き取られた

成長する過程で卓越した身体能力をV・S・に見出され15歳の時にスカウトされて以来V・S・の訓練と学生生活の二足草鞋を見事両立させていた

琴葉姉妹とは同じ孤児院の仲間で東北じゅん子とは高校で出会い、その後妹のきりたんと知り合う

弦巻マキとはV・S・に入隊後に出会って以来親友として絆を築いてきた

ELIDによって日本が崩壊する際に孤児院の仲間や友人を伴って脱出を志すもその道中で多くの仲間を失う

それでも諦めずに行動を続けた結果なんとか何人かを生き残らせることに成功し、スカーレットによって救助された

スカレットの基地で雇用されてからは普段はスカレットの秘書として雑務をこなし、裏では諜報員としての訓練を受けている

性格は基本的に穏やかで大人しく、それでいてちよつとした茶目っ気も持っている

話し方も敬語で年下や目下の者にも例外なく敬語を用いる

だがいざ戦闘となると容赦はしない

V・Sの矜持として人間を殺すことはしないが韋帯などの急所を躊躇なく撃ち抜く冷徹さを見せる

弦巻マキ

性別：女

年齢：22

武器：なし

黄色の長髪とグラマラスな身体が特徴的な女性

結月ゆかりの親友で東北姉妹や琴葉姉妹とも仲が良い

彼女もV・Sの隊員だがゆかりとは違って解析班の所属であり、精密機器の扱いを得意としている

FREEDOM壊滅作戦時には響敬一郎率いる特殊解析班として世界最高峰を優に

越えるセキュリティの解除の為に従事した

V・S・に入隊する経緯は両親がV・S・の解析班であった為に同じ道を志した結果である

ゆかり達と共に日本を脱出したものの途中で逸れ、その後人身売買組織に捕捉され、商品として売られる寸前であったがギリギリのところまでスカーレットによって救出される

救出後はゆかり達と同様基地にて雇用され、データルームにてクレアの元で働くこととなった

マキの精密機器の操作技術はクレアを越えるほどのものがあり、これにはスカーレットも目を丸くして驚いた

その為クレアはマキに仕事を次々覚えさせていずれば彼女を後方幕僚にするつもりである

性格は明るくて元気で誰とでもすぐに打ち解ける

恥ずかしがり屋な一面も持つており良くゆかりに揶揄われて赤面する姿が見受けられる

普段から良く笑顔を見せているがPCの前に座って仕事をすると一気に真剣な表情になって声質も変化する

その変わりように大抵の者は驚くであろう

琴葉茜

性別：女

年齢：19

武器：なし

琴葉葵の双子の姉で赤色の髪と目、それと大阪弁が特徴的な少女

容姿が幼めなので実年齢よりも若く見られがちだが特に気にしておらず、寧ろそれを喜んでいる節すらある

幼い頃に両親が交通事故で死亡したため孤児院に預けられることになり、そこでゆかりと出会ってからは彼女を仕舞い揃って姉のように慕っている

彼女達はゆかりやマキのようにV・S・に所属することはなく、その存在も知らなければ特別な能力もない

だが持ち前の気さくな性格で場を明るくするのは得意であり、ムードメーカー的存在
また彼女は大阪弁で話すがこれは小さい頃に観たアニメの影響である

スカーレットに救出された後はスプリングフィールドのカフェにて従業員として雇用され、主に接客を担当する

琴葉葵

性別：女

年齢：19

武器：なし

琴葉葵の双子の妹で青い髪と姉と同じ赤い目が特徴的な少女

姉と同じく幼く見られるが姉とは違いそれに対してあまり快く思っていない

孤児院に預けられた経緯等は姉と同様でゆかりとも仲が良い

姉と共に東北姉妹とも仲が良いが彼女達とはゆかりを通して知り合った

彼女もV・Sへの所属はしておらず特別な能力は持たない

暴走気味な姉のストッパーとして動くことが多く、苦労人

彼女も姉と同じくカフェの従業員として雇用され、接客をしている

東北じゅん子

性別：女

年齢：22

武器：強弓

東北三姉妹の次女

本名はじゅん子だがずんだが大好きすぎてずん子と呼ばれ、本人もそれを気に入っている

三食ずんだでも構わないほどにずんだのことが好きであり放っておくと無限にずんだを作り続けるため妹のきりたんによつて監視されていたりもする

マキと同じくグラマラスな体型をしているが太腿と二の腕が太めなことを気にしている（妹曰く「あのムッチリ感が堪らないのです、偉い人にはそれが分かりますよ」とのこと）

日本において名家として知られる東北家の人間として幼少時から様々な習い事をし
てきており、出来ることが多岐にわたる

その中でも茶道と弓術が得意であり、特に弓術に関しては現代において唯一強弓こわゆみを扱
うことの出来る逸材

彼女の扱う強弓は弓力200kgで最大で3町まで飛ばすことが可能である

ゆかりと高校で出会い、妹と共に交友を持つようになった数ヶ月後に身代金目的の誘
拐に遭つてしまう

その際救助に動いたのがゆかりであり、それを機にV・Sの存在とゆかりがそこに
属していることを知る

それからはV・Sへの情報提供者として協力し、ゆかりが動きやすいように個人的に根回しをするなど彼女にとつてなくてはならない協力者となった

日本脱出の際にはゆかりの補佐として動き、時にはその強弓を用いてELIDを撃ち抜いたりもした

ゆかりの持つサブコンパクトではELIDの外皮を貫くことは出来ないため彼女の存在はいざという場面で欠かすことの出来ない人物であった

彼女にはイタコという降霊術が使える姉がいたが日本脱出の際にピンチに陥り、自身を囷として動きゆかり達を逃がして以来消息は不明（恐らくは死亡したと思われる）

彼女より妹のきりたんのことを託されており、それが原因か少し妹に対して過保護になりがちである

スカーレットによって救出されてからはカフェにて主にキッチン担当として雇用されている

東北きりたん

性別：女

年齢：16

武器：なし

東北三姉妹の末っ子

程よい肉付きをしており一番年相応の外見をしているかもしれないがその頭には何故か包丁らしくものが装着されている

これがなんであるのか、何故付いているのかは一切不明

少々生意気で人を小馬鹿にしたような態度を取るがその実寂しがり屋で臆病であり、そんな自分を隠そうとしてそんな態度を取っているだけである

姉のことが大好きで彼女に対しては基本的に素直

スカーレットによって救出された後はG & a m p ; Kの規約上18歳未満の雇用は出来ない関係上雇用はされなかった

しかし彼女だけ基地から離すのは余りにも可哀想だということで特別に基地内にて居住する許可を取った

表には出さないものの彼女はそんなスカーレットの計らいに感謝しており、何か役に立てないかと考えて掃除など基地の雑務を手伝ったりして貢献しようとしている

『ラストバレット』より

恐らくハーメルンで知っているのは私だけなのではないかと言えるほどに知名度の

ないゲーム

普通に面白いのもっと流行れ(´ω´)

VOICEROID同様5年後としています

響花梨

性別：女

年齢：24

武器：SR

V・S・の数少ないスナイパーの1人でFREEDOM壊滅作戦の中心人物

元々普通の女子大生として青葉国際大学の国際文化学科に通っていた

V・S・隊員の敬一郎とFBI捜査官のマリアの間に産まれた子供

更には父方の祖父である栄吉もV・S・の隊員であったためにこの世に生を受けた瞬間からV・S・という国家組織の機密情報に囲まれる環境にいた

その為両親は早い段階から彼女をV・S・の隊員として登録しており、スナイパーとして所属させるよう動いていた

幼い頃より母から屋台の射的を通して射撃のイロハを教わっていたために本物のライフルにもすんなり慣れることが出来たらしい(割と意味不である)

V・S・としてゆかりの先輩であり、工員として潜入するゆかりを後方から狙撃で支援するというチームアップで動くことが多くあったために彼女とはかなり仲が良い。当然日本脱出の際には彼女も共に行動したが、マキと同様途中で逸れてしまい人身売買組織に捕らえられていた。

スカーレットによる救出後は彼女の基地に存在する警察系特殊部隊『The last shield of people』、通称LSPの隊員候補として訓練に励むことになった。

部隊&組織紹介

ミレニアム8

S地区総隊指令基地の中でも最高峰の戦力を持つ8人

指揮官のスカレット、後方幕僚兼ガンズミスのクレア、副官のWA2000、HK416、MK.23、トンブソン、MG5、KSGがそのメンバーである

彼女達は普段は後進の育成、つまりは戦術人形達への訓練を担当しているが一度戦場へ出れば比類なき力を見せつける

中でもスカレットとクレアはエーテルを自在に扱うことが可能でありその戦闘力は抜きん出ている

とは言え彼女達も余程のことがない限りはエーテルを戦闘で使うことはなく、最後の切り札となる『具現武装』は本当に追い詰められた時にしか使わないだろう

The^{人々} last^の of^最 people^{後の}

S地区総隊指令基地に存在する唯一の警察系特殊部隊

そもそも軍事基地に警察系の部隊が存在すること自体が可笑しくはあるが、G & a m p ; K は街の治安維持も仕事のためスカーレットによって用意された

メンバーは隊長のガリル、S A A、U S P コンパクト、M P 5、M P 7、7 9 式、M 8 7 0、P S G ー 1 の 8 人

彼女達もこの基地の試験を突破し、その上で各々の銃がカスタマイズされまくっている

特にガリルの銃に関しては最早 G a l i l A C E となっており、これは一種の A K の最終進化系と言っても過言ではない銃である

その上で使用弾薬も 6 . 8 m m S P C 弾に換装してあるためボディアーマーを着込んでいても無意味である

彼女達は普段は S 地区総隊指令基地が担当する街の警邏、自治体の戦術人形達への訓練、事件発生時の対応を行っており、特にテロ事件や立て籠もり事件等へは目を見張る程のスピード解決を行う

彼女達が守る街で事件を起こす輩の行く先は決まっている、その場で死体を晒すか基地に持ち帰られて尋問の末の死亡かのどちらかである

かつての日本に存在した超法規的國家組織でV・S・と呼称されることが多い

国際犯罪組織への対抗と情報収集を目的として結成され、結成以降様々な犯罪組織と潰してきた

特にかんりの規模と影響力を誇っていたFREEDOMを壊滅させた功績は大きく、世界中で評価された

しかし裏の組織であることに変わりはないため一般には一切知られていない

そして何よりの特徴はV・S・の隊員の大半が非武装であり、尚且つ殺害は絶対に行わないという点である

日本の特色が色濃く出ているがこれには一応理由があり、殺害を手段として用いると状況次第では戦争に発展しかねないというものだ

日本は建前上戦争を放棄した国であるため戦争に繋がりがかねない殺害を常套手段とすることは出来ず、それに伴って非武装が基本となる

その為格闘訓練に力を入れており、その性質上女性メンバーはとても少ない

しかしそれでは余りにも非力になってしまった一部のメンバーのみが銃器の装備を行っている

それを考えると花梨やゆかりはただでさえ少ない女性メンバーでありながら銃器の装備を行うという珍しい存在である

特に花梨はV・S・内でも数人しかいないスナイパーの1人でありその希少性はかなりのものだ

内部構成は大雑把に分けると実働部隊と解析部隊がある

実働部隊は犯罪組織の活動の阻止や組織に潜入して情報を入力するのが主な仕事、解析部隊は実働部隊が持ち帰った情報の解析及び実働部隊が潜入する組織の事前情報収集、作戦区域の住人にV・S・の存在が知られないようにする為の活動を行うのが仕事となる

ELIIDによって日本が崩壊する際には勿論抵抗しようとしたが装備の少なさや被害を行わないという信念が邪魔をして碌に抵抗出来ずに壊滅した

FREEDOM

かつて世界中で暗躍していた国際犯罪組織

表立って活動することは殆どないため一般には全く知られていなかった

銃の密売や情報の売買、政治家の買収といった様々な犯罪行為を繰り返していた

その構成メンバーは普段はカモフラージュの為に別の仕事をして社会に溶け込んでいたためにV・S・でもその内部構成は殆ど分かってはいなかった

FREEDOMのメンバーには世界的に活躍している企業の重役や政治家などもい

たため豊富な資金を持つており、その犯罪行為を止めることは非常に難しい

また任務に失敗した者は情報の秘匿の為に殺すという掟もあるため例え隊員を無力化しても無傷で捕らえて尋問をすることは困難を極める

V・S・がFREEDOMを壊滅出来たのは響花梨の父親である響敬一郎がFREEDOMの日本での活動拠点に潜入して重要な情報が入ったマイクロチップを入手したことに起因する

そのチップの中にはFREEDOMのメンバーやこれまでの活動記録といった犯罪行為の証拠が記録されており、それを公表すれば忽ち壊滅させられる情報であった

しかしそれには当時の世界最高峰を優に越えるレベルのプロテクトが掛けられていたために時間がかかったが、弦巻マキを始めとした解析部隊の中でも優秀なメンバーによつて解除されて情報がばら撒かれたことにより次々とメンバーが逮捕され、壊滅した

Valkyrie of Melody 旋律の戦乙女

S地区総隊指令基地に存在する音楽部隊

隊長は後方幕僚兼ガンズミススのクレア・ウイリアムズであり、彼女はメインボーカルと指揮を務めている

ここに所属する者は全員が複数の楽器を自在に操る技能を得ており、その演奏技術は凄まじいの一言

主な任務は過酷な任務へと向かう仲間達に向けて演奏を行い、鼓舞すること

しかしその本領は演奏を聴いた者の精神を操ることにある

部隊設立の切っ掛けとなったのはクレアが生まれつき持つf分の1揺らぎ成分というもの

これは一種のヒーリング効果を持つものであり、かのアドルフ・ヒトラーの声にも含まれていたらしい

クレアはこの成分を活かすため幼少期より声の技術を学んでおり、ただ声を発するだけでなくある程度聴いた者の感情を強制的に揺さぶることが出来る

更に彼女は歌や楽器も嗜み、それらを用いて落ち込んだ仲間を癒すのがアメリカに居た頃から好きであった

しかし彼女の場合はそれだけに留まらず、ある人物によってエーテルを扱う業を教えられてからはそれを利用して声だけで強靱な精神を持つ者ですら感情を強制的に揺さぶることが可能になった

それはスカーレットとて例外ではなく、クレアが本気を出せばスカーレットですら恐怖の感情を無理矢理増幅させられ戦闘不能に陥らせる程のもの

とは言えスカーレットもエーテルを扱えるため、実際にはエーテルによる相殺で防ぐのでちよつと怖いなあ程度にしかな効かない

そんなクレアはスカーレットと共にグリフィンに入社して以降もこの声や演奏を用いて仲間達を癒したり鼓舞したりしていた

それを見たスカーレットが「音楽専門の部隊でも作るか?」と言い、それにクレアが賛同したことによって設立された

現在この部隊には7名の人形と1名の人間(クレア)が存在しており、それぞれが己の得意とする楽器を極めていると言っても過言ではない

そしてクレアは基地に新しく所属することになった弦巻マキを当部隊へと配属しようとする目論みであり、部隊の人間が1人増える日も近いであろう

序章

始まりの日

荒れ果てた大地を1台のジープが走っている

座席には無骨な車には似つかわしくもない2人の少女の姿があった

「ほ、本当に大丈夫でしょうか……？」

「大丈夫、大丈夫。何も初めてってわけじゃないんでしょ？」

「それでも、急に最前線だなんて……不安です」

「そういう時はこれよ。これを飲めば不安なんて消し飛ばわ！」

そう言うって運転席に着いている少女……モシン・ナガンはウオツカの入った瓶を掲げ、飲もうとする

「ちよ、ちよつとそれお酒じゃないですか！ダメですよ運転中に飲むなんて！」

「ああやめて取らないでえ〜！」

助手席の少女、FN49がウオツカを取り上げ、それに悲鳴を上げるモシン・ナガン
運転中ということを除けば微笑ましいやり取りをしながらジープは彼女達の目的地
であるS09地区の基地へと向かっていく

彼女達が向かう基地はグリフィンが所有する基地の中でも鉄血との最前線となるS09地区にある

S09地区には幾つかの基地があり、今回彼女達はそのうちの1つへと着任することになったのだ

2人とも以前に別な基地への着任経験はあるが、そこはどちらかと言うと街に近い基地だった

その為仕事になるのは鉄血との戦闘よりも街の治安維持が主だった所に今回の異動だ、FN49が緊張するのも無理はない

寧ろモシン・ナガンのように余裕でいる方が可笑しいのだろう

そんなこんなで基地へと着いた2人は車を停めて降りると、別な戦術人形が話しかけてきた

「遠路遙々ご苦労さま、この基地の副官を勤めるWA2000よ」

「え、FN49です！よ、よよよよろしくお願ひします」

「オーチンプリヤートナ、モシン・ナガンよ。よろしくお願ひするわ」

「ええ、よろしくね。それと貴女、そんなに緊張しなくても良いわ。何もいきなり出撃しろとか無茶なことは言わないんだから。まずはこの基地に慣れてもらうわ」

「そ、そうですよね……ふう」

「ね？言ったでしょ、大丈夫だって」

「でもいつかは出撃するんですよね、あわわわどうしましょう!」

「…大丈夫よ、ちゃんと鍛えてあげるから。その時になったら自信を持って戦えるようになるから。とにかく、まずは指揮官へ挨拶に行くわよ、着いてきて」

このまま話し続ける訳にも行かないのでWA2000は2人を連れて指揮官のいる司令室へと連れていった

「指揮官、私よ。今日着任の2人を連れてきたわ」

「ん、思ってたよりも早かったな。まあいい、入ってくれ」

扉の前に立ってノックをすると返事が返って来たので遠慮なくノブを捻って中に入るWA2000

彼女に続いて入ってみると中には190cmに届くのではないかと思える程長身の女性と、それよりも低いが長身であることに変わりはない女性の2人組がいた

「ほ、本日着任のFN49ですよ、よよよよよよよよよよよろしくおねが…あいたっ!」

「私はモシン・ナガンよ。同志、よろしくね!」

緊張のあまり舌を噛んでしまうFN49と特に緊張することなく挨拶をするモシン・ナガン

その2人を見て指揮官はニカツと笑い

「私がこの指揮官のスカールレット・ミッチェルだ、よろしくな!あとそんなに緊張しなくてもいいぞ?私は堅苦しいのは好きじゃない、もつと気楽で良いんだ」

「あたしはトンプソンサブマシンガンだ、気軽にトンプソンと呼んでくれ」

スカールレット指揮官が握手を求めるとまずモシン・ナガンが流れるように握った

「私も背は低くないって思ってたけど、貴女を前にすると自分が低身長に感じるわ。頼りになりそうな指揮官ね」

「はは、よく言われるぜ。ともかくよろしくな!んで…」

モシン・ナガンとの握手を終えた指揮官が次にFN49と握手をしようとするが…

「あ、あわわわわ…」

緊張からか身体がガタガタと震え、手を上手く動かせてない様子だった

「そんなに緊張しなくてもいいって…まあこれから少しずつ慣れていきや良いさ」

「…緊張してるだけじゃなくて怖いんじゃないの?あんた人相悪いし」

「なっ…!?!」

WA2000の言葉に動揺した指揮官がトンプソンの方を向き

「私って…怖いのか？」

「…まああたしが言えたことじゃあないかもしれないが、少なくともあたしよりも余っ程怖いと思うぜ？」

「そうか、そうなのか…」

それを聞いた指揮官は項垂れた

この指揮官、顔立ち自体は整っているのだがまず目付きが鋭い

更に右目には縦に走る傷跡があり、かけているサングラスで隠しきれてない

トンプソンを見下す程の長身でその身からは歴戦の猛者のみが発する一種の「凄み」が感じられるのだ

明らかに堅気には見えない

子供が見たら泣き出しかねない外見をしている

そして本人にはその自覚が一切ないのだから質が悪い

「私は…フレンドリーさを心がけているのに……」

「まあなんだ、ボス…どんまい」

「ああ…ありがとう」

落ち込む指揮官とそれを慰めるトンプソン

両方どこかのマフィアに居ても可笑しくない2人のそんな光景にWA2000は呆れ、FN49はオロオロし、そしてモシン・ナガンは面白い人達ねとその状況を肴にウオツカを飲んでいた

これはグリフィン本社から優秀な問題児として扱われているスカーレット・ミツチエ
ル指揮官とその他大勢の戦術人形達による物語である

基地の案内

「まあなんだ…改めて、指揮官のスカレットだ。よろしくな！」

「ええ、よろしくお願ひするわ同志」

「よ、よろしくお願ひします…あの、さつきはすいませんでした」

FN49が幾分か落ち着いた頃、WA2000の必死な説明により指揮官は怖い人じゃないと一応は理解したFN49

その後WA2000にいい加減元気になりなさいと言って尻を蹴りあげられたスカレットは体裁を整えて仕切り直しと言わんばかりに改めて挨拶をした

「さて、取り敢えず最初はお前達にこの基地の案内をする…と言いたいところなんだが実はちよいと雑務が残っててな…悪いんだがワルサー、こいつらの案内を頼めないか？」

「そう言うと思ったわよ。それで、どんな雑務が残ってるの？」

「ん？まあ…各施設の支出や備品の過不足報告書のチェックとかそんなもんだな」

「それなら私が代わりにやっというてあげるわ。見やすいように纏めておくから後でアンタに見せれば良いでしょ？」

「…良いのか？なんか面倒なことを押し付けるみたいで申し訳ないんだが…」

「良いわよ、どうせアンタのことだから本当は自分でこの子達の案内したかったんでしょ？今後の事も考えればまずはアンタとの信頼関係を築くのが先決だし、そういうの抜きにしても仲良くしたいって思っただらいいよ」

「…よく分かったな」

「伊達にアンタの副官やってないわよ。さ、どうするの？」

「分かった、悪いけどこの書類を頼む。目を通したらこつちに纏めておいてくれ」

「了解よ。ほら、さっさと行ってきなさい」

「恩に着る。トンプソンはどうする？」

「あたしもボスに着いて行くさ。ここに残ってたらワルサーの気を散らしちまいそうだしな」

「そうね、私はこういう仕事は1人でしたいし…そうしてもらえるかしら？」

「おう、ボスに着いてった方が面白そうだしな」

「じゃ、行くか。待たせてすまないな、2人とも」

「いいえ、気にしてないわ。私としても貴女のことを知っておきたいからそっちの方が有難いしね」

「そう言っただけで貰えると助かる。さ、行くぞ！」

こうしてスカーレットはFN49、モシン・ナガン、そしてついだにトンプソンを連れて基地の案内へと向かった

「まったく、指揮官つてばガサツそうに見えて繊細なんだから……さて、さつさと書類を片付けちゃいましょうか」

スカーレットはまずデータルームへと2人を案内した

ここ自体はあまり足を運ぶ機会はないのだが、ここにいる人物には何かと世話になることも多いので、その人物を紹介するためだ

「ここはデータルームだ。正直ここは私と副官のワルサーくらいしか来る用事はないんだが……お、聞いた。おーい、クレア!」

「そんなに大声出さなくても聞こえてるよ。それで、一体何の用つて……あら」
呼ばれてこちらに近づいてきたのは一見大人しそうな女性だった

金色の長髪を結ぶことなく下ろしていて、目は綺麗な翠色

アンダーリムの黒縁メガネを掛けており耳にはシンプルなリング型のピアスとよく

見る普通のOLのようだ

物腰も柔らかく、ホンワカとした印象を受ける

気になるところと言えば女性物のスーツの下にタートルネックのインナーを着ていて首が完全に隠されていることくらいである

「こいつは20年以上共にいた仲間のクレアだ。今はここで後方幕僚件ガンスミスとして働いてくれている。んでクレア、こつちが今日この基地に来たFN49とモシン・ナガンだ。仲良くしてやってくれ」

「クレア・ウイリアムズよ。よろしくね、2人とも」

「FN49です、よろしくお願いします」

「モシン・ナガンよ。お近づきの印に一杯どうかしら、同志？」

「お、いいねえ。あたしにも一口くれるかい？」

「ついでに私にもくれ」

「こちら、ダメよ。そういうのは業務が終わってからになさいな」

「ちえっ…まあ良いか」

挨拶もそこそこにウオッカを取り出して酒を勧めるモシン・ナガンにそこへ便乗して飲もうとするトンプソンとスカーレット、そしてそれをやんわりと止めるクレア

これだけ見ると何とも平和な光景で、ここが鉄血との最前線の基地の一つであることを忘れそうになる

「ともかく、クレアは普段後方幕僚としてこのデータルームにいるがガンズミスとして私達の愛銃の整備もしてくれる。当然普段から自分達で基本的なことはしてもらうが、定期的に彼女に見てもらおうことになるから覚えておいてくれ」

「わ、分かりました！」

「うーん、何だかそういう油臭い仕事は似合わなさそうな人ね」

「モ、モシンさん！失礼ですよ！」

確かにクレアは穏やかでおっとりしたOLにしか見えない

しかしこれでもスカーレットと共に数多の戦場を駆け巡り、隠密特殊部隊「ゴースト」の一員として数々の功績を挙げてきたのだ

スカーレットは彼女を完全に信頼しきっており、自身のスポッターを任せていたほどである

「まあ言いたいことは分かる。だがクレアの腕は確かだ、それは私やこの基地にいる全員が保証する。なあ、トンプソン」

「おうよ、作戦から帰ってぼろぼろになった銃を彼女に見せたら30分で新品同然に綺麗になって返ってきた時は正直目を疑ったぜ」

「あら、それなら心配は無さそうね。疑ってごめんなさいね」

「ううん、気にしなくて良いよ。ただ、整備を適当にしたりしたらその時は容赦なく怒るからね？」

「おお、トラウマが…」

クレアの言葉にトンプソンが身を震わせる

過去のトンプソンは銃は弾が出りやそれで良いと言つて整備をあまりしていなかったのだが、それは銃を見たクレアに一発でバレてしまいしこたま叱られたのだ

戦術人形であるはずのトンプソンを容易く投げ飛ばして説教する彼女の姿に周りの人形達は怯え、その後全員の整備レベルが上がった程である

しかもその説教をする時ですら穏やかな笑顔を崩すことなくしてくるため恐怖は倍増する

流星にトンプソンもそれに懲りてかなり丁寧に整備をするようになった

「それでクレア、今日の仕事はあとどれ位だ？」

「そうね…あと3時間つてところかしら」

「したら今日の業務終了後、彼処に来てくれないか？」

「ん？…ああなるほどね、分かったわ。それじゃあ後でね」

「ああ、またな」

そう言つてスカーレットは3人を連れてデーターームを出ていった

彼女達が次にやつてきたのは食堂だ

ここはスカーレットの意向によりかなり大規模なものとなっている

基地の全職員が同時に食事をして大丈夫なほど広く、それにもない厨房には様々な調理器具が並んでいる

最早ここにはない調理器具は存在しないと云つても過言ではないほどだ

「あら、こんな規模の食堂は初めて見るわね。正直壯観だわ」

「本当ですね…料理をしているのは民間用の自立人形でしようか?」

「ああ、そうだ。基本的に私達人間もお前達人形も朝昼晩ここで食事を摂ることになる。無論緊急事態等で出来ないこともあるが…その時に備えて携帯食も常備してあるから腹を空かせることはまずないと思つてくれて良いぜ」

「あら、それはありがたいわね」

「全くだ。あたしなら人形を人間と同じように扱つてくれる指揮官は少ないから…あたしはボスと出会えた事が一番の幸せだと断言出来るぜ」

「照れること言ふんじゃねえよ、トンプソン!」

「いつてえー」

臆面もなく好意を伝えるトンプソンの背中をバシンと叩くスカレットだが、その顔は嬉しそうで満更でもない様子だ

その事からスカレットがどれだけ人形を大切に扱っているかが伝わって来て、FN 49も最初のような緊張や恐怖がかなり和らぐのを感じた

それだけにあのような態度を取ってしまったことを申し訳なく思うが、それは今後の作戦等で返していこうと気持ちを固める

「…つと大事なことを言い忘れてた。食堂は基本的に7時〜23時まで利用可能だ。それ以外の時間に来ては調理場に誰も居ないから何も食えないぜ。ただ解放はしてあるから食材を自分で持ち込んで料理する分には自由にしてくれていいし、水と珈琲はいつでも飲めるようにしてある。そこの所留意しといてくれ」

「あら、かなり自由なのね」

「規則で縛るのは好きじゃないからな。正直時間制限に関しちや調理担当の自立人形達に休みを与える為に設けてるみたいなものだ。当然、勤務中にも休憩時間はある。こうでもしないとあいつら延々と働こうとしやがるからな…当然お前達戦術人形の皆にも交代で休みを取らせるぞ」

「…本当に私達を気遣ってくれてるんですね」

「んなの仲間として当然のことだろうが」

FN49は感激を受けた

決して前の職場がブラックであった訳ではないが、あくまでも人形として扱われていた

基本的に休みなんてものはなく、街の警邏に行っていない時でも常に気を張って待機してはいけなかった

大抵の基地はそんなものであるし、それが当然だと思っていたがここでは違う

そしてそんなスカーレットに報いようと皆が訓練に励むことで各々の実力が他の個体を大きく上回るのが、この基地が最前線で戦えている理由の1つだ

その後、食事の受け取り方や飲み物の用意の仕方等を一通り説明してから食堂を後にした

それからも基地の案内は続き、救護室や銃器の本格的な整備等が可能な簡易工場を見て回った

モシン・ナガンとFN49がその中で驚いたのがどちらにも人間以外に戦術人形がおり、業務に就いていたことだ

なんでもスカーレット曰く、本人が望むのなら作戦行動や訓練以外にも仕事をすることが可能らしく医療部にはDP28が、簡易工場にはPPSH-41が居た

更にはそうやって他の業務にも就く人形達にはその分の給与も支払われているのだという

この基地には娯楽施設やちよつとしたお店もあり、そこで思い思いにお金を使うことが可能とのこと

そうして驚きながらもスカーレットの人となりを知りつつ必要なことを覚えていくモシン・ナガンとFN49だった

「と、まあ一先ずはこんな所だな。勿論他にもさつき言つた娯楽施設や射撃場、近接格闘訓練用の部屋なんかもあるが……それは追々だな。今日は次に行くところで最後になる」

「色々と驚きの連続だったわ……それで、次はどんな驚きをくれるのかしら？」

「いや、次は他の基地にも割とあるからそんなに驚きはしないんじゃないか？」

「おいおい、ネタばらしは感心しないぞトンプソン」

「おつと、すまねえボス」

「他の基地にも……？あ、もしかして『あれ』ですか？」

「そう、『あれ』だ。まあ、とにかく着いてきな」

他の基地にも割とある『あれ』……聡明な読者諸君にはもうお分かりであろう『あれ』である

スカーレットは3人を連れてどんどんと歩き、ある扉の前に立った

上には大きく『Springfield ☒ sCafe』と書かれている

「まあ見ての通りスプリングフィールドのカフェだ。多分お前たちも知ってるだろうからあんまり説明はいらないかもな」

「ええ、前にいた基地にもありました!」

「私もよ。お酒は飲めるのかしら?」

「18時以降限定だがあるな。ただ飲みすぎるなよ?」

「それは保証出来ないわね。大好きなもの」

「ならせめて他の奴に迷惑をかけないようにしないと。ま、これはあたしも気をつけなきゃいけないんだが…」

そんな会話をしながら一行はカフェへと入っていく

「いらつしやいませ。あら、指揮官でしたか。お待ちしておりますよ」

「おう、邪魔するぜ!…んで準備は整ってるか?」

「ええ、勿論です。抜かりはありませんよ」

皆を出迎えてくれたのは言わずと知れたスプリングフィールドだ

そんなスプリングフィールドにスカレットが近付き耳打ちすると、自信のある答えが返ってきた

その答えに満足気に頷くと、スカレットは6人がけのテーブルに着いて3人を呼ぶ

それに応えて3人が席に着いた所で新たな客が来た

「お邪魔するわね、スカーレットは来てるかしら？」

「クレアさん、いらつしやいませ。指揮官なら彼処にいますよ」

「おうクレア、こつちだ！」

「だからあんまり大きな声出さないの、スカーレット。ありがとね、スプリングフィールド」

「いえいえ、ごゆっくり」

スカーレットを窘めつつスプリングフィールドに礼を言い、席に着くクレア

そこにスプリングフィールドがカクテルと料理を運んできた

「あら？まだ頼んでないわよ。これはサーブスかしら？」

「いいえ、これは貴女達の着任祝いです。だから今日は代金も結構ですよ」

「え、そんな…ありがたいですけど申し訳ないですよ。せめて代金だけでも…」

「気にするな、FN49。金は既に私が払ってあるからな。これはお前達と出会えたことを祝うささやかな祝賀会みたいなもんだ、だから主役が遠慮なんてするな」

「そうそう、うちのボスがこういう奴だつてのはもう分かつてるだろ？遠慮するだけ無駄ってもんだ」

「…そのようね。ならありがたくご馳走になるわ。ほら、FN49も」

「は、はい…このようなことまでして頂いて、本当にありがとうございます！」

「おう、業務とか小難しいことは明日に回して今日は飲んで食いな！」

「勿論ほどほどに、ね？倒れちゃダメよ」

こうしてFN49とモシン・ナガンのささやかな着任祝いが始まった

最初こそ鉄血との最前線でやって行けるかどうか不安だったFN49もその不安は消え、寧ろここでやってやるといふやる気が漲っていた

そしてこの時はまだ知らなかった…それだけの決意がなければこれから始まる過酷な訓練に着いていけないからここそこまでのことをしているという面もあることを

…
…
…

地獄の特訓の始まり

ささやかな歓迎会のあつた翌日、FN49とモシン・ナガンはスカーレットに呼び出されていた

「何があるんでしょうか…」

「そんなに緊張してても仕方ないわよ、同志。多分私達の実力を見たいとかそんなのよ」「わ、私自信ないですよ…？前の基地では実戦なんてあまりありませんでしたし…」

FN49は不安になりながらもモシン・ナガンと共にスカーレットの執務室へと到着した

ノックをすると「入れ」と言われたのでモシン・ナガン、FN49の順番で入る

部屋の中にはスカーレットの他にWA2000がいた

「来たわよ、同志。何の用かしら？」

その言葉に書類から顔を上げるスカーレット

「用、という程の事でもない。それにどちらかと言うと用があるのはワルサーの方になるしな」

「…どういふことでしょうか？」

「お前達には今日からこの基地の訓練を受けてもらう。ここではその訓練で認められた者のみが出撃許可を得ることになるんだが、その訓練は戦術人形達の使う銃種毎に異なるものを行う。だが私1人で全員の訓練を見てやるのは物理的に不可能だ。そこでここでは私が直接鍛えた1部の戦術人形に各銃種の訓練を担当してもらっている。そしてお前達ライフル型戦術人形の訓練を担当するのが……」

「私ってことね。訓練だからって一切容赦しないから、そのつもりでいなさい」

WA2000の鋭い視線にFN49は少し身震いする

「ワルサーには私達が持つ技術の全てを伝授している。こいつの訓練に耐えることが出来れば間違いなくお前達はそんじよそこらの戦術人形とは一線を画すほどの実力者になれるだろう」

そこまで言うのとスカーレットは椅子から立ち上がり、2人に近づくと

「励めよ、応援してるぞ」

そう言つて笑顔で2人の肩を軽く叩いて激励した

「ええ、精一杯やらせてもらおうわ」

「は、はい……」

FN49は不安だらけに、そしてモシン・ナガンは不安がありながらも強気な言葉で返す

そうしていると今度はWA2000が近付いて来た

「ま、そういう訳で今日から暫くは私が付きつきりで2人を見てあげるわ。ここで色々言うのも時間が勿体ないし、早速訓練に行きましょう。付いて来なさい」

部屋を出て後ろを振り返ることなく歩いていくWA2000の後を着いて行くFN49とモシン・ナガン

その姿をスカーレットは見送りポツリと一言

「あいつら、死ななきやいいけどな…」

その言葉は誰の耳にも入ることは無かった

訓練所への道中WA2000は2人に今までの配属と戦闘経験等を聞くが、それ以外に会話はなくFN49は少し気まずさを感じていた

と言うよりも正直怖い

これから行うという訓練に耐えられるのか不安で仕方ないので

ひよつとしたらここに来たのは自分にとって不幸なことだったのかもしれない…そう思わずにはいられなかった

そしてそれはある意味で的中することとなる

「ここがライフル型戦術人形達の訓練所の1つよ。他の人形の出入りを防ぐ為に暗証コードがあるからきつちり覚えて。コードは9—1—1—6—6—6—9—9—9よ」

そう言いながらWA2000は扉の横にあるパネルを操作して扉を開ける

「あら、態々そんなの必要なのかしら?」

「必要、というよりあった方が色々と楽なのよ、管理とかそういう方面でね。この中には実弾や模擬弾といった多種多様な弾があるわ。だからここに入室出来る人形を制限することで余計なトラブルを未然に防いだり、万が一起こった時に対処しやすいようにしてるのよ」

「な、なるほど…でもそういう、その…悪いことをする方なんて居るのですか?」

「まあほぼ居ないわね。でも時々スパイとかが入り込んでくることもあるし、緊急時には一時的な避難場所にもなるわ。その事も見越してここには緊急用の医療物資なんかもあるの」

「な、なるほど…」

「もういいかしら?そろそろ訓練を始めるわよ」

「ええ、いいわ。それで、どんな訓練をするのかしら同志?こんなにも広いってことは狙撃訓練かしら」

一見するとこの訓練所は普通の屋内射撃場のように見えるが、すぐに普通ではないと

気付くだろう

まず明らかに広い

普通のシューティングレンジでは800mなんて距離はまずない

「というか、広すぎませんか？」

「確かに私も最初は驚いたわ。でもこれでも狭い方なのよ。対物ライフル達はもつと広い射撃場を利用してるし」

「これで狭いのね…」

WA2000の言葉に2人は引いた

だがライフルはほぼほぼ皆長射程を持っているし、対物ライフルは1.5kmを越えるのが当たり前だ

確かに30mや50mのレンジでは練習にならないだろう

「まず貴女達にやって貰う前に、1つ証明しておくわ」

「証明って、何を？」

「私が貴女達の腕にケチを付けられるほどの実力があるってことをよ」

そう言うとWA2000はレンジの1つに入り、横のパネルを操作する

すると700m先に鉄血の人形を模したダミーがターゲットとして現れる

それを見たWA2000は自身のライフルを構えると

「まずは軽く行くわよ。頭部、右肩、左肩、右脚、左脚」

「ハラショー！」

「す、すごい……！」

そう言いながら次々と銃を撃ち、宣言した場所へ正確に銃弾を当てていくWA2000にモシン・ナガンは賞賛の言葉と口笛を送りFN49はある種の感動すら覚えていた。それ程にWA2000のやつてみせた狙撃は凄まじいものだったのだ。

じっくりと狙いをつければそこそこは出来るかもしれないが、WA2000は速射と言えるレベルの速度で軽々とやつてみせた。

「まだまだこんなものじゃないわよ。右目、左目、眉間、気道、心臓、肝臓、股間、右膝、左膝」

「……………っ」

その正確無比過ぎる速射に今度は言葉が出なくなる2人

それもそうだろう、どう考えてもこんなの普通は出来るわけがない

そもそもリロードはどうしたんだと思ってWA2000の手を見るといつの間にか真新しいマガジンが左手の親指と人差し指の間に挟まれていた

WA2000はリロード用のマガジンを予め用意しており、薬室に1発弾を残した状態で素早くリロードを済ませていたのだ

そして何より恐ろしいのは…このWA2000の実力は「人間であるスカーレット」
によって鍛えられたものだと言うこと

もしやスカーレットにもこの芸当が出来るのか…そう思い聞いてみると

「出来るには出来るみたいだけど、流石にここまで早くは無理だそうよ。この速度はあくまでも私が戦術人形だからこそ可能らしいわ。そうね…大体私の90%くらいかしら」

「大して変わらないじゃないのよ…」

「ほら、何を惚けてるの。貴女達もやるのよ」

「…え？」

その言葉に2人は固まった

今のをやれと？

言葉にこそ出さないが2人の表情がそう言っている

「言っただでしょ？容赦なんてしないって。さ、お昼の時間までぶっ続けでやるわよ。そしてお昼を食べたら晩御飯までまたずっとやるわ」

2人の顔が死んだ瞬間である

その後訓練室からは2人の呪詛のようなうめき声が聞こえてきたという…

時は変わって18時頃

食堂のテーブルに突っ伏してピクリとも動かない茶髪と金髪があった

言わずもがなFN49とモシン・ナガンである

先程まで行われていたWA2000の訓練によって心身共に疲れ果てた2人には最早顔を上げる気力すら残ってはいなかった

そこに比較的小柄な少女が近付いて来る

「…大丈夫？ って聞くまでもないよね」

「ううん…」

「ああ、いいよそのまま。疲れ切ってるだろうしね」

「そう言ってもらえると助かるわ…」

顔を伏せたまま話をするなど失礼にも程があるが、そうも言っていられないほど疲れしているFN49とモシン・ナガン

そしてそれは話しかけてきた少女も分かっている。特に気にする事はなかった

「貴女は、誰です…か？」

「ボクの名前はM200、君達と同じライフル型の戦術人形だよ」

「M200…確かシャイタク社の大口径ボルトアクションライフルね」

「よく知ってるね。ボクは使う弾の都合で長距離射撃場を使うからあんまり一緒にはな

らないかもだけど、よろしく」

「よろしく、お願いします…あの、なにか?」

ちよつとした言葉でさえ詰まってしまうFN49の頭をM200が撫でている

抵抗する元気もないのでそのままだし、なんだつたら少し気持ちが良いのだが急なことに変わりはないので疑問を呈すと

「新しいライフルの子が来ると皆こうなるからね。ボクもそのしんどさは知ってるから、少しでも労わってあげたくて」

「ああ…ありがとう、ございませす……」

少し低く、ゆっくり目に話すM200の言葉が今のこの状態には非常にありがたい

その気遣いも相まって疲れが癒されていくのを感じるFN49

「…私にも、お願いできるかしら、同志」

「ん、いいよ」

その光景を見てはいないが想像したモシン・ナガンは羨ましく思い、自分の頭も撫でてくれとお願いすれば快諾してくれるM200

そしていぎ撫でられてみるとこれがまた気持ちが良い

小さな手が優しく、包み込むように撫でてくれるのだ

疲れ切った今のモシン・ナガンはまるで子供になったかのように撫でられていた

そうして暫く頭などでを享受していると、ふと美味しそうな匂いが漂って来て2人のお腹が盛大に鳴る

思わず赤面するFN49だが、顔を伏せているお蔭で見られることはなかった

「ほら、料理が来たよ。2人とも顔上げて」

「うう…顔を上げるのがこんなにも億劫なのは生まれて初めてよ」

「そう、ですね…」

深く深呼吸をしてから頑張つて頭を上げると目の前には色とりどりの美味しそうな料理の数々

「我慢しなくて良いよ、沢山お食べ」

思わず生唾を飲み込むFN49とモシン・ナガンにM200がそう言えば、2人は目の前に並んだ料理を猛スピードで食べ始めた

かなりがつついており、年頃の少女としてははしたないかもしれないがそんなことを言っている余裕はない

数十分後、大量にあつたはずの料理は殆ど2人の胃に消えた

「ハラショー！こんなにも料理が美味しいと感じたのも生まれて初めてだわ」

「本当ですねえ…ご馳走様でした」

「いい食べっぷりだったよ、2人とも。どう、少しは元気出た？」

「ええ、御蔭様ですね。貴女もありがとうございます」

「どういたしまして、じゃあボクは行くね。2人は少し休憩したらお風呂に行つて、今日
はもう寝た方が良いでしょう」

「そうですね、そうします。色々ありがとうございますね」

「ううん、それじゃあね」

M200が去つて行き、暫し休憩を挟んだ2人は彼女の言う通り早速お風呂に行くこ
とにした

この基地では男風呂と女風呂が時間制とかではなく、場所がしっかりと別れている
戦術人形も使う都合上女風呂の方がかなり広く設備が充実しておりサウナや水風呂、
ジャグジー等色々ある

まるで高級なホテルの大浴場かと言わんばかりの風呂場に2人も初日に紹介され
た時は驚いたし、利用してみてその快適さに思わず頬が緩むほどだった

それを知っているため心做しかうきうきしながら脱衣所で服を脱ぎ、浴場に入つてみ
ると

「おう、お前らも来たのか」

「え、し、指揮官!?!」

「わお、奇遇ね」

そこにはスカーレットがいて、先に湯船に浸かっていた

指揮官が入っているのに自分たちも入るのは失礼になるんじゃないかと思いついていこうとするFN49だが、スカーレットはそれは止める

「別に気にすることたねえよ。ワルサーの訓練で疲れてんだろ？」

「そうよ、気を遣いすぎよFN49」

「で、ですが…」

「良いから良いから。なんだったら後でマッサージもしてやるぜ」

「あら、良いわね」

「さ、流石にそこまでして頂くのは…」

「私が良いって言うてんだ、遠慮するな。ほれ来な！」

あくまでも遠慮しようとするFN49だがスカーレットがそれを許さなかった

マッサージに関しては明日からの訓練の為にやっておいた方が絶対にいいからだ

こうして多少強引だが一緒にお風呂に入ることになったFN49とモシン・ナガンとスカーレット

「んで、どうだ？訓練にはついていけそうか？」

「正直きつついわね、あれは…」

「幾ら何でもあんなの酷いですよ…無理に決まっていますのに」

「…大体予想は付くが何をやらされたんだ？」

「最初にワルサーが物凄く正確な速射を披露してくれてね、それに感心してたら貴女達もやりなさいって。それからもうひたすらに撃って撃って撃ちまくりよ」

「お蔭でクタクタですよ…あんなに撃ち続けても上達しないと思うんですが…」
「…なるほどな」

2人の言葉にWA2000の狙いを理解したスカーレットは衝撃の言葉を放つ

「ま、ぶっちゃけ今日やらされた事はお前らの上達には全くもって繋がらねえな」

「えええ!!」

「…やっぱりそうなのね」

「なにそんなに驚いてんだ。お前も薄々こんな意味がないって分かってたんだろ？」

「だとしても…こんなハッキリ言われたら！」

FN49の言うことも尤もだろう

あれだけ何時間もひたすらに撃たされ続け、心身共にボロボロになろうともそれでも撃たされて…それに意味がないと指揮官にはつきり言われたのでは溜まったものではない
無い

しかし

「まあ落ち着け。確かに訓練としては意味はなかったさ、けどワルサーは完全に無意味

なことをやらせた訳じゃねえぞ」

「…どういう、ことですか？」

「私も聞きたいわね」

「今日の所はお前達の技術の上達を目的にしてた訳じゃないってことだ。多分ワルサーの奴は疲弊し切ったお前達に尚撃たせることで本当の実力や癖、何よりも集中力と精神力の把握がしたかったんだろ。その上で明日から各々にあつた訓練を課して上達させる腹積もりだ」

「なるほどね。つまり明日はあんな無闇に撃ちまくるような事はしないってことではないのかしら？」

「まあな。結構な数を撃つことに変わりはねえが、今日よりは断然少ないだろ」

「よ、よかつたあ〜……」

その言葉にFN49は心から安堵してため息をついた

明日以降も毎日あんなものでは身が持たない、そうならなくて良かったと

しかしその安堵は次のスカーレットの言葉で砕かれた

「…ま、だからと言って明日からの方が楽なわけじゃないけどな。寧ろ今日よりもきつついと思うぞ」

「…マジッ？」

「…う、嘘ですよね？嘘だと言ってください！」

「まあなんだ…身体的には楽だからそこだけは安心しとけ。明日からは頭と目が痛くなるけどな」

「…そんなあ〜」

FN49はがつくしと項垂れ、モシン・ナガンも静かに頭へと手をやって「マジか…」といった表情になる

そんな様子を見ながらスカレットは

（やりすぎて潰すことだけはしてくるなよ、ワルサー…まあアイツのことだから大丈夫か。生かさず殺さず上手くやってくれるだろ）

そう思い、明日に備える為だと2人をマッサージスペースへと連れて行って入念に身体を解してやるのであった

夜間警備の人形以外殆どがもう寝ている時間

そんな時間だと言うのに明かりの付いている部屋がある

中では1人の人形がモニターを眺めながら珈琲を飲んでいた

そこに映っているのはFN49とモシン・ナガンがひたすらに撃ちまくっている映像だ

(あの2人の癖は大体分かったわ…モシン・ナガンは精度が良いけどあの様子じゃ距離離へ即座に撃つような即応性に難があるわね。取り敢えずは遠距離狙撃に集中させるとしても場合によってはマークスマンとして動いてもらわなきゃいけない時もある…まあほぼないでしょうけど、この短所は追々消していきましょう)

そこまで考えたWA2000は一旦思考をリセットしてからもう1人の方へと…FN49の方をじっと見つめる

(この娘…オドオドしていたし、実戦経験もないって言うから正直不安だった。実際撃つてる所を見ても光るものが見えてこないわ。正しく素人に毛が生えたようなもの、人形としての最低限しか出来ない…のだけれど)

新たに思考しながらWA2000は目を細めて映像を観る

FN49の射撃は平々凡々としたもので、可もなく不可もなく…いや、少し不可の方に偏っているだろうか

殆どの者が才能なしとして切り捨てるであろう

しかし…

（逆に言うところの娘、癖らしい癖が一切ないのよね。今は全然駄目だけど上手く鍛えられれば…もしかすると私をも超えてくるかもしれないわ。2人を同時に見るつもりだったけどFN49を集中して鍛えなくなった、予定変更ね）

不敵な笑みを浮かべたWA2000はモニターの電源を切り、椅子から立ち上がるとグツと伸びをして固まった背中を解す

それから机の上に置いてあった書類…明日からの訓練計画の書かれた紙を持ってドアへと向かう

（さてと、取り敢えずこれを指揮官に渡さなきゃね。新人が2人も来たんだからアイツも仕事が増えてまだ寝てないだろうし…今までのパターンから考えて多分今は屋上ね）

部屋から出たWA2000は階段を登って屋上へと向かった

やがて屋上へ続くドアへと着いたWA2000はノブを捻り、ゆっくりと開けた

「…ん？おお、ワルサーか。どうしたこんな夜更けにこんな所まで」

「あんたにこれを渡そうと思ってるね。はい、明日からの訓練計画書よ」

予想通りそこに居たスカーレットにファイルに綴じた計画書をファイル毎渡す

「おお、悪いな態々。つーか私はお前を信頼してるし、こういうそこまで重要じゃない奴は省いても良いんだぞ？」

「あんたがそう言うのは何となく分かってたわ。でもまあ、この基地の上に立つ者とし

て示しつかないことしてると下にいる娘達が着いてきてくれなくなるかもしれないしね。念の為よ」

「それもそうだな。じゃあこいつは後でチェックしておく」

「そうして頂戴。にしても…」

「んあ、どした？」

「それ好きね、あんた…」

WA2000が何処か呆れたような、それでも柔らかい笑顔でそう言うときスカーレットもなんの事かすぐに分かり

「まあ、こいつはな…思い出の味ってやつだ」

口に啜えていた煙草を手に持ち、煙を吐き出す

スカーレットは時折こうして煙草を吸うことがある

吸う場所は様々で、基地内に設けられた喫煙室で吸うことも多いのだが夜の場合は決まって屋上で吸っている

曰く、夜風が気持ち良くて煙草の風味がより旨く感じられるのだそうだ

「思い出の…って何かあったの？」

「まあ私も30年以上生きてきたからな…それなりにあるさ」

「…聞いても？」

「構わねえよ。こいつはまだ私がアメリカにいた頃、軍で流行ってたな。良く皆でこいつを吹かしてたのさ…軍は私にとって家であり、そこに居た奴らは家族も同然だった。つまりこいつは私にとって、家族の記憶なんだよ」

「軍が家族？産みの親は…」

「…殺されちまったよ。地元のギャング共の抗争に巻き込まれてな。その時は殺されるか商品として売り飛ばされるか…生かされた所を見るに売るつもりだったんだろうな。だがそんな時にデルタフォースつう特殊部隊がギャング共に強襲を掛けてな、私はそんな時に保護された」

「…なんて言うか、結構壮絶な人生歩んで来たのね」

「確かにこう振り返って見ると普通じゃねえよな。でもまあ、そのお蔭でこうして私は今ここにいます。核攻撃から生き延びることが出来た、だから悪いことばかりでもなかったなって思うぜ」

「そう…それなら良いんだけど」

「…おい」

「…なによ」

「まだなんか聞きたいことあんだろ？顔に書いてあんど」

「…全く、ほんとガサツなのか繊細なのか分かんないわねアンタは」

「それは褒めてるのか？」

「呆れてるのよ」

「てめえな…」

顔を顰めるスカレットを見てクスクスと笑うWA2000

それに釣られてかスカレットも笑みを見せる

「それで、何を聞きたいんだ？」

「そうね…軍に保護されたからってそのまま軍に居着くなんて普通はしないわよね？ア
ンタはどうしてその道を選んだの？」

「…その事か」

「聞いちゃいけないことだったかしら」

「いや、構わねえよ。そうだな…私は親がギャング共に殺されるのをこの目で見た、いや
見せられたんだよ。クズ共によつてな」

「…っ。それはまた随分と趣味が悪いわね」

「ああ…その後もまあ酷い目に会つてな。保護された時の私は復讐心しかなかった。だ
から私は施設へ預けるつつう説明をしに来た奴に頼み込んだんだよ。奴らが憎い、奴ら
を殺せるだけの力をくれってな…復讐の相手はもうこの世にいねえってのに」

「…え、軍はそれを了承したわけ？」

「ああ、そうだ。とは言っても復讐させる為じゃあねえぞ。寧ろ逆だ、私からそんな考えを取っ払うために軍は私を引き取ってくれたんだ」

「あ、そういうことね…びっくりしたわ」

「その後ガキだった私は軍で厳しい訓練を受けて、勉強も仕込まれて強くなった。だが一番丁寧に教えられたのはそれらじゃない」

「じゃあなによ」

「…愛だよ」

「は？…ああ、なるほど。それで復讐をやめさせたってことか」

「ま、そういうことだ。んで20歳になる頃には復讐心は完全に消えてたってわけだ」

そう言っつてスカーレットは手に持った煙草を啜えて深く吸って…ゆっくりと吐く

「そしてこいつは私に大切なことを教えてくれた皆を思い出させてくれる…大切な味だ。今のご時世、こいつが買えるのは私にとって幸福なことだな…つとついつい話し込んでしまったな。私はもう寝る、お前も早く寝ろよワルサー。肌が荒れちまうぜ？」

「…そうね、そうするわ。お休み…えっと、その…スカーレット」

「……つ。ああ、お休み、ワルサー」

去って行くWA2000の背中を見つめていたスカーレットだったが、静かに就寝の挨拶をした後に自身も自室へと向けて歩いていく

だがその途中、一度だけ振り返り

(その名前で私のことを呼んでくれる奴がもう殆ど居ないってこと、気付きやがったな
…ありがとな、ワルサー)

心の中で感謝を告げたスカーレットはそれから振り返ることなく、歩いていった

訓練の様子：格闘訓練編

S O 9 地区に存在するとある1つの基地

その指揮官を務めるのはグリフィンの中でも筋金入りの問題児、スカールレット・ミツチエル

本社へ赴く時ですら制服を着用しないと聞けば如何程のものか分かるであろう

それが一応罷り通っているのは優秀が過ぎるからである

そもそもこの基地は元々鉄血に滅ぼされ、鉄血領となっていた場所なのだ

そこをスカールレットと後方幕僚のクレアを含め、たった8人で奪い返した実績を持つだからこそ問題行為も黙認されている、他にもヘリアントスやクルーガーと個人的な繋がりをもち認められているというのもあるが

だがここで疑問が生まれる

なぜグリフィンはスカールレットとクレアにたったの8人で鉄血に占領された基地の奪還を命じたのか

それは偏にスカールレットとクレアがアメリカ人であることに起因する

自分達が滅ぼした国の生き残り、しかも表に出てこない特殊部隊の中でも優秀な者…

そう、報復を恐れたのだ

そんな得体の知れない者を雇っていつか反旗でも翻されたら：そう考えると早い内に始末しておきたい

その結果として無謀過ぎる命令を出し、作戦行動中の死亡という扱いにしようとしたのだ

その為無理難題を押し付けてそれを達成したら指揮官として認めてやる、と言いつつ

勿論クルーガーとヘリアントスは反対したが他の上層部の者は意見を変えようとはしなかったし、何よりもスカレット本人がそれを了承した為作戦は決行された

ヘリアントスがスカレットを止めようとしたがスカレットは「まあ任せとけつて！」と一言、その言葉の通りに周囲の鉄血を一掃してきたのである

達成すれば認めると言った手前どうすることも出来ず、スカレットは無事に指揮官としてこの基地に務めることになった

しかし大変だったのはそこから、なにせ鉄血との戦闘があつた為に何もかもがぼろぼろ：それらの復旧の方が大変だったと後にスカレットとクレアは語る

途中何度も鉄血の襲撃のある中何とか基地としての体裁を整える必要があつたが為に中々進まなかつたのだ

その後基地が完成し、鉄血の襲撃が落ち着いた頃からスカーレットとクレアは戦術人形達に戦闘訓練を施していく

いつしかこの基地の訓練に関する施設は最も面積を使い、お金がかかるものとなった。そして現在、他の人形とは一線を画す存在となった人形達はスカーレットとクレアを含め「ミレニアム8」と呼ばれるようになっていく

因みにメンバーはMK、23、トンプソン、HK416、WA2000、MG5、AKSGである

そして今はこの6人が主に他の人形達の訓練を担当しているのは前にも言った通りである

しかしだからといって他の者が訓練の指導をしない訳では無い

特にHGとSMG達に関しては近接格闘にもかなり力を入れているからか

「どおりやあああああ!!」

「チイツー!いい拳だ、トンプソン!」

「今のを避けるのか…やっぱすげえよ、ボスは」

スカーレット自らが訓練場にて人形達を相手に模擬試合を行っている

今はトンプソンが相手だ

かれこれ10分はこうして殴りあっている

「まだまだ行くぞ、ボス！」

「ああ来い、トンプソン！」

その言葉と共に一瞬で間合いを詰めたトンプソンが至近距離からのアッパーを放つ
スカーレットはそれをバク転をするように避けながら

「はっ！」

「がはっ……！あ、ぐ……！」

変則的な蹴りを顎に喰らいたたらを踏むトンプソン

スカーレットがその隙を見逃すはずもなく

「うぐ……！！！」

「もう終わりだ、トンプソン。詰めが甘かったな」

接近したスカーレットに背後へと回り込まれ、そのまま首を極められてしまい動けなくなつた

トンプソンが負けを認め、スカーレットの腕をタップした所で試合は終了となる

直後、訓練場にはがやがやとしたざわめきが起こる

「あく今日も指揮官の勝ちか……また負けちゃったよ」

「じゃ、私の勝ちってことで」

「うん、悔しいけど仕方ないよね。はい、これ」

「悪いわね〜♪」

スコープオンがM.K. 23に少量のお金を渡している

そう、スカーレットと人形の試合は賭けが行われることもあるのだ

とは言え今のところスカーレットに勝ったことがあるのはトンプソンとM.K. 23だけであり、その2人も勝率はかなり低い

その為スカーレットに賭ける者が多いのだが、スコープオンはトンプソンに賭けていたらしい

因みに賭け金はスカーレットの命令によつてかなり少ない額でしか行えないようになってい

なっている
こうすることで余計なトラブルを防いでいるのだ

「ああ、くっそ…なんで人間なのにそんな強いんだよ、ボスは」

「何十年と戦い続けて来てんだ、幾ら戦術人形とは言つても数年しか生きてない奴にそうほいほいと負けてらんねえよ。それに鬼みたいに強い師匠がいたからな…ほれ、立てるか?」

「ああ…すまないな、ボス」

「気にすんなって」

座り込んでいたトンプソンにスカーレットが手を貸し、立ち上がらせる

そして

「さあ、他に揉んでほしい奴はいるか？この際だ、とことん相手になってやるぜ！」

スカーレットがそう叫ぶが

「え、遠慮しておこうかな…」

「指揮官に勝てると思うほど自惚れてません…」

殆どの者が尻込みしている

そんな中1人の人形が手を上げた

「はいはーい、じゃあ私いいかしら？」

「ん、おおソーコムか。良いぜ、来な！」

ミレニアム8が1人、MK・23である

トンプソンが力で相手と殴り合い相手を圧倒するのを得意とするのに対し、MK・2

3は極め技や投げを得意としスピードで相手を圧倒する戦法を用いる

HGとSMGの戦術人形達からは「力のトンプソン、技のソーコム」と言われたりしている

因みにだがトンプソンも相手を殴り倒すためにかなり繊細な技術を用いるのでトンプソンも割と技寄りである

「じゃ、行かせてもらおうわね」

「おう、いつでも良いぜ。あんまモタモタしてると私から行くがな！」

「そんなにかからないわ…よつと！」

「つ!?ほう…」

次の瞬間、スカーレットの視界からM.K. 23が消えた

辺りを見回してみても姿が映らない

そして時折当身をして来る

「常に相手の死角を取り続けることで姿を消したか…更にヒットアンドアウェイでこつちの集中力を削ぐ気だな？」

スカーレットがそう言っている間にもM.K. 23は死角から攻撃を続ける

蹴りが、拳が襲いかかってくるがスカーレットはそれを難なく捌いていく

「いい戦法だ。1対1の状況ならかなり有効だろう…だがな」

そう言いながらスカーレットは目を閉じた

しかしM.K. 23はスカーレットの死角にいる為それに気付かない

「やりようによつちやあそんなの何の意味も無くなるんだよなあ！」

M.K. 23が貫手を突き出し、スカーレットに当たる瞬間…スカーレットが振り向き様に貫手を避けながら拳をM.K. 23の顔に向かって放った

その時になって初めて目を閉じているのに気付き驚愕するも、M.K. 23は素早く対

応ずる

スカールレットの突き出してくる拳を推手で逸らすと、その場で軽く跳躍して右脚を振り上げる

「なっ!?それは…!」

スカールレットが何かに気付くがもう遅い

M K・23は右脚でスカールレットの腕を捉えた

そのまま自重によって2人の身体が床に向かって倒れて行く

そして…

「ぐはあっ!!ぐ、くそ……!」

M K・23は倒れ込む瞬間に左膝を立て、そこにスカールレットの顎がぶつかると

恐ろしく強烈な一撃を受けたスカールレットは流石に怯み、視界に火花が散っている

「よし、このまま……!」

「ぐう……!やる、な……あ……!」

スカールレットの怯んでいる隙にM K・23が背中側からマウントを取り、首を締め上げる

完璧な形で入った上に戦術人形の力で締められている…誰もがM K・23の勝ちを確信していた

だが…

「な、めるなあ…!!」

「う、嘘でしょ!?!…くそっ!」

スカレットが両手を使って立ち上がったのだ

それに驚愕したM.K.、23は一瞬怯むがすぐに事態を把握して離れようとする

しかし立ち上がったスカレットの右手がM.K.、23の右腕を掴んだことで離れられなくなってしまった

普通ならその程度で動けなくなるなど有り得ないのだが、スカレットは特殊な掴み方で筋肉の筋を抑えて人間工学的に動けないようにすることが可能だ

完全に勝てると思っていた状況を少しとは言え覆されたことで焦るM.K.、23

何とかして逃れようとするが出来ない、ならばこのまま攻撃を加えようとしてもこの状態から強力な打撃を加える技をM.K.、23は知らない

どうすれば良いのか…思考するもどうすることも出来ないのですこのまま絞め落とすことにした

だがそれを許すほどスカレットは甘くなく、動けなくなつたM.K.、23を下にして床に倒れ込む

「ぐわっ…くわっ…くわっ…くわっ…くわっ…くわっ…」

「これで終わりだ!!」

「か…はっ…!!!」

スカーレットの身体に押し潰され、首を絞める腕の力が緩んだことでスカーレットに逃げられた

その事に気付くも最早どうにもならず、上からスカーレットの拳が鳩尾に落とされるあまりの衝撃に呼吸もままなくなつたMK・23は己の負けを悟つた

その後スカーレットの適切な処置によつてMK・23は回復した

「あくあ、あれでもダメなんて…ほんつと強いわね」

「まあな!…と言いたいところだが、今のは結構やばかつたな。と言うか…」

「何かしら?」

「お前さっきの技とか動きとか…クレアに教えてもらったな?」

「あら、分かるの?」

「たりめえだ、何年一緒にいると思つていやがる。20年だぞ?それくらい分かるつての」

「それもそうよね。しつかしこれじゃあくクレアさんに申し訳が立たないわね…教えてもらったのにこうして負けちやつたんだもの」

「んな事ねえだろうよ。さつきも言ったが私を追い詰めたんだ、誇つていいんだぜ?」

「そうね…そう思うことにするわ。さて、と」

M K. 23は勢いよく立ち上がり、その場にいる皆に大声で指示を出す

「皆、格闘訓練はここまですべてにして次は射撃訓練に行くよ！各々銃を用意してから射撃場に行つてね！」

その言葉を皮切りにH GとS M G達が移動していく

M K. 23とトンプソンは訓練場の様子を見て破損した物などがないかを見ていきながらスカーレットに話しかけた

「それで、この後はどうするんだボス。良ければこの後も見ていくか？」

「あら、それは良いわね。どうするの指揮官？」

「いや、私は新人2人の様子を見に行こうと思う。ワルサーを信用してない訳じゃねえが、私自身もちゃんと見てやるべきだろうしな」

「そうか、なら仕方ないな。じゃ、また後でなボス」

「まったね〜♪」

「おう、じゃあな！」

格闘訓練場を後にしたスカーレットはそのままR Fが使う訓練場へと向かっていく

一方その頃A Rの訓練場では…

「これから寝るなG R！…ってR F B！こんな所でゲームするな！！」

HK416の音が響き渡っていた

ライフル型No. 2の登場!

スカーレットが訓練所で人形達と殴りあっている頃

FN49はWA2000の指導の下、必死に訓練に励んでいた

「まだまだだね。これじゃ及第点も出せやしないわ」

「はあ、はあ……し、しんどい……」

かれこれ数時間の間FN49はライフルを撃ち続けていた

それは先日のようにただひたすらに1日中撃ちまくるものではなく、しっかりと目標を指定されてそれに沿った狙撃を時間をかけて行うもの

なので撃つ回数は激減し、身体への負担は少なくなっている

しかし狙撃というものはかなり精神力を使うのだ

それを数時間も続けたとなれば疲労は凄まじいものとなる

眼精疲労もまた辛いだろう

そんな疲弊しきっているFN49にWA2000は厳しい言葉をかける

「こんな程度でバテてるようじゃ戦場では役に立たないわ。足を引っ張って終わりよ」

「ううう…」

「特にうちの基地では出撃資格を取るのが異様に厳しいからね。指揮官に認めてもらいたければもつと頑張りなさい、貴女筋は良いんだから」

「…本当に、私には才能があるんでしようか」

FN49は自身のライフルを胸に抱き寄せ、不安そうに呟く

WA2000は既にFN49へ「貴女には才能があるわ。細かく鍛えていけばどんな場所でも活躍出来るようになるはずよ。だからこれから私が付きつきりで見守る」と言っているのだが、実際に訓練してみると褒められることが一切ないので自信を無くしてしまっているのだ

そんなFN49にWA2000が近づき、両肩に両手を乗せた

少し驚いたFN49が顔を上げるとそこには真剣ながらも何処か優しさを感じる顔をしたWA2000がしっかりと目を見ていた

「大丈夫よ。指揮官から最も認められている私が貴女を見込んだのよ、安心なさい。これからも訓練は厳しくしていくけどそれは貴女を信じているからなの。だから私を信じなさい、信じて着いて来なさい。そうしたら必ず指揮官に認められるくらいに強くしてあげる」

「ワルサーさん…」

WA2000のその言葉にFN49はその顔にうつすらと涙を浮かべる
それから暫くWA2000の顔を見つめていた

白い肌、長い睫毛、綺麗な瞳にぷくらとした唇…それらは完璧な調和を誇っており
まるで芸術作品のように綺麗で…そこまで思考がいった所でFN49はハツとして
WA2000から身体を離れた

「…?..どうかしたの?」

「な、ななんでもありませんっ!それより訓練の続きをやりましょう!!」

「そ、そう?大丈夫なら良いんだけど…」

FN49はほんのり朱の差した頬をパンパンと叩いて気合いを入れ直すと再びレン
ジに入って銃を構える

その様子を見てWA2000も思考を切り替えて指導を再開しようとした

しかしそのタイミングで訓練所の扉が開き、誰かが入ってきた

その方向を見やるとそこにいたのはM14であった

「あ、ワルサーさん。こんにちは〜」

「こんにちは、M14。今日はこっちで訓練なのね」

「はい、わたしはマークスマンですからね。色んな距離が指定出来るここは私にとって
便利なんですよ」

今3人が居るのは最大距離が800mで1m刻みでターゲットを出現させられるラ
イフル用の訓練所の1つである

レーン数が少ないので1度に使用出来る人数に限りはあるものの風や気圧、果ては角
度といった細かい状況設定が可能な高性能レンジである

「それもそうだったわね。最近長距離レンジにすることが多かったからちよつとだけ違
和感があつたのよ」

「あはは、そうでしたか。つて…そちらは新しく入つた人ですか？」

M14はレンジから姿を現したFN49を見てWA2000へ尋ねた

「ええ、そうよ。この子はFN49、この娘は見込みがあるからマンツーマンで鍛えるこ
とにしたわ」

「FN49です、よろしくお願いします」

「わあく、ワルサーさんが入れ込むなんて初めてじゃないですか！もしかしなくても才
能めつちやある感じですか？」

「そうね、この子には才能があるわ。しつかり鍛えていけば私を超えるかもしれないほ
どにね。そうそうFN49、この子はM14よ。指揮官に認められて戦場へ出る資格を
得た数少ないライフル型人形よ」

「えっへん！実は凄いですよ、わたし」

「そ、そうだったんですね。これからよろしくお願いします」

両手を腰に当てて胸を張るM14にFN49は頭を下げて挨拶をする

そして顔を上げた時、彼女が背負っているライフルが目についた

M14を実際に見るのは初めてだが、その背にあるライフルが自分の知っているM14とは全く違うことに気付く

通常のM14は自身のそれと同じく木製部品が多く使われており、見た目は似通っているはずだ

しかし実際に背負われていたのは樹脂パーツが多く、バイポッドを初めとした様々なアタツチメントの付いた最新式の銃のように見えるライフルだ

そんなFN49の視線に気付いたのかM14はライフルを手を持って見せながら得意顔で説明を始めた

「これが気になりますか?これはEBR仕様って言いまして、早い話がモダナイズですね。従来のM14にあった弱点を全部克服して取り回しや精度を強化したものになってるんです」

「二応特別なカスタムってことにはなるけどM14のEBR仕様自体は他の基地でも見られるわ。でもこの子のは他でも中々見ない改造が施されてるわ。この子の身体にフィットするように1つ1つのパーツが1mm単位で調整されてるしスコープもシユ

ミット&ベンダーの高級モデルをうちで再現したものよ。ストック、バイポッド、モノポッドは全て無段階調整が可能でバレルは完全な円筒のブルバレル。トリガープルも限界まで軽くして撃つ際のブレを最小限に抑えてるわね。グリップとハンドガードもまるで手に吸い付くかのような握り心地よ。勿論フリーフローティングハンドガードにしてあるし、命中精度は1000ヤードで0.3MOA。最高のライフルよね」

「そ、そうなんです…」

「そうなんです！しかもわたしが使う弾は7.62×51mm NATO弾じゃないんですよ」

「え、どういうことですか?」

FN49の頭にはハテナが浮かんでいた

それもそうだろう、とてつもなく緻密にカスタムがなされていて軽く引くレベルではあるがそれは別に可笑しいことではない

しかしそもそも使う弾が違うとはどういう事なのだろうか、と

「6.5mmクリードモアって聞いた事ないかしら? 従来の7.62mmよりも射程距離と威力の向上及び反動軽減を図って作られた弾よ。うちの基地で作製はしてるんだけどそこまで大量には作れないから指揮官に認められて戦場に出る子にしか渡されないわね」

「な、なるほど。そんな弾が…ワルサーさんも使うんですか?」

「そうね、他の子達と共有出来るのもあって良く使うわね」

「あ、そう言えば今更なんですけど…新人の方って2人居ませんでしたっけ? もう1人は何処に居るんです?」

「モシン・ナガンのことね。あの子は長距離狙撃任務に就かせるつもりでいるから取り敢えず1kmオーバーを安定して狙えるようM200に訓練をお願いしているわ」

「ああ、なるほど…そうだ、折角だしわたしもFN49ちゃんの訓練見てあげても良いですか?」

「私は良いけれど…貴女はどう?」

「わ、私も大丈夫です。寧ろお願いしたいくらいです!」

その後FN49はWA2000とM14から指導を受けながら訓練を再開したがやはり急に成長はしないようで、結果は芳しくなかった

それでもFN49は必死に訓練に励み、そんな様子を2人は高く評価したやがて時間は過ぎそろそろお開きにしようということとで訓練は終わりを迎えた

FN49は愛銃をスリングで背負い、疲れ切った様子だったが指導してくれた2人にきちんと頭を下げお礼を言ってから自身の部屋へと帰っていった

後に残った2人は軽く清掃をしてから一緒に訓練所を出る

「それにしても…ワルサーさんも酷いですねえ」

唐突にM14が口を開く

「…そうね、自覚はあるわ。でもこれも全てあの子の奥に秘められた力を引き出す為よ」
「それは分かるんですけど…それにしたってあの訓練方法は酷ですよ。私達だってあんなやり方はしなかったのに」

M14はため息をついた

地獄のような訓練に耐えてスカレットに認められ、それからも日々厳しい訓練を己に課しているM14が呆れるほどにWA2000がFN49に課した訓練は理不尽なものだった

それは2発撃つ毎に距離も風も気圧も角度も諸々の条件を変えて撃たせたのだ

要は1発で現在の条件での弾道を掴み、2発目で綺麗に当てろということだ

確かに実際の狙撃…特に人質解放作戦等に於ける狙撃では2発どころか1発で必中させなければならぬから理にかなっているようにも思える

しかしこんなことをしては特定の条件下に於ける弾道を把握するのに時間がかかってしまうし、そもそも今までちゃんとした狙撃の訓練など受けていなかった者にいきなりこんなことをさせても訓練にならないだろう

にも関わらずWA2000はそれをさせている

それは何も虐めたり理不尽な目に合わせたいからではなく、彼女なりの思惑がりM14もそれに気付いていた

「それにしてもあの人：ワルサーさんが気にかけるのも領けますね」

「あら、貴女もあの子の良さが分かるのね」

「勿論です。じゃないとライフル型No. 2の名が泣いちゃいますよ」

M14はこの基地でWA2000に次ぐ実力を誇るライフル型人形である

それ故にFN49の異様とも取れる癖の無さに気付いていた

WA2000は特定の条件でずっと撃たせることによつてそんなFN49の癖の無さが消えてしまうことを恐れているのだ

だからこそ条件を変えまくることで変な癖がつくのを防ぐと同時にどんな状況でも正確な狙撃が出来るように鍛えている

いくら副官を務めるWA2000と言っても一切の癖がないかと言われると首を横に振るだろう

勿論あらゆる狙撃をこなし、その精度はほぼ100%と言えるほどの正確さを誇るといふ驚異的な狙撃手であることに違いはない

だが身に染み付いた癖が邪魔をして狙いを付けるのに一瞬遅れが生じることがある今のところそれが原因で窮地に陥ったことはないが、これからもないとは限らない

FN49にはそれがないのだ：WA2000が彼女に期待して鍛えあげようとするのも頷けるだろう

「まあワルサーさんの気持ちも分かりますしわたしもちよつと期待しちゃってますけど…本人が病んじやわないようになりとケアしてあげなきゃですよ？」

「ええ、勿論よ。その辺は私も指揮官から教わってるから大丈夫。後であの子の様子を見に行くわ」

「それなら安心ですね」

2人は談笑しながら食堂へと向かって行った

モシンちゃんとM200ママ

FN49が屋内訓練所でひいこら言っているその頃、モシン・ナガンは屋外射撃場：というより基地の屋上に居た

プローン姿勢を取り、自身のライフルを構えてスコープを覗く

従来のT字レティクルの3・5倍スコープではなく、十字レティクルで目盛りの沢山ついた高級スコープだ

倍率も4〜22倍率迄の無段階調整タイプ

接眼レンズにしつかりと右目を合わせたモシン・ナガンは銃口をやや下に向けると倍率を18倍まで上げた

レンズには今から撃つ訓練用のダミーが映っている

そのダミーをレティクルの真ん中に置いてからスコープ左側面にあるボタンを押すとモシン・ナガンの視界の上部に対象との距離が表示される：1392m

その表示を見つつスコープの右側にある射角調整機能を使って距離に応じてスコープを前に倒していく

やがて射角も一致し、次に風を読む

西に微風だ

感じ取った情報を元に銃口をズラしていく

これで全て整った、最後にもう一度確認をして間違いないことを確認したモシン・ナガンはトリガーに指を掛けて引き絞った

「…あら？」

轟音と共に飛翔した弾頭はダミーから数メートルほど横を通っていつてしまった

「惜しかったね、モツシー」

傍で様子を見ていたM200が双眼鏡片手にそう言った

「ちゃんとズレも想定して狙ったと思うのだけれど…何処を間違えたのかしら？」

「何も間違つてないよ。僕から見てもモツシーのやった調整は完璧だった。今までやったことない距離だろうに良く初見で調整出来たね」

M200の少し低くてゆったりとした喋り方がなんとも心地好い

その心地好さに安心してしまいそうになるがそこはグツと堪えてモシン・ナガンは疑問を投げかける

「調整が上手くいつてたのならどうして当たらなかつたのかしら？ライフルやスコープに不備はないし、だとしたら調整に問題があったとしか…」

「さっきも言ったようにモツシーのやった調整はしつかりしてたよ。失敗したのは単に

やらなきやいけない調整をそもそもやってなかったからだね」

「へ?」

モシン・ナガンは間の抜けた声を出した

距離も風も考慮したのにあと何が足りないというのか

「何が抜けてたんだらうって顔してるね。意地悪する気もないし、先に言っちゃうとコリオリだよ」

「コリオリ…それは何かしら」

「今僕達が居るのは地球だよね」

「…そうね」

「そして地球は自転してる、ここまでok?」

「okよ…つてもしかして!」

「お、気付いたかな?」

「まさか自転してる影響で発射時と着弾時におけるターゲットの位置が変わってる…?」

「いくざくとりー、正解だよ」

「なるほどね、だから…つて、それだどちよつとおかしいわね」

「どうかしたの?」

「だって私今までも狙撃は何回かしてきたけれどそんなコリオリ？だとかを考えて撃つたことはないわ。それなのに当たってたのはどういうことかしら？」

「それはきつと今まで800m以上の狙撃をして来なかったからだろうね。いくら自転の速度が速いと言ってもそれ以上に地球が大きいから角速度はそんなに速くないんだ。だから発射と着弾にタイムラグが殆どない距離での狙撃では考慮する必要はないよ」

「なるほど、そういうことなのね：今回は私が今までやってきた狙撃の中でも最長距離、っていうか…」

そこで言葉を区切ったモシン・ナガンは改めてダミーのある方角へ視線を向けた。だが視界に広がるのはただっ広い荒地のみ

戦術人形の視力を以てしてもその姿を確認することは出来なかった

「いくら何でもいきなり1400mはないんじゃないの？遠すぎるわよ：最初は届くかどうかでも半信半疑だったし」

「まあかなりの長距離であることは認めるよ。でも意味もなくやらせてるわけじゃないし、君と同じ弾を使うSVDも成功させた距離だからね。物理的に無理なことはやらせないから安心して」

「それはなんとなく分かるのだけれど：具体的にどういう意味があるのかしら？」

「今回で言えばまず君が何処まで狙撃を理解しているのか、だね。後は適応力とか姿勢

とかを見るのも目的かな…それで言う今回と今回は惜しかったよ、あともうちよつとで及第点を出せた」

「あら、それは名譽なことだと思つていいのかしら、同志？」

「うん、勿論。だつて君は今日初めて見る光学機器をしつかりと使いこなして今までやつてきた距離の2倍以上にも及ぶ距離での狙撃でターゲットの近くに着弾させた。これは人形だからといつてそう簡単に出来る事じゃないからね…君には狙撃の才がある、誇つていいよ」

「あらら…そこまで言われると流石に照れちゃうわね」

M200の言葉を聞いて嬉しそうに微笑むモシン・ナガン

更にM200がモシン・ナガンの頭をその小さな手でヨシヨシと撫で始めた

それに気持ち良さそうに目を細めるモシン・ナガン、彼女の姿はまるで母に褒められて喜ぶ少女そのものだ

…体格的に逆ではないのかと言う声も聞こえてきそうだがそんなものは関係ない

この基地のM200はママ属性なのだ

誰がなんと言おうとママである

ロリママM200ちゃんカワイイヤッター！

「ところでーっ気になってたんだけど…」

「ん、なに？」

「…モツシー、つて？」

「モシン・ナガンだからモツシー、ナガンだと他にいるからややこしいしね。…嫌だった？」

「いえ、そんなことはないわ…ただ渾名で呼ばれるのに慣れてなくてね。ちよつとこそばゆいのよ」

「…そつか」

「でも…」

モシン・ナガンはM200の顔を真っ直ぐに見つめ、ニツコリと微笑む

「悪くないわ…良ければこれからもそう呼んで欲しいくらいにはね」

「それなら良かった。これからも宜しくね、モツシー」

「ええ、こちらこそよ同志」

2人は笑い合い、良い雰囲気周囲に流れ始める

「全く…いつの間になんかに仲良くなつたんだ、お前ら？」

「…っ!?!つて指揮官ね、びつくりさせないでちょうだい」

死角から急に聞こえてきた声にモシン・ナガンの体がビクッと跳ねる

M200は特に驚いた様子を見せていない辺り冷静なのか気付いていたのか…恐ら

くは両方だろう

「びつくりしたのはこっちだ。M200がここまで気に入るなんて初めてのことだからな」

「あら、そうなの？」

「ああ、まあ普段から他のやつを癒したりはしてるが…あんな満面の笑みは見たことがないな」

「…指揮官、もうその辺で」

M200は僅かに頬を赤くしてそっぽを向く

その様子にモシン・ナガンは少し驚いたようなそれでいて微笑ましいような表情をし、スカーレットはニヤリと笑った

「おっと、こりやちつとばかり野暮だったか？まあいい…取り敢えず今は長距離狙撃の訓練中だったんだろ、丁度いいから私も見てやるよ」

「あら、それは願ってもないことだけど…人形ですら厳しいこの距離を人間の貴方がそう易々と抜けるものなの？」

「ほう…私の狙撃にケチをつけるつもりか？良いだろう、見せてやるよ」

そう言つてスカーレットは手にしていたL115A3のバイポッドを展開し、床に置くとそのまますた姿勢へと入る

そしてその身に纏う空気が一変した

普段は何もしていないくとも圧倒されるような威圧感を感じるが、今この時はまるで周囲の温度が下がったのかと錯覚するほどに鋭いものへとなっている

スカレットの変わりようにモシン・ナガンは驚くが、よくよく考えれば狙撃をする時に雰囲気が変わるのは当たり前のことだと思ひ直す

「モツシーも中々挑戦的だね、指揮官にあんなこと言えるなんて」

「でも事実じゃないかしら？ 1 km オーバーなんてかなり難しい狙撃でしょ、機械である私達人形ですら失敗するのにいくら優秀でも人間の指揮官には……」

「その心配は無用だよ。指揮官は狙撃に関して……いや他の事に関してもそうだけど、特に狙撃に関してはもう人間じゃないから」

「それってどういう……」

「おい、モシン・ナガン」

M200に詳しく聞こうとしたモシン・ナガンであったが、指揮官に呼ばれたのでそちらを見やる

するとスコープから目を離さずに左手でこちらに双眼鏡を突き出していた

「ここから距離2100 mの位置にあるダミー5番を見ておけ、今から1発で撃ち抜いてやる」

「え、ちょっと待って、2kmオーバーよ!?!そんなもの1発でやれるわけないじゃない!」

「それが指揮官には出来るんだよ。ほら、双眼鏡を覗いて」

「わ、分かったわ…」

言われるがままに双眼鏡を覗き、指定のダミー人形を視界に収める

「捉えたわよ、同志。でも本当に抜けるの?」

「私を甘く見るんじゃないよ、この程度簡単、とまでは言わねえが出来ない距離じゃねえ

…M200、カウント」

「了解。それじゃあカウントー。3、2、1…:ファイア」

M200のカウントに合わせてスカーレットのL115A3が火を吹く

それから数秒後、弾頭がダミー人形の頭に命中したのをモシン・ナガンの視界は捉えた

「…嘘でしょう?」

「言つたら? 私は狙撃の天才だからな」

ニカツと笑う指揮官をモシン・ナガンは信じられないという顔で見つめる

実際に目の前で起こったことが信じられなかった

そもそもこんな超長距離での狙撃にはかなりの時間をかけなければならない

距離の測定：はスコープの機能で省けるにしても風速や角度、銃弾の種類に撃ち出す銃本体の種類とコンディション、その日の自分自身の状態などもかなり影響を及ぼす更に弾道は水平に撃つのか撃ち上げるのか撃ち下ろすのかでも変わってくる

2 km を超えるとなると角度のほんのちよつとしたズレも致命的なものとなろう
たつた1度でもズレれば着弾点が4 m 近く変わるのだ

そのため許容誤差範囲は0・001度とかそんなレベルとなる

それら全てを考慮に入れなければならないため観測手と共に「スナイパーモジューラーブック」と呼ばれる狙撃のためのデータ帳の様なものに色々と記入し、何度も何度も調整を繰り返した後をやつと試射を行う

この試射によって得られたデータと体感のズレを元にした上で本命の狙撃を行うのが定石だ

それにそこまでしても外れることは多い

戦術人形はこの諸々を射撃管制システムによって行い、素早い狙撃を可能としているしかし当然ながら人間にはそのようなシステムはないため普通はその全てを行わなければならないのだ

それなのにそれらを全部すつ飛ばしてただ見ただけで命中させる：人間業ではなかつた

更に338ラプアであればこの距離でも戦術人形、それが例えハイエンドモデルだとしても一撃で葬れる可能性は高い

遠距離から有無を言わず、バレることも無くたった1発の銃弾で仕留める…これは戦場においてとてつもないアドバンテージとなる

何せ2kmも離れていれば狙撃地点がバレても離脱は容易に行えるし、序に罠でも仕掛けておけばそれに引つかかって更に敵を減らせるかもしれない

狙撃手はたった1人で戦場を左右するとも言われるが、それも納得だろう

実際過去には伝説のスナイパーとして名高い「シモ・ヘイヘ」や死の貴婦人と言われた「リユドミラ・パブリチエンコ」などがある

他にもクリス・カイルやカルロス・ハスコックなど枚挙に暇がないが、スカーレットも表舞台に立っていないれば伝説として語られていたであろう

裏の超隠密特殊部隊に属していたためにそういう事がなかったのが何処か悔やまれる

しかし真に恐ろしいのはこの化け物みたいな指揮官に認められなければ戦地へ出ることは許されず、そして多くはないものの認められている人形達がいるということである

「…もしかしてこの基地って相当ヤバイ？」

「うん、やばいよ。でも大丈夫、その内慣れるから」

「あまり慣れたくはないわね…」

「んな事言ってる暇があるなら特訓するんだよ。ほれ、構えてみな。今日は私が直々に見てやるから」

「…嫌な予感しかしないわね。助けてくれないかしら、同志？」

「ごめん、指揮官がやる気になつたら止められるのはクレアさんだけなんだ」

「…今日は厄日ね」

その後屋上からモシン・ナガンの悲鳴が聞こえて来るのだが、基地の面々は「ああ、いつものあれか」と特に気にする様子もなくその日の業務や訓練をこなしていくのであった

休日の指揮官

FN49とモシン・ナガンが新人訓練でひいこら言いながらもなんとか喰らいつき、スカーレットが偶にやって来ては更にひいこら言わせる

そんな光景が日常と化して1週間ほど経った朝、スカーレットはいつもよりラフな格好で基地内を歩いていた

服装がいつもと違うのは今日がスカーレットにとって休日であり、基本的に一切の仕事をしていない日であるからだ

制服というものを煩わしいと感じる彼女にとって休日において一番嬉しい要素かもしれない

普段から制服も着てないだろと言われるかもしれないが、それでも仕事中はカッターシャツにネクタイは絞めているしボトムスだって：スラックスではないが色は黒だしテーパードである為ある程度カッチリとした印象はある

モッズコートを着ているのと本人の雰囲気のせいでラフに見えるが案外キッチリとした服装なのだ

：だからと言って制服を着なくていい理由にはならないが

それはともかく、ラフな装いのスカーレットが向かったのは室内に設けられた喫煙室だ

10畳ほどの広さを持つ一室を丸ごと喫煙所に魔改造した部屋であり、喫煙者にとって最高の設備を備えている

こうした喫煙室は何ヶ所が存在し、それぞれ換気の度合いが違ったりしているためその日の気分や好みによって選ぶことが可能だ

スカーレットの命令によって作られたこの喫煙室達は愛煙家の多いこの基地にとってなくてはならない存在となっていた

そんな部屋の1つへと着いたスカーレットが電子ロックを解除して入室すると、既に先客がいた

「ん？指揮官か。貴殿も吸いに来たのだな」

「おう、今日は休みだしな。朝から仕事もせずに吸う煙は格別だ」

「そんなことを言っているとまたジェリコに叱られるぞ？」

「なあに、休みの日くらいは目を瞑ってくれるさ……つと、しまったな、ジッポを忘れちゃった。MG5、火い貸してくれ」

「仕方ないな、ほら」

「わりい」

MG5はスカーレットの元へと歩くと指に挟んでいた煙草を咥えた

スカーレットも咥えていた煙草を指で挟んで固定するとそのまま互いの煙草の先端をくつつける：所謂シガーキスを行って火をつけた

この基地でのシガーキスは友愛の証として認識されており、互いの実力を認め合つて仲が深まった者達の間では頻繁に見受けられる

こうなつた要因としてはスカーレットがトンプソンやMG5など、この基地でも特に能力の高い人形とシガーキスをしている所が度々目撃され、それに憧れを抱いた者達が大勢いた為である

火がついたことを確認したスカーレットは大きく吸い込み、それから上に向けて煙を吹く

その顔は何処か満ち足りているように感じられた

「ふう…：やっぱりこの味は至高だな。やる気が漲つてくらあ」

「MG部隊の訓練報告書や弾薬の出入りなんかの書類がたんまりあるのだが」

「アーアーナニモキコエナイ」

「…相変わらず書類仕事は苦手か。秘書でも雇つたらどうだ？」

「う〜ん秘書、秘書ねえ…：仕事を押し付けるつもりはねえけど確かに居りやあ色々と便利かもな。一応考えとくか…」

「そうすると良い。さて、私はそろそろ行くことにしよう」

「お、訓練か？」

「そんなところだ。指揮官も偶には顔を出してくれよ、貴殿がいるいないでは皆のやる気が違うからな」

「こつちとしちや常にそれくらいでいて欲しいもんだ」

「ハハハ！分かってないな、例えそうなたとしても指揮官が来れば更にやる気が上がるさ。それほど皆が貴殿を慕っているんだよ」

「…そうか、そいつは嬉しい限りだな。また今度扱きに行つてやるから覚悟しておけ、と伝えといてくれ」

「了解だ。では、またな」

M G 5 が去つたことで部屋は静寂に包まれるが、スカーレットは特に気にすることも無く煙草を吹かし続けていた

やがて灰となり散つていき次に手をかけようとしたが、火を忘れていることに気がつき、肩を落とす

仕方が無いので部屋を出ようとしたその時：喫煙室の扉が開き誰かが入ってきた

「おや、お主こんなところで油を…いや、その格好から察するに休日であったか。相済まぬ」

「ナガンか、気にしなくていいぜ。普通はそういう反応だろうしな」

入ってきたのはM1895であった

小柄でパツと見小学生くらいにしか見えない彼女が喫煙室にいるというのは中々退廃的な光景ではあるが、戦術人形だから問題は無い

M1895は自身の胸ポケットから煙草の箱を取り出すと一本出して啜え、火をつける

それを見たスカーレットも新しい煙草を啜えて

「なあナガン、ちよいと火を忘れちまっててな…悪いんだが貸しちやくれねえか？」

「なんじゃ、喫煙室に来たのに火を忘れおったのか？これは傑作じゃな」

「ついうっかりしちまってな…」

「まあよい、そういう事もあろう。ほれっ」

「悪いな」

また当たり前のように行われるシガーキス

しかし先程は背の高いMG5であった為に自然であったが、M1895は背が小さい巨人と言われることすらあるスカーレットが相手ではかなり差がある

その為スカーレットは上体を大きく傾け、M1895は精一杯背伸びをするという何ともエモい構図になっていた

息を吸い、火が付いたことを確認したスカーレットは上体を戻してから大きく吸い込む

途端に広がる煙の風味を十分に楽しんだらゆつくりと吐き出す

その表情は何とも満たされているようであった

「相も変わらず旨そうに吸うな、お主は」

「旨そうなんじゃない、旨いんだ。旨いものを頂くのに無表情を取り繕う必要なんてないだろ?」

「それもそうじゃな…:そんなことをしても折角の旨みが逃げてしまうじゃろうし」
「そういうこつた」

その後暫くは会話もなく煙を楽しんでいる2人であったが、徐にスカーレットが口を開いた

「なあ、ナガン。お前何か言いたいことがあるだろ」

「いきなり何の話じゃ?」

「上手いこと心を隠せるようになったちやいるが、まだまだだな。私が一流の隠密部隊出身の超一流のエリートだってことを忘れるなよ?」

「自分でそこまで言うのか? まったく呆れたもんじゃな…:それに、その事を忘れたことはない。ワシらに隠密の何たるかを叩き込んだのはお主とクレアじゃからな」

グリフィンが現在最も成功しているPMCの1つと言っても過言ではない

そんなPMCが統治する中でも最前線に位置しているこのSO9地区にある基地が一枚岩な訳が無いのは想像に難くないだろう

どの基地にも多少なりとも裏の部隊が存在するものだが、この基地に於いては指揮官と後方幕僚が2人とも伝説的な隠密部隊出身とあつてか普通の基地とは練度が桁違いの諜報部隊を持つていた

その存在を知っているのはこの基地でも指揮官のスカレット、後方幕僚のクレア、諜報部隊に属する者達（これは当たり前だが…）、後はミレニアム8の面々のみだ

社長であるクルーガーには一応そういう部隊があることは報告しているが、その中身に関しては一切掴ませていない

ヘリアントスは他の基地にもあるのだから恐らく存在するのだろうという予測はしているものの、その事実を掴むことは出来ないでいた

そんな諜報部隊の中にあつてこのM1895は重要な位置にいる

他の面々は未だ指揮官に認められておらず精一杯頑張っている人形を演じていたり、直接戦闘には参加せず、後方支援に注力した訓練に励んでいたりとにかく矢面に立つものはほとんど居ない

中にはスカレット、クレア、M1895の3名しか存在自体を知りすらしない人形

もいるし、その能力を見込まれて諜報部隊の隊長を務めている

そんな中でM1895は普通に矢面に立つ戦闘班で、尚且つHG達の中でもMK・2
3に次ぐNo. 2の立場にいる

つまりM1895は表と裏とを繋ぐ橋渡しとなり、同時に繋がりが強くなりすぎない
よう調整したり表の人形達が自分達に気付いていないかを監視する役割を担っている
のだ

更に隊長の存在を知っている者が少なすぎるが故に、諜報部隊でもNo. 2でありな
がら実質的に隊長として動いてすらいる

スカーレットもかなりの負担を強いていることを理解しており申し訳なくも思うが、
本人の希望によつて今の立ち位置になっている上、優秀なので今まで問題なく業務を熟
してきている為に文句も言えないという状況である

だがどれだけ優秀でもスカーレットには心の内を読まれてしまったようだ

「正直、休日を楽しんでおる所にこんな話はしたくないのじゃがな…」

「なあに遠慮してやがんだ、私とお前の仲だろ？それに何の話かは大体察しがついて
らあ」

そう言われたM1895は1度ゆっくり煙を吸い、吐き出してから「やれやれ…」と
溜息をついた

「適わんな、お主には…なら遠慮なく言わせてもらうかの。話の内容じゃが、お察しの通りワシらが追っておった犯罪組織についてじゃ」

仕事の話になった途端、2人の雰囲気が一変する

それまでの和やかな空気は何処にも存在せず、鋭くて底冷えするような気配が辺りを支配していた

「やつぱりそいつか…何か分かったか？」

「全部じゃよ。やつておる事業に末端から頭までの構成員の情報、持っている各拠点の位置から内部構造まで全部じゃ」

「流石だな。それだけ分かりやあ作戦にも移りやすい、後で良いから情報を纏めて送ってくれ」

「既にやつてある。ワシはこの後皆を集め会議をする予定じゃ」

「そうか、それなら」

「言つとくが、お主は来るなよ？適度に休むことを推奨しておる張本人が休んでおらんとなれば示しがつかんからな。それにワシらはお主達の課した死ぬ一歩手前の訓練に耐えきつたんじゃ、これくらいのこと問題なく出来るわい」

「…それもそうだな、それなら後のことは頼む。私はゆつくりと休日を楽しむことにするよ」

「そうするが良い。さて、ワシはそろそろ行くとするかの」

「なら、私もついでお暇するか」

「丁度良いな…とやりたいところじゃが、どうせ行くのは彼処じゃろう？部屋を出たら即反対方向では一緒に出る意味がないように思うがの」

「細けえこた良いんだよ」

「そうか、お主はそういう奴であつたな」

「うっせえ」

軽口を叩きながら部屋を出た2人はそのまま別れる

その後のスカーレットの足はある方向へ迷いなく向かっていた

やがてある部屋の前へと着いたスカーレットは電子ロックを解除して中に入る

すると部屋の中にいた1匹の犬が彼女に歩み寄り、目の前まで来るとちよこんとお座りをした

「おう、レックス。今日も元気だな！」

スカーレットはそう言いながらその犬…ウルフドックのレックスの頭を撫でる

レックスは気持ちよさそうに目を細め、尻尾を振っていた

ここはスカーレットが個人で飼っているレックス専用の部屋である

暫く頭を撫でた後、スカーレットはレックスを散歩へと連れ出した

リード等は着けていないが、レックスはキッチンとスカーレットの横を同じ速度で歩いている

そのまま半刻ほど散歩をしてからまた同じ部屋に戻った

スカーレットは本棚へ向かっていき一冊の本を手に取ると、ソファーにドカッと座つて読み始める

するとスカーレットの脚のすぐ近くにレックスは丸まって眠り始めた

暫くすると部屋にTMPが入って来て何も言うことなくスカーレットの隣に座ったかと思うとそのまま横になり、スカーレットの膝に頭を乗せる

無断で、しかも無言で指揮官に膝枕をさせたわけだがスカーレットは怒る様子はなく寧ろ頭を撫でてやっている

これは彼女が休日の際にはほぼ確実に見られる光景であり、誰もが慣れているのだ

その状態で2時間ほど過ぎた頃、スカーレットはTMPの肩をトントンと叩いてやるとTMPはのっそりと起き上がった

「…今日はもう終わりです?」

「もう、とは言うが既に2時間経ってるからな? 甘やかしてやりたい気持ちもあるが、私にもやることがあるしお前も訓練しなきゃだろ?」

「はい…分かりました」

TMPはソファから立ち上がると名残惜しそうに去ろうとする
そんな彼女にスカーレットは近寄り、再度頭に手をやると

「次の休日になつたらまた来な」

そう言った

するとTMPの顔が明るくなり、次第に満面の笑みを浮かべる

「…はい！では、行つて参ります」

「おう、励めよ……現金な奴だな、ったく」

そう言いつつも満更でも無い様子

なんだかんだ言つて部下に好かれている事に幸せを感じながら再度ソファの方へと向かい

「お前もまたな、レックス。分かつてると思うがここから暫く忙しくなるからな、また来週に来るぜ」

そう言いながらわしわしと撫でてやると気持ち良さそうに鳴くレックス

指揮官であるスカーレットは基本的にかなり忙しく、休みは1ヶ月に1日だけしかない

それは月終わりの8日前、つまり最後の1週間の1日前となる

そしてその後の1週間はスカーレットにとって月で最も忙しくなる時期となるのだ

その理由はまた次回にするとして、今はスカーレットの様子を見ていこう

ペット部屋を出たスカーレットは自室に戻ってガンロッカーに仕舞われている愛銃を丁寧に取り出した

L115A3：永らく共に歩み、数多の戦場に於いて常に傍に居てくれた最早自身の血肉の1つと言つても過言ではない銃だ

愛着を通り越して愛情すら抱いているその銃にスリングを取り付け、バイポッドを展開してから1度机に置いた

それから作業着へと着替えるとバイポッドを畳んでからスリングを使つて肩へ背負う

そして自室を出たスカーレットはその足で工場へと向かった

10分ほど歩いて辿り着くと、何重にも掛けられたロックを解除して中に入る

「来たのね、スカーレット。準備は出来てるわよ」

「ささ、こちらへどうぞ♪」

部屋へ入ってきたスカーレットを1人の人間の女性と1人の戦術人形が出迎えてくれる

後方幕僚兼ガンスミスのクレア・ウィリアムズとPPSh-41だ

2人はこの工場の管理者であり、銃に関する事で相談があればまずはこの2人へ話

をすることになっていく

それから部下となる人間や民生人形の手も借りて様々な物を生産したり改良を施したりするのだ

「いつも悪いな、2人とも。ちよいとスペース借りるぜ」

「いいのよ、そんなの気にしなくて。ごゆっくりどうぞ」

「何かあればいつでも申し付けて下さいね」

「ああ、そんな時は頼む」

2人と会話をしながらスカレットは部屋の一角にある広々とした整備スペースへと向かう

普段は誰かしらの銃があるのだが、今この時には綺麗に片付けられている

それだけではない、整備に必要な道具等がいつもよりかなり丁寧に用意されている

スカレットは月に1日の休日になると必ずここへ訪れるため、予め準備されていたのだ

それにしても過剰に感じるが、これは今からスカレットが行うことに関わってくる
スカレットは愛銃であるL115A3をシートの敷かれた床へ下ろすと、まずはポルトを解放してマガジンを抜き取った

それからマガジンカバーを外すとマガジンボトムプレートを下から抜き取り、マガジンスプリングとフォロワーも抜く

すると今分解したマガジンのパーツ一つ一つを手に取り光に照らして汚れや歪みなどが無いか緻密にチェックしていく

マガジンスプリングに経年劣化の痕が見られたので古いスプリングを近くに取ったボックスに丁寧に入れ、棚の中から真新しいものを取り出す

そして今しがた取ったスプリングも含めて徹底的に全てのパーツを綺麗に磨いていく

光沢すら放つ程に磨き上げたそれらを組立て直し、少し離れた場所へと置く

次にボルトを完全に引き抜くとハンドル、ノブ、キャップ、シユラウド、シユラウドキャップ、レンチ、ファイアリングピン、ファイアリングピンスプリング、ファイアリングピンスプリング、ファイアリングピンバックピン、ファイアリングピンバック、エジエクター、エジエクタースプリング、エジエクターピン、エキストラクター、エキストラクタースプリング、エキストラクターボールに分解して先程と同じように全てのパーツを念入りに調べあげ、古くなった物は取り替えて全てを徹底的に磨いていく

もうお分かりと思うがスカーレットが今現在行っているのは銃の完全分解からの整備だ

それもちよつとした汚れ1つ許さないほど緻密なもの

正直な話これは月1で行うようなことでは無いのだが、スカーレットは昔からこれを欠かすことはなかった

この細やかな作業を欠かさないことこそがスカーレットを伝説級のスナイパーたらしめるものでもある

それから6時間ほど続けてやつと終わり、分解した全てのパーツを1つ1つ組み立てていく

その作業も敢えて手早く行うことなく、ゆっくりと丁寧に組み立てる

これまた1時間ほどの時間をかけて終わるとスカーレットは愛銃を工場に出して整備してもらっていたケースに簡易分解をしてから仕舞った

それからケースを手にとって立ち上がるとクレア達の元へと向かう

「だあああああつかれたあああああ！」

「あら、終わったのね。お疲れ様」

「コーヒーを用意しましたよ、飲みますか？」

「くれ…」

「はい、どうぞ」

PPSh-41が出してくれたコーヒーを簡易机に着いてから飲む

「つあく……はあ、お前のコーヒーもうめえなあ…疲れが癒されるぜ」

「喜んでもらえてなによりです、指揮官様」

「それでこの後はいつも通りなのかしら、スカーレット?」

「ああ、勿論そうする。これが終わった後の楽しみだしな」

「そうよね。じゃあ、あの娘には私から連絡を入れておくわ」

「頼む」

その後スカーレットはPPSh-41の入れてくれたコーヒーで疲れを癒しながら彼女と他愛ない話をする

その間にクレアは携帯を取り出し、基地で開発した通話アプリを起動して誰かと通話をしだした

「もしもし? いつも通り頼めるかしら」

『はい、そうだと思って準備してありますよ。いつでもいらして下さい』

「流石ね、仕事が早くて助かるわ」

『お褒めいただき光栄です。では、お待ちしていますね』

その言葉を最後に通話は切れる

クレアは2人の元へと戻ると

「どうやら準備は終わってるみたいよ。冷めちゃっても勿体ないし、もう行く?」

「そうだな、そうするか。ペーパーシヤ、お前もどうだ？」

「はい、ご一緒させて頂きます♪」

そうして3人はある場所：いや多分もうバレてるかな、スプリングフィールドのカフェへと赴く

そこで休日の終わりを締め括るのに相応しい、豪華ではないが暖かい食事とお酒を嗜む

こうして夜は更け、やがて3人は寝る為にそれぞれの部屋へと戻って行った

：スカレットだけは最後に一服する為に屋上へ寄つたみたいだが

そして夜が明けると、スカレットに取つて月で最も忙しい1週間が始まるのであった

緊急任務! 指揮官を確保せよ!! part 1

指揮官が月に一度の休日を堪能した翌日、FN49とモシン・ナガンはスカーレットに呼び出されてガレージへと赴いていた

「何があるんでしょうか…」

「さあね、ひよつとしたら抜き打ちテストだったりして。『お前達がどこまで成長したか見てやる』とか言ってる」

「ひつ…もし本当にそうだとしたら私自信ありませんよ……」

FN49が不安そうに口を開くとモシン・ナガンが軽めに返すがその内容に余計に不安になるFN49

そんな彼女達の前にスカーレットが姿を現した

「よお、遅れちまって悪いな。ちよいと通信があつて対応してた」

「あら、そうなの。平気よ」

「そ、そそそそれで何の要件で、でしょうか…?」

「…なんでお前はそんなに緊張してんだ?」

FN49の明らかな挙動不審状態を見て疑問を呈するスカーレットにモシン・ナガンが、抜き打ちテストかもって私が言ったらこうなっちゃったのよね、と説明すると納得したような顔になり

「安心しろ、うちの基地では本人が希望しない限り私が試験を受けさせることはしないからな。抜き打ちなんてのは以ての外だ」

「あら、そうなのね。なんだか意外だね」

そう、この基地では訓練が異常に厳しいにも関わらず試験のようなものは殆ど行われはしない

あるのは本人が希望した際の、実働部隊としてスカーレットに認められるか否かの試験：この基地所属の戦術人形達の間では『ロビン セイジ』と呼ばれている物のみだ

各戦術人形の訓練を担当しているミレニアム8のメンバーが個人的に試験を行うことは稀にあるが、基本的には行われない

それで良いのかと思われるかもしれないが、この基地ではスカーレットに認められるかそうでないかで全てが変わってくる上にその試験が異常なレベルで厳しいものとなるので、本人の希望：要するに覚悟を自分で決めた状態でなければクリアは不可能なことで間違いなしなためこうなっている

因みに覚悟を決めた者でも9割は試験の前半で叩き落される

厳しすぎる印象を抱くだろうがこれはスカーレットの「この基地から出撃するのは全員が特殊部隊員」という方針から来ており、この方針は部隊を強固にする目的もそうだが何よりも作戦中の負傷や死亡を最小限に止めて人形達の損失を防ぐ目的もある

要するにスカーレットは単にこの基地に来た仲間を失いたくないだけなのだ

そしてこの試験をクリア出来た者はその能力に応じて更に長所を伸ばす訓練を施され、すべてをオールマイティに実行出来る実力を持ちながら特定の分野では右に出るものが居ないほどに特化させていく場合もある

それはそうと、スカーレットがここへ2人を呼び出した理由だ

訓練に関わるものでないなら一体なんだと言うのか、その答えはすぐに分かることになる

「私がお前達を呼んだのはある人物を紹介するためと、この基地の月末のことを…お、丁度いい所に来やがったな」

スカーレットのその言葉にガレージの外を見ると、簡易装甲が施された1台の乗用車が走ってくるのが見える

「紹介したい人っていうのはあの車に乗ってる人かしら、でもなんでわざわざ基地外の人を？」

「おっと、あいつは外部の人間じゃあねえぞ。寧ろこの基地に於いての重要人物だ」

「重要人物、ですか？ではなぜ着任時の施設紹介の時に挨拶をしなかったのでしょうか？」

「本当はするつもりだったしそうするべきだったんだがな…お前らが来る少し前からちよいとペルシカの所に行つてたから紹介できなかつたんだよ。んで今帰つてきた、まあすぐに居なくなるがな」

「あらそうなの…つてペルシカリア博士!?さらつととんでもない人物が出てきたわね…」

「指揮官つて…思つてたよりも凄い人だつたりして…」

「おう、私はすげえ奴だぜ！なんたつて…つとこの話はまた今度で良いな、それより挨拶すつぞ」

スカーレットの意外な繋がりに驚く2人、それに気を良くするスカーレットだが件の車がガレージに到着したため本来の目的を優先することにした

モシナガンが気を利かせてバック誘導を行い、ガレージ内部へと入つた車から降りたのは金髪でかなり穏やかな笑みを湛えた男性だ

しかしその体は鍛え抜かれているのが服の上からでも分かり、とても学者肌な人物には見えない

「誘導ありがとう、お嬢さん。君は確かモシン・ナガンだつたね」

「ええ、そうよ。…ふふ、お嬢さんなんて初めて言われたわ」

「おや、気に障ってしまったかな? だとしたら謝るよ」

「いえ、存外悪くない気分よ。良ければ今後もそう呼んで欲しいくらいにはね」

「そうか、それなら良かった。そちらのお嬢さんはFN49かな、初めまして」

「は、ははは初めまして…」

声も低くて落ち着いたものであり、それでいてその身の熟しは素人目に見ても洗練されていていることを窺わせる

また戦術人形への接し方もかなり紳士的でそんな経験のないFN49は明らかにしどろもどろになっているしモシン・ナガンも少し頬を赤くして気を良くしている

なんともどういいう人物なのか察しづらい男性だ

「おいおい、いつものナチュラルナンパか? またクレアにキレられっぞ」

「ハハ、それは完全して欲しいな。まあそれは兎も角…」

「おう、紹介だな。いい2人とも、こいつはイーサン・ウィリアムズ、この基地の超優秀な整備士だ」

「…滅茶苦茶重要な人じゃないの。それにウィリアムズってもしかして」

「察しが良いな。そうだ、こいつはクレアの夫だ。ついでに私の昔からの仲間でもある」

「ついでに酷くないかい、スカーレット」

「喧しい、近くで幸せな家庭築きやがって。これくらい受け入れろ」

「相変わらず厳しいなあ……」

イーサンは困ったなあ、といった様子で頭を掻く

だがその顔は何処か楽しげで暴言とも取れるようなスカーレットの言葉に気を悪くしている雰囲気は感じられない

スカーレットの言葉通りこのイーサンはスカーレットとクレアの昔からの仲間と同じ特殊部隊『ゴースト』の一員だった人物だ

もう10年近い付き合いになるのでお互い気心をしてれているためこのような会話が自然と出来ている、でなければスカーレットが暴言染みた言葉を味方にぶつけることは試験を除いてあり得ないだろう

「あら、既に心に決めた相手がいるのね。残念」

「因みにイーサンに手を出そうものならクレアはガチギレするから気を付けろよ。あの時のクレアほどおっかねえものはないからな……」

「そ、そんなにですか…勘違いされないようにしないと……」

「そうしてもらえると助かるかな」

そのまま少しだけ雑談をしたところでスカーレットが思い出したかのように

「そ、ういやああのガキンチョはどうした？連れてきてないわけじゃねえんだろ」

「ああ、あの子なら今は寝ているよ。なにせ結構な遠路だったしね、退屈だったんだろ
う」

「そうか、それなら良いんだがな」

突然この場に居ない子の話をされてクエッションマークが浮かぶFN49とモシン・
ナガン、当然の疑問を口にする

「ねえ、その子供?は誰なのかしら。まだ車内にいるようだけれど」

「んあ?ああ、そいつはな…」

そういや説明してなかったなとスカレットが2人に話そうとしたその時、イーサン
が乗ってきた車の後部座席のドアが勢いよく開いて中から1人の少年が飛び出してき
た

「あ、いた!よおBBA!」

「…ああん?」

瞬間、スカレットの眉間にこれでもかかと皺が寄り声もドスが利いたものになる

その声と体から発せられる怒気にFN49は身を震わせ、モシン・ナガンは思わず身
構えた

しかしイーサンと先程の命知らずの発言をした少年は慣れているのか動揺した様子
はない

「なあライアン…今、なんつった？」

「聞こえなかったのか？耳が遠いとか本格的にBBAだな！」

「んだとゴルアア!？」

「わー！BBAが怒った、逃げろー!!!」

「待てこんガキアア!!」

その後ライアンと呼ばれた少年は走って逃げ始め、スカーレットはそれを追いかけていった

余りにも突然起こった出来事に2人は固まっていたが、イーサンはやれやれといった感じで肩を竦めるだけである

その後正気に戻ったモシン・ナガンが

「え、ちよつといいのあれほつといて!?指揮官をキレさせるとか命危ないわよあの子!!」
「ハッ!そ、そうですよ!あの子にも非はありますけど、あのまま放つとくのは…!」

そんな焦る2人にイーサンは変わらさず穏やかな笑みを浮かべながら

「大丈夫だよ、あれはいつものお遊びだからね。それより僕達も基地の中へ行こうか、きつとクレアも待つてるだろうし」

「いや、え…あれいつもやってるの?」

「ああ、うちの子はやんちゃ盛りでね…元気が有り余って困るほどなんだけどスカー

レットは体力お化けだからね。こうして基地へ連れて来た時はいつも遊んでくれるんだよ」

「あれを遊びといつていいんでしょうか…それに」

「そこに関しては大丈夫さ。あの子にはああいうことをスカレット以外にはたとえ冗談でも言わないように言いつけているしね。もし破った時には僕とクレアから本気で怒られるから勢いで他の人に言うこともない」

「…なんとなくだけど、2人ともキレるとおっそろしそうね」

「ハハ、良く言われるよ。じゃあ、行こうか」

「その前に1つ、良いかしら」

先を促そうとするイーサンをモシン・ナガンは止めた

その声に歩みを止めて何だい?と聞くイーサンにモシン・ナガンは会ってからずっと思っていた疑問をぶつける

「…貴方、どうしてずっと目を閉じてるのかしら?」

「あ、それ私も気になっていました」

そう、イーサンはAK-12宜しく両目をずっと閉じた状態で今まで会話等を行っていたのだ

これは誰しもが疑問に思うことだろう、だが等のイーサンは

「それに関しては秘密、だよ。ほら、人は多少なりとも秘密があった方が魅力的だって言うだろう?」

「…なるほど、分かったわ。ごめんなさいね」

「いやいいさ、気になるのも分かるしね」

モシン・ナガンは何かを察したのか謝罪を口にする

一方FN49は何故そうなったのか分からずオロオロしていたがモシン・ナガンに目で促されてイーサンの後を着いていくことにした

その後暫くしてイーサン達はスカーレットとクレアに合流した

…ライアンはスカーレットに首根っこを掴まれて宙ぶらりんの状態で何故か放心している、何があつたかは聞かない方がいいだろう

「来たのね、イーサン…ところで、早速新しい娘のナンパかしら?」

「冗談きついよ、クレア…僕がそんなことすると思うかい?」

「思わないわよ、大丈夫。ちよつとからかっただけ」

「それは良かったよ」

「はいはい、こんなところでイチャつくくなバカップル共め。それより重要なことがあるだろう?」

「それもそうね、さて…」

クレアはイーサンに向けていた緩んだ笑顔を引き締めていつも通りの笑顔に戻すとFN49とモシン・ナガンの方へ向く直る

「今回貴女達をわざわざ呼んだのには訳があるわ。この基地では毎月最後の1週間になると私が家に帰るのよ」

「…え？」

余りの発言に2人が固まる

それはそうだろう、なんせクレアは後方幕僚とガンスミスでありこの基地においてかなりの重要人物だ

そんなクレアが毎月1週間いなくなる？ いったい何を考えてるのかと思うだろう

「まあ2人の考えてることは分かる。トチ狂ってるのかと思うよな」

「ええ、そうね…正直に言えば頭おかしいとしか思えないわ」

「ちよ、モシンさん…!いくらなんでも…」

「いや、モシン・ナガンの言っていることは正しいよ。僕も初めて聞いた時はスカーレットもとうとう壊れたのかと思ったからね」

「おうそりやどういう意味だイーサン」

「まあまあ…ともかく、その心配は正しいものだけど大丈夫よ。ちゃんと基地の業務は

「回るようにしてあるから」

3人がそう言うので取り敢えずは納得した2人

だがそれでも不安を拭いてないのは明らかだが、これは暫くこの基地で過ごせば自然と解消するので気にしない

「ま、そういうわけで暫くの間クレアもイーサンもないからその辺覚えておいてくれ。無論、代わりの人員もいるからそれは後で紹介するとして：ほれ、いい加減起きろ！」

スカーレットが掴み上げていたライアンの頭を小突いて起こす

起きたライアンは苦しそうに呻いて頭を擦りながらスカーレットを睨む

「この馬鹿力女め：今に見てろ、すぐにお前なんか倒してやるからな！」

「ほう、そいつは楽しみだな。まあそれはそれとして、そろそろお家に帰んな」

「子ども扱いすんじゃないやねえ！」

「もう：2人とも売り言葉に買い言葉なんだから。ほら帰るわよ、ライアン」

「ちつ：仕方ないから今日のところは勘弁してやる。次はないからなあ！」

そう言いながら手はしっかりとクレアと繋がれている辺りまだまだ子供だなあ、と周囲の者は思うがそれを言うことはない

何故か、そんなの可愛いからに決まっている

ともかく、イーサンとクレアとライアンの3人家族は基地から町にある自宅へと帰っ

ていった

勿論その間この基地にいる面々での護衛は行われるが…そもそもが鉄血の少ないルートを通る上にクレアとイーサンも相当な実力者であるため余り仰々しい護衛は付かない

せいぜい2、3人程度だ

「さて、ここからが忙しいぞ」

「あら、そうなのね」

「そりゃあな。クレアの代打は勿論いるんだが、それでも私の仕事が増えるのは確実…」
「その通りです。自覚しているようで何よりです、指揮官」

「いいっ!？」

今までそこにいなかった声が聞こえてくると、スカーレットはあからさまに嫌そうな反応を示してギギギ、と音がしそうな動きでそちらを向く

そこには軍服のようなものをカッチリと着込んだとても真面目そうな人形が…ジェリコがいた

「ジェ、ジェリコ…」

「忙しくなるのを自覚しているのなら早速仕事にかかりましょうか。処理しなければならぬ書類が山のようにありますからね」

「いや、まあ…ほら、初日だし？今日は少しくらい…」

「駄目です許しません。今すぐに取り掛かってもらいます、さあ指揮官…」

「兵法三十六計、逃げるに如かず!!」

「…やはりそう来ますか。しかし読めてますよ、指揮官。さて…」

ジェリコに苦手な仕事を大量にさせられる気配を感じたスカーレットは逃亡した

しかしその行動はジェリコには読めていたようで耳にかけたイヤープースのマイクをONにして

「現在基地に居る全戦術人形に緊急連絡！スカーレット・ミツチエル指揮官が仕事を放棄して逃亡、これより指揮官の確保作戦を開始する!! 動ける者は指揮官を発見次第報告及び確保せよ!!! 確保に成功した者には報酬として1日指揮官を好きに出来る権利を与える!!!」

その通信を行った瞬間基地内から凄まじい雄たけびが聞こえて様々な所で指揮官確保の為の準備を行う気配をひしひしと感じた

「ねえ、FN49…この基地って訓練は厳しいけど結構ユーモアあるわよね。書類仕事したくないからって逃げる指揮官なんて初めて見たわ。そしてそれを捕まえるために全力になる人形達もね」

「そうですね…色んな基地を見てきたわけではないんですけど、ここが異常なのは良く

「分かります」

「貴方達も参加するんですよ?早く準備して下さい」

「…マジ?」

「ええ…」

ジェリコの容赦ない言葉に尻込みしながらも、仕方なしに準備をし始める2人はこの後かなりの大騒動になることを予見出来ていなかった

緊急任務！指揮官を確保せよ！！ part 2

「こちらトンプソン、こつちには見当たらないぞ。そつちはどうだ？」

『ソーコムよ、こつちでも発見出来ないわ…やつぱりいざ敵に回すと厄介な相手ね、指揮官は』

『こちらナガンじゃ、あやつの痕跡を発見した。これからこの痕跡を追う』

「そいつは朗報だな。んでどっち方面にいと予測出来る？」

『さてな…あやつのことじゃ、攪乱の為にわざと残したことも考えられるしな。取り敢えずは第三格闘訓練場の方へ続いております』

「うげ、あそこかよ…あんな所に逃げ込まれちゃ指揮官の独壇場じゃねえか」

今現在この基地では書類仕事から逃亡したスカーレットを捕まえるため基地に所属する戦術人形ほぼ全員で指揮官確保作戦を遂行している

ほぼ全員というのはWA2000が副官であるために逃亡しているスカーレットの分まで書類を処理していたりDP28やマガルが医務室で治療の準備をしていたりなどの関係で作戦には加わっていないからだ

まあWA2000に関しては例えそうでなかったとしても下らないと一蹴して勝手

に訓練に励んでいただろうが…因みに現在WA2000はある意味仕事を押し付けていったスカーレットに対してキレており「戻ってきたら覚悟してなさい…!」と言っていたのかなんとか

一方痕跡を発見したM1895は途中で合流したUMP姉妹と共にそれを辿って第三格闘訓練場に侵入していた

ここはジャングルや崩壊した市街地など複雑怪奇な地形での戦闘を想定して作られた訓練場で、視界は悪く隠れるところは満載、上下にも気を張らなければならない場所でスカーレットが良く試験に挑む人形達を蹴落としている場所だ

そういった地形もそうなのだが、何よりも厄介なのは…

「ゆくぞ、2人とも…上と後ろには十二分に気をつけよ」

「ええ、分かっているわ…私もここで何度落とされたか分からないもの、このフィールドでの指揮官の恐ろしさは良く理解してるわ」

「本当だよね…シラット、だっけ?あの武術は強すぎるよ」

スカーレットが格闘において人形を圧倒する強さを持っているのは周知の事実だが、それは何も単純な力強さや反応速度といったものだけではない

とある人物によって世界中の武術の中から合うものを徹底的に仕込まれたスカーレットは数多の武術を使いこなし、その場で最も有効とされるものを選択して戦うこと

が出来る強さを持つている

その中でも凶悪なのがインドネシアで開発されたシラットと呼ばれる武術、これはジャングルファイトに特化した武術で木々や茂みを利用して上下左右に動き回って一撃で敵の命を奪い取ることを得意としている

スカーレットはこれを応用してジャングルだけではなく市街での戦闘でシラットを用い、敵を素手で一網打尽にすることすら出来るのだ

その複雑怪奇な動きは人形のみならず格闘をしつかり学んだ人間でも捉えるのが難しく、何とか抵抗して目が慣れてきたと思つたら今度は古式ムエタイ：所謂ムエボラーンでいきなり素直な動きをしてきて混乱した所を一撃で粉碎するという戦法をスカーレットは得意としており、この基地にいる試験を受けた人形は全員これに泣かされていく

そんなスカーレットにとっての得意フィールドに逃げ込まれたとなれば最大限警戒するのは当たり前であり、しかも未だ見たことのない隠し玉を持っていてもなんら可笑しくはないのだ

彼女達はダミーもフルで動員しており1対15という数の上では圧倒的に有利ではあるが、ここは入り組んでいるので数の利は活かしくい

その上相手は規格外の化け物：はてどうしたものかとM1895が考えていると

「っ!?早速来た、上方12時の方角!!」

UMP9の報告によってスカーレットがここにいることと攻撃が来ることを知ることが出来たがそれに反応しようとした時には既にUMP9のダミー2体が上から押し潰されて破壊されており、スカーレットは回し蹴りで固まっていた彼女達の態勢を崩したり吹き飛ばしてから跳躍で建物の2階の窓へと跳んでいく

「ええい、少しは加減せんかド阿呆!!」

「言ってる場合じゃないわ!あの窓は私が制圧しておくから警戒よろしく!!」

スカーレットが消えた窓から狙撃されないようUMP45が銃撃で牽制している間に2人は態勢を整えて周囲の警戒に当たっていた

「UMP9よ、警戒はワシがするからお主は通信で他の者にスカーレット発見の報告を入れてくれぬか」

「りよ、了解!」

UMP9に指示を出したナガンは銃撃をやめたUMP45と共に周囲の気配を探る無駄にリアリティを追求したこの訓練場は建造物もそうだが雑草や樹木などもあつてかなり気配を察しづらい

視界は勿論匂いすらやりようによつては誤魔化せてしまふし、スカーレットなら間違いないくそうして来るだろうという謎の信頼すらあつた

その後、通信の終わったUMP9と共に入り口付近で警戒をしていたが、あれ以来動きは見えない

そのまま暫く待機していると通信を聞いた79式、AK74-U、G17が駆け付けた

集まった面々を見てM1895は少し考えると

「UMP9とAK74-Uは入り口の死守を、ワシとUMP45、79式とG17のチームでそれぞれ搜索と確保へ動くぞ」

「あの指揮官様を相手に2人のチームアップで大丈夫なのでしょうか…いえ、ここでは狭くてあまり固まっていると逆に良いのにならぬということですね」

「そういうことじゃ。皆異論はないな?…よし、では行くぞ!」

即席でチームを作るとM1895とUMP45が建造物の内部を、79式とG17が外を中心に搜索を開始していく

建物内部を担当するM1895達はまず最初にスカーレットが消えていった建物に入ることにした

ダミーをフル活用して全方位を警戒しながら歩くUMP45に銃をCARポジションに構えてこれまた全方位を警戒しながら歩くM1895

まるで中世のバイク兵のように円になったまま慎重に進んでいく彼女らの姿は端か

ら見れば奇妙に映るだろう

しかし彼女達は一切の御巫戯けなしだ

例え一方向、否：例え1度の角度であつてもカバー出来ていない隙間があればスカーレットはそこを突いてくる

その為各方向の守りが薄くなることを承知でこうしているのだ

そのまま進んでいると曲がり角が見えた

そこで2人の警戒心は跳ね上がる：こういう曲がり角でのアンブツシユは基本中の基本な上にスカーレットなら何か予想出来ない手法で仕掛けてくるのではないかと

しかし進まない訳にはいかなないので仕方なく進み、角へ到達するとUMP45のダミーがチェストリグから閃光手榴弾を外してピンを抜く

そのまま角に背を付けて向こう側へ投げる

すると0.5秒後に今しがた投げた筈の手榴弾がこちらへポーンと戻ってきた

それを見た2人は即座に背を向けて目を腕で覆い、ダミーの手を使って耳を塞ぐ直後、手榴弾が炸裂し辺りを爆音と閃光で満たす

2人は1秒で視覚と聴覚を強引に正常に戻して角の方を見るが：そこに居たのはUMP45のダミーの一体を顔を掴んで壁に叩きつけているスカーレットの姿だった

見れば他のダミーは全て破壊されている

「相つ変わらず容赦のよの字も知らん奴じやな…」

「戦いの場にんなもんはねえからな。私を敵に回す以上、その程度の覚悟してるだろ？」

「まあね…それにしてもここまで一方的にやられるとはね、屈辱よ」

良く見ればスカレットは左脇にデザートイーグルを1挺持つているのみであり、それすら使った形跡はない

つまり今のところ素手でここまで良いようにやられているということだ

その事実には戦術人形としてのプライドが傷つけられるのを感じるのも無理はないだろう

「いくらお前らが元から戦いの為に作られ、更に私の試験をクリアしたとは言っても私とは経験に圧倒的な差がある。なんせ私が軍事訓練を受けたのが26年前だからな、その差を埋めるのはそう簡単なことじゃないさ」

「ということはお主は8歳の頃から訓練を受けておったということか…何があつたかは知らぬがそれならその強さにも納得出来よう」

「本当におつそろしいわね。敵なのが今だけで、それも殺しの関係じゃないのに心底安心するわ」

少し会話をしてみるがスカレットは話は終わりだと言うかのようにクラツシュハズをする2人へ向き直り、首をゴキツと鳴らす

「んで、どうするんだ? お前達にもうダメーはいねえ、降参でもしてみるか?」

「呵々、冗談きついで指揮官よ」

「そうよ、私達にそんな柔な訓練しなかったのは貴女でしょ?」

ここまで追い込まれても2人は諦めるどころか寧ろ闘志を燃やしているようにすら感じる

その様子にスカーレットは満足そうに頷き、顔を上げると

「良い闘志だ、それでこそ私が認めた兵士…やり甲斐があつて大変結構だぜえ!!!」

犬歯を剥き出しにし、野性味溢れる闘争心の塊な笑顔を浮かべて2人に向けて突進する

M1895はそれを横への跳躍で躲し、UMP45はローリングで避けた

「甘えんだよ、ダボが!」

「っ!!」

スカーレットはブレーキをかけると一瞬で突進の推進力を弱めてUMP45の方へと一足飛びで向かってきたかと思うと上から拳を叩き落す

UMP45はそれを化勁でなんとか逸らして顔の横に落とさせた

するとスカーレットの拳は床を抉り飛ばし、飛散した瓦礫がUMP45の頬に刺さって負傷する

だがそれでも顔を歪めることも視線をそつちに逸らすこともなく、即座にスカーレットの腹部へ向けて蹴りを放つ

同時に回避していたM1895による銃撃がスカーレットの脇へと放たれるが、それを予知していたかのようにスカーレットは勢い良く身体を落として銃弾を回避すると同時にUMP45の蹴りがまだ勢いに乗っていない時点で受け止める

そこでUMP45は頭突きを放つてスカーレットを怯ませようとするが同じことを考えていたのかスカーレットも同様の行動に出て来てUMP45の方が負けて怯んでしまう

「このっ石頭め……！」

「お褒めに預かりこうえ……っどー！」

そのまま首を噛み千切ろうとしてくるスカーレットにM1895の蹴りが襲い掛かるが直前で察知したスカーレットに避けられてしまう

だがこれでUMP45の上からスカーレットを退かすことに成功した

ここで態勢を立て直して……と思っているとさつきまで視線の先にいたスカーレットの姿がない

「しまっ……ア、ガ…………！」

特殊な体裁きで移動したことを悟らせずに接近する手法、縮地法が使われたことに気

付いた時にはM1895の腹にスカーレットの膝がめり込んでいた

そのまま勢い良く後ろに吹き飛ぶM1895、そこへ丁度戦闘音を聞いて駆け付けた79式が到着するも飛んできたM1895と共に壁に叩きつけられる

余りにも都合の良いすぎるタイミング、これがスカーレットの狙いだつたと気付いた時にはもう既に遅かった

UMP45はダミーも失い頬にコンクリートの欠片が刺さり、更に頭突きを喰らっている、M1895もダミーはなく先程の蹴りでダウン、79式も飛んできたM1895との衝突や壁に後頭部を打ち付けた衝撃で本体の意識が飛びかけている

唯一無事なのはG17のみ、これまでも戦闘を見て分かる通り、ダミーがフルに居るからといって何も安心は出来ない

当然全力で立ち向かうのだが味方の身体が転がり足場は良くなく、更にスカーレットがそれを利用して常に足元に誰かがいる状態を強要するような立ち回りをしてくる

その上時折破壊されたダミーや戦闘不能に陥った本体を投げたり蹴り飛ばしたりして攻撃と目晦ましを行ってくる

その戦い方に苦戦を強いられ、遂に4人全員が意識を手放すこととなった

最初M1895とUMP45は会話によって多少時間を稼いで戦闘中に79式達に来るように仕向けたが、それを完全にスカーレットに逆利用された形となり敗北した

一方で入り口組は

「…戦闘音が止んだ、どうやら決着が着いたみたいだね」

「うん、そうだね。ナガン達が勝つてればいいんだけど…」

「…正直、その望みは薄いよね。もしそうならあたし達の方に通信を入れるだろうし」

「そつかあ…じゃあ」

「ああ…」

2人はアイコンタクトを交わすとそれぞれ銃を構え直して周囲の警戒に当たる

建物の窓、木の上、屋上、木の後ろや建物の角の向こう e t c . . . とにかくあらゆる箇所を見ていく

しかしスカーレットの姿は見えない

暫く隠れて回復してから突貫してくるつもりだろうか…そう考えたその時、2人は真上から聞こえる音にハツとして見上げると

「……うそでしょ」

「これは、流石に予想外過ぎるよ…」

2人が見たもの、それは☒真上から壁を垂直に駆け下りて来るスカーレットの姿☒だ
流石に虚を突かれた2人はどうすることも出来ず、そのまま頭を掴まれて地面へと叩きつけられる

本体が意識を失ったことでダミー達の動きも大きく鈍り、こうなると最早スカーレットの敵ではない

程なくして全てのダミーは機能停止し、スカーレットは悠々と第三格闘訓練場から去るのであった

緊急任務！指揮官を確保せよ！！

part 3

第三格闘訓練場にてM1895達を撃破したスカーレットは次に向かうべき場所へ歩を進めていた

出来ることなら最初に来たかったのだが、今回の事態が起こる過程を考えるといきなりそこへ向かうのは悪手であると考えて後に回していたのだ

過去に培った隠密技術を総動員して誰にも見付かることなく順調に進み、遂に辿り着いた

入口には「F&M訓練所」と書かれている

ここは軍の基本戦術の1つであるファイア&ムーブメントの訓練が出来るように作られた棟で、3つある同様の訓練所の中でも最大規模を誇る

当然中には様々な銃火器が保管されており、端的に言えばスカーレットの狙いはそれである

因みにここへ来るのを遅らせたのは訓練中の人形達が出払うのを待ったためだ

細心の注意を払って付近に誰もいないことを確認したスカーレットは中へと侵入する

勿論勝手に中へ入れないようロック等が施されてはいるが彼女は指揮官である関係上マスターキーを持っているし、別段なくともハッキングやピッキングで入れば良いので問題にはならない

侵入したスカーレットは急いで、しかし音を一切立てることなくドアを閉めて施錠する

そして常に気配を探りつつ身を低くしながら移動を開始、特に何事もなく武器の保管庫へ辿り着いた

ここにもロックはかけられているが先の通り問題ない

保管庫内へ侵入したスカーレットとはとある区画へ歩を進め、そこに陳列されているガンロッカーから1挺のライフルを取り出した

AR-15クローンモデルの1つ、SR-47:SOCOMの要請を受けてナイツ・アーマメント社が開発した7.62×39mm弾を使用するAR-15という何とも奇妙なクローンモデルである

最大の特徴はAK47、及びAKMのマガジンがそのまま使える点だろう

流石にマニアックすぎてIOP社も戦術人形の烙印としての使用を検討していない

…否、存在すら知らないであろうこのモデルがどうしてこんな所にあるのか

それは単にスカーレットの趣味である

アメリカの特殊部隊にいた関係で1度だけこの銃を使ったことがあるのだが、その時に「これ面白いな」と思ったのを思い出して当時の記憶や記録を元にクレアとイーサンに作ってもらったのだ

しかし今スカーレットの手元にあるこの銃に装填されているのは本物の銃弾ではなく、超強力な鎮静剤入りのダーツ弾：早い話が麻酔弾である

ダミーならともかく流石に本体へ向けて実弾を仲間同士で撃ち合う訳にもいないため、この保管庫にあるのは全て麻酔弾かゴム弾、ビーンバック弾となっている

スカーレットが麻酔弾を選んだのは単にこれが一番手っ取り早く相手を鎮圧出来るからだ

この基地で独自に開発したこの麻酔弾はとにかく即効性に拘った造りになっており、刺さってから1秒足らずで対象を眠らせることが可能となっている

因みに後遺症はないが目覚めるまでに通常3時間ほどかかり、人形にも効果はあるが効果時間が30分ほどとある程度軽減される

とは言え30分でも十分すぎるので問題視はされていない

スカーレットは手に取ったSR-47の作動を確かめ、マガジンを差してチャージングハンドルを一番後ろまで引いて戻す

その後少しだけチャージングハンドルを引いて排莖口から中を覗いて弾がきちん

装填されているかの確認、所謂プレスチェックを行うとセーフティがかかっていることを確認して予備マガジンを4本取ってコートの内側に作られたマガジンポーチへと挿入する

もしもの為にと作っておいたものだがまさかこんな形で活躍することになるとは思っておらず、思わず笑いそうになるスカーレットだがすぐに意識を切り替えて次の得物を取りに行く

取
取
そうして来たのはHGのスペース、一帯をざっくりと見た彼女はそこから一つ手に

手の中にあるのはspringfield XDm：スプリングフィールド造兵廠がクロアチアのHS2000を元に開発したショートリコイル式セミオートハンドガンだ

これも使用するのは麻酔弾、しかしライフル用より比較的小さいため効果時間はさらに短くなる：まあこれも問題はない、起きるまでに事を終わらせれば良いだけなのだから

これも同様に作動確認、装填、プレスチェックを終わらせると予備マガジンを3本取り今度は腰のベルトに作られた簡易マガジンポーチに装着する

ズレて落ちないかを確認すると最後にこれまでの確認作業をもう一度繰り返す

そして完全に問題がないことを確認するとスカレットはこの訓練棟を後にする、その顔に子供が見たら100%泣きだすレベルの獰猛な笑みを浮かべながら…

「しつきかつんつはどっこかにやあ〜?」

「ちよつと、煩いわよIDW!騒ぐと先に捕捉されちゃうじゃない!!」

「そうは言っても私達に指揮官を見付けられるのかにや?ならさっさと見付けてもらって襲ってきたところを振り返りにする方がまだ可能性はあるのにや」

「…意外と考えてるのね、貴女。確かにそれはあるかもしれないわ、でも…」

「問題なのは不意打ちを仕掛けてくる指揮官を振り返りに出来るヴィジョンが見えないってところよにやあ…」

IDWとP7は警戒しながらも何処か陽気な雰囲気ですカレットを探していた

彼女達はスカレットの課す試験を突破出来ない、故に自分達に指揮官を見付けることは出来ないから逆に見付けてもらおうと決めたようだ

とは言え奇襲されたら彼女達に撃退する術はほぼない

スカレットはあれでも隠密特殊部隊が最終経歴だ、不意打ちや騙し討ちなどは大の得意だ

それでも他に方法がないので仕方なく、いや最早素でIDWが大声を上げながら歩いていると

「随分楽しそうだなあ、IDW。ご要望にお応えして出て来てやったぜ?」

彼女達の後ろから大胆不敵にも素直に姿を現したスカーレットの声が掛かる

瞬間、IDWは弾かれる様に振り返るとそのまま突進した

「作戦成功にやー!指揮官を捕まえて明日一日中遊んでもらうのにやあー!!」

「そいつは随分と楽しめそうで結構だ:でもそう易々と叶えてやんねえよ!!」

「ぶにゃっ!」

「ちよっ?!IDWのバカアアアアアア!!」

飛び掛かってきたIDWに対してスカーレットは軽く跳躍して顔面を踏みつけるとそのまま踏み台にして加速してP7に突撃する

突然の攻撃に慌てて銃を構えるも撃つ前にスカーレットの左手が銃口を抑えてスライドを少し後退させる

こうすると殆どのハンドガンは撃てなくなってしまう、P7はトリガーを引こうとしても引けないことに焦ってグリップの握りが甘いのかと思って意識がグリップに向かってしまう

その一瞬の隙を見逃すスカーレットではない、右手に持っていたXDmを首筋に押し

付けてトリガーを引いた

「うっ……そ、それってまさか……」

「こいつなら態々お前達を破壊しなくても済むからな……暫く眠つてろ」

急速に落ちていく意識に抵抗しようとするも、最初から抗えないように造られている麻酔のため無駄な努力だ

もし本気で抗うつもりならナイフで足を抉るなりしなければ無理だろう、余りにも急に重くなっていく身体と沈んでいく意識の中でP7はその機転を利かせることが出来なかつた

崩れゆくその身体を抱えて床との激突を止めると優しく下ろすスカーレット

試験を突破した者には更に厳しくすることで能力の限界突破を図る彼女だが、そうでない者には必要以上に厳しいことはせず比較的優しい一面もある

そうしてP7の身体を横たえたスカーレットは振り返り、未だ悶絶しているIDWを見据えてXDMを構える

「いつまでもそうしてるのも辛いだろ、さっさと楽にしてやる」

「その台詞、吐かれる方、は……こんなにも怖いものなんだにやあ……」

まるで最期の言葉のように聞こえるそれを聞き届けたスカーレットはトリガーを引く

銃口から飛び出た麻酔弾がIDWの首に刺さ…らなかつた

何処からか飛んできたゴム弾が麻酔弾を弾き飛ばしたのだ

「ひゅー！今のはかなり刺激的だねえ」

「今度はお前か、PA—15」

「良いから早く楽にしてくれにやあ…：頭が痛くて割れそうにや」

「このことだ、次は邪魔するなよPA—15」

「りよーかい、それが終わったら刺激的な戦いを頼むよ？」

「刺激くらい幾らでも与えてやるよつと」

今度は防がれることなく麻酔弾がIDWの首に刺さり、眠りに落ちるIDW

すやすやと眠るその顔はこんな時だと言うのにとても良い寝顔で身体を丸めて寝る様は正しく猫であった

それを確認したPA—15はにんまりと微笑むと

「もう待てないよ指揮官…さあ、私に刺激を与えておくれ!!」

「1人で挑むたあいい度胸だ…良いだろう、本当の刺激的な戦いつて奴を味合わせてやらあ!!」

PA—15、彼女は刺激を求める人形

その性格と本人の実力、努力を以てしてスカーレットの試験を突破した1人だ

どんな厳しい試験や任務でも「刺激があつて良いじゃない！」の一言で乗り切るその性質はこの基地と相性が良かったのかもしれない

そんな彼女は今、指揮官と逃げ場のない廊下で一对一でやりあうという彼女の性的には最も刺激を味わえる戦いを堪能する

所変わつて食堂、そこには3人の人形の姿があつた

「なるほど…それでボクを探していたんだね」

「ええ…余りにも唐突過ぎてどうしていいのか、流星に分からないのよ」

「そ、そうですよ…訓練はとつても厳しいですけど色々と自由に居心地の良い基地ですが、これはちよつと…」

困惑しきつた様子の子のモシン・ナガンとFN49、その2人に相談されているM200である

M200はふむ、と顎に手を当てて少し考えると2人に向き直つて

「なら、見学してみる？」

「見学?」

「うん、見学。実はこの作戦が発令された後、ミレニアム8の面々が何か話しててね…それを偶々聞いたんだけど、彼女達は1度ばらけて行動してから1か所に集まって指揮官をそこに追い込んで仕留めるみたいなんだ」

「…でもそれって、指揮官がそこに来なきゃ意味ないじゃない?」

「勿論そうだよ。だからこれは彼女達だけじゃなくて他にも協力している人形もいるよ」

「それは良いのですけれど…見学と言うのは?」

「だから彼女達が指揮官と戦う所を見てみないかいってことだよ。クレアさんはいないけど、ミレニアム8が互いに戦う所なんて中々見れるものじゃないしね」

「なるほどそういうこと…それは良い経験になりそうね」

M200の提案を聞いて納得するモシン・ナガンだが、その顔は結構呆れ気味であった

それもそうだろう、何処にここまで本気になって指揮官を捕らえる作戦を立てる基地があるというのか(ここにある)

FN49も一応の納得はしてその提案を聞き入れると3人はミレニアム8が待ち構える第五狙撃訓練場へと向かう

「ぐ、くう…やっぱり強いね、指揮官は。とっても刺激的で最高だよ」

「ハッ！てめえも中々に粘つてくれるじゃねえか…久々に火が付いちまったぜ」

PA—15とスカーレットの戦いは熾烈を極めていた

PA—15は総合的な実力こそMK・23やM1895に劣るが、2人と比べて圧倒的に勝る部分がある

それは、『耐久力』

彼女はいくら攻撃を受けてもそれを刺激的なものとして受け止め、攻撃性が増して寧ろ動きが良くなる

ある意味戦場に於いては致命的とも言えるスロースターターだが、今この場を含めた特殊な状況下ではこれ以上ないほど厄介な特性である

その特性が故に今スカーレットは珍しく苦戦していた

麻酔弾を撃ち込んでもそれはゴム弾で弾かれたり避けられる、更にピンチになるや否

やスキルを用いてスカーレットに眩暈を起こすと同時にゴム弾を撃ち込んでくる

それでも倒れることなく瞬時に回復して打撃を与えて来るスカーレットの方が恐ろしいかもしれないが…

「指揮官に火を付けた、か…これは誇ってもいいのかな?」

「ああ、存分に誇れ。私をここまで追い込む奴あ少ねえからな。この基地で言やあミレニアム8以外だとサブリナと一〇〇式くらいしかいねえ」

「おやおや、それは嬉しいねえ…さて、指揮官」

「ああ…決着を付けるか」

両者共々その顔に笑みを湛えて構える…犬歯が剥き出しになった獰猛極まりない笑みだが

その後合図も何もないにも関わらず同時に動いた

互いに突進しながらまずはP A—15がゴム弾を放つ

その弾は正確無比にスカーレットの額へと迫るが、彼女はそれを避ける素振りも見せずにわざと当たる

そのまま速度を落とすことなく両腕を振り上げ、全力で飛び膝蹴り放つ

顎を狙って繰り出されたその膝を位置的に避けることが叶わないと判断したP A—15はスキルを使用し、両手で受け止める

銃は仕方なく手放したが問題は無い、このまま怯んだスカーレットの鳩尾に貫手を放とうして……直後、後頭部に走る強烈な衝撃によって視界に火花が散って身体が前のめりに倒れそうになる

スカーレットは視界を完全に奪われてはいたが、自分の膝とP A—15の手、そして僅かに漏れた声から彼女の頭の位置を正確に掴んで振り上げていた両腕を振り下ろして両肘で後頭部へ打撃を加えたのだ

人間に放てば頭蓋を粉碎し、脳を押し潰すほどの威力によって流石にP A—15も刺激的だねなんて言えずに怯む

その僅かな隙を突いて止められていた膝に再度力を加えて顎を打ち抜くと、そこから更に足を延ばして連続で顎へ蹴りを入れる

「アガッ……」

完全に決め手を入れられたP A—15だが、すぐに意識を戻してかち上げられた頭を正面に戻してスカーレットを見据える

しかしそこにはスカーレットの姿は既になく、疑問に思う間もなくうなじに銃口が押し付けられる感触がした

「ハハハ……とつても、刺激的だったよ指揮官」

直後、小さな銃声と共にP A—15の身体は完全に倒れた

スカーレットは倒れた彼女の手に半身ともいえる銃を握らせてやるとそのまま一瞬でその場から姿を消す

PA-115を撃破したスカーレットはその後も様々な人形達を眠らせながら進み、狙撃棟へと向かっていた

流石にあの戦闘で多少なりとも消耗した彼女は遮蔽物や身を隠す場所の多いそこで回復を図ると同時に狙撃麻酔銃を入手して向かってくる人形達を返り討ちにしようと考えただ

しかしその狙撃棟唯一の出入り口となる場所に厄介な相手が堂々と立っていた

(AK-12とAN-94か…あいつらのことだ、私の考えを読んだんだろうな。だがそこに立ってるってことは中に誰かが待ち構えてる可能性は少し低い…ないわけじゃないが今は少しでも安全な方を選ぶべきだな)

AK—12とAN—94はスカーレットの試験を突破した中でも連携能力が異常に高いコンビだ

この2人を真正面から相手にするのは骨が折れる、奇襲一択だろう
しかし…

「ん…これは近くにいるわね。警戒しときなさい、AN—94」

「了解」

早速バレた

気配は完全に消しているし、とある理由から戦術人形のセンサーも回避出来るスカレットが姿を一切見せていないのに存在を察知出来るのはAK—12以外にはいない

これにはスカーレットも驚いて以前何故分かるのか聞いたことがあり、その時の答えは

『いくら気配を消してセンサーも回避した所で身体がそこにあることに変わりはないでしょ？それしたら空気の動きに変化が生じるのよ。だったらそこから計算して位置を割り出せばいいじゃない』

とのこと

気配を探ったり音を拾ったりして索敵する方法は教えたが、AK—12はそこから更に独自に空気の変化を感じ取る技量を会得したのだ

風の動きの変化を読むことはスカーレットにも出来るが、流石に無風状態では出来ない
い

これを聞いた時のスカーレットの心境は

『まるで師匠みたいなことしやがって…』

であつた

自分が規格外であることは認識しているが、そんな自分を遥かに飛び越えて来る人外の師匠を思い出して思わず苦い顔になったのは懐かしい記憶だ

それはともかく、まだ位置までは割り出せていない様子なので少し離れてから考える
今後のことを考えればあの場所への侵入は優先的に行いたい

だがあの2人を相手にしなければならぬし奇襲も成功するかどうかは分からない
さっきのPA-15は刺激を求めめる為なのかダミーを使わずに来たからなんとかなつたが、2人はきつちりダミーをフルで揃えている

しかも誰が本体か分からないよう攪乱しながら戦つてくるだろうから本体のみの撃破も厳しい、やるなら全員倒すつもりでいかなければならない

だが…

(このままここに隠れてても見付かるのは時間の問題だな。だったら腹括つてやるしかない。状況はこつちに不利…ハッ、燃えるじゃねえか。やつてやらあ)

2人の撃破を決めたスカーレットは呼吸を整え、行動を開始した

緊急任務! 指揮官を確保せよ!! part 4

「あつはつは、こりや参つたね」

「…良いのですか、AK―12。指揮官をここで食い止めるのが私たちの任務なのは」
「そうは言っても現状どうにも出来なくない?」

あれから数分後、スカーレットは☒空からの☒奇襲という常軌を逸した行動で見事2人の虚を突いて無力化することに成功した

まさかこの狙撃棟の壁を登った後に落ちながら麻醉弾をばら撒かれるとは流石に想定できなかつたよ とAK―12は語る

その結果本体こそ無事だったがダミーを全て眠らされてしまい、一瞬の動揺の隙を利用されて何も出来ずに拳と蹴りを叩き込まれた

そして怯んだところを投げられると同時に関節を極められたかと思うと地面に叩きつけられる頃にはナイロン製の結束バンドで拘束されていた

因みにAN―94は最初の乱射で麻醉弾を受けてこの時点で眠っていたのでAK―12が無線ハッキングで強制的に覚醒させたがそれをスカーレットは読んでいたのか速攻でAN―94も同じように拘束されてしまった

その後スカーレットは彼女達を再び眠らせることはせずに狙撃棟へと入っていったが、これは敢えて助けを呼ばせて自身の最も得意するフィールドで迎え撃つ為である。勿論2人ともそれは分かっているので助けを呼んだりはいししないしする必要もなかった。

「それにね、AN-94。私達の本来の役目はそれなりに善戦してから指揮官に負けて中へ通すことよ」

「なっ…!?聞いてませんよ、そんなこと!」

「そりや言わないわ、だって貴女良くも悪くも実直なんだから。搦手だって伝えて動かすよりもこうして本気でやらせた方が良い結果を出すことは分かっているしね」

「ま、善戦どころか何も出来ずにやられちゃったんだけどね」とAK-12は笑っているがAN-94は理解したものの少しだけ納得がいかない様子だ

「しかし、また何故そのようなことを?ここは指揮官にとって最大限力を発揮出来る場所だというのに…」

「だからこそ、よ。指揮官の向かう部屋がどこかは予想が付いてるでしょ?」

「ええ、第五狙撃訓練場であると思われませう」

「そうね。で、そこには指揮官とクレアを除いたミレニアム8と参謀のジェリコが待ち構えているわ」

「…典型的な待ち伏せですね。あの指揮官に通用するでしょうか」

「バレてても構わない、だってあの指揮官なら分かった上で突き進むでしょ」
「なるほど」

「それに道中には更に2人居て指揮官の足止めを行う手筈になってるわ。それで更に消耗させてから撃破しようって算段ね」

意外と単純な策だとAN-94は思ったがスカーレットが相手だと下手な搦手は意味を為さないことを思い出すとこれが最善であることを理解する

ことスカーレットを倒したければ策を弄するより単純に力で押し切る方が可能性は高い、何故ならどれだけ厭らしい罫を仕掛けようが関係ないとばかりにそれらを喰い破っていくしなんだったらそれを楽しんでいる節すらある

なので見え見えの策でも良いから真正面から潰すのが良い…とは言えそれも簡単なことではない、何故ならスカーレットはあんなのだからだ

「ま、今私達に出来るのはあの娘達の勝利を祈ってあげるくらいね」

「そうですね…ところでAK-12」

「なに？」

「お腹が空きました」

「…我慢なさい」

場にそぐわないAN-94の素っ頓狂な台詞に若干呆れつつも、こういう天然なところが面白くて良いんだけどね　とAK-12は少しだけ笑う

一方その頃スカーレットは

「ちい……！よりによつて厄介な奴らを配置してくれたもんだな!!」

「それは、誉め言葉として受け取って宜しいのでしょうか」

「ああ、掛け値なしの賞賛だ！受けとつときな」

「それはとつても光栄だね……とお!!」

そんなに広くない廊下にて一〇〇式とSPAS-12を相手に接近戦をしていた

ARはこの広さでは取り回し難さから十全に活用出来ないし、そもそも今現在の距離が離れていないため広さがあっても使わないだろう

そしてHGも使っていないがこれは何も距離とか取り回し云々ではなく、いくら麻醉弾を撃つても

「……ふんっ」

「よっほっ、と」

一〇〇式にはその手に持った日本刀で払い落とされSPAS-12は手の甲で叩き落したり直接掴んで投げ返してくる

……そう、この基地の一〇〇式は何故か銃ではなく日本刀を愛用しており服装もセー

ラー服ではなく常に巫女服だ

どうやらマインドマップと烙印にバグが生じているらしく銃を上手く扱えなくなっ
てしまったとのこと、だったら人間と同じように訓練しようかとも思ったが思い付き
で練習用の模造刀を渡したらそれを甚く気に入ってしまい、後に本物の日本刀を手に入
れてからはそれしか使わなくなった

更に日常では通常の一〇〇式と変わりないのだが、刀を持った時だけ声のトーンが
かなり変わるといふ謎の特性まで得てしまっている

因みに、流石にスカーレットも剣術には明るくなかったため一〇〇式への本格的な訓
練はスカーレットの師匠にあたる人物が行った

その結果一〇〇式流という独自の流派を編み出してしまふほどにのめり込んでいる
対してSPAS-12は元々かなりの怪力を発揮出来る人形なのでその強みを活か
すためボクシング、空手、ムエタイ、詠春拳、八極拳、心意六合拳etc.: 様々な武
術をスカーレット直々に仕込んだところ、こちらもそれら全てを混ぜ合わせた我流を開
発した

その実力はこの基地の人形では格闘戦において一番強いのではと言われるほどであ
り、スカーレットを真正面から殴り倒せる数少ない人形である

要するに弾幕を張るように連射するならともかく、この2人相手にHGでは幾ら撃と

うが当たりはしない

当てたければ完全に不意を突く以外に方法はないだろう

そんな2人と廊下で戦わなければならぬというのは正直言つて中々に苦しい状況だ

「来ないのならこちらから参りますよ。一〇〇式流『百花繚乱』」

さてどうしたものかと思案していると一〇〇式が技名を口にしながら刀を脇構えの位置にして縮地で接近してきた

こいついつの間私の技を盗んだんだと思う暇もなく左斬り上げがスカーレットの左脇を斬り裂かんと襲ってくる

それを右にステップしつつ上半身を床スレスレまで右に倒して避けるが、これまでの経験からこれで終わりではないのを知っているスカーレットは取り敢えず身体の位置を戻しつつ距離を離そうとする

しかしそれを許さないとばかりに常に一定の距離を保ちながら一〇〇式は斬り上げた勢いを一切殺すことなく寧ろ利用して刃を返すと浅い逆袈裟を放つ
相変わらずの操刃技術に舌打ちしつつもスカーレットはそれを躲す

だが一〇〇式の刀は一切止まることも勢いが衰えることもなく次々と高速で繰り出される

これが一〇〇式流『百花繚乱』、簡単に言ってしまうえば只の連続斬りだがその一刃一刃が全て一瞬毎に軌道を変えて来る上に速度もかなり早く、そして終わりが存在しない。これは避けようとすればその避ける動きに合わせて刃の軌道修正がなされ、結果として相手を細切れにするまで止まらないというかなり恐ろしい技である。

スカーレットが躲せているのは単に身体を逸らすだけではなく頻繁に拳や肘を鎧に打ち付けて強制的に外れるような軌道になるよう調整しているからだ。

また、一〇〇式は専用の道場風の訓練部屋で剣術の訓練を行っているが、運がよければ数時間に渡ってこの技を放つ一〇〇式の姿が見ることが可能らしい。

それは置いといて戦況を見ると、かなり珍しいことにスカーレットが防戦一方となっている様子だ。

だがそこは流石と言うべきかその目に焦りはなく、かなり冷静に機を窺っており、僅かでも隙を見せれば逆転するだろう。

一〇〇式もそれを分かっているので攻撃の手を緩めることなく拮抗状態が続く。

SPAS-12はというところの状況で下手に近付けば自分まで細切りにされるのでいつでもスイッチ出来るよう一〇〇式の後ろに一定の距離を保って待機している。

このまま同じ状況が続くかと思えたが、ここで変化が現れる。

(くっ、指揮官の攻撃で目釘の固定が…まさかこれを狙って?)

一〇〇式が声や表情にこそ出していないが刀の調子が悪くなったことに少し焦り始めた

そうスカーレットによる回避の為の行動に思われていた軌道逸らしの拳と肘は実は巧妙な攻撃だったのだ

一〇〇式に対するものではなく、一〇〇式の持つ刀に対しての攻撃

一〇〇式はスカーレットの拳や肘が防御、もしくは武器破壊が目的だと思っていたため、それらによつて刀に傷が付かないよう微妙に弛ませたりして衝撃を分散させることで防いでいた

しかし真の狙いはそこではない、そもそも一〇〇式の刀はこのご時世滅茶苦茶貴重な一品であるためスカーレットもそれを壊すなんてことはするつもりもない

それにもしそんなことをしたら態々この為だけにE.L.I.D.によつて崩壊した日本に赴いて無事な鍛冶工房を探して懇切丁寧に造った師匠に無言でキレられるだろう、それだけは勘弁願いたいものである

ではスカーレットの真意は何なのか、それは一〇〇式の心の声からも分かる通り刀身の固定を緩めてグラつかせることだ

日本刀は大きく分けると鞘、柄、刀身に分解出来る（無論細かく言えばもつともつともつと…もつとあるが割愛する）

そして刀身の下の方：茎なかじと呼ばれる部分を柄に入れて目釘と呼ばれる小さな棒を刺すことで固定するのだが、当然この固定は完璧なものではなく緩むこともある

使用するにつれて目釘が目減りしたり茎を入れる為に柄に開けられた穴の入り口が広がってしまうなど、様々な要因があるため銃と同じで日本刀も定期的な整備は必要だ
今回スカーレットが行ったのは刀身に不規則な力を伝えることで意図的に目釘を少しずつ抜いていくという手法、勿論こんなことは通常狙って出来るものではない

だがダメで元々、やってみたら意外と上手くいったと後日本人は語るが、それによって一〇〇式の刀は刀身の固定が緩んできている

このまま続ければ目釘が完全に抜けて刀身がすっぽ抜けるのは時間の問題だと判断した一〇〇式は刀を振りつつ右足の小指をクイツと上げる

それを見たSPAS-12は一〇〇式の意図を汲み取り距離を少し詰める

それから暫くした後に一〇〇式は前触れ無く斬り払いながら後方へとステップ、同時に一〇〇式の左からSPAS-12が躍り出て

「はあああああああ!!」

突進の推進力と思いつき腕を引いたことで生まれるストローク距離、腰の捻りなど
など今の自分に出来る全てを使って渾身の右ストレートを放つ

これにスカーレットは少しだけ驚いたものの対応して同じく右ストレートを放って

両者の拳同時がぶつかる

これ本当に拳のぶつかる音かと突っ込みたくなるような轟音が響いたかと思うとたたらを踏むスカーレットの姿がそこにはあった

「つうつ……まさか押し負けるとはなあ、腕を上げたじゃねえかサブリーナア!!」

「私だっついても食べてばかりじゃないんだからね!」

「なら私を捕まえたら何をさせるつもりか言ってみな!」

「指揮官の作る肉料理が食べたいから一日中作り続けて!!」

「流石に食い意地張りすぎだこのド阿呆が!!!」

SPAS—12のあんまりな要望に呆れて素で叫ぶスカーレットだが、食い意地という点では彼女もSPAS—12と大して変わりはない

この基地は皆食べる量がそれなりに多いがこの2人はその中でも断トツでだ、それはもう糧食班の民間人形がドン引きするレベルで食う

とは言え流石に一日中食いたいとはスカーレットも思わないが……余談はここまでにしておこう

現在彼女達は殴りあっていた

しかもその一手一手が攻撃と防御と回避の全てを内包しており、残像が見えるレベルの拳の応酬だというのにその殆どが相手に当たっていない

その間に後方へ下がった一〇〇式はその場で愛刀の様子を確かめて目釘を小さな木槌でトントンと打ち込んでいき、完全に入ったところで軽く振ってグラつきがないか確認する

きちんと修繕出来た愛刀を納刀すると腰を落として左手で鞘の上の方を持ち鯉口を斬る：要するに抜刀術の構えを取った

そのまま動かずじっと機を待つ一〇〇式、一方SPAS—12は徐々にスカーレットに押され始めていた

「くっ！なんか今日の指揮官いつもより速くない!？」

「良い機会だし皆の成長を確かめる意味も含めてちよいと全力な上に、ここまで来る間にもちつとばかしダメージは貰ってるんでなあ！」

「なんでそれでいつもより強くなるの!!!」

「手負いの獣が一番凶暴だって言うだろ?」

「やっぱ指揮官人間じゃなくて野生の肉食動物なんじゃないの!？」

「否定はしねえ!!」

「否定してよ、この化け物!!」

お互いに軽口を言い合っているがこれも殴り合いを続けながら行っている姿に一〇〇式は

(鉄筋造りの建造物を素手で破壊する貴女も大概化け物なのでは…)

そう思ったが口にはしない、そして装甲兵相手でも問答無用で斬り裂いていく一〇〇式も周りからは化け物と思われていることに気付いていない模様

それは兎も角じわじわと劣勢になっていくSPAS—12の姿にもう直ぐ自分達の戦いにも終焉が来ることを悟った一〇〇式は親指で鐳を押しして本格的に抜く準備をする

そしてその時はやって来る

「ダッシャアアアア!!」

「うぐうう!!」

SPAS—12が放った左ストレートに対してスカレットが両拳で手首の少し下辺りを全力で挟む…否、挟った

完全に腕が折れた痛みにSPAS—12が呻き、僅かに体勢が崩れる

「貰ったあああああ!!!」

「ア……………ガ……………」

その隙にスカレットの全力のアップアが顎へ完璧に決まり、宙を舞うSPAS—1

2

「一〇〇式流『一闪』」

その瞬間に一〇〇式の声が聞こえたかと思うとSPAS—12の足元から地面スレスレまで姿勢を低くした一〇〇式が走り抜けて来て一気に抜刀した

即座に後方への跳躍で躲すが、躲し切れずに僅かに右足を斬られるスカーレット、その間にも一〇〇式こちらへ接近して来て

「一〇〇式流『十二段突き』」

こいつ一段増やしやがったな!?!と叫ぶ暇はなく、目にも留まらぬ速度で放たれる12回連続の突きを捌くのに必死になる

最早一発にしか見えないそれを何とか捌き切ると今度はSPAS—12が一〇〇式の上から躍り出て来て沈墜勁を放ってくる

あれで沈んでなかったのは流石に想定外だがそれでも躲そうとするスカーレットの視界を血が塞ぐ

一〇〇式が刀に着いた血を飛ばして妨害をしてきたのだ

それによつて回避が僅かに遅れて掠つてしまい、それだけだと言うのに視界がブラツクアウトしそうな程の威力にてめえら私を殺すつもりじゃねえだろうなと叫びたくなくなるがその暇はない

一〇〇式が突き出す刀が腹を抉らんと迫つて来るのを躲そうとしたが、手を変えることにした

この2人の実力とこの連携を見たところ回避しても無駄だろうと思ったのだ
そしてスカーレットは迫って来る刀を両手で握り、止めた

「そんなっ!?!」

「でもこれはチャンス!!」

想定外の事態に顔を驚愕に染める一〇〇式だがSPAS—12の言う通りこれは
チャンスだ

なにせ今スカーレットは両手を使えない、となればSPAS—12の攻撃を避けるこ
とは叶わないだろう

であれば自分が今すべきは刀を押し込み続けてスカーレットの力と意識を少しでも
SPAS—12から逸らすことだと理解し、より一層力を込める

当然スカーレットは両手に更に力を込めてそれを押し留め、その隙を突いてSPAS
—12が軽く跳躍して脳天に肘を叩き落そうとした

しかしそれはスカーレットが上体を大きく後ろに仰け反らせたことよつて当初の
目標である頭ではなく胸に落ち、更に器用なことに今度は上体を横に傾けたかと思うと
そのまま足を床から離してその場で回転した

SPAS—12は目を見開くほどに驚き、怪我や攻撃方法故に途中で体勢を整えて反
応するのが難しい自分の現状を理解する頃には回転したスカーレットの脚に絡め取ら

れていた

「え、ちよ…オグツ!」

そのまま回転の勢いが乗った蹴りで床に叩きつけられると同時に上から頭を踏みつけられ、ならばと動かそうとした右腕がスカーレットの足によつて踏まれてこつちまで骨折させられる

拳を多用するSPAS—12にとつて両腕を折られた今、戦闘力は大幅に減少する
勿論足技も習得しているがやはり手技ほどの種類や練度があるわけではない

事実上無力化されたことに気付いたSPAS—12はそれでも諦めるものかと全身に力を入れてなんとか起き上がろうとする

「ハッ、良い根性してんじゃねえかサブリナ!」

「御陰様でね…!」

決して諦めず目的達成の為に尽力するその姿にスカーレットは嬉しそうに笑う

相変わらず犬歯が剥き出しではあるが…因みに一〇〇式はスカーレットに掴まれた刀をなんとか動かそうとしているがびくともしない

このままでは負ける、そう判断した一〇〇式は苦渋の決断で刀から手を離すと同時にスカーレットに接近して格闘を挑む

彼女は刀を失った時でも戦えるように無手での戦闘も出来るように訓練している

そのスタイルは腕を刀に見立てて剣術を無手で行うという異質なものでありながらかなり練度は高く、他の人形を格闘で圧倒することもしばしば

しかしそれでも剣術に比べれば見劣りするそれはことスカーレットを相手にするには分が悪いとしか言い様がない

刀が壊れないよう気を付けながら自分の後ろに落としたスカーレットは迫りくる一

〇〇式の腕を捕らえて投げ飛ばす

「あぐうっ！」

「これで終わりだ2人とも：前にも増して強くなつたな、かなり楽しかつたぜ」

自身の勝利の宣告と心からの賞賛の言葉を贈ったスカーレットはX D mで2人を眠らせる

その寝顔はどことなく満足気なものであった

その後一〇〇式の刀を拾い血を拭って鞘へと戻してから一〇〇式の手握らせてやるとSPAS—12の身体を腕がなるべく痛まないような姿勢にしてやるとスカーレットはその場を後にして目的地へ歩を進めた

第五狙撃訓練場、ミレニアム8の称号を背負うこの基地最強人形達の待ち構える決戦の場所へと

緊急任務! 指揮官を確保せよ!!

part 5

第五狙撃訓練場

そこはただっ広い円形のフィールドで、一階から六階まで吹き抜けにしている大規模すぎる訓練場である

フィールドの周囲を取り囲むように五階建てのビルが建っておりそれぞれが渡り廊下で繋がれているので移動が容易に行える

しかも各階にあるため何処から何処へ移動しているのかフィールドに居る方はほぼほぼ認識出来ない

狙撃訓練場ではあるが、どちらかと言うと狙撃する側よりもされる側にとっての訓練に向いた場所である

そこへ簡易治療を終えたスカーレットが現れる

そしてスカーレットは一度立ち止まると無言で中央まで歩を進める、すると…

「思った通り現れたわね、指揮官」

HK416の声が横から聞こえる

そちらを見るとビルの壁に背を預けている彼女がいた

「ああ、来てやったぜ。他にもいるんだろ？出てきな」

スカレットの言葉にそれぞれのビルからWA2000以外の人形達が姿を現した
彼女も結局はMK・23に「今すぐにでも仕返ししたくない？」と唆されてこの場に
来ているが狙撃するためビル内部に潜伏している

「やはり指揮官には分かるか…まあ隠すつもりもなかったが」

「そうよね。ねえ指揮官、何処で気付いたの？」

MG5とMK・23が口を開き、MK・23の疑問にスカレットは鼻で笑って答える

「ここに来るまでの廊下で一〇〇式とサブリナに会ったところだ。AK—12達が固めてたのもあれだが、やっぱりあいつらが決め手だな」

「なるほどな…ボス相手には浅すぎる策だったか？」

「いや、これで正解だぜトンプソン。こうも見え透いた罠だと私は寧ろ飛び込みたくなっちゃうからな」

『ええ、それを理解しているからこそその今回の作戦です。さて指揮官…覚悟していただきますよ？』

この場にはいないジェリコの声がマイクを通して聞こえる

上を見ると六階に設けられた観戦室にジェリコ、M200、FN49、モシン・ナガ

ンがいる

ジェリコ以外の三人がいるのは意外だが、その他の展開は概ねスカレットの予想通りだ

ジェリコはミレニアム8に数えられてはいないものの、この基地に於いて最も指揮能力に優れた人形、否存在だ

正直スカレットは自分よりも彼女の方が指揮官に向いているとすら思っており、もしも長期間基地を開けることがあれば間違いなくジェリコに指揮官代理を任せるだろう

そんな彼女はミレニアム8の参謀を務めており、メンバー全員が作戦に当たる時には彼女が後方で指揮を執る

戦闘能力こそミレニアム8に劣るがその頭の回転の速さや機転は全員から全幅の信頼を置かれるほどだ

つまりスカレットはこの基地の最高戦力ほぼ全員を相手に戦わなければならない、圧倒的に不利であることは明らかか…だと言うのに彼女の顔にはこれ以上ないほどに笑みが広がっていた

スカレットは楽しくて楽しくて仕方がないのだ、自分の鍛えた最高の兵士達が自分に挑もうとしているというこの状況が

限界まで吊り上げた口角から歯を覗かせてスカレットは嗤い、宣言する

「例えお前らが纏めてかかってもそう簡単に倒れちゃやらねえぜ？ さあ：始めようじゃねえか!!」

瞬間、スカレットからミレニアム8の面々ですら感じたことのないレベルの覇気が迸りその場にいる面々を突き抜ける

その覇気に全員が構えてMK・23とトンプソンとKSGが突撃、HK416とMG5が少し距離を開けたところから銃撃を開始する

彼女らの放つゴム弾は人形を避けてスカレットのみに当たる軌道で迫って来る

スカレットはそれを一切避けることなく同時に格闘を仕掛けてきた三人の攻撃に対応する

MK・23の掌底を左手の推手で逸らし、トンプソンの拳を右手で受け止める

この時点で両腕をクロスさせた状態となり、そこへKSGの飛び蹴りが頭へ向かってくる

スカレットはそれを上体を後ろに倒して避けるが、その後頭部へMK・23の膝蹴りが迫る

その膝蹴りの動きに合わせて上体を起こしていくと丁度KSGの畳んでいる膝に頭突きを当てた

「おっ……と」

KSGは空中で体勢を崩すが驚異的な身体能力で猫のように体をくねらせ、床に静かに着地する

その間にもMK・23とトンブソンが恐ろしい速度で攻撃を仕掛け続けているがスカーレットはその全てを捌いていく

HK416とMG5のゴム弾をその身に受けながら、だ

当たり所が悪ければ死ぬ危険性すらあるその弾を全身に浴びているというのにスカーレットは怯む気配すらない

これにはミレニアム8の面々も不思議に思うがだからと言って戦闘の手を緩めればそれだけで彼女に一瞬で状況をひっくり返されることを理解しているために余計な思考を放棄して戦う

唯一思考に時間を割くことが出来るのは身を隠しているWA2000とジェリコのみだ

(指揮官は常人とは比べ物にならないほど鍛えているとは言え、ゴム弾の斉射を受けて平気でいられるわけではないはず……何か絡繰りがありますね)

(いくら何でもあり得ないわ……何か隠してるとは思ってたけど、思ったよりも厄介なものだ。指揮官にはあるようね。そしてゴム弾が効かないってことは普通の打撃もまず効

かない、まあ彼女達もそれを分かっているからかさつきから容赦なく人体を破壊する攻撃を放つようになったけど)

接近戦を挑んだ三人の最初の一撃は一応スカーレットが万が一にも死んでしまわないよう心掛けた攻撃であったが、今はもうそんな遠慮は捨てている

トンブソンとK S Gがスカーレットの真正面に陣取って視界を塞ぎながら一撃必殺の技を連発し、M K・23が死角から関節を狙っていく

しかし興奮して戦闘力を最大限まで高めている今のスカーレットはそれすらをも凌ぐ

トンブソンとK S Gの拳や肘、膝は逸らしたり受け止めたり或いはそれに合わせて拳や蹴りを叩きつけて弾いていく

M K・23の関節技には彼女が身体に触れた瞬間全身に一気に力を入れて外に発勁を放ち弾き飛ばす

勿論その間にもゴム弾を全身に受けているが、全てスカーレットの身体に当たる瞬間に弾かれている

まずはこのゴム弾を防いでいる☒何か☒を破らない限りはダメージを与えられないだろう

しかしそれが何なのかが分からない、このままでは状況が動くのに時間がかかるし

どつちに傾くか分かったものではない

(ゴム弾を防いでいる☒何か☒ですが…あれで防いでいるのであれば何故彼女らの攻撃は避けているのでしょうか?あれが何でも完全に防御出来るものであるならば彼女達の攻撃に当たるのも無視して強引に自分の攻撃をねじ込めば良いでしょうに。それをしないということとは恐らくは不可能ということ…それは何故?パツと思いつくのは威力と遠距離か近距離かの違い。遠距離か近距離かで分かれる説はその違いを感知する仕組みが意味不明、よつて可能性は低い。となれば威力の方でしょうか…これにかけてみる価値はありそうですね)

ジェリコは割かし長考した後、彼女なりに答えを出してそこからどうしていくかを考える

そして出した結論は

『ワルサー、指揮官が彼女らの攻撃を防ごうとした時にその腕を狙い撃ち出来ますか?』
『澄ました顔してとんでもない注文付けてくるわね。まあ出来なくはないけど、その意図は?』

『指揮官のゴム弾を防いでいる☒何か☒なのですが、彼女達の攻撃をそれで防いでいないことから恐らく防ぐことの出来る威力に制限があるのでしよう』

『要するに指揮官の防御行動を妨害することですそれを破ろうつて魂胆ね』

『ええ、そうです。タイミング等はそちらに一任します、お願いできますか?』
『分かったわ、任せておきなさい』

その秘匿通信を終えたWA2000は一切の音を立てずに窓から戦場を見渡し、自分が取るべき狙撃地点を決める

丁度スカーレットの真後ろに位置する場所への移動を開始した

因みに今のジェリコとWA2000の通信はトンプソン達すら聞いていない

聞いていたのは本人達とジェリコの近くにいたM200、FN49、モシン・ナガン達だけである

これはトンプソン達が聞くことで動きに僅かにでも違いが出てしまえばスカーレットに勘付かれると判断したためだ

それは兎も角として慎重に、しかし素早く移動しているWA2000は狙撃地点に着くとまずは観察を開始した

自分の狙った通りスカーレットの完全に背後取っており、それでいて彼女の腕の動きが良く見える

そこから暫く観察して戦いの中で確立していく僅かな動きの偏りを見抜くとライフルを構えた

常人には動きを追うことすら不可能な速度で動く彼女達をしつかりと捉え、好機を待

つ

微動だにせずただ只管に待つ、待ち続ける

そして待ち続けていると、チャンスが訪れた

スカレットがKSGの攻撃を防ぐ為に拳で迎撃しようとしたのだが、KSGはそれを躲して肘を顔面に叩き込もうとする

当然スカレットもそれを避けようとするのだが、そのタイミングでMK・23が脚を捕らえようとするので仕方なく発勁を放つ

MK・23の関節技は外したがKSGの肘は顔を打ち抜かんと迫って来ている

それを躲すために顔を逸らそうとするのだが、そこにWA2000の狙撃が飛んできた

それを察したスカレットだが回避は間に合わない、しかし今まで通り防げるはずだと思っていた

事実、防げはした

だがWA2000が放ったのはゴム弾ではなく鉛のつづみ弾であった為に衝撃を完全に消すことは叶わず、スカレットの頭はKSGの肘の向かう先へと押されてしまう
そしてKSGの肘がクリーンヒットし、スカレットの頭は大きく後ろに飛ばされて
よるけた

その隙を見逃すほど甘い訓練を彼女らは受けていない、すぐさま全員がスカーレットへ攻撃を開始する

それらを捌こうとするのだが、よろめいたと同時に放たれたMK・23の蹴りが○
○式に斬られた傷を抉って激痛が走ると更に体勢は崩れる

そこへトンプソンが拳の連打をスカーレットの胴体に打ち付け、留めにアッパーを放つとこれまたクリーンヒット

だがトンプソンはそこで違和感を感じた

(なんだ、この感じ……イマイチ手応えがねえ上になんか薄い氷に罅が入ったみてえな感触……この氷というか膜みたいなもんがボスの身体への攻撃を防いでたのか)

トンプソンの読み通り、スカーレットの身体には薄い膜状の防御壁が張られており、それがゴム弾を防いでいたものの正体である

それがなんであるのかは……また後日語ろう

兎も角それに気づいたトンプソンは罅の入ったそれを壊すべく更に激しく攻撃を仕掛ける

「チイツ……クツソがあ!!!」

しかしそこは流石スカーレットと言うべきか、傷口を抉って来る激痛に耐えながら体勢を立て直して彼女らの攻撃に先程と同じように対応し始める

これにはトンプソン達も驚くが最早スカールレットは詰みの状態に近い、なんせ先程まで完全に防いでいたはずのゴム弾にすらダメージを負い始めているのだ

更に不規則に狙撃地点を変えてつづみ弾を撃ってくるWA2000の存在も厄介極まりなく、それでもここまで消耗して怪我もしてそこを扶られて基地の最高戦力6人相手の攻撃に未だに耐えているスカールレットの根性は凄まじいの一言である

そして遂にその時は来た

「やつと捕らえた!2人とも、今!!!」

「うおおおおおおお!!!」

「グアッ!ちつくししようが...!」

スカールレットの背後を取り続けたMK. 23がやつとこき関節を取ることに成功した

残念ながら本命の膝関節ではなく背中に飛びついて肩関節を取ることはなかったが、今はそれで充分だ

関節を極められて腕を動かせなくなったスカールレットはそれでも無理矢理動かそうとするが、それよりも早くトンプソンとKSGの拳が彼女の顔面を打ち抜いた

すると薄い水色の膜が氷のように割れ、空中に消えていく

『今がチャンスです、一気に行け!!!』

ジェリコのその言葉に言われるまでもないとばかりに全員がスカーレットに銃を乱射する

「がああああああああああ!!!」

無数のゴム弾とビーンバック弾に全身を打たれ、更には後頭部につづみ弾がぶつかれば流石のスカーレットも叫び声を上げる

しかしそれでも銃撃は止むことなく撃ち込まれ続ける

普通ならあり得ない光景だが、こうでもしないとスカーレットが止まらないことをこの場に居る全員が理解しているのだ

そして数分間に及んでたつぷりとゴム弾とビーンバック弾とつづみ弾を撃ち込まれたスカーレットはそれでも倒れず、しかし最早虫の息のようでなんとか立っているという状態だ

身体は大きく前傾し、肩で息をしている

正直ここまで追い込まれたスカーレットの姿を見るのは初めてだなとその場の全員の心が一つになった時

「ク、クククク…ハハハハハ」

「…流石に壊れたのかしら？」

「まあ…正直やりすぎた感はあるな。大丈夫か、しきか」

いきなり笑い出したスカーレットにHK416が呆れたように言う。MG5が少し心配そうに近寄る。

勿論何があっても対応出来るように一定以上の距離には近付かないつもりであったし、そもそも今のスカーレットの姿勢からではこの距離を詰めるのは不可能であると全員が思っていた。

しかしその予想を裏切りスカーレットは一瞬でMG5との距離を詰めるとその首を右手で掴んで締め上げる。

「ぐ、う……ガア……」

「っ!?何処にんな力が残ってんだ!!」

そのたった一瞬のことで意識を飛びそうになるMG5、しかしトンプソンの叫び声に銃声を隠すかのように放たれたつづみ弾がスカーレットの肘関節を内側から打って曲げる。

それによって多少とは言え余裕が出来たMG5は息を吸う間もなく同じ所に肘を上から叩き落して更に体勢を崩させるとスカーレットの顔面へ前蹴りを放つ。

避けるかと思われたそれを意外なことに真面に喰らったスカーレットは後ろに仰け反って数歩後退して……倒れた。

「ゲホッゲホッ……今度こそやったか?」

「手痛い反撃を喰らったわね…まさか彼処から動けるとは流石に予想外よ」

「全くだ…やつぱりボスは人間じゃねえな」

「実際1人でも欠けてたら負けた可能性もあるものね…」

「やつと倒れたスカーレットにその場にいる面々は少しだけ安堵の息を吐くが、警戒は怠らない」

「まだこれがブラフである可能性も否定は出来ないからだ」

「それを確かめる為にMK・23が慎重に近付き…そしてスカーレットの眉間を撃つ」

「軽く震えて被弾箇所から出血するが反射以外の反応は一切検知出来ない」

「これによって完全にスカーレットを倒せたことを確認、接近戦を挑んでいた3人とMG5はその場に座り込んで休憩する」

「それで…これ、どうするの?」

「どうするというのは?」

「医務室に運ぶのは勿論として、その後指揮官を確保した褒美を誰が受け取るのかよ」

「それに関しては皆さんそれぞれに権利を与えます。好きな時に1日指揮官を好きにして下さい」

「…容赦ないですね、ジェリコ」

「書類仕事から逃げた上にこんな大騒動にまでしたんです、妥当なところでしよう」

「ま、それもそうですね…」

その後トンプソンが肩に抱えて医務室へと運び、DP28とマガルによる麻酔を使わない治療が行われたことでスカーレットは目を覚ました

そしてその激痛に文句を言うがこれも罰だとジェリコに言われて致し方なくそれを受け入れる

こうして基地全体を巻き込んだスカーレットの逃亡事件は幕を閉じ、これは後に『指揮官大脱走事件』と呼称され半ば伝説のように語られることになるのだった

これは余談だが、後々今回のこれは意外と良い訓練になるということで稀に訓練の環境として似たようなことが行われるようになったという

療養中の指揮官と諜報部隊の暗躍

「んでボス、あの膜みたいなのは結局何だったんだ？」

ここは医務室

あの後意識を失ったスカーレットは当然ながら他にも彼女の攻撃で被害を受けた戦術人形達は何人かいるが、スカーレットだけは最奥に存在する特別治療室に入れられたため他の患者達は周囲にいない

しかしそこにいるのはスカーレットだけではなく医務室の責任者であるDP28、WA2000を除いたミレニアム8の面々がいた

WA2000は結局の所今のスカーレットは絶対安静を言い渡されてしまった為に1人で書類等を片付けなくてはいけなくなってしまったのだ

それを不憫に思ったのと責任の一端は自分にあるとしてジエリコが手伝っているためそこまで時間もかからずに終わるであろうが…

それはともかく今は意識を取り戻し、取り敢えずの治療が終わったスカーレットにトンプソンがあの☒何か☒が何であるのかを聞いているところだ

「ああ、あいつか…お前達に言っても仕方ないかもしれないねえが、あれはエーテルだ」

「エーテル？エーテルって私達の基地で通信とかに使ってるあれ？」

「そうだ。実はあれってただ単に通信の為だけに使うものじゃねえんだ。応用すりやあ色々と出来る」

エーテル

それはこの基地で主に通信に使用されているもの

その正体は月で生成され、無限に地球に降り注ぐ『どんなものにも成る』という性質を持った素粒子だ

かつては世界中で通信の為に使われていたのだがエーテルの持つ危険性が一般にも知られることとなり軍事利用されそうになったことで規制がかかった

それによつてエーテルを扱えるのは『マザークラスト』と『アースガイド』と呼ばれる組織のみとなり、この両組織も先のWW3で壊滅した為にエーテルの存在はこの世界からは忘れ去られてしまった

当然スカーレットがそんなものを知っているわけもなかったのだが師匠に当たる人物からその存在を教えられ、更にはその扱い方も仕込まれた

だからこそこの基地ではエーテルを用いているし、このエーテルこそがこの基地の情報に外に決して漏れることがない要因でもある

この基地におけるネットワークは今現在この世界で使われているものと繋がってこ

そのもの電子ではなくエーテルを用いているせいで普通の方法ではその存在を感じることすら出来ない

それはそうだろう、そもそもエーテルを自由自在に扱えるのはこの基地のみであり通常の物とは異なる素粒子を使用しているのだから

しかしそれだけだと困るので通常の電子を使ったネットワークも執務室など一部には存在しており本部や基地間との通信に用いられている

と、ここまで聞いただけでもエーテルの利便性は途轍もないものであることが分かるがこれだけではない

まずこの基地の人形達は通信にエーテルを使用しているので通常のジャミング装置ではそれを妨害することは出来ない

エーテル通信を妨害したければエーテルを使う以外に手はないのだ

そしてエーテルの最も優秀で、それでいて危険なもの：それが『具現能力』

エーテルは先ほどもいったように何にでも成れる性質を持っている

しかしだからと言って誰にでも出来るわけでもなければ自由自在にどんなものでも生み出せる便利なものではない

生成出来るものには制約があり、それに基づくものしか作れない

エーテルは人の『想い』に反応し、その想いの中でも強いものを具現させる能力を持

つ

この具現能力を自分の意志で使える者は限られており、今現在確認出来る中ではスカーレットとクレアの2名のみだ

そしてスカーレットはこの具現能力を使ってエーテルを身体中に纏うことで防御壁を展開していたのである

これはエーテルの具現能力の中でもかなり汎用的な使用方法であり、エーテルを扱う才能さえあれば誰にでも出来る

他にもエーテルを使用した索敵なども可能だ

そしてエーテルを使った具現能力に於いて才能に長け、厳しい訓練を乗り越えた者のみ扱える『具現武装』と呼ばれるものも存在する

これは自分の強い想いを元に特殊な武器を生成するもので、これで生成したものは通常のものとは比類無き力を発揮することが可能だ

ここまでの説明を聞いた人形達の反応は様々だが、共通して思うことはある
「それで、何故指揮官はこのことを隠していたのだ？」

そう、何故ミレニアム8達にすらこのエーテルの具現能力を隠していたのか
彼女達にならば明かしても良いのではないか、というのだ

それに対するスカーレットの答えは

「簡単な話だ。まずエーテルの存在が漏れる可能性を極力無くすためってのが1つ。2つ目にそもそもお前から自立人形にエーテルの具現能力を扱えるのかどうか、使用した場合の安全性とか諸々が分からないってことだ。これを確かめようものならお前から実験しなきゃならん、私がそういうことをさせたがると思うか？」

「…思えないわね。指揮官はなんだかんと言っただけで私達のこと気遣ってくれるもの」

スカレットは敵に対しては一切の容赦がないし尋問という名の拷問も平然として行ったりするが、味方に対しては基本的に優しい

そのためバックアップから復元できるとは言え人形達で実験するのは気が引けて今までこのことを話していなかったのだ

「なんつくか、ボスらしいっちゃらしいけどよ」

「そうですね…ですが情報の共有はしていただかないと困ります」

「それに関しちや済まねえ。さ、聞きたいことはそれだけか？」

「私はありません。皆さんは？」

「私も特にないな」

「あたしもねえぜ」

「ないわね」

「私もないわ、今の指揮官の説明で十分よ」

「よし、なら今日は臨時休業にすつからその旨を皆に伝えて来てくれ。流石に今の状態で訓練に励むのは無理だろうからな」

要件が終わったことを確認するとスカレットは今日の予定を崩すことを決定し、それを伝えることを頼む

皆もそれを了承し、医務室を出て行った

そんなミレニウム8とすれ違うようにM1895が入室してきた

彼女もスカレットの攻撃を受けてはいたもの、そのまでの負傷ではなかった為、マガルに軽く治療されただけで回復している

「どうじゃ、身体の調子は」

「特に問題はねえな、正直このまま鉄血共をぶつ飛ばしに行つても良いくらいだ」

「あらあ、それは聞き逃しならないわねえ。そんな悪い子にはこのお注射をしなきゃいけないかしらねえ」

「分かった私が悪かっただからおい待てやめろ、それ絶対真面目な注射じゃねえだろ」

スカレットの言葉にDP28がなんのアニメグッズだそれとは言うほどにデカすぎる注射を取り出して刺す素振りを見せた

その中にはたっぷりと何かの薬品が入っており、毒々しい紫色をしていた

流石にスカレットの顔が引きつり逃げようとする

しかしその身体は頑丈なゴムベルトでベッドに拘束されているため身じろぎする程度しか出来ない

ゆっくりと、しかし確実に近付いてくるその注射にスカーレットの顔が青ざめる

「怖がらせるのもそこまでしておかぬか。このままではワシの話が来らん」

「貴女にそう言われちゃ仕方ないわねえ…残念だわあ」

「神様仏様ナガン様、お話とはなんでございましょうか」

「ええい、お主も悪ノリするでない！話が進まんじやろうが!!」

M1895の突っ込みを笑うスカーレットとDP28

その様子に揶揄われたかと思うM1895だがそこに突っ込みを入れると話が進まないのですさつさと要件に入ることにした

「まったくお主らは…まあ良い、ワシが来たのは例の犯罪組織を潰す算段が付いたことを報告するためじゃ」

「要するに会議の内容が纏まりましたってことだな。あの状態で良く会議出来たもんだ」

「会議自体は既に終わっておったからな。報告しようとした矢先に事が起こったからどうしたものかと思っただぞ」

「そいつは…済まん」

「もう終わったことじゃ、気にしておらんし良い経験になったのじゃ」

阿々と笑うM1895にそりや良かったと安堵するスカーレット

ここでDP28がいるのに諜報部隊の話をしても良いのかと思われそうだが彼女も諜報部隊の一員なので問題はない

「んで、どうやって潰すつもりだ？」

「簡単に言えば警備の薄くなる時間帯に潜入、そこから各個撃破して頭を捕らえる。その後基地に連れてきて尋問するつもりじゃ」

「単純明快だな。尋問するときや呼べ」

「端からそのつもりじゃよ。その時は任せたぞ」

「おうー」

そんな明るく話す内容じゃないと思うのだけれど、とDP28は思うが口にはしない
彼女もスカーレットの尋問という名の拷問は何度も見ていて慣れていて、今更な話なのだ

そしてそんな明るい雰囲気から一変してM1895の顔が真面目なものになる
それを受けて2人の顔も一気に変わった

「して、ここからは不正確な情報なのじゃが…どうやらあの組織、グリフインのとある指揮官に繋がっておるらしい。それもかなりの大物のようじゃ」

「ああ？ちつ…んで、どいつだ？」

M1895がスカーレットに繋がっているとされる指揮官の名を耳打ちするとスカーレットは溜息を吐いた

「まったくあの野郎…しようがねえ奴だな」

「じゃが先ほども言った通り不正確なものじゃ。だから尋問の際にはせめてこの情報だけは喋れる程度に抑えるのじゃぞ」

「分かってらあ、私が加減を間違えたことなんてねえだろ」

「それは知っておるが…端から見てる方は結構心配になるのじゃよ、やりすぎて情報を引き出せないのではないかと」

取り敢えず話はそれで終わりじゃ、とM1895は言い残して医務室を去っていった。残されたスカーレットはベッドに倒れこむと思考を巡らせる

先程M1895から告げられた名前は本当に大物の名であった

スカーレットは一応指揮官として最前線で鉄血を屠っているが、グリフィンの指揮官の中でも最高位の1人であり『S地区総隊司令官』という肩書を持っている

大層な肩書ではあるがあまり意味はなく、要するにS地区の責任者となつて3ヶ月に1度の会議に参加しろというだけのものだ

この位にはスカーレット以外にも何人かいるのだが今しがた聞いたのはその内の1

人の名だ

聞きだした情報次第ではそいつを抹殺しなければならぬのだがその人物も他の地区を纏める総大将のような者、基地内に居る時に暗殺するのは少々骨が折れるだろう

となれば最低限の護衛しかつけない次の定例会議の際に殺すのが楽だ

しかしその為には当然だがクルーガーの許可が必要となるので前もって情報を渡さなければならぬ

ちつとばかり面倒だなあ、とごちるスカーレットだが取り敢えず面倒臭いことは後に考えるかと目を閉じて寝る

医務室を後にしたM1895は自室へ戻るとベッドの下に潜ってカーペットの一部を剥がし、そこにある液晶パネルに掌を付ける

すると認証を完了した電子音がなった後床が下に開き、M1895の身体が下へと落ちた

帽子を抑えながら自由落下するM1895はそろそろかと眩くと空中で体勢を整えて床に着地した

それからしばらく廊下のような道を歩いて扉を開くとそこには秘密作戦室と呼ばれる部屋があり、そこに諜報部隊のメンバーが既に待っていた

諜報部隊が動く度に全員が動くわけにもいかない為今ここにいるのも一部のメンバーだ

軽く見渡すとPPK、Px4ストーム、IDW、UMP姉妹、KS—23、RMB—93、そしてMDRがいる

今回は建物内での隠密殲滅作戦になるためMGはまずいないしARもMDRしか来ていない

SG達にもこの基地で改良に改良を重ねたSalvoサプレッサーの装着をさせなければいけない

「今回の任務は知つての通り以前から目を付けておつた犯罪組織の壊滅じゃ。本拠地にいるものは当然として各地の拠点に存在する者も1人たりとて逃がすな、頭以外は全員殺せ…出来るな？」

「当然ですわ、私達を誰と心得てますの？」

「マスターにあれだけ扱かれたからね。その程度出来なきやここの諜報部隊はやっていけないよ」

「良い返事じゃ、それでは今から各員が何処の拠点へと行くかを通達してゆくぞ」

メンバーの返事に頷いたM1895は担当を割り振ってからそれぞれにその拠点のマップデータを渡して細かいことを決めさせる

それが終わると全員を最初の位置へ座らせて締めを行う

「作戦の決行は今夜じゃ。あの指揮官のことじゃから明日にもなれば元気になつとるじゃろうしな」

「治療中の指揮官が勝手に来ないようにすることね、了解よ」

「でも指揮官だとそれすらも察して抜け出して来そうだよね」

「そうなたらそうなたで罰としてDP28に特性注射をさせればいいのにや」

「要するに、細かいことは気にせず全員ぶつ殺しやいいんだろ？」

「そんな単純な話ではないのだけれど。ま、貴女にはそれがお似合いかもね」

「あ？ どういう意味だこら」

「品がなくて野蠻つてことよ」

「ああん？ てめえ……」

「そこまでじゃ！ 作戦前にじゃれるのは止さぬか」

RM B—93とKS—23の言い合い、もといじゃれ合いはM1895の一声で止め

られその場は解散となった

そして時間は過ぎて深夜、それぞれ担当する犯罪組織の拠点へと到着した彼女達は作

戦を開始する

それが終わる頃にはこの建物は死体しか残らず、死臭の漂う死のビルへと変貌するで

諜報部隊の出撃

「皆の者、準備は良いか？」

『聞かれるまでもないわね』

『同じく、ばっちりだぜ』

『私達も大丈夫よ。早くやつちやいませよ？』

会議を終えた彼女達はそれぞれ持ち場となる拠点へと着いていた

頭のいる本拠地にはM1895、KS-23、MDRの3名が来ていた

とは言え今彼女達は同じ場所にいるわけではなく各々別の場所から侵入する手筈のため分かれて行動している

他の拠点でも同様だ

「よろしい。では時計合わせを行うぞ、各員用意せよ」

通信を聞いて問題がないことを聞いたM1895は時計合わせ：作戦を遂行する際の経過時間等を確実に認識するため全員の時計を同じ時間に合わせて同時に動かす作業へと入る

「皆0：00に合わせたな？ではゆくぞ。カウント、3：2：1：セット」

ナガンの言葉に合わせて全員が時計を作動させ、問題なく作動したことを報告する。その報告を聞いたM1895は軽く頷く。

「最終確認じゃ、各々装備品の確認をせよ。もし問題がある者がおれば報告するのじゃ」
更に最後の確認として銃やアタッチメント、弾薬やデバイス等の最終チェックに入る。それを終えた者が順番に報告をしていき、最後にMDRから問題なしの報告が入った。それを確認したM1895が作戦開始を告げる言葉を言う。

「よろしい。ではこれより作戦を開始する…念のため言っておくがこれから作戦が終わる迄の間通信を入れることは例外を除いて許さぬ。帰投地点にて合流するまで一言も発するな」

『『了解』』』

「よし…では行くぞ、状況開始」

M1895の一言で全員が行動を開始する

M1895もサプレッサーを装着した自身の銃を手に警備の立っていない扉に近付きまづは気配を探る

そして扉の向こうに誰もいないことを確認すると扉に手をかけて中へ入る

ここの外へと通じる扉は全て電子ロックが掛かっていたがそれは作戦開始直前にMDRによって解除されている

難なく侵入を果たしたM1895はそのまま一切の音を立てることなく廊下を進んで光の漏れている部屋の前へ着いた

扉に耳を当てて気配を探ると中には1人しかいないようだ

しかも扉には背を向けていて窓の外を見ていることが分かった

M1895は扉を開いて確認すると想定通りの光景であった

彼女は気配を完全に消してその男に近付いて行き、あと一歩というところまで迫ると男の後頭部に銃口を向けてトリガーを引く

減音された銃声が僅かに漏れるが他の部屋にいる者達に気付かれることはない

M1895が使用しているサブレッサーも、いやこの基地に属する実働部隊には全員改良が施されたこの基地オリジナルモデルの銃本体と弾薬、アタッチメントを所持している

その恩恵もあつて強化された弾が男の脳幹を破壊し、即死させた

この時用いた弾丸はJHP弾の為貫通することなく頭蓋内に留まる

力が抜けて倒れこむ男の身体を支えてゆっくり下ろすと懐からボトルを取り出して中に入っている溶液を少量振り掛ける

これで血とガンスモーク、それに脳漿の匂いを消臭して敵に気付かれないようにする一連の作業を手早く終えるとM1895は部屋を後にして更なる敵の排除に向かつ

一方その頃MDRは別の侵入口から侵入するとメインホールに来ていた

柱の陰に同化して気配を消して様子を窺うと用心棒と思しき黒服が15人程いた

(流石一流の犯罪組織だね)。ここまで固めてるとは思わなかったよ)

うーんと音を出さずに唸るMDR

自分の侵入経路から考えてここを通らなければならぬしどの道全員殺さなければならぬのだから後に回しても結局やらなければならないことに変わりはない

さてさてどうしますかねえと考えていたMDRだが最終的に最も単純な行動に出る

ことにした

(悩んでても仕方ないよね、声を発する前に全員の喉を撃ち抜けば良いだけだしそうしちやおっと)

割ととんでもないことを軽く決めるとMDRはセレクターを切り替えてセミオートにする

そして気配を探ると同時にほんの少しだけ顔を出して男達の位置を確認する

(ふむふむ……これならなんとかなるかな。よし、やっちゃおうぞ)

M D Rはまず1人だけ離れた位置にいる男に向けて発砲、弾丸はM D Rの狙い通りに喉を抉って突き抜けるがこちらにもJ H P弾のため貫通こそしたものの急速に速度を失って突き抜けた直後に落ちる

その弾頭が落ちる音に気付いた者が何人かそちらを見るがその時には既に3人の首が同じように撃ち抜かれていた

それを見て瞬時に対応する男達だが彼らが行動するよりも先にM D Rの放つ弾丸が次々と首を正確に撃ち抜いていき3秒後には15人全員が床に倒れ込んでいた

息が出来なくなっただけなので即死こそしないもののもう彼らには何かをするだけの力は残っていない

M D RはM 1 8 9 5と同様溶液を振りまいた後携帯を取り出すとそこで1枚自撮りをしてから暫くメインホール内で待機する

男達が倒れる音を聞いて誰かが来るかと思っただがどうやら杞憂のようで誰も来ることはなかった

それを確認したM D Rはそこを後にして廊下を進んでいく…

同じくK S—23も侵入を果たしており、既に5人程殺していた

しかし未だ銃を撃ってはいない

彼女が使うのはショットガンだ、幾らこの基地の技術力で改良が施されたSalvoサプレッサーとは言え減少させられる音には限度がある

このように閉塞空間では音が響きやすいため余り安易に撃つと銃声が聞かれてしまう恐れがあるのだ

その為彼女は今のところ銃をスリングで背中に背負っており両手にナイフを持ってビル内を歩いてた

(愛銃を撃てねえのはちよいと不満があるが、ナイフで直接刺し殺すのも趣があつて良いな…特に感触が伝わってくるのが堪らねえ…つと)

気配を感じたKS―23は廊下の角に身を隠す

するとその直後彼女が通ろうとしていた廊下に面する部屋の扉が開きMP5Kを持った男が出てくる

都合の良いことに男はKS―23のいる方に歩いてきているし気配を探った感じでは男の出てきた部屋に数人いるだけで他に人はいない

KS―23は男が来るのを今か今かと待ち、男が角に差し掛かった瞬間飛び出してまずは左手に持ったナイフを喉に突き刺して声を出せなくする

血管を避けて刃を通したために出血量は少ないがそれでも声帯を貫かれた男は苦し

そうに藻掻く

続げ様に右手のナイフを横に倒して肋骨の間を通して心臓に突き刺すKS—23

男は抵抗しようとしてなのか手をKS—23に伸ばそうとするが力が入らずに身体と共に床に崩れ落ちていく

その動きに合わせてKS—23も身体を落として左手のナイフに力を入れて男の身体が倒れないように保持する

男の目から生気が抜け落ちていくのをしつかりと見届けてからゆつくりとナイフを引き抜く

男の身体は少々の音を立てて床に倒れ、部屋の中に居た男達に僅かに聞き取られるがこれはKS—23の策略であった

彼女はナイフを腰のホルスターにしまうと自身の愛銃を構えて部屋の正面に回る

このビル内部の部屋の扉は全て内開きであることは確認済みなので堂々と真正面に陣取っている

「おい、なんのお—」

扉を開けて男が出てくるがその言葉が最後まで語られることはなく、バックショットによつて体内をぐちゃぐちゃにされて心臓と肺を潰された男は部屋を出る格好のまま前に倒れ込む

当然部屋の中にいた男達も気付くが声を出す前にKS―23の銃撃によって脳を破壊される

4人を一気に片付けたKS―23は素早くクリアリングをして他に敵性存在がないことを確認すると他と同じように溶液を撒いていく

他に銃声に気付いた敵もないようなので彼女はまた銃を背中に背負い直すとナイフを抜いて素早く移動する

(さて、今日はあと何人殺せるかな！)

その顔に獰猛な肉食獣の笑みを浮かべながら

(さて、これで粗方片付いたであろう。そろそろ頭のいる部屋に行くとするか)

あれから20人程射殺して最上階の1階下に来ていたM1895はリロードを行うと階段を登って最上階へ向かう

最新の注意を払って索敵するが気配が微塵も感じられない

不審に思ったM1895が廊下を覗くと10人程の男達が持っている銃を抜くこと

も叶わずに床に倒れ伏している光景が映った

(既に誰かが来た? いや、そんなはずはない…頭はワシが殺ると事前に決めておるし奴らはそれを破るほど愚かではない。であれば何故?... なんだか猛烈に嫌な予感がするのお)

自分のチームはここへ来てはいないはずだがかといって誰も来ていないという状況でないのは明らかである

その事実にいやいな予感を感じつつも頭のいるはずの部屋へと歩を進めてノブに手を掛ける

回す前に耳を付けて気配を探ると一人分の気配だけ感じ取れる

その事実更に更に嫌な予感を感じながらノブを回して扉を開けると1度廊下へと身を引く

なんの反応も起きないのを確認して自身の予感が当たっていることを確信したM1895は部屋へと入る

そこには思った通りの光景が広がっていた

「よお、遅かったじゃねえか。あんまりにも遅いもんだから一杯やって待ってたぜ」

「…なにを、しておるんじやお主は………」

心底呆れたという声を出すM1895

作戦終了まで一言も発するなど指示はしたがこればかりは仕方がないだろう、何故ならそこには頭が使っていたであろう椅子に座るスカーレットがいたのだから

しかも組織の頭は気絶させられ全身を縛られた上で机に寝転がされ、その上にスカーレットの伸ばした脚がドカツと置かれている

更には余裕そうに脚を組んでこの部屋の棚に置いてあつたウイスキーをそのままラッパ飲みしているではないか

周囲を見渡すと護衛であろう男達が倒れていて大半の者の頭が潰れている

頭が潰れていない者も身体がベコリと折れて胸から肋骨が突き出ていたり腕が千切れている者すらいる始末

それでいてあまり死臭がしないのはスカーレットもあの溶液を使ったのだろう

しかしいくら匂いがしないとはいえこの部屋は地獄絵図だ、こんな所で酒を飲んで気持ち良くなっているその精神に呆れを通り越して感心すら抱きそうになる

しかもスカーレットはそもそも医務室にて絶対安静の身のはず…帰つたらぶちギレたDP28に極太注射（Not意味深）をぶつ刺されることだろう

それを分かっているのかいないのか…

それはともかく最重要目標であつた組織の頭は捕らえることに成功しているならば取り敢えずこれを持ち帰って尋問にかけるべきだろう

「…はあ、まあ良い。取り敢えずそれを持って帰るぞ」

「ン…プハアツ！元よりそのつもりだ。さて、行くか」

スカールレットは脚を下ろして頭の身体を担ぐとM1895と共にビルを出て合流ポイントに向かう

そこには既に皆の姿があり、自分達が一番最後であったようだ

M1895と共に現れたスカールレットの姿に驚く者もいればやっぱりそうなたかと呆れる者と反応は様々であったが誰一人として怪我もなく任務を達成出来たようだ
「皆揃っておるな？ちよいとしたアクシデントはあったが任務完了じゃ、帰投するぞ」

M1895の号令で全員が基地へ向かうため車に乗り込んで走らせる

こうして今回の事件は1つの幕を降ろすのであった

帰投後、スカールレットがぶちギレたDP28によつて注射針を全身に打ち込まれたのは余談であろう

☆J I N ☆M O N ☆

男は見知らぬ場所で目を覚ました

身体は椅子らしきものに拘束されていて自由が効かない…部屋も暗くて鉄錆の匂いが充満していて酷く気分が悪い

「漸くお目覚めか、待たせやがって」

女の声が聞こえて来る

そちらを見やると紅い長髪を結んだ長身の女…スカーレットが近づいてくる

まだ意識が朦朧気ではあるがこれから何が行われるのか、瞬時に理解出来た

「ま、もう分かっているとと思うがこれからためえにちよつくら質問をしていく。原型を留めたまま死にたいなら素直に答えた方が良いぜ」

スカーレットの言葉に男の身体が僅かに震える

「よし、じゃあ早速一つ目の質問だ。お前が率いていた犯罪組織だが、他の所とも繋がりがああるよな？その繋がりについて全て話せ」

「…断る」

男が否定の言葉を口にした瞬間、スカーレットの顔が喜悦に歪む

「やれやれ、折角忠告してやったつてのにな…おい、MDR」

「あゝよ」

スカレットが誰かを呼ぶとその声に反応して新たな人物が現れる

彼女は戦術人形のMDR、この基地の諜報部隊の一員で普段は情報収集専門で動いている

そのMDRが来たのは良いのだがその手に持っているものが不穏すぎる

「よし、じゃあ始めるか。まずは指からだな」

スカレットはそう言うとMDRから錆ついたノコギリを受け取り、男の右手の親指に当てる

男の顔が恐怖に歪むがそれで止まるわけもなくスカレットはノコギリをゆつくりと引き始めた

「ぐう…!!」

男は必至に堪えているがその忍耐も最後まで持つことはないだろう

これはスカレットの尋問の始まりに過ぎないのだから

その後数十分に渡ってノコギリを引き続け、やっとこさ親指を完全に切り落とす
大量の血が流れて男の意識が朦朧とし始めるが暫くすると急にはつきりしだした
痛みも少し引いていて何事かと思っていると声が聞こえた

「これで治療完了よ。さ、次に行ってちょうだい」
「分かった、じゃあ続けるぜ？」

どうやらDP28が親指が切り落とされた手の治療をしていたようだ

なぜそんなことをしたのかと思うが今度は人差し指に鈍痛が走り始めたため思考をする余裕はなくなった

「なんで治療なんかしてるのかうって気になってるみたいだねえ。ねえ知りたい？ 知りたいよね？ じゃあ教えてあげちゃおっかなあ〜！」

男は何も言っていないがMDRは勝手に話し始める

「スナッフフィルムって知ってる？ 知ってるよね、あんたが扱ってた商品の1つだしさ。あれって子供を殺すけど長い時間苦しませ続ける為に治療を施しながらやるでしょ？ 要はそういうことさ」

つまりスカーレットの尋問は出血による死亡や意識の低迷、激痛による血圧低下などを防ぐ為にDP28による治療を施しながら行われると言うことだ

見れば男の肘付近には点滴針が刺さっておりその先には大容量の輸血パックがあるのが見える

それからノコギリによる指の切断とDP28による治療は数時間に渡って続いていき、両手の指が全て切り落とされる

「さて、なんか話す気になったか？」

「なに、も…ない…!」

「おーおー、強情だなあ。ま、その方が私達は楽しめるから良いんだけどな」

これ以上ない程に犬歯を見せつけた笑みのスカーレットは今度は手首を切り落としにかかった

だがその動きは今までのゆっくりとしたものではなく、非常に素早く切っていく

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

急にこれまでとは違う痛みに堪らず男は叫ぶ

だがその叫び声はここにいる面々を喜ばせる狂騒曲にしかならない

男にそんな余裕はないが顔を見れば3人共とても良い笑顔を浮かべている

「なあなあ指揮官、次は私にやらせてくれよ〜」

「なんだ、我慢出来なくなったか？両手首を切り落としたら変わってやるよ、好きにやりな!」

「やりに!」

不穏しか感じない会話を楽し気に行いながらもスカーレットはノコギリを動かしていく

やがて右手首を切り落とし、左手首を取り掛かる

男の絶叫が部屋に木霊する

それを聞きながら心地良さそうな目をしているMDRはそのままゆっくりと指を奥に奥に進めていく

やがて最奥に辿り着くと指で目を摘まんで思いつきり腕を引いた

「っ！！！！」

男の声にならない悲鳴が響く

男の左眼球を引き抜いたMDRはスカーレットに向き直る

「見てみて指揮官、綺麗に取れたよ！」

「おー、相変わらず傷一つ付けずに取るもんだな。んじゃあ今日の晩飯は目玉焼きだな」

「良いのかい!?!」

「ああ良いぜ。折角だし私が調理してやらあ」

「やりい！指揮官の作る人間目玉焼きは絶品なんだよねえ…じゃあもう一つも綺麗に取らなきゃだね」

ニコニコ笑顔のMDRが再度男に近付いてくる

そのタイミングでDP28による治療を終えた男は慌てて声をかける

「ま、待て…情報が欲し、いんだろ？何でも話す、だからこれ以上は…」

「とか言ってるけど…どうする、指揮官?」

「元々欲しいのは情報だ。目玉焼きはついだしーつありや十分だろ」
「ええ……はあ、分かったよ」

あからさまに残念がるMDRだが指揮官の言葉に逆らうことは出来ず下がり、代わりにスカレットが出てくる

「話す気になってくれてなによりだ。DP28、モルヒネを打ってやれ」

「はあい、分かったわ。えいっ」

DP28が男の首にモルヒネの入った注射を打ち、暫くすると男の様子が落ち着いていく

「はあ、はあ……それで、何を聞きたい？」

「さつきも言った通りでめえの組織と繋がりのある奴ら全員だ。特に乙地区総隊司令官殿との繋がりがなんかは綿密に聞きてえな」

「…既にそこまで知ってるのか」

「まあな……さ、話してもらうぞ。全部、な」

それから1時間かけて男が持つ情報を全て引き出したスカレットは部屋を後にするかのようになら離れていく

その様子に漸く終わったかと安堵した男であったが

「おい、MDR。後は好きなようにやっていいぞ」

「さっすが指揮官！分かってるねえ…じゃあまずはお待ちかねの右目を取ろうか」

「ま、待て…！話したら助けて…！」

「おいおい、何言ってるんだ？私はゲロったら解放してやるとか一言も言っちゃいねえぞ。喋ろうが喋るまいがてめえはここで死ぬんだよ」

その言葉に男は絶望する

見ればDP28もお役御免とばかりに荷物を纏めて部屋を出ようとしている

しかもスカレットが扉を開けて僅かに光の漏れる先へと声をかけると新たに2人の人形が現れた

PPKとKS—23だ

この2人は拷問処刑のスペシャリストとしてスカレットに様々な技を仕込まれて
いる

彼女らがここに来た以上男に希望は一欠けらも残されてはおらず、意識を保ったまま
苦しみぬいてゆつくりと殺されることだろう

男の子守唄が響き渡る尋問室を後にしたスカレットは一先ず血と匂いを落とすた
めにシャワー室へと向かう

「して、結果はどうであった？」

「おうナガンか。ま、良かったぜ」

「その様子だと知りたいことは聞き出せたようじゃな」

結果から言えばスカーレットは大満足であった

とは言え満足しているのは情報を聞き出したことに対してであってその情報そのものには苦々しい思いを抱く他なかった

そんなことを思いながらもスカーレットは服を脱いでシャワースペースへと入る

M1895はそんな彼女の思いを分かっているのか何も言わずに部屋の壁に背を預けている

それから暫くはシャワーの音だけが部屋を支配する

「…それで、例の指揮官についてはどうだったのじゃ？」

汚れも粗方落ちて来た時M1895からそんなことを聞かれる

それを聞いたスカーレットは思わず顔を顰める

「あいつの言うことを信じるなら事実みたいだな。色々と聞き出したからその情報を元にまた調査するつもりだ」

「なるほどのお…その情報を探るのは」

「隊長にやってもらうさ。そう何度もお前らが大大的に動く勘の良い奴らが察し始めちまう」

「それもそうじゃな。じゃあワシはあやつに連絡を――」

「その必要はありません」

何の前触れもなく2人しかいないはずのシャワー室に3人目の声が聞こえてくる。しかもその声はスカーレットの真後ろからしたものだから彼女の裏拳が放たれる。

しかしその声の主はゆらりと動いたかと思うといつの間にかスカーレットの後ろに位置取っていた。

まるで幽鬼のように揺らめいて捉えどころのない動きに存在感：彼女こそ諜報部隊の隊長にしてスカーレットとクレア、そしてM1895以外に存在していること自体知られていない最高の諜報員ウエルロッドである。

彼女の気配だけはスカーレットもクレアも察することが出来ないほどに完璧に消されておろスカーレットに不意打ちを囁ますことの出来る唯一の人形だ。

「その声はウエルロッドか：相変わらず神出鬼没がすぎるのお」

「それは良いんだが何故態々私がシャワー浴びてる所に侵入してくんだよ：」

「常に指揮官の傍にいながらバレない様にすることで1日中隠密の訓練が出来ますから」

「おい待て、お前まさか常日頃から私のこと」

「ええ、ずっと近くにいますよ。どんな時でも」

「…今日限りでやめろ、それ」

「え、しかし…」

「やめろ」

「…分かりました」

渋々と言った感じにウエルロッドがスカーレットの言葉に頷いた

しかしウエルロッドが離れていようが近くにいようが彼女の方から気配を露わにしない限りスカーレットでも気付けないので結果的にどうなるかは彼女のみぞ知る

「まあそれは良いとしてだ…ずっと近くに居たつつうことは私の言いたいことは分かるな？」

「ええ、Z地区総隊司令官の基地に潜入して事実確認をすれば良いのでしょうか？」

「そうだ。頼めるか？」

「お安い御用です。明日の朝指揮官の部屋に報告に上がります」

「ああ、頼んだ」

S地区から遠く離れたZ地区の、それもその地区を取りまとめる総大将とも言えるような大物の基地に潜入して情報を盗って来ると言うのに1日要らないという

ウエルロッドはそれを為せてしまう程に優秀なのだ

「では、行って参ります」

「おう、行ってこい」

「やれやれ……いつものことながら唐突が過ぎるのお」

その言葉を最後にウエルロッドの姿は掻き消え、気配も完全に消えた

余りにも一瞬の出来事でスカーレットですらどうやったのか分からない

あいつにだけは叶わねえな、スカーレットはそう眩くと汚れを落とすのを再開する

やがて完全に汚れを落としたスカーレットはシャワースペースを出て新しい服を身に着ける

さつきまで来ていた尋問用の作業服はいつの間にもやらウエルロッドが洗濯に持って行ったようでも何処にもなかった

その事に呆れば良いのか感謝すれば良いのか分からず曖昧な表情を浮かべるスカーレットであったが取り敢えず気にしないことにした

それから執務室へと戻ってWA2000と共に書類仕事を片付けていく

これからどうなるのか分からないが、平穏な生活はそう遠くない内に崩れるのだろうか
ことは確かだ

気を引き締めねえとな、そう思うスカーレットであった

一〇〇式の日

S09地区に存在する基地の1つ、スカレット指揮官が務めるこの基地は本社から『Hydrophobia』基地：狂犬病基地と呼ばれている

そう言われるのはこの基地と敵対した者は何であろうと殲滅されてきたことに起因する

グリフィンに所属している都合上主に鉄血を葬っていくのだがそれ以外にも様々な犯罪組織を壊滅させ、その構成員を一人残らず殺してきた

流石に鉄血ともなれば膨大な数があるので未だ殲滅には至っていないがそれでも一度拠点へと攻めればそこにいる鉄血は全滅、街などに攻撃を仕掛けてきた場合も事前に察知して人々に被害を出すことなく鉄血のみを殲滅する

この基地に襲われて生き残った者はただの1人も存在しない、だからこそ致死率がほぼ100%の狂犬病と呼ばれているのだ

これは日々とち狂った訓練にその身を投じ、常に切磋琢磨を続けているからこそなせることである

その為この基地は多種多様な訓練施設を有しているのだがその所為で基地の規模が

とんでもないことになってしまっている

巨大都市数個分に匹敵する敷地面積を誇りながらその8割を訓練設備が占めているのだ

その為ここには本部よりもずっと充実した訓練をすることが可能であり、本部を通して申請をすれば他の基地の者でも限定的ながらその訓練設備を使用することが可能となっている

また相手が望むのであればスカーレット本人が訓練を施すこともある

そんなことをしている所為なのか一部では『訓練馬鹿な基地』と言われることも

それだけ訓練設備にお金も吸われているわけだが、だからこそこの基地には独特過ぎる訓練室というのも存在している

その1つにこの基地の一〇〇式が使用し、殆ど彼女専用の部屋となっている通称『一〇〇式道場』と呼ばれている畳と木のフローリングの床、それと襖等々完全な日本の剣道場がある

掛け軸や刀掛けなどもあつてかなり本格的に造られているのが分かる

この部屋の主は当然一〇〇式、彼女以外に刀を扱う者がいないため一抹の寂しさを感じながらも今日もここで彼女は訓練に励む

マインドマップと烙印に重大なバグを抱えて銃を扱えない戦術人形、故にその手に持

つ刃で鉄血を斬り裂く剣士……今日はそんな一〇〇式の一日を見ていこう
「んう……」

スカーレット達が犯罪組織を壊滅させて戻つて来た日の朝、一〇〇式は早朝に目を覚
ますとまず身体を起こして思いつき伸びをする

「んん……っはあ……」

そうして暫くポケーっつとして頭が冴えるのを待つ

次第に頭が冴えてきた一〇〇式は布団から出て畳み始める

彼女の部屋は完全な和室であるので寝ているのもベッドではなく布団である

そのまま畳んだ布団を押し入れに仕舞うと次に着替え始める

寝巻として着ている襦袢を脱いでいつもの巫女服を身に纏つていく

最後に袴の帯をキュツと締めた一〇〇式は「よしっ！」と呟くと襦袢を箆笥に仕舞つ

て朝食を食べる為に食堂へと向かう

「お、一〇〇式先輩じゃん！これから朝食か？」

「タウルスさん、おはようございます。仰る通りこれから朝ごはんを食べに行くところ
です、良ければ一緒にどうですか？」

「元よりそのつもりで声をかけたんだ、是非一緒に行こう！」

「はい、では」

廊下を歩いている時にMT-9に声を掛けられ、朝食を一緒にすることにした一〇〇式は彼女と談笑をしながら食堂へと歩く

やがて食堂に着いた2人はかなりの量用意されている朝食メニューの中から自分が食べる分だけを取って席に向かう

その途中スカートとSPAS-12が本当に食べられるのかと言いたくなるほど山盛りの朝食をガツガツと食べている光景を目にするが、いつものことなので特に反応することなく空いている席に着く

一〇〇式は手を合わせて食前の儀式をしてからパンに手を伸ばす

MT-9も同じようにするが彼女は元々こういったことをする人形ではなかった

一〇〇式が行っているのを見てそれは何かと聞いたところ日本の文化ですよとその行為の意味などを教えてもらってから彼女もやるようになっていた

一〇〇式とMT-9はそれからも談笑しながら朝食を食べ進めていく

「そうだ一〇〇式先輩、今日の午後特訓の相手をお願いしても良いか?」

「今日の午後は…問題ありませんね、良いですよ」

「やうい! ありがとう!!」

MT-9は目を輝かせて一〇〇式に御礼を言い、その様子に一〇〇式も微笑む

MT-9は一〇〇式のことを先輩と呼び慕い、銃撃よりも格闘に力を入れて訓練して

いる人形だ

それには彼女がどのようなにしてこの基地に来たのかが関係している

このMT-9は元々この基地ではなく他の基地に所属していたのだが鉄血との交戦の末に仲間と離れてしまい、更に運の悪いことに通信機能が壊れてしまったが為に救難信号も出せずMIAとなってしまうた

それから何とか鉄血から逃れたのは良いものの、人形密売組織に発見されて連れ去られることを覚悟していた

しかしそこで所属していた基地からの要請を受けて搜索していたこの基地の一〇〇式によつてその現場を発見され、救助された

その時に銃ではなく手に持った刀で密売組織の面々を容易く斬り捨て、時には銃弾すら弾いてみせる一〇〇式に憧れた彼女はこの基地に…より正確にはこの一〇〇式の元で戦いたいと強い要望を出してそれが認められ、ここへやってきたのだ

とは言え流石に一〇〇式が使っている刀は相当に貴重なもので量産出来るようなものではない上に、試しに木刀を持たせてみたが全然扱えなかった為に泣く泣く剣術を習うのは諦めた

その代わりにスカーレットによつてカランビットナイフを用いたシラットを教えるもらい、着々と力を付けていった

この基地ではかなり珍しいシラットを使うことの出来る人形でありそれなりに強くはあるのだが、未だスカールレットの試験を突破することは出来ていない

それでもめげることなく「一〇〇式先輩と戦場で共に戦うんだ!!」と只管に努力を重ねる姿を一〇〇式は認めており、一〇〇式も一緒に戦いたいという想いから彼女に訓練をつけることがよくある

「それじゃあ先輩、昼飯の後に行くぜ!」

「はい、お待ちしていますよタウルスさん」

それから朝食を食べ終えた一〇〇式達は一度別れ、一〇〇式は道場へ向かう襖を開けて中に入ると真つ先に一番奥にある刀掛けへ向かって歩いていく

そしてそこに掛けられている一振りの刀を手にする

その瞬間一〇〇式の纏う雰囲気は女の子から修羅へと変わる

眼付きも鋭くなり別人と錯覚するほどだ

それからこの彼女は腰に刀を差してから道場の端に設置してある箆笥へと赴き、上から二段目を開けると中から桐の小箱を取り出した

箆笥を閉めた彼女はその後道場の真ん中まで歩いてそこで刀を腰から抜いてから正座する

「今日もよろしくお願いします、『桜花丸』」

そう声を発した一〇〇式は自身の愛刀を鞘から抜いて床に敷いた布の上に置く
そして桐の小箱を開けると中から整備道具を取り出して愛刀『桜花丸』の整備をして
いく

とは言え毎日のように整備しているのでそこまでやることはない、打ち粉や刀油は頻
繁に塗ると逆に良くないのだ

しつかりと桜花丸の調子を確認した彼女は整備を終わりにして分解した時と逆の順
序で組み上げていく

最後に柄巻をしつかりと巻くと確認がてら数度振る

キチンと出来ていることを確認出来た一〇〇式はその後修行を始める

自身の持つ技を一つ一つゆっくりと動作確認をしてそれから素早く放っていく

彼女の技は『一〇〇式が持つ一〇〇の秘技』と言われておりその名の通り相当な数の
技を持つ

中でも『百花繚乱』、『十二段突き』、一閃の強化版である『桜花一閃』、『朧月夜』など
が強力な技として認識されている

十二段突きは \square 今現在 \square 十二段だけであつて修行を続ける内にどんどんと数を増や
していくし、百花繚乱はシンプルに恐ろしい

桜花一閃は神速の抜刀術で例え刃に触れていなくとも極小規模の鎌鼬を発生させて

相手を斬り裂くので対象の硬度など関係ないし、朧月夜は流水のように捉えどころのない動きで相手を翻弄する

これらの技はスカーレットでも対応が難しく、技を出す前に仕留めたり彼女以上に素早い動きで翻弄するなど本気を出さなければ勝てないほどだ

それだけ強い一〇〇式が常に修行に励み更に技を昇華させていく姿はこの基地の面々に良い影響を与えており、触発された他の人形も自ら厳しい訓練に励む切っ掛けになつたりしている

更に近接戦闘の訓練がしたい人形が時折彼女に相手をお願いすることもある

そうして戦力的にもそれ以外でもこの基地にとつてかなり重要な存在である一〇〇式は今日も修行を怠らない

そうして数時間ほど技の確認をした一〇〇式は道場の中に用意された座敷へと移動すると予め用意しておいた握り飯を食べる

この時は刀を鞘ごと腰から抜いているのでホクホク笑顔で美味しそうに握り飯を食べている

それから暫く休憩していると襖が開かれ、MT-9が礼ををしてから入って来た「ようこそ、タウルスさん。早速始めますか?」

「ああ、お願いするよ一〇〇式先輩」

MT-9の返事を聞いた一〇〇式は一度桜花丸を刀掛けに置くと木刀を手にする
それに対してMT-9はカランビットナイフを右手に持って背を屈める

暫く睨み合っていた両者だが、先に動いたのはMT-9であった

一〇〇式に向かつてかなりの速度で突進してナイフを振るう

しかし一〇〇式はそれを容易く往なす

若干体勢を崩すMT-9だがすぐに立て直すとそのまま走り抜けて一〇〇式の周囲
を周り始める

それに対して一〇〇式は目を閉じて視覚以外の五感を高めて備える

そしてMT-9が完全な死角から攻撃を仕掛けるもそれは看破した一〇〇式に防が
れた上に腹部に木刀が叩き込まれ、そのまま振り抜くようにMT-9の身体を吹き飛ば
した

柱に叩きつけられて息が詰まるMT-9だが目はしっかりと一〇〇式を捉えている

彼女の視界の先には木刀を正眼に構えて最初の位置から殆ど動いていない一〇〇式
の姿が映る

一〇〇式は普段の快活で丁寧な言葉遣いからは想像も出来ないほど恐ろしいオーラ
を身に纏っていて思わず恐怖心が出てくる

相当に手加減はしているし、殺気を自分に向けて発していないのに身体が震え

るほど恐ろしい

そんな自分を抑えようとして：スカレットの言葉を思い出す

『怖い気持ちを抑えつけようとすんな、んなことしたって無駄だからな。怖いのは当たり前だ、なんたつてそれは生きる上で必要な感情なんだから。だからな、抑えつけるんじゃないくて利用しろ。恐怖心をセンサーとして活用して相手の攻撃：特に死角からのそれを避けるんだ。敢えて名前を付けるなら恐怖センサー、まんまだな』

その言葉を思い出したMT-9は自分が恐怖していることを素直に受け入れてその上でそれを利用してみることを考える

勿論いきなり出来ることではない、しかしこの場合はやってみることが重要だ

これは実戦ではなく訓練：となれば失敗を恐れずに何でも挑戦してみるべきだ

そんな彼女の雰囲気を感じ取ったのか一〇〇式が構えを正眼から下段に変更した

「行くぞ、先輩：うちの成長をしっかりと感じてくれ!!」

「ええ、来なさいタウルス。この目で見届けてあげます」

その言葉を皮切りにMT-9は一〇〇式に果敢に攻め込んでいった

「かーっ！ やっぱ先輩はつええなあ!! さっぱり勝てるビジョンが見えないや」

「でもタウルスさんも順調に成長していますよ！ 今日は今ままで一番手応えを感じましたから」

「ほ、ほんとに？」

「ええ、私が言うんです。自信を持って下さい」

数時間後、床に転がって肩で息をしているMT-9と息一つ切らしていない100式がいた

あれから何度も何度もMT-9は攻め続けていたがその全てが100式に防がれ、反撃を貰うばかり

それでも今までは一切避けることが出来なかった100式のカウンターを十回ほど避けることが出来ていた

それに100式は驚いたしMT-9の確かな成長を感じたので誉めた

その誉め言葉に多少半信半疑であったMT-9だが100式の断言にその言葉を信じて次第に笑みが広がっていく

「へへ、先輩がそう言うなら確かなんだよな…よっしゃああ!!」

「ふふ……さ、汗を流して休憩にしましょうか」

その後彼女達は共にシャワー室へと向かい汗を流し、休憩室に入るとそこでアイスを食べながら談笑をする

そして彼女達以外にも色々な人形がここに来ては同じようにアイスを食べながら雑談をする

そこで暫く時間を潰すと夕食の時間になったので皆で一緒に向かい、一緒にテーブルを囲んで夕食を食べる

それからお腹を休めてから大浴場に向かい、そこにいた別な人形達と談笑しながら湯浴みをする

そして部屋に戻った一〇〇式は襦袢に着替えると布団を敷き、寝る

これが一〇〇式のいつもの変わらない日常である

当然指令が下って戦場にその身を置き、敵を問答無用で斬り捨てていくのも日常だ
こうして彼女の1日は終わりを告げ、新たな日の光を迎える

UMP姉妹！

「ん〜…ンウ」

朝、いやまだ未明という時間帯：UMP45は微睡みの中にいた

少しだけ目が醒めて来てはいるがハッキリとはせず、ふわふわとどこか身体が浮いているような感覚：睡眠で一番気持ち良い状態で、彼女はこの感覚がとても好きだった

なのでもっとこの微睡みを堪能しようと枕に顔を押し付けようとして：ちよつとした違和感に気付く

「ウン？」

僅かに気配を感じる

身体に接触こそしていないがベッドの上に誰かいるようだ

その誰かはゆつくりと動いてUMP45に掛かっている布団を剥がしていく

その行為に頭が冴えて誰なのか分かった彼女は溜息を吐きたくなるのを我慢して何者かのしたいようにさせる

言い逃れの出来ない状況になるまで待つためだ

やがて布団を剥がし終えた何者かはゴクリと喉を鳴らすとUMP45のパジャマに

その手を掛けて…

「何を、してるのかしら9?」

「あ……おはよう45姉!」

パジャマのボタンに掛けていた手を掴んで顔を向けるとそこにはニッコニコ笑顔のUMP9がいた

部屋にはちゃんと電子ロックと複雑なアナログキーをかけていたはずなのだが彼女には通用しなかつたらしい

基本的に人畜無害で接しやすく、皆のムードメーカーであり任務遂行能力も高い非常に良い仲間であるのだが如何せん姉のことになると暴走気味になるのがこのUMP9という人形だ

こういうことは一度や二度ではなく何度も起こっておりその度にお灸を据えているのだが全く懲りる様子はない

寧ろ毎回工夫してどうにか達成しようとしてきて油断ならないくらいである

「もう朝だよ、一緒に朝ごはん食べに行こ45姉!」

「まだ未明よ9。それよりも今何をしようとしたのか教えてくれる?」

「可愛い45姉を愛でようと思っただけだよ!」

「そう、ありがと9。具体的にはどうするつもりだったのかしら」

「パジャマをはだけてあどけない寝顔をしてる45姉を撮って私のコレクションに加えるの」

「なるほどね…ねえ、9」

「なあと、45姉」

「覚悟！」

その瞬間UMP45は掴んでいた手を捻ってUMP9の態勢を崩し、拘束しようとした

今の位置や彼女の姿勢から鑑みてこれを避けることは不可能だと判断した上での行動だったのだが、UMP9は自分から身体を回転させて関節をかけられない様に逃げてみせた

ベッドの上で足場が不安定で四つん這いという迅速な動きに移るには不利な条件が揃っていないが、このような行動に出て逃げたことにUMP45は少し驚いたが、すぐに気持ちを切り替えて逃げたUMP9を捕まえるべく走り出す

「待ちなさい9！」

「そう言われて待ったことは人類史上一度もないよ、45姉！」

「それもそうね…なら全力で捕まえてあげる!!!」

「わひゃー！」

全速力で廊下を走り抜けるUMP9をUMP45も同じく全速力追いかける

「何を騒がしく…ぶにゃー!」

「何があつたのつてきやあぁ!!」

その騒がしさに起きて廊下へと身を出したIDWが哀れにもUMP9に蹴られてUMP45の方へ飛んでいく

跳んできたIDWをUMP45は回し受けの要領で後ろへと流し、結果としてIDWは騒ぎを聞きつけてやってきたP7にぶつかって一緒に廊下に転がって目を回すことになった

こうして時折被害者を出しながら2人の追いかけては続き、やがて食堂へと追い詰めた

「さあ、もう逃げ場はないわよ9…大人しく捕まりなさい!」

「ふふふ…出来るものならやってみると良いよ、45姉!」

追い詰められたというのに余裕の表情を崩さないUMP9にUMP45は油断することなく動きを観察する

どうやらこの場で決着を付ける心づもりらしく、戦闘態勢を取っている

それならばと自身も意識を切り替えて構えを取るとUMP9がニヤリと笑う

「そう…なつくちやね…行くよ45姉!」

「来なさい9！今日という今日は姉の実力を思い知らせてあげる！」

先に動いたのはUMP9だった

UMP45に向かつて突進して腕を突き出してくる

この姉妹は両者ともサブミッションを得意としているのでこういった当身は全て関節や投げへの繋ぎであると分かっているUMP45はその手を取って逆に投げ飛ばそうとする

しかしそれは妹に読まれており投げられながら腕を伸ばしてUMP45のパジャマの第一ボタンに手を掛ける

その意図に彼女は気付いたが時既に遅く、パジャマのボタンが1つ取れてしまう

「貴女ね……！」

「ふふふ……無垢な寝顔ではだけてる45姉は撮れなかったから公衆の面前ではだけて恥ずかしがってる45姉を撮ることにしたのだよ！」

「堂々と宣言することじゃないでしょ!!」

パジャマを閉じようにもボタンが完全に取れてしまっているためそれは叶わない

しかしこれで妹の狙いが自身のパジャマのボタンであると分かればそれを守りながら戦えば良いだけだ

UMP45は1度深呼吸をして心を落ち着けると改めて厄介な敵^妹を見据える

「次はこうはいかないわよ、9」

「お、本気モードだね？そうでなくっちゃね…本気になった45姉を脱がせることに意味があるもんね」

無茶苦茶なことを言っているがUMP9も表情が変わっている辺りお遊びはここまですと言ったところだろう

それからUMP姉妹による仁義なきパジャマ戦争が繰り広げられる

「ハア、ハア…中々やるわね、9」

「45姉こそ…やるね！」

数十分後、彼女達は少し息を切らせて互いに睨み合っていた

UMP45のパジャマは第二ボタンまで取られてしまつて少しデコルラインが見えているがまだまだセーフラインだろう

UMP9も想像以上に防御を固めた姉に対して攻めあぐねているようだ

「なに休憩してんだ、さっさとやれ〜！」

「そうだそうだ〜！」

「姉に賭ける人はこっち、妹に賭ける人はこっちだよ。さあ張った張った!!」

それなりの時間騒がしくしていた所為か既に食堂にはギャラリーが集まっており更にはどっちが勝つかで賭け事が始まった為にそれをスコープオンが仕切つてすらいるスカーレットもこの場に来ているのだが止めるどころか面白がつて囃し立てているそんな喧騒に構つてなどいられないUMP45は妹がかかつて来ない間に息を整える

暫く膠着状態が続いたが、何の前触れもなくUMP9が動いた

一直線に走つて来る妹に遂に来たかと身構えるUMP45

そして予想通り妹の腕が自身に迫つて来たのでそれを払いのけようとするもここで予想外のことが起きる

「えっ？」

「貰つたよー！」

なんと妹はUMP45に技を掛けずに左脚で蹴りを放つてきた

だがその軌道は非常に読みやすいものであったので自身の左脇の下に通して躲す

そのまま脚を取つて関節を極めようとしたUMP45だが、妹の予想外の行動は未だ続いていて

「はっ……っ……っ!!!」

妹は関節技を避けることなくそのまま膝を曲げて踵をUMP45の背中に優しく当

てた

無論それだけで終わることなくクイツと動かすのだが最初UMP45は意味が分からなかった

しかし胸の辺りに感じるスカスカとした感覚で何をされたのかを悟った彼女は急いで妹から離れて胸元を抑える

やはりと言うべきかそこにあるべきものが下に落ちようとしているのが分かる

「9、あんたねえ……!」

「おおー、照れながら怒ってる45姉も可愛い!」

「ほう…器用なもんだな、9。面白いそうだし私もそういう技開発してみるか」

「余計なことするな指揮官!!!」

UMP45の魂の叫びが迸ったところで何があったのかお話ししよう

UMP9は背中に回した踵でなんとUMP45のブラホックを外してしまったのだ

なんとも器用なものである、スカーレットが感心するのも当然だろう

なんせこの器用さは正しく活かせば非常に有力なものになるのだから

しかしそれを余計なことに使うのがこの基地のUMP9という人形であり、その被害に合うのは姉であるUMP45と相場が決まっている

そしてUMP45と言えば恥ずかしい思いはあるがブラを元通りに直すことは叶

わない

そんなことをしようものならその隙に妹に襲われてパジャマを脱がされてしまうだろう

かと言ってこのまま対峙するのも胸にある違和感やら羞恥心やらで真面に相手が出来るとは思えない

何故こんな下らないことで窮地に陥れられなきやならないのかと心底思うが今は目の前の妹に集中しなければやられる

「焦ってるね45姉…いつもの冷静さが嘘のようで凄く可愛いよ」

「あらありがと9、お礼ついでに少しそのまま動かないで居てくれると助かるのだけど」「ハッハッハ！私が大人しく出来ると思う？」

「…ま、そうよね」

UMP9は恐らくすぐにも動くだろう

いよいよ後がないUMP45、解決策を考えるもこの状況を打開できるものは浮かんでこない

一番マシなのはこのまま違和感を気にせずに戦うことだがやはり動き辛さがある以上妹と互角に戦うのは無理がある

はてどうしたものかと思っていると遂に妹が動き出した

「イツクヨー! 45姉!!!」

「くっ!」

「いい加減になさい、貴女達」

「へ?…うご!!!」

「あら416…助けてくれてありがとう」

「助けたつもりなんてないわよ。これ以上食堂で騒がしくされるのが嫌なだけ」

走っていたUMP9はやって来たHK416の肘を頭頂部に落とされ、一撃で沈んだ

若干首が埋まったような気もするが気のせいであろう

どうであれHK416はこういうバカ騒ぎがあまり好きではなく、余り追求すると怒

りの矛先が自分に向くことになるので誰も触れない

彼女と戦って勝てる者はミレニアム8の面々くらいであり、それでも勝率は五分五分

…試験突破組も彼女に勝てるほど助長することはない

それは試験を突破してこの基地でも指折りの実力者であるUMP9が抵抗の間もな

く一撃でやられたことを見れば分かるであろう

兎も角彼女の怒りに触れるのは御免被るとばかりに周囲にいた人形達も黙り込む

例外はスカーレットくらいのものである

「なんだ、もう終わりかよ…もうちつとやってくれりや面白いもんが見れたのに」

「お黙り、指揮官」

「お、なんだ？やるつてののか？」

「そうね…丁度食前の運動がしたかったところなのよ。表に出ましようか」

「良いぜ良いぜ…つとその前に」

なんだかこのままスカーレットとHK416の戦いが始まりそうな展開の中彼女はUMP45に近付く

「なあ45、てめえたかがブラが外れたぐらいで冷静さを欠いて真面に戦えなかつたよな？」

「う…そ、それは」

「言い訳は通用しねえぞ。お前は私の試験を突破してんだ、そんなお前がこの様じゃ周りに示しがつかねえ…分かるな？」

「出来れば、分かりたくなかつたわね…」

「よし良い子だ。んじゃ、昼飯の後に来い。たつぷりと扱いてやるからよ」

「うう…どうしてこんな目に」

どうやら彼女の昼は地獄になることが決定したようだ

今日の彼女がどうなるのかを察した面々は次々に敬礼を向ける…左手の敬礼を

そしてこの騒ぎを引き起こした張本人ということでUMP9も同様にHK416に

扱かれることが決定したことでUMP45の溜飲は少し下がるのであった

しかしそれでスカーレットによる地獄のような近接格闘訓練がなくなるわけではない：夕方頃、大浴場には死んだ魚のような眼をしたUMP姉妹が大の字になって浴槽にプカプカ浮いていたらしい

「いや〜今日は酷い目に遭ったね45姉!」

「いったい誰の所為だと：はあ、まあいいわ。それじゃあお休み9」

時刻は夜

今日一日で激しく疲れてしまったUMP45はそう言うとき自室へと入ってさっさと寝ようとする

しかし何故か妹まで一緒に入って来る

「：どうしたの9?」

「今日は一緒に寝ようよ、45姉」

「何かするつもりじゃないでしょうね」

「やだなあ、流石にもうそんな元気ないよ。」

「そ…なら良いわ、おいで」

「やったー！」

なんだかんだ言つて彼女も妹のことが好きで甘いのだ

2人はパジャマに着替えると一緒になつてベッドに入る

「へへへ…久しぶりの45姉との添い寝だあ」

「ほんと、こうしてれば可愛いだけの妹なのにね…」

「何か言つた、45姉？」

「何でもないわ。さ、もう寝ましょう」

「そうだね、お休み45姉！」

「ええ、お休みなさい9」

就寝の挨拶を交わした姉妹は共に目を瞑り眠りへと落ちていく

その最中妹は姉に抱き着き姉はそんな妹の髪を撫でる

これだけを見れば朝あんな騒ぎを引き起こした元凶と言うことを忘れそうなほどに
微笑ましい光景だ

やがて姉妹は意識を深く落としていき完全に眠る

その顔はとても穏やかで幸せとはなんなのかが一瞬で分かるものであつた

そして翌朝

「何を、してるのかしらね? 9は」

「あっ…おはよう45姉!」

　　またもやパジャマのボタンに手を掛けている妹の姿に呆れつつもお仕置きしなければならぬのでまた捕まえようとするも捕まらず、結局はHK416に見つかって姉妹仲良く襟首を引き摺られて彼女の特別訓練に連れていかれる光景が見られることとなった

ガンマニア&狙撃厨の本気：長距離狙撃の実態

S09H基地、S地区総隊指令基地には様々な訓練施設があることは既にご存じであると思われる

その中には頭が可笑しいのでは？と言いたくなるものも多々ある、例えば建物の中を建物をつち込んだ施設はまさに狂っていると云わざるを得ないだろう

そうした物に比べると見劣りする狂い方かもしれないがこの指揮官が伝説的なスナイパーであるからか狙撃訓練の施設に関しても狂ったものがある

滅茶苦茶に高性能な施設で「そこまでやるのか？」と言われたことも数え切れないのもそうなのだが、その中でも特に狂っている狙撃訓練施設が今回の舞台である第九狙撃訓練場だ

ここは長距離狙撃専門の施設で最大距離は4km、水平狙撃や撃ち上げに撃ち下ろしの角度を緻密に設定出来て風速や風向きはさることながらクロスウインドさえも調整することが可能で極めつけはコリオリの調整の関係でレンジが中心に存在して全方位に向かって撃てるようになってる

この施設へ入った人形達は決まって「…なにこれ？」という反応をすることになる

それはこの基地のライフル型の中でも長距離狙撃に於いて最も優秀な成績を残しており、この常連となっているM200も例外ではない

最近ではモシン・ナガンに訓練を施してここへ来る機会は減りつつある

だからかモシン・ナガンが休日でも訓練を休んでいる時には一日中ここに籠って撃ち続けている姿が見られるようになった

因みに彼女はモシン・ナガンを未だここへは連れて来ていない

理由は簡単で、まだここで訓練をするには早いと判断しているのだ

ここは長距離であればどんな条件でも設定出来る高性能すぎる施設ではあるのだが、だからこそ豊富な経験を得ていなければどう設定して良いのか分からず設備を活かすきれないのだ

一応ちゃんとプリセットとして砂漠や山岳、市街地に平原など既存の設定はあるのだが、それを使うだけでは勿体ないだろう

その為色々な経験を積ませてあらゆる状況に対応することの難しさを意識させ、それの克服に悩み始めてからここに連れて来て長距離狙撃の沼にはめるつもりである

そして今日は彼女の訓練は休み、という訳でここにはM200が朝から携帯保存食を持ち込んで長距離へ撃ち込み続けていた

休憩を挟みながら一時間程経った頃、新たな人形が訪れる

「今日も精が出るなM200」

「ん…？ああダネル。今日はモツシーの訓練が休みだからね、ちゃんと訓練しないと君に負けちゃうし」

声を掛けられたM200は電子式イヤーマフ、COMTACを耳から外してNTW—20に返事をする

NTW—20はその答えにお前らしいな、と返すと自身も訓練をする為に同じくCOMTACを付けるとバイポッドを展開してライフルを床に置く

そしてパネルを操作してプリセット設定を呼び出してから緻密な設定をし始め、最後に設定した条件の一部をランダム変化させる認証ボタンを押してライフルを構える

その様子を見たM200もCOMTACを被り直してパネルを見つめた

現在M200がやっている設定は完全ランダム、その名の通り毎回完全にランダムな設定がなされるものだ

先程は1000mで西に微風程度のものであったので彼女にとっては寝起きでも抜ける条件だった

次はどんな条件になるのか…そう思いながら待っているとパネルに条件が表示された

距離：2300m

風：射撃地点で真西に3 m h p、700 m地点で真東に5 m h p、1500 m地点で南東に4 m h p、2000 m地点で真西に7 m h p

角度：撃ち下ろし $\cos 30^\circ$ 。

気温：摂氏18℃

高度：2500 m

緯度：北緯50°。

これを見たM200はまあいけるでしょと心の中で呟いてプローン・サポータッド・ポジションを取り、スコープを覗く

まずは空気抵抗による弾道の落下の修正だ

だがこれはほほしなくても良いと言える、何故なら彼女が使っているスコープはこの基地オリジナル品でありスカーレットとクレアが作り上げたアホみたいに高性能なものであるからだ

スカーレットも愛用しているこのスコープはまず倍率が4〜50倍の無段階調整、射角調整が1000 m刻みで100 m〜1500 m、ナイトビジョンやサーマルビジョンへの切り替えがスコープ単体で可能なばかりかナイトビジョンでは光の増幅域の設定が、サーマルビジョンではモノクロ表示かカラー表示かの切り替えが容易に行える

レティクルはオーソドックスな十字型で風によるズレを調整するための目盛りはミルスケール、上下には1MOA単位の目盛りとミルドットがある

更に十字で区切られた四つの枠の内左上には170cm対象の、左下には150cmを対象にした100mと700m迄の簡易測距離用レティクルもある

無論フォーカスノブ、キルフラッシュ、A・C・Iも完備だ

ヴェインテージノブが従来エレベーションノブの位置に、エレベーションノブがヴェインテージノブの位置へ、倍率調整ノブがフォーカスノブの位置に来ており従来の倍率調整ノブの位置にはナイト・サーマルヴィジョンが付いていてフォーカスノブはヴェインテージノブの後方に新たなノブを追加してそこへ付属させている為慣れないと使い辛いが、慣れてさえしまえば従来の物よりも使い勝手の良いものとなっている

その上スコープに付いているボタンを押せばレーザーを飛ばして細かい距離測定も可能と、誰がそこまでしると言ったというレベルの性能を誇りつつ頑丈さにも拘っていて雑に扱っても壊れない：これ以上にならない程高性能すぎるスコープなのだ

どんな狙撃にも対応出来るスコープであるが欠点も存在する、上記の慣れないといけない点もそうだが他には値段

高性能にし過ぎたため一個辺り日本円で500万円相当する超高級品になってしまった

これがどれくらい高いのかと言うと、例えば今狙撃をしようとしているM200は最低でも100,655US\$：単純に100万円とすると、このスコープは銃本体の4倍以上の値段がするということだ

勿論この基地の彼女の銃も超緻密なカスタムがなされているためそれなりに値は張るがそれでも160万円ほどである

依然としてスコープの方が圧倒的に高い

一応このスコープも含めてこの基地で開発したアタツチメント類などは売りに出しておりそれなりの売り上げにはなっているがこのスコープが売れたことは今まで一度もない

理由は勿論高すぎるから

銃本体の何倍もするようなスコープなど普通は買おうと思わないしそもそも作ろうとすら思わないだろう：つと話が逸れたので戻そう

取り敢えず距離の調整だが目一杯スコープを倒して後は上に5目盛り分ズラせばOKだ：と言いたいところだが実は違う

何故ならこれはあくまでも水平に撃った場合の話で、今回は撃ち下ろしのため弾道はその分変化する

ではどうやって合わせれば良いのか、それは現在の位置で射手と目標が水平の位置関

係であった場合の距離…もっと分かりやすく言えば直角三角形の底辺の長さを求めることで可能となる

直角三角形における辺の長さは三角関数で求めることが可能だ、日本人であれば学校で一度は習ったであろう

$$\cos \theta \parallel \text{底辺 } a / \text{斜辺 } c$$

$$\text{底辺 } a \parallel \text{斜辺 } c \times \cos \theta$$

上記の計算式に条件を当てはめて計算すれば良い、よって今回の場合

$$\text{底辺 } a \parallel 2300 \text{ m} \times 0.87 (\cos 30^\circ)$$

$$2300 \times 0.87 \parallel 2000.1 \approx 2000$$

$$\text{底辺 } a \approx 2000$$

以上で地表面での距離が分かったためそれに合わせてスコープの縦方向の調整を要する必要がある

今回であれば上に3.1目盛りズラせばOKだ

次に風の調整

風は全ての場所で同じ方向同じ強さで吹いているわけではない、特に今回行うのは超長距離狙撃であるため複数地点の風の影響を考慮しなければならない

風の影響によるズレを直す計算式は以下の通りだ

射距離（1000m単位）×風速（mph）÷定数100＝修正値（MOA）

要するに距離と風速を掛けて10で割ればMOA値で出るということだ

しかし基本的にスコープの目盛りは『ミル』という単位であるためMOAをミルに換算しなければならぬ

その計算式は以下の通り

1ミル \parallel 3.6MOA

aMOA \div 3.6 \parallel bミル

つまりMOA値を3.6で割れば良い

700m付近までの狙撃であれば射撃地点の風さえ考慮すれば大体OKだが今回は4つの風を計算しなければならない

そういう場合はそれぞれの風の修正値の和を求めれば良い

具体的に見ていこう

射撃地点の風は真西に3mph

700m地点で真東に5mph

1500m地点で南東に4mph…この場合2で割って真東から2mphと仮定す

る

2000m地点で真西に7mph

全てを合わせると真西に3 mphとなる

これを上の計算式に当てはめる

$$23 (2300 \text{ m}) \times 3 \text{ mph} \div \text{定数} 10 \parallel 6.9 \text{ MOA}$$

$$6.9 \text{ MOA} \div 3.6 \parallel 1.916666666666667 \doteq 1.9 \text{ ミル}$$

以上で風の影響によるズレの計算は終わりである

計算した結果は西に1.9ミルのズレ、今現在M200は真南を向いているので左に1.9ミル分スコープをずらせばOKだ

次に摂氏によるズレを考えよう

射撃において空気抵抗というものは非常に重要なのだがそれに関係してくるのが『空気の密度』である

気温が上昇すれば空気は密度が薄くなり、下降すれば空気密度は濃くなる

要するに気温の高いところでは空気抵抗が減って弾頭の落下は緩くなり気温の低いところでは弾頭の落下が激しくなる、ということだ

具体的に言うところだと摂氏11.1℃上昇すると300ヤード(約274m)で1MOA、700ヤード(約640m)で1.5MOA、1100ヤード(約1006m)で2MOA上にズレる

昼夜の寒暖差が激しい砂漠地帯や天候の移り変わりによる気温の変化が起きやすい

山岳、また四季による気温の変化のある日本などでは十全に気を払う必要がある

とは言え今回は摂氏18℃でありそれなりに標準的な範囲であるためそこまで考慮しなくても良いだろう

これはどちらかと言うと同じ場所でも気温によって弾道が変化するから気を付けろ、というものである

続いては高度だ

気温と同じく高度が高ければ高い程空気密度は薄くなる

これは言い換えれば高地に行けば行く程射程距離が延びるということでもある

標高5000フィート(約1524m)の上昇で1MOA分上にズレると考えて良い

今回は2500mであるため約8202フィートだ

その差は約1.64倍：というわけでズレも1.64倍出ると考えよう

事前調整より1.64MOA分着弾点が上昇すると考え、スコープのその分だけ下にズらす

そして緯度の考慮

これはコリオリによるズレを直す場合に考えなければならぬことだ

地球は自転しておりその速度はとんでもないものであるが地球そのものが大きいため角速度は小さい

地球は球体をしているため当然緯度によって角速度…というよりも物体の移動速度は変化してくる

その為今現在いる場所が緯度何°Cなのかを考慮して計算しなければならぬ
更に何秒後に着弾するかも影響してくるためそれらの全てを入れると…この場合東に3mズレることになる

先の通り現在M200は真南を向いているため東に3mは対象が左に3m動くということだ

そのことを考慮してスコープを左にほんの僅かズらす

ここまで言っておいてなんだがハッキリ言っておいてコリオリの力はそんなに考慮するべきことではない

確かに今回のような超長距離狙撃の場合はズレが出るがそれでも誤差のようなもの、コリオリを気にするくらいならもつと他の要素を気に掛けるべきである

最後に偏流

弾丸は一部を除いて時計回りに回転しながら飛翔する、これは銃身に掘られたライフリングによって弾頭に螺旋状の回転が加わるのが原因だ

これによってジャイロ効果を得て弾頭をより真つすぐ飛ばすことが可能になった
ジャイロ効果とは簡単に言ってしまうえば独楽だ

独楽は回転している時だけ安定して真つすぐに立つが、回転の勢いがなくなると倒れる、つまり回転している物体はそれだけ安定して真つすぐになるとうするということがある

これを銃弾に起こさせることで射程距離と精度を高くすることに成功したが、だからこそ考慮に入れなければならないことがある

それは回転していることによつて弾頭付近の空気の流れの変化とジャイロ効果の副作用によつて弾道が右方向にズレることだ

とは言え回転していなければどの方向にズレるか分からないためズレを右方向に限定出来たのは寧ろありがたいことである

これも距離と空気密度によつて変化するためそれぞれを考慮に入れてズレを見極める必要がある

今回の条件に於いては2ミル分ズレるためスコープをその分だけ左にズらす

これで全てのズレを考慮した狙いが整った

M200は上げたままのボルトハンドルを降ろし、引き金を引く

高性能サプレッサーによつて軽減された銃声が轟き、銃弾が飛翔する

3・6秒後、M200の放った銃弾はターゲットに着弾し、彼女もそれをスコープ越しに確認する

それでも彼女は喜びの感情を見せることはない、何故なら彼女にとってこの程度普通に出ることだからだ

膨大な経験と蓄積されたデータは人形の利点を活かして客観的事実として完璧に記憶していられるため素早く正確な狙撃も人間より簡単に行える

実際これほどの修正を彼女はたったの数秒で行っている

とは言えその数秒間で風などの数値は変化することも十分にあるため彼女でも狙撃に失敗することは勿論ある

それを考えれば人間でありながら彼女以上の精度と速度で狙撃を行うスカーレットが如何に化け物であるかが分かるだろう

スカーレットの最長狙撃記録は2817m：M200でもこの施設での狙撃であれば可能だが実際の戦場でそれが出来るかと聞かれれば自信はない

この施設はかなり実際の戦場に近づけて訓練が出来るのだがそれでもやはり違いはある

先程の数秒間で風の影響が変化してしまう点もそうだしターゲットの動きだってA1によって統制された訓練用のダミーと実際の敵では違う：と言うより予想を裏切ることが多い

特に人間は唐突に謎な動きをすることもあるし虫の知らせを受け取って瞬時に回避

行動を取ることもしばしば

その上スカーレットの上記の記録は夜間での狙撃だ、明るい昼ですら至難の業であるのに夜間ともなればその難度は跳ね上がる

そんなスカーレットに追いつき、いずれは追い越してみせるのが彼女の目標である
その為にも彼女はまだまだ撃つ

撃ち終わつた薬莢を排出するためボルトハンドルを上げて引き、前に押し込むと上げたまま放置してパネルの方を見る

これは主にアメリカ陸軍で採用されている手法だ

狙撃任務は待機時間かなり長くなることが多い、その為撃つ直前になって弾を薬室に送り込んだかどうかをド忘れすることは多い

更にマニュアルセーフティも解除したかどうか咄嗟に思い出すのに困ることがあるのだ

そこで考案されたのがセーフティを解除してボルトを操作して薬室に弾を送り込んだ後にボルトハンドルを上げたままにする手法

こうすれば後はボルトハンドルを下げるだけで発射が可能であり、ボルトハンドルが上がっているという状態は一目瞭然であるため薬室に弾を送つたかどうかを思い出す必要もない

一連の流れを身体に染み込ませればセーフティも予め絶対に解除している為気にしなくて良い

別にプレスチェックすれば良いのではと思うかもしれないがそれにはスコープから目を離して身体を動かし薬室内を覗き込んでボルトハンドルを操作して閉鎖、またスコープを覗くという手間が必要になる

これでは折角狙いを付けていても絶対にスコープの方向がズレるため先程説明した要素全てをまた1から修正し直さなければならぬ、それを良しとする者はいないだろう

セミオートではこういったことは出来ないため、この利便性も狙撃銃でボルトアクションが好まれる理由の1つである

それは兎も角M200が見ているパネルには先程の狙撃の成否、着弾箇所、条件が表示されてから着弾するまでの秒数などが表示され、それぞれの点数と一番下には総合評価としての点数が表示されている

総合評価：93点：それを見た彼女の顔は僅かに不満そうだ

スカレットと共にここで訓練をした際に今回と似たような条件でスカレットは98点を叩き出していた

その点数に追いつけないことが彼女の顔を曇らせているが実際の所はそこまで気に

してはいない

点数がどうであれ当てることが出来たのならそれで良いし、スカーレットに追いつくための時間はまだまだある

そもそも26年間の経験があるスカーレットとロールアウトされてから4年目のM200の点数差が5点しかないのだ、十分すぎる結果ではないだろうか

実際スカーレットもこの事実には驚いていて、いずれ本当に自分のような人間の兵士が完全に居なくなる世界が来ることを予感していたりする

その為割と直ぐに気を取り直したM200はパネルを操作して次の狙撃に移る

食事も簡素な携帯食で済ませて1日中狙撃の訓練に明け暮れる

普通1日中撃ったところで意味はないが彼女の場合は意味が出るように適切なタイミングで休息を挟んだり体操をしたりするため問題はない

そうして日も落ちて夕食時になれば彼女も訓練を止めて後片付けをしてから食堂へ向かう

「あ、モツシーだ。やほー」

「あらお師匠じゃない、これから夕食かしら？」

「そうだよ、一緒にどう？」

「勿論、喜んで♪」

途中見かけたモシン・ナガンを誘って共に夕食を摂る

いつの間にかモシン・ナガンはM200のことを同志ではなくお師匠と呼び慕うようになっていた

これにはM200も大変喜び、お師匠と呼んでも良いかと聞かれた時には笑顔で頭を撫でまくったほどである

モシン・ナガンも恥ずかしそうにしながらも何処か嬉しそうにしていたのだがその現場をMDRに撮られ、2人して追いかけたが狙撃手である自分達では彼女に追いつけず結果としてその写真は基地中にばら撒かれてしまった

その後彼女達は微笑ましい目で見られるわスカーレットを始めとして幾人かには揶揄されるわけで少し大変だったが今ではそれも落ち着いていて、この基地では定番の組み合わせとして認識されている

そんな彼女達は食事を共にした後には連れだつて大浴場へ行き共に湯浴みをした

その際にモシン・ナガンの髪をM200が洗っておりそんな2人の様子はまるで母娘のようであつたが「いやどう見ても逆じやろうが」という突っ込みも入つたりしたという

汚職指揮官の排除@定例会議

『ふむ、俄には信じがたいが…これだけの情報があれば信じないわけにもいくまい』

「そんなじゃ、許可はくれるんだな？」

『良いだろう、クルーガー社長には私から話しておく。その時は頼んだぞ』

「お安い御用だ」

S地区総隊指令基地、その執務室では指揮官であるスカーレットが誰かと通信をしていた

相手は上級代行官のヘリアントス、一応スカーレットの上司に当たる人物であるが年上なのと個人的に仲が良いためこうした仕事の話でも敬語で話すことはしていない

『では明日の定例会議が終わった直後に動いてくれ。他に何かあるか？』

「他にねえ…特にはねえな」

『ならこの通信もこれで終わることにする。アウト』

「相変わらず硬え奴だぜ、そんなんだから嫁の貰い手がいねえんだろうな」

「…それ、あんたが言えることなの？」

「何か言ったか？ワルサー」

「いいえ何も」

通信が終わり中空に浮かんでいたヘリアントスのホログラムも消えたのを確認したスカレットは思ったことを呟くが、彼女の言えたことではないだろう

そもそもスカレットはヘリアントスと共に数々の合コンに参加しており、全敗記録を更新し続けている

これをヘリアントスが聞いていれば「お前に言われたくはない」と言うだろう

その上スカレットの方が年が上ということは即ち彼女の方が行き遅れで：おっとこれ以上は止そう

兎も角通信を終えた彼女はグツと伸びをすると左耳に嵌めているイヤープースに手をやる

「セルジユコフ、今大丈夫か？」

『勿論です、指揮官さん。如何なされましたか？』

「明日の定例会議の際の護衛なんだが1つ仕事を増やす。例の乙地区総隊司令官の汚職に関してでは知ってるな？」

『ええ、把握しています。彼の排除ですか？』

「ちつと違うな。最終的には殺すがその前に尋問して情報を聞き出す必要がある。その為にも奴の護衛として来るだろうG36の無力化をお前に任せたい」

『なるほど…生死は問いますか？』

「殺してもいいが生かしたまま捕えられりゃあ報酬は上乘せする」

『了解しました。では、また明日』

「おう。じゃあな」

通信したのはセルジユコフ、彼女は他の人形とは違ってSPとしての仕事をさせるべく訓練をさせている

その為スカーレットが定例会議などで基地から離れる際にはほぼ間違いなく彼女が護衛として就くことになっている

それは明日に迫った定例会議でも同じだ、しかしいつもと違うこともある

件の乙地区総隊司令官の汚職をスカーレットは今しがたヘリアントスに伝えて彼を拘束する許可を取った

因みに確たる証拠は数日前にウエルロッドが彼の基地に潜入して全て抜き取って来ており、その情報は既にヘリアントスの元に渡っている

誰にも気づかれずに1日で全ての情報を獲得してその痕跡すら残すこともなく脱出して持ち帰って来たウエルロッドは流石の一言である

そして彼を捕らえるのに邪魔となるのが彼が副官として常に傍に置いているG36の存在だ

彼女は彼の汚職を知っているがそれでも彼へ忠誠を誓い、護り通す

過去に彼を排除しようとした者を軒並み返り討ちにしてきた事実からその実力はスカーレットも認めるほどである

スカーレットとて負けるとは微塵も思わないが無駄に抵抗させてやる義理もない、とつとと退場させた方が良いだろう

それをセルジュコフにさせて自分は乙地区総隊司令官であるマルティン・アーレント指揮官の拘束を行うつもりだ

「よし、それじゃ私は明日に備えて早めに寝るとするか。ワルサー、お前も上がって良いぞ」

「そう？ならお言葉に甘えて…あら？」

今は午後9時、寝るには早いけど明日に大仕事があるためそれに備えようとした所で執務室にある通信機…本社との連絡用ではなくこの基地に所属する人形達が遠方への任務に出ている際にかかって来る方の通信機からコール音が鳴る

何事かと思いいワルサーが通信に出た

「こちらS地区総隊指令基地よ」

『こちらAK47だ、その声はワルサーだな。そこに指揮官はいるか？』

「ええ、いるわよ。変わった方が良いかしら？」

『そうしてくれ、かなり重要なことだからな…』

「分かったわ。指揮官、AK47からよ」

「あいつから？まさか！」

「ええ、きつとそうね。早く出てあげて」

「言われるまでもねえ！おい、今変わったぞ。見つけたのか？」

『察しが良いな、指揮官。ばつちりだぜ！』

「良くやったぞ！！タイミングもすこぶる良いしな！」

『タイミング？なんかあんのか？』

「明日定例会議があるからな。そんな時に叩きつけてやる」

『なるほど、そりやあナイスタイミングだな！私達が優秀だからか、なんてな』

「いいやお前達は優秀だ、だからこそこんな過酷な任務も頼めるんだしな…ともかく良くやった。帰ってきたらウンともてなしてやる、だからもう暫くそこで耐えててくれ」

『了解だ指揮官、それじゃあな！』

「ああ。アウト」

通信を終えたスカレットはその顔に広がる笑みを隠そうとせず、満面の笑みを浮かべている

それほどまでにAK47からの通信には意味があつた

彼女は半年程前からトカレフ、ASVal、RPD、SV98を引き連れて超重要任務に出ている

そして目標を達成したという報告が今の通信だ

彼女等に任せた任務はこの先の人類にとつての希望になると言っても良い程に重要なものだ、スカーレットが本当に嬉しそうな顔になるのも当然だろう

「その顔を見る限り…彼女達はやったのね、指揮官」

「ああ、あいつらはやり遂げやがった！こいつはでけえぞ…ククク、明日集まった奴らの驚愕に染まる顔が今から楽しみだぜ」

「まあ驚くでしょうね…出来ればその顔を撮って見せて欲しいくらいよ」

「ハハ、流石にそいつは出来ねえな。撮影禁止でなけりやあ滅茶苦茶に撮ってやるのによお」

「こればかりは私も付いていきたくなるわね。ま、それは良いとしてもう寝たら？彼女達から送られてくる情報は私が纏めといてあげるから」

「お、良いのか？なら頼んだぜワルサー…いやあ楽しみだなあ」

WA2000に礼を言ったスカーレットは楽しみで仕方ないという笑みのまま執務室を後にして自室へと向かう

それを見届けたWA2000は椅子に座ってAK47達から端末へ送られてきた情

報をPCへと送って表示する

そこには『スヴァールバル世界種子貯蔵庫発見』という文から始まっていた…

翌朝、スカレットは79式が運転する車で本社へと向かっていた

セルジユコフはスカレットの隣に座って拳銃をいつでも撃てる用に保持している

「それにしても…嬉しそうですね、指揮官さん。何かあったのですか?」

「ハッ、流石に分かるか。まあそれはそれは良いことがあったさ。何かあったかは会議の際に話してやるよ」

「あら…今教えてはくれないんですね、少し残念です」

「ククク……こればかりはな、あそこでぶちまけて反応を見たいんだよ。すまん」

「こんな嬉しそうな指揮官さまは久しぶりに見ましたよ」

「そうですね、何を言うのか楽しみです」

これから一応は重要な会議に出席するというのにセルジユコフに緊張はない

もう何度か参加していて慣れているし彼女もスカーレットの課す過酷な訓練を乗り越え、試験を突破して今の座を得ているためこの程度のことでは狼狽えたりはしないのだやがて車は本社のある街へと着き、入り口でセルジユコフが手続きをして本社の駐車場へと向かう

地下駐車場に入った車からスカーレットとセルジユコフが降りて会議室へ向かい、7式は車で待機する

流石にG&Kの本社で事を起こす輩はいないだろうが念のためである

そしてスカーレットとセルジユコフは会議室に入室する

中には既に何人が集まっていたように入って来た彼女達を見るがその反応は様々だ
快く挨拶をする者もいれば忌々しく舌打ちをする者もいる

やはりスカーレットがアメリカ人なのとヘリアントスはおろか、社長のクルーガーにすら敬語を使わない上にそれが認められているのが気に入らないのだろう

しかもどう控えめに見ても彼女が上げている戦果は素晴らしいものであり、そもそも

S地区の大半を奪還したのは彼女による手柄であるため文句も言えないのが余計に齒がゆいのだ

ヘリアントスと共に合コンの敗北者であるという点は唯一弄れる部分だがそこを弄ると彼女はぶち切れるし、もれなくヘリアントスからもヘイトを向けられることになるため言うものは殆どいない

そうこうして何人かに挨拶をしたスカレットは席に着き暫し待つ

数十分程待っていると各地区の総隊司令官が揃い、更に数分待てばヘリアントスとクルーガーが入室してきた

それを合図に全員が立ち上がり、敬礼を向ける

意外なことにスカレットもしつかりと敬礼をしていた

誰かに敬意を持つことなどほぼほぼない彼女だが、クルーガーに対しては恩義を感じているのだ

それは彼女がG & a m p ; Kで指揮官を務めることになった経緯に所以する

スカレットはアメリカの超隠密特殊部隊『ゴースト』に所属していた

第三次世界大戦が始まる少し前に彼女はCIA長官から任務を言い渡されてロシアへと渡った

その任務は世界大戦が始まる事が予期されていたために最大の敵となるロシアの

トップを暗殺しろというものであった

その為にスポットターのクレアとその家族と共に偽装亡命を行って入り込んだ

しかしその直後にアメリカへ向けて大量の核が放たれてアメリカは滅亡した：ステルス核が使用されたためにアメリカからの反撃は行われることはなかった

そして第三次世界大戦は勃発し、スカーレット達は己の役目を失って呆然とすることになった

その時に当時構成されたばかりの連合軍：後の正規軍でそこそこ高い地位にいたクルーガーに勧誘される形で連合軍に所属した

生き残るために食い扶持も必要であったし余りにも突然のことであつたが故に復讐に心が向かうこともなかったのだ

そこでクルーガー直属の部下として様々な戦場で活躍したがやがて大戦は終結し、スカーレットは連合軍を離れて廃れてしまった街に用心棒として居着くことにした

当時の彼女は忠義を尽くす国家も、かつての仲間も全てを失い空虚であつた
落ち着いてからも復讐心など生まれない程に空虚であつたのだ

そこで暫く過ごしていたのだが胡蝶事件が発生し、当時既にG & a m p ; Kの社長であつたクルーガーは戦力の増強を図る必要性を感じてスカーレットをG & a m p ; Kに勧誘した

最初こそ断っていたスカレットであったが余りにもしつこく誘ってくるクルーガーに根負けし、渋々ながら入社することになった

そこからは以前話した通り、たった8人でS地区の占拠された基地に急襲を掛けて奪還、そこを起点としてその後も次々に奪還していき今に至る

スカレットがクルーガーに恩義を感じているのはG&P;Kで戦術人形達と出会い、彼女達と日常を過ごす内に空虚だった自身の心がかつてのように使命に満ちてきたからである

もしもクルーガーがG&P;Kに勧誘しなかったら、いやそもそも連合軍に入れてくれなければ…彼女は今も心ここに非ずといった様子であったかもしれない

自分がそうならなかったのはクルーガーのおかげ…故にスカレットは彼に恩義を感じて忠義を捧げている

「全員集まったな?ではこれよりG&P;K社、総隊指令官会議を行う!」

ヘリアントスの号令と共に彼女以外の全員が座る

そしてヘリアントスが司会となり会議は進んでいく…各地区の前線状況、治安状況、街の活性状況など様々なことが報告され、共有されていく

会議は順調に進み、終わりに近付いて行く

「ここまでで質問のある者はいるか?…いないようだな、では特別に報告することがあ

れば挙手を頼む」

その言葉がヘリアントスの口から出た直後にスカーレットは手を挙げる

ヘリアントスはZ地区のことかと思いい目線で「まだ早いだろう」と伝えてきているがスカーレットは不敵に笑い、否定する

ヘリアントスはそれに少し怪訝な顔をしながらも会議を滞らせるわけにもいかないため彼女に発言することを許可した

「んじゃあ私からとっておきの報告だ…半年前に出撃させた部隊がスヴァールバル世界種子貯蔵庫を発見、確保した!!」

「なに!?!」

「世界種子貯蔵庫って、あの…?」

「事実だとすれば途轍もない快挙だぞ!」

スカーレットが報告すると会議室にどよめきが走る

隣にいたセルジュコフも予想を遥かに超えた言葉に固まっている

ヘリアントスも驚愕に染めた顔を曝しているしクルーガーですら驚きに目を見開いていた

「スカーレットS地区総隊司令官…それは本当か?」

「あんたに対して嘘の報告をするほど恩知らずじゃねえよ。紛れもない事実だ」

クルーガーが嘘は許さんとばかりに威圧を込めて確認して来るが一切怯むことなくスカーレットは断言する

その様子にクルーガーは大きく頷き、考え込む

スヴァールバル世界種子貯蔵庫：正式名『あらゆる危機に耐えうるよう設計された終末の日に備える北極種子貯蔵庫』は2008年にMicrosoftの創業者ビル・ゲイツ氏主導のもと建設された、文字通り世界中の植物の種子を保存している施設である。第三次世界大戦の直前には200万種類もの植物の種子が500粒ずつ保存されており、人類最後のセーフティネットとも言われていた場所だ

この施設は将来的に起き得る世界災害や核戦争の影響で植物が死滅した際のリスクを最小限に抑える為に建設され、当然ながら第三次世界大戦後に数々の植物が死滅したためにこの施設は利用されるはずであった

しかし核のEMPによる影響で当施設との通信は途絶え、更にはコーラップスによって海が汚染されてしまった現在ではこの施設へのアクセスは非常に困難なものとなっており、半ば諦められてしまっていた

しかしスカーレットはそれを諦めることはなく自身の基地で独自に開発した北極でも正常に動くヘリを用いて戦術人形を送り、調査させたのだ。そしてそれが実を結び、当施設の発見及び確保に成功した

当然これから種子を運び出さなければならぬし、その作業は流石にスカーレットの基地のみで出来るものではないためG&K、そして正規軍すらをも導入して協力合つて作業を行わなければならない

その上安全に運ぶ為のアクセス路も作らなければならない…課題はまだまだあるが、それでも人類にとつて希望となることは間違いないだろう

「良くやった…と言うべきか。すまないが余りにも大きすぎる報告のせいで未だ実感が湧かなくてな」

「構わねえよ、お前のその顔が見られただけでも報酬としちや十分だ」

「全く、お前は相変わらずだな…まあ良い、とにかくこれは私達だけではどうにか出来る問題ではない。よつて政府と正規軍にも話を通して協力体勢を作らなければならないだろう…社長もそれでよろしいでしょうか？」

「構わない、寧ろこの件に関しては私の方から正規軍に報告する。幸い私には伝手があるからな」

「分かりました、お願いします。さて、他に報告はないか？…ないようだな、ではこれで本会議を終了する…と言いたい所だがあと一つだけやることがある」

「ヘリアントスの言葉に席を立とうとして居た者は座り直し、何があるんだ？という顔をしている

違う反応をしているのはスカーレットのみだ、彼女は口角を吊り上げて笑みを浮かべている

「この中に犯罪組織と繋がり、汚職に手を染めた者がいる…そうだな、マルティン・アーレントとZ地区総隊司令官？」

その言葉に再度会議室にどよめきが走り、全員の目が該当人物に向けられる

それを受けるマルティンは平然とした顔でその視線を受け止めていた

「なんのことか分かりませんね。何を根拠に…」

「しらばつくれても無駄なんだよ、マルティン。証拠は既に全部ヘリアンに送つといたからなあ？」

「その通りだ。これがその証拠となる、見ろ」

ヘリアントスが端末を操作すると全員の会議用の端末にその証拠が映し出される

犯罪組織との通信記録や当基地が直接関わった犯罪行為の数々…何年にも渡つて行われていた行為の全てがそこにはあった

これにはマルティン・アーレント指揮官も苦虫を噛み潰したよな顔になる

「これだけの証拠がある。まだ弁明を続けるか？」

「クソが…」

「んじやま、とつとと拘束させてもらうぜ？」

「…G36、殺れ」

「は、」

スカーレットが拘束するために席から立ちあがり彼に近付こうとした直後、マルティンがG36に命令を下した

その言葉を受けてG36はスカーレットに銃を向ける

その行為にこの場にいた者達は驚き、スカーレットが撃たれると思った

しかし、それは杞憂に終わる

G36が引き金を引く寸前、セルジュコフがその銃口に向けて銃弾を放ったのだ

セルジュコフの放った弾丸はG36の銃口に装着されていたフラツシユハイダーにガツチリと詰まる

その状態でG36は引き金を引いてしまった…直後、彼女の銃は銃身が裂けた

異常腔圧だ

銃身に異物が詰まるなどして弾頭が銃身から出ることが出来なかつたりした場合、本来射出されて逃げる筈の燃焼ガスは銃身内部に留まり続ける

しかし銃身はそれに耐えるように設計されてはいない、その結果銃身が耐え切れずにライフリングに沿ってぶち裂ける現象が発生する

それが異常腔圧による銃身破裂だ

そしてその際当然ながら内部に堪っていたガスは周囲に拡散する、その被害を受けるのは……

「アアアアアアアアアアアアアア!!!」

射手本人だ

G36は高圧高温の燃焼ガスを顔面に受けて悶絶している

両手も焼かれ、目は潰れ、火傷によってその美しかった顔は見るも無残なものに成り果てていた

そして近くにいたマルティン指揮官もその被害を多少ながらに受けて怯んでいる

その隙を逃すスカーレットではない、一瞬で接近するとマルティンの右腕を押し折ってから首に左腕を回してデザートイーグルの銃口を頭に付きつけた

「てめえはもうお終いだ。これから本社の尋問官に可愛がられるんだよ」

「グ、うう……ちくしょう……!!」

「それなんだがな、スカーレットS地区総隊司令官。クルーガー社長は尋問と処分を貴官に任せることにしたそうだ」

「あ? 良いのかよ、んな重要なことを一指揮官に任せちゃって」

「構わん。情報さえしつかり取れるなら好きにしてくれて良い……その代わりその様子を撮ってくれ。今後同じことが起らないようにするための抑止力として使用する。それ

にはお前に任せるのが一番良いだろう」

クルーガーの言葉にスカレットはその顔をこれ以上なく破顔させた

「なるほどなあ……良いぜえ、たあつぷりと可愛がつてやるよ。なるだけ早く作るから楽しみにしててくれ」

「ああ、頼む。これで今回の総隊指令官会議を終了する、各自解散しろ」

その言葉を受けて戸惑いながらも各地区の総隊司令官達は帰っていく

G36はヘリアントスが手配した本社の警備を担当する人形によって工廠に運ばれる

マルティンは本社の兵士によって完全に拘束され、護送車でスカレットの基地に運ばれることとなった

そして会議室にはスカレット、セルジュコフ、クルーガー、ヘリアントスの4人が残っていた

「それにしても……もう少し穏やかに出来なかつたのか？」

「何言つてんだ、十分穏やかだろうが。状況次第じゃこの場で頭を潰すことも考えてたからな」

「相変わらず苛烈だな……本当に隠密部隊の出身か？」

ヘリアントスの言葉にスカレットは答えるが、クルーガーの言うことも尤もである

う

これでもスカレットはCIAの隠密特殊部隊で活躍していたのだ、その気になればもつとスマートに出来ただろう

しかしそういうコソコソとしたやり方は彼女の好みではない、派手に暴れるのが好きなためこれでも抑えた方だというのが彼女の主張である

これにはセルジュコフも苦笑いするしかない

「まあ良い…兎に角尋問は頼んだぞ。最終的には処刑しろ、その様子も出来れば欲しい」「構わねえぜ。抑止力にするってんなら思いつ切り残酷にして良いんだよな?」

「ああ、そうしてくれ。というかそれ私も見なければならぬんだよな?…いつでもトイレに駆け込めるようにしておくか……」

「指揮官さんの尋問は酷いですからね…私も2度と見たくないです……」

「…そこまで酷いのか?」

スカレットの行う尋問や処刑の様子を見たことのある2人は今からげんなりした

クルーガーも知ってはいるがその様子を見たことはない…まあそう遠くない内に見ることになるだろう

「兎も角、私は種子貯蔵庫のことを正規軍に報告しに行かねばならぬ。後のことは頼んだぞ」

「ハッ、畏まりました」

「ああ、任せとけ…なあヘリアン」

「皆まで言うな、分かっている…次のセッティングだな？」

クルーガーが退室するとスカールレットとヘリアントスは顔を寄せて小声で話しだす

その顔は真剣そのものだが内容はなんてことはない、合コンである

この2人は何度も何度も合コンを行っているが結果は惨敗だ

ヘリアントスは焦りからか必死になりすぎていて男性から引かれるし、スカールレットも必死な上にその身から凄味を発するために寧ろ恐れられてしまっている

合コンの空気を悪くするばかりかこの2人以外の女性が相対的に魅力的に見えてその女性が男性をゲットするという皮肉な結果を生み出し続けている

しかし2人がそれに気付くことはなく、これからも記録を更新していくのだろう…哀れヘリアントス、スカールレット

その後スカールレットは車へと戻り79式の運転で自分の基地へと戻った

そして基地のメンバー全員にホログラム付きの通信でZ地区総隊指令基地のこと、そしてAK47よりもたらされた種子貯蔵庫のことが通達された

特に種子貯蔵庫のことが知られた時には基地全体が揺れるのではというほどの歓声が上がリ、その日の夕食はお祭り騒ぎとなった

翌日にはクレアとイーサンも戻って来て基地はいつも通り回っていく

しかし変化というものはいつも唐突に訪れるものである

それは昼前に入った通信より始まった

「詳細不明の民間人の救出？構わねえぜ、救い出してやらあ」

『頼む。既に鉄血が近くに居ると思われる、時間がない：速攻でやってくれ』

この後救い出した人物が顔見知りであるとはこの時のスカーレットは知る由もないのであった

民間人救出ミッション part 1

「全員聞け、今しがたヘリアントスから緊急連絡が入った。S08地区にて民間人の反応があったとのことだ。既に周囲には鉄血が展開している上にハイエンドモデルの反応もある。処刑人^{エクスキューション}と狩人^{ハンター}だ…よって、これより民間人の救出任務を発令する！」

定例会議の翌朝、ヘリアントスより入った緊急の通信を受けたスカーレットはすぐさま基地全員に通信をかけて任務の発令を行う

「今回出撃するのは私、M200、一〇〇式、HK416、G11、LWMMG、トンプソン、AK-74U、Vectorの9人だ！私とM200がスナイパーとして動き、HK416とG11とLWMMGは予備部隊として待機。一〇〇式とトンプソンとAK-74UとVectorで最初の突撃を敢行する！執務室にはWA2000が待機する、急を要する連絡以外はそこを通せ。それとFN49とモシン・ナガンは私に付いて来い、任務ついでに戦場の空気と本当のスナイパーの動きつてもんを見せてやる…総員、出撃準備だ！30秒で支度しろ!!」

スカーレットは一瞬で作戦を構築してメンバーを選出すると通達し、自身もすぐさま愛銃の確認をするとバックパックを背負って愛銃を手に持ちヘリポートへと全力で走

る

M200は訓練中だったモシン・ナガンを連れて移動しFN49と合流、ヘリポートへと急ぐ

一〇〇式や他のメンバーも各々準備を一瞬で整えてヘリポートへと向かい、一分もしない内に全員が集まった

「全員いるな？よし、じゃあライフル組は私と一番へりに、416とG11、LWMMGは二番へり、他は三番へりに乗れ！」

「了解！了解！」

スカレットの言葉に全員が迅速に動く、動きが遅れそうになるFN49とモシン・ナガンはM200が手を引っ張ってへりに誘導する

今回の作戦はまずトンブソン率いるSMG組が現在判明している民間人のいるポイントに向かい、敵性存在が確認されればその場で戦闘を開始

必要とあればスカレットとM200がスナイパーチームとして狙撃を敢行、完全鎮圧が確認され次第民間人の確保と事情聴取を行う

もし鎮圧に時間がかかるようだったり敵の規模が大きくて民間人に危険が及びそうであれば待機しているHK416率いる予備部隊が戦闘に参加し、その間にAK74Uが民間人の救出を行う

民間人への事情聴取等で別のポイントにも要救助者がいることが判明した場合、そのポイントが近ければHK416の部隊とスナイパーチームが向かい遠い場合は基地へ連絡して待機している人員を派遣する

その際のメンバー選定等はWA2000に一任される、このことは一言も話されてはいないがWA2000は理解しているので話す必要もないのだ

その証拠に既にメンバーの選定を行い、通信してヘリポートに敷設されている待機所にて待機させている

「ねえ同志…どうして私達まで連れて行くのかしら？まだ試験に挑んですらいらないのだから」

ヘリに乗り込み離陸した頃、モシン・ナガンは不思議に思っていたことを吐露する
「どうもこうも…通信で言った通りだぞ。任務ついでに戦場に於けるスナイパー…所謂ミリタリースナイパーの実際の動きってやつを見せようと思っただけだ」

「大丈夫、指揮官は新しく入ったライフル型の子は絶対にこうして一度は戦場に連れて行くから君達だけじゃないよ。ボクもそうだったしね…典型的なスナイパーチームとして動くし接敵することは基本的にないから安心して」

「で、でも不安です…本当に大丈夫なんでしょうか？」

「お？私が近くにいるってのに不安を感じるのか？…って言いたいところだがお前達に

はあんまり私の實力を見せつけたことはなかったな」

「いえ…狙撃能力に関してほとんどでもないのは知ってるし近接戦闘もあの指揮官大脱走事件で思い知ったわよ…」

「そう言えば…」

FN49が不安を呈すがモシン・ナガンの言葉にハッと思い出して僅かに心配が和らぐ

正直2人にはあの時のミレニアム8同士の戦闘は目で追えなかった

この基地の面々の實力は自分達の理解の及ばない領域にあるのだとあの時思い知ったのだ

そして何より恐ろしいのはいずれは自分達もその領域に到達しなければならぬことである…ぶっちゃけ今の2人には想像も出来ないことであった

「取り敢えず今回の戦場となるのはそこそこ開けた場所で身を隠す場所もそれなりにある、周囲の光景としては草原と言うのが一番近いだろう。岩や盛り上がった土なんかが見え隠れられる場所だ…私達が今回展開するのはその戦域を一望出来るこの山だ、見ろ」

スカレットは2人の不安を理解しながらも誰もが通る道であるため敢えて寄り添うことはせず、冷静にマップを広げて説明を始める

それを見てモシン・ナガンは怪訝な顔をしてスカレットを見つめた

「ねえ…どうしてこんな紙製の地図なんて広げてるのかしら？ ホログラムで表示させれるんでしょ？」

彼女の言うことは尤もだ、技術が進歩して更にはこの基地独自の技術であるイーテルまで用いているのであればもつと楽は出来るはずである

にも関わらず何故前時代的な紙製の地図など使うのか、今時そんなものを使う者は非常に少ないであろうに

「それに関しちや詳しくは後々行う訓練でしつかり説明する、だから今は簡単に言わせてもらおうぞ。『電池で動くものに命を預けるな』」

「なるほど…なんとなく分かったわ、妨げてごめんなさい。続けて？」

「ああ。じゃあ続きだが……」

スカーレットは説明を続けていき、他のヘリでも似たような光景が広がっていた

S08地区のとある区画にて3人の少女達が何かから逃げるように走っていた

そこに余裕なんてものはなく服は擦り切れ息も完全に切れていたが、それでも少女達は走る

「ハアツハアツハアツハアツハア……い、いったいど、どこまで逃げればいいの……？」

「諦めたあかん！ここで諦めたら、ゆ……かりさん達が身体張って、うちらをにがしてくれたんが無駄になつてまう！」

「で、でも……もう、足が……アウ！」

「きりちゃん！大丈夫？」

「あかん、足挫いとる……仕方あらへん、うちが負ぶっていくで！」

「そ、そんな、無茶、ですよ……！」

「そうだ、よお姉ちゃん……お姉ちゃんだつて、もう……」

「せやつたらきりたん見捨てていくんか！それはあかん……それだけは絶対に、あかんの

や!!」

ピンクに近い赤い髪をした少女が他の2人の少女…赤の少女と瓜二つだが髪や目の色が水色の少女と小豆色の髪と和服が特徴的な少女を引っ張っていたが、どうやら小豆色の少女が度重なる逃避行に遂に限界が来たようだ

それでも諦めないとはかりに赤い少女が連れて逃げようとするが、限界が来てるのは彼女も同じだ

背負って立ち上がろうとするも何度も倒れる

「もう…良いんです。私に、構っていい、たら…ハアツハア…お2人まで手遅れに」
「うるさい、怪我人は黙って言うこと聞いととき!!…うぶっ!」

「お姉、ちゃん…私も、手伝うよ…!」

「ホンマか、ほな頼むわ…!」

「どうして、そこまで、して…私なんかの」

「自分なんかとか言うな!!きりたんはうちのの、ごつつ大切な…友達やるが!」
「っ!?!うう…!」

赤い少女の言葉に小豆色の少女は顔を歪めて感情が決壊したかのように涙が溢れてくる

それまでも涙は流していたが、逃げるのに必死で感情的に流してはいなかった

だが今は内から込み上げてくる激情に耐えられなくなって次から次へと涙が溢れて止まない

そして自分のことを諦めかけていたが心を持ち直して絶対に助かってやると意気込む

その様子を見て2人のそっくりな少女も笑みを浮かべて気概に満ちていく

しかし絶望というものは得てしてそういう時に訪れる…

「みいーつけたあー♪」

「「ヒッ…」」

3人がいた岩場にゆっくりと手をかけて現れたのは鉄血のハイエンドモデル『処刑人』だ

右手に洗練された長大な刀を持ち、その顔には愉悅に満ちた笑みを浮かべている

その上周囲には彼女が引き連れる鉄血兵が展開して周囲を固めている…最早ここま
でだろう

誰も助けに来なければ、だが

「おう、良くもまあちよこまかと逃げてくれたなあ小娘どもお…安心しろ、てめえらを逃がしたあの2人なら俺の友が^{ダチ}始末しに向かつてつからよ」

「そ、んな…」

「せいじゃあ…死ね」

処刑人が右手に持った刀を大きく振り上げる

そのまま更に顔を愉悦に染めるとその刀を振り下ろして赤い少女の顔が真つ二つに…はならなかった

「なっ！てめえ…！久しぶりじゃねえかよ、ええ？」

「貴女の思い通りにはさせませんよ、処刑人」

「いつもいつも俺の邪魔ばかりしやがって…いい加減ぶつ殺してやらあ!!」

処刑人の刀が少女を斬り裂くより前にその間に躍り出た人影がその刀を刀で受け止めていた

S地区総隊指令基地所属、一〇〇式だ

彼女の今の服装はいつもの巫女服ではなく戦闘用に用意した戦装束である

白い桜の意匠が施された桃色の和服の上に紫色の紐で固定されている黒色の肩当、同じく黒と紫の手甲、白地に桃色の模様が付いた袴に足甲を付けて草履を履いている

愛用の赤いマフラーは今は付けていない

その姿は美しく、華やかで、戦場には似つかわしくない程に艶やかであった

そんな一〇〇式の姿に最初こそ戸惑いしかなかった少女達だが他にもトンプソンとAK-74UとVectorが現れて周囲に展開している鉄血兵を蹂躪し始めたこと

で漸く助けが来たのだと実感が湧いてくる

だがまだ安心は出来ない、今目の前にいる処刑人はハイエンドモデル：勿論少女達に詳しく知る由はないがそれでもその身から発する覇気が他の鉄血兵とは格が違うのは分かる

そんな相手に助けに来てくれた一〇〇式はたった一人で挑もうとして、いやもう既に戦闘を開始している

お互いに、特に一〇〇式のものはこの時代には見ることの少ない刀剣での斬り結び：一瞬で自分には理解の及ばない領域に入ったため良くは分からないが兎に角まだ確実に助かったとは言えない状況であることは分かる

「クソが、相も変わらず何でんなつええんだよてめえは!!」

「無駄口を叩いていると舌を噛みますよ。一〇〇式流『十二段付き』」

「ちいっ!」

瞬間、処刑人を襲う十二本の刀による突き

速すぎて最早残像が映っているのだ、そんな早い突きを処刑人は捌き切れず何太刀か喰らう

それでも致命傷にならないよう逸らしているのだから彼女の實力もかなりのものであることが分かるだろう

しかし、今回に至っては相手が悪すぎる

この一〇〇式はあのスカーレットとクレアの師匠に当たる人物から直接剣術を叩き込まれているのだ

当然そんな一〇〇式の実力は常軌を逸したものの…一対一という安定した状況とは言えなかった一人でハイエンドモデルを相手に押している

そうこうしている間に一〇〇式の刀は処刑人の身体を徐々に斬り裂いていく致命に至るようなダメージは与えられていないが体力は削れているだろう

「これで終わりです…一〇〇式流『朧月夜』」

一〇〇式の動きが急に緩やかなものになり予測が付かなくなる

それに焦る処刑人だがそれでもなんとか喰らいついていく…が、それもここまでだ暫くゆらゆらとした動きをしていた一〇〇式だがいきなりハッキリとした動きで逆

袈裟斬りを放つ

それに処刑人は当たり前のように反応して防ぐ為にその手に持つ刀で迎え撃つだが…

「な、しまつ…ガア！ア、ハア……！」

「言ったでしょう、終わりだと」

迎え撃ちに来た処刑人の刀だが、一〇〇式は刀を自身の方へ引き戻すとそのまま踏み

込んで突きを放ってコアを貫いた

そして斬り払うようにして刀を引き抜くと懐から紙を取り出して血を拭い、使い終わった紙をその場に放る

ハラハラと舞い散る血の紅で彩られた白い紙…その光景は何処か美しさすら感じる刀を鞘に納めた一〇〇式が周囲を見ると丁度トンプソン達も鉄血兵の掃討が終わったようだ

「そつちは…終わつたみたいだな。なら私と Vector で周囲の警戒を行う、クリンコフはヘリまでの道の安全を確保しろ。一〇〇式はその子達を頼む」
「分かりました、任せて下さい！」

状況を把握したトンプソンは瞬時に指示を出し、周囲の警戒に移る

刀を収めた一〇〇式は普段の快活な様子に戻って少女達へ話しかける

「大丈夫でしたか、お怪我はありませんか？」

「あ…あ、ああ……」

「大丈夫ですよ。ゆっくりで構いませんから、まずは落ち着いて下さい」

話しかけるが極限状況に置かれていたせいか真面に喋ることが出来なくなってしまうので、一〇〇式は竹製の水筒を差し出して水を飲ませる

少女はそれを零しながらも飲んでいき、一〇〇式に肩を抱かれて頭を優しく撫でて

らったからか次第に落ち着きを取り戻していった

「あ、ありがとうな……うちはもう大丈夫や。それよりきりたん……あの小豆色の髪の子が足を挫いてもうとる、負ぶったってくれへんか？」

「なるほど、どれどれ……ああ、これは酷く捻ってますね。一先ず応急処置をしますから動かないでくださいね？」

「は、はい……うっ！」

きりたんと呼ばれた少女の傍に寄って傷の処置を始める一〇〇式

道具は腰に取り付けていた巾着から取り出している

鈍い痛みに小豆色の少女が呻くが青い少女が後ろから抱き留めて動かないようにする

勿論そんなもので怪我人の痛みに悶える際の動きを抑制できるわけではないのだが、今の少女にはもう激しく動くだけの体力もなければ助かったんだという安堵に青い少女が傍に居てくれるという精神的な支えが彼女の痛みを和らげてくれる

「はい、これで良しつと。ではこの子は私が背負いますが、他の2人は自分で歩けますか？」

「うちは大丈夫やで……」

「私も、平気です……」

「うん、そう言えるだけの気概があるなら大丈夫ですね。では…」

「はっ…：そうや！ちよつと待ったつて、実はまだ居るんや！」

「他にも要救助者が？」

「せや、ゆかりさんとずん子さん…：紫色の髪と黒色の髪をした、22歳の女性達や！あの人らはうちらを逃がすために囷になったんや…：頼む、2人を助けてくれんか!?!」

赤い少女が一〇〇式に縋りつくようにして懇願してくる

それを一〇〇式は優しく抱きしめながら受け止め、しつかりと答える

「勿論、私達が絶対に助けてみせます！ですからその為にももう少し詳しく教えてくれないませんか？」

「も、ももちろんや！それで、何を教えればええ!?!」

「彼女達と別れてからどれくらいの間が経ちましたか？」

「えつと、えつと…：数十分つてところやな！」

「分かりました、それだけ分かれば十分です。さあ、へりに向かいますよ」

「え、そんなことよりもはよう…」

「大丈夫です、貴女達の救助に来たのは私達だけではないんです。万が一に備えて他に待機している仲間がいますし今の会話はその人達にも聞こえています。もう既に搜索を開始していますよ！」

「そ、そうなんか…」

「ですから今は自分達が助かることを考えて下さい、その人達が助かった時に貴女達が元氣じゃなかったらその人達も悲しむんじゃないですか？」

「せ、せやな…分かった、頼むわ…行くで、葵」

「うん…お願いします、えつと…」

「私は一〇〇式機関短銃…気軽に一〇〇式と呼んで下さい」

「その名前…戦術人形、でしたっけ？」

「ええ、でも詳しいことは後です。今はとにかくへりに向かいましょう！」

一〇〇式はきりたんと呼ばれた小豆色の少女を背負うと安全の確保された道を通ってへりに少女を乗せると他のメンバーと協力して3人の手当てを行う

それと並行して基地にも連絡を入れて医務室に負った怪我の種類や重度、施した応急処置など状況を伝えて受け入れ態勢を整えてもらう

そのまま処置の終わった彼女達からより詳しい情報を聞き出してそれをそのまま別動隊…HK416の部隊に伝えていく

まだまだ不安は消えないがそれでも幾らかは安心したのだろう、これまでの疲れも相まって小豆色の少女と青い少女は寝入った

赤い少女は寝ることはなくただただ2人を抱きしめている

そんな様子を見る一〇〇式はただただ残りの要救助者の無事を祈るのであった

民間人救出ミッション part 2

S08地区草原地帯

そこには紫色の女性が緑色の女性に肩を貸して歩いていた

「ごめんなさい、ゆかりさん…足手まといになっちゃって」

「謝辞は逃げ切つてから幾らでも聞きます、だから今は逃げることに集中しましょう！」
ゆかりと呼ばれた女性は左手で緑色の女性の左手首を持って抱え、右手にはサプレツサーの装着されたグローブ30を持っていた

緑色の女性は右手に強弓を持っていたが弦が切れていて役には立たないだろう

それ以前に左脚に巻かれた包帯が赤く染まっている、銃弾が掠つたのだ

踏ん張りが効かない状態では壊れていなくとも強弓を扱うのは無理だろう

「もう少し…もう少しで廃市街地に着く筈…あと少しだけ頑張ってください、ずん子さん」

「分かりました…もうひと踏ん張りですね！」

「そうです、もう、ひと…」

何かを言いかけたゆかりだったが何かの気配を察してグロック30をハイグリップで握り、CARポジションに置く

そんな様子を見て状況を理解したのかずん子も顔を険しくさせて小声で尋ねる

「さっきの敵…ですか？」

「ええ…気配からして数は多くありません、5人といったところでしょうか…それでも今の状況では危機ですが」

「やっぱり私のせいですよね…」

「今それを気にしても仕方がありませんよ。少しここで待っていて下さい、私が敵を排除してきます」

「分かりました…気を付けて下さいね？」

「言われるまでもありませんよ」

ゆかりはずん子を土の盛り上がった箇所隠すようにして降ろすとグロック30のプレスチエックをする

キチンと薬室に弾が入っていることを確認したゆかりは気配を探る

やはり数は5、土壁から少しだけ顔を覗かせて確認するとリップとヴェスピドが二体ずつとガードが一体いた

彼女はその名前を知る由はないが何度か行った戦闘からその特徴を把握していた

奴らはガードがポイント、リッパがサイド、その後方にヴェスピドがライフルを構えて追従している

基本的で良い陣形だ…これをハンドガンで、しかもサブコンパクトで崩すのは骨が折れるだろう

だが奴らは簡素なAIしか積まれてはいない、攪乱してやれば混乱して簡単に撃破出来る

ゆかりは腰のポーチからスモークグレネードを取り出すとピンを抜く

そのまま奴らがすぐ近くまで来るのを待つ…草を踏み締める音がハッキリと聞こえてくる

あと3歩…2歩…1歩…

(ここです！)

タイミングを計ってスモークグレネードを転がす

転がったグレネードは丁度奴らの中心に到達し、周辺を煙で満たす

視界が遮られたところで困惑している内にゆかりは音を立てずに土壁から飛び出してまずは近くにいるリッパの脳天に45ACP弾をダブルタップで叩き込む

予め薬室に弾を送ってからマガジンを差しているため総装弾数は10発、今2発撃つた為現在は8発だ

如何にサブコンパクトとは言え45口径を頭に2発喰らったリツパーは機能を停止して沈む

銃声に気付いたのか他の奴らがゆかりの方を向くが問題ない、寧ろそれを利用して屈み込んで一気に接近する

銃弾が頭を掠めていくが怯むことなく近付くとヴェスピドの足が見えた

すぐさま膝に2発叩き込むと体勢の崩れたヴェスピドの頭を両手で200。ほど回して折る

電腦とコアの接続が絶たれてヴェスピドは生きながらに動けなくなる、残弾数は6

そのまま外周を回ってリツパーの後頭部からダブルタップで電腦を破壊、流れるように身をかがめてヴェスピドに残弾全てを使ってコアを撃ち抜いて撃破

ここでスライドストップが掛かるがマガジンリリースボタンを押しながら手元にグロック30を引き戻すと予め左手に持っておいたマガジンを差してスライドリリースレバーを下げる

そろそろ煙も晴れてガードがこちらを視認して盾を構えて拳銃を撃ってくるが、銃口の方向から弾道を予測してステップで回避

そのままガードの右側面に回り込むと頭と胸に2発ずつ撃つ：所謂コロラド撃ちを行って様子を窺う

ガードはその場に倒れて機能を停止、首を折って無力化したヴェスピドはまだ起動しているため眉間に銃口を突き付けて1発撃って停止させる

周囲を警戒して敵性存在がないことを確認するとゆかりはずん子の元へと戻った

「ただいま戻りましたよ、ずん子さん」

「お帰りなさいゆかりさん…お怪我はありませんか?」

「ええなんとか…さあ、行きましようか」

「ああ、行こうか…地獄へな」

「っ!?!」

唐突に聞こえてきた声にゆかりは慌ててグロック30を構えるが、それよりも早く相手の銃撃で弾き飛ばされる

「あぐうっ!!」

「ゆかりさん!?!」

銃を弾かれた衝撃で人差し指が折れて手首を脱臼したゆかりは左手で右手首を抑え、苦しみに悶える

「さっきのは中々に良い動きだったぞ。ゆかりと言ったか、お前が人間でなければこちら側に誘うのも吝かではないんだがな…」

「そ、それは…どうも。……グウウ!!」

2人の前に現れたのは狩人^{ハンター}だ

その両手には大型のハンドガンが握られている、先程ゆかりのグロック30を弾き飛ばしたのはこの銃によるものだろう

ゆかりは激痛を無視して左手で無理矢理右手首を嵌め直すと脚のナイフホルスターからカーボンナイフを取り出して握る

右の手首と人差し指がズキズキと痛むが四の五の言っではいられない

その様子に狩人^{ハンター}は感心したようにつぶやく

「ほう…益々殺すには惜しいな。そうだ、お前を殺したら脳を取り出して持ち帰るか…上手くすれば夢^{ドリーマー}家辺りが新しいハイエンドでも作るだろう」

「随分と恐ろしいことを言ってくれますね…ですがよろしいのですか、そんなに私達ばかり見てて」

ゆかりはチラリと狩人^{ハンター}の後ろを見やって誰かがいることを示唆するが、それに対して狩人は鼻で笑うだけであった

「ふん、隙を作るための嘘^{ウソ}か？ 私には通用しないぞ。なんせ…もう既に包囲網は完成しているからな」

「つ！…！…！…まで、ですかね」

狩人^{ハンター}が指を鳴らすとどこにいたのかぞろぞろと鉄血兵が出て来て周りを取り囲んで

いた

全員が銃をこちらに向けているし数も多い、何よりグロック30もなければあつたとしても流石にこの状況をサブコンパクトだけで突破するのは無理だろう

ここまで必死に逃げてきたが最早詰みである…妹分達は逃がせたい遠くの方でヘリの音も聞こえた、きつと救助されたのだろう

これだけやれば十分だ、心残りがあるとすれば隣にいないずん子を逃がせなかつたことだろうか

ゆかりは目を閉じて頭を垂れた

「諦めたか、良い判断だ。人間相手にここまでやられたのは久しぶりだし私も鬼ではない…最後に何か言い残すことはないか？」

「そうですね、私は殺しても構いませんからずん子さん…この方は見逃してくれませんか？」

「ゆかりさん、そんな…！」

「悪いがそいつは聞けないな。人間を殺すのが私達の至上目的だから…では、さようなら」

「っ!!」

来る衝撃に備えるかのようにゆかりは齒を食いしばって瞑っていた目に力を籠める

身体も強張り後は頭を大口径弾が破壊して辺りに血と骨と脳漿が飛び散るだけ…なのだが何の衝撃も感じない

一瞬で脳幹が破損して痛みを感じる間もなく死んだのか…そう思ったがどうにも違う

手にはナイフと草の感触があるしそもそも銃声は聞こえない、代わりに聞こえたのは銃弾が飛翔する際の衝撃波の音

何かが可笑しいと目を開けて見上げたゆかりの見たものは…頭のなくなった狩人の姿だった

頭を失った狩人はそのままその場に崩れ去り、直後閃光と爆音が襲い掛かって来て何も認知出来なくなる

（閃光手榴弾!? いったい誰が…）

10数秒後、少しばかり回復してきた耳に微かな銃声が聞こえてくる

音の高さからしてサプレッサーを装着しており、連射速度からフルオートで撃っているのが分かる

目は未だ開くことが出来ない為詳しくは分からないが自分の身体に銃弾が撃ち込まれたりしていない、恐らく何処かの部隊が助けに来てくれたのだ

それから5秒ほど経つ頃には耳は正常に近付き、目も僅かながらに開けるようになって

てくる

まだまだ視界は白くてハッキリとはしないがあと10秒もすれば少しはマシになるだろう

聞こえてくる銃声は少なくなっていてもう終わりが近いことを察したゆかりは自分の身体から力が抜けるのを感じた

「だ……ぶっ……と……しよ」

「う、あ……」

疲労と怪我の激痛と閃光と爆音による頭痛でまだしつかりと話すことが出来ないゆかりは誰かに担がれるのを臆気な意識の中感じる

視界と音がクリアになる頃、ゆかりは輸送ヘリに乗っていて右手が固定されて怪我の処置が施されているのに気付く

周囲を見るとずん子が簡易ベッドに寝かされて脚の怪我の手当てが行われていた

「ここは……私達は助かった？」

「あら、気付いたのね。大丈夫？意識はハッキリしてるかしら」

言葉を発するとそれに気付いたのか青い服でAR15系のライフルを持った少女が近付いて話しかけてきた

「ええ、漸く回復してきました。先程の戦闘は貴女達が？」

「ええ、ついでに言うとかあの閃光手榴弾を投げたのは私よ。ごめんなさいね…ああするのが確実だったから」

「いえ、結果として助かったのであれば感謝こそすれ恨みなんてしませんよ。ありがとうございませう」

その言葉に目の前の少女は何処か安心したように微笑む

「そう言ってくれると助かるわ。私はHK416、S09地区にある総隊指令基地の所属よ。貴女は？」

「私は結月ゆかりです。そこで手当てしていただいているのは東北ずん子、共に日本から逃れてきました」

「日本って、ELIDで崩壊した国じゃないの…良くここまで来れたわね」

「ええ、運が良かったんです…それにELIDは思考能力がありませんしね、本能で動くので陽動とかに綺麗に引掛かってくれますからまだやりやすかったですよ」

「なるほどね…今後ELIDと戦闘する際の参考にさせてもらおうわ。出来ればもう少し詳しく聞きたいけれど、今はとにかく休みなさい。基地に着いたら起こしてあげるから」

「そうですね…では、そうさせてもらいます」

「ええ、そうなさい…つとそうそう、貴女達が身体を張って逃がそうとした子達も救助し

たわよ。帰ったら会わせてあげるわ」

「そうですか…そ、れは…：…良かつ、た…：…」

ゆかりはこれまでの疲労が限界を迎えたのか船を漕ぎ始め、やがて耐えられずに身体が倒れる

その身体をHK416は優しく引き寄せると膝枕の体勢に持っていく

「本当によく頑張ったわね…安心なさい、もう大丈夫よ」

HK416はゆかりの頭を撫でて少しでも安らげようとする

スカーレットとWA2000への通信は既にLWMGが行っている

G11は早速情眠を貪ろうとしたので空マガジンを肩間に投げつけておく

恨みがましい目で見えてきたが知ったことではない、寝るならせめて帰ってからにしろ
いつも言っているのに寝ようとするのが悪い

いざ戦闘になればHK416ですら目を見張るほど容赦なく敵を狩り尽くすのにス
イツチがオフだとしてこうなのか

ともかく今は無事に基地に帰るだけである

次第に近付いてくる愛しの我が家に彼女は漸くホッと一息吐く

到着した彼女達はヘリポートで待機していたマガルと共に2人をストレッチャーに
乗せて医務室へと走ってDP28へと託す

後は医療班に任せて自身は報告書の作成の為に自室へと戻る

翌日に救助した彼女らに聴取が行われ、その後はこの基地にて雇用されるのだがそれはまた後日語るとしよう

民間人救出ミッション part 3

「ランディングポイントに到達、これより着陸態勢に入ります！」

「了解！お前ら、自分の得物はしっかり保持しとけよ！」

少し時を遡ってスカレット達が該当区域に到達した直後

ヘリが高度を落として着陸すると中からスカレット、M200、モシン・ナガン、FN49の順番で降りる

彼女等の乗っていたヘリは他の二機とは任務の性質が違うため別なポイントへ降りており、近くに他のメンバーはいない

『チームの展開を確認！本機はこれより離脱します、ご武運を』

「ああ、帰りも頼んだぜ」

『お任せください、では！』

全員が降りて離れたのを確認すると、ヘリのパイロットは離陸する

これで一先ずインフィル（侵入）の第一段階は完了だ

ここからは徒歩で移動して事前に設定した狙撃地点へ就くことになる

ちなみに今のスカレットとM200の格好や装備は普段の物とは大分異なってい

る
た
まず服は山岳迷彩の施された野戦服になっている、着替えは移動中のヘリの中で行っ

更にスカレットとM200は狙撃銃を簡易分解してソフトタイプのライフルケースへと仕舞うと右掛けにして保持している

その代わり今手に持っているのはHK416だ

アクセサリとしてEOTech557、ブースター、M203、LRF（レーザー測距計）を装着している

サイドアームとしてSFPG9をタクティカルベストに付属しているホルスターに納めている

サプレッサーが装着されていないが、それは別段必要ないからだ

またベストのベルト部分には加工を施して左側にスモークグレネード1個とフラッググレネード2個を装着

他には2人とも大きなバックパックを背負っているのもそうだ、M200は普段からバックパックを持っているが今はそれとは違うものを背負っている

そしてスカレットはその目立つ髪を隠すためにミリタリーキャップを被っている上に電子式イヤーマフのCOMTACを被っている、勿論M200もCOMTACを付

けている

サングラスも外しているし普段と同じ所は精々髪型くらいなものだ

勿論これらの装備は全て山岳迷彩が施され、山に入れば視認することは難しいだろう
FN49とモシン・ナガンは野戦服にこそ着替えさせられたが他は普段と変わらず、
2人の変わりようになんかかなり衝撃を受けていた

特に戦術人形であるM200が自身の半身とも言える銃を仕舞って別の銃を、それも
スナイパーライフルではなくアサルトライフルを手に行っている姿は通常であれば考え
られないであろう

「さて、ここからは狙撃地点に着くまで一言も喋るなよ。指示は全て私がハンドサイン
で伝える…お前ら2人はM200からの秘匿通信を元に動け、指示以外の行動は決して
するな。良いな?」

「了解」

「わ、分かったわ…なんとかやってみる」

「は、はい!」

「おい、大きな声を出すな。スナイパーは隠密が大前提だ、覚えておけ」

「す、すいません…」

「今は構わん。だが次からは気を付けろ…じゃあ行くぞ、作戦開始だ」

スカーレットは口頭による指示出しを終えるとそこからは一切口を開くことなく歩いて山へ入る

その後ろにM200が、更にその後方を残りの2人が付いていく

常に背を屈めながら移動し、時には立ち止まったりしながらもかなりの速度で進んでいく

FN49とモシン・ナガンは置いていかれないように着いていくのに必死だが、スカーレット達からすればこれでもかなり抑えめにしている

専門の訓練を受けていない2人にとっては慣れないことだらけで全てが未知のため、行軍が遅くなるのは仕方がないだろう

しかしそれはスカーレットも織り込み済み、この速度でも十分間に合うように予定を組み立てているため問題にはならない

そのまま進んで十分ほどすると少しだけ開けた場所に出た

下を見ると崖になっており、向こう側には草原が広がっている

ここが事前に設定しておいた狙撃地点となる、ポイントについたスカーレットとM200は周囲の安全確認を綿密に行う

数分かけて確認した結果周囲に敵性存在はおらず、また離れた位置にこの地点を視認している敵がないことも把握出来た

2人はその場でバックパックとライフルケースを置いてタクティカルベストを脱ぎ、近くの木の根元に立てるように置く

アサルトライフルはすぐ手に取れる位置に置いておく

それから屈みこむとマップとコンパスを取り出して地面に置き、時折双眼鏡を使用しながら小声で会話を始めた

「現在位置はここ、視界は大体北東方面で標高は2200m…凡そ想定通りだな。ここをLP/OPとする」

「ええ…O、F共に問題なし。Cは…双方問題ないですね」

「2つ目のOは特に見当たらないが、今回の任務じゃ問題にはならんな。同じくKも無視して良い」

「最後のAですが…地上進行は困難、水上は存在せず航空は無視出来るのでこれも問題ありませんね。O^オC^コO^カK^カA、全てクリアです」

FN49とモシン・ナガンは2人の会話を聞いてこそいたが何の話をしているのか一切理解が出来なかった

だが2人の間では意思疎通が出来ているのか領きながら話し込んでいる

O^オC^コO^カK^カAがどうたらと言った辺りでスカーレットとM200は揃ってバックパックを開くと中から数個ほど道具を取り出し、ベリーハイドを作成する

その後簡易ギリースーツを取り出して着込み、ライフルケースを開けて中に仕舞っていた狙撃銃を取り出して組み立てる

組み立て終われば各可動部のチェックやスコープのズレなどが出ていないかを調べ、それが終わるとバックパックをベリーハイドの前方に置いて中に入り、バックパック上に狙撃銃のハンドガードが接するように置くとストックのモノポッドを伸ばして銃が安定するように調整していく

後はプローン姿勢を取って構えてみて違和感がないことを確認すると一旦ライフルはそのまま置いておいて通信を始めた

「こちらスカーレット、狙撃位置に就いた。そちちの状況はどうだ？」

『トンプソンだ。今要救助者を探してるが見つからない、そちちで探せないか？』
「了解、これより観測を開始する。スカーレット、アウト」

通信を終えたスカーレットはM200と共にプローン姿勢のまま観測を始めた

スカーレットはライフルのスコープを、M200はスポットティングスコープを小型トライポッドで軽く固定して接眼レンズを覗いて周囲をくまなく探していく

因みに2人ともマガジンを挿してボルトハンドルを操作して薬室に弾を送り込んだ後ボルトハンドルを上げたままにしておく作業を既に終えている、当然セーフティの解除もしつかりやってある

そして1分としない内に対象を見付けると今度はM200が通信を開始する

スカレットはプローン・サポータッド・ポジションを取ってグリップに手を添え、ストックを肩に当てるとしっかり引き寄せて固定しチークパッドに頬を乗せてポルトハンドルを降ろしてからスコープを覗く

「こちらM200、ターゲットを確認。人数は3、座標はNNE103:37:南東へ向かって凡そ時速10km前後の速度で移動中、そちらとの距離は1000」

『流石、仕事が早いな。お前らも聞いてたな？目標へ向かって全力で走れ!!』

「尚ターゲットの後方より処刑人率いる鉄血の部隊が接近中、距離は500。状況が危険だと判断した場合そちらの指示なく発砲する、許可を」

『ああ任せたぞ！GO！GO！GO！』

「了解、状況に変化があり次第逐次報告する、アウト」

M200は通信を切るとスポッティングスコープを覗いたまま微動だにしない、スカレットも然りだ

その上彼女は一瞬でターゲットとの距離、風向き、風速、角度、摂氏、高度、緯度及び方位等の計算をし終えていつでも撃てるよう待機している

やがて状況の変化を観測したM200は通信を再開する

「こちらM200。ターゲットの内1名が転倒、移動が止まった…鉄血がすぐ近くまで

来ている、急げ」

『奴らの予想到達時間は!?!』

「凡そ30秒」

『ならなんとか間に合いそうだな! 私達はあと40秒くらいで付きそうだ!!』

「了解。こちらから狙撃する可能性も高い、射線に立たないように注意せよ」

『分かつてらあ! 見えた: : がこりや不味いな。一〇〇式、行け!!!』

トンプソンの指示を受けた一〇〇式が縮地で接近し、処刑人の刀を受け止めたのを確認したスカーレットはトリガーに掛けていた指をトリガーガードに移す

「アルファ部隊のターゲットとの接触を確認。狙撃中止、待機へ移行せよ」

「移行完了」

「了解、状況が動き次第指示を出す。引き続き警戒せよ」

「了解」

M200がスポッターとなりスカーレットへ逐次指示を出している

普段彼女はスカーレットに対しては敬語を用いているが今はそれを取っ払ってかなり簡潔に、淡々とした口調になっている

その声も普段の落ち着きながらも優しさの籠っている声ではなく、非常に冷たいものだ

スカーレットに至っては最早冷徹とすら言っている程に冷たく、その上今の彼女からは普段の覇気を感じられないばかりかその存在感が希薄になっていた

後ろで見ているFN49とモシン・ナガンの目には彼女達は山と一体化しており、こんなに近くにいるというのにまるでそこに誰もいないのではないかと錯覚するほど

いくらスナイパーハイドに隠れていると言ってもここまで存在を気取らせないことは難しく、その上今回構築しているのはベリーハイド：言ってしまうえば簡易的なものだとそれを考えるとハッキリ言ってしまう異常である

特にモシン・ナガンは何度か部隊のスナイパーとして鉄血と戦闘を行った経験があるが、これを前にすると自分は全く以てスナイパーなどではなかったのだと思いつた。今までの自分のしてきたことが兎戯に等しいと言外に突き付けられた気分である

しかし不思議とそれを不快には思わなかった、寧ろ感動を覚えているとすら言っている

恐らくは今日の前にいる本物の、それも伝説級のスナイパーの教えをこれから先受けることが出来るのだと理解しているからであろう

これまでの自分とは比較にならない程スナイパーとして強くなれる：否、本当の意味でのスナイパーに成れる

戦うことを至上目的として作られた戦術人形がそれに心躍らない訳がないのだ

「処刑人の撃破を確認。残存敵性反応もなし、一時的に完全待機状態へ移行せよ。目を休めろ」

「こちらも確認した。これより完全待機状態へ移行する」

モシン・ナガンが人知れず感動しているとM200が声を上げた

それにスカーレットも続き、ストックから頬を外して顔を下に向けて目を閉じる

狙撃というものは非常に神経を使う上に眼精疲労も問題となる

その為今回のように任務は終わっていないが一時的に完全な安全が確認された場合には、しっかりと目を休めるべきである

疲労回復に効く目薬を用意しておくのも良いが、使用する際には周囲の環境や確保出来る休憩時間などをしっかりと考慮した上で使用しなければならない

今回はまだまだ気は抜けず、すぐさま観測へ戻らなければならないことが考えられるため使用しない

そしてそれは正解であった、一〇〇式とターゲットとの会話から他の地点にまだ要救助者がいることが判明したので

それを知った直後、2人は一瞬で気を張り直すと再びスコープを覗いて周囲の観測を開始する

そして一〇〇式の通信機から聞こえてきた『別れて数十分』という情報から観測範囲

を狭め、倍率を少し上げて観測を続けるとM200が2人の人影を発見した

「ターゲットと思しき人影を発見、座標はNNW151:i5。人数は2、特徴が一致する。確認を」

「補足、紫と緑の成人女性…確認した」

スカーレットもその地点を見て確認を取った

倍率を更にはげると紫が緑に肩を貸しているのが見て取れる

「こちらスカーレット、対象を補足した。座標NNW151:i5、2名…端末に写真を送る、そちらで確認を取れ」

『こちらAK-74U、了解。……………被救助者に確認を取った、その2名がターゲットで間違いない』

「了解、ブラボーはポイントへ急行せよ」

『こちらHK416、既にポイントへの移動を開始している。到達時間は凡そ4分』

「了解。そちらにも鉄血が接近中…^{ハンター}狩人だ。1個中隊、距離700…斥候として5人分隊を5つ前方に展開させている、ターゲットとの距離300。急げ」

『了解』

「状況に変化があり次第逐次報告する、アウト」

スカーレットとM200の観測によって得た情報をHK416の部隊へと流し、観測

を続ける

そのまま暫く経つと斥候の1つがターゲットの近くまで接近するのを確認した

「こちらM200。斥候がターゲットに接近、紫が緑を降ろして戦闘準備をしている…
武装はハンドガンとナイフ、手榴弾が複数」

『まだ到達には時間がかかる、そちらの判断で狙撃せよ』

「了解、狙撃待機…ターゲットがスモークを炊いた。TVFを使用せよ」

「了解、TVF作動、ターゲット補足。戦闘を行っている……戦闘終了、ターゲットは無事」

「確認した。引き続き待機せよ」

「了解」

紫の行動によって視界が遮られたが瞬時にスコープのサーマル機能を使って視界を確保、一切慌てることもなくターゲットを補足し続けて危険が迫り次第狙撃するつもりであったが杞憂に終わったようだ

だが…

「こちらM200。ターゲットを狩人が補足、接近した。そちらのポイントへの到達は確認している、奴らを外周から包囲せよ」

『了解、突撃のタイミングはそちらの狙撃に合わせる。狩人を狙え』

「了解…ターゲットの武装が破損及び負傷。命に別状はなし」

「あと少し奴らの包囲が狭まるのを待て。…撃て」ファイブ

「了解」

狩人が紫のハンドガンを弾き飛ばしたことで危険性はもうないと判断したのか周囲に展開していた鉄血兵が包囲を狭める

その狭まりが一掃しやすくなるまで待つようM200は指示を出し、良い感じになつたところで発砲命令を下す

それを聞いたスカーレットはトリガーに掛けていた指をスツと引く

瞬間、竹を割つたような音と共に弾頭が射出され飛翔する

緩やかな放物線を描いた338ラプアマグナム弾はハンドガンをターゲットへ向けた狩人の頭部へヒット

瞬間空洞によつて頭が弾け飛び、首から上がなくなつた

それを見たHK416とG11の本体が閃光手榴弾を投擲、防御姿勢を取る

閃光と爆音によつて機能不全を起こした鉄血兵の数々をHK416とG11はダミーを率いてターゲットに近い鉄血兵から撃ち殺し、LWMGは1km離れた位置から338ノーママグナム弾を撃ち込んで狩人の後方に展開していた鉄血兵から撃ち殺す

彼女達の殺戮は一分としない内に終わり、ターゲットを回収してヘリまで運んでいく
それを確認したスカーレット達はそれでもまだ休むことはなく、まだ残存している敵
がないかを探す

やがて新たなターゲットもヘリに乗せて飛び立ったところで漸くスコープから目を
離してWA2000へ通信を繋げる

「こちらスカーレット、オールアチーブ。繰り返す、オールアチーブ」

『こちらHQ。了解、速やかに帰投せよ』

「了解。これより帰投する、アウト」

通信を終えたスカーレットとM200は後始末を開始する

ライフルからマガジンを抜き、ボルトを操作して薬室の弾を排出するとマガジンに詰
め直す

それが終われば簡易分解をしてライフルケースに収め、他の道具を全てバックパッ
クに戻す

そしてタクティカルベストを着直すと作成したハイドを破壊してネットなどは回収
してバックパックへ、他の枝や葉などは適当に処分する

それからバックパックを背負い直してライフルケースを右掛けに掛けてアサルトラ
イフルを手にとって土を払い作動確認を行う

全ての準備が整うとスカールレットは移動を開始し、M200がFN49とモシン・ガンに秘匿通信を行って付いてくるように指示を出す

勿論一言も喋らないでいるように指示するのも忘れない

そして来た時と同じように背を屈めながらもかなりの速度で山を下るとスナイパーチームの回収地点へと到着する

そこにWA2000が予め通信で手配しておいたヘリが丁度到着し、すぐさま乗り込む

こうして本任務に於けるスナイパーチームの任務は完了である

この基地に来てから初めて戦場へ来た2人は何一つさせてはもらえなかったが、それでも非常に貴重な経験をしたのは確かだ

今日この場所で見えたものを2人は生涯忘れることはないだろう、そして基地に帰るとすぐにでももつと本格的な訓練を施してくれと志願するつもりだ

だがそれはまだ先の話……とにかく今は基地へと無事に帰って救助した民間人に聴取を行って今後の身の振り方をどうするか決めなければならぬ

それに何もしていないとは言えかなりの速度（スカールレットに取ってはかなり控えめ）で山を登り降りする行軍によって疲れていた

ともかくにもこれで2人にとっての初任務は終了である

思わぬ再会

「うーん、なんだかなあ…」

「…どうしたのよ、急に唸りだして」

民間人を救い出した翌日、S09H基地の執務室にはHK416とトンブソンが作成した作戦報告書に目を通すスカーレットとWA2000が居た

そして報告書を読み終わったところでスカーレットがなにやらぼやいたのだ

「いやな、昨日救出した民間人の内の1人なんだが…なくんか見覚えがある気がするんだよ」

「なに、知り合いなの？」

「…わっかんねえ。どっかで見た気はするんだがそれが何時何処でなのかさっぱり思い出せねえんだ」

「じゃあただの勘違いなんじゃないの」

「かもな。取り敢えず今はあいつらの容態が安定するのを待つしかねえ」

今現在救出した民間人は医務室にてDP28とマガルの治療を受けており、精密検査等も行われて安全が確認されるまでは指揮官であるスカーレットですら面会は出来な

い状況下にある

とは言え一〇〇式達から聞く話やスカーレット自身もスコープ越しに見た限りではすぐにでも面会が許される状況にはなるだろう

「それじゃ、私はあの子に訓練をつけに行くわ」

「おう、頼んだぞ。私は…暫くここで待機しとくか、本社から連絡が来るかもしれねえしな」

「種子貯蔵庫のことね、分かったわ」

ここでWA2000がFN49への訓練の為に執務室を出て行った

スカーレットも顔を出そうかとも思ったが民間人のことと種子貯蔵庫のことを考えれば下手に出歩くべきではないだろう

こういう時指揮官と言う肩書を煩わしく思う、というか正直に言うとなんか思っている彼女としては教官兼現役スナイパーとしてもっと人形達の訓練に顔を出し、戦場に出たいのだが曲がりなりにも指揮官である以上は最低限執務室にいなければならないのだ

それもS地区総隊司令官であることを考えればこれでもかなり自由奔放にやれているだろう

やれやれと思いながら基地の収支に関する書類に目を通していると通信が入った

『こちら医務室です。民間人全員の精密検査が終了しました』

「お、てことはもう会いに行っても良いのか？」

『構いません、寧ろお願いします』

「お願いしますって…なんかあったのか？」

『民間人の内の1人が貴女に会いたがっています。紫色の髪が特徴的な結月ゆかりという女性ですね』

「…そうか、私も話をしたいと思ってたんだ。丁度いい、今から向かうぜ』

『畏まりました。お待ちしています』

マガルから入った通信を切るとスカーレットは書類を机に置くと立ち上がり、医務室へと歩みを進める

万が一本社等から通信が入った時の為に外部通信用の端末を持って行くことを忘れない

やがて目的地に辿り着いた彼女は医務室の入り口に設置してある情報読み取り用の端末にIDカードを示す

するとすぐに電子音が鳴って扉が開き、中へ入る

「お待ちしていました。こちらです」

「どれどれ…おお、元気そうだな」

出迎えてくれたマガルの案内で民間人等のいる病室に入るとそこには治療を施された5人の少女達がいた

皆あの作戦の時よりも顔色は良くなっており、多少ながらも笑みも浮かべていた
そのことにスカレットは安心すると共に気前良く声を掛ける

「ど、どうも……」

「こ、この人が……ううっ」

「大丈夫よ、きりちゃん。優しい人だつて聞いたでしょ？それに助けてくれた人にその態度は失礼よ」

「……やっぱ、怖いのか……」

「ま、まあまあ。何はともあれお礼せなな、ホンマにありがとう。うちらが今こうしてられるんわあんさんのおかげや」

圧倒的な存在感を持つスカレットに対して水色の少女は戸惑いながらも挨拶をし、小豆色の少女は怖いのか緑色の女性に抱き着く

抱き着かれた女性はそんな彼女の頭を撫でながらも諫め、スカレットはその事実に戻っている

赤色の少女は物怖じしない性格なのかスカレットを相手に笑顔でお礼を言ってきた

そんな少女の対応に少しばかり心を持ち直したスカーレットが改めて何かを言おうとしたその時

「やはりスカーレットさんでしたか：お久しぶりです」

「：私のことを知ってるのか？」

「ええ、忘れる筈がありませんよ。貴女は：」

「すまん。何処かで会った気はするんだが、思い出せねえんだ」

「まあ仕方ありませんよ、あの時は私もまだバックアップメンバーで貴女とは一度しか会ってませんから」

「バックアップメンバー？どっかの所属か？」

「ええ…この襟章、見覚えありませんか？」

「んー…？ってお前それは!!」

紫色の女性がサイドテーブルに置かれたポーチから逆三角形の襟章を取り出して見せると、スカーレットはその顔を驚愕に染めた

「そのバッジ：Village Shrineに所属してる、いやしてたってことか」

「そういうことです。今は日本そのものが壊滅してしまっただけでV・S・も最早存在しませんけど…」

「てことは…お前と会ったのはFREEDOM壊滅作戦の時か。随分と懐かしいじゃね

えか」

「もう随分と前のことですからね」

「…なあ、2人して何の話しとるんや？うちにも分かるように言つて欲しいんやけど」

「あー…なあ、これ言つちまつても良いのか？」

「うーん…まあ良いのではないでしょうか？もう組織は存在していませんし」

「それともそうだな…んじや説明すつぞ、V・S・つてのはな…」

それからスカレットは彼女達に説明をし始めた

Village Shrine、通称V・S・は日本政府直属の犯罪対策組織だ

国家組織であり秘密組織でもあるためその存在は一般には完全に秘匿されている

組織としては主に国際犯罪組織への対抗と情報収集を目的としており、数々の犯罪組

織がV・S・によつて壊滅してきた

メンバーにはV・S・の証として特別な襟章が与えられていて、それを付けていれば

いつでも総理大臣にすら会えるという代物だ

当然、任務時以外では外す必要がある

スカレットがゆかりと会つたのは世界規模の犯罪組織であるFREEDOMを壊

滅させる為の作戦の時だ

当時既にUSSOCOMのスナイパーだったスカレットはV・S・がFREED

OM壊滅の切り札となる証拠が入ったチップを入手し、そのチップに掛けられたプロテクトを解除するための時間を稼ぐ作戦に投入された

その時にスナイパーであるスカーレットに必要な弾薬等の物資を届けたりするバックアップメンバーの中にゆかりはいたのだ

アメリカの特殊部隊から来た凄腕のスナイパーということは知っていたしかなり存在感がありながらいざ狙撃となると一気に気配が希薄になるスカーレットのことをゆかりは覚えていた

またV・S・のメンバーはカモフラージュの為に一般社会へと溶け込んでいる場合が多く、結月ゆかりも普通の学生として生活する傍らV・S・の任務に参加していた

そしてこの場にV・S・に所属していたのはゆかりだけ、つまり他の面々はそんな組織のことなど知らなかったために何の話をしているのか理解出来なかったのだ

「ゆ、ゆかりさん秘密組織の人間やったんか!？」

「そ、そんな…全然知らなかったよ……」

「仕方ないのよ、性質を考えれば貴女達にも知られるわけにはいかなかったもの」

「ずん姉さま…?もしかしてずん姉さまも」

「ううん、私は違うよ。でもゆかりさんがそこに所属してるのは知ってたし、ひそかにサポートもしていたわ」

「…てえことは2人ともうちに隠れて危険なことしとったってことか？」
「…ごめんなさい、皆を支える為にはああするしかなかったから…」

ゆかりの秘密を聞いた皆の反応は様々だ

だが赤色の少女の言葉に他の3人もハツとした顔になる

そんな面々にゆかりは気まずそうに頭を下げていた

「部外者の私が言うのもなんだが、あんまり責めてやるな。そういう仕事をする人間もいなきやこの世界は回らねえんだよ」

「それはなんとなく分かる…せやけど…」

「ま、すぐに納得しろとは言わねえよ。急なことで混乱もしてるだろうしな…取り敢えずその件は後回しだ、先に自己紹介を済ませちまおうぜ。お前らの今後も決めなくちゃいけねえしな」

「それもそうですね…では、必要ないかもしれませんが私から。私は結月ゆかり、元Village Shrineのメンバーで実働部隊として潜入と工作活動を主に行っていました。拳銃の心得なら多少はあるつもりです」

「うちは琴葉茜。うちに出来るんは料理くらいか？んでこっちは妹の葵や」

「よ、よろしくお願ひします」

「次は私ですね、東北じゅん子です。でも皆からはずん子って言われてますし是非そち

らで呼んでくださいな♪特技としては一応弓を扱えますわ。で、こっちが…」

「挨拶くらい自分で出来ます、ずん姉さま。東北きりたんです、ずん姉さまの妹でPCが得意です」

「ゆかり、茜、葵、ずん子、きりたんだな…よし、覚えたぜ。私はスカーレット・ミツチエル、ここS地区総隊指令基地の指揮官だ」

「総隊指令基地…回収される時も聞きましたが大層な名前ですよね」

「まあな。ま、今は難しいことは分からなくてもいい。取り敢えずそこそこ偉い奴なんだ程度の認識で良いぜ」

「あ、結構偉いんや…なら敬語とか使った方がええんかいな」

「た、確かに…」

「あーやめろやめろ！そんなかたっ苦しいのは苦手なんだ、気楽に行こうぜ？」

「そうは言うてもゆかりさんとずん子さんは常に敬語やで？」

「それはまあ…元からそうだってんなら気にしねえさ」

「それじゃあ、私も普段通りに話させてもらいますね」

「ああ、そうしろ。取り敢えずお前らの処遇については今後考えていくことになる…私個人としちやゆかりを工作員として雇用したいがな」

「…ゆかりさんに危険なことさせる気か？」

「あくまで可能性の話だよ、そうカッコすんな。取り敢えず今は傷を治すことに専念しろ、特にずん子はな」

「そうですね…今のままだと真面に歩くことも出来ませんし」

「ずん姉さま…」

「大丈夫よ、きりちゃん。命に別状はないし脚だつて少しすれば治るつてDP28さんも言つてたでしょ？」

不安がるきりたんをずん子は頭を撫でて落ち着かせる

彼女の傷は銃弾が掠つたもの、左脚の脛の肉が一部抉れてはいたが骨や血管に損傷はなかつたしゆかりによる応急処置が良かったために完治するのも時間の問題だろう

一通り自己紹介も終えて暫く雑談をしたスカーレットは医務班に今後のことを任せて医務室を後にする

まだ色々聞きたいことはあつたがそれは後程聞くことにした

「しつかしV.S.か…あの日和つたスナイパーも元気にしてると良いんだが。後でゆかりに聞いてみるか」

スカーレットはあの日出会つた甘すぎる考えを持ちながらも確かな実力を付けていったスナイパーのことを思い出す

彼女は絶対に誰も傷付けないと言い放ち、人体には決して撃たなかつた

敵の持つ銃や通信機などを撃ち抜いて無力化するのだ

そんな甘い考えにスカーレットは呆れたが、それでもその信念を曲げることなく作戦を成功に導いた彼女のことを評価していた

彼女とも再会したいと思うが希望は持たない方が良好だろう、ともかく今は執務室に戻すべきだ

そんなことを思いながらスカーレットは歩みを進める

数日後、ずん子はまだ車椅子だが彼女等の傷も癒えた為改めて彼女等の処遇について通信越しではあるがヘリアントスも交えて話し合いが行われる

その結果彼女等は全員この基地で雇用する運びとなった

結月ゆかりは表向きはスカーレットの秘書として雇用し、身辺警護に関する訓練も課すことになった

だがその実態は諜報員としての訓練であり人知れずこの基地の諜報部隊に加えるつもりだ

琴葉姉妹と東北ずん子はスプリングフィールドのカフェで従業員として雇用し、彼女の元で働くこととなる

東北きりたんはG & a m p ; Kの規約的にまだ労働をさせられる年齢ではないのとこの雇用は見送られたが、ずん子の家族としてこの基地で生活をする許可を取った

労働は出来ないがお手伝いなら良いだろうとのことで基地の掃除など雑用をするようになる

こうして彼女達はこの基地の一員として迎え入れられ、日常を過ごすことになっていく

そうした日々が始まった翌日、ゆかりはスカーレットに相談を持ち掛けていた

「なに、逸れた仲間がもう一人いるんだあ？なんでもつと早く言わなかったんだ？」

「ごめんなさい、あの時は私達もいっぱいだったのとまだ助けに来てくれたのが貴女であると分かっていませんでしたし…信用出来ない人に話したくもなかったの
で」

「気持ちには分かるけど、それでも1日の遅れは救助作戦に於いては致命的よ。今はとやかく言わないけれど救助が終わったらたつぷり説教してあげるから覚悟してなさい」

「まあまあ…取り敢えず今は情報だ。出来る限り詳細に話せ、出来るな？」

「ええ、勿論です。まずその仲間の名前は弦巻マキと言いまして……」

こうして情報を聞いたスカーレットはMDRに通信をして該当する人物に関する目撃情報等がないか電子媒体上で調べさせる

M1895とPPK、そしてF i v e s e v e Nにフィールドワークによる調査をさせて情報を集めていく

すると翌日の夜にはある程度纏まった情報が入ったのだが問題があった

どうやら該当する人物は人身売買を主に行う犯罪組織に囚われているようだ

もう囚われてから何日か経っているのだ、もうそろそろ買い手が付いても可笑しくはないだろう

その為今回は特に迅速な作戦の遂行が求められる…その結果取り敢えずその民間人の囚われている施設に突撃を掛けてそこからはその場で臨機応変に対応することとなった

そんな無茶な作戦であることからメンバーは特に能力の高い者達で固められることとなる

具体的にはスカーレット、WA2000、HK416、トンブソン、MK.23、MG5、KSG:、ミレニアム8の出撃だ

クレアこそ基地で待機となるが、この基地きつての戦力の投入だ

執務室はクレアが預かり、特殊作戦時にのみ使う指揮室にはジェリコが入って指揮を行おう

そして今回スカーレットはスナイパーとしてではなく直接殴り込みを掛けに行くスタイルだ

これはターゲットの安全を何よりも優先した結果である

しかし何故か銃器を一切使わないという…どういうことかは次回語ろう

ともかく突撃を掛ける準備は整った、あとどれくらいの猶予があるかは分からないため、作戦区域に入り次第すぐさま作戦は決行された

ここからスカーレット率いるミレニアム8による蹂躞劇が始まるのだった…

民間人救出ミッションExtra

『Five—sevenより新たな情報が入りました、どうやらターゲットには既に買手が付いていて「味見」をするために当該施設へと到着しているようです。最早一刻の猶予もありません、速攻で片付けて下さい』

「味見ねえ…胸糞悪い話だな。取り敢えず了解だ、もう既に作戦区域には入った。すぐに行動を開始するぜ」

『こちらでも到着を確認しました。では作戦の最終確認です、手短に行きますよ…指揮官とトンプソン、MK・23は自由にして下さい、HK416とKSGは正面入り口から堂々と侵入、WA2000は狙撃地点から各地点を見張って逃亡しようとする者の排除、MG5も同様に』

「了解」

ヘリで移動して情報にあつたビルの近くへと迫り着いたミレニアム8の面々は予め決めておいた作戦の確認を済ませて移動を開始する

スカーレットとトンプソンとMK・23は施設の側面から少し離れた場所へ移動すると、スカーレットがその手に持った得物を持ち上げる

その姿は異様そのものであった

まず手に持っているのは銃ではなく剣だ、それもかなり巨大な

片刃の大剣なのだがその刃は綺麗な曲線などではなく、まるで目の粗い鋸のようになっっている

その全長はスカーレットの身の丈をも越えている、当然その分重量も嵩む…この大剣は520kgもあり、無論如何なスカーレットと言えどこれを生身で持ち上げることは不可能だ

その為今の彼女はこの剣以外にも特殊な強化外骨格を装備している

身体の背面から装着して腕、背中、腰、脚を強化するものだ

装甲等は動きの邪魔になるからと言って排除されている

そして何より特徴的なのはその外骨格を隠すように派手なジャケットが装着されている点である

白を基調としており銀や黒で装飾がなされており非常に良く目立つ

これは敢えて目立たせるのが目的だ、そもそもこのスタイルの時は近接しか出来ないし大剣を振り回す姿はどうあがいても目立つ

だったら余計に目立たせて敵の目を引いて陽動やタンク役を引き受けてやるというスカーレットの言葉によって作られた

因みにこれらの装備には名前が付けられていて大剣は「異形の呪剣」強化外骨格を含めたジャケツトは「白夜の狼牙」と名付けられている

兎も角今回スカーレットはこのスタイルで施設内へ直接殴り込みを掛けに行くのだ

参考画像

『こちらWA2000、狙撃地点についたわ』

『MG5、同じくポイントに到着』

『了解です…さあ、指揮官。後は貴女の突入の合図で開始です、早々をお願いします』
「分かってらあ…行くぞゴラア!!」

各々が任務開始ポイントについたことを確認するとスカーレットは肩に担いでいた大剣を腰溜めに構えて全速力で走る

そのまま施設の壁面に大剣を突き刺すとすぐ様抜いて壊れかけている壁に向かって全力で叩きつけた

すると轟音を鳴らしながら壁は粉碎され、大穴が空く…当然内部にいた組織のメンバー達は全員がそれに気付くが余りに予想外の事態過ぎて碌に動いてはいないようだ

それを見たスカールレットはチャンスとばかりに突撃し、大権を振り回して近くにいた敵を次々と斬り裂いていく

そしてトンプソンとMK・23も続いて内部へ侵入して別々に行動していく

ここまで派手な侵入の仕方をしたのにも一応理由はある、これだけ暴れれば救出対象を買いに来ている者にも確実に聞こえる

すると味見なんて後回しにして保身に走るだろう、そうすることで一先ずターゲットの危機を回避させる

その狙いは成功しているのだが今の彼女達にそれを確かめる術はない、とにかく暴れてターゲットを探すのみだ

スカールレットが大剣で両断し、トンプソンは銃撃と拳によって正確に頭を潰す

MK・23は比較的隠密に動いて敵の死角から襲い掛かって確実に殺していく

「…始まったわね」

「ええ、私達も行きましょうか」

その頃、正面入り口に潜伏していたHK416とKSGは音を聞いて作戦が始まったことを知る

そしてHK416が中腰になりながら進みその後ろにKSGが続く、当然2人とも得物を構えながらだ

敵が現れれば2人がそれぞれ違う敵を撃つて黙らせる、なんの打ち合わせもしていないが示し合わせたかのように同じ敵は一切撃たない

最初から最後までこの状態を一切崩すことなく静かに、しかし素早く移動しながらひたすらに敵の頭を撃つ

頭を撃つのはそれ以外の場所では即死させられないからだ

例え機関砲であろうが脳幹を潰さない限り人間は即死することはない

特に今回HK416が持っているのはM855A1普通弾だ、威力に乏しいこの弾ではストッピングパワーに欠ける

普段の彼女はS09H基地特性の6.8mSPC弾を使うのだが、今回は狭い室内での戦闘が多くなるため二次被害を考慮して敢えて普通の5.56m仕様で来ている

因みにKSGが持つてきているのはスラグ弾だ、万が一にも仲間を撃たないのもそんなのだがもしもターゲットを盾にされるとバックシヨットでは確実にターゲットもろとも撃ち殺してしまう

今回の任務の特性を考えればスラグ弾を撃つのが最適解であろう

そうして彼女達は進んでいき、ターゲットを探す…

「おらああああ!!!」

スカーレットの振るう剣が近くにいた逃げ腰の敵数人を同時に斬り裂いて両断する
作戦開始から数分後、彼女は幾つもの部屋を周りながら発見した敵を全員容赦なく殺
していった

この部屋には後一人敵がいるが完全に戦意を喪失しており尻餅をついていた
スカーレットが大剣を掲げながら近づくと悲鳴を上げて命乞いをしてきた

「た、頼む…：息子がいるんだ！だから殺さないでくれえ!!!」

「息子だあ？それと私がお前を見逃すことになんか関係あんのか？」

「す、すすすすごく可愛いんだ！写真もあるぞ、見るか？」

「ほう…：見せてくれ」

スカーレットは男の傍に屈んで男の出す写真を見る

「なるほどな、こりや確かに可愛いもんだ。そんな息子の為にも生きて帰ってやらねえ
となあ？」

「そ、そうなんだよ！だから頼む、殺さないで…」

「なら情報を寄越せ。私はここに捕らえられたつつう女共を探しに来たんだが中々見つ

からなくてなあ……なあ、何処にいるか知ってるか？」

「な、なんだそんなことで良いのか!? おおお教えてやる、だから命だけは……!」

「おら、早く教えろ」

「わわ分かかった……この2階下で、隣の部屋だ。そこに檻があつて捕らえた女は皆そこに入れてる」

「ほうほうなるほどなあ……ついでもう1つ聞いときたいんだが、今日ここにその女の味見に来てる奴がいるよな? そいつが買う予定の女もそこにいるのか?」

「そ、それは……ヒイツ!」

男が言い淀むとスカーレットはデザートイーグルを抜いて男の顎の下に突き付けた

それはどんな言葉よりも明確な脅しであつた

「い、言う! 言うからやめてくれえ!!!」

「だつたらさつさと言いな。私は気が短くてなあ……今にも撃つちまいそうだ」

「ままままま待て!! や、奴は一番下の階にいるはずだ! そこはVIPルームになつてゐる!!」

「なるほどな……大体知りたいことは分かつたぜ、ありがとな」

そう言うときスカーレットはデザートイーグルを仕舞つてから立ち上がる

その様子に男は助かつたとばかりに胸を撫でおろす

「ああ、そうだ…あと一っただけ頼みがあるんだが」

「な、なんだ？何でも聞いてくれ」

「そいつは殊勝な心掛けだな、んじやあ…死んでくれ」

「え…」

直後、大剣の刃が男の頭を下から食い破る

最初からスカーレットはここにいる連中を活かして返すつもりなど微塵もないのだ

「ヒュー♪相変わらずエッグいねえ！」

「トンプソンか、丁度いい。ターゲットの位置が分かった、すぐに行くぞ」

「お、そいつは僥倖だなボス。それで位置は？」

「この下に商品が沢山あるらしい、ついでに本命は最下層にあるんだとよ」

「なるほどな、だが下へいく階段なんかなかったぞ？」

「どうせどつかの部屋に隠されてるんだろ。探す手間も惜しいから直接行く」

「直接行くってどうやって…っておい!？」

トンプソンが疑問を呈すとスカーレットはニヤリと笑って大剣を大上段に構えた

何をするか察したトンプソンは自身の得物をしっかりと保持して衝撃に備える

その直後スカーレットが大剣を全力で振り降ろす…とんでもない轟音が鳴ると同時

に床に罅が入った

それを見たスカレットは笑みを深くするともう一度大剣を振り上げてから床に叩きつける

すると今度は床が崩れて大穴が空いた

スカレットとトンプソンは穴が空くと同時に落ちて着地する

崩れた瓦礫の下敷きになったのか足元から呻き声が聞こえるが無視して隣の部屋へ移動を開始した

「こりやまた…随分な光景だな、ボス」

「全くだ…このご時世に良くもまあここまで集めたもんだぜ」

情報にあつた部屋へ入ると確かにそこには檻があつて女が閉じ込められていたが、その数に2人は普通に驚く

パツと見て30人ほどはいるだろうか、これでも買い手がつけばその人物の元に渡る為減っているのだろう

この荒廃した世界でここまでの人数を集めて売りさばくのは中々に難しいというのにこの組織はやつてのけている

戦闘員の練度は低いが人攫いに関しては間違ふことなきプロである

女達は全身に返り血を浴びている上に禍々しい大剣と銃を持った2人に完全に怯えているが一々説明するのも面倒なので無視して檻の鍵だけ壊しておく

そのまま部屋を出て搜索すると下へ降りる階段は簡単に見つかった
階層ごとに階段の位置を変える、なんて面倒な造りでもなかったため連続で降りてい
き最下層に辿り着く

そこには一室しかないがその一室が異様に広かった

見ると良く肥えた男が半裸の女を盾にして拳銃をこちらに向けていた

「ち、近づくなあ！それ以上近寄ると撃つぞお!!」

「あんまギャーギャー騒ぐんじゃねえ、耳が痛えだろうが！」

「そんなことを言っている場合なのか、ボス？」

トンプソンの言う通りだ、そんなことを言っている場合ではない

だがスカーレットは酷く冷静でなんの焦りも抱いてはいなかった

「さて、一応聞くぞ。もうこの人間は全員殺した…もうお前を守ってくれる奴は誰も

いねえ。投降する気はあるか？」

「断るに決まってるだろ！動くなよ…動いたらこの女の頭を吹っ飛ばすぞ」

男は拳銃をスカーレットから盾にしている女の側頭部に突き付ける

それに女は悲鳴を漏らすスカーレットは全く意に介していなかった

「あーあ…素直に投稿してりゃあ一思いに殺してやったつてのに。断るんなら仕方が

ねえ、思いっきり残酷な目に遭ってもらうぜ？」

「なにを寝ぼけたことを言っている…さあ、そこを退け！一歩でも私に近付くんじやないぞ…」

男がこちらにジリジリと近付いてくる

恐らくはスカールレットの背後にある扉から出て脱出するつもりなのだろう

しかし今男の盾となっている女は彼女達の最重要ターゲットだ、逃がすわけにはいかない

だが人質として銃を突き付けられていてはどうすることも…そうなる場面だがスカールレットはなんてことはないように歩いて男に近付き始める

「う、ううう動くなど言ってるだろう!!こいつがどうなつても良いのかあ!!!」

「そいつを殺したらもうお前の盾はいなくなる、違うか?つまりお前はその女を殺せやしねえよ」

「ふ、ふざけやがって…!こようになったらせめて道連れにしてくれる!!」

男はそう叫ぶや否やスカールレットに対して撃つてくるがその銃弾は大剣によって弾かれる

この大剣はスカールレットよりも大きいのだ、かなり大柄なスカールレットでもその身を完全に隠せる

何度も何度も撃つがびくともせず、やがて弾が切れてスライドストップが掛かる

男はやばいと思うが最早手遅れだ、スライドストップの音を聞いたスカーレットは走って接近し、男の顔面を掴んだ

そのまま人質の首に回していた左腕を外すと蹴り飛ばす

「や、やめろ……俺が悪かった、なんでもする、だから……」

「今更過ぎんだろ、銃を撃った相手に命乞いして助けてもらえらと思つてんのか？」

「頼む……金なら幾らでも出す、俺の知つてる情報も全部話すから！だから、頼む……」

男が必死に懇願するもスカーレットはもう会話する気もないのか大剣を振り上げる

「な、なにが欲しいんだ？ 欲しいものがあるなら全部やる、だから、だから……やめてく

無情にも振り下ろされた大剣によって男の腹が裂かれ、悲鳴が途切れる

だがまだ死んだわけではなく、苦しみに喘いでいるがその声の不愉快だったのか大剣の刃を喉に突き刺して声帯を潰した

それでもうこの男は失血性ショックによって死ぬまでの間ずっと苦しみ続けるだけだ

因みに素直に投降した場合は頭を潰して即死させてやるつもりであった

「まるで豚だな、ありや……ま、ともかくターゲットは回収だなボス」

「ああ、もうここに用はねえ。おい、立てるか？」

スカーレットがターゲットに近付くが恐れられて短い悲鳴が上がる

それに少しショックを受けるもこの惨状では仕方がないかと気持ちを切り替えて離れ、通信を始めた

「こちらスカレット、ターゲットを発見した。待機してる回収班を寄越せ」

『こちらジェリコ。了解、すぐに向かわせます』

「それからMK. 23、最下層まで来てくれ。ターゲットが怯えていて私やトンプソンだとダメみてえだ」

『あらあら……ま、その姿じゃ仕方ないでしょうね。了解よ』

その後数分としない内にMK. 23がやってきてターゲットに寄り添って脱出する
因みに帰る際には隠し階段を裏側から開けたので空けた大穴は無視出来た

地上階や施設の外は正に地獄絵図であり、見渡す限り死体と血と臓物……そして消化途中の食物などでみだされていた

他の捕らえられた女達に関しては到着した回収班に任せる

ターゲットは一足先にヘリに乗せて基地へと向かわせた

やがて全員を回収し終わるとスカレット達も基地に戻ってこの事を本社へ報告する

事前申請なしに行われた作戦であるためにヘリアントスは怪訝な顔をしたが有力な人身売買組織を潰せたこと、多くの被害女性を救出したことを理由に不問とされた

その代わりお小言は大量に貰うこととなり、全てを聞き終えたスカーレットは酷くゲンナリとしていた

だがそれで多くの民間人が助かったのなら安いものだど気を持ち直すと救出した民間人のリストに目を通す

「あ……いつもしかして……」

その中に知ってる顔があつたのかスカーレットはある人物のところまで動きを止めてじつくと見ている

そこには「響 花梨 24歳」と書かれていた……

再会と新たな訓練の始まり

白で統一された部屋にて、1人の女性が目を覚ました

「うっ……っは？」

彼女の最後の記憶は人身売買組織の組員に見つかって殴り倒されたところまでだ

その後なにが起ったのか、さっぱり分からないが現状を鑑みるに窮地は脱したことを察する

周囲を観察すると病室のように見える……そのまま暫くすると扉が開いて長身の女性が入って来た

その女性を見た彼女は驚きの声を上げる、見覚えがある人物だったのだ

「あ、貴女はまさか……スカーレットさん!？」

「よう……随分と久しぶりじゃねえか、花梨」

入って来たのはS地区総隊指令基地の指揮官、スカーレットだった

そして病室で寝ていたのは響花梨、V・Sのスナイパーの1人でありその中でも異質な存在だ

彼女は「絶対に誰も傷付けない!」と言つて凶悪な犯罪者であっても絶対に身体を撃

つことはしない

その為敵の持つ銃器や通信機等を破壊することで無力化してきた

FREEDOM壊滅作戦に於けるキーパーソンであり彼女の功績はかなり大きく、裏社会で一気に名を馳せたスナイパーだ

スカーレットもFREEDOM壊滅作戦に従事したスナイパーの1人であり、彼女とは顔合わせしていた

最初こそ花梨の持つ甘っちょろすぎる考えに嫌悪感を感じていたが何を言っても曲げることのない芯の強さとその信念を貫いたまま作戦を成功に導いたことを評価し、それからは個人的に交友関係を持っていた

第三次世界大戦以降会うこともなければ核によるEMPの影響で通話を繋げることも出来なくなった為にどうなったのか分からず仕舞いであった

しかもその後ELIIDによって日本が壊滅したと聞いたのでてっきり死んだものと思っていたが、どうやら逃れていたようだ

そして今こうして再会出来た、勿論スカーレットは彼女をこのままこの基地の所属にするつもりだ

「気分はどうだ、何処か傷むところはないか？」

「特に問題はないです…あの、もしかしてスカーレットさんが助けてくれたんですか？」

「まあそうなるな。お前がいるとは思ってなかったが再会出来て何よりだ」

「そうですね…私はこれからどうなるんでしょう?」

「私個人としちゃあこのままお前をこの基地で雇用したいと考えてる」

「…あの、私は」

「知ってる、誰かを傷付けるようなことはしたくねえんだろ? 確かにここは軍事基地で基本的には敵を殺すのが仕事だ…だがな、うちには警察系特殊部隊も存在している。丁度もう一人スナイパーが欲しいと思ってたところだし、そこなら基本的に人命救助の為に銃を持つことになる。当然お前が狙撃する際には犯人を撃つようなことはさせない、どうだ?」

スカーレットの言葉に花梨の目が揺らいだ

彼女は元々普通の女子大生として生活していたところ、急にV・S.の隊員が現れてスナイパーになれと言われた

当然かなり困惑したし最初は信じてなどいかなかったが、事件を追うごとに自身を取り巻く複雑な環境を理解して次第にV・S.としての使命に燃えるようになってきた

今となつては人命を守ることに従事することに躊躇いなどないが、それでも彼女には迷うだけの理由があつた

それは今現在自分がここにいること、そうなつた経緯にある

人身売買組織の捕まった時、花梨は何も出来なかった

彼女はスナイパーとしての訓練しかしてこなかった、そもそも法執行機関のスナイパーであるためにそれ以外する必要などなかったのだ

だがそれが仇となり、接近されたときに自身の身を護る術を持たない彼女はすぐに倒されて捕らえられた

今のままでは足手纏いにしかならないのではないかという疑問が鎌首を擡げてくる

そうして悩み彼女をスカーレットは黙ってみている、彼女の心の強さを信じているからこそ敢えて手を差し伸ばすようなことはしない

数分後、花梨は顔を上げてスカーレットを見据えた

その顔には先ほどまでの迷いなど微塵もなく、覚悟が決まったことを示していた「私、やりませう。罪のない人達を守るのなら、なんだってやります！」

「決まりだな。よしお前ら、入って来て良いぞ！」

スカーレットの言葉と共に部屋へ何人もの戦術人形が入って来た

「紹介するぞ。こいつらがうちの基地の唯一の警察系特殊部隊『The last shield of people』、通称LSPのメンバーだ。んでこいつがさっき話した新メンバー候補の響花梨、スナイパーだ」

「うちはガリルや、一応この部隊の隊長やで。よろしゅうな！」

「あたしはS A A！ねえねえ、コーラ飲む？」

「ちよつと、D P 28さんにダメだつて言われたじゃないですか！あ、私はU S Pコンパクトです」

「私はM P 5と言います、よろしくお願いしますね！」

「私の名前はM P 7。意外といい目してるじゃん、これはからかい甲斐がありそう♪」

「じゃあ早速…つとその前に自己紹介だよ、あたしはM 870。アホ面晒していると容赦しないよ〜」

「駄目ですよ2人とも、私の目の黒いうちはそんなことさせません。私は79式です、共に頑張りましょう！」

「最後になりましたね、P S G ー1です。スナイパー同士仲良くしましょう」

「あ、えつと…響花梨です、よろしくお願いします」

全員が自己紹介を終えるとそのまま少少だけ雑談をする

M 870がいきなり下ネタをぶっこんでスカーレットにどつかれる光景に困惑したりはしたが、なんとか馴染もうと花梨は彼女達と話していく

数分ほど話したところでスカーレットが手を叩くとそれを合図としてL S Pのメンバーが口を閉じる

それに呼応して花梨も口を閉じた

「さて、これで一先ず顔合わせは良いだろう。一応言っておくが花梨、お前はまだLSPのメンバーではない……あくまでも候補だ。これから主にPSG―1がお前に訓練をしていく。それを乗り越えて試験に挑み、合格判定を受けて初めてメンバーとなれる、いいな?」

「やはりそうなるんですね……分かりました、やってみせます!」

「良い返事だが、今は怪我を治すのが先決だ。比較的軽傷だし、あと数日もありや完治すんだろ。そしたらこの基地の面々に紹介した後には訓練開始だ」

「分かりました」

「よし、んじやPSG―1以外は街の警邏に行け! PSG―1は訓練計画を練っておけ」
「了解!」

スカレットが指示を下すと一瞬で彼女達は部屋から退出する

1つしかない入り口に9人が一斉に向かうも一切詰まることはなく、それでいてかなりの素早さで移動する姿に花梨はこの部隊の能力の高さを直感した

「さて、私もやることがあるからここいらでお暇させてもらうぜ」

「あ、はい分かりました。あの、助けてくれてありがとうございます!」

「ん? ああ……礼は治安維持で返してくれりゃ良い」

「ええ、絶対にやり遂げてみせます」

「相変わらずの威勢の良さだな。お前に部隊を任せられる時を楽しみにしてるぜ」

「…はい！」

それだけ言うとはスカーレットは部屋を後にする

そして向かうのは基地の地下に存在する尋問室だ

以前捕らえたZ地区総隊司令官の尋問がなんだかんだ出来ていない、急に任務が入って来たために仕方のないことではあるがクルーガーからも催促する連絡が来ている

そんなわけでこれから彼への尋問：否、拷問処刑を始める

「よう！気分はどうだマルティン？」

「…良いとでも思ってるのか」

「そんなツレねえこと言うんじゃないやねえよ。同じ総隊司令官だろ？」

「巫戯けてるのか？ったく、相変わらず気に入らねえ奴だ」

「なんだ、案外気が合うじゃねえか。私もてめえのことは気に入らなかつたんだ」

「そうか、ならさっさと殺せ」

「おいおい、そんな楽に殺してやるわけねえだろ？社長も言つてたじゃねえか、たっぷり苦しませてやれつてよ」

「…クソが」

Z地区総隊司令官が悪態を吐くが、今のスカーレットにはそれも心地よい清涼剤にし

かならない

獯猛な笑みを浮かべたスカーレットは遅れてやってきたMDR、PPK、KS―23、DP28達と共にマルティン・アーレントへの拷問を開始した：

『データは受け取った。……………はあ』

「そんなあからさまな溜息着くんじゃねえよヘリアン。私はただクルーガーの意向に沿っただけだぜ？」

『分かってはいる…だがこれを今から見なければならぬ私の気持ちも考えてくれ。今日は確実に晩飯抜きだな…』

「お前も一応軍人だろうが、いい加減慣れろって」

『お前のは度が過ぎてるんだ！まったく…取り敢えず内容を確認するから切るぞ』

「おう、クルーガーによろしくな」

『ああ…アウト』

翌日、撮影したデータをヘリアンに送ったスカレットは椅子の上で伸びをする

今のところ依頼された仕事は全て終わっている、後はいつも通りつまらない書類仕事
が待っているだけだ

「コーヒーを淹れましたよスカレットさん、ワルサーさん」

「おお、こいつはありがてえ」

「あら気が利くわね、ありがとう」

ここでスカレットの秘書として雇用されたゆかりがコーヒーを淹れて持ってきた

一口飲めばインスタントの割には良い香りとキレのある味わいが広がる

思わず息を吐く2人の姿にゆかりは満足気だ

「よっしや、やる気も出てきたし片付けちまうか!」

「珍しいわね、あんたが書類に対してやる気を出すなんて」

「今は色々ど気分が良いからな」

言葉通り機嫌も良く、いつもより精力的に書類を片付けていくスカレットにWA2000は珍しさを感じつつも大して気に留めず書類を片付けていく

ゆかりも雑用に近い仕事をして2人のサポートを行うのだが、その顔には疑問符が浮かんでいた

だが仕事の邪魔をするのも悪いかと思つて黙つて自分の仕事をしていった

そうして数十分後には全ての書類も片付き、3人はゆかりが淹れ直したコーヒーを楽しんでいた

「んで、さつきから何を聞きたそうにしてんだ?」

「え、私ですか?」

「そうね、ずっと顔に疑問符が張り付いてたわよ」

「そ、そんなに分かりやすかつたですか…まあその、不思議に思うことがあります」

「良いぜ、何でも聞きな。機密情報以外は教えてやるぜ」

ゆかりの様子に最初から気付いていた2人に指摘されると、ゆかりは観念したかのようにな自身に疑問に思うことを話し始めた

「えつとですな…どうして色々と最新鋭の機器だったりがあるのに未だに書類で情報の処理をしているのかと思ひまして」

そう、この基地には滅茶苦茶に性能の良い様々な機器があるのに何故か執務は書類媒体で行っており、最終的にはデータルームにて電子情報として保管される

だったら最初から電子媒体で処理してしまえば良いと思うのは当然のことだろう

書類での処理なんて手間がかかるだけである

「なんだ、そんなことか…言っちゃまえばどんな状況になっても仕事ができるように、だな」

「どういうことですか？」

「確かにここにはかなり性能の良い機器があるし全部サーバーで処理した方が効率的よ。でもね、例えば停電が起きたりすると何も出来なくなるでしょ？」

「電子情報での処理も書類媒体での処理もどっちも出来た方が様々な状況に対応出来る。当然最新式のものも活用するが、だからと言ってそいつに頼り切るのは三流のすることだ」

「なるほど…そういうことでしたか」

2人の言葉に疑問は晴れた、だがそれでも普通こんなことするだろうか

言っていることは分かるし理にかなっていてもいる、しかしだからと言って流石に面倒が

過ぎるだろう

これにはスカーレットのスナイパーとしての矜持に基づく理念が影響していたりもする

以前スカーレットはFN49とモシン・ナガンに「電池で動くものに命を預けるな」と言った、これもその内の一つとしてみなしているのだ

そのことも掻い摘んで話せば今度こそ納得のいったゆかりはこれからどうするかを考える

と、ここで執務室の扉がノックされた

誰かと思いつつもゆかりが扉を開けるとそこにいたのはM200、FN49、モシン・ナガンの3人であった

「お前らが揃って来たってことは…あれか？」

「ええ、あれです。2人が希望しました」

入って来た面子を見て一瞬で要件を把握したスカーレットがM200に質問すると、返って来たのは肯定であった

その様子を見ていたWA2000は無反応ながらも何処か嬉しそうな顔をしており、FN49とモシン・ナガンはスカーレットの察しの良さに驚愕していた

「いや、まだ何も言っていないのだけれど…分かるのかしら？」

「タイミング、面子、それからお前ら2人の決意に満ちた顔を見りや流石に分かる。あの時の私とM200を見てもっと本格的な訓練をして欲しくなったんだろ？」

「さ、流石ですね…そうですね、あの時みた光景が忘れられなくて…モシンさんに話したら同じ気持ちだったようなのでM200さんに相談しました」

「良い傾向ね、流石私の見込んだだけはあるわ。でも良いのかしら、これまでやってきたことが可愛く見えるレベルの訓練になるわよ。その覚悟はある？」

「…随分怖いこと言ってくれるじゃない、同志。でもその程度で心変わりなんてしないわ」

「私もです。もっと強くなってワルサーさんと肩を並べたいんです！」

FN49の珍しく力の籠った言葉にWA2000は一瞬目を丸くしていたが、その後これ以上ないくらいに嬉しそうな笑顔を見せた

「どうやら2人の意志はかなり固いようである、こうなればスカーレットが行うことは決まっている」

「ハッ！良い啖呵を切るじゃねえか…その言葉、忘れるなよ？」

「忘れませんし、取り消しもしません！」

「私も早くお師匠と一緒に任務に出たいわ。その為ならどんな地獄にだって耐えてみせる！」

「モツシー…うん、ボクも君と一緒に戦えるのを楽しみにしてるよ」

「良いね良いねえ…私好みで大変結構だ。そこまで言われりや応えないわけにもいかねえ…明日よりスナイパースクールを開校する!!講師は私、ワルサー、M200の3人。FN49及びモシン・ナガンは各々明日に向けて準備をしろ。おいワルサー、各所に連絡だ!」

「もう始めてるわよ。あ、ジェリコ?実はね…」

こうしてS09H基地名物、スナイパースクールでの訓練が行われることが決定した

スナイパースクール編

座学1日目 一時間目

「少し緊張しますね…」

「そうね…つと来たわよ」

まだまだ早朝という時間帯、S09H基地の食堂には2人の少女の姿があった

FN49とモシン・ナガンである

彼女達は先日スカーレットに本格的な訓練をするよう依頼し、その結果この基地の名物となりつつあるスナイパースクールの開校が決まった

そして今日はそのスクールが開校する日、事前にこの時間此処で待つように言われていたため彼女達はこうして食堂で待っていた

そこに今回の講師役であるWA2000とM200がやって来た

「ちゃんと時間通りにいるわね。当然のことだけれど良い傾向よ」

「規律に従えない人はスナイパーどころか兵士とすら呼べないからね」

「まあ当然よね、つて指揮官は？」

「そう言えば姿が見えませんが…」

「指揮官なら先に教室に行つて準備してるわ。今から案内してあげるから着いてきなさい」

「…教室？」

WA2000の言葉に引つ掛かりを覚えた2人は同時に疑問を口にする

2人とも今から行われる訓練が銃を用いた実地訓練であると思ひ込んでいたのだ

それに対してWA2000は表情を厳しくして容赦のない現実を言い放つ

「まさかいきなり撃つ訓練なんてさせてもらえらと思つたのかしら？甘すぎるわね、貴女達にはまず知識が圧倒的に足りないわ。だからまずは座学でスナイパーに関する知識の『全て』を身に付けてもらうわよ、それが終わらない限り貴女達が銃を撃つことは許されないから覚悟しておきなさい」

「まあ普通ここまでするよな基地は殆どないからね、想定してないのも無理はないよ。ほら、早くしないと指揮官が怒るから行くよ？」

WA2000とM2000の発言に思ひ描いていたものが一瞬にして崩れ去ると同時に不安が募る2人であるが、ここまで来たからには後には引けない

それに自分達から容赦のない訓練を願ひ出たのだ、これくらいで引く気は起きなかつた

やがて2人は講師役の2人に連れられてこの基地の資料棟へとやって来た

ここはスカーレット、クレア、イーサンが今まで掻き集めてきた様々な本や電子書籍を、一か所に集めた場所であり、銃や軍隊に関する本であったり中には進化論や相対性理論や第三視点など直接兵士に関係するとは思えないものなどが所狭しと存在している

その資料棟の入り口でスカーレットは待っていた

「よう、ちよいと遅かったんじゃないか？素早く正確な行動は兵士にとっての絶対条件だ、そのの所もつと意識しろ」

「は、はい！」

「りよ、了解！」

スカーレットから放たれる覇気によつて彼女達の背筋は無意識的に伸び、敬礼をした

「まあ良い。もう聞いているだろうがこれから座学で徹底的に知識を叩き込んでいく、勉強熱心じゃない奴は良い兵士になてなれやしねえからな。この基地でやっていくつもりならこれから先も貪欲に知識を貪る心構えをしておけ」

「…兵士にも勉強が必要なんですか？」

「当然よ。私達はASSTとかで自分の銃に関しては感覚で扱えるけどそれ以外のことに關しては新しく知っていくしかないわ。作戦の立案や実行には様々な専門知識が必要になってくるの、勉強の出来ない馬鹿が部隊にいたって足手纏いでしかないわね」

「それに今はまだ直接的に関係はしないけどこの訓練中はボク達戦術人形のアドバンテージになる各種システムはダウンさせるよ。そんなものに頼つてるといざという時何も出来やしないからね」

「ちよつと待つてお師匠、わざわざそこまでする必要あるのかしら?」

M200の口から出てきた信じられない言葉にモシン・ナガンが食いついた

「たりめえだ、この前言った『電池で動くものに命を預けるな』つう言葉に似通るが敢えて言うぞ。『技術に頼るな、技量に頼れ』。日々技術は躍進していくし先進的なものも出てくる、だがそう言ったものを『利用』するのは良いが『頼る』ようなことは絶対にするな。技術に頼るしか能のねえ奴は役立たず以外の何物でもない」

「…流石にそれは言い過ぎなんじゃないかしら? 実際私達戦術人形はこのシステムによつて鉄血との抗争にも勝利出来てるんだし」

「その勝率は如何程のもんだ? んん? 胡蝶事件が起こつた当時なんか真面に抵抗出来ずにS地区が壊滅寸前にまで追いやられてただろうが。今だつて鉄血によつて滅ぼされる基地や街は少ないとは口が裂けても言えねえ…それは結局のところシステムなんぞに頼つてるが故に起こることだ。他ではどうか知らねえがここではんなもん端からないものとして扱うぞ」

「ひゅ…」

スカーレットの言うことには一理ある

戦術人形の烙印などは有効なものではあるが、鉄血との抗争では優勢とは言い難い状況が続いているのだ

結局はそれに頼って他を疎かにしているといざという時に困る

しかしモシン・ナガンは納得のいかない表情と態度を崩さなかった

それはひとえに彼女がこれまでそれに頼って来て問題が起ころなかったが故のことなので仕方がないとも言える

そんな彼女を納得させるには実際には実際にそれに頼っていた為に何も守れなかった実例を目の前に突き付けるのが一番であろう

そしてそれを実行出来る人形がここにはいる…モシン・ナガンの前に立って彼女を真つすぐ見据えるM200がそうだ

「指揮官の言っていることは何一つ大袈裟なんかじゃないよ…それはボク自身が証明している」

「お師匠が…?それってどういうことよ?」

「ボクが製造されたのは4年前、2058年なんだ。そしてボクはS地区の基地に配属されていた…これが何を意味するか分かる?」

「待って、それってもしかして!？」

「そうだよ、ボクは胡蝶事件の生き残りの1人なんだ…それも最低な方法で生き残った、ね……」

M200の表情が暗くなり、その顔が歪む

これから話すのは彼女にとって最大のトラウマであり、今この基地にいる理由そのものなのだ

「製造された後ボクはS地区のとある基地に配属になった。そこでは暴走前の鉄血工造の戦術人形も沢山いたし他と比べて平和だったよ。偶に起きる事件も低俗な賊がちよつと暴れるくらいのもので、簡単に鎮圧出来た。だからかな、そこでは全然訓練とかしてなかったんだ。指揮官も平和主義の優しい人で、みんなそんな指揮官のことを好いてた。平和な毎日を笑顔で過ごしていたよ」

「そういう状況ならそうなるのも仕方ないんじゃないかしら…」

「そうだね。でもそれが最悪の形で問題となったんだ…2061年に何が起こったかは当然知ってるよね？」

「胡蝶事件、ですよね…当時のS地区は酷い状況だったと聞いてます」

「そう、あの事件が起こった。当然ボク達は人類を守るために鉄血の戦術人形と戦うことになった。でも碌に訓練してなかったこともあって味方がどんどんとやられていてね…今まで仲良く笑い合ってた仲間が次々に死んでいくのを目の当たりにして、ボク

は……ボクは、逃げたんだ」

「それって……」

「敵前逃亡だね。守るべき人々も、大好きな仲間達も何もかも見捨ててボクは逃げたんだ……自分の銃すらその場に置いて、みっともなく逃げたんだよ……なんとか戦火を逃れてグリフィンの本部の部隊に拾われたボクは戦力にならないと判断されて安全な後方に送られた」

「つまりこいつは戦術人形としての存在意義を自分で真つ向から全否定しちゃったってことだ。そんな状態で後方で次々と味方が壊滅していく情報を聞くのはメンタルに多大な負荷が掛かっただろうな……しかも、それで終わりじゃなかった」

「それ以上、何があったって言うのよ？」

「胡蝶事件が起こって少した頃、私はグリフィンに入社してS地区奪還作戦を遂行した。その中にはM200が所属していた基地もあったんだが……基地を制圧した後の探索である物を見付けた」

「ある物……？」

モシン・ナガンが疑問を感じているとM200がネクタイを緩めてシャツの第一ボタンを外し、中からチェーンに繋がれたものを取り出す

それを見たモシン・ナガンとFN49は目を見開いた

「そ、それって…まさか」

「うん…結婚指輪、だよ」

「…っ!!」

それを見ただけでこの先の話を理解した2人は揃って顔を歪める

彼女達の予想通りならこれは余りにも悲惨で、救いようのないことなのだ

そして現実はいつも残酷である、M200はその指輪を撫でながら目に涙を浮かべて静かに語りだす

「これは指揮官がボクに用意してくれた指輪なんだ…基地内に残されてたデータによるとあの事件が起こった日の翌日に渡してくれる予定だったみたい。しかもボク以外の人形や職員もそのことを知ってて皆で秘かに祝う準備をしたみたいなんだ…」

「それに関しちゃ私が基地内に残っていたタキシードや花嫁用のドレスの残骸を確認してるし、教会風に飾り付けられたと思われる倉庫も発見した。まず間違いないだろうな」

「そんな…」

「…こんなボクを愛してくれて、結婚しようとしてくれた指揮官。そんなボク達を祝福しようとして準備をしてくれた大切な仲間達。ボクだって指揮官のこと、愛してた…もしプロポーズなんてされたら二つ返事で受け入れてたのに、それだけ大切に想って

たのに：なののに！ボクは！そんな皆を！見捨てて逃げて！見殺しにしたんだ!!!」

普段かなり落ち着いていて声を荒げるなんてまずしないM200が涙を流して感情を剥き出しにして形振り構わずに叫ぶ姿を見た2人は驚きとも悲しみとも付かない表情で固まっているし、WA2000は悲痛な面持ちをしている

彼女もこのことは知っていたがやはり改めて聞かされると同情せずにはいられなかった

普段と変わらない様子なのはスカーレットくらいであり、そんな彼女の口から更に容赦のない言葉が語られる

「一応言っておくがM200の判断は間違ってたわけじゃねえ。当時の前線は悲惨な状況で碌に情報が得られなかった。だがM200が逃亡し、後方へ情報を持ち帰ったことである程度現場の状況を把握出来た。これはS地区奪還作戦に於いて重要な情報として扱われたし、現に私も当時のM200が持ち帰った情報を元に動いたりもした。だからグリフィンはそんなこいつの行動を『評価した』」

「ちよつと待ちなさいよ、そんなことって!」

「ああそうだ。つまり『M200が結婚を考えるほどに愛していた指揮官や大好きな基地の仲間達を見殺しにして戦場から逃げ出したのは素晴らしい判断であった、その結果として我が社が受けた被害は確実に減ることとなった。云わばS地区奪還作戦に於け

る立役者の1人である、よってその功績を称えよう』ってこった。胸糞悪い話だが分かるなくもない。本社の言ったことは事実ではあるからな」

「そんなのただの皮肉じゃないのよ!!」

「その通りだ。愛する人達を失った喪失感や見殺しにしたつう自責の念…そういったものに苛まれていたM200を更に苦しめることになった。しかもM200に直接会って褒め称える奴すらいいたようだからな」

「そんなの、酷すぎます…!」

スカレットが語ったどうしようもない事実には2人は憤慨する

そんな2人を真正面から見据えたM200はその泣き腫らした顔を隠すこともなく見せつける

こうすることでより2人に訓練を軽く見ていた者の悲惨な末路を実感させるためだ

「当然そんな評価はボクにとつて皮肉でしかなくて、もつともつと苦しさが増した…そんな状態だったからボクのメンタルモデルは崩壊寸前のところまで行つてたらしいんだ」

「らしいって…」

「当時のボクは自分の状態が自分で分析出来ないくらいに焦燥してたってことだよ。だって、ボクが皆を殺したも同然だつていうのにそれを褒められるなんて…そんなの耐

えられるわけないじゃないか!!」

「お師匠……」

「ハアツハアツハア……：……：そうしてメンタルモデルが崩壊して廃棄される寸前のボクだったけど、とある情報を知ったんだ」

「とある情報？」

「S地区の大部分を奪還したとある指揮官がS09地区に基地を構えてそこはかなり高度な訓練を施しているという情報だよ。そこではどこよりも厳しい訓練が行われていて、それを乗り越えた暁には必ず最高の戦術人形になれるって言われてた……それを聞いたボクは居ても立ってもいられなくてその基地へ転属願いを出したんだ。仲間を殺した鉄血への復讐心だったのか、情けない自分を変えたかったのか……動機は自分でも分からないけれど、少なくとも今のボクが訓練に励む理由は断言出来るよ」

「そこまで言うとならM200は一度顔を伏せて深呼吸を繰り返して、再び顔を上げた時には涙こそ流れてはいたが先程までの悲痛な表情ではなく意思の籠った覚悟を決めた顔であつた」

「ボクは同じ過去を繰り返したくはない、大好きな仲間を失うのは二度とごめんだからね。それと同時にボクのような想いをする子を1人でも減らしたい、ううん……もうただの1人だって出してなるもんか! あんな想いをするのはボク1人で十分……だからボク

は訓練に励むし、後進の育成にも力を入れる。これがボクがここで戦う理由だよ」

M200の話聞き終えた2人の顔つきが変わるのをスカーレットはしっかりと見た

「どうやら何故この話をさせたのかを理解したようである

「もう分かっているだろうが態々M200にこの話をさせたのは技術に頼って技量を磨くことを怠った者の末路を聞かせるためだ。これで私の言ったことが大袈裟じゃねえって理解したか？」

「ええ、嫌という程ね……」

「私も、理解しました……ご指導のほどよろしくお願いしますー！」

FN49とモシン・ナガンは覚悟を決めた顔をした後、頭を下げた

これからの訓練をお願いするという意味合いとさつきまでの自分達の認識の甘さへの謝罪を含めたものである

それを確認したスカーレットはM200の頭を撫でて慰めつつ、2人の覚悟に向き合う

「お前達の覚悟、しかと見させてもらった。これから行う訓練は本気で情けや容赦を太陽系の外にまで投げ捨てたものとなるが今のお前達なら乗り越えられるだろう、励めよ？」

「はー！」

こうしてスナイパースクールは開校され、この基地の本当の訓練が始まる

「さて、覚悟も決まったところでまずは座学からだ。今日から暫くの間お前達には徹底的にスナイパーに関する知識を叩き込んでいく。一日に行う授業量は人形の記憶性能

なら一度で覚えられる範囲に抑えるぞ、覚えられなきや意味がねえしな」

「ただし『全力で臨んでギリギリ一度で覚えられる』程度になるから決して楽ではないわよ。知恵熱が出るでしょうけれど耐えなさい」

「これを取り越えてテストに合格して初めて実践に移れるよ。あ、因みにテスト範囲だけど当然全てになるしなんだつたら学んだこと全部問題として出す上に満点以外は落第だから本気で全部覚えてね」

M200が落ち着く為に数分ほどの時間を置いてからスカーレット達は教室へ移動し、そこで授業を始めた

早速容赦のないことを言ってくる3人に2人は不安になるが、先程見せた覚悟はその程度で崩れたりはしない

そんな2人を見て満足そうに頷くとスカーレットはホワイトボードに何やら書き込んでいく

「今日行うのはズバリ『スナイパーとは何か』だ。モシン、スナイパーとは何をする兵科だ？」

「えつと、狙撃よね。狙撃をすることで対象の排除や味方の支援を行う兵科よ」

「…それ以外には？」

「それ以外…は思いつかないわね」

「FN49はどうだ」

「えっと…モシンさんと同じです」

「うん、模範的な0点の回答だな」

「「え？」」

スカールレットが何の気なしに放った言葉に固まる2人

それもそうだろう、幾ら何でも0点だなんて言われるとは微塵も思っていないかったのだから

「私も以前はそうだったから分かるけれど、大半の戦術人形の認識はその程度よね。でもそれだと本当に0点よ、スナイパーってのはそんな単純なものなんかじゃないの」

「そこでまずはお前達にはスナイパーとは何なのかという定義を知ってもらう。良いか？いくぞ：『スナイパーとは狙撃手スナイパーと観測手スポッターの二人一組スナイパーチームのペアを基本として動き、敵兵の索敵能力を上回る隠蔽された位置や距離から目標に正確な攻撃を加えられるよう高精度且つ特別なライフル（狙撃銃）と光学機器に関する訓練を受けており、射撃能力に加えて隠蔽、通信、フィールドクラフト、浸透、特別な偵察や観測、火力支援、火力支援要請、爆破、監視及び目標補足など多岐に渡る項目に関する専門的な訓練を受けてそれを戦場にて問題なく行うことが可能な兵科』、と言ったところか。一応言っておくがこれはあくまでも『ミリタリースナイパー』に於ける定義だ、法執行機関に属する『ポ

リススナイパー』とは性質が全く異なるから混同しないようにしろ」

「…早速なっがいわね」

「それだけ専門性が高いということでしょうか?」

「その通りだよ。スナイパーの仕事は本当に多岐に渡るんだ」

「どれか一つでも出来ないようならそいつはスナイパーとは言えねえ。今後方幕僚として働いてるクレアは私のスポッターだが当然あいつもスナイパーとして動けるような全ての専門訓練課程を修了している」

「それは兎も角として、そんな様々な要素を含んでるスナイパーに求められる能力っていうのはかなり多くなるわ。次はそれを見ていきましようか」

WA2000はそう言うのとホワイトボードに次々と書き込んでいく

「まず最初は射撃能力。スナイパーである以上は『One Shoot One Kill』のモットーにある

ように、引き金を引くなら必ず標的に命中させる射撃能力が必須になるわ。ただしあくまでもこれは『必要条件』であって『充分条件』じゃないことに留意しなさい。いくつもある資質の一つに過ぎないわ」

「次に野外適応能力だね。これは様々な野外環境への適応能力のことを指すよ。風や湿度、湿度に天候なんか順応する能力がスナイパーには求められるんだ。天候の変化を予測して任務遂行が困難になるようなら離脱するか、それとも回復を待つのか…そういう

う判断能力も求められるね。自然の中で狩りを行うハンターはこの能力に長けているし、過去の名立たるスナイパーの中にもシモヘイへを筆頭としてハンターとしてのバツクグラウンドを持つ者も多いよ。だから君達にもいずれハンターとしての訓練を施すから覚悟しててね」

「次は戦術的思考能力だ。いくら優秀なハンターだったとしてもその技術を如何にして任務遂行に役立てるのか、そういったことを考えるための戦術的思考能力は必須となる。ここら辺もこの座学の中で徹底的に教育してやる」

「更に体力も重要な要素ね。スナイパーはあくまでも『歩兵の一種』よ、行軍が真面に出来ないうようなじゃ務まらないわ。視力、聴力、記憶力なんかも重要ね。優秀な歩兵でなければ優秀なスナイパーにはなれないわよ、覚えておきなさい」

「それに知能と協調性も必須だよ。流石に研究者や学者並みになれとは言わないけど平均以上の知能は求められるね。それとスナイパーって言うところか一匹狼みたいな印象を持つ人もいるみたいだけど実際は真逆、チームプレイが何よりも大事。チームの一員として協調性はかなり重要だよ」

「加えて忍耐能力も必須となるし、ある意味最も重要な能力と言っても差し支えない。いかなる状況下に於いても焦るような奴にスナイパーは務まらねえ。私自身三日三晩不眠不休飲食無しで同じ姿勢を維持し続けたことがある。流石にそこまでの状況は殆

どおりやしねえが最低でも半日以上はずっと同じ場所に居続けられるだけの忍耐力は必要だ」

スベリテイチユード

「最後に精神性ね。人殺しを好むような性格はスナイパーに向かないわ。任務への忠実性、指揮官や部隊への強い忠誠心を持ったモラルのある人物が求められるの」

急にくつもの項目を話され、2人は必死になって覚えようとする

かなり多くの要素を上げたがぶつちやけこれは大分したものに過ぎず、ここから更に細かくなっていく

当然それらも全て理解し習得しなければスナイパーにはなれない

そしてこれはまだまだ授業の一部でしかないのだ、3人による講義は更に続いていく「さっき言ったスナイパーに必要な要素は取り敢えず概要を覚えておけ、細かいことは後程厳密にやる。次に覚えておくべきことはスナイパーが敵・味方に与える心理的影響についてだ」

「心理的影響？それも重要なことなのですか？」

「当然じゃない……って貴女は確か一度も戦場に出たことがなかったわね。それなら分からなくても無理はないわ」

「実際に戦場に出れば分かるがこれはかなり重要だ。味方のスナイパーが戦果を上げていると聞きゃあ部隊は鼓舞され、士気が上昇する。一方で敵からすりゃあ疑心暗鬼に陥

り、何処にいようと『自分が狙われるんじゃないか、次は自分の番になるかもしれない』という恐怖心を抱くし、そんな精神状態じゃ任務の遂行も覚束なくなるからな。第二次世界大戦のスターリンググラード戦で戦果を大きく宣伝されたヴァシリ・ザイツェフの存在なんか正にそれだ。実際の戦果なんざよりも敵味方に与えた心理的影響は大きかっただろうな。こうした宣伝行為プロパガンダを利用した心理戦は共産国の常套手段だった。また違う例を挙げるとベトナム戦争時、北ベトナム軍がアメリカ側のスナイパー3名に対してそれぞれ3万ドルの懸賞金を懸けていた。この金額は当時の北ベトナムの物価を考えりゃあ法外な金額だが、それだけ奴らにとつてスナイパーの影響はデカかったんだらう」

「少し厭らしいというか、現実的な話をするとなつた一発の銃弾で戦場や兵士達に大きな影響を与えるスナイパーの存在は経済的で費用対効果も高いわ。勿論育成にも結構な費用は掛かるけれど、それでもミサイルや戦車に比べれば安上がりよ。その上一度育成してしまえば何度も何度も使用出来るしそういった点で見ても経済的よね」

「なるほど…指揮官がRF型戦術人形を重視するのも分かるわね」

「逆に言えばそれ程の影響を与える存在にならないといけない、ということですよね…」
「そうだね、そして今からはそんな存在になるための要素の1つである『狙撃』の本質について教えていくよ」

「本質？」

M200の言葉に2人は首を傾げた

「君達は狙撃と聞いて何をイメージする？」

「そうね…遠くの標的に対する正確な射撃技能、といったところかしら」

「私も同じです。狙った場所に必ず当てるのが狙撃というものではないでしょうか？」

「確かにそれも間違いではないよ、ある意味正解だと言っても良いね。でもそれでは本質を捉えられているとは言えないね」

「それはどういふことかしら？」

「意地悪するつもりもないし、先に答えを言うからね…『隠れた場所から攻撃することだよ』」

「隠れた位置からの攻撃…それが狙撃の本質なんですか？」

「そうだ。狙撃つてのはあくまでも戦い方(戦術)の1つに過ぎねえことをまずは意識しろ。それを念頭に置いた上で話をするが、狙撃に於いて距離は本質的な問題ではない。例えばそうだな…日本で起こった事件になるが1995年に起きた『国松警察庁長官狙撃事件』での狙撃距離は20m程度しかないな。アメリカで言うなら2002年の『ワシントンDC連続狙撃事件』でもその距離は45m〜90m程度、その気になりや拳銃でもやれる距離でしかねえんだよ。まあ、流星に90mともなると拳銃で狙うのは厳し

いかな」

「それでもその2件の事件は間違いなく『狙撃事件』としてカテゴライズされるものよ。その理由となるのが『犯人が見えないところから撃つてきた』という点ね」

「国松の事件では死角となる植え込みの陰から、ワシントンDCでは後部座席を取り外してトランクに穴を空けた車の中から狙撃が行われたんだ。こんな風に隠れた場所から攻撃することこそが狙撃の本質だよ。距離云々じゃないんだ」

「スナイパーが隠れて狙撃するのも『自分の所在が確認されにくく、敵からの反撃を受けにくい。その結果自身の安全を確保しやすく容易に離脱も行える』という理由からだ。ミリタリースナイパーが基本的に遠距離から狙撃を行うのもこうした条件を満たしやすいう理由に他ならない。実際私は2km以上離れた地点からの狙撃を行うことが多いがこれも同様の理由からだ」

「そういうことね、理解したわ」

「一般的な狙撃のイメージが崩れましたね」

「そうだね。一般の認識と現実とでズレがあるのは良くあることだけど軍事関係は特に多いよ。例えばRPG-7を始めとしたロケットランチャーの殆どは爆発なんてしない、とかね」

「他にはサイレンサーとサブレッツサーの呼び方なんかもあるな。サブレッツサーの方が正

しいとか言う奴がいるが、ありやあ大間違いだ、初歩的な英語の知識がありや分かるはずなんだが勘違いしてる奴はかなり多い。アメリカやイギリスの軍人の中にすら平気でいやがるぐらいに、な」

「私個人としてはブルパップ式は銃身長を確保出来るから精度が良くなる、とかも勘違いしてほしくないわね。銃身長を長くしたところで精度は良くならないしブルパップ式は構造上の問題でどうしても精度は落ちるし、そもそも銃身長を長くすればするほど精度を良くするのは難しくなるわよ」

「そ、そんな…」

「嘘でしょ…?」

次々と明かされる勘違いされることの多い事柄の真実に2人はかなり戸惑っている。こうした勘違いは一般の者がしている分には問題ないが、軍事作戦に関わる者にとつては致命的である。

いずれはこれについても全て矯正しなければならぬだろう。

「さて、取り敢えず一時間目はこんなところで良いだろう。最後に豆知識程度のことだが、スナイパーの語源について教えてやる」

「スナイパーの語源?それって知る必要あるのかしら?」

「実質知る必要はないわ。でも自分があるべき存在について詳しく知ることが無駄では

ないでしょう?それにこれはちよつとだけスナイパーの授業に関連してくるのよ」

「え、そんなんですか?」

「そうだよ。スナイパーの語源となつたのはとある鳥なんだ。その鳥の名前はタシギS n i p eって言うてね、この鳥は警戒心が強くて鳥だけにトリツキーな動きをするから射撃技術が優れているだけじゃ仕留められないんだ」

「持てる知識や経験を総動員して獲物の行動を先読みし、出し抜くことの出来る者を敬意を込めて『Sniper』と呼んだのが始まりとされている」

「つまりスナイパーという言葉はそもそも狩猟の中から生まれた言葉ということね。ほらさっきの優秀なハンターはスナイパーとしての素質を持つてゐるって話に繋がったでしょ?」

「本当ですね…」

「この授業では集中力を保つため、時折こういった小話なんかも挟んでいくつもりだ。知っておいて無駄になることはないからついでに覚えておけ。よしこれで本日の一時間目の授業を終了する!復習を怠るなよ?」

「はい、ありがとうございます!」

授業を終えてスカーレット達は教室を後にし、FN49とモシン・ナガンは先程の授業中に取ったメモを見せあいながらより細かくノートに纏めていく

この時に電子端末ではなくアナログな紙を使っているがこれは後程の実施訓練で必要になるから今のうちに慣れておけというスカーレットからの指令である

こうして初めての授業は幕を閉じ、暫しの休憩の時間を2人は過ごすのであった

座学1日目 二時間目

「さ、時間も来たことだし二時間目の授業を行うわよ」

S09H基地の資料棟に存在する座学用の教室にてWA2000が教壇に立ち、受講生の2人に声を掛ける

それに反応して2人は復習を中断して席に戻るが、違和感を持ったFN49が疑問を呈した

「あの…今回はWA2000さんだけなんですか?」

「そう言えばそうね。さつきは3人だったのに」

「それに関してなんだけれど、流星に3人が代わる代わる話してるとややこしいでしょ? さつきの初回だし私達が講師として十分な知識を持つてるって思わせる為に全員でやったけどこれからは毎回1人、特別に人手が必要な時だけ2人でやっていくわ」

「そういうことでしたか、分かりました」

「それなら納得ね」

2人も納得したところでWA2000は咳払いを1つすると授業を開始する

「今回学んでもらうのは『スナイパーの任務』についてよ。さつきはスナイパーそのもの

について軽く紹介したけれど、今から教えるのは簡単に言うとなスナイパーが行う『仕事』
ね」

「戦場に於ける役割…ということでしょうか？」

「その通りよ。今回もまずはざっくりと分類するから全部記憶しなさい、それじゃあ行くわよ」

そう言うとなWA2000は背後にあるホワイトボードに次々と書き込みながら説明をしていく

「まず大前提なんだけれどスナイパーのやるべきことは狙撃だけじゃないわ。まあ大昔…そうね、第一次世界大戦からベトナム戦争くらいまでかしら。あの時代ではスナイパーの仕事と言えば敵の排除だけと言っても過言じゃなかったそうね。でも現代に於いてはかなり多岐に渡るのよ。まず一つ目は偵察・情報収集、次に狙撃^D、それから火力支援要請^F、戦場監視^Bなどが主な任務になるわ」

「思ってたよりも多いわね…それにしても偵察と戦場監視って何か違いがあるのかしら？」

「確かに、どっちも同じに思えますよね…」

「その気持ちは分からなくもないわね。でも全く違うものよ、そこら辺も今から細かく説明してあげる。まずは偵察・情報収集^Iからね」

WA2000は別のホワイトボードに新たに書き始める

「現代のスナイパーの第一任務は偵察と情報収集よ。アメリカでは陸軍のスナイパーは偵察小隊スカウトに所属していたことから『スカウトスナイパー』なんて呼ばれたりもしていたらしいわ。指揮官が自分のことをスカウトスナイパーって言うのはここからね」

「へえ、指揮官てアメリカ陸軍の軍人だったのね」

「そこら辺実はちよつと微妙なのよね…確かに最初は陸軍だったけれど色んな特殊部隊を転々としていたらしいわ。Navy SEALsに所属していたこともあるらしいし、最終的にはCIA直属のゴーストスカウトに所属していたしね。指揮官の経歴は結構複雑よ」

「…なんか、想像以上に凄い人な気がするんですが」

「興味があるなら時間のある時にでも聞いてみなさい、お酒飲んでる時なんか結構話してくれるわよ…つと話が逸れたわね。スナイパーは『部隊の目と耳の役割』を持っていて隠密行動で対象に接近、そこから情報収集、観測及び偵察を行うわ。狙撃任務も偵察任務もどっちも高い隠密性と観察能力が要求されるのはなんとなく分かるわね？ 要するに共通する部分が多いから1つの兵科で賄うことになったのよ。現代だとさっきのISRISTARに目標補足ATを加えて『ISTAR』とも言ったりするわ。この場合だと単なる偵察だけじゃなくて目標への攻撃（狙撃）や後で言う火力支援要請の意味も含むわね」

「なるほどね…兎にも角にも戦場の様子を見てその情報を味方に伝えるのがスナイパーにとって第一の仕事って認識で良いかしら？」

「その認識で概ね相違ないわ。FN49も問題ないかしら？」

「はい、大丈夫です！」

ISRの軽い説明を終え、質問等がないことを確認したWA2000は満足気に頷くと次に進む

「次は狙撃^{DA}についてね。DA(ダイレクトアクション)って言うのは文字通り直接的な攻撃のことでこの場合は狙撃のことを指すわ。スナイパーがDAを行う際にはHVT(敵の任務遂行に必要な人物及び対象物)とHPT(排除することで敵の損害が大きく、自軍の任務遂行が容易となる人物及び対象物)の排除が主になるわね。代表的なHVTの例としては敵指揮官や中心人物^{マスターマインド}で例えるならそうね、オサマ・ビン・ラディンなんかがそうだったわ。私達で言うなら勿論鉄血で、その中でもハイエンドモデルがこれに該当するわね。HPTは対戦車兵器やその射手、機関銃手に迫撃砲とかになるわ。また、その場で脅威度の高い相手…例えば敵兵の中でも特に動きが良くて各種装備の扱いに精通してる所謂精鋭なんかも対象よ。更に言えばC2(指揮通信系統、部隊運用能力)に関わるものだったり衛生兵や燃料タンク、対空火器などもHPTとして挙げられるわね」

「ちよ、ちよっと！衛生兵を狙うのは無しなんじゃないの!？」

「そ、そうですねよ！それは非人道的行為でダメだって…」

「確かに基本的にはダメね。でもそれはあくまでも理想、現実ではそんな理想を捨てなきゃいけない時もあるのよ。特に対テロ戦争になるとそんなもの守ってられなくなるわ、なんせ敵がそれを無視してることが大半だもの。現に私だってテロ組織に爆弾を卸してる民間人を爆弾ごと撃つてテロ組織の組員も巻き込んで爆死させたことがあるわ、それによって大勢の無辜の民が救われることになった。そういう割り切りも必要なのよ」

「そうかも、しれませんけど…」

「私達は基本的に鉄血との戦闘が殆どだけど、人間と戦うことだってないわけじゃない…特にこの基地はグリフィンの特殊部隊として扱われている面もあるから対人間戦は他の基地よりも多くなるわ。そういう時にそんな甘い考えを持つてるようじゃ戦場は立てないわよ。この基地でやっていくつもりなら覚悟を決めなさい」

「……っ」

「ま、今すぐに覚悟しろなんて言わないわ。これから時間をかけて決めてくれればそれで良い…敵にだって人生があつて家族がいることだってあるんだしね、そういうった人達から大切な人を永遠に奪う覚悟なんてそう簡単に決められるものじゃないのも分かっ

てる。生半可な覚悟だとPTSDを発症したりもするし貴女達にはそうなって欲しくはないわ」

「……はー」

「感情で納得出来なくても理性で理解出来るなら上出来よ。大丈夫、貴女達ならきつと答えは見つかるわ。それまで精いっぱい私達を頼りなさい…さて、そろそろ授業を再開しましょうか。DAなんだけれど基本的にはさつき言ったことをすればOKよ。他にもスナイパーのDAには制圧や遅延の為に行うものもあるわ」

「…制圧？それって普通マシンガンとかでやるんじゃない？」

「そうね、マシンガンの制圧力は凄まじいものがあるわ。でも弾を大量に消費するし常にマシンガンが制圧射撃を行える位置にいるとは限らないでしょ？そういう時にスナイパーが敵の制圧や遅延行為を行うの。一時間目でも言ったけれどスナイパーの存在は敵へ与える心理的影響が大きい、それを利用してその場から動けなくさせるって手法よ」

「…なるほど、そういうことですか」

2人の声に覇気がなく表情も幾分か沈んだものになっているのが気に掛かるがWA 2000は無視して授業を続けていく

「こういったことをする際は敢えて敵を殺さずに負傷させてその負傷兵の救助や後送の

手間を増やしたり、負傷兵を囿にして救助に來た敵兵を撃つて更に負傷者を増やすなんてのも有効ね。また遅延行為に関しては陸兵相手だけに留まらないわ、例えば敵航空基地を発見してそこを監視できる位置にスナイパーを配置する。そして観測によつて駐機する航空機を発見したら翼やエンジン、吸気口なんかのクリティカルな部位に徹甲^A弾^Pを数発撃ちこんであげれば航空戦力や移動能力を削ぐことが可能よ。ヘリや戦闘機なんかは一部を除けば殆ど系アルミ合金で出来てるから普通の徹甲^A弾^Pでも十分ダメージを与えられるし、特にうちで造つてる弾なら更に効果的に破壊可能よ」

「そ、そんなことまで出来るんですね」

「…益々スナイパーつてのが敵に回すと厄介な存在なのが分かつて来るわね」

「そうでしょう？ 貴女達にもいずればそうなつてもらうわよ。さて、DAに関してはこんなところかしら…じゃあ次は火力支援^F要請^Sについてよ。まあこれに関しては今のグリフィンではあまり活用の機会はないけれど…一応知っておきなさい」

「火力支援要請つて言うと、例えば迫撃砲とかを撃つように要請するつてことかしら？」

「そうよ。スナイパーチームの武装は狙撃銃とアサルトライフル（アンダーバレルグレネードランチャー付きが好ましい）、拳銃程度だから直接的な火力つていうのはたかが知れてるわ。けれど私達は強力な砲^F兵^I部^A隊^Rの火力を誘導することが可能よ。だからスナイパーの任務の中には標^T的^A補^C足^Qも含まれるの。特に優れたスナイパー

Forward Observer は前方観測員の資格を保有してるから陸軍の榴弾砲やMLRS多連装ロケットシステムの誘導を行うことも可能になるわね。更に特殊部隊なんかに所属しているスパイともなれば総合火力誘導員資格を得て空軍のAC-130ガンシップによる近接航空支援だったり海軍の艦砲射撃の誘導なんかも可能よ」

「あの、まさかとは思いますが…」

「当然、これらの資格も取ってもらおうわよ」

「…戦場が遠いわ」

FN49とモシン・ナガンは若干遠い目になりながらも引き続き授業を聞きながらメモを取り続ける

「さて、最後に戦場監視ね、これはさっきも言った通りISRとはまた別の仕事になるわ。かなり簡単に言うるとISRは『そこに何がどうあるのか』を見るものでBSは『変化及び異常』を見るものになるわね」

「変化に異常、ですか…?」

「要するに観測した場所を見張って変化があればそれを伝えるなり攻撃を行うなりして、監視している場所に異常存在…と言うよりは脅威と言った方が良いわね、そういうものがあれば同様に排除するって認識で良いかしら?」

「理解が早いわね、それで概ね合ってるわ。勿論これはかなり大雑把に言ったものだけ

ら今から細かく見ていくわよ。まずは Traffic Control Point の監視、これは橋や隘路、交

差点なんかの交通の流れを管制出来る地点 (TCP) を見晴らしの良い場所から警戒及び監視するする任務よ。次に Main Supply Route

が多発する主要補給路や幹線道路 (MSR) に対する監視及び敵の排除を行う任務よ。カウンタージェド任務って言う場合もあるわ。3つ目は Cordon and Search

るセキュリティね、ちよつと分かり辛いかもしれないけどこれは一帯を封鎖 (Cordon) してテロ容疑者の隠れ家なんかを捜索 (Search) する任務に於いてスナイパーが果たすべき役目になるわ。味方部隊が捜索している間、スナイパーは封鎖エリア

の外側から敵や任務の障害となる要素が接近及び侵入しないように警戒・監視を行う必要があるの。勿論状況次第では警告なしで撃ち殺すこともあるわ。最後に

Personal Security Details P S D の援護よ、これは比較的イメージしやすいかしら。要人警護

(PSD) を行うエリア全体を見渡せる場所から脅威となる要素の発見・識別して排除する任務よ。以上でスナイパーの主な仕事の紹介は終わりね、結構ざっくりとした説明になったけれど理解出来たかしら？」

「大丈夫です！」

「問題があるとすればこれを実際に行えるようになるまでかなり時間がかかりそうってところね」

「そこら辺は心配ないわ。私達がみっちりと教育してあげるから」
 「…楽しみで仕方ないわ」

かなり厳しいであろう訓練のことを思つて気が重くなるモシン・ナガンだがすぐに気持を切り替える

まだ授業は続いているのだ

「さて、スナイパーの仕事に関しては説明したけれどそもそも仕事をする為にはその仕事をを行う地点へ到達しなきゃ意味がないわよね？というわけで次はその到達方法と離脱方法…専門的には浸透Infiltrationと離脱Exfiltrationと言われるものについて教えていくわよ」

「浸透Infiltrationに離脱Exfiltration…確かにそれが出来ないとい何も出来ないわね」

「ある意味一番重要なことですね」

「その通り、これが出来ないようじゃ戦場に出るなんて夢のまた夢よ。じゃあ浸透から説明していくわね。任務がどんなものであるにせよスナイパーチームは何らかの方法で敵の作戦展開地域Area of Operations、もしくは敵と味方の強豪地域に侵入・浸透しなくちゃいけないわ。だけど基本的に二人一組つていうのは火力的に見ると弱小なものよ、敵に発見されたりしたら悲惨な結末になるのは目に見えてるわね。よつて隠密で尚且つ確実な浸透方法が求められてくるわ、これをInfiltrationつて言うの」

「確かあの時指揮官も『スナイパーは隠密が大前提だ』と仰っていましたね…」

「そう言えばそうね」

FN49がゆかり達を救出したミッションの時のことを思い出しながら呟くとモン・ナガンもそれに相槌を打つ

「聞いていたのなら話が早いわ。当然だけれど浸透の方法は地形や状況、それに部隊の得手不得手によって左右されるわ。ま、うちの部隊なら得手不得手が問題になることはないけどね」

「凄い自信ね…」

「当然じゃない、そんなものに左右されるような生半可な訓練なんてしてないわ。まあそれは兎も角として今から浸透の色んな方法について教えていくからしつかり聞きなさい。まず最も基本的なのが『徒歩』によるものね。特に両軍が前線で対峙する通常戦争（対称戦争）に於いては敵の隙を縫って浸透することになるわ。現代に於いてこの徒歩による浸透はほぼほぼ夜間に行われるわ、勿論例外もあるけれどね。そして徒歩の最大の利点はその経済性、確実性、隠密性よ、逆に欠点は長距離の移動が難しいといったところね。特に市街地なんかでの浸透方法にはほぼ徒歩が選ばれるわ。正直現代ではこれから紹介する色んな浸透方法を組み合わせて潜入することが多いんだけど最後はほぼ確実に徒歩になる、だからこれが出来ないとお話にならないってわけね。次に

Tactical Ground Vehicle's

要するに車輛での浸透方法ね。この方法の利点は徒歩に比べ

て圧倒的に長い距離を移動できる点及び持ち運べる物資量の増加よ。M107みたいな大口徑狙撃銃でも容易に運搬出来るのは魅力だわ、その代わり徒歩に比べて被発見率の上昇や燃料を必要としたり地形によってはそもそも踏破出来ない状況があるのが欠点ね。例えばそうね：砂漠地帯やアフガニスタンの荒野みたいに徒歩ではどうしようもないエリアをカバーしなきゃいけない時なんかはこの浸透方法が使われることが多いわ。次に空挺^{Airborne}よ、これには通常のスタティックラインによる降下※1とHALO／H A H Oなんかのフリーフォール※2があるわ。指揮官曰くアメリカ陸軍第82空挺師団の偵察部隊L R R S—Dとかが得意としていたらしいわ。この浸透方法には当然空挺資格が必要になるからそれも取つてもらうわよ、スナイパーになりたいなら空挺資格は必須級のものだしこの基地にいる人形は全員取つてるから逃げられるとは思わないことね」

※1：パラシュートの展開コード（スタティックライン）をフックで機内に固定してジャンプと同時に傘が開く降下方法。自動的に傘が開く為比較的安全であり、主に低高度で行われる

※2：HALOは^{High Altitude Low Opening}高高度降下・低高度開傘、H A H Oは^{High Altitude Opening}高高度降下・高高度開傘のこと。どちらも地上から航空機が視認出来ない高高度から行われ降下隊員はフリーフォール自由落下の後に自らの意思で傘を開く、当然ながらスタティックラインの降下よりも高

度な技術となる

WA2000の言葉にFN49とモシン・ナガンの顔が引き替る

まさか空挺資格を取らされるとは夢にも思わなかったのだろう、しかしこれはスナイパーだけでなく他の兵科でも必要な技術であるためこの基地では半強制的に行われることとなる

勿論戦術人形はそのようなことを意図して作られてはいないし彼女達にそのような資格を取らせようとする指揮官は少ない、というかそもそも資格を持っている者が殆どいないであろう

WA2000はそんな彼女達の恐怖心や不安が分かる、なにせかつての自分もそうだったのだから……だがだからと言って甘やかすつもりは一切ない

いくら泣こうが喚こうが彼女達を高高度から落とすことは決定事項である

「そんな泣きそうな顔してもやるわよ、これが出来ないと活躍の幅がかなり狭まるしね……さ、説明を続けるわ。この空挺による浸透だけれどこれも他の浸透方法と組み合わせることになるの、降下後に徒歩で移動するのは当たり前としてTGVを同時に降下させて利用したり空挺用の折り畳み式マウンテンバイクなどを併用する場合もあるわね。マウンテンバイクは徒歩よりも移動速度が速くて熱源も発生しない、燃料も必要なくて

TGVよりも静かに移動出来るなど利点は多いわ。最後に空挺の利点なんだけれど Landing Zone 降着地 点さえ確保出来れば地形に左右されることなく長距離を短時間で移動出来て非発見率が比較的低いことね。敵地奥深くに浸透する場合、空挺以上に優れた浸透方法はないと言つても過言じゃないくらいよ。欠点としては勿論隊員に空挺資格が必要なこと、携行出来る装備の量に限界があること、天候（特に風速）の影響を受けやすいこと、降下の段階で負傷者が出る可能性があることなどね。危険と隣り合わせではあるけれど優秀な浸透方法であることに変わりはないわ、貴女達も早くマスターすることね」

「ふ、不安です…」

「右に同じく…」

2人の顔にはハッキリと「やりたくありません」と書いてあるがWA2000は無視する

気持ちは分かるがこればかりは仕方がない、慣れてもらうしかないだろう

内心申し訳なく思いつつも一切表に出すことなくWA2000は授業を続ける

「次はヘリ空中機動の説明よ、これはそのままヘリを使って浸透する方法ね。ゆかり達を救出する際に使った浸透方法だしそもそもグリフィンは基本的にヘリによる移動を前提としている部分もあるからその分他のより理解しやすいかしら。利点としてはパイロットとヘリさえあれば他の隊員には特に必要な資格がない（つまり簡単）こと、ヘリ

の大きさにもよるけど一度に大人数を展開出来ること、比較的携行出来る装備の制限が緩いこと、兵士への心身の負担が軽いことなど沢山あるわ。そして欠点が多いわけじゃない、これだけ聞くと優秀に聞こえるけどその欠点が大問題になるの：：なになが問題になるのか分かるかしら？」

「そうね：：やつぱり音が大きいし基本的に低空を移動するから発見されやすいことね」

「そして発見されたら敵から攻撃を受けたり警戒されたりすること：：でしようか」

「その通りよ。指揮官も言ってたけど実際に兵士が乗降するホバリング中を狙って攻撃されることは良くあつたらしいわ。当然そうなれば撃墜されるし、そこまでいかなかつたとしても深刻なダメージを受けることは確定よ。加えたとすれば音だけじゃなくローターが巻き上げる砂煙も激しいからそれも被発見率の増大に繋がることかしら、他にも例え敵に見つからなかつたとしても現地住民に目撃されて敵に通報される危険性もあるから結構リスクが大きいのよね」

「現地住民が敵に通報？鉄血は人類の敵なのに：：つてそう言えばこの基地は人間との戦鬪も多いんだつたわね」

「そういうこと。こうして見るとかなり危険な浸透方法に思えて使う気がなくなるかもしれないけど、長距離を短時間に移動出来て降着地点さえあれば安全に浸透出来るし、現代では離着陸時を狙った攻撃に対する対策もあるわ。MH-47Gなんかの各種セ

ンサーを利用すれば降着地点周辺に潜んだ敵を高確率で発見出来る、昔と比べれば安全性と生存性はかなり上がってるし恐らくこれからも上がっていくと思うわ。これに関しては戦術人形なら特に必要な訓練はないから省略しても良かったんだけど、一応知識としてきちんと知っておいた方が良さだろうから説明したわ。さて次の浸透方法なんだけど…先に言うところは今の状況じゃ殆ど使われることはないわね。ないことはないけど使用率は低いから出来れば習得しとくと良いって程度よ…ってなによ、その顔をWA2000の言葉にFN49とモシン・ナガンは信じられないとでも言いたげな顔をしていた

そんな2人にWA2000がどうしたのか聞くと2人は声を出すのがやつとという感じで答える

「…いや、まさか…：貴女の口から習得しなくても良いなんて言葉が出るなんて、思わなくて」

「正直、私も予想外過ぎて…：なんと言えば良いのか…：」

「貴女達ね…：私をなんだと思ってるのよ」

「慈悲の欠片もない鬼教官（です）」

「なるほど、良い度胸してるじゃない…：格闘訓練の時ボコボコにしてあげるから覚えておきなさい（ニッコリ）」

FN49とモシン・ナガンから返って来た答えにWA2000は笑顔でキレた

底冷えするような殺気が伝わるのを感じた2人は身体が小刻みに震えるほどに恐怖する

FN49は彼女がただキツイだけの人物でないことは理解していたが普段の訓練で冷たい言葉を投げかけられまくるのでそれに対してのちよつとした仕返しのもりであつた

しかしこの結果を受けてモシン・ナガンと共に絶対にWA2000を怒らせないようにしようと思つた

「ま、良いわ……こんなことばかり言つても授業が進まないしね。それで最後に教える浸透方法なんだけど、それは水^{On/Under the Water}上/水中浸透よ」

「な、なるほど……それで今では、あんまり使われないのね」

現在この世界はコーラップス汚染によつてほぼ全ての海が超絶危険地帯となつている

そしてその海と繋がっている川も汚染されている場所が多いため、この浸透方法は現在使われることが殆どないのだ

2つの浸透方法を纏めて1つとしているわけだが、水上の方はまだ使わなくもなくはない……しかし水中に関してはWA2000は一度も経験がないしスカーレットですら

一度しか経験したことがないレベルである

「そういうこと。一応説明しておくけど、水上浸透はゾディアックボートを使用して行われるわ。陸軍よりも海兵隊なんかが良く使う方法ね。水中浸透は原子力潜水艦に搭載してある小型潜水艇SDV※3によって行われるそうね。ある程度沿岸に接近した原子力潜水艦からSDVで更に海岸近くまで移動して最終的にスクーパーによって浸透するの。これは海軍特殊部隊のみが行える浸透方法らしくてコストも馬鹿みたいに高いそうよ。原潜を運用することから戦術レベルじゃなくて最低でも作戦レベル以上の軍事行動によって行われることになるし、流石にうちでも原潜は持っていないからこの浸透方法を使うことはないわね。だから水中の方は取り敢えず知っておくだけで良いわよ、水上に関しては訓練自体はするけど実戦で使うことは殆どないからそのつもりでね。さて、これで一通り浸透方法について説明したし暫くはノートを取る時間を取るわ。質問があつたらしても良いわよ」

※3：SDVとはSeals Delivery Vehicle（シールズ輸送艇）の略。その名の通り海軍特殊部隊Navy SEALsを輸送する為に開発された小型の専用潜航艇

浸透方法についての説明を終えたWA2000はそこで小休止がてら板書を移す時間と質問の時間を取る

FN49とモシン・ナガンはその時間を利用してノートを取り、幾つか質問をぶつける

WA2000はその全てに的確に答えていく、そして十分ほどの時間が過ぎるとWA2000は手を叩いて授業を再開した

「さあ今からは離脱^{Ex-tri}について教えていくわよ。これはそのまま任務を達成したスナイパーチームが戦域から離脱すること、そして離脱は浸透と同じ方法を用いることが多いわ(当然ながら空挺は除外)。だけど色んな事情からそうもいかない場合もあって、現場の状況によって2通りに分かれるわね」

「2通り…ですか?」

「そうよ、敵性^{Hostile}状況下と非敵性^{Friendly}状況下の2つね。とは言っても敵性状況下での離脱なんて殆ど起こりやしないわ、そもそも離脱する際に敵性状況下にならないことまで想定して作戦を構築するからね。だから非敵性状況下での離脱はどちらかと言うとピツクアツプに近いわ、派手さはないし面白みには欠けるかもしれないけど隊員を無事に帰還させる責任がある以上当然のことよね。現実^{リアル}と非現実^{フィクション}は違うし、実際私も今までの任務で敵性状況下での離脱なんてしたことがないわ。危険を前提で部隊を前線に送り込むなんて論外だしね。それでこの非敵性状況下での離脱方法だけれど、侵攻作戦なら後続してくる味方部隊に拾ってもらおうのが一般的よ。防御作戦・治安作戦なら巡回してくる

部隊に拾ってもらわね。貴女達が経験したこの前の作戦では浸透方法と完全に同じ手法を取っていたわね、あれも良くあるやり方よ。だけど時には致し方なく敵性状況下での離脱を強行しなきゃいけないこともある、今からそういう時にどうするか教えてあげるから念のため知っておきなさい。まず敵状況下っていうのは敵に発見もしくは存在を察知されて捜索隊を差し向けられている状況下での離脱のことよ。僅かな火力しか持たないスナイパーチームにとってかなり危険な状況で、所謂 \square 落ち武者狩り \square のよいうな状況と考えて相違ないわね。敵の対空火器が警戒態勢に入ったりすれば航空機による救出や支援も難しくなる、こういう場合はTGVとかも含めて全ての装備を破棄してでも逃げることを最優先としなきゃいけないわ。勿論拳銃くらいは残しておいた方が良いし機動力が損なわれないのならアサルトライフルも持っていて大丈夫よ、でも狙撃銃は手放しなさい」

「え、でもそれって…」

「ええ…ASSTで結ばれた半身と言っても過言じゃないものを捨てるってことよ。勿論メンタルに負荷は掛かるけど堪えなさい、無事に生き残ることが何よりも大事なんだから」

「…理屈は分かるけど、いざそうなった時に捨てられる自信がないわね」

FN49とモシン・ナガンは顔を歪める

それもそうだろう、己の存在証明そのものを捨てると言われて苦しく思わない戦術人形はいない、しかもこの基地では細かい訓練が行われるのは既知の通り…つまり近いうちにソレをやらされるといふことだ

WA2000にも彼女達の気持ちは痛い程に分かる、かつて自分もその訓練を施された時に過呼吸になるほど苦しかったのを覚えている…しかもそんな状態で自分を殺そうと迫って来るスカーレットから逃げろと言われた

見つければ容赦のない銃撃が顔の数ミリ横を飛んで来るあの恐怖と不安は言い様のないものであり、出来ることなら2度と味わいたくはないがいざという時の為に今でも時折行っている…そしてその度に中々に辛い思いをしているのだ

その感覚を知っている者として彼女達にそんなことをさせるのは心苦しく思うがそれではダメにならないとグツと堪える

「恐ろしく辛い訓練になるけれど大丈夫よ、決して乗り越えられないものじゃないから。ま、これはまだ先のことだし今は覚悟だけ決めときなさい。説明に戻るのだけどころいった事態に備えて本隊は緊急即応部隊を待機させるわ。もしも敵性状況下での離脱が実行されることになれば可能な限り攻撃ヘリやガンシップなんかの航空戦力を呼んで他にもガントラック（武装ハンヴィーとも）で向かったりするわね。ガントラック隊はM2重機関銃やM19グレネードランチャーといった強力な火力を持つ

ことが多いから並大抵の脅威は跳ね返せるわ、とは言えこれは出動しないことが前提の部隊だからそれに頼るのは許さないわよ。それからかなり特殊な離脱方法として Special Patrol Insertion Extrac^Etion というものもあるわ。これは特殊なハーネスによつてヘリから垂らされたロープで隊員を吊り上げるつて方法でね、ヘリが着陸出来ないような場所でも短時間で部隊を回収出来る利点があるわ。でも数珠繋ぎに空中にぶら下がっている隊員は敵からしてみれば格好の的よ、当然容赦のない銃撃に曝されることになるからあくまでも『最終手段』であることは覚えておきなさい」

「そりゃそんな状態の敵がいたら撃つわよね」

「マシンガンで斉射されたりしたら一溜りもありませんね…」

「そうね、そんなの私もごめんだわ。さて、丁度いい時間だし教えたいことは全部教えたから二時間目の授業は以上よ。しっかりと復習して記憶に定着させておきなさいよ」

「はい！」

「了解よ、同志」

WA2000がホワイトボードに書かれた文字を消して教室から出ると2人は先ほどと同じように今しがた受けた授業内容を振り返つて復習に励む

次の授業までの空き時間は20分、復習と休憩をどちらも行えるように長めに設定さ

れている時間をしっかりと有効活用して次の授業に備えるのだった

座学1日目 三時間目

「さあ、三時間目を始めるよ。メモの用意をして」

「今回はお師匠なのね、よろしくお願いするわ」

「よ、よろしくお願いします!」

休憩時間が終わると同時にM200が教室に入って来て授業を始めると2人に声を掛ける

「うん、よろしくね。それじゃあ今回の授業内容んだけど、大分すると2つに分かれるよ。まず一つ目は『スナイパーとスポッターの役割について』、もう一つが『OCCO KAについて』だね。もし時間が余ればレンジカードについても教えようかな」

「OCCO KAって確か…」

「この前の任務でお師匠と指揮官がなにやら言ってたあれのことよね?」

M200の言葉に2人は反応する

以前行われた任務の際にスカーレットとM200が話していた謎の言葉について知れるということに興味を湧いたのだろう

「そうだね。あの時は何を言ってるのか全く分からなかっただろうけど、今から教える

からしつかり聞いててね。それじゃあまずはスナイパーとスポッターの役割について教えていくよ」

M200はそう言うのとホワイトボードに書き込みながら話をしていく

「まず一時間目で指揮官が言つてたけど、スナイパーは基本的にスポッターと2人組で行動することになるよ。勿論例外もあるけれど、それは追々だね。それで、スナイパーとスポッターって言ってくるくらいだし両者は役目が違うんだ。今から列挙していくからちゃんとメモしてね、それじゃ行くよ」

M200はホワイトボードに書きながらそれを口に出して言っていく

最終的には以下の要素が書かれることになった

○スナイパーの役割

- ・OPORDの作成
- ・関連する他部隊とのコーディネイト
- ・移動時のリアセキュリティ
- ・ストーキング時のリード
- ・敵追跡時のリード
- ・LP／OPの場所選定
- ・LP／OPの構築

- ・ 標的の搜索、発見、報告
 - ・ スコープの調整
 - ・ スポッターによる距離目測の補助
 - ・ 狙撃
- スポッターの役割
- ・ 特殊装備の選択と調達
 - ・ 移動時のリード
 - ・ 自衛目的の発砲
 - ・ スナイパーの敵搜索時のカバー
 - ・ レンジカードの作成
 - ・ LP/OPの構築
 - ・ スポッティングスコープでのセクター監視
 - ・ 標的の搜索
 - ・ 標的の識別
 - ・ 狙撃優先順位を選択
 - ・ 風速測定
 - ・ スナイパーへの射撃号令

- ・ 援護狙撃（必要な場合のみ）

- ・ 着弾位置の把握とスナイパーへの報告

- ・ 原隊への通信

- ・ 収集した情報の記録

- ・ ブービートラップの作成、クレイモア地雷などの操作

- ・ LP／OPの後始末

「へえ、スポッターの方が役割は多いのね」

「そうなんだ。でもこれはあくまでも基本にしか過ぎないからどんな状況でもこうなるとは限らないよ、寧ろ全部が全部一致することの方が少ないかな」

「それはつまり…スナイパーとしてもスポッターとしても動けるようにならないといけないということでしょうか？」

「そうだね、どちらか片方の役割しかこなせないようじゃ戦場には出れないよ。例えばあの時の作戦でボクはスポッターとして動いたけど、スナイパーとして動くように指示されれば即座に切り替えられるよう心構えてたよ」

2人は「なるほど…」と眩きながらもメモを取り、それが終わった辺りでM200がそれぞれの要素の詳しい説明を始めた

「じゃあまずは『Operational Order作戦行動計画』の作成だね。とは言ってもこれは読んで字の如くその

ままで、言い渡された任務を遂行するにあたってどういう作戦でいくのか、及びその道中の細かい行動計画を作成すること。次に『関連する他部隊とのコーディネート』だけでなく、これもまだ分かりやすいかな。要するに他の部隊と共同で作戦を遂行する際の通信係みたいな感じだよ。次の『移動時のリアセキュリティ』は通常の移動を行う際にスポッターの後ろを付いて行きながら後方の警戒をすること。『ストーキング時のリード』は隠密行動を行う際に先導すること。そして『敵追跡時のリード』って言うのがちよつとだけややこしくてね、これは敵の後を直接追いかけるわけじゃないんだ。足跡なんかで代表される痕跡を辿っていく際に先導することを指すよ。『LP/OPの場所選定』なんだけどこれは後で細かくやるね、同様に『LP/OPの構築』に關しても今は飛ばすよ。『標的の搜索、発見、報告』はもうそのまんまだよね、特に説明は要らないかな。『スコープの調整』に關しては後々の授業でかなり細かく教えるから今はパス。『スポッターによる距離目測の補助』もそのまんまに近いね。基本的にスポッターが目で直接凡その距離を測るんだけど、その補助というか念の為に自分でもやっておくって感じかな。最後の『狙撃』に關しては説明不要だよ。これでスナイパーの役割に關する簡単な説明は以上かな、次にスポッターの役割を見ていくね」

M200はそう言う別ホワイトボードに書き始める

「まず一つ目の『特殊装備の選択と調達』なんだけど、ここで言う特殊装備って言うのは

例えばHALO及びHAHO降下をする際に必要なパラシュートを含めた降下装備だったり暗視装置やIRF(レーザー測距計)なんかだね。『移動時のリード』はスナイパーと逆になるっただけ。『自衛目的の発砲』も文字の通りなんだけど、これはあくまでも最終手段だからね。隠密行動が大前提のスナイパーにとってそんな目的での発砲を行うこと自体あるべきじゃないから気を付けて。『スナイパーの敵搜索時のカバー』なだけであの時の作戦でボクは特殊なスコープを持ってたよね?あれを使ったりしてスナイパーよりも広範囲を索敵して敵補足の補助を行うよ。『レンジカード』の作成についてはまた時間があればかな。『LP/OPの構築』に関しては同じく後でやるよ。『スポッティングスコープでのセクター監視』はスナイパーの搜索カバーとそんなに変わりないね。敵を補足した後もスポッターは引き続き周囲の警戒を続けるんだって思ってくれていいよ。『標的の搜索』と『標的の識別』は読んで字の如く、識別に関しては誤射を防ぐためのダブルチェックの意味合いが強いね。『狙撃優先順位の選択』もそのまんまだね、その場の状況から柔軟にターゲットの優先順位を判断して決定するんだ。『風速の測定』は後々の授業にある狙撃のイロハについて学ぶ授業でやるよ。『スナイパーへの射撃号令』は説明不要だね、あの時のボクがしたことだよ。『援護狙撃』もそのままだから分かりやすいかな。2点への同時狙撃が必要だったり、万が一失敗した時のフォローになるね。まあ指揮官クラスにもなるとほぼ必要ないんだけど…まあいい

や。『原隊への通信』はスナイパーの役割にあった『関連する他部隊とのコーディネート』とは違って本部へ報告をしたり指示を仰いだりすることを指すよ。『収集した情報の記録』は現地での狙撃に影響を及ぼす環境条件の情報や敵地を偵察したことによって得た情報などを記録する役目だね。『ブービートラップの作成、クレイモア地雷などの操作』なんだけど、ミリタリースナイパーは条件次第では一回発砲するだけで位置がバレることもあるんだ。そういう時に寧ろそれを利用して狙撃地点にトラップを仕掛けて捜索に来た敵の数を減らしたりするのがブービートラップの作成だね。他にも少数で動く上に狙撃する際には後ろとかに気を配るのが難しくなるから安全の為に周囲にクレイモア地雷なんかを設置することもあるんだけど、その設置や回収はスポッターの役目になるよ。『LP／OPの後始末』だけどこれも後々だね：一気に説明しちゃったけど何か質問はあるかな？」

「私は大丈夫よ」

「私も大丈夫です、そのままの意味で分かりやすいものも多かったのよ」
「そっか、良かった」

2人の返答にM200は安心したように頷くと次の説明に入る為に暫く板書に移す時間を取った後に一度ホワイトボードに書いたものを消して新たに書き始める

「それじゃあ次は『O C O K A』についてなんだけど、その為にまずはさつきからちよく

ちよく出てる『LP／OP』についての説明をするね。LP／OPは『Listening Post／Observation Post』の略で歩兵やスナイパーの構築する監視拠点のことだよ。スナイパーの場合はこれに加えて『スナイパーズハイド』っていう隠れ場所なんかも作るよ、この前もボクと指揮官が作って入ってたあれだね。それでLP／OP地点のあれこれについてスナイパーとスポッターで違うことを言うんだけど、ぶつちやけると両方で協力して設けることの方が多からあんまり気にしないでいいかな。どつちにしろ全部出来なきゃいけないだしね。でもスナイパーとスポッターとで役割が分かれている関係上何もかも同じじゃない、特に装備に於いては結構な違いがあるんだ。LP／OPの詳しい説明の前にそつちを説明するね」

「装備に差異？でもあの時お師匠と指揮官は同じものを持つてなかつたかしら？」
「確かに……」

「そうだね、それに関しては部品の共有が出来ると緊急時に役立つからとかそういう理由が大半かな。それにあの時は周辺情報を事前に持つてたのが大きいね、だからあの時ボクは自分の銃を持つて行けたんだ。もしもそうじゃなかったらボクは違う狙撃銃を持つて行つてたよ」

「…マジ？」

「大マジ。そこら辺も含めて説明していくよ、まずはざっくりと両者の装備の違いを書

いていくね」

M200がホワイトボードに次々と書き込んでいき、2人はそれをメモに取っていく

○特にスナイパーが持つべき装備&携行品

・狙撃銃（サブレッサーを含む）

・アサルトライフル（移動時に使用）

・拳銃

○特にスポッターが持つべき装備&携行品

・SPR/M14/M16A3などのセミオートで撃てるライフル（グレネードラン

チャー付きが望ましい）

・弾着観測用スコープ（スポッティングスコープ）

・IRF

・拳銃

○両者が携行するべきもの

1. ベストに入れて携行するもの（常に手元にあるべき物）

・弾薬／予備マガジン（ライフル、拳銃共に）

・無線機

- ・ 双眼鏡

- ・ コンパス／DAGR（GPS受信機）

- ・ 地図（マップケースで保護）

- ・ 小型温度計／風速計

- ・ 小型フラッシュライト（夜などに小さく手元を照らすため）

- ・ MS-2000IRストロボライト（緊急時に味方航空機へ発行信号を送つたり

他部隊との交信に用いる）

- ・ IFAK（外相応急処置キット）

- ・ ケミカルライト

- ・ ナイフ

- ・ 水筒

- ・ 腕時計

2. バックパックに入れて携行するべきもの（スナイパー用にデザインされたものを使用する）

- ・ クリーニングキット

- ・ アルコール・パッド（レンズの清掃や傷口の消毒など使用用途は多岐に渡る）

- ・ ギリースーツ及びその他偽装キット

・サバイバルキット
 ・キャンバス生地（土を盛ったりLP／OPのカバーやハイドの作成など使用用途は多岐に渡る）

・フラツシユライト
 ・ゴアテックスジャケツト&パンツ（温度や天候の変化に備える）
 ・ポンチョ／ポンチョライナー（防雨及び隠蔽や就寝時のシエルターや寝具として利用）

- ・クレイモア対人地雷
- ・防虫剤
- ・ハイジジキツト（歯ブラシなどの衛生用品）
- ・筆記用具
- ・予備弾薬（念のため）
- ・予備の水筒
- ・各種機器の予備バッテリー
- ・食料（レーションなど）
- ・ダクトテープ（船だろろうが宇宙船だろろうが修理出来る最強テープ）
- ・マクネット（マグネットではない、マクネットは迷彩柄のテープのこと）

「結構多いわね…：ていうか1つ気になるんだけどいいかしら？」

「ん、どうしたのモツシー？」

M200が書き終わると同時にモシン・ナガンが疑問を呈した

「スポッターが持つべき銃でSPRやM14なんかは分かるわ、両方今では狙撃銃として運用されてるしね。けどM16A3はどうなのかしら…：狙撃カスタムしてるわけでもないでしょうしそれならA4でもいいんじゃないの？」

そう、モシン・ナガンの疑問点はそこだ

スポッターと言えど狙撃することがあるのに変わりはなく、ミリタリースナイパーの性質上なるべく離れた地点からの狙撃を行うのが自然だ

となればM16A3では有効射程距離的に厳しいのではないか、というものである

SPRも使用弾薬はサイズこそM16系列と同じ5.56×51mm NATO弾ではあるがM16やM4などで使用するM855ではなく弾頭重量を増した狙撃用のMk.262弾を用いるためある程度の長距離（500〜650m前後）であれば精度を保てなくもない

しかしM855を使うM16A3ではその精度は500m程なら保てるが（かなりギリギリ）それを越えるとかかなり厳しい

その上M16A3よりもM16A4の方が新しいモデルなんだからまだそちらの方

が良いのではないか、と言うのだ

彼女の言うことは尤もだが、1つの勘違いと1つの想定不足がある

M200がモシン・ナガンにそのことを教え始める

「まず1つ大きな勘違いをしているみたいだけど、M16A3とM16A4の違いはフルオートか三点バーストかだよ。A3がフルオートでA4が三点バーストだね、そして三点バーストなんて実用性が今のところ皆無なのに欠点がいっぱいあるっていうブルパップと似たようなものだから使う必要性はない…必然的にA3が選択されるんだ。それに狙撃って言うのはあの時みたいに長距離から撃ちこむとは限らない、特に市街地戦なんかになれば1kmを越えた狙撃なんて殆どあり得ないね。そういう状況ならM16A3の有効射程距離でも十分なんだよ。それにフルオートで撃てる分遭遇戦とかの咄嗟の戦闘行為でも有利だからね、他にもアサルトライフルな分狙撃銃と比べて頑丈だから過酷な環境にも持つて行きやすい。そういう状況が想定される場合はM14は大きくて不便だしSPRじゃ接近戦に弱い、だからM16A3も候補として十分にありなんだ」

「なるほど、そういうことなのね…理解したわ、ありがとう」

「どういたしまして」

モシン・ナガンの疑問も晴れたところでM200は話を次に進める

「スナイパーが使用する狙撃銃って言うのは長距離を狙える半面連射速度が遅いし装弾数も少ないから火力に乏しいよね、それに取り回しもあんまり良くないから近距離の敵への対応が難しい。だからあの時指揮官もボクもHK416を持ってたんだ。それと同様にスポットターは近中距離をカバー出来て自動式で瞬間的に大火力を発揮出来るもの―それこそHK416やM16A3、HK417でもいいね。それにグレネードランチャーを装着したモデルを携行するのが理想になるよ。勿論グレネードランチャーは自衛の最終手段的なものだから余程のことがない限り撃つことはないけどね。それにサブレッサーは絶対に着けなきゃダメ、特に夜間の狙撃ともなればその重要度は上がるよ。それにここに書いたのはあくまでも基本的なものに過ぎない、任務内容や環境によつて持つて行くべき携行品は変わるんだ。季節によつても異なるし砂漠、森林、山岳、市街地ではそれぞれ持つて行くべきものは変わるよね？例えば市街地に於けるMSR（主要補給路）の監視任務なんかの場合は基本的に自軍の勢力エリア内になるから食料なんかを持つて行く必要はない。それと携行品はなるべく少なく、軽くするべきでもあるね。理由は勿論機動性を損なわない為、例えばスント社製COREのような腕時計はコンパス、温度計、湿度計、気圧計の機能を持つてるから重複する携行品を削ることが出来る。でも指揮官が言つてたように技術に頼るのはダメ、特に電池で動くものは常に故障のリスクがあるからそれを想定した上で携行品のリストを組む必要があるよ。弾

薬に関しても1種類のものだけじゃなくて複数種類持つて行くのもいいね、例えば、308口径の場合M118普通弾、AP弾などを任務・敵情^E・地形^T・部隊^T・時間^T・民情^Cによつて使い分けたりするんだ。でもこれは必要があれば、に止めておこう。銃と弾薬はかなり細かい相性があつて特に狙撃銃ともなればその調整は狂う程に細かくなされるから違う弾薬を使うと動作不良を起こしたり、最悪の場合壊れたりするよ。特に異常腔圧での銃身破裂は滅茶苦茶に危険だから気を付けて」

異常腔圧が起こると上の画像のような状態になつてしまい最早撃つ撃たないの話ではなくなつてしまう

相性の悪い弾薬だけでなく、銃身内部に異物が混入することによつても起こる（寧ろこつちが主）のでそういう状況になりやすい環境では特に注意が必要である

2人も銃が見たこともない破損の仕方をしている写真を見て驚愕していた

「まあこつちらの弾薬との相性とかは実践しながら教えていくね。じゃあこれからLP

／OPの詳細な説明に入るよ、良く聞いててね。まず前々回の授業でも言ったようにスナイパーは歩兵の一種、だから歩兵が理解しなくちゃいけない要素をスナイパーも理解してなきゃいけないんだ。今からその要素を話すからしっかり聞いててね、行くよ」

- ・部隊の任務

- ・作戦の性格、目的

- ・報告する司令部のレベル（中隊／大隊／連隊）

- ・敵味方それぞれの関連する部隊

- ・遭遇する可能性のある敵の規模、装備、兵器

「ここら辺もまあ読んで字の如くだよね。これらの要素を理解している前提で拠点を選択する際に注意する点・それが『O C O K A』だよ。スナイパーの拠点に限らず一般歩兵が守備陣地やLP／OPを築くときにも必ずこの要素を前提として決定されるね。つまりは歩兵全員が理解していなくちゃいけない基本中の基本になるんだ。じゃあ今からは具体的にO C O K Aが一体なんなのかを説明するよ。まずO C O K AはO, C, O, K, Aに分けられてそれぞれがイニシャルになってるから、一つずついくね。一つ目のOはちよつと特殊でOとFを合わせてIつにしてるんだ。Iつが『Observation視界』、これは一定のエリアを肉眼で直視出来て標的を補足出来る範囲のことだよ。当然だけど丘陵や建築物の反対側は視界には入らないから気を付けて。ベストな視界を得る場所

はそのエリア内に於ける最高度の地点（制高点）になる、これは分かりやすいよね。それでFって言うのは『Fields or Fire 射 界』のことだよ。これは現在位置から手元にある銃器等で効果的な攻撃を加えられる範囲のことだよ。射界には大きく分けて二種類あつて、狙撃銃なんかのダイレクトファイアウエポン（直射火器）みたいに標的まで直線で障害物が無いことが前提となるものと迫撃砲なんかのインダイレクトファイアウエポン（非直射火器）みたいに直線状に障害物があつても問題ないものになるんだ。けどボク達からすればダイレクトファイアウエポンの方を使うことになるからそれ前提で考えててね。兵士1人が担当する射界及び監視範囲は広すぎると注意が散漫になるし、長期間連続した場合も同様だね。偵察チームの人数、偵察する期間などを考慮して範囲を分担するなり交代制で行うなりして散漫になることを防ぐことも考えんきやいけないよ。そして分担する場合は隣り合う射界をクロスオーバーさせる必要があつて、自分の射界の左右両端の目印として小枝を刺しておくことと良いね。特に夜間は自分の射界の範囲を見失うことがあるから結構役に立つんだ。ここまで聞いて分かつてるとは思うけど視界と射界は全くの別物だからそこをしつかりと理解してね。例えば砂漠なんかの開けた環境ならそれこそ25kmくらい先まで見通せたりするけど流石にそんな距離を撃ち抜ける狙撃銃なんてないからね。338ラプアや50BMGなんかでも有効射程距離は1500mであることが多いし、君達のだと大体800m〜1000mと言つたとこ

ろかな。つまり視界は2.5 kmだけ、射界は1.5 kmや0.8 kmになる、ってことだね」

「なるほどね、視界よりも射界を重視した方が良いのかしら」

「基本的にはそうだね。でも任務的に撃つ必要がないのならあんまり気にしなくて良いかな」

「確かにそうですね…」

「他に聞きたいことはないかな？ じゃあ次々いくよ。次のCは

『Cover and Concealment』の略で、遮蔽っていうのはダイレクト／インダイレクトファイ

ア、空爆、その他の攻撃から身を保護してくれる天然物や人工物のことを言うよ。例えば岩陰に隠れた場合はその岩が遮蔽になるね。遮蔽は自身の存在を地上または空の敵から隠してくれる天然物や人工物のことを言うんだ。丘や谷、森林、ビルなんかの建造物とかがそうだね。因みに軍用の地図に於ける緑色の部分は森林を指しているから参考にしてね。一応細かく言っておくとこの緑色の部分は『周囲100m四方の地域に歩兵小隊27名を空からの視認に対して隠蔽出来る』っていう基準に沿って着色されてるんだ。遮蔽及び隠蔽は全ての兵士にとって重要事項になるけど、限られた火力で敵作戦区域^A内に潜入するスナイパーにとっては特に重要度が高くなるよ、個人的なカモフラージュ技術は今後教えていくけどそうだったことも視野に入れて任務に臨むように

ね。あと気を付けて欲しいのは遮蔽と隠蔽はイコールじゃないってこと、例えば深い茂みは姿は隠してくるけど弾丸は止めないし防弾ガラスは弾丸を止めても姿は隠さないっていう具合にね。こういった点を把握して状況に応じて自信を遮蔽／隠蔽する物体には注意を払わなくっちゃダメだよ」

「それが『2つのC』と言っていたものなんです」

「うん、そうだよ」

「こうしてみると本当に私達は何も知らなかったのね。その上これでもまだ序の口なんてね……っってお師匠？」

モシン・ナガンが軽くシヨックを受けつつこれから先の授業のことを思っただけで落ち込んでいるとM200が近寄って頭を撫で始めた

「大丈夫だよ、ボクだって始めは君達と同じどころか敵を前に全部見捨てて逃げた弱虫だった。そんなボクでもここまで来れた、果てない努力に耐えることさえ出来れば君達だってきつと同じ領域まで来れるよ。だから頑張っ」

「お師匠……ええ、やってみせるわ！だからもつともつと教えて頂戴」

「喜んで」

M200の言葉にモシン・ナガンは気概を取り戻し、授業の続きを促すとM200は笑顔で頷いてホワイトボードの前まで戻って授業を再開する

「次はOだね。これは『障^{Obstacles}害物』の略でそのままではあるんだけど、ちよつとだけイメージとは異なるのかな？ここでいう障害物っていうのは部隊の移動速度を遅らせる又は止める、もしくは回避を強いる物体や環境のことを指すよ。例を挙げるなら建造物、急勾配な坂、湖、河川、崖、沼地、森林やジャングル、鉄条網、地雷原なんかだね。天然の障害物に関してはあんまり説明する必要はないかな、河川なら流れの速さや水量、深さなんかで通行の可否が決まってくるとか沼地ならその度合いによつて車両の通行が不可能になるとかそんな感じ。だけど人工障害物、特に軍事障害物だと話は変わってくるよ。例えば地雷原なんだけど、その設置目的が敵の進行阻止なのか遅延なのか回避なのか…それによつて敵が受ける影響は大きくなるし分析も容易には出来ない。スナイパーの任務にはこうした軍事障害物の設置は含まれることはないけど敵の進路や進行速度を予測して正確な情報収集や自らのLP/OPの設置に反映させるために障害物について熟知しなきゃいけないんだ。前回の任務では全然なかったからまだ実感は難しいかな」

「確かに指揮官も『2つ目のOは見当たらないが問題はない』とか言つてたわね」

「存在していればそれを利用したり味方に注意を促したりする、ということですか？」

「その通りだよ、2人とも理解が早くて助かるね。どんどん吸収してくれるから教え甲斐があるよ」

M2000からの誉め言葉に嬉しそうにする2人

M2000もまた2人を撫でてあげたい気分になるが残念ながらもまだ授業は続いている、先程のような事態でもない限りは授業を優先しなければならなかった

後で思う存分撫でることにしよう、そう決めたM2000は残る要素について説明していく

「さて、O C O K Aの説明も終盤だね。次のKは『Key (Decisive) 緊要地形』のことだよ。陸戦に於いては必ずと言って良い程に勝敗の鍵となる地形ポイントが存在するんだ。それが緊要地形Key Terrainって言われるもので、そこを奪取乃至確保出来れば戦局を有利に展開出来るポイントのことだね。これにも天然物と人工物がそれぞれ存在するよ、代表的な人工物で言う橋かな。第二次世界大戦末期の英米連合軍による攻勢作戦『マーケット・ガーデン』では進行ルート上の橋を巡る戦いがあったよ。機甲師団の進撃に橋の確保は絶対条件になるんだ、『遠すぎた橋』っていう名前で映画化もされてるから時間のある時に観てみるといいかもね。他には平らな盆地とかも緊要地形になるよ、LZ（ランディングゾーン）になり得るからね。似たような理由で空港も緊要地形だね、アフガニスタン紛争の開戦劈頭に陸軍レンジャー連隊がカンダハル近郊の飛行場に降下・占領した作戦はまさに緊要地形の奪取が目的の作戦だったよ。これ以外だと地形的な意味合いとしてはチヨークポイント（地形的に補足狭くなって交通路が限られる場所のこと）や丘

の頂上なんかがそうだね、あとは政治的な意味合いでモスクだったり放送局なんかの重要施設などが挙げられるかな。スナイパーは自身が活動するAO内の重要な地形を把握することは絶対条件だからしつかり理解してね」

「天然物や人工物は兎も角として、政治的ね…流石にそれは想定外だったわ」

「でも確かにそういうこともあり得ますよね…LP/OP地点はそういったものを見通せる場所にしなきゃいけないですね」

「そうだね、ボクも目から鱗だったよ。でもすごく重要なことだから…って言っても今までもこれからも授業で言うことは殆ど全部重要なことだから聞いたことは全部覚えてもらわなきゃ困るんだけど、これに関してはスナイパーに限らず歩兵にとつて大事なことだから特に理解しておいて。頭で考えることなく感覚で瞬時に判断出来るようになるんだとレンジカードなんて書けないからさ。さあ、その為にもOCCOKA最後の要素であるAについて説明するよ。このAは『Avenues of Approach 攻 経 路』の略だね。侵攻経路は敵勢力が進行してくる可能性が最も高いルートのこと、これは地上だけじゃなくて水上や航空機による侵攻経路も存在するんだけど…まあ今の情勢じゃあんまり気にしなくていいね」

「それであの時お師匠は『水上は存在せず航空は無視出来る』って言ってたのね」

「そういうこと。AA(侵攻経路)を明確にすることで監視すべき範囲を集中出来て広く

まばらに見張るよりも正確性が増すんだ。当然、LP/OPはこうしたAAも望める場所はなきやダメだよ。ついでに説明するとLP/OPの位置座標は地図もしくはGPS機器を用いて確認するんだ。地図を使う場合は地図上の自分達の位置を専用の定規（プロトラクター）で計測して座標を割り出すよ。この方法なら緯度・経度それぞれ4桁、合計8桁の座標を割り出すことが可能なんだ。GPS機器ならより詳細な10桁の座標を求めることが可能だね、こうやって自分達の位置は正確に理解しておく必要があるよ」

「これまたややこしそうな計算が必要になつてきそうね…」

「そうだね、正直クソややこしいよ。まあそこら辺はまた後程だね。さてと…時間はまだあるけどレンジカードの説明が出来るほどじゃあないね。時間があつたとしてもここまで説明を聞いた後だと理解が難しいだろうし…どうしようかな」

説明を終えたM200が時計を見るも残り時間は少し微妙な感じであった

レンジカードの説明など出来る時間ではない（決して投稿者のメンタル的にこれ以上は厳しいとか文字数的にとんでもないことになりそうとかそういうメタい理由ではない）

なのでどうしたものかと悩むこと数十秒、どうやら何か思いついたM200はポンつと手を叩いて2人に向き直った

「時間も微妙な感じになったしここまでの授業でちよつと疲れてるだろうからちよつとした雑学的なもので小休止にしようか。きつとワルサーは性格的にあんまりこういうことしないだろうしね」

「そう言えばなかつたですな」

「ちよつと真面目過ぎる嫌いがあるものね」

「そう言わないであげて、あれでも結構気にするし実際のところはそれなりにユーモアもあつたりするから。さて、じゃあちよつとしたことなんだけど今から説明するのはサイレンサーとサプレッサーの呼び方の問題についてだよ」

「そう言えばさつきサプレッサーが正しい説は大間違いだとか言つてたわね」

「そうなんだ。指揮官も言つてたけど初歩的な英語力があれば理解出来る話だから気楽に聞いてね。そもそもそんなんだけどサイレンサーとサプレッサーの意味というか、訳すとどういふ風に言うかつてのは分かる？」

「サイレンサーが『消音器』、サプレッサーが『減音器』だと聞いていますが…」

「そうね、私もその認識でいたわ。それでサイレンサーと言う割には音を消せてないからサプレッサーの方が正しいって…」

「確かにその理論は良く聞かし軍人の中にもそういう風に認識してる人は多いね。でもね……」

その理論は合ってる部分が何一つなくて間違いしかない、最早理論とすら呼べないものなんだ」

「…そ、そこまで言う必要あるのかしら」

「実際それくらいに間違ってるんだよ、今からそこら辺の解説をするね。まずサイレンサーとサプレッサーを英語のスペルで書くとsilencerとsuppressorになる、ここまでは良いよね」

「はい、大丈夫です」

「そしてここで大事になるのがこの2つの単語の品詞なんだ。一応2つとも名詞ではあるんだけど、ちよつと特殊な名詞だね。『動詞+erで名詞として扱える』っていうルールが英語にあるのは既に知ってると思うんだけど、サイレンサーもサプレッサーも両方これなんだ。まあサプレッサーはerじゃないんだけどこれはちよつと特殊なパターンだね。それで2つとも動詞を名詞化したものってことは元となった動詞にちなんだ意味になる、これも良いよね?」

「大丈夫よ、お師匠」

「OK、それじゃあここからが重要なんだけどね…まずサプレッサーからいくんだけど

元となった動詞のサプレス (suppress) の意味は『抑制する』だからサプレッサーの意味は『抑制器』になるんだ。別に音を抑制してるんだから間違いつてわけじゃないんだけどちよつと意味が広義的過ぎて他の色んなものを指してサプレッサーつて言えてしまう問題が生じるんだ。例えばフラッシュハイダーだつてマズルフラッシュを『抑制して』るからサプレッサーだしバイポッドも揺れを『抑制する』ものだからサプレッサーだね。同様にモノポッドもそうだしストックパッドやマズルブレーキ、コンペンセイター etc. : 色んなものをサプレッサーと呼べてしまうから厳密に言いたいならサウンドサプレッサーとかサプレッサーフォアサウンド (sound suppressor/suppressor for sound) とかつて言わなきゃいけない。それに対してサイレンサーなんだけど、元になったサイレンス (silence) の意味は『静かにさせる』なんだよね

「:え?」

「つまりサイレンサーの意味は『静かにさせるもの』、この場合だと『減音器』つて言うのが正確かな」

「ちよつと待つて、サイレンスの意味つて『無音にする』とかじゃないの!」

「残念ながら『動詞としてのサイレンス』にそんな意味はないよ。『無音』という意味を持つのは『不可算名詞』としてのサイレンスなんだ。あくまでも動詞のサイレンスは静

かにさせるって意味を持つてる。まあ黙らせるとかもあるからそこから無理矢理音を消すとかいう暴論も展開出来なくもないけど……そんなの明らかに頭悪いよね？それに発生している現象に準じた訳し方というか意味を持つてるんだからそっちで使うのが普通だしね。だからかなり厳密な話をするなら言語的にサイレンサーの方が正しくてサプレッサーは間違いではないけど広義的過ぎて何を指してるか分かんないからもつと厳密に言う必要がある、つてことでこの問題は片付くよ」

「……衝撃的よ」

「でも確かに初歩的な英語の知識さえあれば理解は出来ますね」

「そうなんだ、本当に基本中の基本の知識しか要らないんだけど何故か専門書にすら間違つて書かれてたりするんだよね……それもアメリカで発行された専門書ですら、ね」

「ええ……」

余りの事実に2人は驚けば良いのか呆れば良いのか分からないといった表情をする

しかしモシン・ナガンが何かに気付いたように声を上げる

「ちよつと待つて、指揮官も含めてここの皆もサプレッサーって言うてるわよね？それはどうしてなのかしら」

「あ、確かに」

「その答えは単純明快、サブレッサーだと『サブ』って略していることが出来て便利だつて言うのが1つ。それとぶっちゃけた話どっちでも良いしサブレッサーって言うって減音器以外を思い浮かべる人なんていないからね、だったら省略して言えるサブレッサーの方が良いじゃん？」

「まあ…そうね」

「もう疑問もないかな？それじゃあそろそろ時間だし今回の授業はこれで終わることにするよ。レンジカードについての説明は次に授業を行う指揮官にお願いしておくからしっかり聞いてね。正直今までで一番理解するのが難しいものになるから全力で取り組みないと置いて行かれるよ」

「そ、そんなにですか？」

「うん。ぶっちゃけ今までの授業が生易しく思えるレベルだね」

「…ホーリーシット」

「…なんで英語？まあいいや、それじゃあまたね〜」

そう言いながら教室を後にするM200、次の授業のことを思つて気が重くなる2人は溜息を吐きつつもお互いに復習を始めるのであった

そしてこの後彼女達はM200の言葉の意味を思い知ることになる…

座学1日目 四時間目

「よおお前ら！次は私の授業…ってどうした？そんなに暗い顔して」

四時間目の時間となりスカーレットが教室に入ると明らかに険しい顔をしたFN4
9とモシン・ナガンがいたのでどうしたのかを聞いてみた

すると返って来た答えは

「いや…だってお師匠から今回の授業でおそわるレンジカードはかなり難しいって」

「今までののが可愛く思えるレベルだと聞きましたし…」

とのこと

それを聞いたスカーレットは溜息を吐く

「まったくM200のやつ…心配すんな、確かに今から教えるのは今までの授業内容と比べて圧倒的に難しい。理解するにも時間がかかるだろう。でもな、私だつて最初から理解してたわけじゃねえ…何度も何度も失敗しながら覚えたんだ、だからいきなり理解なんてしなくていいさ。今回の授業ではこのレンジカードについてのみ教える。他のことはやらねえからこれだけに集中して触りだけでも良いから覚えてくれりゃいいさ」

「え…全部覚えなきゃいけないんじゃないか…」

「最終的にはな。でもこれに関しちや経験がものを言う、だから知識だけで覚えても意味ねえんだよ。何度も繰り返しやって身体に叩き込んでいかなきゃならねえし、そののを一回やっただけで覚えろなんて無理な話だろ」

「…意外と優しいのね、同志」

スカーレットの言葉に意外そうにする2人にスカーレットは特に反応を示さなかった

「こういうリアクションは皆がするので実際慣れっこなのだ（だったら怖がられるのも慣れろよ）」

「ま、座学を終えた後の実践では追い込むが今はそんなことはしねえ。気楽に構えてな」
「座学が終われば追い込むのね…」

「たりめえだ、追い込んでやらないと真に成長はしねえからな。つとこれじゃあいつまで経つても始まらねえし、そろそろやるぞ」

スカーレットは手を叩いて雑談を終わらせると授業を始める

「さて、レンジカードについてだが…こいつを理解するにはLP/OP及びOCCAについて完璧な理解が必要不可欠となる。さっきの授業でM200に教えられたよな？今から少し復習を行う」

「あら、復習ならさつきまで自分達でしていたけれど…」

「本当に理解出来ているか私直々に確認してやるつてこつた、早速行くぞ。まず、LP／OPとは何の略だ？」

「Listening Post／Observation Postね」

「正解だ、ではLP／OPとはなんだ？」

「歩兵、又はスナイパーの構築する監視拠点のことですよね」

「良いだろう、では任務を遂行する際に歩兵が理解していなくてはいけない要素は？」

「えつと…：部隊の任務、作戦の性格・目的・報告する司令部のレベル、敵味方それぞれの関連する部隊、遭遇する可能性のある敵の規模・装備・兵器よね」

「良いぞ、ではそれを理解した上で拠点を選択する際に注意する点『O C O K A』について簡単に説明しろ」

「えー、まずOは視界と射界ですよ。視界は見える範囲、射界は手元にある火器で狙える範囲です。次のCは遮蔽と隠蔽で、遮蔽は周囲の身を守る天然物及び人工物…：隠蔽は自分の姿を隠してくれる天然物や人工物ですよ」

「2つ目のOは障害物よ。天然／人工に関わらず部隊の進行を遅らせたり、もしくは止めたり回避を強いる物体よね。例えば建造物、急な坂、湖、河川、崖、沼地、森林、ジャンクル、鉄条網、地雷原なんかよね。天然物はそのままで人工物…：特に軍事障害物は何故それらが設置されたのかを理解しなくっちゃダメ、だったかしら」

「ああ、合ってるぞ」

「Kは…緊要地形ですよ、陸戦に於ける勝敗の鍵となる地形ポイントのことです。そのポイントの確保や奪取によつて戦局を有利に進められます。橋や平らな盆地などがこれに該当します」

「最後のAは侵攻経路ね。敵勢力が侵攻してくる可能性が最も高いルートのこと、これは地上だけじゃなくて水上や航空機による侵攻経路も存在するのよね」

「ふむ…良いな、しっかり理解出来るみたいで何よりだ。これなら問題ないだろう、今からレンジカードについての説明をするぞ。まずはこいつを見てくれ」

スカーレットは2人が先の授業の内容をしっかりと覚えていることを確認すると満足そうに頷き、2人に一枚の小さな紙片を渡した

その後彼女も同じものを持ち、それを開くように指示する
その指示に従った2人はそこに書いてあるものを目にした

「そいつはアメリカ陸軍で長らく教育用に使用されていたレンジカードを1枚だけ抜き出したものだ。どうだ、そこに書いてあることが分かるか？」

「…一切理解出来ないわ。これには何が書いてあるのかしら？」

「だろ。うな。1つずつ説明していくぞ。まずレンジカードつつうのはLP/OPを中心として監視や戦闘に必要な戦域Battle Fieldの全情報を整理、理解する為に書かれるものだ。アメリカ陸軍じゃあ戦闘位置fighting positionについていたらスナイパーだろうが普通の歩兵だろうが必ずレンジカードを作成する、例外はねえ。スナイパー用の特別なレンジカードもあるが、まずは基本となるレンジカードの書き方から説明していくぞ」

「これを自分で書くことになるんですね…私に出来るでしょうか」

「心配すんなって、大丈夫だから。レンジカードには地形の概要から位置座標や距離について記載していくことになる。位置情報は地図とプロトラクター(特殊な分度器のようなもの)、方角はコンパス、距離は目測や歩数計など様々な計測方法を用いて測って記載する。最新の電子機器を使えばいとも簡単に弾き出せる数字だが、何度も言うように『電池で動くものに命を預けるな』『技術に頼るな、技量に頼れ』だ。言いたいことは分かるな?」

「そんなものに頼って自分の力で出来ないようじゃ意味がない…ってことよね」

「そうだ。自力マニュアルの技量は軍人にとつて欠かすことの出来ないものだ、当然このレンジカードも全部アナログな道具のみで描けるようになるまで訓練するぞ。よし、んじやあ今からこのレンジカードに描いてある情報を元に詳細な描き方を順番に解説していく。しっかり聞けよ」

「よし、まず一番初めにするのは『目の前の景色・地形のラフなスケッチを描き込む』ことだ。同心円状に沿って距離感を間違えないように注意しろ。各サークル間の距離は『EACH CIRCLE EQUALS METERS』欄に書くんだ。距離は100mでも200mでも構わん、今回は100mだな。ここで注意すべきは単位だな、必ずメートル法で書け。次に自分の保持する銃器の記号を描き、その後LP/OPの位置を見失わないよう付近にある天然の目印を描く。この図では左側50mの位置にある大樹を目印として描き込んでいる。そしたら遮蔽物になる可能性のある建物・構造物を判別して描く、例えば村とかな。次にコンパスを利用してMAGNETIC NORTHを確認し、右上のマスに矢印マークで記す。その後自身の所属する分隊・小隊・中隊を左上のマスに記入しろ、このレンジカードにはD中隊第2小隊第2分隊となっている。そしたらLP/OPの位置座標を『POSITION IDENTIFICATION』の欄に書き込め。その横の『DATE』欄にはその名の通り日時を書く、ただしこの時の書き方はズールータイム（グリニッジ標準時）を用いるぞ。一見すると意味が分からないだろうが『日/時/分(N) / 月/年』の順番で記すことを知ればまだ分かるんじゃないか？この図では201

6/3/18 18:30となっているな。そして自分の持っている銃器を『WEAPON』欄に書き、その後使用する銃器の使用すると仮定したのはM24SWS、アメリカ陸軍でも基本となる狙撃銃だな。こいつのMELは本来1kmだが、この場合は諸条件から800mとした。因みに複数の火器を使用する場合は複数描き込むことになる。次に自身の担当する射界を区切る線、Left Fire Limit (LFL)とRight Fire Limit (RFL)を図に描き込め。そしてら接敵時に敵の距離や方角を判断する目安として Target Reference Point (TRP)を3ヶ所ほど選ぶ。この時TRPは射程距離内で射撃・交戦する可能性がある場所を選ぶのが好ましいな。その後に予想される敵のAvenues of Approach (AA)を想定しろ、複数のAAが想定される場合は侵入の可能性が高い順に1、2、3…と番号を振るんだ。最後にLFL・RFL・TRP・AAを下段の一覧表に纏めたら完成だ。通し番号を振ってそれぞれ『DIRECTION/DEFLECTION』欄に方位角を、『ELEVATION』欄に海拔高度を、『RANGE』欄に距離を、『AMMO』欄に使用弾薬を書け。今回はM24SWSのみだから全部7.62mとなる。別に7.62×51mm NATO弾って書いても良いがなるべく簡略化すべきことを考えればそこまで書くのも面

倒だしその必要もない。そうそう、『REMARK』欄には気が付いたこと等を書け、無
 けりや空欄で構わん。この図では表からはみ出したAA2の諸元を書き込んでるな。
 因みに表に記載する情報が多すぎる場合は裏面を利用するのもありだ。ここまでやつ
 て完成したレンジカードをチームのリーダーに提出し、OKを貰って終わりだ。監視任
 務を交代する際には引き継ぐ人員に内容を説明してから渡せよ。これで普通のレンジ
 カードについての説明は以上だが：どうだ？」

「頭がパンクしそうよ…」

「右に同じく…」

スカーレットの説明を聞き終えたFN49とモシン・ナガンは頭を抱えていた

難しいことは承知していたし、それでも必死に喰らい付こうとしてもものやはり一度
 に一気に説明されただけでは理解するまでに至らなかつたようだ

その上ややこしいことこの上ないので知恵熱が出そうになっている

「ま、だろうな…つーことで今からかな〜り噛み砕いて簡単にした説明をしてやる。ま
 ずはそれを理解してからもう一度さっきの説明をする、そしたら今より余程理解が進む
 だろう」

「そうしてくれると助かるわ…」

「全くですね…」

「よし、んじやあ行くぞ！まず最初にLP/OPについたら監視する景色のスケッチを描く。スケッチする際には元から描いてある同心円に沿って距離感を正確に描くよう注意しろ。各サークルの距離は専用の欄に書き込んでおけ。そしてら中心に自分が持つてる銃器の記号を描き、LP/OPを見失わないように近くにある目印を描け。遮蔽物になり得る物体があるならそれもしつかりと判別して描くんだ。次にコンパスを使って真北がどっちかを専用の欄に記しておく。そしてら自分の所属する部隊の番号を書け。その後LP/OPの座標や日時を書く、この時日時はズールータイムという特殊な表示の仕方をを用いる点に注意だ。んで自分の使う銃を書いてからMELを太線最大有効射程で描く。次に自分が担当する射界を区切る線を描き込み、敵が来た時にその敵との距離・方角を判断するのに参考となる地点を3ヶ所ほど選ぶんだ。これをTRPと呼び、射程距離内に指定するのがお勧めだな。そして敵が侵攻してすると予想される経路、AAを想定して描く。複数あるなら可能性が高い順に番号を振れ。んでここまで指定してきた地点やらなんやらを下段の欄に一覧表として書くんだ、それぞれの方位角・海拔高度・距離を書いたらその地点を狙う際に使用する弾薬を書け。その下の空欄には気付いたことや一覧表に収まらなかったものを書いたりする、無いなら空欄で良いし一覧表に記

載する項目が多すぎるなら裏面を使つたつて良い。ここまで来りやあ完成だ、チームのリーダーに渡してOKを貰え。交代する際には引き継ぎの奴に内容を説明してから渡せよ。…となるが、どうだ?」

「ごつきよりは断然分かりやすいわね。専門用語を取つ払つて簡略にするだけでこうも違うとは…」

「これならなんとか理解出来るかもしれませんが…でも」

「分かつてる、まだまだ完璧な理解には至らないんだろ?それはこれから何回でも説明してやるし、分からないところがあるなら幾らでも質問しろ。分かるようになるまでしっかりと説明してやるから」

「それはありがたいわね。にしても…LP/OPやOCCAについて完璧な理解がないと到底理解出来ないって言うのが分かるわね、これは」

「た、確かに…」

2人が言うように、否スカーレットが最初に言つたようにレンジカードについてはLP/OPとOCCAについての理解が大前提となる

スカーレット自身も新米時代(子供時代)には何度も何度も何度も何度も何度も何度もレンジカードを書かされた、数え切れないほど書き続けてきた

何しろ戦闘位置を移動する度に全部一から作成するのだ、移動が頻繁にあるような状

況であれば書き終わった直後に移動を言い渡されることもあるし書いてる途中で移動をすることすらある

とにかく歩兵にとつて基本中の基本となるため、一人前にレンジカードを作成出来るようになるまで何百枚と経験を積む必要があるのだ

彼女も新米の時は書くのに時間が掛かり、上官から怒鳴られることが度々あった

逆に速攻で書こうとすれば「こんな雑に書いたら引き継ぎの人間がわからねえだろ！しかも間違いだらけだ、もつと丁寧なやれ!!」と怒鳴り声と共に殴られたものである

白紙にレンジカードを自作して素早く正確に書けるようにならなければ一人前の歩兵とは言えず、これが出来ないようならスナイパーなど夢のまた夢である

スカーレットがそれを伝えると2人はゲンナリとした顔をする

それはそうだろう、これはつまるところ彼女達もまたそうやって教育されるといふことの暗示でもあるのだから

その後スカーレットはこのレンジカードについての『知識』を徹底的に叩き込んでいった

2人からの質問にも丁寧に答え、時間を掛けて教えていく

やがて『知識』だけはしっかりと理解する頃には授業時間も終盤に差し掛かっていた「つてこんな時間ですけど……これからスナイパー用のレンジカードについての説明をす

るんですよね、大丈夫でしょうか？」

「あらホント…普通のレンジカードにこんなに時間かけても良かったのかしら」

「大丈夫だ、安心しろ。普通のレンジカードに対しての知識が十分にありやあスナイパー用のレンジカードに關してもすんなり理解出来る。実際に見比べてみりや分かるが、小さな差異こそあれ全体としては普通のと変わりはないからな。つーわけで今からその差異を説明するぞ、まずはこのレンジカードを見る。こいつはさっきのレンジカードをスナイパー用のものに書き直したものだ」

「…なんか、普通の歩兵用のものよりも簡潔じゃないかしら？」

「こつちの方が見やすいですよね…」

「やつぱさうか…確かにこつちのが見やすいと私も思う。まあそれは良いだろ、歩兵用のレンジカードとの差異を言っていくぞ。とは言え大きな点は2点のみだ、1つ目は狙撃銃用に狙いを調整する ELEVATION^高、弾道に影響を与える TEMPERATURE^最、WIND VELOCITY^風 に WIND DIRECTION^風 を書き込む欄が存在すること。2つ目は TRP と AA をスケッチに直接書き加える点だ。歩兵用のレンジカードを記入出来るならさして難

しいものじゃねえが、それ故にスナイパーの技術の基礎が歩兵にあることが分かるな。時間もあるしもうちよつと細かく見ていくぞ、この図にある3ヶ所のTRPは方位と距離、特徴を下の欄にも記入する（画像では日本語だが本来は英語で書く）。右上にある『METHOD OF OBTAINING RANGE』つてのは距離の測定方法のことだ。この図にはLRFと書いてあるな、これはレーザー測距計を用いたって意味になる。ELEVATIONの欄が結構空白になつてゐるが、この欄は大きく高度が違う場合にのみ書きやあ良い。つまりこの地形にはそこまで高度の差がないってこつたな。こういう場合には自分の位置だけ記入すりや十分だ。他にも日時が書かれてなかつたり弾薬や銃器、所属部隊など色々省略されてゐるな。これは書かなくても良いんじゃないかって『その程度のこと書くまでもなく理解していろ』という意味合いの方が強いし、スナイパーは普通の歩兵とは違って交代要員への引継ぎなんぞ通常起こらねえのも理由だ。例外として味方部隊の占領地での監視任務であれば交代はあるが、その状況じゃあ寧ろそこまで細かい説明も要らねえだろ」

「なるほど…より専門性を高めた結果、ということですね」

「そうだ、その認識で良いぜ。…さてと」

スカーレットは説明を終えるとレンジカードの実物を2人に渡す

勿論それには先程の紙片のように空欄が埋まっているわけもなく、サークル等しか描

かれてはいなかった

それを見た彼女達は嫌な予感を感じ取った

そしてそれは的中する

「さあ、授業時間もまだ30分くらいあるんだ。レンジカードをより深く理解するためにも実際に書いてみようぜ。まあ今回は実際の景色を書くんじゃないやなくて最初に渡した奴を写すだけで良いが、勿論何も考えずに書くなよ？自分が何を、どのように書いているのか常に考えろ。可能ならこのレンジカードから実際の景色を想像するんだ、それも正確に、鮮明に。残りの授業時間、1秒たりとも休ませやしねえぞ？」

「…マジかあ」

「うう…頑張ります……」

その後授業時間が終わる迄の間彼女達は休むことなく何度もレンジカードを写すことになり、適宜スカーレットから質問が飛んできてそれに瞬時に答えられなければ殺気が飛んで来るといふ時間を過ごすことになった

終了時間を迎える頃には2人ともすっかり疲れ切っており、終了を告げるベルが鳴ると同時に机へグツタリと倒れ込んだ

そんな彼女達にスカーレットは声を掛け、教室から連れ出した

彼女に連れていかれた先ではWA2000とM200が何処から調達したのか野生

動物を使ったジビエ料理、今回は雉の親子丼と野兔のシールドル煮が用意されていた

更にはデザートにリンゴパイまであり、そのどれもが滅茶苦茶に美味しかったのもあつてFN49とモシン・ナガンは猛烈な勢いで食べていく

これによつて英気を養つた彼女達は教室へ戻り、これまでの復習を行つて午後の授業に備えるのであつた

座学1日目 五時間目

昼休憩を終えて教室で復習をしていたFN49とモシン・ナガンの元へWA2000がやって来た

「さ、午後の授業を始めるわよ。とは言えこの5時間目で今日の授業は終わりだけだね」

「え、もう6時間目はないんですか？」

「ええ。この座学は最初に言った通り貴女達が1日で覚えられる量の授業しか行わないわ、それを考えると今日はこれくらいで終わりにする方がいいのよ。勿論、復習をしっかりとやらないと覚えきれないでしょうけどね」

「なるほどね、確かに今日の内容だけでもかなり煩雑なものね…」

「そういうこと、さあ始めるわよ」

WA2000はホワイトボードに向かうと板書を書きながら話し始めた

「今回やるのは『距離目測』^{Estimate Range}についてよ。スナイパーに限らず、歩兵は監視対象や攻撃対象との距離を一切の電子機器を使用することなく見極める必要があるわ。双眼鏡

は使っても良いけれど、ある程度は肉眼だけで測れるようになりなさい」

「…それって見ただけで距離を測るってことですよね?」

「そうよ」

「そんなの可能なのかしら?」

モシン・ナガンの疑問も尤もだろう

パッと見ただけで対象との距離を弾き出すなど、普通に考えれば出来るとは思えないだろう

しかしそれは十分に可能であり、当然WA2000含めてこの基地に所属するほぼ全員が習得している技量である

「出来るわよ、私だって出来るし指揮官も当然出来る。そもそも距離目測はスナイパー

優秀歩兵過程

どころかその前過程のEIBの課題の1つよ、歩兵としての基本に過ぎないの。因みにEIBでの距離目測試験は距離100m〜1500mの間に人型標的や車両標的が複数配置されていて、それぞれとの距離を各標的につき1分以内に前後誤差2割の中で判別出来れば合格になるわ。つまり800mの位置にある標的なら640m〜960mの範囲で判別出来ればOKってことね」

「なんか、かなり開きが大きくないかしら」

「確かにね…でも距離目測はあくまでも補助的なものとして扱われることが多いわ、細

かいところはそれこそスコープやIRFなんかを使って測るしね。けれど、ここではもつと厳しく誤差1割までとするわよ」

「つまり800mなら720m〜880mまでつてことですか」

「そういうことよ。方法を知りさえすれば簡単なように見えるかもしれないけど、実際の戦場でやることを想定して試験もハイストレスな状況下で行うわ。貴女達も一発での合格はまずないと思ってなさい」

「…はい」

「それと、歩兵は自分が100mを何歩で歩くのかを把握する必要があるわ。左右で1歩としてカウントして、私の場合は67歩ね。因みに指揮官は56歩よ」

「え、そんなことまでするの?」

「そうなの。北へ〇〇m進めつて指示を受けた際に態々計測器を取り出したりなんてしてたら手間でしょう?だから歩くだけでどれだけの距離を歩いたのかが分かると色々便利なのよ」

「なるほど…」

「これに関しては後で測つてあげるから、今日から常に意識して歩きようになさい。さて、この話はこれくらいにして距離目測の話をしましょうか」

WA2000はそう言うのと幾つかの項目をホワイトボードに書き込んでいく

「まず距離目測の仕方を学ぶ前に肉眼で見た際の錯覚しやすい地形や状況について教えていくわ。まず1つ目は『輪郭がハッキリした物体は近くに見える』ことよ。例えば基本的に四角形をしてるビルなんかがこれに該当するわね。こういった物は藪のような輪郭が不鮮明なものより近くにあるように見えるわ。更に太陽光下でハッキリ見える時は近く、薄明り・雨天・霧・煙幕下では遠くにあるように見えることにも注意しなさい。次は『平坦な地形では近くに見える』、ね。砂漠・雪原・水面のような平坦な地形では対象物が近くにあるように見えるの。対象との間に何も無いせいで目が錯覚するのよ。同様に窪地越しに見た時も近くに見えるわね。3つ目は『見上げた時は近くに、見下ろした時は近くに見える』点ね。これは文字通り高い位置にある対象物を見上げると近くに見える、低い位置にある対象物を見下ろすと遠くに見える現象よ。最後に『目標の後ろに太陽があると遠くに、観測者の後ろに太陽があると近くに見える』ことにも注意しなさい。観測者から見て逆行だと対象物は遠くに見えて順光だと近くに見える、これらを踏まえて『距離目測』について学びなさい」

「目の錯覚…私達にそんなのあったかしら」

「それがあるのよね…私達は可能な限り人間に似せて作られてる、その弊害みたいなものね。それじゃあ距離目測について説明していくわよ。まず距離目測というものを論理的に言うとう『射手と目標となる地物・物体との2点間の距離を見積もる能力』となる

わね。これは既に理解してるでしょうけど発射された弾頭は重力や空気抵抗などの影響から長距離になるほど弾着が大きく変わるわ。つまり正確な距離を見積もる能力は即ち正確な狙撃をすう能力に直結すると言えるわね。更に私達スナイパーは単に距離を目測するだけじゃなくて『自分の使用する狙撃銃の弾道』に基づいた距離を目測出来ることが重要になってくるわ。最大弾道高となる地点の距離・有効射程といった具合に区切って目測することが推奨されるわね」

「最大弾道高?」

「…そう言えばそこら辺も私達には初期インストールされてなかったわね。感覚で理解そのものにしてるでしょうけれど、弾頭は放物線を描いて飛翔するでしょう?その放物線の頂点を指す言葉よ」

「ああ、なるほど。それなら分かりますね」

「言葉で知らなかっただけでそれそのものは最初から知っていたわ」

「そうね、出来ればそこら辺の用語も入れたい欲しいものだけど…まあ良いわ。ここからは実際に距離目測をする際のテクニクを話していくから全力で覚えなさい、行くわよ?」

WA2000の言葉に2人は気を引き締めると彼女の書く板書をメモに写していく

(1) 100m単位法

(2) 目標の見え方による判別法

(3) 紙切れと地図による判別法

(4) ミル測距離法

(5) レンジカード法

「まずは1つ目の『100m単位法』ね。これは観測者が100mの距離を感覚的にマスターしていることが前提条件となるわ。そのマスターした感覚を使って100m刻みで目標との距離を測定する方法よ。細かく言うともまず観測位置から100m地点の基準となるもの、例えば樹木や標識などね、これを設定するわ。その100mのを2倍、3倍：てしていったって、目標までの距離を算出するの。もしも目標がかなり遠い場合には観測地点と目標との間に中間地点を設けて、その中間地点までの距離を倍にして目標の距離を割り出すわ。個人的な感覚としては、中空に100m物差しを空想してそれをいくつも並べて対象物との距離を測る感じね。2つ目の『目標の見え方による判別法』は文字通り☒自分にとってどう見えるのか☒を基準として距離を割り出す手法よ。この方法を用いる場合は予め色んなものが距離によって自分にどう見えるのかを理解しておく

なくちやいけないの。例えば『人間の腕の動きは300 mまで判別出来る』とか『道路標識の文字は200 mまで読める』とかね。文字がハッキリ見える場合は100 m圏内、ギリギリ読める場合は200 m圏内っていう風に比較的近距离に於けるざっくりとした距離測定に用いることが多いわ。私は距離目測をする時最初にこれで大体の見切りをつけるわね。3つ目の『紙切れと地図による判別法』は目視ではないんだけど、1000 m以上離れた場所の距離測定に用いるわ。地図上で観測位置と目標位置に短冊状の紙切れを添えて2点間の幅をマークしたら、その幅を地図下部に記載されてる縮尺スケールと照らし合わせて距離を計測するのよ。当然、観測位置と目標位置が地図上で何処にあるのかを理解していることが前提ね。場合によっては敵地の地図が入手出来ない可能性もあるから使えないこともあるし、次に説明する方法を用いればこの方法を使うまでもないから実際に使うことは少ないわ。でも一応知っておきなさい。そして4つ目の『ミル測距離法』はざっくり言うとなスコープのレティクルを用いて距離を測定する方法よ。スコープのレティクルは基本的にミルスケール^{単位}でドットや線がついてるから、それを利用するわけね。細かい説明は後々に行うスコープに関する授業であるからここではかなり簡潔にいくわよ。スコープで対象物を見た際にそれがミルドット何個分の大きさに見えるかで距離を測るの。計算式は『対象物の大きさ(m) × 1000 (定数) ÷ ミル数 = 距離(m)』よ。例えばそうね…一般的に軍人は170 cm以上のこと

が多いから仮に1.8mとしてそれが4ミル幅に綺麗に収まったと仮定するわ。この場合『 $1.8 \times 1000 \div 4 = 450$ 』となつて対象との距離が450mであることが分かるわね。当然人物は個人によつて身長が違うから距離測定に用いるのは得策ではないわ、だからこの方法を用いる場合は様々な物の大きさを予め知っておく必要があるの。これは電子機器を使わない距離測定法の中で最も信頼性の高い方法になるから完璧にマスターしなさい。ミルドットマスター

を使つても良いけど出来ればスコープから目を離すことなく暗算で距離を出せるようにした方がいいわ。5つ目の『レンジカード法』は仲間の書いたレンジカードを使って対象との距離を知る方法ね。さっきの授業で習つたと思うけどレンジカードには様々な地点への距離が記載されてるから、対象物の位置をレンジカード上の位置と照らし合わせることで距離を概算するのよ。大体はこんなところかしら、最終的にはLRFを使って正確な距離を算定するけれどだからと言つて肉眼での測定を疎かにしちゃダメ。LRFが故障したりした際に『LRFがないので距離が分かりません』なんて抜かしたら蹴り抜くわよ」

「ひえっ…」

「まあ肉眼による距離目測をしろつて言うのはなにも故障に備えてだけじゃないわ。勿論切迫した状況で時間がない時にはLRFだけで距離を測つても良いけど、LRFも万

能じやないから出来る限り目測と併用しなさい。雨や霧、煙幕下では使用に制限を受けることがあるからね。それに大きくて明確な対象物に指向しないと正確な距離を測れないことにも注意しなさい。戦場の環境は毎回違っていて最適な目測方法やLRFの使用状況もその時々で異なるわ、だから私達は様々な目測方法を習得して環境に合わせて2個以上の方法を組み合わせることでより正確な距離を算出出来るようになるよきやいけないのよ」

「なるほど…全部出来るようになっておかないといざという時に困る、ということですね」

「その通りよ。とは言ってもこうやって説明しただけじゃ知識としても定着しにくいわよね?」

「そうね…つてまさか」

「そのまさかよ。実践編とは比べ物にならないけど、ちよつとだけ経験してみましょ。そうした方がより理解が深まるしね。さあ、屋上に行くわよ」

「は、はい!」

FN49とモシン・ナガンはWA2000に連れられて資料棟の屋上へと向かい、そこから遠くに見える様々なものに対して今教わったばかりの目測法を用いて距離を算出する練習をする

2人が距離を言った後にWA2000が正しい距離を伝え、正解したり間違えたりに一喜一憂するのであった

残りの授業時間全てを使って何度も何度も目測し、慣れていく

やがて終了時間が来るとWA2000は彼女達を宿舎へと帰してから教室の後片付けを行う

途中で手伝いに来たM200と共に片付けを終わらせると自分達も宿舎へと向かった

そのまま夕食を摂って明日からの授業計画を立てようとしたのだが、WA2000がスカーレットに呼び出され、執務室へ来いとのこと

突然のことで何のことかと思うもすぐに思い当たる節があるのか納得顔になって呼び出しに応じると執務室へと向かった

執務室に入室するとスカーレットとジェリコの姿があり、通信をしているのかヘリアントスのホログラムが表示されている

「来たわよ、指揮官」

「待ってたぞ、WA2000。急に呼び出して悪いな」

「構わないわ。それで、どうなったの?」

「…相変わらず勘の鋭い奴だな。ヘリアン、すまねえがもう一度話してくれるか?」

『良いだろう、では…』

その後ヘリアントスによって事の説明が始まった

何でもスヴァールバル世界種子貯蔵庫に関してG&P;Kと正規軍との話し合いが終わり、どう対処するのかが決まったとのこと

内容を纏めると正規軍はELIDの対処に迫われて助力する余裕がなく、その為この件はG&P;Kに一任することになった

そしてクルーガー社長を始めとしてG&P;K本社の重鎮達での話し合いが行われた結果、S09H基地を中心として複数の基地から戦力を集めての作戦行動を行うことが決定した

これは1つの基地だけで作戦を行った場合、その実績からG&P;K内でのパワーバランスが偏るのではないかという疑念があったためである

複数の基地での合同作戦とすれば『あの基地が』ではなく『G&P;Kが』という風に世間に認知され、世論的にも会社にとつて利が大きいだろう

そして今ヘリアントスがその旨をスカレットへと説明し、具体的な内容を決めたのだ

「なるほどね…：小心者だけど確かに理にかなってはいるわね」

「ああ。それにこれを通して他の基地との繋がりを持てればいざという時役立つかもし

れん」

「貴女に限ってそれは無いと思いますが…：戦場では何が起こるか分かりませんしね」

「そういうことだ」

『それで、どうするんだ？この内容で受けるか、それとも突っ撥ねるか？』

「受けるさ。確かに私の基地だけでやった方がこっちとしては得る物は大きい、だがその条件を呑んだ方がクルーガーにとっては都合が良いんだろ？なら私はそうするさ」

『ありがたい限りだ。ではこれより具体的な内容を決めようか』

「それなんだがな、今回の作戦は取り敢えず先遣隊の回収と幾つかの種子の持ち出し。そして可能なら次回以降の持ち出しを便利にする為のルート構築だったな？」

『ああ、そうだな』

「…：そうなるとあまり大人数では行けないわね」

「だな」

『ん？ああ、なるほど…：君の基地と北極を往復出来るヘリの都合か』

「そういうことだ」

そう、人類は一度世界種子貯蔵庫を諦めている

その理由は主に北極までの移動手段にあった

海を渡るのは崩壊液の影響で超危険、空路は距離や気温といった気象状況や核のEM

Pによる影響で難しい…そういった条件が重なった結果諦めざるを得なかったのである

その状況の中でこの基地が貯蔵庫を発見出来たのは北極を往復出来るだけのヘリを開発したことによる

これはエーテルを利用して作成したヘリであり、様々な悪影響を無効化した上で燃費の改善に成功した

だが作るのが非常に難しく、高額であるために量産は不可能

その都合上少数しかないとために大部隊の輸送は出来ないし、その上で種子を持ち出したりルート構築の為に物資を持って行くとなると更に人数は減るだろう

一応輸送ヘリという体を取っているために大容量ではあるから複数の部隊を展開することは出来るだろう、しかしそれが限界だ

色々な物資を持って行く関係上ダミーを連れて行くのも憚られる

つまりは最小限の部隊を展開して作戦を遂行する必要があるのだ

「私達の所持しているヘリの都合上、輸送出来る部隊はダミーリンクなしの三部隊。こちらから一部隊出すとして他の基地から募集出来るのは2ヶ所のみですか…あまり大規模という訳にもいきませんね」

「そうだな。ま、1つの基地だけじゃないって事実さえありやあ十分だろ。私だって他

の基地との繋がりは欲しいし、丁度良い機会だ……だが先遣隊からの報告によれば少数ながらもELIIDとの交戦があり得る。現行の小口径弾では撃破は難しいだろうな」

『そうなる……大口径弾を使用する人形のみとなるか』

「普通なら、な」

『……何を企んでいる、スカーレット指揮官』

ヘリアントスの言葉に何やら不穏な言葉を放つスカーレットに彼女は顔を顰める

WA2000とジェリコはスカーレットの思惑を察したのか少し驚いた顔をしていた

そんな様子を見てニヤリと笑みを浮かべたスカーレットはある提案を言い放った

「小口径弾を使う人形の場合、うちで作成している新型弾薬に対応するよう改装した物を用意する。そいつらにはそれを使ってもらうってのはどうだ？」

『……なるほどな。それならほぼ全ての人形がELIIDとの交戦能力を獲得するというわけか』

「ああ。そしてこれを機にこの弾薬が広まりやあゆくゆくはG&Amp;Kも正規軍と共にELIIDの対処を行えるようになるだろう。そうなりや鉄血との決着が着いた後でもこの会社の仕事がなくなる、なんてことにはならねえだろうさ」

『少なくとも規模縮小を抑えることが可能、というわけか。良いだろう、社長に打診して

おく』

「頼んだぞ。それと弾薬が変わることで慣れないだろうからまずうちの基地で1週間の訓練期間を設ける、そこで新型弾薬の扱いに慣れてもらうぜ。希望するならどんな訓練施設でも使用許可を出すからどうにかなるだろ。あ、それとこつちで用意する得物だがアタッチメント等の希望があれば全部受け付けることも言っておいてくれ」

「でもそうなる結構な期間他所からその部隊が離れることになるわよね…その所為で問題が生じたりするかもしれないけど、そこら辺はどうするの？」

「そうだな…よし、決めた！協力してくれた基地には補填としてミレニアム8の面々をダミーフルで向かわせる、これで良いだろ」

「…私は良いけど他の子達が了承するの、それ？」

「それに皆の訓練はどうするのですか？」

「別にあいつらがいないくらいで訓練が出来なくなるほどこの連中は落ちぶれちゃいねえよ。N.O. 2達もいるしな。他の奴らも困惑はしても断ることはしねえと思うぞ」

「ま、それもそうね」

『随分と大判振る舞いなんだな。本当に良いのか？』

「構わん。この件に関しちゃ人類の希望に繋がるんだ、最大限の援助はして然るべきだろ。ただ特別性のへりを後一機作るのに一ヶ月程の期間が欲しい、それだけありゃル」

ト構築用の物資を運ぶのにも余裕が出て作戦の遂行がし易くなるからな」

『私としては構わないが、先遣隊は大丈夫なのか？聞くところによれば半年も前から向かっていそうだが…』

「問題ねえ、あいつらには改造を施してるし2年は活動出来るだけの予備バッテリーと食料は持つて行ってるからな」

『今サラツととんでもない発言が聞こえたが…聞かなかったことにするぞ。ともかく了解した、内容を纏めるぞ。協力するのは2ヶ所の基地から一部隊ずつ、ダミーリンクはなし。使用武器はそちらの基地から支給され、アタッチメントや仕様上の要望があれば全て受け付ける。それに合わせて弾薬を変更する者もいるためそれに慣れるため1週間の訓練期間を設ける。部隊が抜けたことによる穴埋めとしてそちらの基地の最高戦力であるミレニアム8のメンバーを作戦期間中それぞれの基地へ一時的に転属扱いとする、といったところか』

「そんな感じだな。もし変更を加える必要があるなら言ってくれ、出来るだけ対応する」
『分かった。では失礼する』

その言葉を最後にヘリアントスとの通信は切断され、ホログラムも消滅した

ちよつとした会議のようなものを終えたスカーレットは座っていた椅子に身体を投げ出し、息を吐き出した

「相変わらず堅苦しいのが苦手なのね」

「しようがねえだろ、性分なんだから…ま、今回ののはそこまで疲れるものじゃないけどな」

「全く…そうだ、指揮官。先の作戦ですが貴女も北極に向かうのですか？」

「たりめえだ、私が行かなくてどうする。だから…その間この基地のことは頼んだけ、ジェリコ」

「ハッ！了解です！」

スカーレットが立ち上がりジェリコの方に手を置きながら言うと、ジェリコは敬礼と共に返礼をした

その様子を見ていたWA2000は「貴女も相変わらずね…」と呆れながらも微笑みを湛えていた

その後この作戦はクルーガーの許可が下り、正式に発令された

そしてこの基地内でも大々的に発表され、全員の了承も得たことで1ヶ月後に今回の作戦…『Fragment of hope希望の欠片作戦』が行われることが決定したのだった

小話その1 マキマキとクレアさん

FN49とモシン・ナガンがスナイパースクールにて座学を教わっている丁度その頃、S09H基地のデータルームではクレアが1人の女性に仕事を教えていた

「それにしても…本当に機器の扱いが得意なのね、マキちゃん」

「いやあ、これしか取り柄がないので…えへへ」

クレアと話しているのは弦巻マキ、結月ゆかりの親友でありV・Sの解析部隊に所属していた人物だ

彼女は外傷こそなかったものの精神に傷を負っていた、その為マガルのカウンセリグとゆかり達との会話や触れ合いを通して立ち直っていた

そして話を聞けば精密機器の扱いに熟達しているということとクレアに話が行き、今こうしてデータ処理の仕事を教えている…のだがクレアは殆ど教える必要性がないことに驚いていた

なんせマキのキーボードを叩く速度はクレアより上であり正確さはクレアと同じくミス一つなし

更により高度なハッキング技術を有しているためハッキリ言って今の時点でクレア

以上にこの仕事が出来ているのだ

そのことにクレアは若干の悔しさを感じつつもそれ以上に優秀な人材が来たことに喜んでおり、また個人的にマキのことを人として気に入っていた

快活で朗らか、普段から笑顔でいながらもいざキーボードに指を添えるとキリつとした表情になって真剣な眼差しでモニターを見つめる…会って間もないが、クレアは彼女に後方幕僚の任を任せたいと思う程には気を許していた

「さて、今日はこれくらいで良いわよ。お疲れ様」

「あれ、もう終わりですか？ん、ん…お疲れ様です」

就業時間にはまだまだ早いがマキのデータ処理のスピードが凄まじいために思っていたより3倍ほど早く仕事が終わったためクレアは切り上げることにした

当然明日の分がある程度片付けたりすることは出来るしやろうと思えば他にもやれることはあるが初日から飛ばすものでもないだろう

「ん、まだこんな時間なのね。思ってたよりずっと早いし夕御飯って時間でもないし…そうね、カフェにでも行く？」

「カフェって確かずん子さん達が働いてる所ですよね、行きます行きます！」

「よし、じゃあ決まりね♪」

マキをカフェへ連れていくことにしたクレアは道中もマキと話をしながら足を運んでいく

暫くするとスプリングフィールドのカフェが見えてきた

「お邪魔するわよ、スプリングフィールド」

「お邪魔しまーす」

「いらつしやいませ……ってクレアさん？珍しいですね、こんな時間に」

「そうね。この子のおかげで随分と仕事が早く終わったから」

「なるほどそうでしたか。茜ちゃん、案内お願い！」

「ほいさ、任しとき……ってマキマキやないか、茶でもしばきに來たんか？」

「やつほー茜ちゃん、クレアさんに誘われてね。それとその服可愛いね、似合ってるよ」

「せやろ？いやあ、ウチは何でも似合^{にお}うてまうからな！」

スプリングフィールドがカフェの奥に声を掛けると給仕服姿の茜が出てきた

現在茜が着ている給仕服は肌の露出は殆どないものの、色使いや適度なフリルによって可愛らしさが前面に押し出されていた

それが茜の持つ元気の良さを引き出していて非常に似合っているのだ、マキが笑顔で褒めるのも当然というものだろう

茜はマキと少し話した後クレアと共に4人掛けのテーブルへと案内した

その後メニユー表を渡す

「ほな、決まったら呼んでな」

「うん、ありがとう茜ちゃん」

「ありがとうね。お仕事頑張つて」

「言われるまでもないで、でもおおきになー！」

そう言うのと茜はクレアとマキの元から去り、スプリングフィールドの元へ戻ると出来たコーヒーやケーキ等を配り始める

マキはメニユー表を見ながら気になったものをクレアに見せてどんな感じかを聞いていき、暫く悩んだ後にチーズタルトとロイヤルミルクティーを頼むことにした

クレアはお気に入りのクリームと蜂蜜を掛けたパンケーキとスプリングフィールドのオリジナルブレンドコーヒーである☒春田ブレンド☒に決める

オリジナルブレンドとは言えこの荒廃した世界だ、合成品を可能な限り自然の物に近づけることしか出来はしなかったがそれでもこのご時世では中々の一品であることに違いはない

注文を決めたクレアとマキは茜を呼ぶことにした

「茜ちゃん、注文良いかな？」

「ほーい、ちよつち待つたてな〜！」

PAー15へコーヒーを運んでいた茜は返事をする、コーヒーを渡してからこちらへとやって来た

「お待つとさん、ほんで何にするんや？」

「私はこのチーズタルトとロイヤルミルクティーにするよ」

「ほいさ、そつちのお客さんは？」

「パンケーキにクリームと蜂蜜乗せ、後は春田ブレンドでお願いするわ」

「了解やで、ほな——」

「あ、ちよつと待つて茜ちゃん！」

注文をスプリングフィールドへ伝えに行こうとする茜をマキが呼び止めた

「ん？どないかししたんか、マキマキ？」

「大したことじゃないんだけどね。葵ちゃんもここで接客してるって聞いてるけど今日は居ないのかな？」

「ああ、そないなことか。葵は今日ゆかりさんときりたんと一緒に街へ出かけとうよ」

「そうだったんだ。葵ちゃんの給仕服姿も見たかったけどそれじゃ仕方ないね」

「気持ち分かるで、葵のあの姿は一級品やからなあ……つと、もう聞きたいことはないか？」

「あ、うん大丈夫だよ。ごめんね引き止めちゃって」

「気にせんでええよ、ほなな！」

茜は会話を切り上げると今度こそ伝票をスプリングフィールドの元へ届けに行く

その様子を見ていたクレアは優しい気な微笑みを浮かべながらマキへ話しかけた

「そう言えばあの子達とマキちゃんは友達なのよね」

「あ、はい…掛け替えのない、大事な仲間です」

そう言うマキの顔は嬉しそうに笑いながらも何処か憂いを帯びており、悲しそうであった

勿論大切な仲間と再び出会えたことは嬉しい、しかし同時に会えなかった者…もう会えない者も決して少なくはない

寧ろそっちの方が圧倒的に多いのだ、手放しでは喜べないのだろう

継星あかり、東北イタコ、京町セイカ、響敬一郎、響栄吉、佐久間司…他にも多くの仲間達を失っている

それに彼女はV・S・に所属していたとはいえ解析部隊だ、実働部隊のように身体を鍛えたり技を磨いたりしていたわけではないので日本脱出の際には守られる側であった

そんな自分が足手纏いなのではないかと常に思っていたし、誰かを守る力を持たない自分が悔しくて、恨めしくて、情けなくて…仲間が死んでいく度に心が張り裂けそうな

思いをしていた

だからこそ犯罪組織に捕まった時は□これは報いなんだ□とすら思った

常に守られていて、誰も守ることが出来ず、自分が生き残ったが故に死んでいった者達への報いであると…当然助からなかった者達の誰一人としてマキへの恨みを持つてはいなかったが、彼女はそう思わずにはいられない精神状態であった

マガルのカウンセリングでかなり回復したとは言ってもまだ全快には程遠いしこの傷が消えることは一生ないであろう、よって今もマガルのカウンセリングは続いており2日に1度の頻度でマキは彼女の元を訪れることになっている

そんなマキの心情をクレアは察しながら、努めて優しい声で言葉を紡ぐ

「そう…ねえ、マキちゃん。故人を偲ぶのも大切だけれど、それ以上に今を共に生きている人に目を向けなきゃダメよ？過去に縛られてると、大事なものを見落としてしまうから…」

「クレアさん…はい」

クレアの言葉にマキは少しだけ笑みを深めて返事をする

それを見たクレアは□これなら大丈夫そうね□と思い同じく微笑みを向けた

彼女には自分と同じ過ちを犯して欲しくはない…彼女のこれからが幸せに溢れるものであって欲しい、ターゲットネットワークの上から自身の首の左側に残る縫合跡を撫でながら

クレアは願うのであった

「お待ちどおさん、チーズタルトとロイヤルミルクティーにパンケーキと春田ブレンドやでー！」

「おわあっ!?!ちよつと茜ちゃん急に大声出さないでよ、びつくりするじゃんか」

場の空気がしんみりとして何を話せば良いのか分からなくなったその時、茜が注文の品を持って現れた

だが急に大声を出すものだからマキは驚き、非難の声を上げる

クレアは茜の接近に気付いていたし彼女の放つ空気から何をするつもりなのか察知していたために特に反応は示さなかった

「ごめんごめん、でも折角カフェに来てスイーツ食べるゆうのに難しい顔するもんやないで。何を思うとるんかは聞かんけど、これでも食べて笑顔になればハッピーや!」

「そっか…ごめんね、ありがとう」

「そうそう、マキマキは笑顔がいつちばん似合うとるんや。難しい顔するんはパソコンの前だけにしとき」

「えへへ、そうかな…」

「そうね、今日会ったばかりだけれどそれは分かるわ。まるで向日葵みたいな笑顔よね」
「お、分かるとるんやんか! そうなんよ、昔っからマキマキの笑顔は見とるこつとが嬉しく

なるくらいキラキラしとってなあ」

「あ、あの……2人とももうその辺で……それに、茜ちゃんはお仕事あるんじゃないかな！」

「今居るお客さんへの配膳は終わつとるから大丈夫や！」

急にド直球に褒められたことで顔が赤くなるマキ、それを押搦つて更に恥ずかしがらせる茜にそれを微笑んで見守りながらも時折自分も絡んで不意打ちを与えるクレア

周囲の客たちもそんな彼女達のことを微笑ましく見ている

茜がダイナミックエントリーしてから数十秒も経たないで空気は変わり、そこには最早先程のような重さも、悲しさや寂しさの混じつた空気はなく和やかで賑やかな空気が漂っていた

そんな彼女の有無を言わせない強引な優しさにマキは表にこそ出さないが感謝し、クレアは彼女の茜のような友人がいればマキはきつと大丈夫だろうと安心するのであった

その後はそれぞれケーキを食べ、飲み物を飲みながら会話に花を咲かせる

茜が変えてくれた空気のお陰か話題は明るいものばかりで、2人は自然な笑顔を絶やすことはなかった

暫く会話を続けていると、話題は趣味のことになった

「え、マキちゃんギター弾けるの？」

「はい、とは言っても嗜むくらいなんですけどね」

「な〜に言うとするんや、プロ顔負けってくらい上手いやんかマキマキは」

「そ、そんなことないよ。もう、茜ちゃんは大袈裟なんだから」

「いやいや、マキマキこそ過小評価が過ぎるで」

マキと茜のその会話を聞いてクレアは☒あること☒を思い付く

「ねえマキちゃん、今度で良いから私に演奏を聞かせてくれないかな？ 場合によつてはちよつとした提案があるんだけど」

「勿論です！…つて言っても今ギター持っていないからなあ」

「大丈夫よ、あるから。演奏会をするためのライブ会場もあるしね」

「そないなもんまであるんか!? 軍事基地ってこんなに娯楽が充実した場所やったかいな…」

クレアの発言に驚きを隠せない茜はうーんと唸っている

一方マキはギターがあるというところに喰いついた

「ど、どんなギターがあるんですか!?!」

「そうね…レスポール、ストラトキャスター、リッケンバックの325とかはすぐに用意出来るわね。アコースティックならハミングバードとFG5、それにD-40が今あるわ」

「お、おとおおお!? どれもこれも一級品じゃないですか!」

「…なあ、それってそんな凄いんか?」

ギターの名前を聞いてテンションの上がりまくっているマキとは対照的に茜は漠然としない顔をしていた

それもそうだろう、普通ギターの名前を聞いたところでそれがなんであるのかわかるわけではないのだから

そんな茜に対してマキは興奮しながら話す

「そりやもう凄いよ! 一番分かりやすいだろうからお金で言うけど、ハミングバードとかストラトキヤスターとか日本円で40万以上するからね!」

「40万!? そんなにあつたらケーキ食べ放題やん!」

「…その感想はちよつとズレてないかしら?」

大興奮しているマキと驚きすぎて頓珍漢なことを口走っている茜に苦笑いするクレア

暫しマキが茜にこれらのギターのどれがどう凄いのかを語り、値段を聞いて興味を惹かれたのか茜も普段なら聞こうとしないであろう話に集中していた

しかしこのままではマキが無限に語って話が進まないであろうことを察したクレアは2人の頬つぺたを摘まんで伸ばすことで止めるのであった

「取り敢えず、演奏は聞かせてくれるってことで良いのかしら？ ギターは好きなの弾かせてあげるわよ」

「もももちろんです！ わあくどれ弾こうか迷うなあ……」

「あ、そう言えばクレアさん何か提案があるとか言ううとつたけどそれは何なんや？」

「ここで茜が先程のクレアの発言を思い出して質問をする

その言葉にマキもハツとしてクレアの答えを待っていた

そんな2人にクレアは微笑みながら話す

「それなんだけど、実はこの基地には音楽隊もあつてね。ヴァルキリーオブメロデー 旋律の戦乙女つて言うんだだけ

ど、戦場だったり大規模な戦闘に向かう仲間達を演奏で鼓舞するのが主任務の部隊よ」

「ふむふむ……つてまさか！」

「丁度ギタリストがもう1人欲しいと思つてたところなのよね。既に1人いるんだけど

その子はリードよりリズムの方が得意なの、だからマキちゃんの演奏次第では主にリ

ードを担当するギタリストとしてどうかなくてね」

そう、この基地には音楽を奏でるのが仕事となる部隊も存在する

そしてクレアはその部隊の隊長であり、指揮者兼ボーカルである

この部隊を設置する切っ掛けになったのはクレアの声だ、彼女の声にはf分の1揺ら

ぎ成分が含まれている

f分の1揺らぎとはスペクトル密度が周波数fに反比例する揺らぎのことであり、かなり雑に言ってしまうえばヒーリング効果をもたらすものと思ってくれて良い

クレアはこの揺らぎを利用し、更にエーテルによつてその効果を変質させることで声を聴いた相手の感情を強制的に揺さぶる技を持つている

やる気を進らせることも出来れば落ち着けることも可能、だが何より恐ろしいのは恐怖心や猜疑心を無理矢理増幅させて相手の戦意を挫いたり仲間割れを誘発させる使い方だろう

とは言え後者の使い方は本人があまり好きではないため基本的に使うことはなく、専ら険しい任務へ赴く仲間の士気を向上させて作戦の成功率を上げるのみである

そしてある日スカーレットの言った「音楽専門の部隊でも作ってみるか？」という言葉^{ヴァルキリーオブメロデー}を聞いたクレアが作ったのが旋律の戦乙女だ

クレアはその部隊にマキを誘おうとしていた

「そんな部隊もあるんやなあ…名前もカツコイイし浪漫かと思つたけど、結構実用的っぽいんかな。それで、どないするんや？マキマキ」

「や、やります！是非やらせてください!!」

話を聞いたマキは机から身を乗り出してクレアに迫る

2人ともケーキは食べ終え飲み物も残り僅かだったから良かったが、そうでなければ

その大きな胸のせいで大変なことになっていただろう

「マキちゃん落ち着いて。するにしてもまずはデータルームでの仕事を覚えなきゃだし、それに演奏を聞いてから判断するって言ったでしょ？」

「それにマキマキ胸にクリームとかついとるけどええんか？」

「え？あ…」

2人の言葉を受けて冷静になったマキは自分の今の状態を顧みて恥ずかしさからまた顔が赤くなった

そんな彼女を揶揄いながらも茜はナプキンでマキの服についたクリーム等を拭き取ってあげる

「落ち着いてくれたところで改めて聞くんだけど…どうかな？」

「…やります。絶対にその部隊に入隊してみせます！」

クレアの問いにマキは覚悟を決めた声と表情で答えを返す

マキがここまでやる気になっているのは単純に音楽が好きだから、だけではない
先の通りマキは自分が戦闘に於いて一切役に立たず、誰も守れないと思っていた

しかしこの部隊に入り、自分の演奏でこの基地の仲間を鼓舞することが出来れば間接的とはいえ誰かを守ること繋がるのではないかと考えたのだ

勿論クレアはそれを見越した上でこの提案をしている、彼女なりの気遣いであった

因みに演奏を聞いてから判断するというのは技術を見るわけではなく、彼女が心の底から音楽が好きなのかどうかを見極めるためだ

やる気や覚悟があるのは無論良いことではあるのだが、音楽は「音を楽しむ」と書くように演奏者がそれを本当に楽しんでいなければ聴いている者の心を打つことは不可能である

だが先程のテンションの上がりっぷりを見る限りでは心配は無用であろう、クレアもマキならばきつと本当に楽しい演奏をしてくれるだろうと思っていた

その後新たな来客があったために茜はその客への接客や今までの客の食器を下げたりなどをするために2人の傍を離れることになった

食器を下げに行く際にチラッと横目でマキを見ると彼女はクレアと楽器や楽曲のことで大いに盛り上がっており、その顔にはもう憂いは欠片も残っていないかった

その様子に人知れず茜は安堵し、優しい笑みを浮かべると自身の仕事を熟していくのであった

小話その2 大活躍だよゆかりちゃん！でも：

S09H基地の庇護の下ある程度平和な生活を送れている街『イシス』

この街にはスカーレットの基地より結構な頻度で誰かが訪れるため、基地と街の繋がりが強いのが特徴となっている

指揮官である以上スカーレット本人はあまり来れないがLSPの面々は警邏も含めていない日はなく、それ以外の者も思い思いにこの街で過ごしていた

そんな街の中にゆかり、葵、きりたんの3人の姿があった

どうやら今日はオフの日でシヨツピングに来たらしい

買う予定なのは主にマグカップや手鏡、時計など小物類と服である

現在彼女達はスカーレットによって用意された宿舎に寝泊まりしており一通りの家具等は既にあるのだが、それらはあくまでも基地の備蓄である

当然その全てが自分に取って使い易いサイズであったり使用感ではないためこうして少しずつ買い揃えていくつもりなのだ

それに彼女達も年頃の女子である、やはり自分の部屋を好みに合わせてデコレーションしたくなるのも仕方がないだろう

しかしまだ初任給を貰ったわけではなくクレアから渡された初期費用分しかないの
であまり高いものや多くのものを買うことは出来ない

今日はどちらかと言うと街のことを知るのが第一目的である

「いやあ、晴れて良かったですね。気温も寒くない程度に涼しくて動きやすいです」

「そうだね、お姉ちゃんも来れたら良かったんだけど」

「仕事じゃ仕方ありませんよ。それより早く行きましょう、時間は有限なんですから」

3人はお気に入りのいつもの格好でこの街へと来ていた

因みに交通の手段は普通の乗用車でゆかりが運転した

まず買いに行くのは服である、いつもの服装も良いのだが毎日同じという訳にもい
かない色々とレパトリーは欲しい

それにそもそも日本脱出の際のごたごたで所持品はほぼ全て失っている、いつまでも
基地の物を借りるのは申し訳ないのも理由だ

行き先を決めた彼女達だが、当然服飾店の場所など知らない

そこで、葵がスマートフォンを取り出してこの街専用のナビアプリを起動する

これはこの街の全てのお店等の詳細が分かり、行き先を設定すればすぐにそのお店ま
でのルート案内をしてくれるものでMDRの発案の元開発された

3人は顔を寄せて葵のスマートフォンを覗き込みながらどのお店が良いかを話して

いく

「この店はここからも近いですね…メンズエリアもあるからか少し面積が狭いのが難点ですが」

「ここはどうか？レディース専門で広さもそこそこあるよ」

「何でもいいので取り敢えず行ってみませんか？近くにがある所から軽く見ていけばすぐが良いのが見つかると思いますよ」

それぞれが意見を出していくこと数分、行き店を決めた彼女達はスマートフォンを持った葵の先導で道を歩いていく

1番年上のゆかりがその役をしないのには理由があり、この街は比較的平和とは言え事件が起きない訳ではない

そしてこの中で今のところ戦えるのはゆかりだけ、つまり何かがあった時に素早く動けるようにゆかりは構えているのだ

コンシールドキャリアーしている腰のグロック30はいつでも抜けるようにしてあるし、肩に掛けているポシエツトの中には念の為にグロック41と予備弾倉が幾つか入っている

因みに彼女達には秘密だが、万が一の事態に備えてLSPのMP5が彼女達を常に視界に収めながらもバレない様に護衛として付いて行っていたりする

他のメンバーはいつも通り街の警邏をしていたり基地で訓練に励んでいたりだ

それはともかく彼女達は目的へ向けて歩き、暫くすると少し大きなシヨツピングモールのような建物が見えてきた

「お、あれだね。あの中にレディース店が幾つかあるよ」

「案内ありがとうございます葵ちゃん。じゃあ行きましようか」

「…それにしても凄いですね、鉄血とやらとの最前線だというのにこんな発展した街があるなんて」

「確かに…スプリングフィールドさんの話だとスカーレットさんの基地が関係してるらしいよ」

「そう言えば私も聞きましたね。確か侵入を試みた鉄血の全てを滅ぼした上でその事にすら気付かないように処理してるとか」

「さらっと言ってますけど良く良く考えると恐ろしいですね。でも同時に安心もします、そんな基地に住まわせてもらってるんだって」

「そうだね、でもだからこそこの人達は鉄血の恐怖から解放されて伸び伸びと街の開発が出来るんだろうね」

「街の人達の表情から不安や恐怖をあまり感じませんし、安心して暮らしているのが分かりますね」

「いやゆかりさん何でそんなことまで分かるんですか」

「鍛えるの色々見えてくるんですよ、きりちゃん」

この街の異様さとそこから見えてくる自分達の住んでいる基地の異常さを垣間見た3人はその後も他愛無い会話をしながら建物へと入り、取り敢えず1階にある服飾店から順番に回ることにした

「このジャケットトカツコイイね、ゆかりさん似合いそう」

「ありがとうございます。それよりもこのワンピース葵ちゃんに似合うと思いますよ」

「あ、それ色もデザインも凄く私好み！お？きりたん、このシャツとかどうかな？」

「葵さんが着るには少し色が暗くないですか」

「いやいや私じゃなくてきりたんにだよ」

「や、私そういうの良く分からないんで…」

「さつき結構的確な意見をしていたように思いますけど」

「あーあー聞こえなーい」

わいわいと話しながらも服を見ていく彼女達の様子はとても楽し気で、見ているところが荒廃した世界であることを忘れそうになる

きりたんも興味ないとか言いながらチラチラと服を見ているし自分の好みに合うものを見付けると僅かに口角が上がってジツとその服を見つめており、どう見ても服選び

を楽しんでいた

そしてそれを見逃すゆかりではない、それを見付けると適度に弄りつつも葵と共に口車に乗せてきりたんに試着させるのだ

そして服を身に着けて出てきたきりたんを葵と共に褒めて恥ずかしがらせることも忘れない

勿論そんなゆかりも気になる服を見付けては試着したりマキに似合うかなとか考えたりしているし、葵もまた同様である

そうこうして数時間程掛けて服を選んだ彼女達はそれぞれ全身コーディネートを作つてその服をレジに持つて行つた

店員に服を着て帰るかを聞かれたので折角だから着ていこうとなり、タグ等を外してもらおうと各々買った服に着替えて再び集合した

ゆかりは控えめにフリルの付いた白のYシャツにスリムフィットスキニーの七分丈デニムパンツ、そしてグレーのシヨールカラーノーボタンジャケットを羽織つて紺と白のハイカットスニーカーを履いていた

葵は白のタートルリブニットに濃いブラウンで肩ひも付き膝上ハイウエストスカートで、髪をサイドテールにして頭にはスカートと同じ色のベレー帽を被っており足元はダークブラウンのローヒールニーハイブーツだ

きりたんは白の七分丈カットソーにつやがないブラックのレザーキャミワンピースを、同じくブラックのレースアップミドルブーツを履いて腰部分を黒革のベルトで少し締めてウエストラインを出している

服も一新したことで少しテンションの上がつている3人はそのまま雑貨店に向かい、小物を見ることにした

「わあ、猫の形した手鏡だ！かわいい♪」

「おや、良いですねそれ。それに黒と白と三毛と、カラーバリエーションも豊富と来ましたか…」

「でもそれ固定式ですし、持ち運ぶことを考えたら折り畳みかスライド式のが良くないですか？」

「うーん、確かに…何か良いのなかな」

「これなんてどうです？猫の形で折り畳み式ですが」

「それは…なんか猫の顔が貫録あるくない？」

「…ええ、私もそう思います」

「なんだかちよつとしたブサカワな感じですよ。でも私結構好きですよ、こういうの」

「あー、なんかきりたんらしいかも」

「おお、この置時計おしゃれじゃないですか？」

「わ、中の歯車が動いてるのが見えるんだ」

「ていうかこんなに沢山歯車入ってるもんなんですわね」

「こういう機能面が表に見えるの私は好きですし、これは買いですわね」

「ゆかりさん手鏡はいいの?」

「そうですね…私はこの木製でスライド式のにしますかね」

「それ、表面にうつすらと蝶のイラスト?刺繍?みたいなのがありますわね」

「ホントだ、ちよつと大人っぽいかも」

「衣服ではないので刺繍は違いますが…まあ、気持ちは分かります」

「ん、私はどうしようかなあ…あ、この青と赤のハート型の良いかも!」

「確かに青は葵さんで赤を茜さんに渡せば良い感じですね」

「てことは茜ちゃんにプレゼントするんですか?」

「うん、そうする。時計はく…うーん迷うなあ」

ここでも和気藹々としながら小物を見ていく彼女達の姿は誰が見ても普通の仲の良い女子であり軍事基地の所属だとは、ましてやその内の1人が諜報員候補であるようには全く見えなかった

実際ゆかりも今この時ばかりはV. S. でも秘書でも諜報員でもなく、ただの結月ゆかりとして心穏やかに平穏な時間を送れている

普段の過ごし方に不満があるわけではないが、やはりこうして肩書に縛られない時間というものも必要なのだろう

その後も色々と見ながら少しだけ買い物をした3人はショッピングモールを出て近くのテラスカフェでのんびりとティータイムを過ごしていた

「きゃあつ!! ああ…」

「…っ!」

暫く談笑してそろそろ戻ろうかというその時、事件は起きた

少し離れた場所から老婆の悲鳴が聞こえたのだ

その悲鳴に誰よりも早く反応したのはゆかりである、ポシエットから財布を取り出すと隣にいたきりたんに手渡してから駆け出す

いきなり財布を渡されたきりたんは少しの間困惑したが、先程の悲鳴とゆかりの様子から事態を察すると葵と共に店員を呼んで会計を済ませてゆかりの帰りを待つことにした

そしてそのゆかりは現在倒れた老婆の元へ到達し、何があったのかを聞いていた

「どうされましたか!？」

「イタタ…あ、あの男が私のカバンを…あれには孫にプレゼントをかうためのお金が…

!」

老婆の指さす方向を見れば200m程先を女性用のカバンを手に全速力で走る男の姿が見える

「…少しだけ待っていて下さいね。MP5さん、そのご老人と2人のことは頼みましたよ!!」

(ば、ばれてたの!?取り敢えず2人の近くにはガリルさんがいる、ゆかりさんの方にはM870さんが行ってますからまずはこの方の応急処置ですね!)

隠れて見守っていたMP5は自分のことを見抜いていたゆかりの実力の高さに驚きつつも既に連絡を回して手配を済ませておいた仲間と彼女達を任せると、自身はひったくられた際に転倒して怪我をした老婆の治療を請け負う

一方ゆかりは凡そ女性とは思えないような速さで疾走し、男との距離をグングンと縮めていた

(なんだあの女!?クソ早え!!)

ひったくり犯もゆかりが自身を追って来ていることに気付き、距離を離そうとするも離れるどころか差は縮まるばかり

焦りに塗り潰されそうになるも、視界の端にキーを差したままバイクを止めて露店で買っている男の姿を認めるとそっちへ向かって方向転換する

そして素早くバイクに跨って走り出そうとしたその瞬間、銃声がしたかと思えばタイ

ヤがパンクした

ゆかりが腰からグロック30を引き抜いてタイヤを撃つたのだ

余りにも一瞬のことで状況の理解が遅れた犯人は固まり、その後慌ててバイクから降りようとしたがもう遅い

近くまで迫ったゆかりが一瞬身を低くした後鋭く跳躍し、犯人の襟首を掴んでバイクから引きずり下ろしつつ地面へ背中から叩きつけた

「ぐうっ！クソがあ!!」

「そこまです」

「っー」

「動かないで下さい」

「……………」

犯人は息が詰まるも火事場の馬鹿力かすぐに反応してナイフを抜いて自分に馬乗りしているゆかりへ向けるが、ゆかりに銃口を眉間に突き付けられ動きを止めた

全くの感情を宿していない表情と声、それにあれだけの速さで走ったというのに息一つ切らしていないゆかりの様子に犯人は恐れを抱き、息を呑む

「貴方が私を刺すのと私が引き金を引くのと、どちらが速いか勝負でもしますか？」

「……………クソが」

観念したのか犯人は身体から力を抜き、手に持ったナイフも音を立てて地面に落ちる。しかしそれでもゆかりは銃口を逸らすことはせず、左手を使って犯人をうつ伏せに転がすと右腕を捻り上げて関節を極めた。

「いやあく見事だねえ!見ててぞくぞくしちやつたよ、思ってたよりずっと出来るんだね」

「M870さんですか、拍手なんてしてないでこの男を拘束するなりなんなりしてくれませんか?」

「そんな怖い顔して言わなくなつてちゃんとするから大丈夫だつてば…つと」
「ぐっ…」

そんなゆかりの元へM870が現れ、拍手をしながらゆかりを褒める。

だがゆかりはそんなことより早く仕事をしろとでも言わんばかりに無表情のままM870へ苦言を呈すると、彼女はやれやれといった感じに肩を竦めながら機械的な尻尾を操作してその先にある麻酔針を犯人の首に打ち込んだ。

これはS09H基地特性のものであり、対人間用に即効性と安全性に特化したものだ。麻酔針を撃ち込まれた犯人は数分としない内に眠りに落ち、ナイロンバンドで犯人の手足を完全に拘束したM870はその身体を担ぐとゆかりに向き直る。

「これは茶化しても何でもないけど、本当に見事だったよ。それと…街の人の為に動い

てくれて、ありがとね」

「貴女……ええ、どういたしまして」

「そのバッグ、あのお婆さんに返しといて。私はこいつを牢獄にぶち込んでおくから」
「分かりました、お気をつけて」

背を向けたM870は帽子の鰐を摘まんでズレを直すと振り返ることなく歩いて行った

普段の様子とは全く違うM870の声色にゆかりは戸惑ったものの、彼女もまた信念を持ってこの街を守るLSPのメンバーなのだと思いを改めることにした

その後ゆかりはカバンを拾うと汚れを軽く払い落とし、老婆の元へ駆ける

戻ってみるとどうやら老婆は大した怪我はなくMP5による応急処置だけで大丈夫であったようであり、近くにあったベンチにMP5と共に腰掛けていた

ゆかりが声を掛けると老婆はこちらを向き、ゆかりの姿とその手に持った自分のカバンを視界に取めると酷く嬉しそうにゆかりへと笑顔を向ける

そしてゆかりの手に取って何度も感謝を述べるとカバンを手に歩いて行った

その様子を見てゆかりは心に温かいものが広がるのを感じる

やはり誰かを守るのは良いものである、V・Sに所属していたゆかりがあのお婆を助けられたことに満足感を得るのは当然であった

「お疲れ様、ゆかりさん」

「お疲れ様です。怪我とかしてませんか？一応絆創膏とかありますけど…」

達成感を感じているゆかりの元に葵ときりたんがやってきて声を掛けた

「ありがとうございます。大丈夫ですよ、あの程度なんてことはありません」

「怪我がないなら良いんですけど…あれってあの程度ってレベルですか？」

「私はそうは思わないかな…てかどんだけ足速いのゆかりさん。運動神経が良いのは知ってたけど…」

「まあ…相当に鍛えましたからね」

「さて、皆さん。お話をするのも良いのですが、その前にしなければいけないことがあります」

ゆかり達の話をMP5が遮り、少し真面目な話をし始めた

曰く、事件に関わった以上はこの街の警察機関に話を聞かれるし先程の銃声のことも詳しく聞かなければいけないとのこと

詳細をゆかりが話すとMP5はタイヤをパンクさせてしまった男性のところまで案内するよう指示し、辿り着いた後はその男性に事情を話して謝罪をした上で後日弁償することを約束した

勿論この時ゆかりも頭を下げている

それに対して男性は理解を示し、それなら仕方がないと納得してくれた

そしてその後は警察による事情聴取である、酷く面倒なものではあるが受けない訳にもいかない

幸いにもゆかりがS O 9 H基地の所属であったことから深い追及は受けず、出来る限り発砲は控えて欲しいとだけ言われて解放された

ゆかりは待つていてくれた葵ときりたんにお礼と謝罪をし、駐車場へと行くと車に乗り込む

そして基地へと帰るのであった

「ゆかり」

「はい? ああ、スカーレットさんでしたか。何か御用でしょうか」

「話がある、付いてきてくれ」

「ええ、分かりました…」

基地へと帰って仲間達と少し談笑をしてから別れ、用を足してトイレを出たところでスカーレットに声を掛けられた

だが口調と表情が少し硬く、何処か怒っているようにも見受けられる彼女にゆかりは困惑しながらも付いて行く

誰もいない会議室へ辿り着くとスカーレットはゆかりへ振り返り言葉を紡いだ

「今日街であったことは報告を受けている。大活躍したそうだな」

「そんな、大活躍という程では…」

「お前の行動は多くの住人が目撃し、その行動を賞賛している。それに軽犯罪とは言え
ほぼ一人で解決したことに変わりはないだろう、街でも早速噂になっているみたいだ
ぞ」

「それはそうかもしれませんが…」

「そう：☒課報員候補☒のお前が、☒多くの者に目撃されて☒あまつさえ☒噂になってい
る☒んだ」

「あっ」

そこまで言われてゆかりはハツとした

そう、ゆかりは表向きはスカーレットの秘書ではあるがその実課報部隊の隊員候補な
のだ

諜報は隠れて目立たずに行うのが基本、大勢の目がある中で大立ち回りをして噂にな
るなどあつてはならない

元V・S.の工作員であるゆかりもそれは十全に理解していたはずである

しかし日本脱出の際に隊長として多くの仲間を失った責任感から来るストレス、日本

脱出という目的は達成しても安寧など程遠いという状況下でのストレス、ずん子と共に
囷となつて他の仲間を逃がしたは良いものの本当に逃げられているのか分からないス
トレス、ずん子を囷として付き合わせてより危険な方へ身を置かせてけがを負わせてし
まった罪悪感によるストレス、そして自身が殺されて隣にいるずん子までもが殺される
かもしれないという恐怖や苦しみのストレス：ゆかりは日本組の中で最も多く、強いス
トレスに曝されてきた

そしてスカレット達によつて救出され、やつと生き残つた仲間に安心出来る暮らし
をさせてあげられると心から安堵した

しかしそれが油断となり、ゆかりに諜報の何たるかを忘れさせてしまったのだ

今回の失敗はそのことを忘れて即座に自分が動くと判断してしまったことにある

ゆかりはMP5が自分達を近くで見守ってくれていることに気付いていたのだから、
彼女と他のLSPのメンバーに任せれば良かったのだ

実際あそこでゆかりが動かずともLSPならば同じ、いや寧ろより早く解決出来てい
た

つまるところゆかりがしたことは諜報員候補としては間違いだつたのである

「ごめんなさい…私、浮かれていたかもしれない」

「そんだけ分かつてるならいい、今回のことは不問とする。以後気を付けろよ」

「は…」

ゆかりは酷く落ち込むも、その胸中は複雑であった

確かに理屈上ではあそこで動いたのは間違いだった、しかしゆかりは元V・S.として何よりも無辜の民を守ることに信念を捧げていた

あそこであの悲鳴を無視するという選択はゆかりには選べない、選びたくない

それでもやはり諜報員になるのであればもう少し隠密に解決する方法を探るべきであつたらう

例えばあの男を隠れながら尾行して家なりアジトなりを突き止めて誰にも見られなようにその中で片を付けければそれでいい

その後には手柄をLSPに譲れば誰もゆかりには注目しなかつただろう、もし動くのであればそうするのが正解であつた

だがやはり…と心の中でループを続けて沼に嵌っていくゆかりだが、ふと頭を撫でられる感触がする

何だろうと顔を上げてみるとそこには笑顔でゆかりを撫でるスカーレットの姿があつた

「確かにお前のしたことは諜報員候補つてことを考えりや褒められたことじゃねえ。でもな、私個人としてはお前の行動を高く評価するぜ！」

「え、それってどういふ…」

「つまりさっきの説教はあくまでもお前の『上官』でありこの『指揮官』としてのものだった。私という『個人』からすりやお前のしたことは非常に良いことだと判断する。お前のそういうところ、私は結構好きだぜ?」

「スカーレットさん…」

「それにV・S.のことを私は知ってたし、そこに所属してる奴らの想いも知ってたはずなのにお前をその信条に向かない性質の部隊に配属しようとしちまった。これに関しちやお前が職員だったって情報だけで提案しちまった私に責任がある、すまなかつた」

そう言つて頭を下げるスカーレットにゆかりは目を見開いて驚く

ゆかりから見たスカーレットという人物は心優しいところもあるが基本的に自信家で、少しばかり傲岸不遜の嫌いがあるという印象だったのだ

そんなスカーレットが素直に頭を下げて謝るといふのは予想外であつたし、背の高い彼女が頭を下げると頭の移動距離がかなりのものになることにも驚いた

「そんな、頭を上げて下さいスカーレットさん!今回の私に自覚がなかつたせいですから」

「…それなんだがな、もしお前が望むなら諜報員候補から他に移つても良いぞ」

「え？」

ゆかりに言われて頭を上げたスカーレットから驚くべき言葉が飛び出してくる

「それって…でも、どうして？」

「さつきも言ったようにお前の信条とうちの諜報部隊とでは相性が良くないってこつた。お前は優しい、それは美德ではあるがあ部の部隊では時として…いや、常に非情にならなくちやいけねえ。それなのにあそこに居続けたらいずれお前の心が壊れちまうかもしれないからな。そんなの私は望んじやいねえ、だから異動した方が良いんじやねえかと思つてな。それこそLSPに移るのもありだが…どうだ？」

「私は…」

ゆかりはスカーレットの言葉を受けて逡巡する

過去の工作員としての能力を活かすなら諜報部隊になるのが良い、しかしそこはゆかりの精神とは合わないとスカーレットは言う

確かにゆかりの信念等を鑑みれば配属先はLSPであるべきだろう

それでも彼女が迷うのはスカーレットが期待してくれたのを無碍にしたくないという想いと、日本人特有の一度決まったことを自身の失敗で変えるのに対する抵抗感が原因であつた

「スカーレットさん」

「なんだ?」

「私、考えてみます。このまま諜報員になるべきなのか、それともLSPや他のところに行くべきなのか:今の私ではしつかりとした答えを出せそうにありません。ハイストレス状態とリラックス状態という両極端な状況が立て続けに來たせいで今の私は自分で思っているより混乱しているでしょう、ですから…」

「分かった。良いぜ、まずは心を落ち着けてゆつくりと考えな。焦る必要はないから、納得がいくまで考えろ。それで詰まったら誰かに相談しな:つつても一応秘密事項ではあるから相談出来る相手はちいと限られるか。私やクレア、イーサン。それとミレニアム8の面々に:あとはマキも良いだろう」

「え、でもマキさんは…」

「あいつはクレアの元でデータ処理の仕事をしてるしクレアはどうもあいつを後方幕僚にするつもりらしいからな:諜報員になったとしてもいずれあいつには知られることになる。それに同じV・S・だったんだろ?だったら秘密は守ってくれるさ、親友なら尚更な。私が同じ立場なら寧ろなんで頼ってくれなかったんだって怒るところだ」

「そう、ですね:分かりました、考えが煮詰まったら相談してみることになります。スカレットさん、ありがとうございます」

「おう。んじゃ時間も丁度良いし、晩飯にするとしようぜ。他の奴らも誘ってよ、バカ騒

ぎしようじゃねえか！」

「偶にはそんなのも良いかもしれないですね」

「偶にじゃなくていつも、だろ？」

「…いつもは、流石にちよつと」

「なん…だと…!？」

先程までの重い空気は何処へやら、そこには和気藹々と会話をしながら食堂へ向かう2人の姿しかなかった

そして皆を誘ってスカーレットと、マキを誘った時に一緒に来たクレアとその夫であるイーサンも交えて賑やかに食事を摂るのであった

座学2日目 一時間目

S09H基地名物スナイパースクール、その座学2日目はなんと教室ではなく屋外で行うということでFN49とモシン・ナガンの2人はWA2000の案内で射場へと来ていた

射場に着くとそこにはスカーレットがM16らしき銃とM24らしき銃を台座にセットしており、他にも色々とはやら準備をしていた

「連れてきたわ、指揮官」

「おう、来たかお前ら。私の方ももう少しで準備が終わるから先に始めててくれ」

「分かったわ。それじゃあ貴女達、ここに座って頂戴」

「あ、はい：今日は2人で授業ですか？」

「そうよ。初めに言った通り特別に必要な時は2人でやるからね」

「今からするのがその『特別に必要な授業』ってわけね。どんな内容なのかしら？」

モシン・ナガンがそう聞くとWA2000は準備されていたホワイトボードに項目を書き込んでいく

「今日は弾道と命中精度としてのMOAについて軽く教えた後に『ゼロイング』について

の授業を行うわよ」

「なるほどね…結構元から知ってることも多そうだし、ここまでする必要のある内容は思えないわね」

「そうでもないわよ。だってアサルトライフルのアイアンサイトのゼロイングなんてしたことはないでしょ？」

「え…ってそう言えばM200さんもアサルトライフル使ってたね」

「そういうことね。口を挟んでごめんなさい」

「分かってくればいいわ。じゃ、いくわよ」

そう言うときWA2000はまずは弾道に関するちよつとした説明を始める

「まず弾道なんだけれど、既に知ってるの通り弾丸は弧を描いて飛翔するわ。この時弾丸が描く放物線のラインを弾道と呼ぶわね。そして弾道には空気抵抗や重力、風といった要素が複雑に絡んでくるわ。それに弾丸の種類によっても大きくことなるし、例えば同じ規格の弾でも細かな違い…そうね、メーカーや弾頭重量、弾頭形状、銃身長に装薬量なんかによっても全部変わってくるし、その組み合わせによる弾道の変化の種類は無数にあるの。弾薬製造メーカーは弾薬毎に弾道表を提供してるからそれも参考にしなさい、勿論うちで造ってる弾薬にもちゃんと記載されてるわ。スナイパーは自身が使う狙撃銃及び使用弾薬の弾道特性を120%理解していなきゃいけないわね、貴女達も細かい

ところまで全て理解しなさいよ」

「…なんか頭が痛くなりそうね」

「大丈夫よ、知恵熱が出る程度だから」

「全然大丈夫ではないのですが…」

「まあ少しずつ覚えていけばいいわ、それよりも次に行くわよ。弾道は様々な環境・状態によつて変化を受けるわ。細かいところは自分で撃つてみて頭に叩き込むしかないけれど、基本的には今からいうものになるわ。まず重要なのが『気圧』ね。気圧が下がれば空気抵抗が減つて当然射程距離は伸びるし弾丸はよりフラット（真つすぐ）に跳ぶように見えるわ。気圧の変動に係るのは主に気温、高度、天気よ。気温が高ければ高いほど気圧は下がつて空気抵抗が減るし、高度も同様ね。あまり知られていないのは天気かしら、天気が雨だと低気圧になるからこれもまた空気抵抗の減少に繋がるわ。次にメジャーなのは『風』よ。追い風なら若干射程距離が伸びるし、逆に向かい風だと射程は短くなるわ。勿論射手から見た弾道は追い風はフラットに、向かい風はドロップが大きく見えるわね。それに横風の場合も弾道に大きな影響を与えるからしつかり身に着けておきなさい。細かいことを言えば『湿度』なんかも影響して来るわね。これらは環境によるファクターだけど、銃のファクター…つまりは『銃身長とバレルツイスト』の影響もしつかり考慮する必要があるわ。やや専門的な話になるけれど、アメリカ軍が使

用していた5. 56×45mm NATO弾：所謂SS109ってやつね、これは銃身長20インチ・バレルツイスト1：7で本来の性能を発揮するよう作られている。バレルツイストってのは銃身内部に彫られたライフリングの回転数のことよ。『バレルツイスト1：7』は『7インチで1回転』するようにライフリングが彫られているという意味よ。要するに『20インチ・バレルツイスト1：7』っていうのは銃身内で弾頭が約3回転して発射されるということね。他にも『1 in 7』とか『1/7』とかいう表記もあるけど、うちでは『1：7』で統一してるしこれを基準にしていくわよ。あとこれは因みにな情報なんだけれど、かなり厳密に言えばSS109は実のところ『20インチ・バレルツイスト1：9』が最適なんだけれど、ほかの使用弾薬も考慮して最大公約数的な値として1：7とされていることが多いわね。M16A2なんかが正にそれよ。続けて因みになんだけれどM16A1はバレルツイスト1：12だから回転数が少なくても弾道の安定性は少し低いわね、それに最適使用弾薬も223レミントンだからどうしてもA2以降と比べると性能は落ちるわ。少し話が逸れたけど、これらの最適バレルツイストは火薬の燃焼効率と摩擦抵抗の関係から導き出された結果よ。使用弾薬と銃（バレル）の相性も狙撃にはすごく重要な要素ってことね、スナイパーはこれらの要素を完璧に理解して経験を通して学んでいく必要があるの。初日に阿保程撃たせたのも実はそういう意図があつてのことだったりするわね」

「あの地獄には他にもそんな意味があったのね…癖見る以外にもあるなんて考えようともしなかったわ」

「…思っていたよりも考えてくれてたんですね」

「そうよ、無駄なことなんてさせないんだから。ああ、それとこれは当たり前だし理解してると思うけれど照準線は銃口より上に位置してるから照準線と弾道は2回交差することになるわ。正確に命中させるためにはゼロ・ポイント照準線と弾道の交差点を理解してライフルの照準器を調整する必要があるわよ」

「そうね、それは分かるわ」

「私も大丈夫です」

「そうよね、まあ一応よ。さて次に説明するのは『MOA』に関してね。FN49、MOAに関してどの程度知ってるかしら?」

「え!? えつと…『MOAは命中精度の単位で1MOAは100ヤードで1インチ円に集弾する』でしょうか?」

「そう…モシンは?」

「私も同じ認識よ。それ以外にあったかしら」

「なるほど、やつぱりね…まあ別に間違いではないんだけど、正解とは言えないわ」
「ど、どうして…」

「簡単な話よ、『そもそもMOAは命中精度の単位ではない』もの」
「ふあ!？」

WA2000の言葉に2人は大いに驚いた

それもそうだろう、自分達の中での認識はそうであつたしそれはつまるところそういう風に初期インストールされていたということなのだから

しかしWA2000の言うようにMOAとは命中精度の単位ではない、もっと別の単位なのだ

「その辺も含めて説明するわよ。まずMOAってのは『角度の単位』なの、そしてその角度の単位を命中精度を表すときに用いてるに過ぎないわ。もうちよつと詳しく言うとなんて発射された弾丸の弾着がどのくらいバラけるのか、そのバラけ具合を角度で表しているの。1MOAの場合は100ヤードで1インチ、200ヤードで2インチって具合にね。でもこれはあくまでも理論値よ、遠距離にいけばいくほど命中精度は大きく崩れるわ。100ヤードで1MOAの銃が1000ヤードでも1MOA(10インチに集弾する)とは限らないわよ。逆に言えば1000ヤードで1MOAならそれは長射程でも優れた命中精度を誇る銃ってことね。因みにMOAは『ミニッツ・オブ・アングル』の略

で1/60°を表しているわ。角度の単位には『度・分・秒』が用いられるのが一般的だけどその内の『分単位』ってことね。それと理論上の命中精度なら計算式を用いて求めることが出来るわ、その計算式はこうよ」

1 M O A 底辺 a

t a n ||

2 距離 H

底辺 a || 0.5238 in

A ≐ 1.05 in

「M O A 値が異なる場合はその数値を入れ替えることで計算することが可能よ。そしてこの式の通り厳密には1 M O A は100ヤードで約1.05インチとなるわ、でもそこまで細かいことを言っていると素早い計算が出来なくなるから切り捨てて1インチとしているわね。これらを言葉で簡単に表すなら『銃口から同一の原点を持ち間隔が1 M

OAの2本の線を引いた際、その2線の間隔は100ヤードで1インチとなる』ってところよ。これが正しいMOAについての知識よ、理解したかしら？」

「や、ややこしいわね…」

「頭がこんがりそうです…」

「まあぶっちゃければ今までの貴女達の認識でも特に問題はないわよ。ただ厳密に言えばこうなるんだな位には思っておきなさい。さ、ゼロインクの説明に移るわよ。ゼロインクは狙撃銃は勿論、全ての銃にとつて最も基本的で必要不可欠な作業となるわ。一言で言えば『照準点と着弾点を一致させる作業』ってところね、因みにゼロってのはそのまま数字の0：起点を意味しているわ。分かりやすく言えば照準と着弾のズレが0って感じかしら。優れた射手が最高級の狙撃銃とスコープを用意したってゼロインクしてなきや絶対に当たらないわ、だからこのゼロインクについては絶対にやり方をマスターしておくなさい。そのやり方なただけれど、まずはM16A2のアイアンサイトによるゼロインク方法を教えてから狙撃銃：要するにスコープね、これのゼロインクの仕方を教えてあげる。因みにM16A3でもM16A4でも基本は同じよ。指揮官、用意は出来てる？」

「ばっちりだぜー！いつでも良いぞ」

WA2000が後方にいるスカーレットに声を掛けると彼女は笑顔で返事を返す

今日スカーレットがここに居るのは2人にゼロイングのやり方を説明するのに実例を示しながらの方が理解し易いため、実演役が必要だったのが理由である

その後スカーレットはWA2000の説明に沿って動いていく

「まず初めにゼロイングの姿勢からね。当然銃を安定させる必要があるから立つて行うのは言語道断よ。伏せるか、もしくはせめて座つてやりなさい。そして理想としてはガンレストつていう器具に銃を固定するのが良いんだけど、それが無い場合は安定した台座に銃を乗せるわ。分かってると思うけど銃身を乗せるんじゃないわよ、絶対にハンドガードを乗せなさい。その後グラつきがないかを確認して大丈夫なようならグリップを握つて人差し指をトリガーガードに添える。ストックを肩に当ててしっかりと保持したらチークパッドに頬を乗せる、この時鼻先がチャージングハンドルの先端に触れるように構えなさい。理由はゼロイングの際の頭の位置を完全に固定するためよ。サイトを覗く高さや距離がズレると照準点もズレるからね。そう、丁度今の指揮官のような姿勢よ。しっかりと見て記憶領域に叩き込んでおいて。で、こつからがゼロイングの方法の説明ね。ここからは2つのステップに分かれるわ、まずステップ1は『メカニカル・ゼロ』ね。これは実射なしで行う機械的なゼロイングよ。射場で試射する前に兵舎とかで予めやっておきなさい」

ここでWA2000がホワイトボードに項目を書き足していく

それは以下のとおりである

1. アイアンサイトの準備
2. ボアサイターの装着
3. アイアンサイトのゼロインング

「最初にするのはアイアンサイトの準備ね。これは何もサイトを取り付けろってことじゃないわよ、勿論それも出来なきゃいけないけど今回は違うわ。アイアンサイトの準備するのはまずフロントサイトとリアサイトを基準となる位置に合わせることから始まるの。ここからは指揮官の手元を見ながらの方が分かりやすいから前に移動しなさい。…移動したわね、説明を続けるわよ。M16の場合リアサイトのウインテージノブ^左を真ん中に、エレベーションノブ^上を一番下まで下げるわ。そして左側面の印を『8/3』、もしくは『6/3』に合わせるわ。このエレベーションノブの目盛り『8/3』『6/3』ってのは『このサイトは射距離300m〜800m、300m〜600mに対応する』って意味よ。一番下で300mに対応してより遠くを狙う時に段階的にノブを上げていくの。それはM16A2だから『8/3』って刻印されてるわね。因みにA3及びA4の場合は『6/3』よ。そしたらフロントサイトも基準となる高さに合わせてアイアンサイトの準備は完了ね。次にボアサイターを装着するわ。ボアサイターっての

は…そう、今指揮官が取り出したのがそうよ」

「これは弾丸…？いえ、違うわね」

「弾丸の形をした…なんででしょう？」

2人はスカーレットが取り出したものをまじまじと見るが、それがなんであるのかは分からないようだ

その反応を予期していたスカーレットは笑みを浮かべながら弾丸の先端をモシン・ナガンの胸に向けてスイッチを入れる

すると赤い光線がモシン・ナガンの胸に刺さった

「うん？これは、レーザー？」

「そうだ、こいつは弾丸型のレーザー照射器だぜ。こいつをこうして薬室に装填してつと…ほれ、銃口からレーザーが出てるだろ？このレーザーの光点を参考にしながらアイアンサイトのメカニカルゼロを行うんだ。無論、この光点はあそこにあるターゲットの丁度中心に合わせろよ。そこがズレてたら話にならねえからな」

「因みにボアサイター専用のターゲットも存在するけれど、今回はそういう道具は使わないわ。何処ででも出来るやり方を教えるわよ」

WA2000のその言葉を聞いたスカーレットが笑みを引つ込めて真面目な顔で先程のようにM16A2を台座に置いて構えた

「ボアサイターを装着したら銃を台座に固定して構えなさい。そしたらだいたい7m、10mくらいの距離にセツトしたターゲット用紙にレーザーを照射して。因みにこの時の距離はボアサイターの説明書に従いなさい、うちで使ってるのは主に10mのものが多くから今回も10m用のものを使うわ。アイアンサイトを通して光点を確認してサイトの照準が光点の☒やや上☒になつてればOKよ。もしも大幅にズレてるようならフロントサイトかりアサイトのどちらかが緩んでたりダメージを受けて曲がつたりしてるから、状態をチェックしなさい」

「私の経験上だと訓練中にフロントサイトやリアサイトポスト^{基部}を装備や壁にぶつけて変形させちまうことが多かったな。こういう場合はスペアパーツに交換するか、もしくは応急処置としてプライヤーなんかのツールを使って直す必要があるな」

「そうやってレーザーの光点とサイトとのズレを無くしたらメカニカル・ゼロは終わりよ。このメカニカル・ゼロを飛ばしてもちゃんとゼロイングは出来るけど、やった方が圧倒的に楽になるわ。ここを念入りにやっておけば実射のゼロイングで1発目からほぼ真ん中に集弾したりして、微調整するだけで済んだりするの。もしこれを飛ばしたら何度も何度も撃つて確かめていかなきゃいけないから身体的にも精神的にもきついわよ。何より弾が無駄だわ、それにM16の場合内部メカも汚れやすいからメンテナンスの手間も増えて面倒ね」

「確かにそんなことになるくらいならこれをちゃんとやった方がいいわね」

「そんなに面倒でもないですしね」

「そうだな、私もこれはもう数え切れないくらいにやってきたが…：やつぱりやった方が
良いぜ。めつちや楽だしな。ああそうそう、アイアンサイトの他にもダットサイトやホ
ロサイト…：それにレーザー照射器なんかもこの方法でメカニカル・ゼロを行う。勿論細
かいところに違いはあるが…：ま、ほぼ一緒だ。ついでに覚えときな」

「じゃあちよつと一通りやってみましょうか。指揮官、サイトの調整を滅茶苦茶にして
頂戴」

「あいよつと」

メカニカル・ゼロのやり方を教えたところで2人に実際にやらせてみる

スカーレットが合わせたサイトの調整を崩した後に交代で最初からやらせてより深
く理解させるのだ

とは言いえいくらASSSTで繋がっていない銃とは言えここまでは非常に簡単なため
2人ともすんなりと実行することが出来た、所要時間は5分といったところか

そしてそれが終わるとWA2000が手を叩いて次にいくことを宣言する

「さあ、メカニカル・ゼロについて理解した所で次のステップにいくわよ。要するに実射
によるゼロインングね、このままM16のゼロインング方法を教えていくわよ。まず見ての

通りM16A2（及びA3、A4）の場合ゼロリングは25m射場で行うのが一般的ね。今指揮官が隣に移動したでしょ？ここは25m射場になってて、指揮官の前方にターゲット用紙があるのが見えるかしら。あれがM16用のゼロリングターゲットよ」

「これからあのターゲットに撃ち込んでいくんだけど、この時にメカニカル・ゼロで8／3に合わせたエレベーションノブを時計回りに1クリック（A3及びA4の場合は2クリック）回しておくのよ。理由は後で言うわ。じゃあ実射に移るわね、台座に固定した状態でターゲットにまず3発撃ち込みなさい…指揮官、お願い」

「あいよ」

返事を返したスカーレットがセミオートで3回トリガーを引いた

銃声とほぼ同時にターゲット用紙へ穴が空く

「ターゲット用紙に着弾して穴が空いたわね、細かく見るから貴女達もこの双眼鏡を使ってしっかり見なさい。この時ターゲットに着弾した3つの穴が描くトライアングルを確認するの。このトライアングルがターゲット中心のサークル内に収まるようにアイアンサイトを調整していくわ。今回は見ての通り左上にズレたわね」

「ズレは左に2マス、上に3マスね。このマスは1マス毎にフロントサイト／リアサイトの調整ノブの1クリック（A3 & amp; A4は2クリック）に対応しているわ。尚この時リアサイトのエレベーションノブは使わないから注意しなさい、使うのはリアサイトのウインテージノブとフロントサイトの調整だけよ。修正する際に着弾が左右にズレている場合はリアサイトのウインテージノブを、上下はフロントサイトを調整するわ。今回は左に2マスズレているからリアサイトのウインテージノブを時計回しに2クリック、上に3マスのズレはフロントサイトを反時計回しに3クリックよ（A3とA4はそれぞれ倍）。ここら辺のサイトの調整はターゲット用紙にどう調整すれば良いかが書いてあるから迷うことはないわね。調整したらもう一度3発撃つわ、指揮官」

「おう、任せろ」

再びスカーレットが3発撃つ

すると今度はターゲット用紙の丁度真ん中のサークルにトライアングルが入った

「よし、全弾サークル内へ着弾したわね。この段階で調整を終えても良いんだけど、念の為にもう3発撃つわ。……うん、全部入ったわね。こうして6発全てが中心のサークル

内に着弾すればOKよ。そしたら実射前に1クリック動かしたりアサイトのエレベーションノブを元に戻すの。この一連の作業によつて射距離25mの射場でも300mゼロ(300mで照準線と着弾点が一致する)に設定されるわ。アサルトライフルはこの300mでのゼロイングを基本としていて、これはバトルサイト・ゼロとも呼ばれるわね。勿論最初にリアサイトのエレベーションノブを動かしたのは25mでの300mゼロを行う為に☒わざとズラす☒必要があったからね。因みにこの状態でさつきと同じように撃つと……見ての通り、中心やや下に着弾するわ。あ、勿論この方法は『SS109を使用するフルサイズのM16A2』だからこそ出来る調整の仕方よ。カービンモデルのM4やその改修型のHK416なんかは弾道が変わるから全く同じ方法ではダメよ、当然他のクローンモデルにも同じことが言えるけど……その辺はまあ今度ね。そこまで今やると收拾が付かなくなるから。流れは頭に入ったかしら?それじゃあここにメカニカル・ゼロまで終えたM16A2が2つ用意してあるから貴女達もあそこにあるターゲットに撃ち込んでやってみましょうか」

「分かったわ」

「分かりました」

WA2000の言葉に従い2人はリアサイトのエレベーションノブを1クリック回してからスカーレットと同じように構えてサイトを覗く

この時点でスカーレットがモシン・ナガンに、WA2000がFN49のサポートへ入り間違ってる所があればそれを指摘して直させる

構えに可笑しなところがなくなったところで実射の許可を出し、それを聞いた2人が3発撃ち、着弾を確認する

事前に☒敢えてズラしておいた☒為に2人とも中心にヒットすることはなく、しかもそれぞれが違う方向にズれていた

勿論2人はそのズレを見て先程のスカーレットと同じようにノブを回して調整していき、もう一度撃つ

流石に戦術人形であることとゼロリング用のターゲット用紙が非常に分かりやすい為に2人ともASSTで結ばれていない銃にも関わらず1回の調整で中心のサークルにトライアングルを入れていた

勿論メカニカル・ゼロをしつかりやっておいた恩恵もある

続けて3発撃ちこんで6発全てが中心に着弾したことを確認するとリアサイトのエレベーションノブを元に戻した

これで300mゼロの完了である

「うん、2人ともスムーズに出来たわね」

「思ってたよりも難しくなかったですね」

「まあメカニカル・ゼロもやってあったし何よりあのターゲット用紙がすぐく分かりやすかったのが大きいわね」

「それでも初めてでこれだけすんなりいけるのは凄いことだぜ、私でも最初は何発も何発も撃って調整したもんだ…懐かしいな」

「なんか意外ですね…それってどれくらい前のことですか？」

「ん？ん…大体20年前くらいか？」

「うわお…本当に子供の時からやってたのね」

「ほらほら、雑談はそのくらいにして次に行くわよ。今のはアサルトライフルでのゼロイングだから今から狙撃銃でのゼロイングの説明を始めるわ。とは言ってもこれに關しては知ってるとは思うけどね」

「ええ、勿論」

「私もある程度は」

「OK、ならここからはちよくちよく貴女達に答えてもらおうよう質問をバシバシしていくわね。それで狙撃銃でのゼロイングなんだけれど、当然スコープを用いるわ。まず初めに大切なのは使用する高精度弾薬の弾道特性を理解することね。それがどうしてかは分かるかしら？」

「弾丸は放物線を描いて飛翔するからね、アサルトライフルより遠距離を狙う狙撃銃で

はこの放物線軌道の中でも弾丸のドロップを考慮に入れてゼロイングしなきゃいけないわ」

「その通りよ。だからこそ弾道特性を120%理解しなくちゃいけないのね、任務の性格や自身の技量に合わせてゼロイングすべき距離を選択するのもまた大事よ。最も基本的な距離は100ヤードでのゼロイングになるわね。基本的なやり方はさつきとあまり大差はないけれど、細かいところで違うわ。まず1つ目の違いはターゲット用紙の違いね、狙撃銃でのゼロイングにはこの用紙を用いることが多いわ」

「この用紙はさつきのアサルトライフル用の物に比べてより細かい調整が可能になるわね。さ、隣に見えるけれどあれが100ヤードの射場になってるわ。そっちに移動しましょうか」

WA2000の言葉通りここには先程アサルトライフルのゼロイン用に使った25m射場と狙撃銃のゼロイン用の100ヤード射場が隣り合っている

実際に調整するというよりはこうしてゼロイングについて教える際に用いることを考えて作られた射場である

4人は移動を開始するが、スカーレットはさつきのゼロイングで使ったM16A2を

その場に置いてもう1つ用意していたM24SWSを手を持ち後を着いて来た

「ここが100ヤード(91.44m)射場よ。今から狙撃銃のゼロイング方法を説明していくわけだけど…その前にスコープの構造について見ていきましようか。ある意味スナイパーにとって狙撃銃と同等かそれ以上に大切となるスコープだけれど、その基本構造は理解してるかしら?」

「当然よ」

「勿論です」

「そう。ならモシン、FN49、スコープの基本部位を5つ言いなさい」

「分かったわ。まず初めに対物レンズよね、外からの光はこの対物レンズを通して入ってくるわ。目標を捉える対物レンズの性能でスコープの性能が決まると言っても過言ではない程に重要なものよ。だからこそこの対物レンズのケアには気を使わなくちゃいけないわ、まず基本的にフリップアップ式のカバーでレンズを保護するわね。これはホコリやゴミが付着しない為のものよ。傷やホコリは集光率を下げて視界を悪く(暗く)してしまう、そんな状態じゃ狙うことなんて現実的じゃないわ。出来なくはないけど問題が山積みよ。メンテナンスには専用のクリーナーキットを使うわね、普通の布で拭くと細かい傷がレンズに付く可能性があるからお勧めできないわ。また、クリーナーも指定の物以外を使うと腐食の原因になりかねないから注意が必要ね。映画なんか

じゃ対物レンズに反射した光で敵に位置がバレる、なんてことがよくあるけど現代じゃそれを防ぐキルフラッシュというハニカム構造の反射防止カバーがあるから滅多に起きないわね。勿論完全に消せるわけじゃないけど、かなり軽減されるから遠距離でその僅かな反射を視認するのは至難の業よ」

「次は接眼レンズでしようか。対物レンズの反対側、射手が目で覗くレンズですね。対物レンズと同様、メンテナンスは欠かせません。スナイパーに取って重要なのは使用するスコープのアイリリーフ、接眼レンズと瞳の距離を理解することですね。接眼レンズという名前ですが当然目をびったりと付けるわけにはいきません、ある程度離す必要がありますがその際に適正距離があつていないと視界の外縁が暗く陰つてしまいます。スコープを狙撃銃にセットする際には自身の体格とストックの調整度合い、そして様々な射撃姿勢に於いてベストなアイリリーフを得られるかを再三確認する必要があります。また、殆どのスコープには視度調整リングが接眼レンズの付近に設けてありますが、これを使って接眼のピントを調整して自分に合った視度にすることも忘れてはいけません」

「そしてエレベーションノブとウインタージノブね。これはさつきアイアンサイトでやったのと同じように照準点の調整に用いるわ。また、実戦に於いてはゼロリング際と環境が変わるからそれに応じた調整をする時にも使うわね」

「それと倍率調整ノブですね、文字通り倍率を変動する際に用いるノブです。スコープには倍率固定型と変動型の2タイプ存在していますが、現代に於いてはスナイパーにとって固定型は全く使い物にならないと考えられているので変動型がオーソドックスです。低い倍率で索敵して高い倍率で標的の判別を行って中倍率で狙撃する、というのが一般的でしょうか。倍率は高ければ高い程良いというものではなく、銃や任務に合ったものを選ばなくてはなりません。私達のような銃だと最大で10〜12倍程度のスコープを使うことが多いでしょうか、50口径ともなると最大25倍という高倍率スコープを使用することがあるみたいですが倍率が高ければ高い程視界が暗くなる点には注意が必要ですね。これは集光度が変わらないのに画像のみが拡大されることによっておこる現象です」

「最後にフォーカスノブね。スコープの焦点が合っていない場合、視点を移動させた時に照準点がズレることがあるわ。これを視差パララックスというわね。フォーカスノブは焦点を合わせると同時にこのパララックスの発生を防ぐのに使うわ。古いスコープだと殆どがフロント・フォーカスで対物レンズ外周を覆うチューブを回転させることで調整するシステムだったみたいだけど、現代では中央左側に設けられたサイド・フォーカスが主流よね。これで5つ全部言ったわよ」

「付け加えるとすればエレクターレンズくらいでしょうか？スコープ本体の中には複数

のレンズが納められていて、この組み合わせによって画像を倍増させていますよね。私達射手がエレクトァーレンズに手を加えたりメンテナンスすることは基本的にありませんが、仕組みを理解していれば不具合があった際に原因を判断して修理などの対応が取りやすいので知ってはおくべきです」

「完璧ね、流石ライフル型の戦術人形といったところかしら」

「これくらい当然よ」

「初期インストールされてますしね」

2人の回答にWA2000は満足そうに頷きながら褒めた

それに対して2人は口では当然のことだと言うがその顔は嬉しそうである、普段褒められることが少ないFN49などは特に赤みがかった笑顔を浮かべていた

「さて、今の2人の説明で基本は十分すぎるわね。ここからは基本的な構造を持っている現在でも最もオーソドックスな形状のスコープとして色んなところで使われているリューポルド社製の『Mark. 4 M3』を使って実際に調整していくわよ。指揮官、

準備は良いかしら？」

「とつくに終わってらあ、いつでもいけるぜ」

「了解よ、じゃあ2人ともさつきと同じように指揮官の近くにいきなさい。よし、良いわね。まずはさつきと同じようにメカニカル・ゼロを行うんだけど手順はほぼ一緒だから省かせてもらおうわよ。じゃ、3発撃って頂戴……着弾が右上にズレたわね、双眼鏡でしっかりと確認しましょうか。さつきのターゲット用紙よりマス目が細かいのが分かるかしら？ 基本的に実線を1マスとして数えて小数点以下の細かいところを破線で見ていく形になるわ。今回は…右2、5マスの上に3マスね。で、ここからノブを回して調整していくけれどさつきと少しだけ違うわね。殆どのスコープは1クリックの移動量が1/4MOAになっていて、4クリックで1マス移動するようになってるわ。だから今回の場合はまず左に2、5マス移動させるためにウインテージノブを上10クリック、下へ3マス移動させるためにエレベーションノブを左に12クリックすればOKよ。因みにいう必要はないでしょうけれど射手から見た時にエレベーションノブを右に回せば着弾は上になって左は下、ウインテージノブを下に回すと着弾が右になって上に回すと左へ移動するようになってるわ。ここら辺はスコープに『↓U』や『←R』と

か書いてあるから分からなくなったらそれを見れば良いけれど、勿論そんなの見なくても良いように完璧に覚えてなきやダメよ。さて、修正も出来たところでもう1度3発撃ちましようか……よし、中心のサークルにトライアングルが入ったわね。続けて3発撃つて……うん、完璧ね。これで調整は完了、と言いたいところだけどまだ作業が残ってるわ」

「あら、これ以上やることあったかしら」

「あるのよ、それが。ゼロリング自体は完了したけどここからエレベーションノブとウィンテージノブの目盛りを☒この状態で0に合わせる☒の。やり方は簡単、ノブのダイヤルを固定してるイモネジを緩めてからダイヤルの目盛りの0の部分スコップ本体についてる中心を表す白い点に揃えたらネジを締めて再度固定する。これだけでいいわ、因みにこのスコップは白い点で示されてるけどここの辺はスコップによって様々よ。こうしてあげればスコップの調整を狂わせることなく目盛りを0にして実戦中の調整がしやすくなるのよ」

「なるほど、そんな技があるんですね……どうしてそこも初期インストールされてないんでしょう？」

「私に聞かれても知らないわ……ペルシカに言つて頂戴。ともかくこれでゼロリングは完了ね、でももう1つちよつとしたチェックを行うことが出来るわ」

「まだ何かあるの?」

「ええ、とは言ってもこれは別にそこまでやる必要はないけれどね。今から教えるのは自分が今付けてるスコープがどれくらい高精度なものかをチェックする方法よ。丁度ダイヤルの調整も終わったみたいだし、続けてやってみようか。まずは調整が終わったスコープのエレベーションオブを右方向に10MOA分(40)クリックするわ。この状態で3発撃つと…当然10マス上に着弾するわね。そしたら元に戻して今度は左、それが終わればウインテージノブの上下も同じことをするの。………よし、終わったわね。それで最終的に元へ戻してもう1度3発撃つ、この時着弾点がゼロイング時と変わっていなければそのスコープは信頼性が高くて高性能ってことよ。粗悪なスコープはこの一連の動作で照準点がズレるのよね、これをボックステストと言うわ。ただ高性能なスコープでも多少の差異は生じるもの、これはその度合いを確認する意味もあるわね」

「…ねえ、中心の着弾点が3つしかないんだけどこれって一切のズレがないってことなの?」

「もしそうだとしても射手の技量がずば抜けて高くないと無理な気がするんですが…」
「…まあ、うちで造ってるスコープは高性能ってレベルを凌駕してるのはあるわね。あと綺麗にワンホールショット決めてるのは指揮官の遊びよ、敢えて3点でやる辺り余裕

が滲み出てるわね」

「正しく化け物ね…」

「狙撃に関して私の右に出る奴あほぼいねえってこつた」

「ほぼいないって…少数はいるんですか？」

「まあな。そこにいるワルサーとか良い例だ、前にも言った通りあいつは私の持つ技の『全て』を継承してるからな。その気になりやあいつも同じことが出来る」

「こつちにも化け物がいたとは…」

「誉め言葉として受け取っておくわ。さ、貴女達もやってみて頂戴。普通に出来るでしょうけれど一応確認しておきたいの。それとさつき言った目盛り合わせやボックステストの練習もしましょう、ついでにワンホールショットを決める難しさも体感してみると良いわ」

その後は授業時間中何度も調整を行い、その速度や精度を上げていった

因みに2人が1度もワンホールショット決められない中スカーレットが次々と決めていく様を見て2人は更に戦慄したようである

座学2日目 二時間目

「よおお前ら、二時間目だぜ！」

「あら、連続で担当するのね。てつきりお師匠かと思つたてわ」

次の授業場所として指定された1kmの長距離射場にて講師を待っていると現れたのはスカーレットであつた

彼女は先ほどの授業で補佐とは言え講師役としていたので2人とも次に来るのはM200であると思つていた

「まあな、M200じゃなくて残念だったか？」

「な、なによ…別にそんなことないわ」

「モシンさん、顔が赤いですよ？」

「やかましい！」

「照れんな照れんな！ま、じゃれ合いはこれくらいにしてだ…まずは謝罪からだな。すまん、さっきの授業で教え忘れた項目がある。今日の題材に入る前にそこから説明させてくれ」

「あ、そうだったんですか。意外ですね、WA2000さんや指揮官がド忘れなんて……」
「いやまあ……これに関しちやWA2000は知識としちや知ってるがやったことはないし、私もここ10年程やってねえからな。それで忘れちゃった」

「……つまり重要度が低いってことかしら？」

「そういうことだな。んじゃ行くぞ、説明し忘れたのは『ポイントブランク・ゼロ』と呼ばれるゼロインング方法だ」

「ポイントブランク……？ポイント、ターゲットが見えない状況下でのゼロインング？」

「お、察しが良いなモシン、その通りだ。こいつは『距離なしのゼロインング』とも呼ばれててな、手っ取り早くゼロインングを行う方法で……まあ裏技つつうかやや横着したやり方だな。いくらグリフィンと言えども300m以上の射場を持つてる基地は少ない、ましてや1kmを越える射場ともなりやあ数えるほどしかないだろう。そこで、100ヤードの距離で疑似的に長距離のゼロインングを行うのが『ポイントブランク・ゼロ』だ。具例を挙げるか、まずフェデラル・308弾（.308口径・弾頭重量165グレイン・銃口初速2700fps）を使用して231ヤードでゼロインングがしたいとしよう。メーカー提供の弾道表によりやあ『Zero High @ 100Yards: 2.75,』となっている……つまりとこころ100ヤードで2.75インチ上に着弾するように調整すれば、231ヤードで丁度真ん中に当たるといふことだ」

「要するに自分の使う弾の弾道表をしつかり見れば理論上どんな距離でもパパッとゼロイング出来るってことなのね…」

「でもそれで本当に当たるのかちよつと不安ですね…」

「そうだな、これはあくまでも簡易的な方法で精密さには欠ける。的の大きな大型獣を狩る民間のハンターならこれでも十分つちや十分だが、ミリタリースナイパーなら長距離射場でゼロイングするべきだ。んでまあこいつを全然やらない理由なんだが、うちには阿保みたいに高性能な長距離射場が存在しているのが理由だな。こんなことしなくたってきちんと合わせられる施設があるんだから誰もやらねえんだよ」

「そりゃ確かにやらないわよね…：具体的にはどんな施設なのかしら？」

「最大射距離4kmで狙撃に関係する全ての条件を自由に変えられる施設だ。M200なんか結構入り浸ってるからその内訓練で連れていかれると思うぜ」

「4km!?!いや馬鹿でしょ!?!」

「…：衝撃的過ぎます……」

「いや、まあ…：私もぶつちやけあれはやり過ぎたと思う、うん。でもまあ結果オーライというか、そのお陰で色々と役に立ってる部分もあるからな。それにこのゼロイング方法をやらない理由はそれだけじゃねえ、如何に的確にゼロイングしようが環境によって完全にズレるもんだからな。流石に弾道表だけを使ってゼロイングしたんじゃそこま

で考慮することは出来ねえ。私の実例を挙げるが、アフガニスタンへ派遣された際にまず森林豊かなフォート・ブラッグ基地に着いたからそこでゼロイングをした。その後砂漠地帯に存在するカンダハル基地へ異動になったからそこでゼロイングをやり直した。らんっべきにズレてた。いや、ズレてたって表現は的確じゃねえな。気象条件によって弾道が変化したんだ。だからゼロイングした際にはその時の気象条件も細かく記録しておけ、そうすりや環境の変化に応じて照準をどう調整すれば良いのかがデータと経験から理解出来るようになるだろう」

「なるほど……ただ知っていればいつか役に立つかもしれない、ということですか」

「そういうことだな。さて、説明し忘れたことに関しちやくんくらいだ。早速今日の項目に移るぜ、今日やるのは『ミルドットとホールドオーバー』についてだ。これも理解してる部分はあるだろうが念のために基本からやっていくぞ。まずミルについて理解する前にスコープのメリットとデメリットについて理解しなくちゃいけないな。スコープは長距離の目標に対する識別能力が高いが、その反面高倍率だと至近距離の敵：特に移動目標に対する追尾性が悪いというデメリットが存在する。だからスコープによつては倍率を抑えて比較的近距离の移動物体を含む目標に素早く照準を合わせるような使い方を前提としたものもあるな、トリジコン社製の4倍率照準器『ACOG』なんて正にそれだろう。かつてのアメリカ軍じゃ等倍率のCCO（所謂ダットサイトやホ

ロサイト)を搭載したM4ライフルがニアサイト・セキュリティやルームエントリーを担当し、4倍率のACOGを搭載したM4ライフルがファーサイト・セキュリティを担当、4〜8倍率のスコープを搭載したSR25などがオーバーウォッチを担当してそれ以上の距離の狙撃を高倍率スコープを搭載した狙撃銃が担当する……といった役割分担があつたな。当然任務や状況に応じて光学機器を選択するが、うちの基地ではダミー達にそれぞれ違う光学機器を装備させることも基本としている。お前達スナイパーにはあまり関係がないが、特にアサルトライフル達は本体とダミーを含めて2名が4倍率のACOG等のスコープ、残り3名が等倍率のホロサイトを装備する編成が多いな。だがFN49、お前に関してははずれマークスマンとしても行動してもらうことになるだろう。そうなりや狙撃部隊として潜入するお前と部隊のマークスマンとして行動を共にするお前とで光学機器が異なることは普通にあり得る、どっちをダミーにするかはお前の判断に任せるがどうするにせよ様々な光学機器の扱いに熟達してもらうぞ」

「が、頑張ります！」

「私にその役目がないのはボルトアクションだからかしら？」

「ぶっちゃけるとそうだな。別にボルトアクションでもマークスマンをすることは出来るが、任務の性格上ボルトアクションである意味が薄い。長距離狙撃にかんしてはボルトアクションにメリットが多々あるが、やはり特に即応性が問われるマークスマンには

向かないだろう。私もマークスマンをやる時はM110A1 CSASSを愛用してたしな」

「M110A1 CSASS?」

「G28つて言えば分かるか?」

「ああ、あの娘のことね。分かったわ」

「さて、次にレティクルの説明に移らせてもらおうぞ。とは言えこれに關しても既に知っていることが多いだろう。スコープを覗くと内部には十字の線と目盛りが付いていることが多い、ロシア系のスコープはT字型が多かったりなど例外はあるがこれらをレティクルという。そしてこのレティクルは照準するのに使うことは言うまでもないな、目標との距離を測って距離や環境で変化する着弾位置を補正してより正確な狙撃を行う為に必要不可欠なものとなる。かつてはスコープの新製品が毎年の如く次々に登場していてレティクルのデザインも様々あったが、ここでは『ミルドット・レティクル』について教えるぞ。ミルドットは軍用スコープの基本中の基本だ、スナイパーは絶対にその使用方法を完璧にマスターしなくちゃならねえ」

「私が以前使ってたPUスコープなんかにはなかったわね」

「だろうな。正直あれで狙撃するのは骨が折れる、ミルドットがあるかないかでどれほど変わるのかは今からする説明で良く分かるだろう。んじゃ、行くぞ」

「こいつがミルドットレテイクルだ。2つのドット間の幅が『1ミル』となつている。このミルつて単位は多くのスコープに共通する単位でな、ミル単位のドットが刻まれたレテイクルだからミルドットレテイクルつて呼ぶわけだ。さて、再三出てくる『ミル』だがこれがなんのかわらねえとな。ミルというのはMOAと同じく角度の単位であり、私達が普段使っている『度数法』とは異なる『弧度法』という単位法での単位だ。ミルという言葉の語源は『ミリラジアン(mrad)』からで、これを短縮したものになるな。因みに『ラジアン』が弧度法のことだ。とか言つてもピンと来ないだろうから度数法に換算すると、1ミルが凡そ0.57°で6400ミルで凡そ360°となる。……まあ、そんなこと言われても分からねえよつて思うよな?確かに理論的な話は難解だが、スナイパーが基本知識として理解しておくべきなのは『1ミル幅は距離100ヤードで3.6インチ、距離100mで10cm、距離1kmで1mの開きが出る』ということだ。例えばスコープを通して1mのものが1ミル幅に見えたなら、対象までの距離は1kmということになる。ワルサーの距離目測の授業で習つただろうが、ミル幅から距離を求める公式をもう一度おさらいして置くぞ」

対象物の大きさ(m) × 1000 ÷ ミル数 = 距離(m)

「当然この公式を覚えていても対象物の大きさが分からねえと意味はない、だからスナイパーは様々なものの大きさを予め知っておく必要があるわけだな。それとスナイパーはこのみるつどとの配置と幅を感覚として頭に叩き込む必要がある。目標物を重ねて「ドットが1つ、2つ、3つ…」なんて数える暇があると思うなよ、重ねた瞬間にミル数を読み取って1秒足らずで目標までの距離を計算出来るようになれ。きついこと言ってるかもしれないねえがこれは私でも出来るんだ、計算に強い戦術人形のお前らが出来ないとは言わせねえぞ？ 実際にはうちの基地の奴らは出来るわけだしな。それからミルはMOAと同じく角度の単位だと話したな、よって計算式を用いて計算すると『1ミル≒3・6MOA』であることが分かる。計算式は以下の通りだ」

1ミル 底辺 a

t a n | |

2 距離 H

底辺 a || 1・80072 in

A ≒ 3・6 in

「この通り1ミルは3. 6MOAとなるわけだ。ただこつからちよいとややこしい話なんだが、前回ワルサーが言ったように『厳密に言えば1MOAは100ヤードで1. 05インチ』となる。だからしつかり計算すると3. 6÷1. 05≒3. 4285714. . . となることから『1ミル≒3. 4MOA』と記載されていることもある、基本的には1ミル≒3. 6MOAで考えて良い。だが3. 4MOAというのも決して間違いという訳ではないから注意しておけよ」

「またややこしい話ね. . .」

「そうだよなあ. . .私も最初の頃は苦労したもんだ。ま、ミルに関しちやこんなところだな。次はホールドオーバーに行くぞ。前回の授業で触れてみて分かったと思うがゼロイング自体はそこまで難しい作業ではない、だが実際の戦場ではゼロイングした距離ピッタリに敵が現れてくれることなんてほぼほぼありやしねえ。そういった場合の対処法は大きく分けて2つ、そのうちの1つがホールドオーバーだ。既に知っての通り弾道は弧を描いて飛翔し、ゼロイングした距離以外ではレライクルの中心には命中しない。だが射手はゼロイングした距離とその他の距離での着弾位置の落差を把握することで狙いを修正し、命中させることが可能だ。ここでは狙撃銃の基本中の基本弾薬であ

るM118弾(7.62×51mm NATO弾)を例にして話をするぞ。さつきも言った通り弾薬製造メーカーは弾薬毎に弾道表を提供している、これはM118弾の弾道表の一部だ。ゼロイング距離の前後で着弾位置が変わっているのが分かるな?この落差を利用してやや上を狙うことで命中させるテクニクがホールドオーバーってわけだな

「具体的に見ていくぞ。100ヤードでゼロイングした狙撃銃で200ヤードを狙う場合、弾道表によると着弾の落差は『4.5インチ』であることが分かる。この落差を用いて4.5インチ上を狙えば理論上命中することになる。無論他にも風やら気温やら湿度やら高度やら色々と考えしなきゃならねえもんはあるが今は省くぞ、キリがねえからな。4.5インチ上を狙う為にミルドットを利用する、さつき言った通り『1ミルは100ヤード先では3.6インチ』であり200ヤードなら7.2インチだ。4.5インチ上を狙う場合、十字の中心より0.59ミル上に合わせてやれば良い。とは言えミルとインチの計算は面倒だ、その為スナイパーは最初から『射距離〇〇mならば△△の目盛りに合わせて良い』ということを感じとして身体に叩き込んでおくことを推奨する。また、スコープには全ての倍率でミルゲージ(目盛り)が使えるF_{ファースト}・F_{フォーカル}・P_{プレイン}式

と特定の倍率でしかミルゲージが使えないセカンド・フォーカル・プレーンSFP式の2タイプ存在することにも注意しろ。FFP式は倍率を変更した際同時にレティクルの大きさも変わり、SFP式は変わらない。当然ながらSFP式は非常に使い辛いことから廃れたが未だに作ってる阿保はある、うちでは全面的に廃止してるがそういうものがあるということは知っておけ。なんせIOPは未だにPUスコープなんざ作るくらいだしな…意味ねえだろ」

「ま、まあまあ…」

「確かに今にして思うとあれは使い辛いわね…良く今まであれでやってたわ」

「全くだ、私ならあんなスコープ死んでもごめんだけ。っと話が逸れたな、まあこんな感じで弾道表から見ていくことが出来るわけだが正直見辛いな？そこを考慮して中にはこんな弾道表もある、見ろ」

「あら、こつちのが分かりやすいわね」

「でもメートル表記なので100メートルでゼロインクしなきゃいけませんね」

「そうだな。だがスナイパーはゼロインクを500m〜600mでやっておくのが普通だ、そういう時はこの表は使えないから注意しろよ。まあそういう時はクレアが作った専用の弾道表を使えば良い、後で渡してやる。これが弾道表を利用した修正方法だが、

もつと実戦的でやりやすい方法もある。それがエレベーションノブを利用する方法だ。ハイストレスな状況下で計算を間違える可能性が危惧される場合だと機械的で信頼できる修正法と言えるだろうな。例えばエレベーションノブの目盛り0で100ヤードゼロイングしておき、200ヤードなら1に、300ヤードなら2に、といった具合にノブを回して面倒な計算なしで修正するんだ。具体的な目盛りの数値はスコープによつて違うから自分の使用するスコープへの理解はしっかりと深めておけよ。どつちの方法を使うにせよスナイパーは自己責任で弾道計算を行わなくちゃならねえ、実戦では気温とか風とかの環境の影響もあるわけだしな。普段からこまめにデータを取つて記録し、経験を積み重ねれば様々な戦場で活躍出来る一人前のスナイパーになれるだろう。さあ、話だけ聞いてても実感は薄いし試しにやつてみるとするか。まずはミルドットによる距離目測からだ、以前もやつただろうがこれから夢に出てくるくらいにやつてもらおうぞ」

「私達は夢を見ないわよ、同志」

「物の例えだ、気にすんな。さあ、やるぞ！」

その後2人は今回の授業で習ったことを何度も何度も反復して練習させられる

それなりに疲れるがまだ授業があるからか抑えめにしてくれたらしく、休憩時間中に疲労を癒せる範囲でしかすることはなかった

次の授業は屋内射撃場で行うとのことでスカレットの案内により移動した2人は授業が始まる迄の間、復習と休息をして備えるのであった

座学2日目 三時間目

「お待たせ、それじゃあ授業を始めるよ」

FN49とモシン・ナガンが屋内射撃場にて講師役を待っていると、M200とWA2000がやって来た

どうやら今回も2人で授業を行うらしい

そしてメインの講師はM200が務めてWA2000が補助役という少し意外な配役であった

「大丈夫よ、それより今回は何について教えてくれるのかしら?」

「今から教えるのは主に2つ。1つ目は『狙撃銃を構成するシステム』について、まあぶっちゃけるとこれはアタッチメントについてだね。もう1つは『射撃姿勢』についてだよ。この射撃姿勢を教える時にわーちゃんに実践してもらおう感じだね」

「誰がわーちゃんよ」

(ワルサーさんをわーちゃん：呼んでみたい)

M200の言に遺憾を示すWA2000だがFN49が何やら企んでいることには気付かなかった

そんな彼女を無視してM200が授業を始める

「まずは『狙撃銃を構成するシステム』だね。これはさつきも言った通りアタッチメントの類になるわけだけど、まず必須なのが『サブレッサー』だよ」

M200の言葉に合わせてWA2000が手に持った銃を2人に見せた

しかしそこに握られているのは彼女の半身ではなくM24SWSであった

勿論彼女とはシステムで繋がってなどいないが最早今更である、2人ともその事に驚きはしなかった

「このサブレッサーは今や必要不可欠と言っても良いね。スナイパーにサブレッサーが与えられているか否かで、その軍隊が二流以上かそれ以下か判断出来ると言って良いくらいにね。そしてサブレッサーは『消音器ではない』ことは前にも軽く説明したよね？正しくはサイレンサーでその意味は『減音器』だって。サブレッサーは『抑制器』だから本当は『何を』抑制するものなのかちゃんと言わなきゃイケないけど：面倒だから省くよ。取り敢えず大事なものはサブレッサーを付けてたってそれなりに大きな音がするってこと。なのにどうしてサブレッサーなんて使うのか、その理由は分かる？」

「簡単なことね、それでも尚利点があるからよ。大きな音がするって言ってもかなり軽減出来ることに変わりはないわ、遠くからではその音を正確に聞き分けるのは困難だし超遠距離ともなればそもそも聞こえなかったりね。後は他の大きな音に紛れさせて撃

つことで疑似的な減音効果を發揮させてより銃声を分からなくさせたりとかもあるわね。とりわけ重要なのが『射撃地点の角度が分からない』点よ。何処から撃ってるのか、その正確な位置を音から判断するのが難しくなるわ」

「他には夜間に於けるマズルフラッシュの大幅な軽減でしょうか。昼まではそれほど目立ったりはしませんが夜間ではマズルフラッシュが非常に目立ちます、しかしサプレッサーは火薬の燃焼ガスを一時的に閉じ込めることで減音効果を發揮するので同時にマズルフラッシュを軽減する効果も持ちます。その為夜間作戦時にはマズルフラッシュから敵に捕捉されるという危険を最小限に減らすことが出来て、これは生存率だけじゃなくて2回目、3回目の攻撃の成功率を上げてくれます」

「うん、良い感じだね。でも他にもあるよ、例えば人間の場合だと射手の聴覚器官の保護とかね。ボク達は人形だからあんまり関係はないけど、指揮官みたいに人間の兵士からすれば狙撃銃の銃声って言うのは鼓膜が耐え得る音量を遥かに超えてるから『騒音性難聴』になる危険性がある。こうなってしまうともう兵士として終わりなんだ、音が聞こえない兵士なんて戦場では足手纏いでしかないからね。サプレッサーは音を消すことは出来ないけど人間の鼓膜が耐え得るレベルにまで減音してくれるからこの点も非常に重要だよ。まあ耳栓があればサプレッサー無しでもいけなくはないんだけど：そうになると今度は声による連携に難が生じるよね。当然耳栓をしてるわけだから小声では

聞こえない、耳栓を外すか少し大きめの声で会話をしなくちゃいけなくなつて面倒だし被発見率も高くなる。その点サプレッサーがあれば耳栓も要らないから会話でのコミュニケーションも取りやすいつて利点だね。これは狙撃銃だけじゃなくてマシンガンにも言えることだからこの基地ではLWMGを始めとして殆どのマシンガンにサプレッサーを標準装着させてるよ。とは言えこれに関してもボク達はCOMTACを使うことが多いからそこまで気にすることでもないかもね」

「COMTACっていうのはこれね。電子式イヤーマフつて言われる類のもので、普段は内蔵マイクによつて周囲の音を増幅するんだけど銃声みたいにかなり大きな音は自動的にシャットアウトしてくれる優れものよ。当然こんなものがなくても作戦の遂行は出来るけどあれば安全性が増すわ。そうそう、これはちよつとしたことなんだけどとある都合で私達の通信を妨害することはほぼ不可能になつてからジャマーの効果を気にすることもないわね」

「それからサプレッサーにはスナイパーにセカンドチャンスを与えてくれるものもあるよ。もし一射目を外してしまつた時、サプレッサーがなければ敵は当然銃声に反応してこつちの方角を警戒して直ぐに遮蔽物に隠れる。でもサプレッサーを付けてれば発砲音が減衰するから遠距離では聞こえないことも多々あつてね、着弾音に反応しがちになるんだ。つまり射手とは反対方向を向いちゃうつてことだね。当然精鋭部隊なんか

は着弾音から速攻で方角を察知して適切な位置に隠れたりするけど、そんな部隊は一握りしかない。大抵は着弾した方を無意識に向いちやうから警戒が遅れるんだ。それに警戒したとしても何処から撃ってるのかが分からなければ正しい遮蔽物に隠れられないこともあるよね、本人は隠れたつもりでもスナイパーから見ると丸見えなんてこともあるからやっぱりサプレッサーは重要なんだ。とは言えそんなサプレッサーも欠点がないわけじゃないのには注意してね。サプレッサーを付けると延長バレルみたいな効果もあつてその分弾道が変化するよ。当然射程距離は伸びるし、端的に言えば『威力は上がる』んだ。それにサプレッサーの工作精度が悪いと制度に悪影響を及ぼす可能性もあるね、クレアさんが作ってくれたものなら心配はないけどそこら辺の誰が作ったのか分からないものを使うのはお勧めしないよ。大丈夫な場合も多いけど粗悪品である可能性が捨てきれないからね」

「それに燃焼ガスを閉じ込める以上はその熱の影響に曝されるわ。現代では耐熱サプレッサーを使うのが普通だけどそれでも完全な耐性を持つてるわけじゃない、連続して射撃し続ければ壊れたり歪んだりして弾道が可笑しくなるわよ。最悪の場合異常腔圧からの銃身が裂け跳ぶ危険があることも頭に入れときなさい。自分の使うサプレッサーが自分の扱う弾丸にどれくらい耐えられるのか、それも把握して状況に合わせて素早く交換出来るようにしておきなさいよ」

「あとこれは因みに情報だけど、軍務上の理由で難聴になった退役兵士には補償を払い続ける必要もあるんだ。全員に配備するとなると結構な金額にはなるけどそれでも補償払い続けるよりは低コストで済むね。勿論これはボク達には関係ない話ではあるけれど人間の兵士を持つP M Cに取っては無視出来ない問題だからそういう理由もあってサプレッサーの配備って言うのは進んできた歴史があるね」

「なるほど、結構意外な理由もあつたりするのね」

「私達人形では及ばない発想ですね：それも指揮官からですか？」

「勿論そうよ。私だってそんな理由思いつかなかつたもの。G & a m p ; Kにもそういう補償はあるらしいけど、ぶつちやけ指揮官みたいに前線に喜んで出て行く奴なんてあんまりいないから使用例はないみたいね」

「そりやそうでしょうね…」

「…あんまりってことはいえることはいるんですね」

「まあ話には聞くね。でも本当に少数だよ、っとサプレッサーだけで結構話しちゃったね。次に行こうか。次は『N V GとI S』についてだね。N V Gが暗視装置でI Sがサーマル、赤外線スコープのことだね。N V Gは僅かな光源増幅することである程度ハッキリとした映像を提供するもので、I Sは温度差を感じて映像化するものだよ。とは言ってもこれはこの基地に配属になった以上はいずれ改造を受けて内蔵されるし、

この基地特性スコープには最初から双方の機能が付いているから状況に合わせて使い分けてねって位かな。人間的な目線で話すと長時間のNVGやISの使用は目の疲労が溜まるからある程度肉眼を混ぜて目を休ませることも重要だね。昔はどっちもサイズが大きかったしスイッチを入れてから映像が見えるまで数分間もかかるものばかりだったみたいだけど、今では数秒で映るしサイズも小型化されたからかなり便利にもなってるよ」

「それしたら次は『IRレーザー』ね。これはさっきのNVGやISと併用して使うアイテムで、IRレーザーは肉眼では見えない赤外線レーザーを照射する装置よ。私の経験で言わせてもらえればHK416とPEQ-2型レーザーの組み合わせで250m先の敵に腰だめで命中させることが出来たわ、現行のカービンアサルトライフルの射程距離が大体300mってことを考えると結構凄いことなのよ？それにIRレーザーには『コミュニケーションツール』としての役割もわるわ。例えば山岳地帯のOPで監視任務に就いてたとするわ。その時に遠くの丘陵に人影を発見した、これを別のOPに伝える時に用いるわね。『OPアルファからOPベータへ、こちらから11時の方向距離2kmの丘陵下に人影を発見。今よりその位置にレーザーを照射する、確認せよ』って具合にね。要するにレーザーポインター代わりに使うのよ、IRレーザーは強力だから数km先でも照射可能なことを利用した使用方法ね。これも小型化及び高性能化が進んでる

し、うちで造つてるものを基本的には使うことになるから具体的な使い方はまた教えてあげるわ」

「他には『小型ドットサイト』とかもあるよ。遠距離に視点を置いてるスナイパーが不意に近距離で敵に遭遇する可能性がないわけじゃあない。だからこそあの時ボクと指揮官はアサルトライフルを持ってたわけだけど、それが出来ない状況じゃあ高倍率のスコープは近距離に於いて不利だよ。そんな状況に対応する為に小型ドットサイトをスコープリングの上にマウントしてるスナイパーもいるよ。この基地だとマークスマンになることが多いM14やわーちゃんなんか「誰がわーちゃんよ」付けてることがあるかな。ボクや指揮官は個人的にこの小型ドットサイトをマウントするのが好きじゃないからすることは少ないね」

「それって好き嫌いじゃなくていいものなんですか?」

「うん、大丈夫だよ。言ってしまうえば『そういう状況に対応出来れば良い』んだからね。それこそアサルトライフルを持っていけば良いし、なくても近距離なら腰だめで当てるのも難しくはない(この基地基準)から。特に指揮官なら150m以内だと格闘で対応することも多いよ。まあそれよりも先に気付いて隠密に処理することの方が多いいんだけだね」

「なるほど……って納得しそうになるけど150m以内なら格闘で銃を持った相手に対応

出来る指揮官ってやばくないかしら？ 化け物なの？」

「化け物よ。貴女達もいずれば指揮官と戦うことになるでしょうし、その時にあの化け物つぷりを味わうわね。覚悟しといた方が良いわよ」

「…聞きたくありませんでした」

「付け加えると150m以内なのは『格闘でも対処しやすい』ってだけだからね、別に200mでも対応出来ないわけじゃないんだ。でもそこまで離れてるなら流石に撃つた方が良いからしないだけって感じかな。それとアフガニスタンみたいに開けた場所だと格闘は厳しいから普通に銃撃したりね。逆に密林地帯は指揮官の独壇場だよ、あそこで指揮官と戦うのは本当に骨が折れるから…」

「憂鬱よ…」

2人の話を聞くFN49とモシン・ナガンはゲツソリとした顔をしていた

この基地では試験を突破しなければ戦場に出る資格を得られない、その試験のどの段階はまだ分からないが確実に何処かでスカーレットと戦わなければならないのだと突き付けられたのだから当然だろう

「とまあ絶望するのも良いけど説明の途中だから戻るよ。最後に紹介するのは『スリング』だね。これもスナイパーにとって無視出来ない要素の1つだし、上手く使えば心強いアイテムになるよ。主な使い方は移動中に銃を安定して持ち運ぶのに使うことにな

るね、例えば梯子の昇降やラペリングロープで崖から降りる時とかにスリングで背負えば銃を落とす心配がないよ。でもスリングの使い道はそれだけじゃない、特に重要な狙撃をする際の銃の固定に用いる方法だね。狙撃っていうのはいつも安定したプラットフォームに恵まれてるわけじゃないんだ。プロン姿勢が最も安定するけど場合によっては不安定な姿勢で発砲せざるを得ないこともあるよね。そうした時にスリングを用いて銃を安定させる術を知ってればかなり有利に働くよ、具体的にはこの後説明するKneeling, slinging supported positionで教えるね。それとスリングにも種類があつてね、一般的な2ポイントスリングでも良いけどスナイパー用アレンジされたものも色々あるんだ。特に『カフ・スリング』は指揮官も愛用してるね。勿論これ以外のスリングを使っても良いけど、どちらにせよ何らかのスリングを使うのはスナイパーにとって凄く重要なことなんだ」

「因みにカフ・スリングは今私が持つてるM24に付いてるのがそうよ。後で実践してあげるからしっかり見ておきなさい」

「さて、じゃあ必要不可欠なアタツチメントについての説明も終えたいし射撃姿勢の説明に移ろうか。わーちゃん、お願い」

「だから誰がわーちゃんよ…まあ良いわ。よつと…」

M200の言葉を受けたWA2000が不平を漏らしながらも指示に従ってレンジ

に入って伏せる

「さてここからは狙撃にとって最重要と言っても過言ではない姿勢についてみていくよ。RF型戦術人形の多くは立射で撃つたりしてんだけど指揮官曰く『馬鹿としか言いようがない。第一次、二次世界大戦か？時代錯誤が過ぎる』らしいからね。少なくともスナイパーにとってあんな姿勢で撃つことは厳禁なんだ。勿論立射自体はあるけれどそれでもあんな撃ち方はしない、それはまた後々教えるね。今から教えるのは基本となる5つの姿勢だよ、因みに右利き前提で話を進めるね。じゃあまず1つ目、『Prone support position』から。これは地面に伏せた状態で当然最も安定した姿勢だよ。うつ伏せの状態で重心は丹田に置いて両脚はつま先を左右に開いて地面にベッタリとつける。リラックスしつつ可能な限り低い姿勢にして被弾率や被発見率を下げるんだ。ライフルのハンドガードはバイポッドやビーンバック、バックバックなんかを使って支えて安定させてね。ただ銃身には何も触れさせないように注意して、そこを守らないようなら蹴りや鉄拳が飛んで来るよ。左手はハンドガードには触れず、右脇の下辺り：ストック後部に添えるかストックを支えるビーンバックやモノポッドを握ったり添えたりだね。握るのは余計な力が加わって銃がぶれる原因になるからあんまりお勧めはしないけど、添えるだけじゃ不安定な時は仕方ないって感じかな。右脇はなるべく締めて身体と銃身が同一線上になるよう固定する。

この時に斜めになったりしないよう注意して。こうすることで敵から見た時の露出が減って射撃の際の反動を吸収しやすくなるんだ」

M200の言葉に従いながらWA2000は1段階ずつ動いて射撃姿勢を取る

2人はその様子を近くで見えて記憶に叩き込んでいった

勿論伏せ撃ち自体は知っているが、そこまで細かい部分までは知らなかったのだからとも見逃さないよう必死である

「これが最も基本になるプローン姿勢だね。射撃姿勢の中で一番安定してるからこの姿勢を取れるなら絶対に取って、これ以外の姿勢を取るのとはこれが出来ない時だけにするんだよ。じゃあ2つ目に移るね、次は『Pron^支e un^えsup^のported^な posit^いion^射』。これは何らかの理由によつてビーンバックなどで銃を支えることが出来ない、もしくは射手がそれを望まない場合に取り姿勢だよ。勿論命中精度は落ちるけど銃口を素早く左右に動かすことが出来るって利点があるね。ストックを肩のポケット（肩と胸の筋肉の間辺りにある窪み）にしつかりと納めて両肘を地面に付けて銃の支えにするんだ。両手で銃を肩に引き付けて固定するのも忘れないで。それから左腕でハンドガードを支えることになるけど、親指と人差し指の間のV字で支えるのが最も効果的だね。分かりやすく言えばこの姿勢はさっきの姿勢で使っていたバイポッドやビーンバックの代わりを左腕でするって

感じかな。この時に注意するのは絶対に筋肉で支えないこと、筋肉で支えようとするとどうしても安定しないからね。骨、と言うか骨格で固定して支えることを意識して。後はハンドガードを支える左腕の位置も気を付けないとダメかな、ハンドガードの後ろ側を支えるようにしてね。じゃないとこれも安定しないから」

FN49とモシン・ナガンはWA2000の姿勢を見て今までであった認識と正しい姿勢とのズレを修正し、新たに記憶していく

特にモシン・ナガンは何度か鉄血との交戦経験を持つため『正しくない姿勢の癖』がある、これを修正するのは何気に骨が折れるだろう

「で、^支次々 ^えい ^のく ^なよ ^射く。 ^い次 ^は

Kneeling unsupported positionだね。視界に敵とバ
イスタンダー（敵ではないが味方でもない存在。現地の民間人など）が入っててある程
度急いで身を隠しつつ射撃姿勢を取りたい時なんか使うよ。身体は目標に対して4
5. の角度を取って左膝を立てる、右膝は地面につけて下腿部く足までをベツタリと地
面に置いてその上に腰掛ける感じでお尻を置く。左腕は左膝の上に置いて銃を肘の上
に置いて安定させるんだ。左手は軽く右腕に添えると良いね。可能なら壁や大木なん
かの安定した物体に身体を預けるのも良いね、姿勢がより安定して命中精度が向上する
よ」

「こんな姿勢もあるのね：知らなかったわ」

「一見して撃ちにくそうに見えますけど…」

「まあプローンよりはどうしても安定性は落ちるわね。でも意外としっくりくるわよ、後で実践させてあげるからその時に実感すると良いわ」

「さて、次が

『K^スnnelling^ン, sling^グ supported^{支え} position^{膝射}』だね。これはスリングを使った膝射の姿勢だね、身体はさつきとは違って目標に対してほぼ正面に向けるよ。左膝を立てて右膝を地面に付けるけど、どっしりと座り込まずに腰も軽く右足に乗せる程度にするんだ。スリングの長さを調節して左腕に巻き付けてきつくテ^ンションをかけることで銃を安定させるよ。左肘を左膝に置いてハンドガードを支えるんだけど、この時に肘の先端じゃなくて上腕三頭筋の端を膝に置くとより安定した姿勢になるんだ。これも意外と安定してて撃ちやすいんだよね」

「スリングをこういう風に使うのは思いつきませんでした…」

「腕部を環状のナイロンストラップで固定するのも重要よ、これによってスリングが緩まないからより安定した射撃が可能になるわ」

「この部品よね…これを戦場で素早く正確に付けるのは結構難しそうね」

「そうだね、難しいよ。でも慣れれば数秒で取れるから何度も何度も練習するしかない

ね。さ、さて、最後に説明するの
 『Standing supported position』だね。とは言えこの姿
 勢を取ることは基本的にまずないよ。直立状態のまま何かで銃を支える射撃姿勢なん
 だけど、今までの中で一番安定しないからね。更に上体が高い位置にあつて敵からの視
 認性が高い点も難点になるよ。何らかの理由で他の姿勢が取れない、これ以外に選択肢
 がないって状況以外では絶対に使わないね。この立射には2種類あつて、水平な壁面を
 支えにする『Horizontal supported』と垂直な壁面を支えとする
 『Vertical supported』の2つに分かれるんだ。Horizontal
 supportedは銃を安定させやすいけど、露出した頭が敵から見た時に物
 凄く見えやすいんだ。ボクならそんな敵がいたら躊躇なくヘッドショットするね。対
 してVertical supportedは一言で言うなら『壁の横からちよつとだ
 け銃と身体を出して撃つ姿勢』って感じでね、左手を遮蔽物に押し当てて人差し指と親
 指の間のV字で銃のハンドガードを支えるんだ。右脇を締めて腕が垂直になるように
 構えれば露出を最小限に抑えることが出来るね。でも当然ながら安定性は低いよ、本当
 にそれしか出来ないって時以外はやらないで。慣れない内はまず間違はなく外すし、指
 揮官もこの姿勢で命中率80%になるまで5年掛つたつて言うくらいだから」
 「あの指揮官が…？なんか想像しづらいけれど、それだけ安定しない姿勢つてことなの

ね…確かに見てるだけでもやりにくそうなのが伝わって来るわ」

「です…」

「あと他にも『Sitting position』とかもあるけどこれはKneelingと似たようなものになるからまた実践編の時に教えるよ。後はトライポッドを使った姿勢なんかもあるけど…正直これは使う機会は殆どないかな。昔はあったんだけど今のこのご時世ではね。最も使うとすれば多分基地の屋上から外を警戒するスナイパーが使うくらいじゃないかな？一応説明しておくがこのトライポッドを使った射撃姿勢ってのは自軍の支配領域に於ける長時間の監視任務の為の姿勢って感じだね。これで大方の説明は終わりだよ、後は実際にやってみようか」

M200のその言葉に彼女達は自身の銃を手にとってレンジに入ると、先程教えられたばかりの姿勢を一つ一つ何度も繰り返し動作確認をする

そしてその姿勢に慣れてから実際に射撃へ入り、ターゲットの何処へ着弾したかを見て評価を下される

1つの姿勢に於いてバイタルゾーンへの命中率90%に至るまで繰り返し行われ、2人には疲労の色が見えるが適宜アドバイスを送っていたお陰か2人の射撃能力は目に見えて向上していった

ただしこれはあくまでも同一条件でしかも距離が600mという中距離での射撃で

しかない、実際には千変万化とすべき状況の変化があるためこれで満足しないようにと注意してその授業は終わりを告げるのであった

座学2日目 四時間目

スナイパースクール、座学の2日目も終わりに近い4時間目

今回の授業は久しぶりに通常の教室で行うということでFN49とモシン・ナガンは資料棟の教室へとやって来ていた

先の授業内容に対する復習も終わっているので2人の会話の内容は専ら今回の講師が誰になるかの推測となっていた

「今までの傾向から考えてM200さんの可能性は少ないですよね…ないとは言いつれませんが」

「そうねえ…今日の2時間目のことを考えるとワルサーだったりしてね」

「それもあつかもしれませんね」

「残念、今回の講師は私だ」

「うわお!?心臓に悪いわよ、同志…」

2人が話しているといつの間にか真後ろにスカーレットが立っており、唐突に話しかけてきたことで2人は大いに驚いた

「この程度の気配遮断で気付けないお前らが悪い。さあ、さっさと授業を始めんぞ」

「は、はい…」

FN49は未だバクバクと脈打つ心臓部を抑えながら授業に集中するべく意識を切り替える

モシン・ナガンも素早く意識を切り替え、その様子を見たスカーレットは秘かに2人を評価した

兵士となる戦術人形に取って意識の切り替えは最低限必要な能力ではあるが、やはりその速度や練度には違いが出る

モシン・ナガンはそれほど戦場に出たことはなく、FN49に至っては全くないにも関わらず最初からそれなりの切り替えが出来るのは良いことだ

その事に彼女は内心驚きつつも2人への期待度を上げるのだった

「さて、今回はいいよいよ実戦でのスナイパーの任務の流れを見ていくぞ。今までは基礎知識のようなものがここからはこれまで教えたことを元にどう動くのか、後はマークスマンやスナイパーハイドに関しても触れていく。ここら辺の教育は経験がものを言うからな、私以上に適任はいねえだろ。ハッキリ言うがどんなに経験豊富な戦術人形だろうが私以上の経験を積んでる奴はいねえ。グリフィンで私以上の経験値を持つ奴なんてクルーガーくらいじゃないか？正規軍で言えばカーター辺りがそうだが、2人とも既に第一線は退いてるからこれから私が上回るかもな」

「まあ…そりやそうよね」

「20年以上の経験値は大きすぎますよ…」

「そういうこった。さて、まずはスナイパーの編成と人数に関して見ていくか。今までの授業でも言った通りスナイパーは偵察兵だ。アメリカ陸軍の一般的な歩兵大隊じゃ大隊本部中隊に『スカウト小队』があつてその中の『スナイパーセクション』にスナイパーが配置されている、因みに定員は6名だ」

「結構少ないわね…大隊の規模を考えると本当にそれで足りるのか不安になるわ」

「そう思うのも無理はねえな、だがそれで事足りる程にスナイパーつてのは大きな脅威でありそれと同時に狭き門でもあるつてこった。それと大隊や中隊、小队に関しては解説してくれている基地があるからその解説を観ておけ。他にも色々あるから全部観ておいて損はない。話が逸れたな、元に戻すぞ。因みに定員に関してだが小队によってはスカウトチーム×3、各チームにスナイパー2〜3名という場合もある。つまり多くても9人つてこったな」

「それでも最低600人規模の部隊の中に9人ですか…」

「どれほど厳しいのが良く分かるわね…つてそう言えば指揮官つて階級は中佐だったわよね?もしかして…」

「そうだな、その気になりや私は大隊を指揮出来るだけの権限を持つてたつてこった。

まあ私は現場派だし、貴重で超優秀なスナイパーだったからやったことはねえが」

「自分で言うのね…否定は出来ないけれど」

「それくらい豪語出来るだけの自信を付けておつてことだ。後で話すが自信のねえ兵士はダメダメだからな。さて、そんなスナイパーの配置されているスカウト小隊だが小隊長曹（小隊長の補佐をする下士官・二等軍曹）やセクションリーダー／チームリーダー（二等軍曹）がスナイパーの資格を有していることも多い。要するに隊長以下の人員全てがスナイパーって感じだと思ってくれていい。無論、小隊長がスナイパーの場合もある。だがそうは言ってもそうした下士官が狙撃任務に就くことは殆どなく、本来の役割に徹することが多いな。こうした人員がスナイパーであるのは単に自身のスナイパーであればスナイパーの運用や行動理念、思想が分かるから便利って理由からだ」

「なるほどね…私達は指揮官の指揮に従うこと以外は殆どないけれど、編成によっては別の誰かの指揮に下ることもあり得ると思つていた方が良いのかしら？」

「そうだな。さつきも言つた通り私は現場派だ、正直指揮を執るのは性に合わねえ。だからここではジェリコやワルサー、クレアなんかが実質的な指揮を執る場合も多いぞ」

「そ、それで良いのでしょうか…？」

「良いんだよ、作戦を成功に導いて任務を達成出来てりやあな。より成功率が高い方を選ぶのに何を躊躇する必要がある？」

「そ、それはそうですが……」

「その辺に対する柔軟な発想も優秀な兵士には必要になってくるぜ、今は納得出来ないかもしれないが……いざいざれ分かる。何より戦場はそんな甘い場所じゃねえからな、規律云々で死ぬくらいなら無視した方が良いに決まってるあ。さ、ここからはスナイパーがどのように運用されるのかの実例を見ていくぞ。シャキツとしろ」

「は、はい！」

「まずは最も一般的な『偵察任務』での運用について述べる。スカウト小隊スナイパーセクションから情報収集・偵察のため2名のスナイパーを用いるとしよう。他にはそうだな……この任務では接敵の可能性が高いとする、よってスナイパーチームをバックアップする目的でB中隊第3小隊をセキリティーとして付随させる。無論第3小隊がスナイパーチームと共に行動しちまえば少数の偵察ユニットの意味が損なわれる、その為小隊は被発見率を下げる為にやや後方で待機してスナイパーチームのみが目的地までの潜入・浸透を行う。浸透に関しては覚えてるか？」

「勿論よ、同志。ワルサーに空挺資格を取らせるから覚悟しなさいって脅されたもの、忘れようがないわ」

「良いだろう。因みにこの時のスナイパーチームを含めた部隊の指揮は第3小隊が執る。そしてスナイパーチームが偵察する目的地をObjective、第3小隊が待機・警戒の為

に設ける場所を Objective Rally Point O R P (再集結点)と呼ぶ。スナイパーチームのみがO

R Pから離れ、O B Jを観測出来る位置に移動して偵察を行うわけだな。これが大まかな偵察任務の際の動き方だ。当然細かい所はその場の状況次第だし、同じ偵察任務でも『何を目的とした偵察なのか』によつて設置する監視地点：L P / O Pの場所も変わつて来るぞ。そこら辺はこれから先の実践訓練の方でやっていく、今はこの流れだけでも叩き込んでおけ」

「了解です」

「よし、じゃあ次だ。次はそうだな…要人警護について話していこう。グリフィンだと考えられるのは本社の重鎮やI O Pのペルシカの護衛とかになりそうだな。今回は…こんなことはこれから先起こることはまずないだろうが、次期戦術人形開発の資料収集の為にペルシカが戦闘地域を訪問して来ると仮定しよう」

「割とんでもない仮定ね…」

「だが分かりやすいだろう?」

「それは、まあ…」

「さて、このペルシカの安全を確保するためにスナイパーを Direct Support D S で用いることにする。D S っていうのは直接支援、専用支援って意味だ。D S で派遣された奴は一時的に派遣先部隊の専属となり、命令を受けることになる。要するに私の指揮下から離れるつ

てこつたな。では実際にスナイパーセクションより6名のスナイパーを警護を担当する憲兵部隊：いやうちの場合は本社直属の部隊だな。ここへ派遣し、この6名は Personal Security Detail 本社 P S D 任務部隊（要人警護部隊）に加わってペルシカの移動経路：空港から宿舍までを見下ろせる高台3ヶ所（各2名配置）からオーバーウォッチ及び敵スナイパーに対するカウンタースナイプ任務を請け負うことになるのが一般的だ」

「カウンタースナイプ：スナイパー同士の対決ですよね？」

「簡単に言えばそうだな。ペルシカが敵スナイパーの狙撃によつて負傷を負えばIOPにとつてもグリフィンにとつてもかなりの大損害を被る可能性が高い。そして敵の迫撃砲とかそういったものは比較的見付けやすいがスナイパーとなるとそうもいかん。スナイパーは環境に溶け込み隠密に行動する、普通の歩兵にその存在を看破して排除するのはまず不可能だ。スナイパーの心理や行動を読み取つて排除することが出来るのは実質スナイパーだけだと言つて良い。他にはスナイパーがいそうな所にしこたま迫撃砲を撃ち込んだり、ガンシップで掃射なりして一帯を面的に薙ぎ払うような攻撃をするしかないな」

「それをされるつて考えるとおつそろしいわね…」

「実際かなり怖いぞ？ 私もクレアと2人で行動してる時、コブラ3機に野山を追い回されたことがあるが…あれは勘弁してほしいぜ、2度と体験したくねえ……」

「良く生き残ってたわねその状況で!」

「まあな。だが昨日の授業でも言ってたろ? ヘリを含めた航空機つてのは飛翔する為に軽量に作られている、だから脆弱な部分を撃ち抜けば行動能力を奪って撃墜させることも出来るんだよ」

「え、まさか指揮官…」

「ああ、その時は必死でコブラのローターを狙撃によって破損させて墜とした。クレアもM110 CSASSに取り付けたM203で1機墜としたな。人間、極限状態になると自分でも思っていないような実力を発揮するつてのをあの時初めて実感したぜ」

「うへえ…」

スカーレットの話聞いたFN49とモシン・ナガンは非常に表現しにくい表情をしていた

彼女のしてきた壮絶な経験に対する驚きやその突破方法に対する呆れに尊敬、そしてもしかしたら自分もそういう目に遭う可能性がなくなるといふ恐怖かが混じり合っている

「とまあ、話はちよいと逸れたがこれが要人警護の大体の流れだ。さっきの例だの場合によつては私の部隊だけでペルシカを護衛するつても考えられなくはない。そういつた時には私の指揮下のままだったりするし、もしくは正規軍の部隊が出張するような

らその指揮下に入ることも考えられる。いずれにせよ要人警護を行う際にはどの部隊の指揮下に入るかを常に意識しておけ。次に行くぞ、次は…今は滅多にすることはないだろうが砲撃誘導支援もスナイパーにとつて重要な任務だ。UAVフィードやスナイパーの偵察によつて鉄血の拠点を捕捉、その後155mm砲で砲撃することが決定したとする。そうすると砲弾の着弾観測をするため、砲撃誘導員を敵拠点を見下ろせる観測点まで送り込まなければならなくなる。この時、砲撃誘導員を支援する目的でチームを編成するでしょう。スナイパー2名、メデイック1名、スカウトセクションリーダー1名の計5名のチームを組もうか」

「ん？さっきセクションリーダーが出ることは少ないつて…」

「そう言ったな。だが決していないわけじゃねえ、今回のように作戦の可否が超重要でこれからの戦局を大きく左右する場合には出張ることもある。例えばこの仮定に於いて発見したのが鉄血の本拠地…エルダーブレインのいる拠点だったりとかな」

「それは…デカいわね」

「だろ？そういう責任重大な任務の際には下士官とか士官とかそんなの関係なく経験が豊富で優秀な奴を向かわせる必要がある。それが今回はセクションリーダーだった、つて感じた。後は責任の所在を明らかにして失敗時の揉め事の回避や発生時の早期解決のため…つてのもあるがな」

「ちよつと、嫌な理由ですな…」

「私もそういう理由なのはイケ好かねえ…だが重要だ。失敗しても素早く次の行動に移すために、取り敢えず責任を擦り付ける相手を決めとくと便利なのは確かだしな。あとこれは昨日の授業でも言ったが、スナイパー自身が砲撃誘導資格を取得している場合はスナイパーチーム2名のみで作戦に当たることも可能だ。隠密がなにより求められる状況であればそうすべきだな」

「ふむ…何をするにしても状況次第ってことね」

「そういうことだ。スナイパーの運用用途は非常に幅広い、全部言つてるとキリがねえからここのら辺で切り上げて次に移るが…これらはあくまでも極一部に過ぎないってことを覚えておけ。またここから少し蛇足になるが、FN49の今後に関わる点だから話しておく。スナイパーの運用担当者はISR（情報収集・偵察）の上では大隊S2（情報担当幕僚）が大きく関わることになるが、運用決定権は大隊S3（作戦担当幕僚）が持つ。無論最終決定権は大隊長にあるがな。スナイパーをどのように活用するのか、小隊長や大隊S3、そして大隊長の経験や判断能力…何より連携が求められる。だがここで1つ問題が発生する。それは分隊が行動している際に精密な射撃能力を有する者でなければ排除出来ない脅威が突然現れた時だ。スナイパーってのは簡単に言っちゃえば本部の指示によって動く兵科、分隊長の要請があつたとしてもすぐさま動かせる存在

じゃないってこつたな。分隊長から要請があり、状況説明などを受けて本部で話し合つてスナイパーを派遣するしないを決定する…なんてしてたら時間もかかるし状況次第ではその分隊が壊滅するかもしれないねえ。そんな時に分隊長の一存で運用出来る簡易的な狙撃手がいると便利だよな？それが所謂マークスマンってやつだ。厳密に言えば Designated Marksman通抜となるがめんどいからマークスマンで行くぞ。FN49に関係あるつてのは要するにお前は今後こうしたマークスマンとして動く可能性が高いつてことだ。マークスマンにはスナイパーよりも即応性が求められる、当然精密性も求められるがそれ以上に素早さが重要だ。一々考えることなく感覚で狙いを付けて700mまでを正確に撃ち抜ける射撃能力を有している奴にしか任せられない過酷な兵科だ。そんな存在になるつもりでいろよ」

「は、はい！」

「私にならないのはボルトアクションだからかしら？」

「まあぶっちゃけるとそうだな。別にマークスマンの持つライフル、所謂DMRがセミオートでなければならぬなんて規定はないんだが…任務の性質を考えればセミオート一択だろう。流石に現代戦で分隊に属する者がボルトアクションライフルを扱うのは厳しいものがある。どうしたつて連射性に欠けるし作戦行動に枷を掛けるようなものだ。またセミオートだとどうしても火力が乏しくなりがちなことから最近ではDM

RにM203みたいなアンダーバレルグレネードランチャーを装着することも増えている。他のアサルトライフルを持った奴で制圧してる間にグレランで一掃する、って感じだな」

「でも私の銃にはそんなものを取り付ける機能は…」

「安心しろ、試験に合格した暁には原型を留めない程の先進的改修を施したものをくれてやる。無論今までと使い勝手が異なるから追加訓練は必要になるが…なあと、私の試験を突破出来る能力があるならすぐに使いこなせるようになるさ。これはモシン、お前にも言えることだからな？」

「そう言えばM14さんの銃も原型を留めていませんでしたね…」

「言われてみればそうね…でも私の銃がどんな風に改造されるのか、ちよつと気になるわ」

「見てみたいなら一刻も早く試験を突破してみせろ。さて、実際の任務内容の軽い説明はこれくらいにして次に移るか。今から説明するのは『スナイパーハイド』だ」

「さつきも言ってたけれどそれって何なのかしら」

「スナイパーハイドとは、スナイパーが敵性領域に潜入・浸透した際に構築する拠点のことだ。…お前達の言いたいことは分かっている、それってLP/OPと同じじゃないかってこつたる？」

「ええ。違う物なのですか？」

「大体は同じだが、ニュアンスが違う。LP/OPはどちらかと言うと『監視拠点』だ。別に目標が所持ライフルの射程外でも構わん、本質的には攻撃ではなく情報収集のためのものである。それに対してスナイパーハイドは『狙撃拠点』、つまり目標がライフルの射程距離内に納まる位置に作らなきゃならねえ。こっちは攻撃がその本質となるから、攻撃出来ない位置に作っても何の意味もねえぞ」

「なるほど、理解したわ」

「だからスナイパーハイドは『一連の任務に於けるスナイパーの最終拠点』って言い方も出来るかもな。基本的にスナイパーはスナイパーハイドから狙撃を行った後は速やかに離脱を行う、その為スナイパーハイドがスナイパーにとって最後に身を落ち着ける場所になったりするんだ。そしてこのスナイパーハイドはLP/OPと同様周囲の環境や状況に適應するように構築する。当然、O C O K Aについて完璧な理解がなけりや到底出来ねえ作業だな。敵からの視認性や攻撃からの防護だけじゃなくて天候も考慮に入れる必要があるぞ」

「確かに雨だと狙撃は難しくなるものね…レンズに雨粒がついたりしたら狙撃どころじゃないわ」

「そうだな。だが雨という天候はスナイパーにとって味方にもなる。雨音は足音を消し

てくれるし雨の匂いは人間の汗や人形の生体パーツの匂いを隠してくれる。潜むには好条件となるんだ、対して狙撃する際にはモシンのいうように視界は悪いしレンズに雨粒が付きゃあ正確な狙撃など出来るわけもない。だからスナイパーハイドや周辺にある木なんかを利用して雨が狙撃の邪魔にならないようにしてやるのさ。視界が悪いのはどうしようもねえが、それも慣れりや結構当てられるようになる。そして雨は分かりやすいが、快晴も時に邪魔になる。あまりにも日照りが強いと蜃気楼が発生したりレンズに多くの光が入りすぎて目標がレンズ越しに見えなくなることもある。場合によってはそのまま目をやられて兵士生命が絶たれたりな。そうした時には自身の周囲を暗くして余計な光が入って来ないようにしてやることである程度軽減することが可能だ。これは昼間の砂漠なんかが多いな。当然、周りから見ても不自然にならないよう気を配る必要があるぞ」

「そっか、晴れてても狙撃に悪影響が出ることはあるんですね」

「そうだ。これは戦術人形であるお前達にはあまり関係がないが、人間には人種というものがある。私のような白人は虹彩の色が淡い関係上、夜目が効きやすい反面強い日差しに弱いといった弱点がある。そういった場合にはサングラスを掛けて狙撃を行ったりするんだ。正確にはサングラスじゃなくて特殊な加工を施したシューティンググラスだが、似たようなもんだな。当然スコープのアイリリーフをその分調整しなくちゃ

ならねえし、普通に裸眼よりも視界は悪いから慣れが必要だ」

「もしかして同志が普段からサングラス掛けてるのって…」

「ああ、そうだ。そういう状況になった時の為に普段から慣らしてる。また眼鏡の問題は何も人種だけに留まる話じゃない、お前達戦術人形にも関りがある点で言えば砂塵の舞う環境だな。当然目に砂が飛んで来るような状況じゃちゃんとした狙撃は出来ない、その際にゴーグルをつけることもある。それにレンズに砂がぶつかりまくって傷が入ると厄介だ。そうした影響を最小限に止められるようなスナイパーハイドの構築はスナイパーにとってかなり重要な項目なんだよ」

「なるほど…これはいち早く習得しなきゃダメですね」

「スナイパーハイドの重要性については理解したな？じゃあ細かい説明に入るぞ。まずハイドの位置はマップ・リコン（地図、衛星や航空写真、UAVフィードなどで得た情報を元に分析する偵察行動）によって出撃前に予め使えそうな場所を候補として見付けておけ。可能であればハイドと目標の間に何らかの移動を遅らせる障害物：O C O K Aの2つ目のOだな、これがあるのが理想だ。万が一自分の位置が補足された時に離脱する時間が稼ぎやすいからな。私の経験談だがアフガニスタンに派遣された時、敵兵は必ず川の対岸…それも橋からかなり離れている位置からアンブッシュを仕掛けてきた。少数、小火力で大きな敵と戦うには敵の追撃を妨害する地形の利用ってのは戦術の基本

だつてこつた。その時は私が狙撃による面制圧をしている間に回り込んだ歩兵による強襲でなんとかあったが、状況次第ではこつちがやられてたかもしれないねえ。話を戻すが、ハイド構築する際にはそうした障害物以外にも離脱するための出入り口を必ず設けることも注意しておけ。そして出入口はドアやカーテン状のもので覆つて出入りする時だけ開けるようにする必要もある。これは差し込む光によつて射手の視界を妨害しないこと、そして敵兵からの被発見率を下げる為だ。当然この出入口は外から見ても分からないうようにカモフラージュしなければならぬ。それとハイド内やその付近での動きは必要最低限に抑える。スナイパーチームは自身の存在が常に敵のカウンタースナイパーの視界内にあるという意識で行動するんだ」

「かなり…精神的にキツそうね」

「ああ、実際身体も相当キツいがそれ以上に精神を摩耗するな。そして精神が摩耗したことによつてより一層体力が削られていくという悪循環に陥りやすい、そうならないようにこれから滅茶苦茶に追い込んで精神力を鍛えまくるぞ」

「…が、がんばります」

「良いぞ、怯んでいても気概を持つてそんな自分を鼓舞出来るなら上出来だ。お前達には期待しているからな、精一杯努力してくれよ？さて、ハイドの概要を説明したところで次に教えるのはハイドの種類だ。まずは今から書き出すからメモしておけ」

- ? ベリーハイド
- ? インプロヴド・ファイア・トレンチハイド
- ? セミパーマメントハイド
- ? ルームハイド
- ? クロール・スペースハイド
- ? ルーフハイド
- ? ツリー・オア・スタンプハイド
- ? インプロヴァイズドハイド

「以上が代表的なハイドだ、これから1つずつ見ていくぞ。まずは『ベリーハイド』、これは私とM200があの時作ったものだな。簡易な構造で機動性を必要とする任務に於いて選択されるハイドだ。短期間のみ使用することが前提となるな。地面の土を最小限（下半身が地面より下になるように）掘る、もしくは同様の地形を利用する。横幅はスナイパーとスポッターが2人並んでうつ伏せになれるくらいだ。頭と肩が露出するからギリースーツの着用が必要不可欠となる。また、ネットやメッシュなんかで上面を覆うことも多いな。素早く構築出来て構造もシンプル、機動性を重視する際には複数地点に構築して移動しながら使うなど応用が効きやすいのが利点だ。だが簡易であるが故に快適性に欠け、長期間の使用が困難であることと雨などの天候の影響をガッツ

り受けることなどが欠点だ。とは言え現代戦に於ける屋外戦闘ではこのベリーハイドを築くことが多い、そういう意味では最も多くのスナイパーに愛用されたと言っても過言じゃないと思うぜ。次の『インプロヴド・ファイア・トレンチハイド』だが、これはつまるところ歩兵の塹壕だ。現代戦では使われず、過去の遺物となつている…が、それはスナイパーハイドとして見た時だ。大規模な軍隊同士が正面切つてドンパチやる場合、塹壕は歩兵にとつて心強い防壁となる。今ではそう言つた戦闘がほぼ起こらないという意味で過去の物つてことだな、状況次第では構築することもあるかもしれないから一応知つておけ」

「塹壕自体に効果がなくなつたんじゃないやなくてそれを有効に使える戦闘が行われなくなつたからつてことね、了解よ」

「戦闘の性質が変わつた…という解釈であつてるでしょうか？」

「それで概ね相違ないぜ。時間も惜しい、次々行くぜ。次は『セミパーマメントハイド』だな、これは十分な深さと広さを持つていてある程度の防護性を持つ天蓋に覆われたものだ。文字通り半永久的な構造物で、冷戦期なんかには国境線とかに構築されていたらしいな。スナイパーチームが交代で使うことも多い、その際にはレンジカードの譲渡と説明を怠るなよ。こういった使用をする関係上これは自軍の支配領域の監視及び狙撃地点として構築することが多いな。当然この基地の周辺にもいくつか存在している、見

付けるのは困難だろうが是非探してみると良い。次の『ルームハイド』だが、これは市街地で適当な部屋を見繕って窓や壁の穴から視界と射界を得るものだ。これに関して後は後で詳しく話す」

「視界も射界もかなり狭そうなんだけれど……本当にそれでイケるの？」

「安心しろ、現代に於ける市街地戦ではまず間違ひなくこのルームハイドが用いられる。それ即ち有効だつてこつた、問題点がデカけりや長い間使われ続けるなんてことにはならねえからな」

「そうかもしれないませんが……それでもちよつと不安ですな」

「ま、気持ちには分かるぜ。それに関しちや後々の説明と実際にやつてみて払拭してくれ。さて、次の『クロール・スペースハイド』なんだがこれは屋根裏や岩の隙間なんかの這つて入れるスペースを利用したハイドだ。わざわざ道具を用いて構築する手間は無いが素早い離脱が難しい点や埃、虫なんかの不快及び危険な要素が多くなりがちな点に注意しろ。お前達戦術人形は生物毒の幾つかを無視出来るが中には無視出来ないものもある、特に出血毒を持つ蛇には注意しろよ。そして『ルーフハイド』は読んで字の如く市街地で屋根の上に置くハイドだ。主に自軍がその領域を支配している場合に使われる。特に味方が制空権を確保している場合になるな」

「埃はともかく虫は嫌ね……蛇も嫌だけど虫よりはマシよ」

「私も虫は苦手です…」

「安心しろ、蛇に関してはその内旨そうに見えるようになるから。それに虫だって結構旨いな」

「…同志、貴女まさか」

「無論、蛇も食わずし昆虫食に関しても叩き込んでいくぜ？」

「うっ…」

スカーレットの言葉に思わずFN49が口を抑えた

モシン・ナガンも顔を顰めて嫌悪感を露わにしている

しかし戦場では常に安全で綺麗な食事が摂れるとは限らない、無論そうであるに越したことはないのだがそうもいかないのが現実だ

それに昆虫食はれっきとした文化として古来より続いているものだ、その歴史の積み重ねにより美味しい虫や調理法も多数発見されてきた

蛇も戦場に於いては御馳走だ、何より鹿や猪と比べて遥かに少ない労力で確保出来る点が評価出来る

更には調理の手間も大してかからず腹も膨れるとなれば重要な食料となるのは当然であろう

当然ながら毒には気を付けなければならないが

蛇は神経毒と出血毒を保有している可能性があるため、食す際にはしつかり同定作業をしておこう

「ま、その辺は後々教えてやるから覚悟だけしとけ。さて次は『ツリー・オア・スタンプハイド』だな。こいつは大木や切り株なんかを上手く利用してその後方や横に配置するハイドだ。この時森林の外縁じゃなくてやや奥まった場所を選ぶのが基本だ、なんせ被発見率が格段に低下するからな。木のせいで射界は限定されるが被弾率もその分下がる、安全性を優先するならこいつを選ぶと良いだろう。最後の『インプロヴァイズドハイド』は文字通り即席^{improvised}のハイドだ。こいつは特定の形状を指す物じゃなく、臨機応変に周囲の環境とマッチするよう即興で考えて構築するものになる。このハイドを構築するには何十、何百というハイドを構築してハイドに関して完璧な理解を得なければならぬ。まあ基本的にはベリーハイドでどうにかなることが多いからこういうことをする機会はありませんが、いざという時に出来ないかと困るからな。例えば道具が一切なくてベリーハイドも作れないような時に周辺にある落ち葉なんかを掻き集めて枝を軸に樹液で張り付けて作る、とかな。ハイドの種類については以上だ。どんなハイドを構築するにしろ、『スナイパーの隠れる場所』であることは絶対に忘れるな。1に隠密2に隠密3、4に隠密で5に視界6に射界で7で快適性だ。何が何でも見つからないよう隠密を意識し続けろ。この先やる訓練でお前達にハイドを構築させて隠れてもら

うが、見付けたら容赦なく攻撃するからな。破壊されたくないや全力で隠れろよ。そして樹木などの自然物を利用してハイドを構築する際には第1に周囲と同系色になるように、色が周囲から浮かないように気を付けるんだ。構築した当初は良くとも草木は次第に枯れる、よって時間による変化つてのを念頭に置いておけ。第2に偽装することに気を取られ過ぎて却ってハイドが目立つようなことにならないよう気を付けろよ。隠そう隠そうと意識がそつちに行き過ぎて視野が狭くなると周囲の落ち葉を集めすぎてハイドが鬱蒼として目立つたり、枝を取りすぎて周辺の環境が変わってしまい不自然になる、なんてことになりがちだ。隠密を意識しなければならぬが、あくまでも外から見て周囲と『溶け込む』ように作れ。これは森林や山岳だけじゃなく、雪原や市街地でも同様だ。それからハイドへの出入りは基本的に夜間などに行え。さつきも言ったようにハイドは常に敵スナイパーの視界内に捉えられているという意識を忘れるな。要するに『最低でも半日以上』はそこでジツと息を潜められる忍耐強さを獲得しろつてことだな」

「こうしてみるとスナイパーって本当に大変なのね…今までの自分が恥ずかしいわ」「仕方がありませんよモシンさん。私達にはここまでの専門知識はインストールされませんし、一般募集も広く行っているグリフィンでは指揮官のようにこうした教育が行える人も少ないでしょうから…」

「そうだな、そこら辺はグリフィンにとつての課題だろう。機会さえあればグリフィンの指揮官や戦術人形を集めて今してやるようなスナイパースクールを大々的に行いたいくらいだ。とは言えそこまで安泰した戦況じゃねえから出来ないんだがな……やれやれ。ま、そんな話は置いて続きだ。さつきスナイパーハイドに於ける快適性は重要度が低いみたいなのを言ったが、気にしなくてもいいものかと言われればそれは違う。ハイドからの監視というのは非常にストレスの溜まるものだ、可能な限り心身に負担がからないように配慮した方が良い。監視時の姿勢や保温性、通気性なんかだな。長時間の任務になるならハイド内に座ってくつろげるような場所を設けるのもありだ。当然、快適過ぎて眠くなるようなのはダメだがな？また、ベリーハイドなどではこうした休憩スペースを設けることは不可能だ。そこら辺も考慮してどんなハイドを構築するかを考えろ。そしてハイドは短時間で、堅牢且つ隠密性の高いものを作ることが求められる。だが構築に必要なEツール（折り畳みシャベル）に斧や鋸といった道具、それに土嚢なんかはかなり嵩張る。スナイパーチームは最小限何が必要かを事前に話し合つて少ない持ち物で最大の効果を得られるように取捨選択をする必要がある。その為にも普段から少ない工具でハイドを構築する訓練を行っておくべきだ、勿論ここでもそうするぞ。さて、市街地に於けるスナイパーハイドの話をする前に身を潜めたスナイパーが映った写真を3枚見せる。この中からスナイパーを見付けてみる」

「…わっかんないわ」

「全然見つきりません…」

「ま、だろうな。この写真たちはこれでも比較的近距离から撮られている、それでもこの見付けにくさだ。これが1kmも離れてたらまず普通の歩兵に見付けるのが不可能なものも領けるだろ？訓練を続けていけば自然とスナイパーの思考が読み取れるようになるからこの距離なら意外とすぐに分かるようになる、訓練の途中にまたこの写真を見せてやるからその時に成長を実感しな。さ、今から市街地に於けるスナイパーハイドについて少し詳しく教えていくぞ。結構重要だからしつかり聞いてけよ？」

「はいー！」

「分かったわ」

「良い返事だ、じゃあ行くぞ。まず市街地の建物を利用したスナイパーハイドつてのは森林や砂漠地帯のハイドと比較して格段に遮蔽と隠蔽の効果が期待出来る。壁や天井

で覆われているから天候からの防護性にも長けているなど利点は多いが、同時に欠点…と
いうか注意点も当然ながら存在する。まず目立つ建物内に潜むのはNGだ。ハイドを
構築するには建物の選択が重要となるが、例えば周囲に何もなくてポツンと立っている
ものや周囲よりも飛び抜けて高い塔などは目立つから避ける。簡単に位置バレする。
特に高い塔は視界が広くてLP/OPとしてはメリットがある分選びがちだ。だが狙
撃することを考えると発砲後の被発見率も高いし脱出ルートが限られるのでデメリッ
トが多い。特に敵が迫撃砲やロケットランチャーなんかを持ってたらそれを撃ち込ま
れて塔が倒壊、そのまま死亡なんてことにもなりかねねえ」

「それは勘弁願いたいわね…」

「だろう？ 実戦ではこうしたメリット・デメリットを理解して臨機応変にLP/OPや
スナイパーハイドの位置を判断する能力が必要だ。そして身を潜める市街地が高層化
のなされていらない一般的なものであった場合、ハイドは2階に構築するのが良いだろ
う。人つてのは意識せず2階を見上げることは少ない、よって通行人からの被発見率
が低くなる。逆に言えば敵スナイパーもそうした箇所に潜む可能性がある、注意した方
が良いぞ。それと視界と射界の確保方法にも注意しろ。どちらも市街地の場合は窓か
ら得るのが一般的だが、視界・射界を意識するあまり窓に手を加えるのはNGだ。外か
ら見た時に不自然な印象を与えちゃうからな。例えば窓ガラスが汚れてて外を見にく

くてもその汚れを拭き取るのはダメだ。また、多くの窓にカーテンがあるような建物なら視界が狭まるからってカーテンを外すようなことはするなよ。さつきも言ったようにハイドは『外から見て溶け込む』ようにしなければならぬからな」

「逆に言えば溶け込めるなら手を加えてしまっても良いんでしようか?」

「その通りだ! 良い着眼点をしてるな、FN49。実際窓以外にも視界・射界を得る方法は無数にあり、ドリルで壁に穴を空けるなんてのも手だしレンガなど壁面の一部を取り外す方法もある。一見すると不自然極まりない感じになると思うだろうが、元より戦地になるような市街地には崩れた建物や崩れかけているものも多くある。そうしたものが近くにあるならそれは不自然にはならない、寧ろより自然になる可能性すらあるな。そしてこういった工作を行わなくとも最初から崩れかけた壁の穴をそのまま視界・射界を得る穴にしたって良い。そして次に脱出経路を『複数』確保することにも留意しろ。当然正面玄関などの目立つ場所からの離脱は余程のことがない限りナシだ。裏口や地下道(下水道)へのルートを確認しておけ。かなり目立つが状況次第では屋上からヘリにピックアップしてもらおうこともあるしラペリングで地上へ降りることもまたある。その為天井への経路と言うのも出来るだけ複数確保しておく和良好的だろう。その気になれば天井から跳躍して隣の建物などに飛び移ってそこから地下道へ入って離脱、なんてことも出来る。だから余裕があるなら自分が隠れる建物だけではなく周辺の建物の

内部構造も調べておけ。市街地は森林や砂漠と比べて交戦距離が短く、位置が露見すれば敵は短時間で迫ってくる。それに死角も多い、建物の影に隠れてこつちが気付かない内に敵に接近される可能性も高い点にも注意するんだ。後は迷彩の選択だな。スナイパーに限らず兵士は地味な色の迷彩服等を着用するが、市街地はコンクリートグレーや土の茶色だけじゃなくて赤や青に黄色など鮮やかなカラーリングのものも存在することを忘れるな。地味な迷彩服が却って目立つ可能性があることは常に頭に入れておけ。それから靴の選択にも注意しろ。通常戦場に出る際は頑丈なジャングルブーツなどを着用するが、こうしたブーツには内部に鉄板が入っているものが多い。堅いブーツは大きく響く足音を発生させ、被発見率を高める要因となってしまう。だから市街地では靴底が柔らかい素材で出来ているトレッキングシューズなどを履くことを推奨する」

「想像してたよりも注意しなきゃいけないことが多いですね…特に靴は盲点でした」

「そうよね、普段私達ってこれが戦闘服でもあるからそこら辺あんまり気にしないものね」

「ぶっちゃけそこに関してはIOPの考えが一切分からんな。特にFN49の服なんて目立ちすぎて『見つけてください』って言ってるようなもんだ」

「うう…確かに」

「まあ普段は別にそれでも良いんだけどな…ただ任務に赴く際にその服装なのは頂けな

い、着替えるようにな？モシンの服は雪原地帯ならカモフラージュ効果をj得ることが可能だがそれ以外では非常に目立つな。白を基調とした街並みなら市街地でも同様の効果が得られる可能性は高いが：そういう街はあまり戦場になることがないんだよな、不思議と」

「：言われてみればそうね。どっちかって言うtと観光地みたいなイメージしかないわ」
「つとまた話が逸れたな。まあ要するに服や靴なんかの身に着けるものなんかも気に掛けるつてこつたな。そして市街地では室内をハイドにするわけだから、当然室内から狙撃を行う。そして室内射撃を行う際にはループホール（開口部）から可能な限り下がつて行うのが定石だ。普通近付くんじやないのか？と思いがちだが逆だ。ループホールに近い程被発見率が高くなるつてのが主な理由だが、他にも離れるメリットはある。例えばループホールから下がることで部屋の空間が疑似的なサブレッサーとなり、減音効果を發揮する。こうすることで『外に聞こえる射撃音』が小さくなることから敵に射撃位置を誤認させることが可能だ。要するに発砲音が小さいから実際の距離よりも遠くから撃たれると錯覚させることが出来るつてこつたな。サブレッサーを使用すりゃあ更に隱匿性は高まるが、サブレッサーを使うと音の質がかなり変わるな。そうすると敵にもサブレッサーを使つてることがバレて近くにいると気付かれる危険性がある、状況を見て『敢えてサブレッサーを外す』という選択を取るのもありだ。ただし、そうやつ

て工夫しても連続した射撃を行えば敵に発見されやすいから緊急時を除いてしないようにしろよ。それとループホールからの射撃で最も多いミスがサイトラインとボアラインのズレによるものだ。サイトラインってのはスコープやサイトから伸びた線、ボアラインは銃口から伸びる線のことだ。スコープでは見えてても銃口の先が壁で塞がってて弾丸が壁に当たると、つてミスだな。当然敵に弾が当たらなくなる可能性が高いし、最悪の場合跳弾で負傷する危険性もある。そんなことになれば絶体絶命になることも少なくない、射手はサイトラインとボアライン両方を常に意識して撃てるかどうかの確認をしろ」

「自分だけじゃなくて仲間まで危険な目に遭わせかねないものね…気を付けるわ」

「皆の為にミスは出来ませんものね…私、しっかりやってみせます!」

「良い気概だな、FN49。ワルサーの訓練のお陰か。対してモシン・ナガンが落ち着いていて冷静なのはM200の影響か?どっちにせよ良い傾向だ、今まで見てきた中でも結構な有望株だぞお前達は。無論、お世辞抜きでな。いずれは私を凌駕するようなスナイパーになってくれることを期待している」

「か、壁が高い…高すぎるわ」

「流石にそこまでの自信はまだありませんよ…」

「やれやれ…ま、これから訓練していきやあんどん能力を開花させていくだろ。お前

達はワルサーやM200だけじゃなくて私も見込んで期待している、その事を忘れるなよ?。」

「は、はい!。」

「しようがないわね、やれるだけやってやるわ!。」

「良い顔してんじやねえか。さて、今回の授業で説明することは全部終わりだ。あと少しだけ時間も残ってることだし何か聞きたいことはあるか? 疑問点があるなら遠慮なく聞け」

「あ、それなら私これが気になってたんですけど——」

その後FN49とモシン・ナガンは時間いっぱいまでスカーレットを質問攻めにした。だがそんなスカーレットの顔は嬉しそうであり、2人の積極性を心から評価しているようである。

「こいつらは間違いなく化ける」、そんな確信を抱くスカーレットは授業時間が終わるまで彼女達に自分の持つ知識を次々と教えていくのであった。

座学2日目 五時間目

「入るわよ」

昼食を食べ終えて教室でゆっくりしているとWA2000が入って来た

因みに食べたのはカラスのシチューである、カラスの肉なんて美味しいとは思ってなかったが食べてみるととても美味しくて驚きである

それは兎も角授業をする為にやって来たと思われるが、その割には彼女の顔は険しい何かあったのかとFN49が聞くとWA2000は頷き、口を開いた

「本当はこの授業も指揮官が連続でやる予定だったのだけれど……ちよつと街の方で事件があつてね。ガリルから来て欲しいって言われて出掛けたのよ」

「事件？けどわざわざ指揮官が出張するようなことなのかしら……大規模なテロとか？」

「いえ、そういうわけではないのだけど……私も詳細は聞いてないから良く分からないわ。ガリルは殺人事件だつて言つてたけどどうもあの様子は普通じゃないわね。少なくとも厄介な何かがあるのは確かよ」

「心配ですね……」

「心配するほどのことではないわ、あの指揮官だし。ま、それは置いといて授業を始める

わよ。今回教えるのは『監視のテクニク』と『敵狙撃兵の搜索テクニク』、それから『SALUTEリポート』の3点ね。さっそく監視のテクニクから行くわよ」

WA2000はそう言うどホワイトボードへと書き込みながら話を進めていく

「まず何度も言っていることだけどスナイパーの第一の任務は『偵察』よ、多くの情報を本隊に上げることが何より重要になってくるわ。なんせ主力部隊の皆はスナイパーチームからの情報を待っていることが多いから、正確で迅速な情報収集と伝達が求められるのよ。ここら辺は今までの授業で理解してくれていると思うけど、今回はそれを可能にする為の細かいテクニクを教えていくわ」

「それはありがたいわね、丁度知りたいと思つてたところなの」

「あら、それは良いタイミングだったわね。じゃあ今から細かく教えるからしつかり聞いておきなさい。スナイパーチームはポジションに着いたらまず『ヘイスティ・サーチ』を行うわ。これは双眼鏡を用いて視界・射界全体を見回すようにして
Situation Awareness
 『SA』を高める行為よ。SAつてのは直訳すると『状況認識度』になる

けど、この場合の意味としては『場の空気を理解する』と思つてくれて良いわ。不自然なもの、違和感を察知するためにはまず場の空気を読むことが大切になって来るわね。そして全体を見たら次にターゲットエリアに絞つて観測を行うわ。比較的低倍率の双眼鏡を使つて、同じように場の空気を掴みなさい。それとこの時狙撃銃に搭載した

スコープは使わないでね、視界が狭くなって全体の雰囲気掴むのが難しくなるわ。そうしてヘイスティ・サーチが出来たら今度は『ディティール・サーチ』に移行しなさい。これはより細かな状況を観測するもので、双眼鏡を用いて前方180°の範囲を距離50m毎に最低10往復してチェックしていくの。ヘイスティ・サーチからディティール・サーチの組み合わせは必要なら数回ほど繰り返しても良いわね」

「要するにざっくりとした観測とじっくりと見る観測を繰り返して戦場の様子を把握するということですね」

「その通りよ。次に『監視の四大要素』について教えていくわね。これは指揮官の持つてくるアメリカ軍の教本を元にやっていくわよ。まず1つ目、『認Awareness識』。さっきも言った

通りターゲットエリアのみじゃなくて自分の置かれた周囲の全体状況を認識して、把握しなきゃいけないわ。現場の空気感を読み取ることが変化に気付くための第一歩よ、それと自分の身を隠す意味でも重要になって来るわね。2つ目、『理Understanding解』。状況を把握したら☒自分に何が出来るのか、どこまでが限界なのか☒を理解しなさい。例えば

『敵部隊を視界に捉えた。だが現在位置では部隊標識などが判読出来ない、あと200m接近すれば判読可能だが被発見率は五分五分』というような状況になった時に無茶や無理、無謀な行動をせず自分に出来ることを冷静に把握して実行するの。その為の理解力をしっかりと鍛えなさい。3つ目、『記Recording録』。視認した事実のままに記録し

なくちゃいけないわ。偵察用の特別な記録方法がないわけじゃないけど、記録の基本は『SULUTEリポート』よ。これについては後で詳しく教えてあげるわ。そして4つ目、『対^{Response}応』。監視を通して得た情報にどのように対応するのか——記録だけに止めるのか、部隊に報告して支持を仰ぐのか、ただちに離脱するのか、火力支援を要請するのか、或いは狙撃を行うのかなどなど最も適した対応策を選択しなさい。こうした判断を行うには豊富な経験が必要となってくるわ」

「認識、理解、記録、対応……結構普通と言うか、言われてみれば当たり前のように感じるわね」

「でもちゃんと把握してなければ出来そうにないですね」

「そうね、戦場というハイストレスな状況では普段なら問題なく出来るようなことでも出来なくなることが多々あるわ。私達戦術人形は人間よりもそのストレスに耐えることが出来るけど、疑似感情モジュールがある以上そういう状態にならないとは言えないわね。だからしつかりと理解して身体に覚えさせるのよ、意識を失っても勝手に身体が動いてしまう位にね」

「ただだけやるのよ……」

「でも実際それくらいやらなきゃ精鋭にはなれないわ。さて、まだまだあるからさつきと行くわよ。次に重要なのは集中力ね、人間の集中力は長く持つても15分程度しかな

いの。昼夜を問わず、10〜15分のローテーションで監視を交代したり目を休ませたりしなきゃいけないわ。監視方法を複数組み合わせることで目の疲労や集中力の低下を緩和することも出来るわね。指揮官の体験談になるけど、アフガニスタンのLP/O Pで夜間の監視任務に就いた時、『IS(白)↓肉眼(双眼鏡)↓NVG↓肉眼(双眼鏡)↓IS(黒)』と言ったように機器や表示モードを切り替えて監視を行って目を休ませたりしてたそうよ。それに機器によつて見え方が違うから監視方法を複数併用することはより詳細な監視を行う上でも意味があるの。☒白サーマルじゃ気付かなかったけど、黒サーマルにしたら潜んでいる敵を発見出来た☒なんてことも決して少なくないわ。私達は人間よりも長い集中力を発揮出来るけど、無限に続くわけではないわ」

「監視という点に於いてもメリットがあるならやらない理由はありませんよね」
「そうね。まあそういつた機器が故障してる場合は肉眼でやるしかないけどね。次に気を付けなきゃいけないのは『薄明時の監視』よ。日没・日出時：特に日没時ね、この時間帯での監視は被発見率が高くなるから注意しなさい。太陽が鋭角に位置するから対物レンズが反射したり、影が長くなって動きが目立ちやすくなるの。だからこの時間帯は動きを最小限に抑えたり、場合によっては監視を中断するとか臨機応変に対応する必要があるわね。予め太陽光の影響を受けにくい位置を把握してそこに移動するのも良いわね」

「そっか太陽の傾きによる影響も考えなきゃいけないのね…いったいどれほど考慮しなくちゃいけない項目があるのよ」

「細かいことまで言えば無限にあるわよ。勿論その全てをクリアするのは実質不可能だけれどね。だから状況に合わせてどれを考慮してクリアするのか、その判断能力も問われるわ。そしてそんな項目の内の一つが『夜間に於ける監視の注意点』ね。スナイパーは高度に訓練されるとは言え生身の人間よ、夜行生物のような夜間視力があるわけじゃないの。勿論私達戦術人形は夜間視力を機能によってカバー出来るけど、一応知っておきなさい。指揮官と一緒に任務に出るなら彼女が人間だつてことを理解しなくちゃいけないからね。それで、夜間の監視なんだけど事前に暗さに目を慣らしておく必要があるの。日中にサングラスをかけるとか日没後30分間暗闇に目を慣らす作業に徹したりね。指揮官がサングラスを着用しているのにはこうした理由もあつたりするわ。こうしたものは『Night Adaptation 夜間適応』と呼ばれるわね」

「そう言えば指揮官って人間だったわね…つい忘れそうになるわ」
「確かに…」

「その気持ちは分かるわよ、私も最初の頃はただの人間の指揮官にボコボコに…つてこれは今は関係ないわね。次は…『夜間照明』かしらね。とは言えこれはミリタリースナイパーにはあんまり関係ないわ。法執行機関のスナイパー、俗に言う『ポリススナイ

パー』は自身の位置を暴露しても問題ない場合に於いてハイパワーライトを使用することがあるわ。でも私達ミリタリースナイパーがこれを利用することはまずないわね、この基地で言えばP S G—1と訓練中の花梨しか使わないと思うわよ。I Rフィルター（可視光を赤外線に変換するフィルター）を装着すれば目視ではこの光を目撃されたりはしないでしょうけど、敵がN V GやI Sを持つてる可能性を考慮すると自ら光を発するような機器の使用は使わない前提でいる必要があるわね。例外は夜間に手元を照らす小型ライトね、これも使うのは最低限にしておきなさい。街灯や建物から漏れる光、戦火による灯りなど利用出来るものは何でも利用しなさい。それとこれはかなり限定的なんだけど、スナイパーチームはM 3 0 1 A 2 照明弾による支援を要請することも出来るわ。これは8 1 mm 迫撃砲から発射される照明弾で5万キャンドルパワー（≒5万カンデラ）の光を6 0 秒以上発してくれるものよ。因みに車のヘッドライトが凡そ1 5 0 0 0 0 カンデラね」

「かなり明るい光を発するのね…でもそれって」

「ええ、グリフィンのみならず正規軍からの認可を受けてるP M Cでは厳しいわね。まあバレなきや良いんだし、使用せず任務に失敗して多大な損害を出すくらいなら軍規を破る方が良いこともある…らしいわ。私にそんな経験はないけれど、指揮官にはあるらしいわね。戦友が目の前で軍に所属してた政治家の息子を撃ち殺すところを目撃し

たけど、それを証言せずにかばったことがあったそうよ。その息子がどうしようもない屑だったかららしいけど……今ではその時のことを後悔してるとも言ってたけどね」

「あの指揮官が後悔……？ 普段の様子からはちよつと想像しにくいですが……」

「確かにね……でも指揮官の人生はかなり劇的なものよ。私も一部しか聞いてないけど、そもそも軍属になった経緯からしてやるせないしね……さて、そんなことは置いて授業の続きをやるわよ。今ので監視のテクニックについては粗方説明し終えたし、次は『敵狙撃兵の搜索』に関して教えるわ」

「所謂カウンタースナイプってやつね」

「そうよ。敵狙撃兵の搜索技術『スキヤニング・テクニック』は裸眼でも各種光学機器を使っても基本は同じだけど、最初は視界の広い裸眼からやって次第により細かな判読が可能な光学機器という順番で行うわ。ここら辺はさっきの監視と同じね。まず裸眼で目に付く物体の動き、反射、影なんかを『左から右へ、そして右から左へ』目を動かして搜索しなさい。この動きには神経生理学上の理由が存在するわ。現代人は本やPC等の画面を左から右へ読み進めることが多いの（今の貴方のようにね）。この行動に脳が慣れてしまつてるからもしも常に左から右へだけで搜索をしてしまうと、文字を読んでいる時のように流し見になって僅かな変化や異常を見逃してしまう可能性が高いわ。慣れていない右から左へにも目を動かすことでより丁寧なスキャンが可

能となるわね。因みにこれに関しては私達も無関係ではいられないわよ。私達人形には『最適化』という機能があるけれど、これが人間という神経生理学上の『慣れ』と同じように作用して時として悪影響を及ぼすことがあるの。だから私達も人間と同じように『左から右へ、そして☒右から左へ☒』という動きをすることを推奨するわ。それとスキャンをしてる時に一点へ集中しすぎて視野が狭まり、『トンネルビジョン』とならないよう注意しなさい。こうして裸眼での索敵が終わったら今度は光学機器を用いて同じように『左から右へ、そして☒右から左へ☒』とスキャンしていくの」

「これは…ちよつと意外な注意点ですね。まさか最適化がそんなところで悪影響になるなんて…」

「そうね、これは教えてもらわないと気付きようがないわね…このことを指揮官は把握してるのかしら?」

「うちの指揮官は当然把握してるわ、そもそもこの欠点に気付いてIOPに報告したのが彼女なんだもの。スナイパーとしての経験が気付かせたみたいね。それからは一応IOPとしても注意点として挙げてはいるけれど、あんまり大々的に言うとか敵に弱点を知らせることになるわ。だから細々と伝えるしかなくて、グリフィン内でこのことを知ってる指揮官は残念ながらそう多くはないわね」

「そうよね…ちよつとこれからは気を付けていこ」

「私も、気に留めておきます」

「そうして頂戴。次に教える、そして同時に注意しなくちゃいけないのは『光と影』ね。光は物体を照らしてその姿や色を明らかにするわ。最も代表的な光源は太陽ね。でも太陽は時間、季節、緯度、雲量等によって変化して物体の表面の色や見え方に影響を及ぼすからスナイパーは様々な環境を経験してこうした変化を理解する必要があるわよ。そして光が生み出す影はかなり重要よ、時として影は物体そのものよりも存在をハッキリと映し出すことがあるわ。特に高い位置から眺めた時に感じる人が多いわね。搜索する際には敵狙撃兵そのものだけじゃなくて影にも注目してスキャンしなさい。そしてこれは同様に私達側にも言えることよ。自分の身を隠せたとしても影の隠蔽を忘れてしまうことは多くあるわ。敵の作る影を発見できれば有利な状況を得られるし、こっちの影を発見されれば不利になるわよ。そしてこうした影は太陽の移動や光源の有無によって変動することも決して忘れないで。ハイドを形成した時は大丈夫でも時間が経つてみれば影がハイドの外にクッキリ浮かび上がった、なんてことは良くあるしね。ハイドの位置決定や構築には時間の経過による影の変化も考慮に入れなさい。特に練度の低い兵士は自身の影の存在に無頓着なことが大多数よ。身体の遮蔽と隠蔽のみに気を取られて影の存在を忘れちゃうのね。グリフィンでも基地によっては影に関する教育・訓練を受けてない子達もいるでしょうしね。民間からの採用で指揮官に

なった人が務める基地では多い傾向にあるわ、そうした基地の人達と作戦を共にする時には教えてあげなさい。それと鉄血だけど、この影に関してには狩人ハンターですら無頓着ね。だから影を利用し、影を隠すこつち側からすれば大きなタクティカル・アドバンテージを得られるわ。敵が無意識に投影してる影を利用して有利な戦況を作つてあげるの、そうすればこつちの被害を小さくしてあつちの被害を大きくすることも容易よ。それに照明弾の存在も忘れてはいけないわ、敵狙撃兵の位置が判明していない時に照明弾を撃ち上げてその際に出来る影から位置を割り出すなんてことも出来るの。それに照明弾で照らせばちよつとした動きでも視認性が高まるわ、だから逆に敵が照明弾を使用した場合には絶対に動いちやだめよ。遮蔽物がなくて突つ立つた状態だったとしても、絶対に。当然、こつちが照明弾を使う際には自分の照明弾で自分の影を生み出さないように細心の注意を払いなさい。あとこれは限定的ではあるけれど、敵がスコープを覗いてる時に強い光を照らすことで目を潰すような使い方も可能ね」

「影ね…これも言われてみれば当たり前のことだけどやっぱり気付きにくい事柄よね」
「意識しなければならない点が多すぎますが…逆に言えばそれだけ敵の搜索に役立つ項目が多いということですよね」

「正しくその通りよ。そういう点では『動き』にも着目するべきね。人間と同じく、私達の目は昼夜を問わず無意識的に『動く物体』を目で追つて注視するように出来てるわ。

これは利点でもあって欠点にもなるわね。スナイパーは必要な物体のみに視線を向けられるように日頃から訓練する必要があるので、そうしないと葉の揺れなんかに気を取られてその一瞬で見失うこともあるわ。不自然な揺れならともかく、風に揺られているだけの動きに翻弄されないようにしなさい。敵狙撃兵捜索に於いて考えるべき物体の動きは『プライマリー・ムーブメント』と『セカンダリー・ムーブメント』の2点ね。プライマリー・ムーブメントは必ず○敵狙撃兵の動きそのもの○よ。セカンダリー・ムーブメントは□ターゲット・インディケーター（目標の存在を示すもの）□で、例えば『茂みに隠れた敵狙撃兵の動作によって周囲の草木が揺れている』なんかの状況を指すわ。動く物体を見付けた際にはそれが自然なのか、敵性存在による動作なのかを見極めなさい。じゃないと敵狙撃兵が囹の物体を使用してこっちの気を逸らしてその隙に離脱するかもしれないわ。勿論、逆にこっちがそれを利用するのもありだけどね。これらの可能性を考慮してスキヤニングは慎重かつ正確に、そして迅速に行わなければならないわ」

「これは分かるけれど…実際に戦場で役立てるってなると難しそうね」

「そうね、日頃の訓練がものを言うわ。そこら辺はこれからやるとして…次は監視して得た情報を本隊に伝える時に重要なもの、S・A・L・U・T・Eの6項目からなる『S A L U T E リポート』についてよ。これは情報を整理して送り忘れを無くするためのもの

で、敵の状態を6項目に分けてその頭文字を組み合わせたものね。因みにSaluteってのは敬礼って意味よ、語呂合わせになってるわ。SALUTEリポートは歩兵の基礎技術を試されるEIBの必修科目の1つで、歩兵全員が取得するべきものよ。歩兵の精鋭たるスナイパーともなれば寝起きだろうと泥酔状態だろうと6項目を暗唱出来る位に訓練されるわ。指揮官曰く『最もシンプルで分かり易い方法だ、今後も不動不変だろうぜ』とのことよ」

「…声真似、似てないわね」

「う、うるさいわね！良いから6項目を見ていくわよ!!」

(ワルサーさん可愛い…)

「と、とにかく！1つ目のSは『Size』よ、これは敵部隊の規模と人数のことね。監視をして敵を見付けたらまずは発見した敵集団の人数を記録するわ。そのまま人数を記入しても良いけれど、軍隊の単位で報告するのがベターね。例えば『PLT size, twenty plus.』とかね、これは小隊規模・20名以上って意味よ。次に車両や野営設備の数なんかも報告する為に記録するわ。視界に見えてるのが20人だったとしても車両やテントの中に人がいる可能性があるからね。2つ目のAは『Activitry』、活動状況という意味ね。これは敵部隊が何をしているのかを読み取る物ね。こうした行動を読み取るには歩兵としての経験が求められるわ。徒歩で移動中

なのか、陣地を構築中なのか、休憩中で20%セキュリティ(5人に1人が警戒態勢)なのか、撤退準備中なのか…敵が今何をしているのかをしつかりと報告する必要があるの」

「ふむふむ…確かに分かりやすいですね」

「敵の規模と人数を把握して何をしてる最中なのかを記録する…これなら最初から出来そうだわ」

「まあ出来ることは出来るわね、どれだけ精密に迅速に出来るかは別として。さて3つ目のLは『Location』、これは位置ね。軍隊では位置を必ず座標(緯度、経度)で示すわ。以前は地図とプロトラクターで8桁の数字を割り出してたけど今はGPS機器によって10桁の数字を割り出すわね、ここら辺は以前に説明した通りよ。8桁なら10m四方の範囲を示し、10桁なら1m四方の範囲を示すわね。敵集団の座標だけじゃなくて滑走路や軍事施設、橋やトンネルの入り口とか目印となる構造物や地形があるなら合わせて書き込んで良いわね。因みにうちではちよつと特殊な座標の示し方をする時もあるけれど…それは実践の方で教えるとするわ。話に聞くとところだとあの時の任務で指揮官とM200が使ったそうね。4つ目のUは『Unit/Uniform』ね、意味は部隊・制服よ。敵兵が着用してる征服、付属する階級章や部隊章、更に旗や車両の番号から敵が所属する組織や部隊(連隊・大隊・中隊etc)を可能な限り

識別するわ。それと化学防護服のような特殊装備を備えている場合も合わせて報告しなさい。この項目や後で説明するEの項目から分かるけど、スナイパーは敵部隊に関する情報も持ち合わせていなきやダメよ。情報部隊に属する将兵…うちで言えばMDRや57なんかね、彼女達は『Weapons Equipment and Organization (敵の武器・装備・組織) 課程』を学んでいるけれど、スナイパーは同様の知識を短期間で習得しなきゃいけないいわね。MDR曰く『プラモデルとか作つてると結構分かって来るからお勧め』らしいわね」

「あら今度は声真似なしなのね、残念」

「ぶっ飛ばすわよ?」

「ヒエツ…」

「ま、まあまあ…これに関してはしっかりと勉強しないと出来そうにないですね」

「そ、そうね。取り敢えず続きいくわよ。5つ目のTは『Time』よ、読んで字の如く日時ね。目撃した時間と日付を記入するわ。簡単に聞こえるかもしれないけど、そう単純なことじゃないわよ。というかSALUTEの中で最もミスの多い項目かもしれないわ。私も昔はこの項目は繰り返し確認したものよ…全国が1つのタイムゾーンに存在していて時差のない国、例えば日本ね。そういった国に住む人には馴染みがないでしょうけどアメリカやロシア、ヨーロッパ圏では異なるタイムゾーンが存在していて時

差があるわ。アメリカで言えば本土だけでも4つのタイムゾーンがあるし、アラスカやハワイを加えると更に広がるわね。ハワイとワシントンでは6時間も差があるし、サマータイムが適用されればその都度1時間ズレるわね。加えて様々な国や地域へ派遣されることを考えれば地球上全てのタイムゾーンを把握する必要があるわ。こうしたタイムゾーンの混乱を避けるため、日時の報告には『スルータイム』を使用するのよ。ズルータイムに関しては指揮官のレンジカードの授業でやったわね？所謂グリニッジ標準時のことよ。それと午前とか午後で分けずに必ず24時間単位を用いなさい。例を挙げるわ、例えば『2062年12月20日午後6時45分』だったら無線越しに報告する場合『1845 Hours Zulu, December twenty two』よ。そのまま訳せば『18時45分ズルー時間、12月20日、2062年』となるわ。記入する際には『201845DEC2062(Z)』ね、これは『20日18時45分12月2062年(ズルータイム)』よ。この基地の試験でもここを間違えたことで落とされる子達を何人も見てきたわ、私も『こんな下らないミスで落ちて堪るもんですか！』って自分に言い聞かせたものよ：懐かしいわね。訓練課程でミスするくらいなら良いんだけど、実戦で間違えれば甚大な被害が出るわ。十分に注意しなさい。最後に6つ目のEは『Equipment』ね、そのまま装備って意味よ。装備は☒武器・車両・航空機・装備☒の4点を基本として報告

するわ。武器は歩兵小銃の他にも携行対戦車兵器（RPG-7とか）、携行対空兵器（SA-7ストレラとか）などを確認しなさい。特に対戦車兵器と対空兵器の有無は非常に重要だから正確に報告するのよ。車両は戦車や装甲車、自走対空機関砲なんかね。航空機は攻撃・輸送ヘリコプターや固定翼機などよ。航空戦力の有無は陸上部隊にとつて最重要項目ね、特にMi-24とかSu-25みたいな地上攻撃機は味方にとつて死活問題になるわ。機種と機数、出来れば翼下の搭載兵装まで識別するように努めなさい。装備は例えばパラシュートの有無とかね。空挺能力が有るか無いか分かるだけじゃなくて、その敵集団が精鋭かどうかまで把握出来るのよ。何処の国でも空挺部隊はエリートだし、最精鋭部隊であることも多いから特に注意しなさい。それとボートなんかを持っていれば渡河能力を持つてることも分かるわね。補給物資や補給関連装備の状況からはその部隊の戦闘継続能力が推測出来るし、高度な通信システムを持つてるなら敵のC2能力（指揮通信能力）が強固であることを示すわね。こちら辺は鉄血よりも他PMCや色んな団体の過激派、強力な力を持つ麻薬カルテルやその他犯罪組織と相対する時に注目するポイントね。それと考えたくはないけれど…正規軍と戦う際にも考慮しなきゃいけないわ」

「正規軍って…彼らと戦うなんてあり得るのかしら？それにもし万が一戦うとしても勝てるの？」

「可能性がないとは言えないわ。この荒廃した世界を統括してるような軍隊よ、一枚岩なわけがないし状況によつてはグリフィンを躊躇いなく切り捨てても不思議はない。それと勝てるかどうかだけど…なんとも言えないわね。正規軍の一般部隊はこの基地の試験突破組と同等の戦闘力を持つてるし、規模もうちより大きいわ。正面からぶつかれば間違いなく負けるわね。でも指揮官は隠密部隊で精鋭中の精鋭、馬鹿正直な戦い方はまずしないでしようし私ですら知らない切り札を持つてるっぽいのよね…クレアとイーサンだつて同じ部隊の精鋭だし、クレアは指揮官同様何か持つててイーサンはアメリカ空軍の出身よ。裏で戦闘機の開発とかしてるかもしれないし、やってみるまで分からないつてところかしら。それに指揮官はその『方が一の事態』に備えて準備もしてるから一方的にやられる結果にはならないと思うわよ。それでも勝てる見込みは少ないけどね…」

「正規軍との戦闘を考えてる基地つて…かなりやばい基地に来たのでしょうか…」

「やばいんじゃないかって思慮深いと言つて頂戴、世の中何が起こるか分からないんだから常に最悪の事態を想定して準備しておくのは普通のことよ」

「それは、そうかもしれないけど…はあ、つまり私達も正規軍と戦えるレベルにまで鍛えられるつてことね」

「そういうことよ。SALUTEリポートに関しては以上ね、勿論これらはあくまでも

単純な例であることを忘れないで。実戦ではより複雑な状況を報告しなきゃいけない場合も多いわ、これら6項目の内容について視認したもものから正確な意味を読み取って報告することが出来るのもスナイパーの強みよ。これを上手く利用することで少ない力により大きな打撃を与えることが出来るし、こっちの被害を最小限に抑えられるわ。つまりスナイパーの監視は味方部隊の命を握っている、そのつもりで訓練に臨みなさい」

「りよ、りようかい！」

「わ、分かりました！」

WA2000の凄味を帯びた視線で貫かれたFN49とモシン・ナガンは背筋を伸ばして返事をする

ともあれ今回、というより今日の授業はこれにて終了である

残った授業時間でWA2000は今日1日の振り返りを行い、その都度2人の質問に答えて理解を深めさせるのであった

「こいつは…ひでえな」

「せやろ？せやけど重要なんはそこやないんや、これを見てくれんか」

「これは…なるほど、そういうことか。お前が私を呼んだのはこいつが理由だな？」

「せや…悔しいけどウチらにはこれの意味が分からん。犯人に繋がるもんってことは分かるけどそれ以上は無理や」

「だろうな。しつかしこいつは…厄介な事件だけ、つたく…」

S09H基地の担当する街の古書店にてスカーレットとガリルは血塗れになった書物庫に転がる死体を見ながら何やら話し込んでいた

「そう言うってことはアンタには分かるんやな？」

「ああ、分かるぜ…分かりたくなかったがな」

「ほな聞かせてくれんか、この事件はいつたいたい何なんや」

「こいつはな…『悪魔の詩殺人事件』だ」

悪魔の詩殺人事件

「それで、いったい何が起きたってんだ？」

「起きたのは殺人事件です。ですがどうも普通の事件ではないようで…指揮官様ならなにか分かるのではないかと、隊長が」

「なるほどな、見てみなきゃ分からねえってこった」

時間は少し遡りガリルより通信が来た直後のこと

スカーレットは丁度迎えに来た79式の運転する車に乗り込み、何があったのかを聞き出していた

しかし詳細は見てもらった方が早いし、自分達にもアレが何なのか分からないため79式は言葉を濁していた

「取り敢えず確認だ。事件が起こったのは私の管轄街『イシス』、その古書店の店主が何者かに書物庫内にて殺害された。現場には凶器と思しき大振りのナイフが男の胸に突き刺さっており、そこには同時に『ある本』が縫い付けられるかのように貫かれていた…だな？」

「はい。それに遺体の損傷も酷いですね、直接の死因となったのは首の傷です。左に

2ヶ所、右に1ヶ所傷があり双方共に頸動脈・頸静脈を切断するほどの深さとなっていました。胸へ本と一緒に突き立てたナイフは殺害した後にやったものと思われず」

「残酷な殺し方しやがる。しかし…まさかな」

「何か心当たりが？」

「まあな。だが現場を見ないことには断言できねえ、とにかく急いでくれ」

「分かりました」

79式の言葉を聞き、何かに思い至るスカーレットだが今の段階では何とも言えないため口にするのを躊躇った

遺体以上に確かな情報を伝えてくれるものはない、兎にも角にも街へと急ぐのであった

「到着しました、現場げんじょうはここです。取り敢えず一般人が立ち入れないように警備隊に封鎖を依頼しておきました」

「分かった、行くぞ」

「ハッ」

数十分ほどかけて到着した2人はテープで封鎖された区画へと接近していく

現場に近づく彼女達にイシスの警備隊に所属する戦術人形の1人であるFALが気付き、声を掛けてきた

「ちよつとそこの貴女、ここは今立ち入りが…つて」

「S地区総隊司令官のスカレットだ。LSPのガリルより要請を受けてきた、入って良いか？」

「ええ、構わないわ。どうぞ入って頂戴」

「感謝する。引き続き封鎖を頼んだぞ」

「イシス警備隊の名に懸けてネズミ一匹通さないわよ」

「頼もしい限りだ、んじゃ失礼する」

FALの許可も取り、現場となった古書店へと踏み入ったスカレット

79式は先ほどのFALと一緒に現場周辺の封鎖と別の事件が発生した場合の備えとして外に残った

古書店へ入ったスカレットがまず感じたのは強烈な血と腐敗した肉の匂いであった

普通の人間であれば間違いなく嘔吐するような状況だが彼女は一切意に介さずに歩を進める

「お、やつとこさ来おったんか。待つとつたで」

「待たせてすまねえな。んで、遺体は何処だ」

「こつちや、付いて来い」

中ではガリルがスカーレットのことを待つており、到着した彼女を書物庫内へと案内する

ガリルの後に続いて入った書物庫は一層血と肉の匂いが充満していた

そんな中スカーレットの目は被害者となつた男性の姿を捉える

「なるほど、確かにこいつは酷えな」

「せやろ？よつぽど強い恨み買つとつたんやろな。でも重要なんはそこやない、これ見てみい」

「んだこれ？……ははあ、なるほどなあ」

遺体の損傷具合から犯人が被害者に強い恨みを持つていたことが窺えるが、ガリルの言葉に従つて目を動かした先には血文字があつた

血が垂れて読みにくいと書いてあるのが分かつた
るのか、そしてなんと書いてあるのが分かつた

しかしガリル達にはそれが読めなかつた、彼女達はスカーレットの意向により全員が4ヶ国語以上を習得しているがそれでも取得言語の中に該当するものがなかつたのだ

それもそのはず、ここに書かれていたのはアラビア語であり今の世の中で見ることは

殆どない言語である

スカーレットの基地でもこの字を読めるのは数少ない、代表的な人形で言えばミレニアム8のWA2000とHK416、後はM19くらいであろうか

その上血が垂れているともなれば字が崩れて尚のこと読みにくい、分からないのも無理はないだろう

「流石、アンタには分かるんやな。それで、これは何て書いてあるんや？」

「ちよいと待ちな、血が垂れてて読みにくい。なにに……『神を冒読せし愚か者に鉄槌を』か。これだけでも事件の概要と犯人像が分かるが……ガリル、その男に刺さってる本を取ってくれねえか」

「ちよい待ち、にしてもこの店主は何かの神を冒読したんかいな。何をどないしたらそんなことになるんやか……つと。ほい」

「サンキュ。どれどれ……あー、やっぱりそうか。そうか……」

ガリルから受け取った本の無事な部分を探して読んだスカーレットはその顔を歪めて溜息を吐く

その様子に事件の真相が分かったのだと察したガリルは彼女を問い詰める

「その様子やと分かったみたいやな。悔しいけどウチらには何のこつちや分からん、教えてくれるか？」

「ああ、そうだな……こいつは、『悪魔の詩殺人事件』だ」

「……なんやそれ？悪魔の詩？」

「ああ、簡単に言っちゃまえば宗教絡みの殺人だな」

「宗教か……ややっこしいことになりそうやな」

「全くだ、つたく……」

悪魔の詩殺人事件

これはとある小説『悪魔の詩』を巡った殺人事件である

悪魔の詩はイギリス人のサルマン・ラシユデイ氏が手掛けた小説であり、イギリス国内ではいくつかの賞を受賞しているほど優れた文学作品である

この小説はイスラム教の開祖、ムハンマドの生涯を題材に書かれたもののだが、その中にムハンマドが神の啓示を受けて書いた聖書『コーラン』の中に悪魔の言葉が書かれているという挿喩や、彼の12人の妻と同じ名前の売春婦が登場したりとイスラム教を侮辱するような内容が含まれていたのだ

その為この小説は多くのイスラム教徒から激しく非難されており、この本が発行された1ヶ月後……当時イランの最高指揮者であったホメイニ師によりフアトワーが発令される事態となった

フアトワーとはイスラム社会に於いて最高指揮者が出す布告のことであり、これは法

律と同等の力を持つものとなる

そしてこの時出されたファトワーは、この悪魔の詩がイスラム教への冒瀆であるという理由から『著者であるラシユデイ氏及び出版に関わった者全員に対する死刑宣告』であった

この宣告を聞き入れて関係者の死刑に成功した者には約3億6千万円相当の報酬が与えられることも決まり、何人も人が殺害される事態になつてしまった

更に最悪なことにファトワーは発令した本人にしか取り消すことが出来ないのだが、ホメイニ師がその年の6月に亡くなつてしまったことからこの宣告は永久的に有効なものとなつてしまったのである

つまりこの作品の出版に関わった人物達は永遠に命を狙われ続けるといふことだ

著者であるラシユデイ氏は多額の資金を投じて護衛を固めたおかげで殺されることはなかったものの、多くの人物が殺害されたことに変わりはなくその中には日本人も含まれている

その結果各国ではこの本の発行を禁止するなど対応策を講じることもなつた
そして今スカーレットが手に持っている本、それが『悪魔の詩』であつたのだ

「要するにこの店主はこの本を販売しようとしてもうたが故に殺されたつちゆうことかいな」

「恐らくはな。ったく、今になってこれ絡みの殺人が起こるなんざ考えてもみなかったぜ……」

「…店主はこのこと知つとつたんか?」

「さあな。普通は知らねえと思うが…こいつは結構広い分野に造詣が深かった、もしかしたら知つてたかも知れねえな」

「なるほどなあ…ま、どっちでもええか。死んでもうた以上はもうどうにもならんし。ウチらに出来るんは犯人捕まえて相応の罰を与えることだけや」

「だな。取り敢えずイスラム教徒であることは間違いないだろう、この本と字もそうだが殺し方もイスラム式とか呼ばれてる方法だ」

「そないなことまで分かるんやな。事件の概要が分かったことやしそろそろ仏さんを休ませたらか」

「そうだな…安心しろ、絶対に仇は取ってやるからな」

スカールレットは被害者の目を閉じさせてやりながら優しく声を掛けると、ガリルの持つてきた遺体収容袋にその身体を入れていく

後の処理をLSPとイシス警備隊に任せることにした彼女は79式の運転していた車に乗り、自分でハンドルを握ると基地へ向けて発進した

「こちらスカールレット。MDR、任務だ」

『ん？なんだいなんだい、個人的に任務をくれるなんて珍しいじゃないか』

「ああ、内容を鑑みるにお前が一番の適任だと判断したからな」

『嬉しいこと言ってくれるねえ！それで、どんな任務だい？』

「今日街で起こった事件については知ってるな？」

『もちもち、悪魔の詩殺人事件でしょ？まさか今の時代に起こるなんてねえ』

「情報が速すぎんだろ…まあ良い。それで犯人をとつ捕まえることになるわけだが、誘き出しを行う」

『ほむほむ…要するに犯人が激怒するようなことを掲示板にでも書き込んで誘導すればいいわけだね？』

「その通りだ。そういうことに關してはお前が一番だろ？」

『当ったり前よ！幾多の掲示板を荒らしてきたこの「荒らしのMDR」に不可能は無いからね』

「…その2つ名はダサくないか？まあ兎に角これから送る座標に誘導するような書き込みをしろ、相手が敬虔なイスラム教徒なら絶対に喰いつく」

『りよーかい！…でさあ、しきか〜ん♪』

「分かつてる、捕らえた犯人はお前の好きにしろ」

『やりの！俄然やる気が湧いて来たよ!!それじゃ、早速書き込むね。チャオツ♪』

「…元気の良いやつだな」

通信を終えたスカーレットはMDRの様子に若干呆れつつもどうでも良いかと思うに思考を切り替えて車を走らせる

考えているのはFN49とモシン・ナガンへの授業と訓練内容に関してだ、彼女の頭にはもう先程の事件のことなど微塵もなかった

(……)か?随分とみみっちい小屋だが……まあいい)

草木も眠る丑三つ時、顔を歪めて鼻息を荒くした男が森の中にポツンと立つ小屋に足を運んでいた

彼はイシスでの殺人事件の犯人であり、MDRの書き込みに激怒してここへと誘導されてしまったのであった

そこに待つ少女が自分を遥かに凌駕する狂人であることも知らず……

「お、やっと来たね♪待ちくたびれたよお」

小屋の戸を開けると中には白い髪をして紅と蒼のオッドアイをした少女がいた。着ている服装はフリルの付いた可愛らしい白のワンピースで、何か武器を隠し持っている気配はない。

「…てめえか？あの巫戯けた書き込みをしやがったのは……」

「ああ、そうだよ。あれを書いたのは何を隠そうこの私さ」

少女はおどけた様にウインクをしながら男の言葉に答える

その様子に我慢の限界を迎えた男は血管を浮き上がらせながら少女へと掴みかかった

「この痴れ者があ!!!我らの神を冒瀆する者は何人たりとも許さん!!」

「おおっと?!いきなり掴みかかって来るなんて、随分積極的だねえ♪」

「クソ、ちよこまかと…逃げんな!!」

「何を言ってるのさ、私は逃げてなんていないよ?」

「はあ!?!…つんだこれ、クソ!!!」

暴れまわっていた男だが、その身体が急に動かなくなった

どれだけ暴れようともビックともしない、怒りと焦りで男は完全にパニックになっていた

そんな男に少女…MDRはゆっくりと歩み寄る

「あれれえ、急に大人しくなったけどどうかしたのかなあ〜?」

「このクソアマが!てめえが何かしたんだろ!!」

「おいおい、言いがかりはやめてくれよ。って言いたいところだけど流石に無理があるよね」

「離せ、この…っ!」

「無理無理、それは目に見えないほどに細いけど蜘蛛の糸を参考に作ったから強靱度は半端じゃないよ」

「糸だ?!…クソ、最初っからこのつもりで!!」

「当ったり前じゃくん!いとも簡単に引っ掛かってくれたね、そういう愚かなところ…私は大好きだよ?」

「気色悪いことを…!!」

男は必死に抵抗するがMDRの操る糸に絡め取られた状態ではどうにも出来ない

MDRは予めこの小屋の中に糸を張り巡らせており、男を挑発して暴れさせることでその糸を身体に巻きつけさせてから更に糸を操作して雁字搦めに縛り上げたのだ

そのまま男を椅子へと座らせ、その上から糸で縛り上げるとMDRはその顔を恍惚へと染めていく

「ふふふ……これから君を殺すんだけど、その前に指揮官からの伝言を伝えるね?」

「指揮官……? てめえグリフィンの差し金か!! クソ、人類を守る人形がんなこととして良いと思ってるのかあ!!!」

「おお、凄い怒気だねえ♪早く始めたいから取り敢えず伝言を伝えちゃうね! んっん
…『幾ら何でもてめえはやりすぎた。誰にも迷惑を掛けていない無辜の民を残酷に殺したお前の罪、とくと悪い知れ』だそうだよ」

「あいつは神を侮辱した! それは許されざる——っ!!」

男は最後まで言葉を紡ぐことが叶わなかった

突然MDRが男の顔を両手で挟んで万力のように締め付けてきたのだ

「ああ、早く絞って噎りたい……でも我慢しなきゃね。折角だしゆつくり楽しまなきゃ
…ああ、それと指揮官が『宗教とは元来人を救うもの。救われるべき人を無残に殺したお前は最早神の徒ではない、悪魔の僕だ。神の庭を荒らした愚か者を断罪する』とも
言ってたよ。これに関しては私も同意だね、ってことで君をこれから……頂くね?」

そう言つてニヤリと笑うMDRは大きく口を開けて男の顔に近付ける

そしてそのまま……左目に噛みつき喰い破った

「っ!!!」

「あつはあ……♪この舌に触れる人肉と眼球の感触が堪らないよお……ほら、見て?」

MDRは声にならない叫び声を上げる男の右目を無理矢理開いて口の中を見せると咀嚼し始めた

ぬちや、ぐちゅ…と不快な音を立てながら崩れ、混ざり合う肉と皮と眼球をたっぷりと見せつけながら味を楽しむ

数分ほども掛けて咀嚼したMDRは口を閉じてそれを飲み込む

白い肌をした彼女の頬に指す僅かな赤、飲み込む時にキュツと動く喉、息が詰まるのか少しだけ漏れ出るちよつと苦しそうな吐息と声、そして悦に入った表情…異様な光景だというのに彼女の所作には色気があり非常に煽情的であった

しかしそれを見て劣情を催せるほどの余裕は男にはない

そもそもこの状況下でそんな気持ちを持てる人物などほぼいないであろう

「ンクツ…あ、ああ…♪とおつても甘くて美味しいよお…もつと、もつと頂戴？」

顔の4分の1を食い千切られ、肉が剥き出しになっている男は抵抗しようとするも縛られている上に激痛と恐怖で身体が動かない

そんな男の状態を知ってるMDRは次々と身体の部位を噛み千切っては男に見せながら咀嚼していく

指を噛み千切れればその断面を必死に舐ることも忘れない、はみ出た骨は前歯でキリキリと少しづつ削り取って舐りまくる

肉や血が綺麗に舐めとられた骨はその辺に捨てて次の部位に移行する

男が出血多量で意識が朦朧気になってくれば、用意しておいた輸血パックを繋いで補給することで意識を保たせる

やがて男は達磨状態になり、腹部から内臓が垂れ出て顔も半分以上がズタズタになっていた

「流石にもう限界かい…？そっか、寂しいね…ここまで気持ち良くなれたのは久しぶりだしもうちよつと楽しみたかったんだけど、仕方ないね。付き合ってくれたお礼に、ちよつとだけ良い思いをさせてあげるね？」

そう言うときMDRは自身の唇を男のそれに合わせて舌を挿し込んだ

口内を蹂躪するMDRの舌はやがて男の舌を吸い出して自分の口内へと導く

そして——食い千切る

舌を噛み切られた男は急激に舌の筋肉が収縮して喉に詰まり、窒息する

男の顔は青ざめ、穴と言う穴から水分や糞を垂れ流しながらゆつくりと身体が腐っていく

やがて男は息を引き取り、その様子を見ながらMDRは噛み切った舌を舐めて楽しむ
「あ、おいし♪これは防腐処理して保存しようかなあ…どうしようかなあ……」

MDRは久しぶりに手に入れたこの舌をこのまま欲望に任せて食むか、それとも長く

楽しむために長期保存するのか真剣に悩んでいた

何故彼女はここまで残虐な性質を持っているのか、それは彼女の出自に関係する

この基地のMDRは元々裏ルートで犯罪組織の手へと渡っていた個体だ

そこで彼女は人形であることを活かして組織にとつて邪魔となる者を残酷に殺す役目を言い渡されていた

それもその残酷さは☒相手を食べる☒という点に置かれ、最初は嫌悪感が勝っていたが何度も何度も繰り返し返す内に次第にメンタルが壊れていった

その結果彼女は人を生きたまま喰らうことを趣味とし、喜んで食むようになった

しかしその組織はスカーレットによつて潰され、彼女はこの基地で雇用されることとなった

その際MDRとスカーレットとの間で『処刑する人間がいる場合、状況次第ではその趣味を満たす為に使つても良い』という契約が交わされている

そしてこの男が条件に合致し、MDRに捕らえさせた為にスカーレットから許可が下りてこうして趣味を思いっきりぶつけていたのだ

「次がいつ来るかも分からないし、やっぱりこれは保存だね！そうと決まれば早く帰らないと♪」

舌を保存することに決めたMDRは舌を口内で舐りながら小屋を出て持つてきた道

具で防腐処理を始めるのであった

その後男の死体は数日間晒上げの為に放置され、その後は綺麗さっぱり片付けられた
こうしてイシスで発生した『悪魔の詩殺人事件』は幕を降ろすのであった

小話その3 緊急訓練

「ずん子ちゃん、特性サラダ2つ」

「はーい、少々お待ちを」

S09H基地のカフェの厨房では1人の女性が料理をしていた

彼女の名は東北ずん子、本名はじゅん子だがずんだが大好きすぎてずん子と呼ばれるようになった女性だ

本人もそのあだ名を気に入っており、そう呼ばれることに慣れ過ぎているので最早じゅん子という名前を忘れそうになってすらいる

そんな彼女は現在スカレットが指揮官を務めるグリフィンの基地のカフェで従業員として働いており、今は店に来た客への料理を作っているところだ

とは言えこのご時世ではそんな高度なものは出せない、簡単なものにならざるを得ない

「特性サラダ出来ましたよ」

「はーい、ありがとね」

「お、出来たんかいな。ほな持つてくで」

「お願いね、茜ちゃん」

「任しときー！」

「3番テーブル片付きましたよ」

「了解よ、葵ちゃん」

ずん子と同様カフェの従業員となった茜と葵も一緒に働いていた

元々スプリングフィールド1人で回せていたカフェだ、3人も増えれば各々の負担は
かなり少なくなる

その為大して忙しくはなく、皆どこかのんびりと仕事をしていた

そんなカフェに来客を告げるドアベルが鳴った

「らっしやつせー！ってスカレットはんか、仕事はもう終わったんか？」

「いや、そういうわけじゃなくてな」

「指揮官？今はスナイパースクールの講師をしているのでは…何かあったのですか？」

「まあな…急なことで悪いんだが、ずん子と琴葉姉妹を借りられるか？」

「それは大丈夫ですが…事情をお聞きしても？」

「先程私の管轄街イシスで殺人事件が起こった」

「殺人事件やつて!？」

「ああ。それを受けてお前達に課す予定の訓練があったんだが…そいつを早めることに

した」

「私達に訓練……? どういうことなんです?」

スカーレットの言葉を受けて茜と葵は驚きを隠せていないが、スプリングフィールドは得心した表情をしていた

「なるほど……その事件、普通ではないですね?」

「そういうことだ」

「なんなん、2人で納得しとらんで説明してえや」

「そうだな、少し長くなるぞ。まずここは軍事基地だ、当然お前達を戦場に出すつもりは一切ないがそれでも何かあった時の為に拳銃くらいは使えるようになってもらわなきゃならん。だから元々そうした訓練は行う予定だったんだ。だがな、ぶっちゃけ言うところの基地所属の人間が何かの危害を加えられたことはないからそこまで急ぎでやるつもりはなかった。特にお前達はこの基地から出るとしても精々街へ出るくらいだ、あの街でこの基地の人間に手を出す阿呆はいねえ。そんなことをすればどうなるかなんて分かり切ってるからだ。だからこそ昨日の外出の際、ゆかりだけが武装することで許可を出したわけだな。しかし今日起きた事件は宗教絡みの狂人が起こしている、そういう奴にとってはこの基地の所属だとかそんなの関係ない……ターゲットとして選ばれた時点で何だろうが襲われるだろうな」

「せやからウチらにも対抗出来る手段を持たせる…」

「そうだ。これで納得出来たか？」

「理解はしました。でも…」

「怖いんですね？」

「ずん子さん…はい」

いつの間にか近付いていたずん子に聞かれた葵は素直に頷いた

彼女の思いは当然だ、今まで戦いとは無縁に過ごしてきた少女に銃を持つてというのは酷なものである

日本脱出の際にも彼女達は非戦闘員であり、その手に武器を持つことはなかった

しかしスカーレットの言うことは尤もであり、彼女達も理解している

俯いて悩む葵の手を誰かが握った

顔を上げると双子の姉である茜が決意に満ちた表情で彼女のことを見ていた

「葵、スカーレットはんの言うことは理に適つとる。ウチらも戦うとまではいかんくても自分の身を護れるだけの力は持つとくべきや」

「それは分かつてる、けど…」

「…なあ、葵。日本を出る時にさ、ウチらみたいな戦えへん人を逃がすために何人の人が犠牲になつたか…覚えとるか？」

「そ、れは……」

「もしあの時ウチらが自分を自分で護れるだけの力があれば……今ここにその人らもおつたかも知れん。こないなことを考えても意味ないってことは分かつとる、せやけどこれから先同じようなことが起つたら？また荷物になるんか？自分の所為で死んでいく人たちを見続けるんか？ウチはそんな嫌や、やから銃を持つ。銃なんて持ちたくないけど、それ以上にウチの所為で大好きな人が死んでいく方が嫌や。自分で自分で護れて、出来れば誰かを護つてやれる……そんな力を得られるゆうんならウチは受けるで」

「お姉ちゃん……」

「葵は、どないするんや？嫌なら多分強制はされへん、ていうかウチがさせへん。スカーレットはんを殴つてでも止めたる」

「言うじゃねえか。まあどうしても嫌だつてんならそれでも構わねえよ」

「ほら、こう言つとることやし……どないする？」

茜がそう聞くと葵は暫くは顔を伏せていたが、やがて顔を上げると宣言した

「私もやるよお姉ちゃん。スカーレットさん、お願いします」

「良い顔だ、覚悟は決まったようだな。ずん子も来るだろ？」

「ええ、行きますよ。すいません春田さん、少し行つてきますね」

「行つてらっしゃい、カフェのことは心配しないで良いからね」

「つてずん子さんはあの、なんやっただけ…こよゆみ？とか使えるやろ」

「強弓こわゆみよ、茜ちゃん。あれは確かに強力ではあるんだけどね…」

「全速力で走って来る相手に対して一々矢を番えて狙いを付けてつてやつてられんのか？それにあんなドデカイ弓を担いで街を歩くのも都合が悪いだろう」

「あ、そうか」

「それにあれは見た感じかなり特殊な弓だ。いずれは作るつもりだが、今の段階では同じものを再現するのはちいと厳しいな」

「そうですね…では普通の日本弓を作ることは出来ますか？」

「それならなんとかなるだろう。というか既にクレアが分析して作ろうとしている、1週間もありや出来るんじゃないか？あいつのことだし」

「末恐ろしい速さですね…」

「ま、その話は追々だな。つーわけで行くぞ！」

スカートレットは話を切り上げるとずん子、茜、葵の3名を引き連れて拳銃用のレンジがある施設へと連れて行った

歩いて数分ほどで射場へと着いた

この基地は広すぎるが故に移動に車輛を使わなければならない場合もあるが、拳銃用レンジはこの施設にもあるため移動に手間は無い

そうして宿舎に設けられた射場の中へ入るとそこにはゆかりとマキ、きりたん、そしてSAAがいた

因みに皆動きやすさを意識した服装へと着替えている

スカーレット達が入るとずん子、きりたん、茜、葵、マキがレンジから少し離れた位置に着き、スカーレットとゆかりとSAAが共にレンジの近い位置に立った

今回はスカーレットとゆかりとSAAが講師として皆に銃の撃ち方を教えるのだ

「さて、ちよいと待たせちまったかもしれないねえがこれから簡単な銃の撃ち方を教えていく」

「今回使用するはこのルガーLCR。見ての通りリボルバーですが、もしかしたらちよつと見慣れない特徴があるかもしれないねえ」

「なんやこれ…あの指でカチカチするやつないやんか」

「ほんとだ…これ撃てるんですか?」

「勿論撃てますよ。これはハンマーが露出していないタイプのリボルバーでして、メ

リットとしてはあの出っ張りが無い分何かに引っ掛かることが少なく暴発が起こりにくいこと。また引っ掛からないのでより素早く取り出して構えやすいというのもありますね」

「デメリットとしてはシングルアクションで撃つことが出来ずダブルアクションオンリーになってしまふ点だが…これはぶつちやけ気にする必要もないだろ。お前達の使用用途を考えればシングルアクションで撃つことはまずない」

「シングルアクション？ダブルアクション？」

「シングルアクションって言うのは私の銃が分かりやすいかな、見ててね。こうやって撃鉄を起こしてあげてから撃つのがシングルアクション、それに対してダブルアクションはわざわざ起こさなくてもトリガーを引くだけで撃発出来る機構のことだね」

「因みにシングルアクションを極めるとファニングショットという撃ち方も出来るようになる。SAA、やってやれ」

「良いよ。んじやあ見ててね」

スカーレットに促されたSAAがレンジに入ると自身の銃をホルスターに収めて自然体を取る

その間にスカーレットとゆかりは全員にイヤーマフを配って装着させる

彼女は銃を右腰と左腰のホルスターに一挺ずつ納めている、総装弾数は12発だ

目を閉じて俯いていたS A Aだがレンジ内のターゲットが起き上がった瞬間に目を見開き、銃弾を放った

一瞬の内に幾つもの銃声が鳴り響き、S A Aの左手に握られた半身からは硝煙が立ち上っている

ターゲットを見ると着弾を示す弾痕は一つしかない、しかし銃声は確実に一発分ではない

この一瞬で銃弾を撃ち尽くす技術がフアニングショットだ

シングルアクションの機構を利用し、トリガーを引いたまま撃鉄を手で弾く

これを何度も繰り返し返すことで連射するのである、S A Aはこの方法で12発の銃弾を1秒で撃ち尽くしてみせた

その上全てワンホールショットを決めるといふ離れ業をやったのけた

これにはゆかりも目を見開いて驚いている

「す、すごい……達人でも1秒で6発くらいだそうですのに……しかもワンホールショットとは」

「へへへへ、凄いでしょ？でもこれ位出来ないとその基地で最前線を張ることは出来ないんだ」

「未恐ろしいですね……まあ、今のは特殊な撃ち方ですし皆にやってもらうことはありません

せん」

「そりやそうでしよ…あれやれとか言われても絶対無理ですし」

「きりたんの言う通りや。んで、実際にはどないして撃つんや？」

「それに関しては私から説明しよう。ゆかりにはお手本となつてもらおうぞ」

スカーレットの言葉に従うように今度はゆかりがレンジに入る

その様子を皆で取り囲んで見る

「まずは銃の握り方からだ。リボルバーはオートマチックと違ってシリンダーギャツプがあるから一般的な握り方は出来ねえぞ」

「シリンダーギャツプと言うのはこの回転するシリンダーと銃身との間にある隙間のことです」

「シリンダーギャツプがないとシリンダーを回転させることが出来ねえからな。だがその所為で銃を撃った時に火薬の燃焼ガスが銃身の根元の辺りからも噴き出す。今回用意したのは、22LR仕様だから酷い火傷を負う程度で済むが、ものによっては指が吹っ飛ぶ威力があるから気を付けるよ。因みにシリンダーギャツプ付近に指があるとどうなるか、指の代わりにソーセージを使って示した写真がある。見てみる」

「そ、そないなことになるんか…中々にえぐいな」

「それは、避けたいですね」

「そうだな、だから握る時にはまず右手でグリップをしつかりと握りこむところまでは同じだが左手の添え方が違う。右手とグリップを下から支えるようにして握るんだ、絶対にシリンドーギャップに指を近付けるなよ。そう、今のゆかりみたいに握るんだ。次は構え方だな、お前達の使用用途を考えりやしつかりした構えなんてしてる場合じゃないだろうがそれでも基本的なことは知っておいて損はない。今から教えるのは最も基本的な拳銃の構え方、『アイソセレススタンス』だ。上から見た時に身体と腕のラインが二等辺三角形になることからこう呼ばれている。射撃方向に対して身体を真正面に向けて腕も真つすぐ伸ばして構える。この時腕を伸ばすことに意識を持っていかれて肘を内側に入れないようにな、撃った際の反動で肘を痛めかねえぞ。寧ろ肘を若干曲げるくらいにしておけ。足も肩幅より少し大きめに開いて腰を少し落として背中を若干丸めろ。これが基本的な構え方になる」

「なんだろう…ちよつとダサイような」

「きりたん、失礼でしょ？」

「ごめんなさい」

「気にすることあねえよ。実際、銃を持ち慣れてない奴から見りやそう思うのも無理は

ない。だがこの構え方は左右どちらにも銃口を向けやすく、正面凡そ120°。全てをカバー出来るメリットがある。それに左右対称だから利き手による左右への撃ち分けの差が出にくいのも良いな。またボディアーマーを着ている場合、身体を正面に向けることからアーマーからの露出面積を減らして安全性を高めるといふ効果もある。これはお前らにはあんま関係ねえな。ま、アイソセレススタンスの効能に関しちやこんくらいだ。ゆかり、撃て」

「はい」

スカーレットの号令を受けたゆかりはトリガーガードに掛けていた指をトリガーに移動させ、引く

その瞬間軽い銃声が鳴り、ターゲットのド真ん中へ穴を空けた

そしてゆかりは銃撃の反動を上へと逃がす為に腕を上へ上げた状態で制止する

まるで教科書を具現化したかのような、完璧な撃ち方である

「綺麗…」

「なんや、ちよつと格好良いって思ってもうたわ…」

「こりや私も満点を出さざるを得なくらいに綺麗な撃ち方だな、流石だ」

「ありがとうございます。今回は腕を上へ上げましたが実戦ではあんまり上げると次の射撃に移りにくいのでしません。だけど皆さんは初心者ですし反動を出来る限り減ら

す為にした方が良いでしょう」

「なるほど…まずはゆかりさんの真似をすれば良いでしょうね？」

「そういうことです」

「今回用意したのはさつきも言った通り、22LR仕様、これは銃弾の中でも滅茶苦茶弱い奴だ。当然威力もしよぼいがその分反動も少ない、銃に慣れる為や遊びなんかで使われることが多い弾だ。これから訓練をしていつて最終的には、38スペシャル弾をしつかりと撃てるくらいにはなつてもらうぞ。あの化け物みたいな弓を扱っていたずん子は最初からそれでも良かったかも知れねえが…ま、初日だし取り敢えずは、22LRで様子見だな」

「分かりました」

「え、ずんちゃんの使用ってた弓ってそんなに凄いですか？」

「凄いなんでもんじゃねえよ。私が調べた限りじゃ現代に於いて強弓を扱うことの出来る人間を見付けることは出来なかつた。これの意味することはあの弓を扱えるのは判明している中ではずん子ただ一人だけだということだ。てかなんだよ、弓力200kgつて…大昔の武士とやらが使ってたのと同じじゃねえか」

「弓力？」

「弓の弦を引くのに必要な力のことよ、葵ちゃん。つまりあの弓は弦を引くのに200

kgの力があるってことね」

「(。 ㇀。) ハア!! ずん子さんその腕で200kgのもん動かせるってことか!?!」

「流石にそこまでは無理よ? 日本弓の弦の引き方は独特でね、腕の力だけじゃ普通の弓すら引けないの。それでもかなり力があることに変わりはないんだけどね」

「すつご…:すごすぎだよずん子さん」

「やつとずん姉さまの凄さが分かったんですか? ずん姉さまは世界一なんです、料理の腕もそうですが弓を射る姿は大変凛々しいですし何よりも二の腕と太腿の柔らかさと
言ったらもう神ですよ神」

「ありがとう、きりたん。でも恥ずかしいからやめてね?」

「やめません、ずん姉さまの凄さをもっと皆に——」

「…やめてね?」

「はい」

「そこで引き下がるんかい」

「ずん姉さまは優しいけど怒る時はちゃんと怒りますし、私はずん姉さまの御顔を歪めたくはないので。いつでも笑顔で居て欲しいですから」

「相変わらずお姉ちゃんっ子だねえ、きりたんは」

「和気藹々としているところすまないが、時間は有限だ。取り敢えず全員銃を持って。弾

はまだ入れるなよ、まずは握り方の練習からだ」

「はいはい」

その後は只管に握り方から構え方の練習をし、そしてそれらを完璧にしてから弾の込め方を教えて撃たせる

初日ということもあつて撃つ回数そのものは少ないし、使う銃弾が銃弾だけに反動も低い

しかしそれでも慣れてない者からすればその反動や銃声に驚くし、銃を手放しそうにもなる

その中でずん子はやはり強弓の経験があるからか他の者よりも早くに慣れ、その様子からスカーレットより、38スペシャル弾を撃つ許可を出されるほどであった

後は意外にもマキが銃に慣れるのが速かった、これはV・S・に所属していた経験が活きたのだろう

いくら銃を撃つことがなかったとはいえ訓練の様子を見ることはあつたし、実戦の様子をモニターしながら指示を出すこともあつた

それらの経験から元より銃に対するある程度の慣れが形成されていたのだとスカーレットは予測した

何はともあれこれで彼女達の訓練初日は終わりである、慣れない銃撃で疲れた身体を

癒す為に皆で大浴場へ行くのであった

「あれ、ずんちゃんまた大きくなった？」

「きやつ！もう、マキさんったらやめてくださいよ」

「なんてうらやま…じゃなくて羨ましいことを！ずん姉さま、私に任せて下さい追いついてみせます」

「言い換えられてないからね？それに…」

「おーおーきりたんも良い感じに成長してるねえ…これは将来が楽しみだなあ♪」

「ちよ、やめ…やめて下さいマキさん。ひやつ！どこを触ってるんですか!？」

「…まあそないなるわな。マキマキはこう見えて運動得意やし、出不精なきりたんじゃ無理やろ」

「ホント、どうしてあの胸であんなに動けるんだろう…」

「それ私も不思議なんですよね…マキさんV・S・の解析部隊の中でも運動能力で上位に入るくらいです。まあ流石に実働部隊には適いませんが」

「ゆかりさんは動きやすそうやしなあ」

「…殴りますよ?」

「おっと、ウチは何もゆかりさんの胸のことなんて…つておわあ!?!冗談、冗談やから!せやから許してやないすばでーなゆかりさん」

「それ余計に馬鹿にしてない？お姉ちゃん」

「賑やかだなあ：こんな日がずっと続けば良いな」

「ん？何か言いましたか、ずん姉さま」

「んーん、何でもないのでよきりたん」

小話その4 一〇〇式のもう1つの顔

「んっん〜！はあ…！」

布団から少女が身体を起こし、伸びをする

彼女は一〇〇式機関短銃…とは言えこの基地の彼女は銃を使わないので機関短銃と
言うのは可笑しいかもしれない

そんな刀に傾倒する彼女は目を覚まし、布団を片付けて着替えていく

着替えを済ませた彼女は部屋を出て食堂へと向かった

「今日は何を食べましょうか…ん？これは…お餅?！」

この基地の食堂は基本的にビュツフエ形式のため毎日何を食べるか悩むのだが、今日
は違った

彼女の目に緑色の餡が乗った餅…ずんだ餅なるものが入って来た

今までは極稀にお米が食堂にて振舞われることはあったが餅が出てきたことはない、
そもそも作り方を知ってる者がいないからだ

しかし今一〇〇式の目の前には神々しく輝くずんだ餅がある、これはどういふことだ

と固まっていると声を掛けられた

「あら、もしかしてずんだ餅が気になるのですか？」

「貴女は…ずん子さん、でしたか？」

「はい、東北ずん子です。貴女は一〇〇式さんですよね？お礼が遅れましたが、きりたん達…妹と友人を助けて下さってありがとうございます」

「いえいえ、私は自分の信じる正義を実行しただけですよ！」

「それでも助けていただいたことに変わりはありませんから…本当に、ありがとうございます」

尚もお礼を言ってくるずん子に少し戸惑いながらもその気持ちを受け取ることにした一〇〇式はさつきから目の前にあるずんだ餅について聞くことにした

「ところでこのお餅は…もしかして」

「ん？ああそうですよ、私が作りました！」

「なんと！神がこんな所にいたとは…！」

「神だなんてそんな…私はずんだが大好きでして、それで聞いてみたら材料があつたので折角ならと思います」

「まさかお餅を食べることが出来るとは…今度私にも作り方を教えてくれませんか！」

「ええ、喜んで！」

一瞬の内に意気投合した2人はその後一緒に朝食を摂ることにし、沢山のずんだ餅を皿に取ると席に着いた

それから彼女達は様々な会話をする

東北家は日本古来より続く名家であり伝統を受け継いできたこともあって、日本の血を引く戦術人形である一〇〇式は彼女との会話をとても楽しんでた

その中で特に盛り上がるのは、やはり

「強弓を!?日本古来の弓術を継承するばかりかそんな物凄い弓を扱えるだなんて…尊敬です!」

「そういう一〇〇式さんこそ古流剣術の流れを汲んだ新たな流派を自分で作るなんて凄いいじゃないですか。そのお師匠さんにも会ってみたいですわね」

この話題である

ずん子は強弓を扱う弓術の継承者であり一〇〇式は一〇〇式流の開祖

お互いに自分の理解の及ばない領域に到達した存在であり、尊敬し合う関係となった
「妹のきりたんさんも何か受け継いでいたりするんですか?」

「彼女はちよつと…運動が苦手ですってそういうのは、残念ながら。でも和歌や茶道、華道に関しては私よりもずっと得意ですよ」

「おお!それは是非一度拝見してみたいですね」

「それを聞いたらきつと喜びますね…つと話をすれば」

「ん？お…きりたんさーん！」

「おおう!?…つて一〇〇式さんですか、そんな大声で呼ばないで下さいよ。皆見てて恥ずかしいじゃないですか」

朝食を摂りに来たのであろうきりたんの姿が見えたので呼んでみると、文句を言いつつもこちらへと来てくれた

そして席に近付いた彼女は僅かに顔を顰める

「つてやっぱりあのずんだ餅はずん姉さまが作ったんですね…朝ごはんにそんなにいっぱいずんだ餅食べたら胃もたれませんか？」

「何言ってるのきりたん、ずんだは生命の源よ？」

「私はずつと食べてみたいと思つてたお餅があつたので、つい沢山取つてしまいました」
「はあ…まあ好きにすれば良いと思ひますけどね」

きりたんは呆れつつも2人と同席し、食事を摂り始める

それから3人は会話に花を咲かせた

きりたんは最初こそ仏頂面であつたが一〇〇式が彼女の趣味である和歌等に興味を示していることを知ると途端に顔色を変えて話を膨らませてくる

その代わりように少し驚きつつも一〇〇式は彼女達との会話を楽しむ

そして今度時間のある時に彼女達の継承してきたものを教えてもらい、一〇〇式はずん子へと剣術を教えることを約束するのであった

因みにきりたんは剣術を教わるのを嫌がったのでなしである、一〇〇式は悲しんでいた

そんなこんなで朝食を終え、東北姉妹と別れた一〇〇式は己の愛刀を納めている訓練室：一〇〇式道場へと赴く

そして愛刀『桜花丸』を手に取ると日課となつて整備と基礎訓練を行う

今日は東北姉妹との会話でテンションが上がつているのかいつもより技の勢いが強く、更には『百花繚乱』をぶつ続けで放ち続けていた

一〇〇式が訓練で百花繚乱を放つ際には常に誰かとの戦闘を意識しており、その目にはそこには存在しない相手が見えている

これは百花繚乱に限った話ではないがこの技の訓練時には他の技よりも綿密に相手の存在を意識している

今日の一〇〇式の目に映っているのは己の師匠の姿だ

この基地で唯一スカーレットとクレアの教えをほぼ受けず、別の人物を絶対的な師匠と捉えている彼女と同じ人物から教えを受けたスカーレットとクレアにしか出来ない芸当だ

紫色の長髪を持ち、スカーレットほどではないが長身の女性：素手であるというのに
どれ程激しく刀を振るえど全てを完璧に捌いてくる化け物

その上一〇〇式はおるかスカーレットでさえも目視出来ない程の速度で貫手や蹴り
が飛んで来て一撃で戦闘不能に追い込まれる

こちらが必死になって殺そうとしても息一つ切らすことなく余裕で撃破される：そ
んな師匠を越えようと一〇〇式は努めて冷静に刀を振るう

しかし：

「ぐう……また、ダメでしたか……」

彼女の目に見える幻影の師匠が一〇〇式の刀を片手で掴み、止めてきた上に一瞬で接
近して来て膝蹴りを鳩尾に叩き込まれる

幻影なので実際にダメージを受けることはないが、それでも一〇〇式はその場に膝を
ついた

己の想像でしかないというのに一度も勝てない、勝ち筋が見えない
それ程までに彼女の師匠は強く、どう足掻いても勝てないと無意識の内に思い込んで
しまっているのだ

まずはこの思い込みを乗り越えないと師匠に刃を掠らせることすら不可能だろう、一
〇〇式の当面の目標である

少しの間落ち込んでいた一〇〇式だが、気を取り直すと桜花丸を握り直し、正眼に構えて意識を集中させる

その時、一〇〇式道場の扉を叩く音が聞こえた

「…うう…どうぞ？」

低く冷たい声で一〇〇式が応答すると扉を開けて入って来たのはFive—sevenであつた

「相変わらず刀を握つてる時は怖いわね」

「要件はなんですか？」

「せっかちになるのも相変わらずね…まあ良いわ。要件は…これよ」

「…っ！なるほど、分かりました」

Five—sevenが黒い封筒を手にとって掲げると一〇〇式から殺気が漏れ出す

それを意に介することもなくFive—sevenは接近して一〇〇式へ封筒を差し出した

一〇〇式は桜花丸を納刀すると彼女の手から封筒を受け取り、懐へ忍ばせる

「期限は1週間よ。ま、貴女なら1日で終わらせるでしょうけど」

「当たり前です。望ましくないとやえど、己が役目を先延ばしになど出来ません」

「真面目過ぎるのも考えものよ？まあそれが貴女の良いところではあるけど…取り敢えず、頼んだわよ」

「承知」

Five—sevenはそれだけ言うときつさと部屋を後にした

この基地の情報部に所属し、足で情報を稼ぐのが得意な彼女は忙しい

一〇〇式道場を後にしたFive—sevenはすぐに基地から出掛けて更なる情報収集を行う

一方一〇〇式は道場の奥に存在する隠し部屋へと赴いた

そこには一〇〇式が通常使う戦場着とは別に濃い藍色の着物と袴がある

その部屋で一〇〇式は懐から先程の封筒を取り出して中身を確認する

「…いつの世も愚か者は絶えませぬ」

呟きと共に一〇〇式は封筒を再び懐へと仕舞うと情報部隊長のMDRへと通信を繋げ、幾つか質問をする

それが終わると彼女は通信を切り、道場を出ると普段と何一つ変わらない様子で過ごすのであった

宵闇に覆われて草木も眠る時間、IOP本社のエレベーター内に2つの人影があった
「今日の仕事も疲れたな……たく、あの猫耳人をこき使いやがつて」

「全くだね……でも」

「ああ……おかげで必要なもんは揃った、後は実行するだけだ」

2つの人影は男と女であるようだ

彼らはIOP本社の主任研究員ペルシカリアの助手という中々の立場であるが、それ
故彼女に振り回されているらしい

夜遅くまで仕事に追われて不満そうだが、その割にはしたり顔である

そんな彼らがエレベーターから降りて地下駐車場に停めてある車へ向かっている途
中、柱の陰から誰かがぬつと現れた

「誰!？」

「落ち着け、あれはうちで造ってる人形だ。何故和服なのかは分からんが…確か一〇〇式機関短銃とか言ったか。こんなところで何をしている?」

現れたのはS09H基地の一〇〇式である

彼女は暗い殺気を放っており、2人はそんな彼女に警戒心を抱く

一〇〇式は腰に差した桜花丸へと手を掛けながら口を開いた

「IOP本社所属主任研究員ベルシカリア付き研究助手のエリック・トーマン及びソウルオシーとお見受け致す、相違ないか」

「……確かにそうだが、それがどうかしたのか」

「貴方達がスパイであることは割れている。私怨はないが…死んでいただきます」
そう言う一〇〇式は走り出す

それを受けてエリックとソウはP320を取り出して一〇〇式へと乱射した

しかしその弾丸は一〇〇式の身体へ触れることはなく、全て桜花丸で弾かれていく
「クソ、なんなんだこいつは!!」

「御免」

「ア、ガ……」

「ちよ、ちよつと待って!なんでもする、なんでもするから見逃し」

「問答無用」

「い、い、y——」

一〇〇式はエリックの腹を斬り裂いてから喉を斬り払い、命乞いをするソウへ向かって桜花丸を横薙ぎに振るう

その瞬間ソウの首から上がなくなり、桜花丸の刃の上に彼女の頭が乗っていた

一〇〇式は桜花丸を傾けて頭を落としてから血を振り払い、懐から数枚の紙を取り出して刀身を拭うと鞘へ桜花丸を納める

すると何処からか拍手が響いた

音の間こえる方を見るとペルシカとその背後に10人程の人間がいるのが見える

「いやはやお見事だね。バグが出た時はどうしたものかと思っただけど、彼女に託して正解だったよ」

「ペルシカリア博士、危ないので研究室にいるよう言われていたはずでは」

「なに、あの基地で鍛えられた君の戦いぶりを見てみたくなってね。研究者の血が騒いってしまったのさ。それに私がいることには気付いていたんだらう？1発くらい私の方に弾が飛んで来るかと思っただけど一切なかった、あれは君がこちらへ飛ばないよう気を遣ってくれたんじゃないかい」

「…意外ですね」

「私がそこに気付くことがかい？確かに私に戦術眼はないし戦闘行為なんて分からない、でも多少は数学の心得があるからね。跳弾の理論を知っておいて、後はこの目で見て計算してやれば良いだけだよ」

「相変わらず巫戯けた程ズバ抜けた頭脳ですね。それに動体視力も良い：本当にただの研究員か怪しいところです」

「誉め言葉として受け取っておくよ。さ、後の処理は私達に任せて君は帰っていいよ。なに、心配しなくても危害を加えたりなんてしないさ。あの基地を敵に回したくないからね」

「分かりました、ではこれにて失礼します」

「ああ、ご苦労だったね」

その言葉を皮切りとして一〇〇式は背を向けて歩き出す

数歩程普通に歩いていたらかと思えば次の瞬間にはその姿は消えており、地下駐車場の何処にもいなかった

その様子を見ていたペルシカは恐ろしさを感じながらも笑みを浮かべていた

あの基地へ行った人形達はほぼ全員が科学者であるペルシカの想定を遥かに越えた領域へと実力を高めていく

ある意味自分よりも戦術人形のことを理解しているのではないのか、そんなあり得な

い仮定すら浮かんできて彼女の好奇心を刺激するので

今回のスパイの処理を依頼したのはペルシカであり、その依頼を受けてFive—s
eveNが調査を行って黒であると判明した

そしてペルシカは彼らへ1週間の激務を言い渡して夜遅い時間に殺害しやすい状況
を整えた

そこまでしたのは重大なバグを抱えながら最前線で活躍出来る一〇〇式をこの目で
見たいが為である

烙印やマインドマップにバグが出たりしたら解体するしかない、そんな常識をぶち壊
してみせた一〇〇式を見たペルシカは更なる研究欲が湧き出てくるのを自覚する

早くこの欲求を満たしたい、そう思った彼女は処理班の人間にこの場を任せて研究室
へと戻って徹夜で研究に没頭するのであった

そして翌日目の隈を更に深くしてデータとにらめっこをしているペルシカを発見し
た同僚達は、呆れながらも慣れた様子で彼女を無理矢理ベッドへと押し込むのであった

「んっん〜！はあ…うん、今日もいい天気ですね！」

翌朝、起床した一〇〇式は窓の外を見て笑顔になると朝の準備を始める

その顔は何処にでもいる快活な女の子であり、昨晚情け容赦なく人斬りを行ったことを微塵も感じさせはしなかった

「あ、おはようございますタウルスさん！朝ごはんと一緒にどうですか？」

「おはよう、一〇〇式先輩！勿論良いよ！」

こうして今日も彼女は元気に1日の始まりを過ごしていく

座学3日目 一時間目

「よおお前ら！今日の授業を始めろぞ」

「あら同志。街で起こった殺人事件は解決したの？」

「ああ、問題ねえぜ。てことで始めんぞ。今日の授業内容は『優先狙撃目標』と『E & a m p ; E』の2点だ」

スナイパースクールの座学も早いもので3日目となった

その1時間目はスカーレットが担当するようだ

「優先狙撃目標、ですか…」

「そうだ。スナイパーが撃てる数は多くても数発程度、ごく限られた発砲数で最大の効果を齎すために『何を撃つべきか』を知る必要がある。今からそれを教えてやるからしっかり聞いておけよ。1つ目は『通信手／指揮官』だ。軍隊つてのは指揮命令系統に従って活動する組織であることは分かっているな？だから敵の指揮統制を破壊するのは敵の動きを麻痺させる最も効果的な選択肢となる。その中でも通信手は最も重要な狙撃目標だ、指揮通信網を寸断すれば敵は本隊との連絡手段を失うことになる。支援要請も出来なくなるし、指揮官を排除出来れば尚良しだ。練度の低い民兵みたいな集弾なら

指揮官が撃たただけで壊滅することも多い。そうでなくとも一時的に指揮は混乱するし、士気も低下する。グリフィンの指揮官が基地の中から指揮を執るのはこうした事態を防ぐ目的もあるわけだな。更に人形全員に通信モジュールが搭載されているのも同様だ。だからこそ通信そのものを妨害されると壊滅の危険性が高いわけだが：ま、うちでそれを心配する必要はねえから気にすんな。2つ目は『火力の高い火器を持つ兵士』だ。少数で高い火力を発揮出来る機関銃や支援火器は制圧効果が高い。こうした火器を排除出来れば味方部隊が戦闘を行う際に有利に場を進めることが可能になるだろう」

「ぶっちゃけると当たり前のことよね」

「ま、そうだな。だがしつかりと頭に入れておけよ。3つ目は『対戦車火器／対空射手』だ。これは今のグリフィンにはあまり関係ないが、対戦車火器や対空火器の存在は味方戦車や航空機の行動を制約するものとなる。逆に排除出来りや味方部隊にとつて有利になるって寸法だな。まあこつちに戦車がないとしても対戦車火器は脅威だ、地上部隊に撃ち込まれると下手すりや一撃でかなりの被害を被りかねえ。だからどつちにせよ優先的に排除するべきことに変わりにはねえな。4つ目は『敵スナイパー』だ。前にも言った通りスナイパーの存在は敵味方への心理的影響が高く、その正確無比な射撃能力は純粋な脅威となる。また、後のE & a m p ; Eでも説明するがスナイパーチームの離

脱にとつても敵スナイパーの存在は厄介だ。発見したなら優先的に排除しておけ。5つ目は『特殊技術者』だな。何らかの特殊兵器やUAV・UGVなど運用に高度な専門技術が要求されるような機器が存在する時、そのオペレーターを撃つのは効果的だぜ。どんなに高価で高性能な機械だろうが動かなければ鉄屑同然、ただのゴミだ」

「基本的に脅威度が高くて排除することで得られる益が大きいものを優先的に撃つ、ということですね」

「そういうことだ。スナイパーが敵の一般歩兵を撃つことはないとも言えるな。勿論状況次第だがな？さて、次は『戦車及び航空機への狙撃』に関してだ。スナイパーにとつて敵戦車や航空機も優先目標となるが、適当に撃っていたのでは効果は薄い。特に戦車は装甲に撃ったって何の意味もねえ。そこで今から『何処を撃てば無力化出来るのか』を説明する。無論口径が10ミリ前後しかない銃弾でこうした兵器を完全に破壊することは出来ねえぞ、一時的に無力化するのが関の山だ。だが逆に言えばたった数百円の弾丸一発で一機当たり数億〜数十億円もするような兵器を無力化出来る：極めて費用対効果に優れているな。そんな狙撃テクニクについて今から教えるぞ。まずは戦車の無力化法だが、知つての通り戦車は頑強な装甲に覆われていて銃弾が効く箇所は非常に少ない。知らない奴からしたら撃つだけ無駄だと思うだろう、だがそんな戦車にも明確な弱点が存在している。戦車の上面に配置されている各種センサーや光学機器、アン

テナなどがそうだ。これらはどれも戦闘に必要なものばかりだから破壊してやりや能力の低下や一時的な戦闘不能に追いやるのが可能だ。戦車の上面にある都合上狙いを付けるのも容易だ、進軍が止まって停止している時なんか滅茶苦茶狙い時だぜ。それと戦車や装甲車両ではその乗員も有効な狙撃目標だ。高度な訓練を受けた乗員は簡単に替えの効くものじゃねえ、奴らを撃てば確実に無力化出来るぜ。幸いなことに奴らは戦闘中でもなけりや上半身をハッチから露出させてることが多い、見かけたら遠慮なく撃ち殺してやれ」

「なるほど……戦車なんて相手に出来ないって思ってたけど意外と何とかなるのね」
「だろうな。ここら辺はもつと広まって欲しいもんだが……まあ、良いか。戦車に関して以上だ、航空機……特に戦闘機に関して見ていくぞ。航空機全般に言えることだが空を飛ぶために軽量にする必要があり、装甲がないと言つて良い。戦闘機ともなれば音速を越えるような速度で飛ぶから余計な重しにしなければならない装甲なんてまずついてねえ。更にその性質上戦車以上に精密機器の塊だ、スナイパーにとつて滅茶苦茶狙いやすいターゲットだな。僅かな破損でも飛行不能になるし、長時間の修理を要する。具体的にはまず機首のノーズコーンが狙い目だ。この中には戦闘機の眼とも言うべきレーダーが格納されている、ここを撃つてやればこのレーダーを破壊出来る。ノーズコーンはレーダーの電波を透過させるために非金属製だから狙撃用の弾なら普通に撃ち抜くこ

とが可能だ。更にノーズコーンの形状というものは航空力学に於いて重大な意味がある、ここを破損すると物理的にも飛べなくなるわけだ。次に狙うべきは翼だ、フラツプのような可動部を破損させりやこれも戦闘機が飛べなくなる。それに主翼内の燃料タンクに焼夷弾を撃ち込めば爆発させることも可能だ。とは言え焼夷弾は銃弾としての性能があまり高くない、これはかなり限定的になっちまうな。それでもAP弾で燃料タンクごと撃ち抜きや飛べなくなることには変わりはないし、修理により時間を掛けさせることが可能だから依然有効なターゲットだ。これ以外にも各所の可動部、配線、センサー類も有効な狙撃目標だ。また戦車同様、乗員を狙うのも良いな。航空機搭乗員つてのは戦車乗員以上に替えが効かねえし、育成に膨大な金が掛かる。敵部隊に重大な損害を出すことが出来るわけだ、他にも整備士や整備に用いる危機への狙撃も有効だぜ。勿論優先度は低めだがな。これまでの説明で分かるだろうがスナイパーは常日頃からこういうった兵器に関する情報を収集して弱点についての知識を深めていくべきだ。それとこれは今となっては開催されることがなくなっちまたが…兵器ショーや航空ショーと言ったものは最新兵器をまじかに観察する絶好の機会だ、もしもそういうイベントがあれば積極的に参加しろ」

「戦闘機を相手にするなんて最早起こりそうにないですが…でもいつか来るかもしれないせんもんね」

「そうだ、知っておいて損になることはない。さて、次は『E & amp; P; E』だな。何度も言うが少人数で行動するスナイパーチームの火力は乏しい。故に行動は隠密に行うわけだが、万が一にも敵性地域内で敵軍に発見された場合は拘束されないよう全力で脱出しなければならん。こうした脱出を専門用語で『E s c a p e & amp; P; E v a s i o n』と言う、略してE & amp; P; E だってわけだな。映画なんかだと良く見る緊迫した状況だが、現実ではまず起こらないと考えて良い。そもそも一般部隊ではスナイパーチームをE & amp; P; E を行う可能性があるようなA O (作戦地域) に派遣することがないからだ。通常のスナイパーの育成過程ではE & amp; P; E に関する教育自体がないくらいだしな。ならどの過程でE & amp; P; E を学ぶんだ？ っと思うよな。そいつは特殊部隊を目指した時だ。アメリカ陸軍では

Special Forces Assessment and Selection
Special Forces Qualification Course
Survival, Evasion, Resistance and Escape

(特殊部隊選抜訓練) を経て

コース) 参加中に S (生存・回避・抵抗・脱出) ス

クールで教育を受けることになる。ま、この辺は知らなくても構わん、重要なのはここからだ。まず第一にありきたりな話だがE & amp; P; E を行う為には身体が強健でなくてはならん、これはお前達戦術人形にとつては最初から満たせている点ではあるがだからと言って油断するなよ？ 訓練をさばれば次第に性能が落ちていくことが確認されている、だから普段から過酷なトレーニングにその身を投じて常に研鑽を続けろ。特に走

り込みと行軍の訓練をするのが望ましい、E & a m p ; Eの途中で足が止まったりしたらその時点で終わりだ。第二に事前にE & a m p ; Eに必要な装備を選び、整理しておくことが必要だ。そして現場では不必要と判断した物を躊躇うことなく放棄する判断能力も求められるぞ。例えば烙印で結ばれた己の半身であろうが邪魔になるようなら捨てろ」

「…中々にきつついこと言ってくれるじゃない」

「自分を、捨てる…?」

「そうだ、戦術人形であるお前達にとつてはより一層辛いことだろう。だが重要なことだ。この先行う訓練でもE & a m p ; Eをやらせるが、その際には私を含めたこの基地の精銳が全力で殺しにかかる。もしも半身となる銃を捨てれずに見つかったりなんてしたら…その時は覚悟しておけ。さて、説明に戻るがE & a m p ; Eに必要な装備は一般的に『E & a m p ; Eバック』と呼ばれる独立した小型のバックやポーチに入れておく。内訳は任務や状況に応じて異なるが、大体はナイフ・マルチツール・小型ボトル（飲料水入り）・エネルギーバー・小型無線機・現金に金貨・GPS及びビーコン発信機・拳銃の予備マガジン・地図・ファイアースタターター・エマージェンシーブランケット・フラッシュライトなどだ。後は拳銃をベストや腰、脚のホルスターに入れておけば十分だ。緊急時には脱出の邪魔になる思いバックバックや装備類を放棄して身軽なE & a

mp;Eバックだけで行動することになる、その為に独立した別のバックにする必要があるわけだな。それと特殊部隊員やスナイパーには高級時計の愛用者が多いが、これはE&Eに大きく関係している。現地で質屋に持ち込めば現金を入手可能だ。叩き売ったとしても凡そ10万円は手に入る。その資金を元に、食料を主とした必要な物資を入手する手段もあるってことだ、覚えておけ」

「ふうん、なるほどね。戦場に持つて行く腕時計は耐久性とか以外にも気を配らなきゃいけないのね」

「他には巻き方も重要だ。文字盤を外側じゃなくて内側に向けるようにしろよ。さて、E&Eだが：こいつについて学ぶべきことは非常に多い。その気になりやあE&E1だけで本が一冊書けちゃう程だ、この時間で全てを説明することは出来ないし仮に出来たとしても記憶することは困難だろう。よって今回はE&Eについて最低限認識しておくべき基礎的な要点を教える、これだけは絶対に覚えておけ。行くぞぞ?」

・『自分は絶対に逃げ切るんだ!』という強靱な意思(Survivors Mind set)を常に持つこと。気持ちが挫けたらその時点で何もかも終わり

・周囲の空間認識、空気を読むこと。何か異常はないか、状況を警戒する癖を身に付けて危機を回避する。脱出経路を組む際に、例えば建物内なら東側もしくは西側の出

口☒というように複数のオブションを考えられるようにしておく

・一般的に敵兵の搜索は包囲網を狭めるように行われる。逃げるだけではいずれ追いつめられかねない、包囲を突破することも考えて行動すること

・活動地域の言語を習得すること。語学の学習は困難だが可能な限り覚えておくと良いし、習慣や文化にも精通しておくこと尚良い。敵性地域・国家の人間は誰一人として信用すべきではないが、場合によつては民間人と交渉することで脱出に協力させることが出来るかもしれない。その為様々な心理学や人心掌握術に長けている者がチームにいるとかなり有利となる

・カモフラージュすること。泥でも土でも何でも良いので周辺にあるものを利用して自身の存在を風景に溶け込ませることが重要となる。これは臭いを消して追跡犬の嗅覚を誤魔化す効果もある

・音と光を出さないこと。音や光を出せば当たり前だが被発見率は上がる、高く立ち上る煙にも注意すべし

・シエルターが必要な場合は『BLISS』を守ること。BLISSとはBlend、溶け込ませLow シエルsilhouette、エツトを消しIrregular 非人工的shape、自然な形状でSmall、人気がない土地を選ぶSeccluded location ことである

・万が一にも敵に捕らえられ捕虜となった場合、可能な限り早期に脱出を行うこと。

時間が経てば経つほど体力が減り、脱水症状を始めとした様々な悪影響が起きる危険性がある上により警備の厳しい施設に移設される為だ

・敵を理解すること。例えば敵がイスラム勢力であるならば、コーランを熟読して捕虜になった時にあたかも自分がムスリムであるかのようにハツタリをかませるぐらいの知識を付けておくと良い。しかし、ハツタリがバレた場合はより凄惨な拷問や処刑が行われる可能性があるため諸刃の刃である

「なるほど…色々と覚えなきゃいけないことが増えていきますね」

「そうね…因みに言語学習も訓練でやるのかしら？」

「今はまだだがいずれやるな。一応言っておくがここで戦場に出る資格を得るには最低4ヶ国語の習得が必須だ」

「4ヶ国!?!ちよ、無茶じゃないの?」

「WA2000は9ヶ国語を自在に操るぞ。因みに私は12ヶ国語、クレアに至っては13ヶ国語を扱える」

「…どんな頭してんのよ、貴女達は」

「いついかなる時も貪欲に知識を貪ろうとする知識欲を持つてことだな。勉強熱心じゃないと良い兵士にはなれないってのは前にも言ったろ? 実際私も様々な分野に造詣が深い、これに関しては次以降の授業で思い知らせるよ」

「なんか、ちよつと怖いです…」

「ま、その辺はまた次にな…ってことでE & a m p ; Eの超基本的なことの説明は終えるが、ここまでの説明でE & a m p ; Eが高度なテクニクであることは分かるだろう。そもそもE & a m p ; Eを行うような状況下では逃げる側同様に追つて側も必死だ、なんせ仲間を狙撃されてるしな。必死どころか腸が煮えくり返っていたって不思議ではない。しかもここで逃がせばまた被害が出るかもしれない…ってなると自分の命の為に必死になるのは当たり前だよな？ そういった敵から逃げる為の具体的な手法を2つ程紹介する、耳の穴かっぽじって良く聞いておけ。まず1つ目は『スリップ・ザ・ストリーム』だ。これは脱出に於いて敵を撒くタイプのテクニクだな。一言で言えば敵を偽の逃亡経路へと誘導し、その隙に脱出を図る、というものだ。ただしこの方法は河川を利用するから常に使えるもんじゃねえし、河川のサイズも重要だ。川幅は数m程度がベストだろうな、あまり大きな河川でもダメだし小さすぎるのも出来ねえ。さて、具体的な説明をする為に状況を設定するぞ。狙撃任務完了後、真北に向けて逃げ、追手は南から迫っているとする。敵はこちらの足跡や踏み倒した草木の痕跡などを辿って来るのが普通だ。そして河川は東から西へ流れているとしようか。真北へ進み暫くして河川が近づいて来た、そして河川の100m手前で進行方向を真北から45°北東方面へ変えるんだ。この変針は追手に分かるようある程度はあからさまに、しかしわざとら

しさが無いように気を付けろ。そのまま河川を徒歩で渡河し、45°の方向へ進んでいく。そしてこれがフオルス・トレイルとなり、敵を誘導するものだ。適当なところまで進んだら自分の足跡を辿って河川まで戻り、河川の中を下流（西）へ向けて進む。この時間違っても上流に進むなよ、落とし物や臭いなど自分の痕跡が追手の方に流れついでしまう恐れがある。そうして数百m程移動したら河川を出て再び真北へ向けて移動を開始する。河川を出る際には足跡などが残らないように岩場を利用すると良いな。河川を通ると勿論身体が濡れるわけだが、臭いを激減させる効果があるからかなりのメリットとなる。敵が軍用犬を連れている場合には特に有効だな。軍用犬はおつそろしい追跡能力を持つてやがる、なんせ嗅覚が人間の100万倍とかいう意味不明なレベルで鋭いからな。普通に逃げてたんじゃ絶対に逃げ切れないぜ、だからこうしたテクニクが必要になってくるわけだ。ここまで上手くいけば後は味方との合流地点まで行軍し、脱出する。ヘリによるピックアップが一般的だな。これがスリップ・ザ・ストリームの概要だ」

「そういうことね、理解したわ」

「結構斬新なやり方に聞こえますけど…常套手段なのでしょうか」

「そうだな。私も訓練を受けるまではこんな方法想像もしなかったが、これはずっと昔から行われているやり方だ。そして2つ目もまた昔から続いている手法で、その名も

『フィッシュフック』という。これは脱出を行う際に敵へダメージを与えて怯ませることとで隙を生じさせ、その間に離脱する方法だ。まず地図上でそれほど高くない丘を見つけておき、その丘へ向かって逃げることで敵を誘導する。そして丘へ着いたらその丘を一周するように頂上付近：自分が辿つて来たルートを見下ろせる位置に着け。要するに痕跡を辿つて来た敵を待ち伏せして側撃するつてこつたな。成功のポイントは敵が正確にこちらのルートを辿つてくれるようにしつかりとした痕跡を残しておくことだ。無論、わざとらしくならないよう気を付けろよ。アンブッシュエリアを選定したら☒キルゾーン☒を設定し、クレイモア対地雷などを設置する。ルート上を進む敵に対する『リニア・アンブッシュ』だな。敵がキルゾーンに差し掛かったらクレイモア対地雷を同時に爆破し、合わせて銃撃を行う。アンブッシュは威力の大きい武器で行うのが鉄則だ、M203グレネードランチャーがあれば40 m mグレネード弾をありつたけ撃ち込んでやれ。手榴弾もあるだけ使うんだ。とにかくこっちは少人数だから火力が大きいと敵に思わなせなけりやならねえ。クレイモアに40 m mグレネード、手榴弾や銃撃を組み合わせたアンブッシュは強力でな、上手く決まれば敵は殆どが戦死乃至重傷を負うだろう。だが万が一にもアンブッシュが失敗もしくは不完全となり、残存戦力がフランク（迂回しての攻撃）をして来るとかなり厳しい状況になる。それに備えて自身の左右や敵の予測迂回ルートにもブービートラップを設置しておくとうまいだろう。こうする

ことで敵を疑心暗鬼に陥らせ、それ以上の攻撃や追跡を慎重にさせることが可能だ。一方でこちらはアンブッシュ実行後はすぐに現場を離脱して味方との合流地点まで全力で移動する。ただし！私を含めた色んな奴の経験則から言わせてもらえばこの程度のテクニクはアメリカ軍であれば第82空挺師団や第75レンジャー連隊のような精鋭部隊には通用しないことが多い。精鋭部隊はこうした戦術を熟知していて簡単には引つ掛かってくれねえ。こうしたアンブッシュを行う際には相手の実力を考慮した上で実行する必要があるってこつたな。まあ相手が精鋭ならそれを逆に利用して罠に嵌めてやりや良いんだがな」

「どつちも敢えて痕跡を残すことが重要なんですな：寧ろ消すものかと思つてました」
「確かに基本的には痕跡は残さないようにするぞ。さつきも言つた通りこれは『狙撃完了後敵に位置を捕捉されて追手が掛かつており、非常に危険な状態からの強引な離脱方法』だ。普通はこうなることがまずない、完全隠密で最後まで任務をやり遂げるのが普通となる。だから痕跡も一切残さないのが基本だぞ」

「そう言えばそうよね、今やつてる授業だけに集中してると思わず忘れそうになるわ。気を付けないとね」

「そこはしつかりと注意しておけ、今までの授業全てを統合して一つの知識として定着させなきゃならねえからな。さて、これでE & a m p ; Eの脱出テクニクを2つ説明

したがここからは軍用犬…より広義的に追跡犬と言おうか。こいつの説明をすることでスリップ・ザ・ストリームでも軽く言ったが敵の追跡から逃れる時、敵が練度の高い追跡犬を連れていると非常に厄介だ。対策を教える前にまずは追跡犬について理解する必要がある。警察犬や軍用犬には長頭種…口吻の長い犬のことでシエパードやドールマンなんかがそうだな、こうした犬種が多いのは臭い物質を吸着する『嗅上皮』と呼ばれる細胞層の面積が広くてより臭いに鋭敏だからだ。さつき『犬は人間の100万倍の嗅覚がある』と言ったがこれは☒臭いを100万倍強く感じる☒ということではなく、☒空気中の臭い物質の濃度が100万分の1でも嗅ぎ取れる☒という意味だ。それに花や草木など犬にとってどうでも良い臭いに対してはあまり反応せず、動物が発する有機物の臭いに対して敏感に反応するぞ。ってことでこつからは具体的に追跡犬が何の臭いを嗅いで追跡してるのかを説明すつぞ。答えから言うとな人間の身体から発せられる微量な臭い物質だ。例えば皮膚からは垢やフケといった細かい皮膚細胞の破片や頭髮が汗にまみれてバクテリアによる作用を加えつつ、常に落下・飛散している。更に人間の足の裏からは微量な有機物が揮発してな、靴を通り越して地面にまで残留する。過去のテレビ番組で良く観かけるが、警察犬が地面の臭いを嗅いで犯人や行方不明者の進行方向や居場所を特定出来るのはこうした有機物質を手掛かりにしているわけだな」

「ふむふむ…嗅覚が鋭いついていうのは臭いをより強く感じるわけじゃないのが意外でし

たね」

「そうね、私もてつきりそっちだと思ってたわ」

「もし本当にそうだとしたら人間社会で生きる犬はあまりに強い臭いにやられて死にかねえだろ。少なくとも異常が生じるのは間違いない。まあこの話は別に膨らませなくても良いか、次に行くぞ。今から説明するのは追跡犬の行動を妨げる…臭いによる追跡を困難にする方法だ。まず1つ目は『頭髪を短くする』ことだな」

「…ギャグかしら？」

「いんや、ガチだ。私の髪が長いのは一応理由があるから後で説明してやる、とにかく行くぞ。頭髪が長ければそれだけ臭い物質の量も多く、追跡犬の追跡を容易にしてしまう。短ければそれが少なくなった上に風で錯乱する可能性も高いから追跡犬の仕事を難しくすることが可能だ。長髪だと汗をかきやすいつてもデメリットだな。んで私の髪が何故長いのかだが…その理由の1つ目は『うちで造った消臭剤の存在』にある。これは結構色んな臭いを無臭状態にまで持つて行くことが出来る優れたものでな、作用機序としては臭いの原因となる物質に結合することによって別な物質へと変換することで効果を發揮している。こいつの強力さを理解するには、死体に振り掛けてやれば凡そ数時間程死臭を消すことが出来るって言えば十分だな」

「いやなにサラッと頭おかしい物作ってるのよ」

「…この基地が常識外なのは兵士だけではないのでしょうか」

「ま、そうだな。んで理由の2つ目は『敢えて髪の一部を痕跡として残すことでフォルス・トレイルへと誘導する』ことだ。頭髪を短くしているとこれは難しいだろう？長髪であることのデメリットを消しつつ通常使われることのないメリットを生み出す、その為に私は長髪を維持してらってわけだな」

「なるほどね…私達もその消臭剤を使うことになりそうね」

「そうなるな。ま、この話はこの辺にして次に行つちまおうか。気を付けるべきことの2つ目は『日常的に清潔な皮膚を心がけ、任務中は露出を最小限にする』ことだ。不潔ではバクテリアの量が増えやすく、皮膚が露出していれば落下する皮膚組織の量が多くなる。稀に犬どころか人間でも追跡出来るんじゃないやねえか？くらい体臭のキツイ奴がいるが…ま、スナイパーどころか軍人に向いてねえわな。3つ目は『睡などを不用意に吐かず、糞尿の始末に注意する』ことだ。これはもう読んで字の如くだな。睡を吐くな、排泄物の始末には気を払えただけだ。臭い物質が身体に付かないようにしろよ。まあこれに関してもさっきの消臭剤を利用すれば問題はない。4つ目は『食べ物始末をする』ことだな。食料の残りを封を開けたままバックパックやポケットに入れるのはNGだぞ、ぶつちやけこれは日常生活でもやるべきではないわな。犬は食欲が旺盛であることが多い、こっぴどしたものをそのままにしているとその臭いを積極的に辿つて来る

ぞ。これを利用して誘導することも可能っちゃ可能だが…難しいな。5つ目は『装備品を整理整頓しておく』ことだ。例えばそうだな、銃のスリングや装備のストラップがダラダラと余分に長い場合、それだけ枝や地面に接触する。この時スリングの表面などに付着していた皮膚細胞の破片を撒き散らすことになる。つうかこれに関しちやあれだな、臭い云々の前に安全上の問題があるしこんな奴が隣にいたら蹴り穿ってやるところだ

」

「いや死ぬでしよそれ」

「部隊の足引つ張って仲間を危機に陥れるような奴なんざ殺した方が良いだろ。つか特殊部隊にいながらそんな基本的なことを守らない時点でそいつは部隊を舐めてる」

「理屈は分かりますけど…」

「ま、確かに殺すなんてことは普通しないがな。殺したくはなるが実際に殺すと色々問題があるしな…まあどうにかなるパターンもあるが」

「え、あるの？」

「まあな…さて、続きを話していくぞ。6つ目は『通気口のあるブーツを履かない』ことだ。足の臭いってのは人間でも気付くほどに強烈だ。だから靴に通気口があると歩く度にそこから有機物質が放出され、追跡犬に目印を撒いて歩いているようなものになっ

ちまう。7つ目に『喫煙しない』ことも重要だ。つつても私が喫煙者であることから分かり通り、これに関しちやどうとでもなる。喫煙をしたいならまずニコチン依存症にならないよう注意しろ、吹かして吸つてりやかなり依存症になりにくくなる。機会があればニコチン依存症の原理についても説明してやる、脳神経の話になるからかなり複雑になるがな。次に気を付けるべきは口臭だ。これは市販のブレスケア商品でも結構効果があるが、完全に影響を排除したいならより専門性の高いものを使用しろ。8つ目は『石鹼・香水・デオドラントの使用に注意する』ことだ。まず臭いの強いものは避ける、そして使用する際は普段から最小量にしておけ。香水は出来るなら一切使用しない方が良いだろう、不潔で体臭がキツイのも問題だが香料の臭いとするのもまた問題となる。まあこの辺もうちの消臭剤で解決出来る点ではあるが…ま、意識はしておくようにな」

「んー…そこら辺は割と自由にさせてくれるって認識で良いかしら？」

「ぶつちやけるとそうだな。私だって煙草は吸ってるし、中には自室でアロマを炊く奴もいる。こうしたものは戦場で疲れた心を癒す効果があるからそれを全面禁止にしちまうとな…いざれ精神を摩耗して壊れかねん」

「なるほど…つまり禁止する方が損害が大きいからある程度自制出来るなら自由にして良いということですね」

「だな。さて、授業時間ももうあんなねえし：最後にスリップ・ザ・ストリームとフィッシュフック、そして追跡犬対策までやってのけた『とある映画』の話をしてやろうか」

「あら、そんな映画があるのね。かなり現実的で地味な映画？」

「だと思っただろ？」とこころがどっこい、それをやったのは『ランボー 最後の戦場』って映画なんだよな」

「ランボー!?!あれってそんな高度なことする内容じゃないでしょ？」

「まあそういうイメージは持つよな。だが意外とそういう現実的で高度な要素も含まれてっから時間のある時に観てみる。んでそのシーンだが、ランボーが追跡犬に追われていることを悟るとすぐに一緒に逃げていた女性のシャツの一部を裂いて自分の足に巻き付けてその女性を自分とは別方向へ逃がした。追跡犬を自分の方へ誘い出して女性を逃がしたわけだな。更に不発弾が放置された場所まで誘き寄せるとシャツの切れ端をクレイモア爆弾と一緒に不発弾へ仕掛け、連鎖爆発で一網打尽にしている。現実じゃあここまで綺麗には決まらねえだろうが、考え方は悪くねえ。訓練された特殊部隊員は瞬時に的確且つ有効な判断を下すことが可能だということを表している良いシーンだ。それと第1作でもランボーは警察の追手を受けた時に厄介な追跡犬から始末している。ランボーと言えば派手なアクションと荒唐無稽なストーリーが見所だが、こんなところプロの演出が潜んでるんだな。こういうのは他にもあるから探してみると良い、意外

と観察眼や集中力を鍛える良い訓練になるぜ」

「映画で訓練、ですか。そういうのもあるんですね」

「何でもそうだが、視点を変えりやあなんでも役に立つもんだ。先入観を捨て去って様々な方向から綿密に観察すれば新しい活用法も思いつける、こうした考え方は大事だからこれからはちよいと意識して物事を見つめてみると良い。つてことで丁度授業時間も終わりだな、つとそうそう…お前達に言っておかなきゃいけないことがあるんだつた」

「あら、何かしら」

「この座学だが、今回の授業でスナイパーに於ける知識のほぼ全てを教え終わった。勿論細かい所は色々とあるが…スナイパーとしての座学は今回でお終いだ。その代わり今日の残りの4時間でテロや暗殺に用いられる毒物などの解説を行う。これはテストには出ねえが知っておいて損はない、人形に毒は効かねえと思ってるかもしれないねえがそんなことはねえしな」

「え、ちよつと待って！私達に毒は効かないでしょ？」

「殆どは、な。だが極一部効くものはある、これは戦術人形の生体パーツの組成を調べて実験も行って得た事実だ」

「ほ、本当にあるんですね…ショックです」

「そうだろうな、しっかりと解説してやるからちゃんと言いとけよ。それと毒物解説は私が専門で行う、WA2000とM2000はテスト作成と実技の準備をしてるから今日は来ねえぞ」

「了解したわ、同志」

「んじゃ、次の授業は20分後だ。復習をしつかりしとけよ」

スカーレットはそう言うのと教室を去り、後に残されたFN49とモシン・ナガンは少し狼狽えたものの取り敢えず復習をしようとなつて机に着いた

これから先行される授業が今までのものよりも難解で理解が難しいものであることを知らないままに…

座学3日目 二時間目

「今回から毒物の授業なのよね…」

「そうですね…私達にも効くものがあると言っていましたけど、どういふことなんでしょう？」

「流石に分からないわ。私達はあくまでも機械なのにな」

S09H基地の資料棟にある教室ではFN49とモシン・ナガンの2人が若干困惑気味でいた

これから行われる4回の授業ではスナイパーのことではなく毒物に関して教えると言うのだから無理もない

そんな教室へ講師となる人物が入って来た

「よつす、準備は出来てるな？毒物の授業を始めるぞ」

「よ、よろしくお願ひします！」

「早速聞きたいことがあるんだけど、本当に私達に効くような毒なんてあるの？」

「無論、ある。今から教えてやるから少し待ってくれ。具体的に見ていく前にまずはざっくりとした毒の概要、及び『薬物動態学』について解説する」

「薬物動態学、ですか？」

「そうだ、この学問に関して触りだけでも覚えておけばこれから先行う授業に関してより理解が深まるだろうからな。薬物動態学はクソ程ややこしい分野だが、ここでは本当に簡単なことだけ教えるから安心しろ」

「専門性の高い所は専門家に、ってことね」

「そういうことだ。さ、じゃあ毒の概要から見えていくぞ。注目しろ」

スカーレットはそう言うのとホワイトボードに記入しながら口頭で説明をしていく

「まず毒というものは『生物の生命活動にとって不都合を起こす物質の総称』と言うのが分かりやすいな。ま、皆が普段イメージするもので相違はない。だが世の中の物質と言うのは須らく毒性を持つている。人間の生命維持に必要な不可欠なものでも摂取しすぎれば毒となり中毒を起こす、例えば水や酸素ですらな？」

「え、水に毒性なんてあるの？ 酸素は：酸化現象が何かするんでしようけど」

「無論、水も取りすぎれば毒となる。実際水を飲み過ぎて中毒を起こし、死亡した人物とこののはいる。その為、世の中では良く『全てのもは毒であり、毒でないものなど存在しない。その服用量こそが毒であるか、そうでないかを決めるのだ』というパラケルススの言葉を元に説明がなされる。しかしこの言葉は間違いでこそないが、正確でもない。そこら辺は薬物動態学で教えていく」

「その言葉は聞いたことがあります…水ですらそれに含まれるなんて」

「例外なんて何一つないってこつたな。そして毒に限らず物質と言うのは摂取経路が重要だ、どの経路で摂取したかによって効果の表れ方は大きく異なる。毒に於いては主に『経口・経皮・皮下・呼吸』の4つだな。経口は口から摂取し、経皮は湿布みたいなものだ。皮膚に接触しただけで体内に取り込まれる。皮下は注射、呼吸は呼吸だ。また、物質はこれらの経路全てを持っているとは限らんぞ。例えばテトロドトキシンは経口と皮下は存在するが経皮と呼吸での摂取は確認されていない。逆にサリンは経皮での摂取が確認されている。これからの解説ではこれら経路に関しても意識して聞くようにしろ」

「なるほどね…口からだとは消化を受けて肝臓で代謝を受けるから効果は弱まるけど、皮下に注射すれば直接効果を発揮するから効果が大きくなるよ」

「そういうこつた。テロなんかだと大勢の人物へ無差別に攻撃することが多いから経皮及び呼吸で吸収される神経毒を使用することが多い、例を挙げるならサリンやVXガス等だ。まあここら辺はお前らには効かないから取り敢えずは安心しろ。さて、次は致死量に関する話をしようか。毒の話をする時に必ず出てくる致死量だが、ちよつとだけ特殊な表し方をする。LD50という言葉聞いたことはないか？」

「いえ、ないですね…」

「私もないわ」

「戦術人形だと聞く機会もないし、仕方ないわな。LD50と言うのは『半数致死量』というもので、この量を摂取したら半数が死亡することを表している。具体的な数値は：次回の授業からだな、今回扱う毒物では致死量が測れないんでな」

「致死量を測れない？そんなことがあるのね」

「それなりにあるんだぜ？こういうのは。ま、その辺は追々だな。ざっくりとした毒に関する解説はこれくらいで良いだろう。次に薬物動態学に関して教えていくぞ、こっから少し気合い入れて聞いてよ」

スカーレットの言葉に2人の意識が変わる

それを確認した彼女は及第点だなど思いながらホワイトボードへと記入していく

「薬物動態学と言うのは毒に限らず、物質が生体内でどのような動きをしているのかを表すものだと思っておけ。もっと細かく言えるが流石にそこまでやっているとキリがねえからな。イメージしやすいものとしてはアルコールだな。アルコールを飲むと体内のアルコール濃度が上昇し、その濃度に応じた現象が現れるだろう？これは脳でのアルコール濃度が高くなったが故に起こったことだ。んでアルコールを摂取するのをやめて暫くすると次第にアルコール濃度が落ちてきて正常な状態へと戻っていく。酒を飲んだことがある奴なら誰でも経験したことがあるだろう、これを使って薬物動態的な視

点について解説をしていく。薬物動態学に於いて重要なのが『吸収・分布・代謝・排泄』という4つの段階だ。体内での物質濃度はこれら4つの段階が複雑に絡み合っただけでなく、まずは『吸収』、とは言えこれは読んで字の如くだ。アルコールを摂取してそれがどの程度吸収されるか、だな。そもそも吸収されなければ体内での濃度なんて上がりようがねえからな。『分布』はその吸収されたアルコールが血流に乗って生体の何処に多く存在するのかわかってこつたな。アルコールは基本的に脳に移動して効果を発揮するからそこまで移動出来なけりや意味ねえな？次に『代謝』だ。アルコールで言うならば肝臓で分解されている状態のことだな。代謝を受けると元の物質が持つ性質を減弱した別の物質になったり、全く違う別の物質になったりする。稀に代謝を受けることでより強力な毒性を得たり、代謝されて初めて毒性を持つようになる物質もあるが…ま、要はどんな代謝を受けるにしても体内での物質の濃度は下がると思ってくれ」

「代謝を受けて毒になるって…なによその時限爆弾みたいなのは」

「アミグダリンって聞いたことないか？こいつは未成熟な果物の身や種に多く含まれる物質なんだが、代謝を受けることで青酸になるといふ特徴がある」

「青酸って、あの青酸ですか!？」

「そうだ。とは言え果実に含まれるアミグダリンの量なんて高が知れてる、成人なら死ぬのに未成熟な梅の実で300個も食う必要があつてそんなに食えるわけないから心

配するだけ無駄なんだがな。さて、最後の4つ目の『排泄』だが…こいつもそのまんまなんだよな。糞尿や嘔吐によって体外に物質が排泄されることで体内濃度が下がる。アルコールで酷く酔っぱらってる時にいつそのこと吐いちまえば楽になるだろ？あれは嘔吐という排泄行為によってアルコールが体外に排出、それによりアルコール濃度が下がるのが原因だ。時には汗に混じって排泄されることもあるな。これら4つの段階と血中濃度によって物質の生体での作用は変わって来る。この知識があるかないかでは理解のしやすさが段違いだからな、しっかりと覚えておけよ」

「吸収・分布・代謝・排泄ね…言われてみれば当たり前だけど、それでも教えてもらわないうとこうしてしつかりと意識出来そうにないわね」

「そんなことばかりですわね…」

「世の中そんなもんだ。ま、薬物動態学に関しては10%も話しちゃいないがそれだけ知ってるや十分だ。さて…ここまで毒物に関する基礎知識のようなものを話してきたが、漸く本題だ。今回扱う毒物の説明に移行しよう」

「やつとね…私達にも効く毒が気になって仕方ないのよ」

「そう慌てるな、今から教えてやつからよ。てことでまずは毒としての名前を発表しようか、そいつはずばり『出血毒』だ！」

「出血毒…って血が出る毒でしたっけ？」

「極限まで簡素にすりやあそうだな。だがもう少し細かく見ていくぞ。この出血毒だが、持っているのは主にクサリヘビ科に属する蛇だ。この毒は『プロテアーゼ』という酵素によって毒性を発揮している、これだけでも分かる奴はどんな毒か分かるだろうが……どうだ？」

「さっぱりね」

「だろうな。さて、説明を続けるがさつきも言った通りこの毒には致死量というものが存在しない。これは何も死なないという意味ではないから注意しろ、致死量が存在しないのはこの毒の作用の仕方に起因する。てことでこの毒の作用の仕方：『作用機序』について説明するぞ。まずこのプロテアーゼという酵素はタンパク質を分解する性質を持つている、身近で触れるところで言えば肉料理を作る際にあれやこれやの方法で肉を柔らかくするよな？あれだ」

「タンパク質を分解……それが出血と何の関係があるのかしら」

「普通そう思うよな。そこら辺も説明するが、その前に生体に於ける止血作用について説明する。まず何らかの要因によって怪我をしたとする、この時出血するのは怪我によって血管が破損するからだ。その後最初に血小板が傷口に集まりVWFという因子の仲介によって傷口に結合、血小板による血栓を作成する。これを一次止血と呼ぶ。そしてここから二次止血の話になるが、厳密に説明しようとするところ3時間くらいかかるか

ら簡単にさせてもらうぞ。一次止血終了後、この血栓はまだ固まっていなから補強が行われる。その補強を行うのがⅡとⅢ因子と呼ばれる凝固因子達でな、こいつらがフィブリンの網と呼ばれるものを作成して止血を行う。この反応は滝が流れている様に似ていることからカスケード反応と呼ばれている。これが止血のメカニズムを極限まで簡素にしたものだが…理解出来たか？」

「ちよつと難しいですね…」

「分かった、んじやあクツソ雑に説明すつぞ。要は『色んなタンパク質がごちゃごちゃして血栓を作つて血を止める』つてこつた」

「一気に分かりやすくなつたわね。端折りすぎじゃないの？」

「出血毒について理解するにはこの程度で問題ねえのさ。なんせ…」

「あ、もしかして」

「ん？ 気付いたか、FN49」

「はい、もしかしたら程度なんです…」

「良いぜ、話してみな」

「出血毒つてタンパク質を分解するプロテアーゼという酵素によつて毒性を發揮するんですよね？ そして止血はタンパク質が血栓を作つて血を止めるのなら…」

「タンパク質を分解する酵素がそこに侵入したら止血が出来なくなるつてことね…なる

ほど、理解したわ」

「その通りだ。プロテアーゼによって凝固因子達が分解されてしまうことで血栓の作成が出来なくなり、血が止まらなくなるのが出血毒という訳だ。ここでLD50の話に戻るが…こんな機序だ、致死量なんて測定しようがないだろ？なんせ毒で直接死ぬんじやなくて毒によって血が止まらなくなり、大量失血からの多臓器不全等で死亡することが殆どなんだ。状況次第じゃほんのちよつとした量で死ぬこともあれば滅茶苦茶大量の毒に曝されても生き残ることもある」

「それで測れないってわけね、一気にすつきりしたわ」

「んじゃ出血毒の症状について見ていくぞ。この毒はさつきも言った通り主に蛇が持っている、よって噛まれた部位を中心として症状が現れる。この毒はタンパク質を分解するため、傷口から入り込んだ後は周辺の組織を次々と分解していくことになる。そして様々な組織が分解され、更に出血による血圧の低下により重篤な後遺症が起こりやすいという特徴がある。また神経毒と違って出血毒には血清が存在しないのも特徴だな。その結果組織の破壊による壊死なんかが発生するともう最悪だ、手足の切断など苦渋の決断を迫られる」

「おぞましいわね…それで、それがどうして私達にも効くのよ」

「そうですよ、この毒はタンパク質を…つてまさか」

「…私も気付いちやったわ。そのまさか、なの？」

「そのまさか、だぜ。お前達の生体パーツにはどうやらタンパク質が結構な割合で含まれているようだ。これはうちで成分を分析した上で実験したから間違いない。お前達戦術人形は人間のような止血作用を持つわけではないが、タンパク質を分解する毒素が傷口に入り込めば周辺の組織は分解される。条件が整えば腕一本を注射一発で破壊することに成功した。もしこの情報が人類人権団体等に知れ渡れば…後は分かるな？」

「私達を無力化する為に出血毒…いえ、プロテアーゼや同じ作用を持つ物質を使つてくることが考えられますね」

「ドールジャマーなんかは割と知られてるけどこれに関しては知らない人が大半…対応策も取れずに一方的にやられる危険性すらあるわ」

「そういうことだ。てことでこの情報に関してはペルシカやヘリアンに知らせて外に漏れないよう厳重に管理するよう伝えてある。内部にスパイがいることも考えて各指揮官への通達も控えてもらつてるから知らない奴の方が多いだろうな」

「…それ私達が知つちやつて良かったの？」

「この基地に来た以上は知つてもらおう、何かあつた時に対応出来ないと困るからな。それと情報漏洩に関しては安心しろ、お前達の身辺調査はとつくの昔に終わつてるし…尋問に耐えるための訓練もみつちりとやつてやるからよ」

「……な、なんか凄く怖いんですけど」

「それだけこれから先行う訓練は生半可じゃねえってこった。まあ身内だし、敵にする程の残酷なことはしねえけどな？そもそもあれは殺すことを前提に置いてやってるし……でもお前達には関係ねえな」

「…聞かなきゃよかつたわ、ほんと」

「つうわけで今回の授業はここまでだ、ちいっと短いがまあ良いだろう。余った時間は、そうだな…ブルパップ方式に関してでも教えるか」

「ブルパップというワルサーさんの銃とかの構造ですよ？何か説明するようなこととってありましたっけ」

「お前達には関係ないが、何故ブルパップが廃れたのかは知っておいて損はないだろう。ま、これに関しちや一言で説明出来ちまうんだがな。言っちゃえば『欠点が多すぎるのに利点が1つしかない』からだ」

「…そんなに欠点って多かつたかしら？」

「べらぼうに多い。正直私はブルパップの狙撃銃なんざ絶対に使いたくねえな」

「いやならどうしてワルサーを副官に置いてるのよ」

「そいつは偏にあいつが優秀過ぎるからだ。ミレニアム8の中でも『筆頭戦術人形』とか言われるほどにな。当然あいつの銃も相当に改造が施してあるからかなり欠点を減弱

出来てはいるが…それでもどうしようもない欠点はある、そんな銃で『この基地の全ての戦術人形を圧倒する』程の実力を身に着けてるあいつは異常だな」

「そんなに凄い人だったんですね…ワルサーさん」

「あいつも化け物だからな。てことでブルパップの欠点だったな、列挙するぞ。『排莖の問題、音の問題、破裂事故の際の危険性の問題、構造の複雑化による単価の上昇と整備の難易度の問題、トリガーの引き心地の悪化による精度への問題、短くなつた全長の影響による精度の問題、肩への負担の問題、リロードの問題、ストックの問題』などなど…改めて見ると多すぎだな、これ」

「うっは…よくここまで欠点だらけの銃を作ろうと思つたわね」

「そいつは結果論だ。作ってみてから分かつたものが多いからこうなつちまつたんだよな…排莖やストックの問題に関しては知ってるだろうから飛ばすぞ。恐らく意外に思われるのは精度への悪影響だろうからそこについてちよつとだけ詳しく見ていくか」

「ブルパップは銃身長を長く出来るから精度が良くなると聞きますが…」

「ああそれはな、大嘘だ。そもそも銃身長を長くしても精度は良くなつたりしねえぞ、寧ろ悪化しやすい。これに関しちやまた機会があれば説明してやるとして…取り敢えずはトリガーの引き心地の悪さ、だな。ブルパップはトリガーと撃発機構が離れた位置にある関係上、他の銃のようにトリガーがハンマーを直接抑えるという構造に出来ない。

トリガーと撃発機構とを長いロッドや板で繋いでいるわけだが、こんなことすりやどう足掻いても軋みや歪みが発生してトリガーを引く際の力の掛かり具合が変わっちゃう。それにより大きな力が必要になる点も問題だ、これは特に狙撃銃にとって致命的だぜ。トリガーを引く力が大きければ大きい程発射時のブレは大きくなるからな。この違和感や大きな力が必要なことからブルパップはどうやってコンベンショナル（従来型）と比べて精度が悪くなる」

「な、なるほど……これは銃の中身を見たり実際に撃つたりししないと分かりようがないですね」

「そうだな、だから勘違いしてる奴は結構多い。それにリロードだって辛いし音もうるせえし整備も面倒だし反動もでけえし万が一の破裂事故の時も危ねえし……正直、好き好んで使ってる奴の気が知れねえな。私は御免被るぜ」

「そこまで言わなくても……」

「私は超一流のスナイパーだ、外すことが絶対に許されない立場にいるんだぞ？ それを考慮すりゃあ精度が悪化する要素を一切許さないのは当然だ」

「言われてみれば、そうね……まあブルパップの欠点については分かったわ」

「一割も話しちやいねえが……ま、いいだろ。どうせお前達が使うことはないだろうしな。よし、こんなもんで今回の授業は終わりにするーちよいと時間も余ってるし、何か聞き

たいこととかないか？今までの授業でやったことであらう覚えだとかもつと詳しく聞きたいだとかありや遠慮せずに言いな」

「あ、それじゃあ聞きたいことが……こんなんですけど」

その後スカーレットは2人の疑問を徹底的に解消出来るよう尽力し、彼女達は知識をより深く定着させていくのであった

やがて時間も来たことで質問会は一旦終わりにし、スカーレットは教室を出る

次の授業で取り扱う毒物に関してもう一度本を開いて確認するのであった

彼女の目はその本のあるページで止まる、そこには

『神経毒—テトロドトキシシン・アルカロイド類の併用について』

と書かれていた

座学3日目 三時間目

「お、ちゃんと準備出来てるな！んじやあ早速2回目の毒物解説に行くぞ〜」

S09H基地の資料棟の教室ではここ最近いつもの流れになりつつあるが、FN49とモシン・ナガンが並んで座っていた

そこへスカーレットが入って来るが今日は前置きもなしにいきなり授業へと入るようである

「なんかちよつと急ぎ気味ね」

「まあ今日はちよいと解説する項目が多くてな…神経毒について見ていくわけだが、一気の色々と見ていくぞ」

「どうして1つずつではないのですか？」

「理由の1つ目は『神経毒はお前達には効かない』こと、そもそもこれは生物の神経系に作用するがお前達人形には該当する作用点が存在しない。よって効かないしちよいとばかりぎつくりと見る程度で良いってこつたな。2つ目に『解毒や併用に関して話をす』こと、特にフグ毒とトリカブトに関しては併用の話をしたいしサリンやVXガスと

於ける解毒の話も絡めて授業をしていきたいんだ。こんなところだな」

「なるほどね、了解よ」

「納得もしてもらえたことで始めていくぞ。神経毒と言うのはさつきも言った通り生物の神経系に作用する物質だ。特徴としては少量でも死に至るものが非常に多いこと、それから『後遺症が少なく、対処法さえ知っていれば治療が簡単』というのものもあるな。まず神経に作用すると言ったがこれには色んな経路があつてな……だが最終的には全て『神経作用を止める』という現象を起こす。これによつて呼吸が止まつて死に至るのが大半だ。フグ毒もトリカブトもサリンも同じ。だが神経作用の『何処に、どのように』干渉するかに違いがある。それを説明する為にまずは神経というものがどういう段階を経て情報を運んでいるかを説明しよう。まず第一段階『神経興奮』、これは神経細胞にナトリウムイオンが流入することによつて発生する。神経細胞が活性化し（情報を受け取つ）て次に移行しようとしている段階だ。第二段階が『神経伝導』、これは受け取った刺激（情報）を同じ神経細胞内で伝えていく作用だ。神経細胞と言うのは刺激を受け取る樹状細胞に長い管みたいなものがかくつていて、構造をしていてな、樹状細胞で受け取つた情報をその長い管に通していくのがこの神経伝導だ。最終段階『神経伝達』、これは良く聞く言葉かもしれないが、違う神経細胞に情報を伝達する作用だ。神経細胞と言うのは全てが一繋ぎになっているわけではなくてな、それぞれが分離しているんだ。だ

がこのままじゃ情報の遣り取りに支障が出るからそれを解決する為に離れた神経細胞へ情報を飛ばして渡す作用が存在する、それが神経伝達だ。神経毒というものはざっくり言えばこの3つの段階の何れかへ干渉してその作用を妨害するものだ。その結果として全身をピクリとも動かせなくなるわけだな。とは言え死ぬのは基本的に横隔膜を動かさなくなることによる呼吸不全からの窒息死だ、逆に言えば人工呼吸と胸骨圧迫をしっかりとやれば生き残らせることが可能だってこつたな。後は肝臓の代謝に任せちまえば良い」

「なるほど…神経毒だと分かった時点でしっかりと対処すればどうにかなるんですね」

「そうだ。とは言えテロでVXガスが使用された場合、それに触れた者全員に同様の対処を行わなければならん。そうなると流石に人手不足に陥って助けられなくなる奴が出てくるだろう…こればかりはどうすることも出来ん、テロ行為を起こさせないようにするかもしくはガスに対する対処法や道具を予め住民全員に叩き込んでおくかくらいしか出来ないな。後は人工呼吸器を街の各所に大量に用意しておいてその使い方を徹底的に教え込んでおくとか…ま、対処が難しいのは確かだな」

「…ねえ、1つ気になったんだけど聞いてもいいかしら？」

「なんだ？」

「神経毒は後遺症が少ないのよね？でも日本で起きた地下鉄サリン事件では多くの人が

後遺症に苦しんだって聞くわよ？矛盾してないかしら」

「それか…それに関しては今の時代からじゃ昔のこと過ぎて正確なことは分からん。だが幾らか推測は出来るから私の予想で良ければ答えてやる。当時オウム真理教は警察の捜査から逃れる為に大量の違法物を廃棄していた。だが幹部の1人がサリンの生成に必須となる三塩化リンを含む幾つかの化学物質を隠すことで廃棄から逃したらしい。その後それを行った幹部が警察の捜査を攪乱する為に地下鉄でサリンをばら撒くことを提言し、サリンが生成された。しかし廃棄から逃れた物質は極一部でな、純粋なサリンを生成することは出来なかった。完成したサリンは不純物を多く含んだ謂わば『サリン擬き』だったんだ。その証拠として純粋なサリンは無色透明無味無臭だが、当時地下鉄でばら撒かれた際には異臭が漂ったとされている。あの事件の被害者に後遺症を患ってしまった人が大勢いたのはサリンが不純物であったことが原因だと思われる…ってところだな。不純物が故に異臭が地下鉄内に蔓延し、より警察の目をそちらに向けることには成功したんだろうが…その甲斐も虚しくオウム真理教は教祖を含む大勢が逮捕されたことで半ば壊滅した。残存勢力も残っていたらしい結構きな臭い感じだったみたいだが…日本そのものが崩壊した今となっては気にすることでもないだろ。こんな感じで疑問は晴れたか、モシン」

「十分よ。にしてもあの事件でのサリンが不純物だったなんてね…毒性が弱まった代わ

りに後遺症が残るようになってしまったところかしら」

「多分そうだろうな。閉鎖空間となる地下鉄内、それも大勢の乗客がいたというのに死亡者は『僅か』14名だとされている。サリンの毒性を考えりやこれは明らかに少ない、不純物だったお陰で助かった人が大勢いたのは確かだ…とは言え喜べることはないんだがな。モシンの言う通りその分後遺症が残った人も大勢いるし、当時の悲惨な様子にPTSDを患った者も大勢いただろう。因みにVXガスはそんなサリンの超強化バージョンって感じの毒物だ、こんなこと言うとは不謹慎なんだろうがあの時ばら撒かれたのがVXガスじゃなくて良かったと思わずにはいられねえな」

「おっそろしいわね…カルト宗教の怖さが良く分かるわ」
「です…」

「ま、そんなわけで神経毒の恐ろしさに関して分かったところでもう少し細かく見ていくぞ。まずはテトロドトキシンからだ、こいつの致死量…LD50は以下の通りだ」

マウス経口 LD50 0.01mg/kg
マウス皮下 LD50 0.0085mg/kg

「この表記だが『体重1kg当たりどれくらいの量で半数が死亡するか』を表している。マウスと人間では体の構造が大きく違うから若干違いは出るが、この数字を人間に代用すれば60kgの人間が0.6mgで半分は死ぬってこったな。クツソ単純に言えば1.

2 mgありや100%死ぬってところか」

「1. 2 mgつて…そんな僅かな量で死ぬのね」

「そんなんだとフグを食べればそれ以上の量を普通に摂取してしまえばさうです…」

「そうだな。だからフグ毒に当たった場合、周囲に対処法を知ってる奴がいらない限り絶対に死ぬと思うべきだ。そんなんだからフグを捌くのに国家試験が必要になってたりしたわけだな。んじやこつからこの毒の作用機序を見ていくぞ。ちよいと難しい話になるからそのつもりでな」

「神経つてなると前回よりもややこしいわよね…理解出来るかしら」

「安心しろ、なるべく簡単に説明してやるから。まずテトロドトキシンは神経興奮に作用する毒だ、そこを覚えておけ。だから神経興奮について簡単に解説するぞ。神経細胞の刺激を受け取る部分にはナトリウムチャンネルというものが存在していてな、こいつは言っちゃまえば扉みてえなもんだ。この扉が開閉することでナトリウムイオンの流入を制御している。だがテトロドトキシンはこのナトリウムチャンネルを閉じたままにする」

「そんなことをしたら神経が刺激を受け取れない…ですか？」

「そうだ。全身のナトリウムチャンネルが阻害されて神経興奮が起こらなくなることによつて身体を動かすことが不可能になるわけだな。因みにトリカブトに含まれるアルカロイド類はこれの全く逆の作用をしている」

「つまりナトリウムチャンネルを開きつばなしにするってこと？それって問題になるのかしら」

「大問題だぜ。ナトリウムイオンを受け入れて興奮状態に移行した神経細胞はナトリウムチャンネルを閉じない限り元の鎮静状態になれないんだ。しかしアルカロイド類によつてナトリウムチャンネルは閉じることが出来ない、それによつて常に興奮しつばなしになる。そして興奮状態にある神経細胞は新たな刺激（情報）を受け取ることが出来なくなつちまう」

「つまり直接起こす現象は違うけど最終的には同じ症状が起こるってことですか？」

「そういうことだな。どっちにしろ神経作用の第一段階となる神経興奮を阻害して大本から断つ毒だ。これらの物質が毒性を發揮している間神経は機能しなくなる。因みに脳神経が阻害されるのだが：なんとも言えねえな。中枢神経つてのは生物の身体の中で最も嚴重に管理されている区画でな、イメージとしてはめつちや審査の厳しい関所がある感じだ。だから余計な物質はそもそも中枢神経に到達すること自体が不可能だ。だが中にはその関所を突破する強者もいる。最も有名なのがアルコールだな、後はカフェインとかか。んでテトロドトキシンやアルカロイド類がその関所を突破出来るのだが：おそらくは不可能なんだろうな。私も専門家じゃねえから細かい所までは把握してないが、少なくとも脳に作用するという文献を見たことはない。だからこそ大抵の

神経毒は呼吸さえなんとかしてやれば助かるわけだしな」

「脳神経の作用まで止められちゃどう足掻こうが助からないものね…」

「一概にそうとは言えねえが…ま、それくらい危険なんだと思っておいた方が良いな。んでこつからテトロドトキシンとアルカロイド類の併用の話をするぞ」

「その2つを併用…そんなの打ち消し合って終わりじゃないんですか？」

「言われてみればそうね、真逆の作用を持つてるんだから中和されちゃんじゃないの？」
「概ね正解だ、だが惜しいな。さっきの授業で薬物動態学について少しだけ話しただろう？あの知識を使ってもう少しだけ深く知ればそうとも限らないことが分かる」

「薬物動態学…確か『吸収・分布・代謝・排泄』でしたっけ」

「そうだ、その4段階が非常に重要になってくる。このテトロドトキシンとアルカロイド類の併用に関して有名なのは『トリカブト保険金殺人事件』だな。事件の詳細については各々で調べてくれ。ここではあくまでも薬物動態的な話をさせてもらう。さて、この事件だがざっくり言えば新婚夫婦の妻の方が新婚旅行中に突然死したものだ。色々あってこの妻がトリカブトによる中毒死であることが判明し、更に多額の生命保険が掛かっていたことから夫の関与が疑われたんだが…これが物理的に不可能なことだったんだよ」

「…う…どう…う…い…い…とよ」

「それがな、この新婚旅行なんだが夫は妻と途中で別れていてそこから先は妻とその友人達で旅行を楽しんでいたらしい。だが妻の体調が悪化し、中毒症状を起こしたのは夫と別れてから3時間も後のことだった。厳密には夫に『栄養剤だ』と言われて渡されたカプセル剤を飲んでから3時間後だな、これはその妻の友人達も目の前で見てるから間違いない。だが通常トリカブトによる中毒症状は即効性でな、15分ほどで作用が起らないと可笑しいんだ」

「なるほど、つまりその時間差から夫には毒殺することが出来ない」と

「ああ。だが後の調査でこの夫が漁港から大量のフグを買っていたことが判明した。これに着目した研究員が研究をすることで、『フグ毒とトリカブト毒を併用すると数時間後に作用が現れる』ということが分かった。そのことが発覚し、更に夫の名義で借りていたアパートから実験動物や実験器具等が発見されたことで夫は逮捕された」

「そんなことが起るのね…でもどうして併用したら数時間後に作用が現れるなんてことになるのかしら？」

「それを今から話してやる…んだがな、この毒物の併用に関しちや100%何もかもが判明してるわけじゃねえ。諸々の条件で結果は変わるだろうからな、だからざっくりと判明することだけ話すぞ。まず薬物動態学では吸収・分布・代謝・排泄の4段階が大切だというのは既に覚えているだろう。よってこれからはこの2つの毒に関してこの

4段階の違いを見ていく。テトロドトキシシンとアルカロイド類の動態を比較した際、吸収においてあまり差はなく代謝に於いてテトロドトキシシンの方が速く代謝されるんだ。テトロドトキシシンはアルカロイド類と比べて血中濃度の最高値にちよつとだけ遅く到達し、体内から消失するスピードが速いということが分かっている」

「それってつまり…」

「そうだ、テトロドトキシシンはアルカロイド類よりも先に効果を失うことになる。そうすると未だ体内に残っているアルカロイド類の作用が現れ、中毒症状が発生するということだな」

「なんておつそろしい…まるで時限爆弾ね」

「投与されてから暫くはテトロドトキシシンの作用によつてアルカロイド類の作用が相殺されるけど、時間が経つに連れてテトロドトキシシンが体内から消失…そこからアルカロイド類の毒性が発揮される。確かに時限爆弾ですな」

「時限爆弾か、言い得て妙だな。私個人としちゃあこんなガチの研究者でもなければ到達出来ないような知識の会得や実験を行う気概をもつと良い方向に発揮して欲しいと思うぜ」

「そうよね…だつてその夫一般人なんですよ？良くやったわよ本当に……」

「全くですな…」

「ま、この辺でテトロドトキシシンとアルカロイド類に関しちや以上だな。次はサリンと VXガスについて見ていくぞ。こいつらはさつきとは違つて神経伝達に作用する毒だ。まずはLD50からだな、これを見ろ」

サリン ヒト経皮投与 LD50 28 mg/kg

VXガス ラット呼吸 LD50 15 μg/kg

「いや待つて、2つくらい突つ込みたい所があるんだけど!？」

「なんだ?言ってみろ」

「まずサリンのLD50のヒトつて…まさか人体実験でもしたの?」

「いんや、そういうわけじゃない。こいつは一応予測値になつてゐるらしい」

「そう…良かったわ」

「ま、本当かどうか知らねえがな」

「…不安にさせるようなこと言わないで頂戴」

「ま、そこら辺は今が良いだろ。んでもう1つはなんだ?」

「そんなの、もう…」

「VXガスの致死量の少なさ…ですよね」

「ええ、そうね。明らかに強すぎないかしら?体重1kg当たり15 μgつて…」

「べらぼうに強いな。だが世の中にはもっと少ない量で死に至るようなものもある、と

は言え滅茶苦茶毒性が強いことに変わりはないんだがな？」

「もつと上があるのね…やばっ」

「これ以上つて…何があるんですか？」

「投与方法が違うから一概には言えねえが…例えばボツリヌス毒素とかだな。マウスの静脈注射だが、 $1\mu\text{g}$ 、 $0.001\mu\text{g}$ でLD50に達する」

「…格が違うわね。最早どうやってその量だけ投与したのよ」

「確かにそれは私も気になるな。ま、その辺は知りたきや科学の専門家にでも聞け。私達に必要な知識じゃねえしな。つてわけでサリンやVXガスの毒性の強さは分かったな？だが注目すべきは数字じゃない、投与方法だ」

「投与方法…確かに両方違うわね。VXガスの呼気は分かるけど、サリンの経皮は…確か皮膚に接触することだったかしら」

「そうだ。これじゃイマイチイメージしにくいだろうから例えるが、たった一滴のサリンが皮膚に付着しただけでゲームオーバーだ」

「こ、怖いですね…つて一滴？サリンは気体ではないのですか？」

「そのことか。実はサリンもVXガスも常温常圧では液体なんだよ、だから使用する際には何かしらの方法で噴霧したりだとかで散布する。地下鉄サリン事件ではサリンを有機溶剤に溶解させたものを袋に密閉し、穴を空けて染み出させることによつて散布が

行われたな」

「なるほど、そういうことでしたか…」

「納得は出来たな？ んじゃ作用機序の話に行くぞ。こいつはさつきも言ったように神経伝達に関わる毒だ、よって神経伝達に関して少しだけ説明する。神経細胞はそれぞれが繋がっていないのはさつき言った通りだ、その別れた神経細胞間で情報の遣り取りを行うのが神経伝達なわけだがちよつと特殊な手法を用いている。まずは神経興奮が起こり、神経伝導によつて末端まで情報が伝わったとする。すると神経末端は次の神経細胞に向けてアセチルコリンという物質を放出するんだ。そしてそれを受ける神経細胞にはアセチルコリン受容体が存在する、この受容体とアセチルコリンが結びつくことによつて次の神経細胞へ情報が伝わるわけだな。だがアセチルコリンをずっと放出し続けるわけにもいかない、そんなことしたら同じ情報が永遠に伝わり続けちゃうからな。だからこのアセチルコリンを分解する『アセチルコリンエステラーゼ』という物質がアセチルコリンの放出から一瞬の間を置いた後に出てくる。このアセチルコリンエステラーゼによつてアセチルコリンが分解を受け、同じ情報が余計に流入し続けるという事態を防ぐことで正常な神経作用が行われているわけだ。だがサリンやVXガスはこのアセチルコリンエステラーゼを分解しちゃう。こうなると一度放出されたアセチルコリンを分解することが出来ず、延々と続いてしまうな？ こうなると神経がしつかり

とした情報の遣り取りが出来なくなり、結果として神経作用は止まる。起こる症状は他の神経毒と似たり寄ったりといったところだな。そういやノビチヨクなんか同じ作用機序だったか」

「要するに神経伝達が出来なくなつて呼吸が止まっちゃうってことね？」

「そういうこつた。これも同様に呼吸をなんとかしてやれば対処は出来る…が」

「地下鉄サリン事件の例を見れば分かるわよ、それが難しいつてことくらいね」

「そうだ。あんな風にはば撒かれると最早手のつけようがない。初期段階で大混乱が発生し、医療従事者の言葉にすら耳を傾けなくなるのが人間つてもんだからな」

「パニックになつた群衆程怖いものはない…」

「若干事態が違うが…ま、そうだな。だから私の管轄街ではこうした毒物に関する授業を義務教育で行うよう徹底させている。生き残りたきや知れ、つてな。このご時世だ、こうした知識が無駄になるなんてことはないだろう…出来れば無駄になるような世界を築いていきたいもんだが」

「でもそうなる…」

「ああ、私達は仕事を失う。つたく、ままならねえもんだぜ…つとこれは関係ねえな。今回の授業に関しちやこんなもんか？もつと他にも神経毒はあるが…どれも特徴は似てるし対処の仕方は、つと大事なことを言い忘れてたな。解毒についてだ」

「めっちゃや大事なことじゃないの。それで、どうやって解毒するのかしら?」

「結論から言っちゃまうが:無理だと思っただ方が良い」

「え?」

「確かに神経毒に関しちや蛇の持つ毒に対する血清だったり、サリンやVXガスの効力を逆手に取った解毒方法はある。テトロドトキシンとアルカロイド類なんかは真逆の作用を持つわけだから一見解毒に使えるようにも見える。だがな、ぶっちゃけ無理なんだよ」

「それは、どうしてですか?」

「まず分かりやすいのがテトロドトキシンとアルカロイド類だな。これに関しちや中毒症状に陥った患者に対して『適正な量』の毒を服用させなきゃならん。少なければ効かねえし多ければ結局はより強い中毒症状を引き起こしかねん。しかもその適量を患者を『目で見て』判断出来るか?無理だろ?だから解毒は肝臓に任せる他ないと思っておけ。サリンやVXガスに関しては一応完全に無毒化出来る解毒薬はある、しかしこれらにも問題があつてな:2種類あるんだが、1つはさつきと同じように適量を患者を目で見て判断しなきゃならねえ。もう1つは毒性に曝されてから時間が経つ毎に解毒の効果が減弱されていくという欠点がある。要するに早い段階で使用しないと意味がねえつてこつた。血清に関してもこれと同様の弱点があつたりするし、そもそも:そう

いった毒を持つ蛇が存在する地域に血清はないからな。全部が全部ないとは言わないが、頼りには出来ねえ。つうわけで解毒剤なんてないものと思つて行動した方が良い。解毒剤によつて助かつたなんて実例は極少数だからな」

「なるほど…そう上手くはいかないものなのね」

「というか解毒剤が意味を為さないつて言うのにそれでも解毒できる肝臓が優秀過ぎる気がするんですが」

「言われてみれば、確かに…人間の肝臓つて滅茶苦茶凄かつたり？」

「滅茶苦茶凄いで。ほぼ全ての物質を無毒化出来ると言つても過言ではないほどの性能を持つている。だから肝臓によつて解毒されるまでの間なんとかして患者を生存させることさえ出来れば取り敢えず命だけは助かるつてこつたな。神経毒は神経作用を止めるだけで神経を壊す毒ではないし、呼吸を促して生存させてやりや後遺症もなく助けることが出来るつて点は人間にとつて朗報だろう。しかしそれが実際に出来るか否かは現場の状況によるし、その知識をどれだけの奴が持つてて尚且つパニックの中正しい行動に移せるのか…それを考えりや樂觀視は出来ねえ。こちら辺はしっかりと教育して訓練させた方が良いと私は思つてるぜ」

「…世界がこうなる以前の資料を見てもそういうことを行つている場所は最早ないと言つても良いくらいじゃないでしょうか？」

「残念ながら、な。テロが起きない国なんてないんだし、そこら辺もつと危機感持つてやった方が良いと思うんだがなあ……ま、こうなつちまつた以上人間の意識も変わつてだろうしそういった教育や訓練はありがたがられる位だろうよ」

「そうね。私達もいざという時に動けるようしつかり訓練しなくちゃね」

「特にお前達人形は神経毒は効かん、よつてVXガスなんかがばら撒かれた状況でも安全に行動することが可能だ。私やクレア、イーサンはほんの少しでも吸えばアウトになるから事実上無力化されるからお前達だけが頼りになる。もし万が一そうなつた時は頼むぞ？」

「はい！」

「良い返事だ。よし、今回の授業はこれで終わりにしよう。時間も丁度いいしな。今回は比較的テロ目線だつたが次回は暗殺で使われる可能性が高い青酸トリシンについて教えるぞ、予習をする必要はねえが一応伝えておく。んじや、解散！」

そう言つてスカレットは教室を出て行つた

後に残つたFN49とモシン・ナガンはスカレットから頼りにされるのが嬉しかつたのか気分が上がつており、いつもよりも復習に力が入るのを感じていた

こうして今回も無事に授業は終わり、次へ向けて彼女達は動いていくのであつた

座学3日目 四時間目

「さあ毒物解説も早いもんで第3回だ！そして毒に関しては今回で終わりになる」

「随分唐突ね……まあ良いけれど。それで、4時間目で終わりつてことは次の授業では何をするのかしら？」

S09H基地の資料棟の教室、最早説明不要だろうがそこではスカーレットによる授業が行われていた

「次の授業では『銃創とヘッドショットについて』をやる予定だ。ま、それは良いだろう。とにかく今から暗殺で使われがちな毒物……『青酸トリシン』について教えていくぞ」

「よろしくお願いします！」

「おう！んじやまずは青酸からだな。青酸は前回やったような神経毒ではないし勿論出血毒ともまた違う毒だ。こいつの作用機序は……つとその前に致死量からだな、これを見ろ」

ラット経口 LD50 5~10mg/kg

「なんか強いのかそうじゃないのか良くわかんないわね」

「フグ毒とかと比べると明らかに少ないですけど……案外大したことないんでしょうか」
「馬鹿言っちゃいけないえ、この青酸も猛毒だ。今までやってきたやつが毒の中でも規格外ってだけだしな。この青酸の作用機序は一言で言えば『細胞を殺す』という作用を持つている。これだけじゃ余りにも雑過ぎるからもう少し細かく見ていくか。まず青酸はシアン化水素とも呼ばれていて、気体だ。さっきのLD50に関してはシアン化水素のLD50のデータが見つからなかったからシアン化カリウム……所謂青酸カリというもののLD50である点に注意しろ。シアン化カリウムは個体だから経口なわけだな。シアン化水素は呼吸によって肺から吸収され、シアン化イオンとして血中に入る。その後全身の細胞へと到達し、そこで毒性を発揮するわけだな。んで青酸が具体的に何をするかだが……『シトクロムcオキシダーゼの阻害による細胞呼吸の阻害』、って言うって分かるか？」

「何がなんだがさっぱりです……」

「意味不明ね」

「ま、そうだよな。よし、簡単に説明すつぞ、まずは細胞呼吸が何なのかつてところだな。私達が普段言うような呼吸と生物学的に言う際の呼吸というものには若干の差異があつてな、生物学的には外呼吸と内呼吸に分けられる。この内の内呼吸が細胞呼吸だな。外呼吸と言うのは私達が普段から認識している呼吸のことで、肺を使って酸素を取

り込む作用のことだ。その外呼吸の後に取り込まれた酸素を使って細胞の生存に必要なエネルギーを産生するのが細胞呼吸になる。ここからは細胞呼吸によってどうやってエネルギーを生み出しているかを見ていくが…あまりにも複雑だから簡素に行くぞ。んで細胞呼吸を行う際に必要な酵素の中にシトクロムcオキシダーゼというものがある」

「さつきも出てきたやつよね。それって何をする酵素なの？」

「細かい話は省くが、エネルギー産生経路の最後に作用する酵素だ。つまりこいつが働かなくなると細胞内のエネルギー産生機構がエネルギーを意味出すことが出来なくなっちゃう。これ即ち、細胞の生存に必要な機構が停止するってこった」

「それじゃあ細胞で出来ている生物は…」

「ああ、死ぬ。簡単に纏めると青酸はイオン化することで細胞の生存に必要なエネルギーを産生する細胞呼吸に必要な酵素の1つを阻害することで結果的に細胞を殺す毒、つてところか。もっと簡単に言えば酸素がそこら中にあるのに身体は窒息してるよいうな状態になるってこった。因みに青酸カリは個体だから口から摂取して胃酸と反応することで青酸となり、それが血中へ吸収されて…後は同じ経路を辿って毒性を發揮するぞ」

「酸素があるのに窒息って…えげつないわね」

「これって解毒剤とかは…」

「一応あるが、そう都合良く近くに解毒剤があるとは思わないこつたな。それに青酸と
言うのと良く『アーモンド臭がする』という話を聞くだろう、青酸で殺された人の口から
アーモンド臭がするつてな。あれ、危ないからやつちやいけなせ」

「え、漫画とかでは良くやつてるくない？」

「漫画は漫画だ、現実とごっちゃにするな。青酸を含んだ空気を自ら体内に入れること
になりかねないから危険なんだよ。ほんの0.1%の濃度でも一瞬にして意識混濁状
態とかになるかもしれねえ」

「うっは、そんなのもうあの漫画の主人公死んでるじゃない」

「ま、そうだな。それとその漫画で言うならあの麻酔針なんかも超絶危険な代物だな。
あんなもん撃ち込まれりや普通の人間は一発でお陀仏だ。ああいった創作物に対して
現実的な目線で突っ込むのはナンセンスではあるが、現実ではどうなのかを知らねえと
危険な目に遭ったり知らず知らずの内に誰かを追い詰めたりしかねないから知ってお
くことは大事だ。『現実には麻酔銃なんてクソの役にも立たねえ』こととか、な。因
みに青酸のアーモンド臭だが、青酸から漂うアーモンドの臭いは収穫前の臭いであるこ
とに注意しろ。製菓に用いるような甘いアーモンドエッセンスとは全くの別物だぞ。
また臭盲と言って遺伝的にこの臭いを感じることの出来ない人間が20%〜40%程

いる点にも注意だな。人間が青酸で毒殺された奴の口元の臭いを嗅ぐのは厳禁だが、お前達人形は前回の神経毒と同様にこの青酸が作用する作用点が存在しないことから安全だ。だから別に機会がありやあ嗅いでも問題はねえが：収穫前のアーモンドの臭いを知らなきや意味はねえぞ。気が向いたらK-11の所に行つて青酸の臭いでも嗅がせてもらつておけ」

「いや作つてるの!?!」

「たりめえだ。毒物と言えど上手く使えば薬にもなる、それに青酸は工業的に重要な物質だからな。構造も単純だしその気になりやあ私でも作れる。だがこれは逆に適切な機械さえあれば簡単に作れ、誰でも入手が容易であるといふことの裏返しでもある。更に青酸の恐ろしさはな、『誰にも気付かれることなく容易出来てしまう』という点にもある」

「どういふことですか?普通毒物なんて集めようとしたらどこかで分かるような気がするんですが…」

「青酸配糖体という言葉聞いたことはあるか?」

「いや、ないわね…でも字面から察するに青酸が含まれている物質つてところかしら」

「そんなところだ。この青酸配糖体なんだがな…身近なところだと果物なんかに含まれてたりするんだよ」

「果物に!?!ど、どういうことですか?」

「果物、特に未成熟な実や種なんかにはアミグダリンという物質が含まれている。このアミグダリンは青酸配糖体の一種でな、これ自体に毒性はないんだが体内で代謝を受けることで最終的にシアン化水素…要は青酸となる。とは言え含有量はほんの僅かだ、未成熟な梅の実で死のうと思つたら成人で300個くらい摂取する必要がある」

「いや無理でしょ…てことは梅酒なんかも安全なわけ?」

「梅酒か、それに関しちや大丈夫だ。梅の実300個分も飲めるわけねえし、もし飲んだとしても先にアルコールで死ぬ。それにそもそも青酸は安定性が高くない、長期間保存することで勝手に消滅してるから安全だ。だが逆に考えてみる、『梅酒を作るんです』とか言つて無成熟な梅の実を集めて中からアミグダリンだけを抽出することが出来た場合…誰にも悟られることなく致死量の青酸を入手することも不可能ではない。梅酒を作るのであれば一度に300個以上の梅の実を扱つたつて別に不思議じゃねえしな」

「なるほど…そんなことも可能なんですね」

「それにこれは梅の実に限つて話してるが、他にも青酸配糖体を含んでる自然物と言うのは多くある。それらから青酸を抽出してやれば猛毒の完成だ、青酸の恐ろしさはこの『入手の容易さ』にあると個人的には思っている」

「そう言えば何かの豆にも含まれてるとか聞いたことあるわね…加熱調理せずに磨り潰

して振り掛けのようにして食べるダイエツト法がテレビで報道されたせいで、多くの家庭で青酸による中毒が発生したとか……」

「良く知ってるな、そいつは確か日本で起こった事件だったか。その事件からも分かる通り一般にはあまり知られていないのも危険性の1つだろうな。これで青酸に関しては良いだろう、さつさとリシンについて教えねえとな」

「リシンねえ……聞いたことのない毒ね」

「ですな」

「まあ一般にはあまり知られていないものだな。こいつはトウゴマの種子に含まれている毒になる」

「ゴマ? ゴマってあの……」

「何を考えてるか分かるが、違うぞ。普段私達が食すゴマとは別物だ。トウゴマは食用ではなくその種子に含まれる油分を目的に栽培されている、ヒマシ油って奴だな。暗殺に使われるって点だが、これは実際に起こっている。アメリカでも大統領などに送られた封筒からリシンの反応が検出されたりとかな」

「アメリカ大統領にとって……そりやもう暗殺する気満々じゃないの」

「もしくは何かしらの警告か……ま、なんにせよ時折ニュースになることがあるから知ってる奴は知ってるかもな。んでこのリシンのLD50だが、こうなっている」

マウス経口 LD50 300 μ g/kg

「ざっと計算すれば60kgの成人が1.8mgで半数死ぬことになるのね」

「そうだな、まあマウスの数値だから違いは出るだろうが…まさか人間を使って実験するわけにもいかねえしな。よし、それじゃあ作用機序の方を見ていくぞ。リシンの作用機序は『細胞質中のリボソームを阻害し、タンパク質合成を阻害する』だ」

「…それだけじゃ何も分かりませんね」

「だろうな。つうことでちよつとだけ、ほんのちよつとだけ細かく見ていくぞ」

「なんでそんなちよつとだけを強調するのよ」

「いやこのリシンに関しては非常にややこしくてな…真面目に解説しようとするとなんか10時間くらいかかっちゃう」

「…どんだけよ」

「だから滅茶苦茶端折る、それでもしねえと解説の仕様がねえからな。てことで行くぞ、このリシンだがまずは細胞質の中へ侵入する必要がある。だが細胞質の中へ入るには細胞膜を突破しなきゃならん。んでこの細胞膜と言うのは結構優秀でな、タンパク質であるリシンごときが簡単に侵入出来るほど柔じゃねえんだ。だがリシンはこの問題で色々なものを利用して解決し、侵入する。その後もなんやかんやとあつて細胞質へ移動し、プロテアソームというものによって分解を受けて初めて毒性を発揮することにな

る」

「クツソ端折るわね」

「仕方ねえだろ、ここら辺はまだ解説しても良いかとも思ったがぶつちやけ解説したところで大して意味もないしょ。んで分解を受けたリシンの内一部が毒性を持ち、活性化したりシンはリボソームのサブユニットに存在する重要な部分を切り取る…まあ要するに細胞質中のタンパク質の生成に関わる機関の一部を切除するってこつたな」

「ということとは…タンパク質を作れなくなる？」

「そうだ。しかもリシンは切り取るだけ、リシン自体には何の変化も起こりやしねえ。他の物質なら何かしらに結合することで効果を発揮するものが多く、形が変わったりするんだが…リシンにはそれが無い。これが何を意味するか分かるか？」

「変化が起きないってことは…活性化したりシンは毒性を失わない？」

「ちいと違うが…概ねその通りだ。たった1つでもリシンが活性化しちまえばそのリシンは全身の細胞質中のリボソームを切除して壊しまくる。活性化したりシンが1つだけなんてこともねえから生体はもうタンパク質を生成することが不可能となる。んでタンパク質を生成出来なくなると細胞は『アポトーシス』という現象を起こす」

「アポトーシス？なによ、それ」

「一言で言えば『細胞の自殺』だ」

「え、自殺って……てことは」

「ああ、全身の細胞が死ぬ。本来アポトーシスは生体に不要となった細胞を劣化させて排出するための機構でな、人間で言うなら古い皮膚が垢になつて落ちるだろ？あれがそうだ」

「じゃありシンはそのアポトーシスを無理矢理引き起こすことで全身の細胞を殺している……」

「そういうことだな。しかもこんな作用だ、他と同様……いや、他のやつ以上に解毒なんて出来ないと思え。もしこの毒に曝された場合、私でも最早どうにも出来ずに死ぬだろう」

「いくら強くても人間、生物であることを利用した殺し方には無力なことなのね」

「悔しいが、その通りだ。その為私達はそういった毒に接触することがないよう警戒するしかない、お前達人形は細胞を持たないから何も起きないんだがな」

「……こうしてみると私達って毒に対する切り札と言つても過言ではない気がしますね」

「そうだな、この毒物に関する授業を行ったのには知識を広げる他にもそのことを意識して欲しいというものがある。毒が蔓延してようが一部を除いてお前達には効果が無い、ドールジャマーは戦術人形の各種システムをダウンさせるがシステムに頼らないこ

の基地の奴らには無意味だ。こうすることでどれほど過酷な状況だろうが活動出来るようにしているわけだな。ま、流石に崩壊液に対する耐性を持たせることはまだ出来ないがな。放射線に関しちや影響を受けるのは生体パーツのみ、つまり生体パーツを除去したボディに換装すりゃあ良い。後は訓練で様々な環境に於ける戦闘技術を叩き込んでやれば……恐ろしい軍隊の完成だ」

「結構えげつない考え方ね……でも理には適ってるわ。でもそれならわざわざここまで授業で説明するまでもなかったんじゃないの？効かないってことだけ教えてくれれば良かったように思うけど」

「確かにそうですよね」

「浅はかだな。正しく知り、正しく警戒する。これは一見必要ないように見えて非常に重要だ。ちゃんと知っておけば正しい理解から正しい行動に移せる、知ってなきや出来ない。ほれ、一昔前に世界中で新しい型のウイルスが流行した時だつて大勢の人間が正しい理解をしていなかったせいで正しい警戒をすることが出来てなかったじゃねえか。本質を見極められず意味のない行動や規制、非難とか色々酷いことをずっと繰り返してやがった。馬鹿なんじゃねえかと思えねえな」

「け、結構容赦なく言いますね……でも言いたいことは分かりました」

「そうね、知ってなきや頓珍漢なことしか出来ないってことなのね」

「まあ言っちゃまえばそうだな。つてことで今回の授業はここまでだ、前々回と同様質問がありやあ遠慮なくしな」

「あら、それじゃあここなんだけど…」

毒物最後の授業も終えたところで余った時間を質問時間へと割り当てたスカーレットは2人からの質問に丁寧に答えていく

そうこうして時間も来たところまで彼女は2人に『あ、次の授業は若干グロイ表現も出てくるから覚悟しとけよ』とだけ言い残して教室を出て行った

その言葉を聞いたFN49とモシン・ナガンは『…マジ?』という顔をしてゲンナリとしたが、気を取り直して復習に励むのであった

座学3日目 五時間目

お昼ご飯も食べ終えたFN49とモシン・ナガンが教室でゆったりとしているとスカーレットがやって来た

「おっし、んじや最後の授業を始めッぞ〜」

「確か銃創とヘッドショットの話だったわね」

「そうだ。早速話を進めるぞ、まずは『瞬間空洞と永久空洞』についてだ。銃弾というものは凄まじいエネルギーを持っていてな、生体に撃ち込まれた場合ただ単に穴が空くだけじゃ済まねえ。生体内に侵入すると周辺の組織を押し飛ばすんだ、この時出来る空洞が『瞬間空洞』だ。しかし生体の組織は押し飛ばされても元の状態に戻ろうとする、そうして戻って来るんだが完璧に戻ることは出来ず幾らか空洞が残る。これを『永久空洞』と呼ぶ。これらの空洞（主に瞬間空洞）によるダメージが銃弾の威力の本質だ、対物ライフルなんかで使う弾は弾頭質量と速度共に優れているから瞬間空洞が滅茶苦茶大きく出来るわけだな。だから、50BMGなんかだと人体が両断される、まあ両断と言うか周辺組織が消し飛んで結果的に両断されたように見えるだけだな。瞬間空洞

と永久空洞はこの画像を見ると分かりやすいだろう」

「一応知ってはいるけど…鉄血以外に撃つたことがないから人体に撃つとどうなるか見たことはないわね」

「鉄血も生体パーツを使っているので外側は似たようなことになると思いますが…」

「大体は同じだな。生体パーツは人間の身体に似せて作られているから起こる現象は似ている。だが内部の機械部分は違うから完全に同じとはならねえな。因みに私達が扱うような大口径ライフル弾を人間に撃ち込むとどうなるか見たけりゃ『50 caliber er headshot』で画像検索してみると良い。ただこれは結構容赦のない画像が出てくるからグロ耐性がないならやめておけ。それと見る際には自己責任で頼むぞ？ここで画像の提示は行わん…そんなことしたら間違いないく運営に怒られるしな」

「…でも私達は先に知っておいた方が良いわよね」

「そうだな、いずれは人間を撃ち殺すことにもなるだろうしな」

「えっと、50 caliber headshotでしたっけ…うっ」

「これは…キッツイわね」

検索したFN49は口元を抑えて呻き、モシン・ナガンはその顔を顰めた

それで済んでる分やはり彼女達は戦術人形なのだろう、普通の人間がこれを見れば吐いてしまう者が大半だ

「ま、碌に防弾装備をしてないとそうなる。そして瞬間空洞に関して医療従事者ですら勘違いしていることがあってな……『銃創は背中側の傷が酷くなる』って聞いたことないか？」

「ええ、聞くわね。それって間違いなのかしら？」

「間違いとも言えねえが正確ではないな。これは要するに撃たれた側じゃなく弾が抜けた側が酷い傷になるって話なんだがな、瞬間空洞が大いに関係してくる。銃弾によつて瞬間空洞が出来ると言つても体内に侵入した直後から出来るわけでもなければこの空洞が永遠に出来続けるわけでもない。瞬間空洞が発生するまでに少し間があるしその内エネルギーを失つて空洞が小さくなつていく。つまり瞬間空洞には最も大きくなる部分が存在するということだな。この大きな空洞が出来るときで銃弾が抜ければ確かに背中への傷は酷くなる、しかしエネルギーを失つて空洞が小さくなつてから抜ければ傍目には大した傷には見えねえ。勿論内部ではえぐいことになつてから重症なんだかな？」

「要は『人体だと瞬間空洞が大きくなる辺りで抜けることが多い』つてことですね」

「そういうことだな。医療従事者もガンマニアってわけじゃねえし銃弾に関してそこま

で詳しくはない、それに結局はそうなることが多いんだからそういう認識で問題が発生することは少ない」

「別にそれで良いってわけね」

「ああ、だが銃を扱う私達軍人がそれを正しく理解してないのはただじゃない。だから簡単に説明したわけだな。次にヘッドショットの話をするぞ、意外な話になるかもしれないから良く聞いておけ」

「意外って…ひよつとして死なないとか？そんなまさかね…」

「なんだ、勘が鋭いじゃねえか。その通り、ヘッドショットしたからと言って死ぬとは限らねえんだよ」

「？でしよ!?だって、鉄血とかは皆死んで…!」

「まあまあ落ち着け。確かに鉄血はヘッドショットすりやほぼほ死ぬが、そいつは人間とは構造が違うからだ。良いか？お前達も鉄血も含めて人形は精密機器だ、特に頭の中には電脳が入っている。精密機器つてのは一部が壊れただけでも機能に支障を来して動作しなくなることが多い、人形の電脳も同様だ。だから状況次第じゃ掠っただけでも重度の機能障害を引き起こす可能性すらある。だが人間の場合掠る程度じゃ死なないのはイメージ出来るな？無論治療せずに放つときや死ぬかもしれないが…ま、その辺は今が良いか。人間に於けるヘッドショットの話ですつぞ。人間に対するヘッドショット

トに於いて重要なのは『銃弾の種類』と『被弾部位とその角度』だ」

「銃弾の種類は分かりますけど…被弾部位と角度、ですか？」

「そうだ。ヘッドショットを受けて生き残った人物として最も有名なのはシモ・ハイヘだろう。彼は冬戦争で活躍したスナイパーでありハンターだが、終戦間近に顎を横から撃たれて前線を離脱している。その後彼は生き残り、天寿を全うした。顎って言うのはかなり頑丈なパーツでな、更に脳に損傷が及ばないことから撃たれても比較的 안전한場所となる。そして顎や歯は余りにも頑丈なせいかな非力な拳銃弾だと跳弾が起こる可能性すらある」

「歯に当たって跳弾って、そんなことがあるの？」

「ああ、あるぞ。事件名は忘れたが…そんな事件があったはずだ。更にヘッドショットと言うと即死のイメージが付きまとうが決してそんなことはない。即死するのは脳幹という脳の最深部に存在する部位を損傷した場合のみだ。流石に脳幹を損傷するともうどうにもならんし、脳幹を損傷してるってことは脳の他の部位も大きく損傷してるしな。特に掠めるようなヒットだと死なないパターンが非常に多い、実際脳の1/4をライフル弾で抉られた少年が生き残るなんてことも起こっている。ヘッドショットしたからと言って絶対に死ぬ、なんて先入観は捨てる。そもそも銃撃による死亡率は20%もねえんだしな」

「20%未満ですか!?そ、そんなに低いなんて…」

「当然これは銃撃全体に於けるものだからヘッドショットとは限らねえんだがな。つてことでヘッドショットのデータなんだが、アメリカの都市部だと50%以上の奴が生き残っているというデータがある。都市部だし恐らくは拳銃弾が多いから故なんだろうが、それでもこれだけ死亡率は低い。だがな、別に殺す必要なんてない。銃の世界に於いてストップピングパワーという言葉があるんだが、こいつは『対象を行動不能にする力』のことだ。ヘッドショットをしてやりやあほぼ確実に行動不能に陥らせることが可能となる、そして拳銃弾だと確実に相手をストップピング（行動不能に）出来るのはヘッドショットだけだとも言われている。死なないからと言ってヘッドショットをする価値がないという訳じゃないことは留意しておけ」

「ヘッドショットでも殺せるわけじゃないなんてね…これは意外だったわ」

「そうだな、私も初めて知った時は驚いたもんだ。ゲームだと拳銃でもヘッドショットで確定即死、胴体でも数発で確定キルだったりするがあれはほぼあり得ねえ。ストップピングは可能だが…それでも胴体じゃ数発撃つてもストップピング出来なかつたという報告もあるし、期待しない方が良いだろう」

「意外過ぎますね…」

「民間からの採用で指揮官になった奴は知らないかもな。グリフィンは鉄血の封じ込め

が主要な任務だし、知らなくても問題ねえつてのも事実だ。だがお前達はいずれ人間相手に銃を向けることになる、だからこゝら辺は良く知っておく必要がある」

「そうね、普通は絶対に死ぬつて思うもの。殺害が目的の場合に殺せなきゃ任務失敗だものね」

「ああ、だが私達が扱う銃弾の場合はさつきも見た画像の通りほぼ確実に殺せる。無論ヘッドショットの場合だがな？ 胴体ヒットでも殺せるつちや殺せるが：肺や心臓を破壊しないと確定キルにはなりにくい、注意しろ。こゝら辺はターゲットがどういう状況にいるかに左右されるぞ。周囲に高度な治療を早急に行うことが可能な状況であれば、助かつてしまう危険性がある。ま、心臓を破壊した場合の生存率はヘッドショットより低いから気にすることでもないかもな」

「あら、そうなの？」

「そりやそうだろ。脳の場合はある程度削れても場合によつては他の部位が補うことで生存することがある、さつきの脳の一部を持って行かれながらも生き延びた少年なんざ良い例だ。だが心臓に代わりはない、ここが破壊されりや血管を通して各部に血を巡らせることが出来なくなる。それは同時に各臓器に酸素を送れなくなることを意味し、生存を不可能にする。ここから生き延びるにや速攻で臓器移植やペースメーカーの埋め込みなんかを行つて心臓の機能を復活させるしかねえ。だがそれが可能な状況なんて

ほぼない、その上心臓が破壊されているということは肺も破壊されていることが殆どだ。それに拒絶反応の問題もあるし大動脈や大静脈なんかのデカイ血管も酷い損傷を受ける、これを治療するのは不可能に近いと言つて良いんじゃないか？私も医療の専門家じゃねえからこころ辺は間違つてるかもしれないねえが、少なくとも脳を狙うよりは簡単で現実的と言えるだろう。無論、確実に脳幹を破壊出来るようなヘッドショットをかませると確信したならすりゃ良いがな」

「なるほど……ということとはヘッドショットつてそんなにしなかつたりしますか？」

「あんまりやらねえな。私は2kmでヘッドショットを狙えるよう訓練してるが、そんなの普通に考えりゃ馬鹿馬鹿しい話だ。ヘッドショットを狙うのは600mまでにしておくのが一般的なんじゃないか？それ以上は正中線（身体を中心のライン）を狙うのが良い。私がヘッドショットが出来るようにしてるつてのはそれだけの精度で撃てるようにつてだけで本当に狙うためじゃねえ。数日前の任務で狩人の頭を吹き飛ばしたが、あれも私なら出来るつて確信してたしそれが決して驕りではなかったから狙つただけだ。それにハイエンドともなりや電腦かコアをぶち抜かない限り無力化は厳しい、あの状況じゃ狙うべきだと判断したのも要因だ。こうしたように状況次第でヘッドショットを狙うか否か、それは左右される。別にする価値がないなんて言わないが、ヘッドショットに固執することのないように注意しろよ」

「何事も臨機応変に、ね…言われてみればあの時かなりきつぱくした状況だったわよね。失敗すれば民間人2人の命が失われるかもしれないんだもの、良くあの場面でヘッドショットを狙って当てたわよ本当に」

「そうですね、責任も重大ですし私なら手が震えそうです…」

「そうだな、これに関しちや最早慣れだ。何度も何度も経験を積むことで慣れていき、緊張しすぎないようにしていく。言つとくが全く緊張しないのは逆にダメだぞ？程良い緊張感はパフォーマンスの向上に繋がるからな」

「え、同志も緊張するの？」

「たりめえだ。人の命が掛かってるのに緊張しない訳あるか」

「…いい、今までで一番意外なことですね」

「そうね、何事にも一切動じないものと思ってたわ…」

「どんな目で私を見てんだよお前ら…まあ良い。この辺はまあ実践で叩き込んでやるから楽しみにしてる。つてことでこれにて授業は全て終わりだ、明日復習の為に1時間自習時間を設けた後に試験を行う。そこで全問正解しろ、出来なきや出来るまでやるぞ。出来たらちよいと休憩を挟んでから身体能力を上げる訓練から始めていく。そんな感じの予定になる」

「最初は身体能力の訓練…？私達人形は身体能力は上がらないわよ？」

「確かに。だが技量を上げることは出来る、それが目的だ。まずは自分の身体を頭の天辺から足の指先まで完全に自意識の支配下に置いて完璧に操れるようにする必要がある。これが出来る奴は人間にも人形にも中々いねえからな、特殊な場合を除いてこの基地ではこれが出来ない奴は銃を扱う資格すらないと思っておけよ」

「完璧に操る…そう言われればちよつと自信はないですね」

「だろ？それを成す為にまずはその訓練…ぶつちやけりや格闘を叩き込むぞ」

「…そう言えばお師匠って近接格闘なんて出来るのかしら？ちよつとイメージ湧かないんだけど」

「無論出来る。甘く見てると吹っ飛ばされつぞ、気を引き締めとけ」

「そ、そうなのね。油断しないようにしないと…」

「そうしておけ。気の緩みや油断なんかを見付けたら一切の容赦なくそこを突きまくるからな、訓練を訓練と思わず実戦と思うようにな。さて、もうちよい話したこともあるが時間も時間も。なんか質問とかないか？明日試験だしここいらで勉強した知識を確実なものにしておけ」

「そうですね、それじゃあこのことなんです…」

その後FN49とモシン・ナガンはスカーレットに質問をしていく

そんな2人に彼女はちよつとした試験対策のようなものも教えていき、2人はそれに

感謝を示した

そうこうして授業時間は過ぎ、終わりを告げると共にスカーレットは教室を後にした

「んで、試験問題はもう出来てんのか？」

「完璧よ、指揮官」

「問題ありません」

スカーレットは教室を出たその足で資料棟の別な部屋へ向かい、そこで色々と準備をしていたWA2000とM2000に聞くと返事が返って来る

その返答に満足した彼女は頷くと試験問題に目を通しながら彼女達と会話をする

「ま、この程度なら全問正解も難しくねえな。出来て当たり前レベルか」

「そうですね、これ位出来てもらわなければ話になりませんし」

「全くよ。ここで躓くようならここじゃ絶対にやっていけないわ。とは言っても…」

「ああ、あいつらなら問題ねえだろ。1発クリアするだろうしその後の訓練でも良いものを見せてくれそうだな。あ、そういやモシンの奴がM200が近接格闘なんて出来るのかとか言ってたな」

「おや、あの子がそんなことを…ふむ」

「ぶっ飛ばして目を覚まさせてやりな」

「そうします。その油断は見逃しなりませんしね」

「どうやらモシン・ナガンは悲惨な目に遭うことが確定したようである
そんなことを話しながら彼女達は次々と準備を進めていく

準備をしている彼女達は大真面目で、しかし何処か楽しそうであった

小話その5 クレアの実力

「さ、今日もよろしくねマキちゃん」

「はい、こちらこそお願いします！」

S09H基地のデータルームにて後方幕僚のクレアと後方幕僚候補のマキが仕事を始めていた

基本的な仕事を任せつつ適度に新しいことを教えていくクレアの顔はとても楽しそうであった

だ
どんと面白いように仕事を覚えて吸収していくマキは教え甲斐のある生徒なのだ

しかも自分以上にPCの扱いが上手い、クレアはこの優秀な生徒の成長を非常に楽しみにしている

「ん？クレアさん、これってなんですか？」

「なにに？ああ…諜報部隊関連のものね。かなり高度なプロテクト掛けてたはずなのに良く見つけたわね」

「諜報って…もしかして、開いちゃまずいやつでした？」

マキは何処か申し訳なきような、僅かに恐怖を感じているような表情をしていた
そんなマキに対してクレアは優しく微笑む

「うーん、あんまり良いことではないけど…まあ大丈夫よ。いずれはマキちゃんを後方
幕僚にするつもりなんだし、知るのがちよつと早くなつちやつただけだね」

「だ、大丈夫なんですよ？ 知つたら消されるとかないですよ？」

「ないない、そんなに心配しなくてもそんなことしないから」

「よ、良かった…」

クレアの言葉にマキはホッと胸を撫でおろす

その動作を目で追うクレアは眩くように言葉を零す

「にしても…相変わらず大きいわね、マキちゃん」

「ふえ？」

「私も結構自信はあつたけど…これは負けるわ」

「あ、胸のこと言ってますね？ セクハラですよ！」

「まあまあ、女同士なんだし…つてこの前お風呂場でずん子ちゃんときりたんちゃんの
思いつ切り触つてなかつた？」

「な、なんで知ってるんですか!？」

「ふふ、私も伊達で諜報部隊のエリートを務めてたわけじゃないつてことよ」

上品に笑うクレアにマキは未恐ろしさを感じつつも嫌な感じはしなかった

それは絶対的な味方であり、付き合いは短いものの自分の力を認めてくれる良い上司として慕っているのが原因だろう

その後暫く仕事をし、午前中に仕事が全て終わってしまった

「やっぱりマキちゃんの処理スピードが速い所為かすぐ終わるわね」

「えへへ…これは誰にも負けないって思ってるので」

「そうやって自信を持てるものがあるのは良いことよ。さて、そろそろ12時だしお昼にしましょうか」

「あ、もうそんな時間でしたっけ」

「私としてはまだそんな時間って感じだけどね…」

そんな会話をしながらクレアとマキは廊下を歩き、食堂を目指す

「しっかし本当に広いですよね、ここの食堂」

「そうね、この基地は大所帯だしこれからも増えていくだろうから敢えて大きすぎる位にしたのよ」

「ほえー、グリフィンの基地の中でも大きい方なんですネ」

「大きい方と言うか…1、2を争うレベルよ」

「あ、そんなに大きいんだ…」

マキはクレアの言葉に少し呆気にとられながら食事を摂る
そんなマキを見ながらクレアも食事を進め、やがて食べ終えていく

「さて、もう仕事も終わっちゃったしどうしましょうかね…」

「そうですねえ」

「そう言えば最近訓練してるんだっけ？私がやってあげようか」

「え、クレアさんが？」

「ええ。私だつてこれでも軍人なんだから結構出来るのよ？」

「じゃあ、お願いしても良いですか？」

「任せて！」

こうしてクレアによる訓練が行われることが決定し、琴葉姉妹を除いた日本組が集められた

彼女達はカフェを空けられなかったのだ

「さて、今日は銃は一旦お休みして格闘の訓練をしましょうか」

「格闘？必要なんですか、それ。銃が使えれば問題ないように思いますけど」

「きりたんちゃんとはトラブルに巻き込まれた時に毎回銃を抜くつもり？貴女達に銃の扱いを教えているのは抑止力としての面が強いし、何かある度に銃でしか解決出来ないのも問題があるわ。だからこれから貴女達に護身術の基本を教えるの、これで納得出来ない

「？」

「なるほど、分かりました。確かに銃を撃ちまくってたらヤバい人ですもんね」

「そうね。それに何かが起こったなら一目散に逃げるのが一番だわ。銃を抜くのは本当にもうそれしか手がないって時だけ、最悪中の最悪の事態なの。そして護身術っていうのは色んな危機的状況から『逃げる隙を作る』為のものよ。決して相手を倒すものじゃないってことは理解してね」

「逃げる隙を…でも自分だけが助かるのは」

「その懸念は分かるわ、でも安心して。護身術はその場にいる家族や友人といった大切な人を逃がす為の時間稼ぎも含まれてるの。大切な人を逃がせたら自分もその場から逃げる、この時大事なものは無関係な人達まで護ろうとしないこと。護身術はあくまでも『自分と大切な人の命を危険から遠ざける』ものなの、必要以上に誰かを護ろうとはしない。そういうったことは私達に任せて」

「でも…」

「それでも護りたい、そう思うのも無理はないわ。でもね、その為には力が必要よ。全ての脅威を退けて自分も含めて護りきる、そんな圧倒的な力がね」

「貴女はその力を持つてるってことですか？」

「ちよつときりたん…」

「これから教えてもらうんですよ？それなら相手の実力を知っておきたいと思うのは当然じゃないですか」

「それは、そうだけど…」

「良いのよずん子ちゃん。そうね、それなら私の力を見せつけておこうかしら。ゆかりちゃん、相手してもらってもいい？」

「分かりました、これは本気でやっても？」

「ええ、お願い。私は手加減してあげるけどね」

「…言ってくれますね。後悔しても知りませんよ」

「ふふ、是非させてちょうだい」

両者が言葉を交わすとゆかりの身体から闘気が迸る

対してクレアからは何も感じ取れない、これは見物している者達だけではなくゆかりも同様だ

そのことに得体の知れなさを感じるもゆかりはクレアと相對する

2人が訓練場の両端に位置するとマキが手を振り上げた後、勢い良く振り下ろすことで開始の合図をした

その瞬間、ゆかりの視界からクレアの姿が消えた

「っ!くっ!!」

それに対してゆかりは一瞬動揺するも死角に入られたのだと察して後ろ蹴りを放つ
しかしその蹴りは空を切り、人体を蹴る感触がすることはなかった

それを受けてゆかりは振り返りながら手刀を放つ

しかしまたその手刀は空を切るだけに終わり、クレアの姿を捉えることも出来なかつた

「なに、あれ…ゆかりんが遊ばれてるなんて…」

「ちよつと、レベルが違い過ぎるね…」

「…化け物じゃないですか」

この光景を外から見ているマキ、ずん子、きりたんの3人はその顔を驚愕に染めていた

やっていることは分かる、クレアがしているのは言葉で表すのは簡単だ

戦いが始まってから常にゆかりの死角を取り続けている、それでゆかりの視界から消えているのだろう

そしてずん子の目はクレアが凄まじい速度でゆかりの身体に当身を寸止めしているのを僅かに捉えていた

強弓を扱っていて動体視力が鍛えられているずん子ですら少ししか見えないその攻撃を放ちながら、クレアは激しく動くゆかりの視界から逃れ続けている

真後ろに向かつて放つて来るゆかりの攻撃にもしつかり対応し、彼女が振り向きや回転といった動作を行つてもその視界に映ることがないように動いていく

特にマキは同じV・S・としてゆかりの実力の高さを知つてゐるが故にクレアの圧倒的な動きに目を奪われていた

彼女はV・S・の中でも実働部隊に所属する男性達に引けを取らないどころかその上を行く実力者であつた

手合わせをして彼女に勝てる人物は限られており、その人物達にしても勝つたり負けたりと安定することはない

そんなゆかりをまるで弄ぶかのように翻弄してみせるクレア、しかも寸止めをしていくということは彼女がその気になればいつでもゆかりを殺せるということだ

その上でクレアの動きはまるで舞を舞っているかのように美しい、何もかもが余裕で底が知れなかつた

「この、ちよこまかと……っ！そこですか!!」

ゆかりは暫くの間翻弄されていたが、ふいにずん子の眼球に鏡のように映つた自分とクレアの姿が見えた

それを視認したゆかりはクレアが何処にいるのかを理解し、両手で彼女の左手首を掴むことに成功した

「ここまですよ、クレアさん……!」

「あらら、思ったよりもやるのね。でも…無駄よ!」

「なにを——ぐ、がはッ!!」

手首を捕らえたゆかりはそのまま振り向くとクレアにハイキックを叩き込もうとするが、気付いた時には自分が床に叩きつけられていた

数度ほど叩きつけられてから自分が投げられていると理解し、手を放すと床を転がりながらクレアから距離を取る

(常に私の死角に入って姿を消した上に何とか手首を掴んでもそれを利用して相手を投げ飛ばすなんて…しかも手を放すまでの間に複数回投げるほどの速度ですか。これで手加減? 正しく化け物ですね……)

クレアから離れたゆかりはここまでの戦いからクレアの実力の高さを思い知っていた

これほどまでに高い実力を持ち、恐ろしい動きをしながらも闘気や殺気を一切外に発さない…それがどれほど以上なことなのか、彼女には良く分かる

息を整えながらクレアを見据えるが彼女が動く様子はない、まるでゆかりを待っているかもしくはもう終わりだとしても言わんかのようだ

何にせよ動かないのならばせいぜい回復させてもらおう、そう思っているとクレアが

ゆつくりと近付いて来た

ゆかりは立ち上がると一度目を閉じ、息を吐く

そして再び目を開けると纏う空気が変わった

彼女はとある人物に教えられはしたものの、余りにも危険すぎる為自らに使用を禁じている技がある

殺傷力が高すぎてほぼ確実に相手を殺しまう、V・S・に所属していた彼女からすればそれは正に禁じ手

それを放つつもりなのだ

「ふうん……どうやら本気、みたいね」

「ええ、もしかしたら殺してしまうかもしれないですけど、貴女なら大丈夫だとは思いますが、ね」

「随分な自信ね、でも虚勢じゃないみたいだしちよつと警戒しようかしら」

クレアはそう言うとうようやつと構えた

両手を肩幅に開きながら前に突き出すかのように出す

そのまままるで手で周囲を探るかのようにゆらゆらと動かしだした

それでも彼女から一切の覇気は感じられず、オーラも何もない

やはり本気ではないのだろうか……そのことにゆかりは悔しさを感じるも気持ち落ち

着かせ、今から放つ技に自分の全てを集中させる

呼吸を整え、クレアを見据える

やがて彼女の視界から色が消え、クレアだけがハッキリと色付いて見えるようになる
完全にクレアだけを認識し、打ち砕かんとしている

息を吐き、吸う…次の瞬間ゆかりの身体がクレアに向かって跳ねる

圧縮して解放されたバネに弾かれるかのような踏み込みだ、ずん子の目にすらハッキリとは見えず何重にもブレる程の速度だ

今の彼女に出せる最大の速度で迫り、技を放つ

内側に振じった腕をクレアの身体を貫かんと突き出し、インパクトの瞬間に振じった腕を逆側へ向けて一気に返す

それを目にも留まらぬ速度で何度も何度も繰り返す

『滅掌雷轟振じり貫手』彼女の持つ最大最強の技である

「つーへえ、これって……」

しかしそれすらもクレアには届かない、その全てを彼女は綺麗に捌いてみせる

彼女の手の届く範囲に入った瞬間にゆかりの貫手は弾かれるか逸らされるかしてしま
まう

最初こそ少し驚いていたものの今やクレアの顔は穏やかな笑みを湛えている、完全に

余裕だ

それを認識してもゆかりの心は荒ぶることなくただ只管にクレアを撃滅せんと貫手を放ち続ける

「これはちよつと予想外ね、まさかこの技を知ってるなんて……私を驚かせたご褒美にこの技で返してあげる。『猛羅総拳突き』」

「っ!？」

クレアはゆかりから一瞬距離を離すと、迫って来る彼女の貫手に対して同じように連続の突きで迎撃する

その手は正拳、貫手、鶴頭、平拳、掌底、手刀、一本拳、虎口など……様々な拳形を取りゆかり以上の速度と威力を以て彼女の貫手を潰していき、やがて？頭が顎にヒツトして彼女の頭がカチ上げられた

「うぐう……!!!」

そのまま連続の突きがゆかりの胴体と顎を撃ち抜いていき、多数の打撲に加えて脳を揺らされた彼女は立つことが出来なくなり倒れた

それを見ていた3人は最早言葉を失っており、動けないでいた

理解不能——彼女達の顔にはそう書いてあるのが見て取れる、V・Sの一員として実際の戦闘を見てきたマキでも次元が違い過ぎて呆けているくらいだ

クレアは倒れたゆかりの元へと立ち寄り、身体を支えて起こしてやると軽く頬を叩いた

「うっ、ここは……そうですか、私は」

「ええそうですね。でも凄かったわよ、まさかここまでやれるとは思ってなかったもの」

「誉め言葉として、受け取って良いんです、かね」

「勿論。私は20年くらい前から軍事訓練を受けてたし、命の奪い合いも幾度と経験して来たわ。そんな私の意表を突けただけでも上出来よ」

「そう、ですか……ちよつと、休憩しますね」

「ええ、どうぞ。医務室には行かなくて大丈夫？」

「平気ですよ。貴女が怪我にならないよう手を抜いてくれましたから」

「あら分かるのね。やっぱり貴女凄いわ」

「そう言葉を交わした後ゆかりは少し離れた位置にあるソファーに身を投げ出して横になった

それを見届けたクレアは見物していた3人に向き直る

「さ、これで私の実力は見せたけれど……お眼鏡には適ったかしら？」

「あ、えつと……はい、十分過ぎる位には」

「良かった、これで認めてもらえなかったらどうしたら良いか分からなかったもの。そ

れじゃあ始めましょうか」

「えつと、ゆかりんは良いんですか？」

「さっきの見てて彼女に護身術を学ぶ必要があると思う？それと怪我とかに関しては大丈夫よ、ちゃんと加減したから」

「こうしてみると戦いとは無縁のように見えるのに……底が見えませぬね、この人達は」

「ふふ、これでも一応この基地の最高戦力に数えられてるからね。さ、始めましょうか」
クレアはそう言うと3人に護身術の基本から合気の類まで色々と教えていった

元々クレアは柔術や合気を専門としてしている為、こうしたことを教えるのには適任なのだ

MK・23が関節技を得意としているのもクレアに師事して様々なことを教わったからであり、彼女にコンバットサンボを教えた張本人である

これはさっきの猛羅総拳突きは彼女にとって☒不得手な☒ものであることを示している

その事実気付いたマキは顔を青くしたりしたが、護身術を学ぶのに支障はなかった様々な状況を想定してそれに対する対処法を丁寧に加え、実践させる

そうこうして時間は過ぎていき、途中から復活したゆかりも混ざって彼女達にコツを

教えていく

「今日のところはこんな感じかしらね。これからもこうした訓練は行っていきましょ、茜ちゃんも葵ちゃんにも教えてあげないといけないしね」

「そうですね、拳銃の訓練と並行して進めていきますか。そこまで本格的ではありませんが、最低限身を守るようになるでしょう」

「ハア、ハア、ハア…ゆ、ゆかりん達っていつもこんな訓練してたんだね。知らなかった……」

「私も、ちよつとキツイですね…疲れました」

「その割に、は…平気そうじゃん」

「まあ弓術もやってみましたし、多少は体力も付いていましたから」

「…私も、もうちよつと運動頑張ろうかな。ってきりたんは？」

「…死んでますね。出不精だったのが効いたのでしよう」

「きりたんーん！」

死んだ魚のような眼をして床に転がるきりたんにマキが駆け寄ってぐらぐらと揺らし、

疲れ切ったところにそんなことをされては寧ろやばい、きりたんは更に目を回してし

まいマキが叫ぶ

そんな様子を呆れながらも笑顔で見ていたゆかりとずん子は助け舟を出そうかと話し、近付いてマキを引き剥がしたりなど騒がしくも穏やかな時が流れていた

その様子を見ていたクレアは微笑ましく笑っている

(本当ならこんな訓練しなくても良いようにしてあげたいけど、難しいわよね…でも諦めたくないわ。お師匠の悲願でもあるし、叶えてあげたいわね)

己の首に付いている傷跡、それが刻まれた時の状況から救い出してくれた自分とスカーレットの格闘に於ける師匠のことを思い浮かべる

その師匠は世界の恒久的平和を悲願として活動をしており、合法非合法問わずに様々なことを行っている

必要ならば時として人を殺すことも厭わない、元々生まれが殺し屋であったが故にそれは自然なこととも言えるがやはり何処か歪だ

平和を願いながらも躊躇なく人を殺す…そんな師匠のことを思い出し、今何処で何をしているのかは分からないが久しぶりに会いたい気持ちに駆られた

とは言え彼女は世界中を飛び回っている、探すのは容易ではないし彼女の方から基地に来るのを待つしかないだろう

だが何故だか近い内に会えるような気がする、そんな根拠のない想いを抱きながらク

レアはゆかり達を連れて大浴場へと向かうのであった

小話その6 やつちやつたね、MDRちゃん…

「終わったよ。特に問題はないね、寧ろメンタルモデルが以前よりも洗練されてる。頑張ってるね」

「そうですか？そう言ってもらえると訓練のし甲斐があります！」

「この子達は皆頑張ってるからいつも見てて楽しいよ。さ、次の子の番だからそろそろ戻って」

「はい、ありがとうございます！またよろしくお願いしますね!!」

S09H基地の整備室、ここではこの基地の人形整備部部長のイーサンがM14の定期メンテナンスをしていた

彼の他にも何人かの整備士がいるが、彼の仕事量は他の部員を遥かに超えている

日々の整備を施す人数もさることながら他の部員が行った整備に関しての情報も全て管理しているのだ

これには月の最終週を家族水入らずで過ごす為に一週間の休みを取ることも関係しているが、やはり彼がそれだけ優秀であることを示している

兎も角M14のメンテナンスを終えたイーサンは彼女が退室するのを見届けると、次

にメンテナンスに来る人形が誰かを確認した

その瞬間、彼は少し苦笑した

(あー、この子かあ…悪い子じゃないんだけどちよつと苦手なんだよね)

彼はとても優しく、この基地に所属している人間人形問わずほぼ全員から『優しさが服を着て歩いているような人』と評される程に優しい

しかしそんな彼にも苦手な人員が極少数…というより人形只一人を苦手としている別に悪感情を持つているわけでもないし相手から向けられているのは好意であるため嫌ではないのだが、少々困るのだ

そんな彼の心配を余所に件の人形が彼のいる部屋へと入って来た

「やあやあ、愛しのMDRさんだぞ〜♪久しぶりの再会に心が躍るねえ!」

「いらつしやい、MDR。一昨日会ったばかりだろう? 久々と言うには期間が短すぎるんじゃないかい」

「やあん、そんなツレナイこと言わないで素直に喜びなよお。ダーリンだって私に教えて嬉しいだろう?」

「その呼び方と絡み方をもう少し控えめにしてくれたらね」

「相変わらずだねえ…ま、いいや。今日も整備し・っ・か・り・と、お願いするよ♪」

「全く…じゃあそこに寝てくれるかい。ああ、そのジャケットは預かるよ」

「ここで脱げつて言うのかい!?ま、まさか整備と称してあんなことやこんなことを…奥さんがいるのにイケないんだあ♪ま、あたいはいつでも良いけどねえ♡」

「…ねえ、この遣り取り毎回しなくちゃダメかい?取り敢えず脱ぐのはジャケットだけにしてくれよ。他のを脱ごうとしたら強制スリープさせるからね」

「眠姦!?!み、見かけによらず結構ケダモノな…」

「MDR?進まないし後に控えてる子もいるからその辺にして欲しいな。じゃないとクレアを呼ぶよ」

「いやマジすんませんそれだけは勘弁つかあさい」

「分かってくれば良いんだ。じゃ、始めようか」

「あいよ〜」

最早いつも通りの光景となってしまったMDRからのそれも逆セクハラなんじゃねえの?と言わんばかりの露骨すぎるアピールを避けつつもこのままでは仕事が出来ないので伝家の宝刀を抜くことで彼女を大人しくさせる

そう、この基地のMDRは何故かイーサンのことを異常な程に気に入っておりなんとか取り入ろうと必死にあれこれとアピールしてくるのだ

しかしそのどれもが余りにも露骨すぎる上に過剰なスキンシップを行ってくるためその光景をクレアに見つかっては彼女にシバかれるという構図が出来ている

とは言えこれは彼女に限った話ではなく、とても穏やかで紳士的で丁寧な整備をする上に戦術人形達を『女の子』として扱ってくれる彼に対して好意を抱いている人形は少なくはない

彼女達もイーサンに気に入られようとあの手この手でアピールしている光景が見受けられる

その行為の数々が大人しくて乙女チックなものであればクレアも多少は目を瞑りもするが、MDRのは流石に度が過ぎ過ぎだ

よって彼女は度々シバかれるわけだがそれでも反省の色は大して見えず、クレアのみを盗んではイーサンに接近して来る

因みに目を瞑って見て見ぬ振りをしたその日の夜、クレアは決まってイーサンにベツタリと甘えている

そして今日も2日前にしっかりと整備したばかりだと言うのに情報を改竄してまでこうしてやって来ていた

その行動力やある意味一途とも取れる想いは良いのだが、もう少し大人し目にしてくれば…とイーサンは常々思うのであった

情報を改竄するのは勿論イケないことであるし、スカーレットにバレればキツイ仕置きが待っているだろう

しかしもうここに来てしまった以上仕方ないと割り切って彼女の整備を始めるのであった

因みに彼は一度もMDRに対して怒ったこともなければ問答無用でクレアを呼んだこともない、彼なりの優しさではあるがクレア曰く『優しすぎる』とのこと

そう言われてもこれは自分の性分なのでどうにもならないと諦めているし、クレア自身そんな彼のことを好きになって結婚したのもあり結局は強く言えず仕舞いとなっている

(各可動部に異常はなし、なんだかんだ言っちゃってやっぱりこの子もスカーレットの試験を突破しただけはあるね。情報部だから直接の戦闘は少ないとはいえ闇に隠れた戦闘があるのに一切の損傷がない、それに自分でもしっかりと整備出来てる…先日の事件の際にも戦闘を行ったらしいけど怪我をしてないみたいで良かった)

イーサンはまず彼女の身体のメンテナンスを開始していた

機械的な内部の可動部や生体パーツの調子を見て異常がないか探すが一切見当たらない、2日前にやったのだから当然かもしれないがそのことに安堵する

因みにこの時通常は人形をスリープモードに移行させてから行おうが、MDRの場合だけ彼女の希望により覚醒状態で行っている

ちゃんとした整備に支障が出るからと決して動かないように運動機能に関するシス

テムはダウンさせているものの、彼の手の感触等は彼女のメンタルにしっかりと伝わっている

その度に至福の感情が渦巻くが、身体を動かすことが叶わず発散出来ない

MDRはそんなもどかしさすらをも楽しんでいた

10分程で身体の手チェックを終えた彼は今度はマインドマップのメンテナンスに移行する

この時ばかりは流石に起きているとどんな支障を来すか分からない為強制的にスリープモードにさせる

しっかりとスリープしたことを確認した彼はMDRに繋いだPCのモニターを見つめながらキーボードを叩いていく

(ふむふむ…メンタルモデルにも異常は見当たらないね。…相変わらず僕に対する感情のパラメーターは狂ってるけど、これも普段と変わりはない。猟奇的な嗜虐心があるっていうのにどうしてここまで綺麗なのか気になるくらいだ。って、これは…極秘ファイル?絶対に見ちゃダメだぞとか書かれてるけど…これわざとだよ?碌なものじゃなさそうだし見たくはないんだけど、見なかったら見なかったで後で煩そうだし…ハア、仕方ないか)

彼女のマインドマップの中に隠されていたあからさま過ぎるファイルに嫌な予感が

するも、これを見なかったらそれはそれで後々MDRが見た方が良かったと言わんばかりのことをしてきそうである

というか過去にされた

なので仕方なく見ることにしたイーサンは重い指を動かしてそのファイルを開く、するとそこにあつたのは…

(……………いやまあ、そうだろうなと思つてはいたけどね。にしてもまた随分と大胆なことを…というかどんだけ人間の性癖に興味があるのさ……)

そこにあつたのはMDRの自撮り集であつた、それも随分と際どい感じの

それを見たイーサンは思わず机に片肘を付いて頭を抱える

嫌な予感の中である、こんなところをクレアに見られたらなんと言われるか…いやMDRに関しては最早いつも通りだし説明の必要もなく速攻で彼女をシバき倒しそうではあるが

取り敢えず見たことは見たしこれで夜MDRに自分の端末へ直接自撮り写真を送りつけられるような事態は回避出来たのでデリートしておく

整備が終わった後に感想を聞かれるだろうが次の子がいるから、で回避すれば良いだろう

そう決めたイーサンはその後もメンタルモデルの深くまでしつかりとメンテナン

をしていき、やがてそれも終わると一呼吸置いてからMDRを覚醒させる

「んう……あふっ」

強制的に深い眠りに就かされ、起こされたMDRは頭がハッキリとしないのか眠そうに欠伸をする

今この時だけはただの少女然とした彼女を見ることが可能であり、ここだけを切り取るのであればこのMDRも普通の美少女だ

しかしそんな時間は長く続くわけでもなく、次第に覚醒して来たMDRはわざとインナーを少し乱しながらイーサンの方へすり寄って来る

「整備ありがとね、それでどうだった？削除されてるし見たんでしょ？ねえねえどうだったのさあ」

「取り敢えずすり寄って来るのをやめて欲しいかな。次の子もいるから早く退室してくれると尚嬉しいよ、あと服を乱さないで」

「そんな冷たいこと言わずにさあ、結構頑張って情報とか集めたんだよ？出来ればダーリンの性癖が知りたかったから部屋に隠しカメラとか仕掛けたけど、全部見付かって壊されちゃったし……だからこういうのが好きなのかなあ、とかこんなのはどうかなあ、とか色々と考えながら研究したんだよ？ちよつとくらい感想をくれたって良いじゃないか」

「やっぱりあれを仕掛けたのは君だったんだね……クレアには黙っというてあげるからもうあんなことはほしないでくれよ？自分の部屋くらいは息を抜きたいんだ」

「はあい、もうしないよ。それで、感想は〜？」

「ああもう、抱き着いてこないでくれ。僕にはクレアがいるし次のメンテナンスを待つてる子だつて……」

「今日はもう私で終わりつてことにしといてあげたよ、だから……ね？」

「……そこまで改竄してたのか、感心しないな」

「これもダーリンへの愛の成せる業さ♡」

「取り敢えず離れてくれないかい？そうくつつかれると困るんだ」

「何が困るのさ、こくんな美少女がデレデレなんだぞお？男として、本当は嬉しいくせいにい♪」

「遺言はそれで良いかしら、MDR？」

「え……やばっ！」

唐突に聞こえてきた第三者の声にMDRは危機を察知して逃げようとするが、気付いた時には床に激突していた

クレアに見付かり、速攻で投げ飛ばされたのだ

「全く、情報部からデータが来るのが遅いと思って来てみれば……毎度毎度人の夫に何を

してくれてるのよ！今日と言う今日は徹底的にシバき倒してあげるわ」

「い、いやあ、えつと…ダ、ダーリンがあんまりにも魅力的過ぎるのが悪い！こんな人に惹かれない子なんていない、よって私は悪くない！閉廷!!」

「ええそうね、確かにイーサンは魅力に溢れてるわ。でもそれとこれとは別よね？それと人の夫のことをダーリンって呼ぶのもやめてくれないかしら、そう呼んで良いのは私だけよ」

「お、なんだいなんだい。クレアもダーリンなんて呼ぶんだねえ」

「確かに夜の時にそう呼んでくれるね」

「ちよつと、余計なこと言わないの！ああもう……とにかく行くわよ、今日は私が疲れるまで輪廻煉獄手毬の刑だから」

「え、……あ、あの、クレア様？それだけはちよおつとご勘弁願いたいのですが…何とかなりませんでしょうか」

「ならないわ」

「いやあの本当お願いしますます後生ですから！つて、あ、あ……イヤアアアアアアアアアアアアアアア……」

「……結局後で僕が修理するハメにならないかい、これ」

クレアに引き摺られるようにしてMDRが去ると整備室に平和が戻る

取り残されたイーサンは取り敢えずMDRが改竄してしまった情報を元に戻し、他の人員へ渡っていた人形達のメンテナンスをやっていくのであった

「ねえゆかりん」

「なんでしよう?」

「あれ、なに?」

「…私に分かるとでも?」

「ゆかりんなら不思議パワーで分かるかなって」

「私にそんな謎の力はありません」

夕方頃、訓練室では何かが激突するような音と少女のくぐもった悲鳴が断続的に続いていった

その光景を見ているゆかり達日本組はポカンとしており、目の前で行われていることが理解出来ずにいた

そこにはクレアがMDRを只管に床に叩きつけているのだが、そのやり方が異常である

クレアはMDRの後頭部を掴むとそのまま彼女をうつ伏せの大的字になるよう床へ叩きつけるのだが、その直後彼女の身体が浮き上がってクレアが再び後頭部を掴む

そして後頭部を掴んだ手をまた下へ振り下ろして彼女を叩きつけるのだ

MDRの身体はクレアによって床へ激突させられると同時に特殊な力のかけ方をさ

れていることから強制的にバウンドし、またクレアの臍付近まで持ち上げられている

これこそがクレアが持つ技の中でも喰らう者からすれば最も絶望するものの一つ、『輪廻煉獄手毬』だ

クレアが技を放つのを止めない限り永遠に床や地面に激突し続けなければならず、彼女の体力は無尽蔵に近いものがある為気分次第では兎に角酷い目に遭う

そして今回クレアは割とキレているのもうかれこれ1時間程続いていた

そこへ新たな人物がやってくる

「なーんか聞き馴染みのある音がするなと思ったたら…おいゆかり、あれいつからやってんだ？」

「さあ…P7さんは1時間位前だと言っていました」

「全く、流石にやり過ぎだろクレアのやつ…しょうがねえな」

「助けてあげるんですか？」

「ああ、あいつは情報の改竄とかやらかしてるしお灸を据えようと思ってたが…あれだけシバかれてんならもう十分だろ。仕置きがてら一発叩き込んで終わりにしてやる」

そう言つてスカーレットはクレアに近付くと床に叩きつけられてバウンドするMD Rに向かつて蹴りを放つ

「ぶへらっ!？」

「ちよつと、何するのよスカレット。まだ私の気は済んでないわ」

「やり過ぎなんだよ馬鹿野郎。確かに罰を与える必要はあるがここまでやるこたねえだろ、後で罰則は与えとくからこの辺で終わりにしてやれ」

「…分かったわ、今回はこれで許してあげる。後は煮るなり焼くなり好きにしてちよっだい」

「あいよ。……さて、MDR。てめえイーサンに好意があるのは良いがちよいと今回の目を瞑ってやれるもんじゃねえ。情報の改竄なんざしやがって…その所為で整備部に混乱を招き、人形達のメンテナンスに支障を来している。分かるな？」

「ウ、ゴホ…ハ、ハイ」

「それが基地にとつて重大な危機に繋がりがねない事態となる可能性は十二分にある。今回はやり過ぎちまったな、だから私はお前に罰を与えなきやならねえ。よつて…MDR、明日から一ヶ月間イーサンへの接近を禁ずる。もし破った場合は懲罰房でPPKに可愛がってもらうことになる、良いな？」

「え……ダーリンに、近付いちやダメ…？そ、それだけは！」

「何か文句あつか？」

「あ、いえ…何もありません……」

「…ま、今回のことは流石に反省しろよ。イーサンに迫るなどは言わねえが、やり方は考

えな。次情報の改竄なんざしてみろ、そんなや私が直々に地獄を見せてやる…数回の死で済むと思うなよ」

「すみませんでした…」

「分かれば良い。んじや罰則はしっかり守れよ、それ以外は好きにしてて構わねえから。それと…整備部にはちゃんと謝つとくんだな」

「あい…」

完全に意気消沈しているMDRをその場に放置してスカーレットは歩き出す

仲間として慰めてやりたい気持ちはあるが、指揮官として、この基地の責任者として今は寄り添うことが出来ない

なので部屋を出る前にゆかりの肩に手を置いて「頼んだ」とだけ言い、部屋を後にした

その一言で彼女の意図を察したゆかりはマキと共にMDRに近付き、肩を貸して医務室へと連れていくのであった

その後ゆかりとマキはシヨックから泣くMDRの話を聞き、慰めてあげるのであった

その日の夜、とある部屋にて1人の少女が白猫を膝に乗せてその背中をゆつくりと撫でていた

とても緩やかに時間は流れ、やがて時計の針が9時を指す

その瞬間少女の部屋の扉に変則的なノック音があった

それを聞いた彼女は白猫を抱き抱えながら扉へと近付き、開ける

「来たわよ、ワルサー」

「時間通りね、入って」

そこにいたのはHK416であり、左手に何やら大きなケースのようなものを持っている

そんな彼女を部屋の主である少女、WA2000は中へ招き入れるのであった

これより行われるのはWA2000とHK416による定期裏会議と呼ばれるものだ

この為にHK416は誰にも付けられることのないよう最新の注意を払ってここまで来ており、今までこの会合はこの基地の誰にもバレてはいない程の気合いの入れようである

部屋へと入ったHK416は左手に持ったケースを降ろし、側面に付けられた蓋を開ける

すると中から一匹の黒猫が出て来た

「さあ、始めるわよ」

「ええ、それじゃあ早速……」

2人はそれぞれ自分の猫を仰向けになるように抱き、顔を見合わせると同時に頷き……猫のお腹へ顔を埋めた

「スウー——————」

「……………」

長い、長い時が流れた

この間2人は微動だにせず、只管に猫のお腹へと顔を押し付けて吸っているやがて満足したのか2人は同時にゆっくりと顔を離すと

「はあ……♡」

恍惚とした表情を晒して息を吐いていた

そう、これはWA2000とHK416による裏互いの猫を愛でまくる会会議である

「ああん、ツイラちゃん相変わらず可愛いわねえ〜♪」

「そう言う貴女のシリル君も愛らしいじゃないのよお〜♪」

完全にキャラ崩壊である

2人とも普段の凜とした立ち振る舞いは何処へやら、お互いの猫に完璧に魅了されていた

因みにWA2000の飼い猫である白猫が雄のシリルでHK416の飼い猫である黒猫が雌のツイラだ

彼女達は完全防音が施された部屋で思う存分猫達と戯れる

おもちゃを使って猫と遊び、床に転がりながら猫に頬ずりをして撫でまくる

時として構い過ぎたのか引つ掛かれたりもするがそれすらも喜んで享受している彼女達に、普段の面影は欠片もなかった

そのまま彼女達は何時間もの間キャーキャーと叫びながら遊びまくり、その後部屋に備え付けられた簡易的な浴室に向かうと猫達を洗う

そして自分達もそのままお風呂に入り、上がると猫の身体を乾かした後にもう一度猫を吸引する

彼女達の裏互いの猫を愛でまくる会 会 議は猫吸引に始まり猫吸引に終わるのだ

そして彼女達は猫と共に床に就く

2匹の猫を間に挟んで向かい合いながら眠る彼女達の顔は満たされており、だらしなく緩み切っていた

そして翌明朝

「さて、私はそろそろ行くわ。この会合を知られるわけにいかないしね」

「そうね、そうして頂戴」

「そうそう、とびつきりのおもちやを発注してあるから次の時に一緒に遊びましょう」

「へえ…それは楽しみね」

「私もよ。それじゃあね」

「またね」

昨日の騒ぎっぷりは何だったのか、そこには普段の冷静な様子を取り戻したWA2000とHK416がおりHK416が部屋を出ようとしているところであった

彼女の左手には大型の猫用ケースがあり、既に中にはツイラが入っている

HK416は部屋を出る前に扉に耳を寄せて意識を集中し、気配を探る

どうやら外に誰もいないようだ、確認を終えた彼女はノブに手を掛けて音を立てずに扉を開けると僅かな隙間に身体を滑り込ませるようにして退室した

それを見届けたWA2000は着替えようかと思うも視界にシリルが入る、時計に目をやるとまだまだ早い時間だ

「うん、ちよつとだけ…」

その後彼女はシリルを思いっ切り撫で回し、頬ずりをするのであった

その顔は昨日の時と同じく緩み切ったものであるのだが、そんな状態でも時間をしっかりと把握していつか^{スナイパースクールの講師役}仕事の為に早めに部屋を出るのは流石と言う他

ないだろう

因みにその際一度部屋を振り返ってシリルを見やり、名残惜しそうな表情をしていたのは余談である

実践編：格闘訓練その①

「そっまでー」

WA2000の鋭い声と共にFN49とモシンナガンはシャープペンを置いた

その顔は疲れているものの、何処かやり切ったようなものを感じさせる

それを見たWA2000は嬉しさが込み上げるが厳しい表情を崩さずに2人が記入していた解答用紙を回収する

そう、スナイパースクール座学編の締めとして今しがた試験が行われ、終了したのだ
「じゃあ今から採点してくるからそれまでここで待機してなさい。合格してるとせよしてないにせよここから辛くなるからしつかり休憩するのよ」

「了解（です）……」

試験問題はかなり多く、ガチでこれまで学んできたこと全てを出題されていた

そんな試験を90分で全て解かなければならず、その上全問正解以外は落第という理不尽な試験であったために2人ともかなり精神を消耗していた

答える声にも疲れが見て取れており、余程集中していたことが分かる

そんな2人の為にこの教室にはふかふかのソファが置いてあり、試験終了後はそれ

を自由に使っていいとのこと

それを受けて2人はすぐさまソファーへとダイブして全身の力を抜く

「ああ〜……疲れたわ」

「ですね……本当に全部出してくるなんて……」

「でも達成感のある顔してるじゃない、なんだかんだ言って自信はあるんでしょ？」

「ええまあ。モシンさんも同じですか？」

「これが自信のない顔に見える？」

「……見えませんね」

「なら、それが答えよ」

彼女の言う通りモシン・ナガンも自信に満ちた顔をしている、手応えはあったのだらう

そのまま時は過ぎ、やがて2人へ結果を伝える為にWA2000が再度入室してきた
「試験の結果だけれど……良くやったわね、2人とも文句なしの合格よ」

「やったー！！」

WA2000が笑顔で結果を伝えるとFN49とモシン・ナガンの2人は手を取り合って喜んだ

自信があるとは言えやはり合格しているという事実を受けると嬉しさが込み上げて

くるものである

「そんな2人の様子をWA2000は微笑ましく見ていたが、ずっとこのままでいることは叶わない

適度なタイミングで他を叩いて意識を自分へと向けると表情を締めて2人へ言葉をぶつける

「喜ぶのはそこまでよ。はつきり言ってこれくらい出来て当然のものと思いなさい、これからこの試験で出て来たこと全てを習得してもらうんだからね」

「そうね。ここからが本番ってところかしら」

「ええそうよ。昨日指揮官が言ったようにまずは近接格闘の訓練を行うことになるわ。最初は貴女達がどこまで出来るのか見る為に模擬試合のようなものを行うわよ。FN

49は私、モシン・ナガンはM200が相手になるわ」

「ワルサーさんが相手……これって手加減は」

「するわけない……って言いたいところだけどするわ」

「え……い、意外ね。てつきり情け容赦なく来ると思ってたのだけれど」

「貴方達を完膚なきまでに叩き潰すのが目的ならそうするわ、何だったら原型を留めないくらいぐちやぐちやにしてあげる。でも今回の目的はあくまでも貴女達の実力を測ることよ。だから手加減しながら見ていくことになるわね」

「な、なるほど……でも私、格闘なんてやったことないんですけど大丈夫でしょうか？」
「心配要らないわ。ここには世界中の武術を自在に操る指揮官と後方幕僚がいるからね、あの2人にかかれば絶対に貴女達に見合うものを仕込んでくれるわよ」

「……やっぱあの2人って化け物なの？」

「正真正銘の化け物ね。でもあの2人に格闘を仕込んだ師匠にあたる人は指揮官曰く『私如きじゃ足元にも及ばねえ』らしいわよ。上には上がいるってことね、指揮官とクレアが2人掛かりで連携しながら戦っても無傷でボコられるらしいし。そしてこれは逆に言えば貴女達が指揮官を越えられる可能性があることを示唆しているわ。そのつもりで励みなさい」

「あれで足元にも及ばないってどんだけよ……」

「正しく怪物ですね……それに指揮官を越えるのは正直そんな未来が見えません……」

「ま、そうでしようね。私もそうだったし、実際越えるところまではまだ到達出来てないわ。でも五分以上の戦いは出来るようになった、昔の自分じゃ想像も出来ないような領域にいつの間にかドップリ浸かっている。貴女達もそうしてあげる」

「そうなるまでが地獄ってことね……良いわ、やってやろうじゃない！」

「良い気概ね、それが失われなことを願ってるわ。さて、まだもう少し休憩してなさい。時間になったら誰か迎えに来させるから」

「あれ、ワルサーさんがこのまま連れて行ってくれるのでは……」

「そうしてあげたいところではあるんだけど、ちよつと準備があつてね……だから私は先に行くわ。だからそれまではゆっくりしていて頂戴」

「分かったわ。ほらFN49、今は身体を休めることに集中しましょう。じゃないとこの後地獄を見ることになりそうだわ」

「そ、そうですね……じゃあ、お言葉に甘えます」

「そうして頂戴。それじゃあね」

そう言い残してWA2000は去り、静寂が訪れた

2人はそれから会話もなく只管にソファアへと身体を沈め続ける

これから来る模擬試合に向けて体力の回復に努めるのだ

そんな時間が30分程続いた後、教室の扉をノックする音が響いた

「どうぞっ」

「じゃじゃーん！呼ばれて飛び出てスコピオン!!スコピッピって呼んでね♪」

扉を開けて来たのはスコピオンであった

そのテンションの高さに2人は圧倒され、一瞬思考が空白になる

その瞬間、スコピオンが急接近して2人の頬に軽くピンタを入れた

彼女の身体が何重にもブレて見える程の速度でありながら頬に触れた手に威力はな

く、優しいものである

彼女も何気にこの基地の実力者に数えられる1人であり、その実力の高さが垣間見える瞬間であった

「2人とも隙だらけ過ぎるよ、これから格闘訓練するつてのにそんなだと……死ぬよ？」
「い、いや……今のはちよつとびつくりしただけよ」

「それ、戦場だと命取りになるからね？どんな状態でも瞬時に意識を切り替えて迎撃出来るようにならなきゃ。ま、2人は新参だし出来なくて普通なんだけどさ」

「……もう既に訓練は始まっていたということですか」
「そーゆうことーさ、行くよ。ほら立って立って！」

テンションの高いスコープオンに若干戸惑いながらも2人は意識を切り替えて彼女の後について行く

そんな彼女達の様子を背中で感じ取ったスコープオンは内心少し驚いていた

これまでスコープオンが同様のことをしてここまで早く切り替えが出来た者は少ない、出来たとしてもそれは豊富な経験を積んだ人形だけであった

だがモシン・ナガンは何度か鉄血との戦闘があった程度、FN49に至っては実戦を経験したことがない

それにも関わらずここまで早い切り替えに彼女は2人のことを見直すと同時にWA

2000やM200が目をかける理由に納得するのであった

(ふうん……これは私もちよつと興味が出てきちゃったな。後でわーちゃんにお願いして私も訓練付けられないか聞いてみよう♪)

腕を大きく振り、ルンルンと歩きながらそんなことを考えるスコープオンに2人はただ付いて行く

やがて『第二格闘訓練室』と書かれたプレートのある部屋へ辿り着いた

「よし、到着だね！わーちゃん、いる〜？」

「誰がわーちゃんよ。まあ良いわ、連れて来てくれてありがとねスコープオン」

「もう、私のことはスコピッピって呼んでって言うてるでしょ〜？」

「そんなの御免よ」

「相変わらず堅いなあ……ま、いいや。ねえ、この2人の訓練の様子ちよつち見てつても良いわ〜」

「ん？別に構わないけど……なるほど、そういうことね」

「察しが良くて助かるよ」

「話すのも良いけど、そろそろ始めない？早いところモツシーの実力を見ておきたいんだけど」

「そうね、そうしましょうか」

会話を終わらせるとM200がモシン・ナガンを手招きする

モシン・ナガンはそれに従って彼女の元へ行き、WA2000はFN49の手を取ると部屋の端の方へと誘導した

そのことに彼女は疑問を抱く

「あの…私は訓練しないんですか？」

「勿論するわよ。でもまずはあの子達の見なさい。聞くところによるとモシンがM200の格闘技術のことを疑問視したそうじゃない、貴女もちよつとは同じことを思ったんじゃないかしら？」

「そ、それは…はい、正直少しだけ」

「素直で良いわね。そういう先入観がどれほど危険か、これから分かるわ」

「てことは…M200もしかして☒アレ☒を放つつもり？うっひゃー…哀れもっちゃん」

（な、なにが起こるんでしようか…？）

一緒に付いて来たスコピーオンの言葉に不穏なものを感じるも、FN49に出来るのはモシン・ナガンの無事を祈ることだけである

「さてモツシー、これから軽く仕合うよ。構えて」

「ええ…先に言つとくけど私、大して格闘は出来ないから失望させるかも」

「大丈夫、それくらい想定済みだから。それよりもボクがするべきなのは…君の認識の甘さを正すことだからね」

「へ？……ゴフツ!!!」

M200の言葉にモシン・ナガンが首を掲げた瞬間、M200の身体が弾かれるように前進する

そのまま彼女はモシン・ナガンの目の前で一旦止まると半歩踏み込み、拳の突きを放った

その際両腕を左腕を前、右腕を後ろという位置関係でクロスしており、左腕を自身の腰辺りまで引きながら右腕を前に突き出している

それを受けたモシン・ナガンの身体はくの字に折れ曲がり、数十m程吹き飛んで訓練室の壁に激突した

折れ曲がった腰からぶつかりその反動で頭と足が壁に強烈な勢いでぶつけられ、そのまま床へ崩れ落ちる

倒れたモシン・ナガンは何とか身体に力を入れて立ち上がろうとするも苦しさに呻くだけで指一本動かせないでいた

その様子を見ていたFN49は何が起きたのか分からず固まっている

「い、今……なにが起こって……」

「半歩崩拳よ」

「ぱんぷ……何ですか、それ？」

「中国拳法の中でもかなり強力な一撃必殺の技ね。寸勁の一種でもあるわ」

半歩崩拳パンボンケン、それは読んで字の如く半歩踏み込みながら崩拳を放つ技である

崩拳とは心意六合拳の基本技であり、突き手と逆の手でタメを作ることによって威力の高い突きを放つものだ

デコピンは中指だけでは威力もクソもないが親指でタメを作ることによって威力を得る、それと同じ原理である

そしてこの半歩崩拳はそれに踏み込みを追加しただけの技であり、一見簡単な技に見えるがその実かなり難易度の高い技である

同時に途轍もなく威力の高い技でもあり、極めると『半歩崩拳、遍く天下を打つ』という言葉の通り絶対の必殺技……絶紹となる

それをM200はモシン・ナガンの身体が崩壊しない程度に手加減しつつ放った、最早彼女は暫くの間自分の意思で動くことは叶わないだろう

しかしM200はそんな彼女に対して容赦のない言葉を浴びせる

「なにこの程度で倒れてるの？ 動ける程度には手加減したんだから早く立ちなよ、ほら」

「ア………ヴ………カハッ！」

勿論M200の言葉は嘘だ

彼女自身モシン・ナガンがもう動けないことは分かっている

では何故こんなことを言っているのか……それは、彼女に限界を越えさせる為である
モシン・ナガンはM200のことを慕っており、彼女のことを全面的に信頼している
節がある

それをM200は理解し、利用しようとしているのだ

彼女が動けないのは分かっている、しかし敢えて☒動ける程度に手加減した☒という言葉
をぶつけることで彼女の中の認識を『この程度耐えられる、まだ動ける』と変えよう
としている

それを為すことが出来ればモシン・ナガンは精神力で身体の限界を越えて動かすこと
を覚え、一気に何段階も成長することが出来る

勿論こんなこと普通は出来ないし、訓練初日なら尚更だ

M200も正直出来ないだろうとは思っていた、しかし……

「ウ、ウウ……アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「?!?!本当に立ち上がるなんて……上出来すぎるよ、モツシー」

M200は嬉しそうに笑う

その視線の先には顔をこれ以上なくらい苦痛に歪めながらも、何度も何度も倒れそ

うになりながらも、呼吸すらままならないながらも、それでも立ち上がりM200のこのを見据えるモシン・ナガンがいた

だがやはりその様子は最早立つのがやつとであり、戦闘行為など無理なのは誰の目にも明らかである

それでもM200は試合をやめようとはしなかった

「立てたみたいだし、続けるよ。さあもつとボクを驚かせてみせて！」

「ア、グ……オアアアアアアアアアア！」

M200はモシン・ナガンの周囲を泥歩で周回しながら彼女へ向けて打撃を放つ

先程の半歩崩拳と比べればそれは速度のない弱つちいものであるが、今のモシン・ナガンにとっては十分に脅威である

その殆どが彼女の身体へ当たるが、幾つかは防いでいる上に反撃まで放ってきた

力の入らない状態で放たれるそれは最早突きとも呼べないほどのものだが、出来るだけでも十分凄いだろう

当然M200にヒットすることはなく、一方的に攻撃を叩き込まれてはいるが

その様子を見ていたWA2000も大変驚いていた

「凄いわね、彼女……想像以上だわ」

「なんとなく凄いの分かるんですが……」

「いやハッキリ言って異常でしょあれ。なんで立てるの？その前になんて意識を保てるの？」

「え、あれってそんなにやばいものなんですか…？」

「そうね、M200の半歩崩拳は真面に喰らえば私でも半日は動けなくなる代物よ」

「えっ!？」

「勿論今彼女に放ったものとは手加減のレベルは違うけれど…それでも動けなくなる程の威力だったのは間違いないわ」

「いやはや…精神力だけであそこまで動ける、しかも実戦経験があんまりなくて初めての格闘訓練であれとはね。あの子、化けるよ」

「そ、そんなにですか…」

「なに呆けてるの？次は貴女の番よ」

「あっ……」

WA2000の言葉にFN49は得も言われない恐怖に襲われる

余りの衝撃に忘れていたが、これは彼女にも行われる訓練なのだ

果たして自分はどんな目に遭うのか……モシン・ナガンのことを見ているだけで碌でもないことに遭うような気がしてならない

先を歩くWA2000に付いて行くと、そこには床へ円形に貼られたテープがあった

WA2000はその中へ入るとFN49へ挑発的な言葉をぶつける

「さあ、どんなことをしても良いから私をこの円からホンのちよつとでも動かしてみなさい。まあ…無理でしょうけどね」

「えつと、ワルサーさんをその円の外に出せば良いんですか？」

「いいえ、私の足を一步でも動かせたらあなたの勝ちよ。さ、とつとと来なさい」

WA2000の言葉を受けてFN49は改めてテープで作られた円を見る

彼女の足はその円のギリギリ内周に入っており、確かに一步でも動かせば円から出るだろう

一見して途轍もなく簡単そうだがM200の件を考えれば油断出来る状況ではない

FN49は気を引き締めるとWA2000を見据えた

ハッキリ言って彼女に格闘の心得は一切ない、だがそれでも戦術人形として一応は戦えるよう設計されている

今の彼女にあるのはそれだけ、相手はこの基地の全ての戦術人形を下す『ミレニウム8筆頭戦術人形』

なんとも頼りないがやるしかない、FN49は先程のM200の見様見真似で呼吸を整えるとWA2000に向けて突進した

助走で威力を付けて思いっ切り拳を突き出す

しかしその拳がWA2000の身体に当たる直前、彼女から凄まじい殺気が放たれてFN49は恐怖心から身体が硬直した

そのまま硬直した身体と助走の勢いを利用する形でWA2000の左掌打が横つ面に叩き込まれる

ただそれだけなのにも関わらずFN49の身体は錐もみ回転しながら吹き飛んでいき、モシン・ナガンと同様壁に激突した

彼女とは違い頭の天辺から激突して全負担が首にかかる、あとホンの少しでも威力が高ければ折れていただろう

その様子を見ていたスコープイオンは頭を抱えた

「うっは……本当に容赦ないなあ。でもこれでも相当に手加減してるつてのが怖いよねえ」

「仕方ないでしょ。地力の限界を見るためにはこれくらい追い込んであげないと意味ないんだから」

「そりゃそうだけどさ……ぶつちやけその方が手っ取り早いからつて一撃で追い込んでるっしょっ」

「否定しないわ」

「……南無阿弥陀仏」

「縁起でもないからやめなさい」

「傍から見てると本当にそうなりそうで怖いんだよね。てか私もこれ受けてたんだよね

……良く心が折れなかったな当時の私」

「貴女の雑草根性も中々に良かったわよ。さて……そろそろね」

WA2000はスコープオンとの会話を切り上げるとFN49の方を見る

彼女は首が痛むのか片手で抑えながらなんとか立ち上がっていた

頭と首の痛みは凄まじいが、胴体への衝撃がない分モシン・ナガンよりは容易に立てたようだ

当然WA2000は次にその無事な胴体への攻撃をするつもりである

「いつまでそんな所で突っ立ってるつもり？ さっさと私の足を動かしてみなさいよね」

「う、うう……やってみせますとも……！」

「ふうん、貴女も中々良い根性してるわね。ほらおいで、全ての攻撃を返してあげるから」

その言葉を皮切りにFN49は何かの枷が外れた様にWA2000へ攻撃をし始めた

まずは拳、左手で上に逸らされた後に右肘を鳩尾に叩き込まれて身体が持ち上がる

そのままWA2000が下から掌打を連続で放ってきて強制的に宙へ浮かばせられ続ける

なんとか反撃を挟みこもうとするもその全てが掌打で潰されて更に連撃を叩き込まれる

最早どうにもならないかと思ったが腰を捻って身体の向きを変えるとWA2000の掌打による力の加わる向きが変わって掌打地獄から抜け出せた

床に叩きつけられはしたが痛がっている場合ではない、そのまま転がってWA2000から距離を離す

だが実際の所逃げられたというより逃がしてもらえたと考えた方が良いだろう、実際WA2000はFN49の機転を評価自体はすれどその気になればその動きを読んで力の向きを変えて地獄の続きをすることなど容易に出来る

傷む身体を無視して再びWA2000に向けて突進して今度は上段回し蹴りを放つWA2000の左手刀が足首に叩き込まれて膝を起点に脚を畳まれる

そのまま足首を掴まれてFN49の身体は引き寄せられ、顔面にWA2000の拳がめり込む

そして後ろに倒れるかと思えばWA2000が掴んでいる足首を上手く利用して再度引き寄せて今度はポロパンチで顎をカチ上げる

掴まれている右足首を離させない限りこの状態は続くだろう、しかしどう力を入れようとしても上手く分散させられて逃げられない

その上まるで鎖で縛られてその場で固定されているかのように動かせなかった

そのまま何度も何度も顔に拳を叩き込まれる中FN49は思考を回し、1つの策を思いつく

彼女は固定されている右足首を利用して跳躍し、そのまま左脚でWA2000の顔面へ向かって放つ

しかしそれもWA2000が顔を横に傾けたことで躲され、その上今度は顔を反対に倒してきて彼女の左脚がWA2000の首によって捕らわれてしまう

その状態からWA2000は右手を拳から手刀に変えてFN49の腹に上から叩き込むと同時に今まで拘束していた両脚を解放した

すると彼女の身体は手刀によって床へと叩きつけられる、その際WA2000も同時に膝を曲げて身体を降ろしながら手刀を最後まで続ける

まるで上から大岩が降って来て潰されたような衝撃が彼女の身体を襲い、意識が飛びかける

手刀による発勁と身体を沈める際の動きによる沈墜勁擬きで身体を押し潰しているのだ、意識を保っているだけでも表彰ものだろう

当然そうなるよう手加減されているのもあるが

兎も角これは危険な状態であると同時にチャンスでもある、今のWA2000は膝を曲げて身体を落としているので非常に不安定なはずだ

FN49は軋む身体に鞭を打ちつつ身体を回転させてWA2000の腰へ蹴りを放つ

しかし度重なる攻撃によって疲弊しきった彼女のその蹴りに威力はなく、無傷のWA2000の鍛え抜かれた体幹を崩すことは到底叶わない

逆に全身からの発勁によって蹴りが弾かれ、回転する彼女の身体の頭の位置がWA2000の方へ向くと同時に右膝が落とされる

しかしFN49がなんとか床を蹴って回転の勢いを増したことでその膝から逃れ、逆に無防備になったその膝へ向けて両手を伸ばして体勢を崩そうとした

だがそれでもWA2000は崩れない、寧ろFN49の手を取ってまるで恋人握りのように握るとそのまま彼女每持ち上げるようにして立ち上がって見せた

動揺して動けないでいるFN49の身体を上へ持ち上げ、一度腕を引くとそのまま上へ彼女を放り投げる

空中で体勢を整えることが出来ないFN49はやがて自由落下を始め、その先にはWA2000が両腕を頭の上へ上げた状態で待機している

貫手か何かで攻撃されると思ったFN49はその手の動きを警戒するが、それは間違
いだった

落ちて来た彼女を迎えたのはWA2000の右前蹴りである

予想外の蹴りを脇腹へと真面に喰らった彼女は身体が折れる音を何処か他人事のよ
うに聞きながら天井へ轟音を鳴らしながら叩きつけられ、床へと受け身を取ることも叶
わずに落下する

そこで彼女の意識は完全に途切れるのであった

「…ねえ、わーちゃん」

「なによ。あとわーちゃん言うな」

「ちよつちやり過ぎじゃね？流石に新人の子にマハーシヴァキックはやばいって……」

「思わずあれを使ってしまう位この子は凄かったってことよ。私も初日でアレを使ったのは初めてだしね」

「だからって…ああもう、骨格が折れてるじゃんか。どうすんのさこれ」

「あら本当。でも大丈夫よ、手配は済んでるから。それに…」

「それに？」

「思わず蹴りを放っちゃったわ、足が動いたから私の負けね。初日で私を負かせたのも

この子が初めて…こんな将来が楽しみな子はいないわね」

「…そう言えばそうだね。え、この子マジで凄いやつ？」

「ええ、逸材よ。取り敢えず…ん、来たわね」

「治療の準備は整っています。彼女をこれにお乗せ下さい」

「ええ。後は任せられたわよ、マガル」

「了解しました。では」

気を失っているFN49の容態を見て既に待機させていた医務班のマガルを呼び出すと、担架にFN49を乗せて民間の自立人形が担架を持ち上げて彼女と共に走り去っていく

その様子を見届けたWA2000とスコープイオンはM200とモシン・ナガンの方へ目をやった

そこには壁にめり込むかのようにピッタリと張り付いたまま意識を失っているモシン・ナガンと右足を踏み込んで両掌を前へ突き出しているM200の姿があった

「そつちも終わったみたいね」

「うん、やつぱり予想以上に粘ってくれたよ。これからが楽しみだね」

「こつちはこつちで浸透水鏡双掌なんか放ってるし…容赦ないにも程があるよ?」

「こうでもしないと気を失ってくれそうになかったんだ。こんなの初めてだよ」

「ふうん…それで、決まりそうなの?」

「モチのロン(、ω、)b」

WA2000の言葉にM200はサムズアップで答えていた

WA2000とM200は何も地力を見る為だけに彼女達を叩きのめしたわけではない
彼女達へ伝授する武術を何にするのか、それを決定する為に動きを見るのが一番の目

的であつた

そして両者共に無事に見つかつたようである

当然1つだけで済ますことはないのだがまずは1つの武を修めてもらう、それがこの基地の方針である

人間と比べて学習効率が非常に高い戦術人形であれば短期間での習得も可能だし、何より今回の生徒は才能に溢れている

それほど時間もかからずに人一倍戦えるようにはなるだろう、最もそこから更に突き詰めて鍛えていくのに時間は掛かるが……それらは実戦も通していかないといけないので今考えることではない

取り敢えずモシン・ナガンも修復が必要なので医務室へと運ぶ

その後スコープオンが2人に話しかける

「ねえ、この後予定とかある?」

「いや、特にないわね。強いて言えば事務業務位かしら、それもジェリコがやってくれてるから大丈夫だけど」

「ボクもないね。何もなしし長距離レンジで訓練しようかなあつて」

「それならさ……久々に私に訓練してくれない?あの2人見ると火が付いちやつてさ、なんだが頑張りたくなつたんだよね!」

「そういうことなら喜んでやるわ」

「ボクも。でも…」

「あの2人以上に容赦はしないから」

「へんつ！望むところだい!!さあそうと決まれば早速やるぞお!!!」

その後スコープピオンはWA2000とM200を同時に相手取るという無謀な訓練を行い、粘りに粘ったものの結局は2人の必殺技を同時に喰らって吹き飛んだ後に失神した

それでもWA2000とM200両者に傷を負わせていることを考えればやはり彼女も優秀である

そしてその日の夕方頃、モシン・ナガンとFN49はほぼ同時に意識を取り戻し自分達の横でスコープピオンが豪快ないびきをかきながら寝ていることに困惑するのであった

指揮官 1 日好き勝手権限 その 1

緑が豊富な森林、そよ風が吹き草木が揺れる

今日は少し風速が速いのかその揺れは大きかった

なんてことはない自然の風景、このご時世では珍しくなったものの違和感のある景色ではない

そんな自然の中に隠れて：否、同化しながら移動を行っている少女がいた

その少女は匍匐姿勢で這うように移動しており、その上自身の動きで草木の揺れが不自然にならないよう注意していた

着ている服もこの森林の植生に合わせたもののため、この森林の中で少女を見付けるのは至難の業だろう

そして件の少女は暫く移動を行った後、双眼鏡をチェストリグから取り出して覗き込む

遠くの景色をゆっくりと見渡したが何も見付からない

その事に若干の落胆をしたその時であった

悪寒を感じた少女はその場から跳び退き、それと同時についさっきまで少女のいた場

所に銃弾が撃ち込まれた

石に当たったのか跳弾し、運悪く自分の方へと飛んできたそれを首を傾けてなんとか回避する

その際少女の目は弾頭を視認し、それが338ラプアであることを確認した

(クソ、見付かった……奴の位置は分からない、銃声は聞こえなかったし飛翔方向から概算は出来るけど奴のことだしすぐに移動してて意味ないでしょうね。こつちだけ一方的に補足された、不味い状況ね……取り敢えず私も移動して攪乱しないと)

奴の銃弾を避けられたのは僥倖だが、状況は芳しくない

とにかく今は逃げなければならぬ、少女は立ち上がって全速力で走り出した

そうして暫く走った後少女は中腰になりながら静かに、されど急いで移動を行う

被発見地点から結構な距離を離すと少女は地面に身を完全に伏せ、周囲の気配を探る

…何の気配もない、感じるのは虫のそれだけだ

だがしかし油断は出来ない、なんせ相手は☒奴☒なのだ

少しずつ、慎重に身体を起こして周囲を目で観察して近くに奴がないことを確認する

確認を終えた少女は近くにあった木に登るとそこで息を潜めた

そのままどれ程の時間が経っただろうか

体感で数時間といったところだろうか、その間少女は微動だにすることなく木の上に居続けた

例え虫が自身の身体を這おうとも一切意に介さず、息を潜めて木の葉に同化し続ける
そうしている内に奴が現れた

どうやら少女を見失い、捜索しているらしい

奴の能力は異常に高いが流石に1km以上離れた地点から逃げられた所為で正確には追えなかったのだろう

少女の能力が高いのも要因だ、そうでなければいくら隠れようと一瞬で見付かってしま
まう

実際少女は奴の姿が見えても感情の動きがなく、自然の中に自分の身を溶け込ませる
ことに集中していた

奴もまた自然に同化しながら移動しているが、少女のことを捜索しなければならない
ことと少女の索敵能力の高さも相まって今度は一方的に少女が奴の動向を見る側だ

そんな中で少女は只管に待つ、奴が自身のキルゾーンに入ってからまで待つ

段々と近付いて来る……その状況下でも少女は鼓動の速まりも何もなく冷静に脚の
ホルスターからナイフを取り出す

そしてまた待つ、1歩1歩ゆっくりとしかし確実にこちらへと近付いて来ている

そして奴は少女の真下にまで来た

それでも少女は行動に移しはしなかった、奴が背中を見せるまで待つつもりなのだ
やがて奴はその木を通り過ぎ、少女の視界には奴の背中が映る

ここまで来て少女はやつと行動を開始し、ナイフ片手に木を蹴り飛ばし奴の背中へと
襲い掛かる

奴の背中へと迫る最中、奴は振り返る動作をする気配がない……勝った、少女は確信
と共にナイフを奴の肩口へと突き下ろそうとして

次に視界に映ったのは雲一つない青空であった

「うっ……」

真つ白な部屋、医務室のベッドで少女は目を覚ます

「起きましたか。意識はハッキリしていますか？」

「マガル……？そう、私は負けたのね」

「そのようです。ですが指揮官が褒めていましたよ、『あと一瞬でも気付くのが遅れていたらやられていたのは私の方だった』とのことですよ」

「そう……でも勝てなければ何の意味もないわ。いくら善戦したとしても負けたらそれは負けよ。死ぬだけだわ」

「相変わらずですね……そんなに完璧が欲しいんですか？」

「当然でしょ。私は完璧にならなきゃいけないの」

少女、HK416はベッドから降りると軽く身支度をする

その後マガルにお礼を言ってから部屋を出るとその足で訓練場へと向かい、他の人形達を相手にナイフ術の訓練を始めた

HK416という戦術人形は皆、差異こそあれ完璧であることを望むがこの基地の彼女の場合その想いがかなり激しい

それには何故彼女がこの基地へと来てミレニアム8を務めるまでに至っているのか
が関係して来る

彼女は胡蝶事件が起こるより以前に製造された個体であり、当時の状況を知る1人だ
当時彼女はS地区ほどではないがそれなりに鉄血の攻勢が激しい地域に居り、彼女の
所属していた基地は市民を逃がした後に撤退戦を展開したがその際に指揮官が重傷を
負ってしまった

到底指揮を執れるような状況ではなくなり、状況は一気に悪化して全滅を待つだけだ
と誰もが思っていた

その時HK416は指揮官の副官として彼と共に陣頭指揮の執り方を学んでいた経
験を活かして咄嗟に指揮権限を自分に移すことで指揮を執り、指揮官と基地に所属して
いた全人形を撤退させることに成功した

このことはグリフィンの中でも評価され、だからこそ彼女はスカーレットのS地区奪
還作戦のメンバーに選抜された

彼女としては自分の功績が認められ、重要な作戦に投入されることは名誉に感じてい
たため喜んでこれを受けた

きつと自分の能力が活かされ、頼りにされるだろう……そう、思っていた

確かに彼女の能力は高く、それは活かされた

問題だったのはスカーレットとクレアの存在だ、この2人は絶対の自信を持ち己が完璧であると信じていたHK416を遙か後方に置き去りにするレベルであった

彼女の自信は打ち砕かれ、自分という存在が分からなくなるほどにシヨックを受けた鉄血のハイエンドなどの戦術人形に負けるのならまだ納得は出来る、しかしこの2人はただの人間だ

外骨格すら装着していないただの人間に何もかもが劣っている、その事実は彼女の心を蝕んだのだ

当然この2人が異常なだけであり、彼女が相当に優秀であることに変わりはないのだが当時の彼女にとってそんなものは何の慰めにもならなかった

一時期はゲシユタルト崩壊を起こす程に精神をやられたが、次第にこの2人をも越えて本当の意味で完璧になってやるといふ想いが湧き出て来た

それから彼女はスカーレットとクレアに願い出た、私を強くしてくれと

そうして彼女はスカーレットの基地へと転属し、ここで修練を積むことで最高戦力の1人として数えられるまでになったのだ

しかしそれでも未だWA2000に負けているしスカーレットやクレアに勝つこと

も難しい、彼女は現状に一切満足などしていない

更就上へ、更に前へ：彼女は只管に己を鍛え続ける

そしていつの日か本当の意味で完璧になれたら……彼女はこの基地を去り、元の指揮官の下へと戻るつもりだ

今でこそこの基地に馴染んではいるがやはり彼女の心はあの指揮官にある、左手の薬指に嵌められた銀色の指輪が光る度に彼女は郷愁の想いに駆られるのであった

「よお、あいつらはどんな感じだった？」

「あら指揮官。今日は416に1日好きにされる日じゃなかったかしら？」

「そうなんだがな、あいつ朝にマンツーマンで訓練してくれたら後は晩酌に付き合ってくれただけで良いってよ。だからあいつらの具合でも聞いておこうと思っただけ」

「なるほどそうでしたか」

所変わってスカールレットはWA2000とM2000の元を訪れていた

「んでどうだったんだ？それとあいつらに何を教えるのか決まったのか？」

「気になるなら見てみますか？きつと驚きますよ」

「お、なんだなんだ？結構粘った感じか？」

「そうね、そこら辺は見てもらえれば分かるわよ。はい、どうぞ」

「どれどれ……ほう」

スカールレットは彼女達の試合の録画を食い入る様に観ていた

やがて全てを見終わった彼女は感嘆の吐息を漏らす

「へえ……すげえじゃねえか、おい。特にモシンが立ち上がったのはやばいな、FN49もまさか初戦でワルサーを負かすとは……ク、ククク」

「良い顔してるじゃない、指揮官」

「そういうてめえも結構な顔だぜ？それに、なあ？」

「気持ちは分かります。鍛えたくて鍛えたくて堪らないですよ」

「ああそうさ！早くこいつらに仕込んでやりてえよ……そいで、何にするんだ？」

「予定ではあるけれどFN49はサブット、モシンには劈掛拳と八極拳を教えるつもり」
「ほう、FN49がちいと特殊な感じになるが……確かにあいつにはそれが一番良いかもな」

「ですね。そう言えば指揮官はこれからどうされるんです？」

「そうだなあ……取り敢えず自分の訓練でもするか。M200も一緒にどうだ？」

「…私は？」

「書類仕事でもしててくれ」

「ぶつとばすわよ」

「チュール」

「……3本よ」

「りよーかい♪」

「ワルサーも相変わらずだね。じゃあ行きましようか」

「おう！」

その後スカレットとM200は第九狙撃訓練場へと赴いて共に訓練を行い、WA2000は執務室でジェリコと共に書類仕事をするのであった

因みにチュールで釣られたことを知ったジェリコは呆れ、WA2000の顔は赤く

なっていた

「邪魔するぜ、スプリングフィールド」
「いらつしやいませ、指揮官。416さんなら既に来ていますよ」

「遅かったじゃない、指揮官」

「すまんすまん、思ったよりも新人が張り切ってくれてるみてえだな。つい熱が入っちゃまった」

その日の夜、スカレットはHK416との約束をしていたのでスプリングフィールドのカフェへ来ていた

そこには既にHK416がカウンター席に着いており、彼女のことを待っていたようであった

軽く謝りながら隣の席に着くとスプリングフィールドにカルーアミルクを頼む

「相変わらず最初は甘いお酒なのね」

「まあな。色々やって疲れた頭にはやっぱ甘いもんだろ」

「気持ちに分かるけどね」

「どうぞ指揮官、カルーアミルクです」

「お、サンキュー！んじゃあ……」

「ええ、乾杯」

HK416とスカレットは互いのグラスを軽く合わせるとクイツと傾ける

スカレットは口中に広がる甘い味わいと喉を通り過ぎる濃厚なミルク感に満足そうに息を吐く

「今日はありがとね、指揮官」

「ん？気にすんな、私だつて良い訓練になった。お互い様だ」

「それでもよ。こういう機会でもないしと貴女にお願いするのは気が引けてね……私が素直じゃないのは知つてるでしょ？」

「たりめえだ。酒が回るとちよいと素直になるのも含めてな」

「そうね……ねえ指揮官、私達が最初に出会つた日のこと覚えてるかしら」

「覚えてるぜ。あの時から既にお前は優秀な兵士だったな」

「そう言つてくれると嬉しいわ。でも貴女と比べると全然駄目だった。あの時の私は自分に絶対の自信があつて、それを裏付ける実績もあつたわ。だから思つてた、『私は完璧だ』つて」

「そうだったな……優秀であることに変わりにはなかつたが、完璧には程遠かつたな」

「ええ、本当よ……あの時は貴女の所為で自分が分からなくなつた。戦術人形で、その中でも完璧で一番な私……そうでなければならぬのに、ただの人間の貴女に何もかもが劣つてた。そんな私に、人形の私に価値なんてあるのかつてね」

「確かにあん時のお前はかなり思い詰めてたなあ……ケアすんのも大変だったぜ」

「……迷惑かけたわね。それと、ありがとう」

「……なんか感謝されるようなことしたか？」

「したわよ、それはもう沢山ね。私が全然完璧じゃなかったって教えてくれたし、まだまだ成長出来ることも教えてくれた。そしてその為の訓練もしてくれた、それも情を一切挟まない途轍もなく過酷なものを。そして……私をこの基地の最高戦力と呼ばれる領域にまで引き上げてくれた。全部、貴女のお陰よ。本当に感謝してるわ」

「……おう」

「何よ、照れてるの？珍しいこともあるものね」

「うっせえ。つうか良くそんな恥ずかしいこと臆面もなく言えんな……むず痒くて仕方ないぜ」

「私だって恥ずかしいは恥ずかしいわよ。お酒の力を借りないとこんなこととても言えないわ……」

「もしかしておめえ、それを言いたくて」

「さあね、どうかしら？一つ確実なのは私はまだ現状に満足してないってことね。ワルサーを下して、その上で貴女とクレアとイーサンを越える。そして……」

「あいつの下に帰る、だろ？人形のお前と違ってあいつは人間、早くしないと一緒に入れる時間がどんどん少なくなっちまうもんね」

「ええ。だから……これからもよろしくね。私をもっと、もっと強くして」

「任せとけ」

その後彼女達は2杯目のお酒を頼み、飲み明かしていく

普段なら言えないようなことも今は自然と口を突いて出てくる、そんな変な自分をどこか楽しむかのように話に花を咲かせるHK416の顔は……とても綺麗で、何処までも澄み切っていた

夜が更けても彼女達は飲み交わし、スプリングフィールドが止めるまで話が尽きることはなく穏やかながらも楽しい時間を過ごしたのであった

実践編：格闘訓練その②

「さあ、今日は具体的に貴方達へ格闘を叩き込んでいくわよ」

「それぞれ違う内容になるから部屋も違うよ。FN49はわーちゃんに「わーちゃん言うな」、モツシーはボクに付いて来て」

S09H基地、FN49とモシン・ナガンはWA2000とM2000にそれぞれ違う部屋へと連れて行かれた

WA2000に付いて行ったFN49はとある部屋へと入るとそこにはかなり太い巻き藁があつた

「これは…?」

「格闘用の巻き藁よ。一〇〇式の使つてる巻き藁が有名だけど、こういうものもあるのよ。これを使って今から貴女にサバットを教えるわ」

「サバット……と言うのは何でしょう?」

「サバットって言うのはフランスの足技専門の武術のことよ。色んな武術を元に構成されたものでね、中には船の上で戦うことを前提としたものまであるわ」

「船の上って……そんな状況あるでしょう?」

「まあ今だとあまりないわね。でもこれは言い換えれば『足場の悪い場所でも十分に戦える』ということでもあるわ」

「なるほど……船の上じゃなくても使える場面はあるんですね」

「そういうこと。じゃあ軽くやってみせるから見て頂戴」

WA2000はそう言うのと巻き藁に向かい、呼吸を整える

するとFN49がギリギリ目で追える速度で蹴りを放ちまくった

右脚だけで立って左脚で連続蹴りを放ったり空中に跳んで地面に着くまでの間に幾つもの蹴りを巻き藁に叩き込んだり、拳句の果てには脚だけで床に固定された巻き藁を強引に引き抜いて自身も空中で舞いながら床へ向けて叩きつける……脚だけの投げ技☒を行ったりした

それを見ていたFN49は余りの光景に呆気に取られていた

恐ろしく高い技量が必要な技ばかりであるしそれをなんてことはないように放つWA2000、しかも今やっているのは『FN49にも見えるように加減された』もの……それだけの技を受けて尚崩れていない巻き藁の耐久力にも目を見張るものがあるだろう

するとWA2000がFN49に振り返り、声を掛ける

「呆けてる場合じゃないわ、貴女もこれを出来るようにならなきゃいけないんだから。」

さ、まずは基本的なことから練習していくわよ」

「は、はい！よろしくお願いします！」

FN49はWA2000に習いながら基本的な動作から学んでいく

簡単な蹴り方から難しい蹴り方まで様々な蹴りの動作を学び、同時に腕の使い方も学んでいく

サバットにおいて腕は攻撃に使うことはないが、身体制御に於いて非常に重要となるなにせ空中で体勢を変えるには腕も脚も両方複雑な動きをしなければ不可能なのだ、分かりやすいところで言う『猫ひねり』を見ると良い

猫は空中で逆さに吊られてから落とされても落ちる迄の短い時間で体勢を変えて足から着地することが出来る

これを可能とするには慣性モーメントを利用して空中で体勢を変える必要があるのだが、それと似たようなことを人間の身体で行うのだ

勿論人間と人形とは質量や筋力（発することの出来る力）等様々な条件が違う為全く同じようには出来ないが、そこはスカーレットを始めとした様々な者の努力によつて人形の身体に於ける身体操作の理論を作り上げている

そうして基本的な動作を学び終えたFN49はそれらを何度も何度も繰り返し練習して身体に覚えさせていく

こうしたことを学ぶのが早く、すぐものに出来るのは流石戦術人形といったところであらうか

FN49もその例に漏れず、すぐさま習得していく

そして基本を修めた後は……WA2000との立ち合いだ

とは言え今回の目的はあくまでもFN49にサブットの動作を実際に人や人形に向けて放つ為の練習だ、WA2000も自身の実力を抑えに抑えて彼女の技にしっかりと当たる

ちゃんと当てる感覚を覚えさせる為にわざと当たるのだ、いくらFN49が武術を学び始めた素人同然の身と言えどやはり戦術人形のパワーから放たれる技の威力は恐ろしいものがある

WA2000はそれを覚悟している上に人工筋肉を締めることで衝撃を防いでいるが、それでも正直キツイ

だが彼女にしつかりと感覚を覚えてもらうためには仕方がない、WA2000は先日とは逆にFN49の蹴りを全身に受けながらも時折反撃を繰り出して防御についても教えていく

途中で休憩を挟みながらもそれを延々と続けていき、次第に難しい技等も次々と教えていく

そうすることでFN49は一日でほぼ全ての技を覚えて実戦レベルにまで引き上げてもらうのであった

「さ、ボク達はこつちだよ。付いて来て」

時間を遡ってM200とモシン・ナガンの様子を見て行こう

M200はモシン・ナガンを自分達が訓練を行う部屋へと連れて行く

「分かったわ。ところで、私には何を教えてくれるのかしら？」

「劈掛拳と八極拳だよ。モツシーはボクと違って手足が長いから腕や脚を鞭のように使う劈掛拳との相性は良いし、劈掛拳が苦手な至近距離へ対応するために八極拳を学ぶのは基本的なんだ」

「へえ……そんなのもあるのね。ってことはその劈掛拳とやらはお師匠が教えてくれるわけじゃないっばいわね」

「鋭いね、その通りだよ。八極拳に関してはボクでも十分だけど劈掛拳は流石に出来ないからね。まあ……出来ればボクの方が良かっただろうけどね」

「……それはどういうこと？」

「その内分かるよ。ほら、着いたから入るよ」

「分かったわ……」

モシン・ナガンは嫌な予感がするもM200の後に続いて部屋へと入る
そこには木人とスカーレットがいた

「お、やっと来たか。もう準備は終わってるぜ」

「ありがとうございます、指揮官。さあモツシー、まずは指揮官と劈掛拳について学ぼうか」

「……そういうことね」

モシン・ナガンはM200の言葉の意味を理解した

劈掛拳を教えるのはスカーレット、つまりそれはM200の行うそれよりも激しく、
容赦がないことを示していた

勿論M200も容赦しないのは先日の立ち合いで分かっているが、先程のM200の
言葉を考えればそれ以上ということなのだろう

そのことに軽く絶望感を覚えながらもモシン・ナガンは気丈に振る舞い、スカーレ
ットの訓練を受けることにした

とは言え今回はあくまでもモシン・ナガンに動きの基本や技を教えるのが目的、FN
49と同様しっかりと見せてからゆつくりとした動作で細かく教えるところから始ま
る

それをする為にスカーレットは木人を相手に様々な技を放っていく

木製のそれは非常に硬く、普通殴ったりでもすれば拳の方が砕けるがスカーレットは何てことないように次々と技を繰り出す

腕を伸ばして振り回し、木人に叩きつけると大きな音と共に床に固定された木人が揺れる

その際木人を壊してしまわないようにしっかりと手加減が出来ている所に彼女の技量の高さが伺える

その後スカーレットはM200を相手により実戦的な動きを見せ、実際にモシン・ナガンへやらせることで覚えさせていく

1つ1つの動作をゆつくりと、確実に教えていく
そうすれば今度は……スカーレットとの模擬戦だ

これをM200が担当しないのは彼女が劈掛拳を習得していないからだ

身体の小さいM200では劈掛拳を上手く活かすことが出来ない、それでも模擬戦の相手を務めること自体は可能である

しかし模擬戦でも同じ武術を扱える者が同じものを使った方がよりその武術を深く学ぶことが出来る為、出来る限りその通りにする方が良い

その条件を満たす者がこの場にはスカーレットしかいない為にモシン・ナガンは容赦のない模擬戦を行うことになってしまったのだ

だがそこはやはりスカーレット、WA2000と同様モシン・ナガンにすっかりと技を放たせてそれをモロに受けることもする

人間である彼女にとって戦術人形の技を真面に喰らうのはWA2000以上に厳しいものがあるが、それでも学ばせる為に敢えて受ける

それでもモシン・ナガンに慢心を抱かせないようにするのも含めて相当に彼女へ攻撃を当てることもするのだが……モシン・ナガンは持ち前の根性でそれを耐え切ってみせた

勿論それが出来るように手加減はしているものの、それでも並外れた根性であることに変わりはない

自分で体験したことでより彼女の根性の凄まじさを感じたスカーレットは始終笑顔で模擬戦を行い続けるのであった

そうしてスカーレットとの模擬戦が終わると休憩を挟んでからM2000との模擬戦に変わる

そこでM2000は八極拳を使用し、見せることで今後行う八極拳の訓練の効率を上げる

当然M2000もWA2000やスカーレットと同じようにわざと当たったりしながらどんどん訓練を行っていき、劈掛拳の習得を完成させる

次に行うのは八極拳だ、これも先程までと同様に行っていく

1日のほぼ全てを訓練時間に充てることでモシン・ナガンは見事2つの拳法を習得してみせた

終わる頃には死人のように疲れ果てていたが、こんなものはまだまだ序の口だ

訓練場を後にしたモシン・ナガンは同じように使て果てているFN49と合流して大浴場へ1日の疲れを癒しに向かうのであった

「あー……気持ち良いわねえ……」

「おじさんっぽいですよ、モシンさん……まあ気持ちは分かりますが」

「そうよねえ、昨日のあれに比べれば痛みとかは大分少ないけどそれでも相当にキツツイわよ……」

「でもワルサーさんは『こんなのまだ優しい方よ』って言っていました……」

「……マジ？ちよつと怖いわね、それ……」

「……ちよつと、といえる時点で何だかここに染まってしまっているような気がします……」

「言われてみれば、そうね……ってことは私達も思ってたより成長出来てるのかしらね」
「そうだと良いですね」

FN49とモシン・ナガンはゆつくりとお湯に浸かりながら和やかに話していく

彼女達の言う通り2人は既にその実力を高めており、下級鉄血兵くらいであれば2人で1個小隊を相手取ることも可能だろう

以前であれば考えられない程の成長速度である

彼女達の才能もそうだが、この基地の異常な教練技術の高さが伺える

特に武術なんてものは1日で習得するなど流石に戦術人形であつても不可能である

勿論、彼女達はそれを修めたとは言つてもまだまだ未熟ではある

彼女達が出来たのは基本的な動きと技のほぼ全てを習得しただけ、それでも異常ではあるのだが……これから数日程かけて実戦形式の、いや最早ただの実戦を行うことである程度のレベルにまで高める予定である

その後未だ教えていない難易度の高い技……所謂奥義を伝授することで格闘訓練は一日終わりである

勿論まだまだ鍛えたいところではあるが、そればかりするわけにもいかない

今行っているのはあくまでも『スナイパースクール』なのだ、そろそろスナイパーに必要な能力の習得をしなければならない

勿論格闘技術も必要と言えれば必要ではあるが……そもそも使う必要がないようにするべきであることを考えると習得優先度は低い

スカーレットは『己の身体を思い通りに操るため』と言っているが、それでもここま

でやるのはこの基地くらいであろう

兎にも角にも格闘訓練は近い内に終わりを迎える、その後は……地獄の空の旅の始まりである

そのことを知らない彼女達は嫌な予感がしながらものんびりと湯船に浸かり、疲れを癒すのであった

実践編：空挺訓練

「ね、ねえ……本当に行かないやダメ？」

「うん、行かないやダメ」

モシン・ナガンは冷や汗を流して自分の膝の上に乗っているM200に訊く

しかし返って来たのは非情なもので、それに呼応するかのようには彼女の冷や汗は増える

まるで人間のように早鐘を鳴らす駆動部に静まれと命じるもその命令を聞く気配はない

「……つたく、しゃあねえなあ」

動けずにいると同じ場所に居るスカーレットが頭をガリガリと掻きながら立ち上がって近寄って来た

嫌な予感を感じたモシン・ナガンは逃げようとするも今の彼女はM200を膝に乗せて座っている……逃げられるわけもなくスカーレットに捕まった彼女はM200毎担ぎ上げられてしまった

「ちよ、ちよっと同志!?こ、心の準備ってものが……!」

「ハアツ！」

「うぐうつー……良いね、良い感じだよモツシー」

モシン・ナガンはM200に対して今しがた教わったばかりの絶紹を放ち、見事当てていた

それを受けたM200はその場に崩れ落ち、苦しそうに呻きながらも彼女を称えるのであった

「う、うそ……お師匠が……って大丈夫!?!」

「ああうん、大丈夫……だよ。まあ、その技を真面に喰らったら……ボクでもキツイけどね」

脂汗を流しながら苦しむM200をモシン・ナガンは介抱し、やがて彼女の容態は落ち着いて来た

「ありがとうモツシー、もう大丈夫」

「良かった……それにしても、私にあんなことが出来るなんてね」

「元々才能はあったし、ボクや指揮官に加えて色んな人形達が協力してくれたからね。戦術人形ならこれくらい数日で出来るようになるものだよ」

「そんなものなのね……ってことは、これで一応は格闘訓練はOKなのかしら？」

「そうだね、取り敢えずは十分かな、鉄血や人類人権団体なら普通に戦えると思うよ。勿論ボクが本気を出せばまだまだ相手にもならないけどね」

「そりやそうよね……さっきのだって手加減してくれてるのがありありと分かったし……」

「こればかりは経験だね。これから実戦を何度も経験することで磨いていこう」

「ええ、分かったわ！」

笑顔になるモシン・ナガンを見てM200も笑顔を見せる

まるで母娘のような光景でありながら精神的には娘が母側という摩訶不思議な空間を形成した後にM200はモシン・ナガンに絶望を突き付ける言葉を放った

「てことで……明日からは空挺訓練だね。イーサンさんの操縦する航空機から何度も飛び降りるよ」

「……ええ」

「楽しみだね、モツシー」

「……これほど明日が来て欲しくないって思ったことはないわ」

笑顔のM200とは対照的にまるでこの世の全てを諦めたような表情をするモシン・ナガン

彼女の感じた絶望感は翌日、想像以上のものとなつて襲い来ることに……

——回想終了——

「ほらモツシー、目を閉じないでちゃんと景色を見て」

「無理無理無理無理無理!!」

「ああそれと、あんまり大きく口を動かすと舌噛み切るかもしれないよ?」

「……っ!!」

「目を開けないと訓練にならないし余計に怖いよ?だってどのタイミングで開傘^{ブル}すれば良いか分からないし……最悪時速約200kmで地面に叩きつけられてバラバラになるかもね」

「それは嫌……!」

「じゃあ目を開けてしつかりと見て」

「……っ!」

モシン・ナガンはようやくと目を開けた

顔には大型のゴーグルが着用されている為目を開けるのに物理的な苦勞はない

むしろガードされていない口を動かす方がしんどいくらいだ

しかしそれでも地面が見えない程の高度から飛び降りている最中、目を開けてその様子を見るというのは非常に怖いものがある

その恐怖を必死に抑えつけて目を開くとそこには雲が広がっていた

「ちよっ?!?!!」

「HALO降下するって言ったでしょ?」

「それにしたって高過ぎよお!!普通少しずつ高くするんじゃないの!」
「普通はね。でもここは普通じゃないから」

「来るんじゃないかったあああああ!!!」

モシン・ナガンは叫びながらも目を閉じることなくしつかりと目の前の光景を見据えていた

やがて雲海の中へ突入する

恐ろしい数の水滴が全身を叩き、猛烈に痛い

それに高度が高いため気温も低く、更に水滴で濡れて余計に冷える

雲海を抜けると終端速度に達した彼女達に途轍もない風が襲い掛かり、濡れた身体はすぐに乾く

その代わり体温は滅茶苦茶に下がる

ガクガクと震えてくる身体に鞭を打って事前に教えられていた姿勢を維持する

両手両足を広げてお腹を突き出して背中を引っ込ませる

とは言え両手両足以外は自身のお腹側にいるM200の姿勢によって強制的に同じ体勢を取らされている

本来2人で降下する際には経験のある者が背中側へと来るが、M200の背丈の都合上それは難しかったのでお腹側へと来ている

それと同時にパラシュートの操作もお腹側のM200が行えるよう専用で改造されたものを用いている

モシン・ナガンは精一杯両手両足を広げるが恐ろしいまでの空気抵抗に襲われて姿勢が崩れそうになる

己の筋力のみで維持しているが正直かなりキツく、おまけにどんどんと地面が近付いて行くのが見えるので恐怖心も半端ない

最早何かを感じることも出来ない程に余裕のなくなってきた彼女は只管に姿勢を維持することだけに集中し始めた

それを感じたM200は少しだけ感心していた

（ふうん…思ってたよりもこうなるのが遅かったね。想像してたよりも度胸があるみたいで良かったよ）

そんなことを考えながらM200はモシン・ナガンに話しかける

「もうちよつとでパラシュートを開くよ。2人での効果時にはまず減速用の傘を開いてから本命の傘を開くんだ。結構衝撃が来るから覚悟しておいて」

「——っ！（コクコクコク）」

モシン・ナガンは言葉を発する余裕もなく、何度も頷く

それを感じ取ったM200は表情を変えずに地面を見据える

(800……700……600……500……400…開傘！)

M200は高度400mを過ぎて少しした後、減速用のパラシュートを開いて減速する

その後300mを過ぎた辺りで本命のパラシュートを開いてゆっくりと降下していく

パラシュートを巧みに操り柔らかい土の上に降り立ったM200は一先ず自分とモシン・ナガンを繋いでいる固定具を外した

その直後モシン・ナガンは地面に倒れ込むようにしがみつき、土に指をめり込ませていた

「ああ地面……大地は良いわね大地は……そもそも中国拳法って大地から力を得ることが多いってお師匠も言ってたじゃない、そうよだから大地を愛するのは自然なことでもう絶対ここから離れないわ……」

「気持ち分かるけど支離滅裂すぎるよ、モツシー。それと地面に恋しかけてるところ悪いんだけど……これで終わりじゃないからね？」

「……………」

「昨日も言ったよね？『何度も飛ぶ』って。さ、もう暫くしたらFN49とWA2000も降りてくるだろうしそしたらもう一回飛ぶよ」

「……やだ」

「だめ、飛ぶよ」

「やだやだやだ」

「だめだめだめ」

まるで駄々っ子の子のようになったモシン・ナガンを揶揄うかのようにM2000は言葉を返し、遊んでいた

愛弟子に対するちよつとした悪戯心である

そんな遣り取りを繰り返しているとやがてFN49とWA2000のコンビも少し離れた地点へと降り立ち、FN49は腰が砕けて地面にへたり込んでいた

涙目になって「もう勘弁してください……」姿に罪悪感が湧き起こるものの、これは訓練だ

WA2000はそんなFN49の襟首を掴んで引き摺るようにして航空機の着陸ポイントへと向かう

M2000も同様にモシン・ナガンの右脚を引き摺りながら移動を開始する

「いやいやいや、もういやよお……!」

「も、もう……やめて下さい……!」

彼女達の嘆願は聞き入れてもらえず、結局その日の内に数十回も飛ぶ羽目になるので

あつた

流石に十回以上熟すと慣れて来たのかグズることはなくなったが、それでもまだ嫌なことに変わりはないらしい

一方その頃イーサンは……

「ねえスカーレット……見ててかなり心苦しいんだけど、もう少し優しくしてあげられ

ないかい?」

「諦めろ、これが一番早い。元空軍のお前もそれは分かんたら」

「空挺部隊と混同してないかい、それ」

「似たようなもんだろ」

「……暴論だなあ」

「取り敢えずこれでちったあ慣れたろ。後は一人で飛べるようになってもらって、そこから技量向上していきやいい。それまでの間、頼んだぜ?」

「仕方ないね……分かったよ。やり過ぎないようにね」

「安心しろ、私達が受けたのよりは優しくする」

「……あの子達にとってはそれでも地獄なんだろうなあ」

しみじみと彼女達の今後を心配していた

実践編：狩猟訓練①

「…………ふっ！」

高高度を飛行する航空機よりモシン・ナガンは飛び降り、その身を空中に投げ出す瞬間、凄まじい空気抵抗が彼女の身体に襲い掛かるがそれに屈することなく姿勢を制御する

最初は頭を下に向けて腕も脚も身体の横に真っすぐ伸ばして添えることなるべく空気抵抗を減らして素早い降下を行う

そのまま数分間が過ぎると高度もかなり下がって来た、ここで全身に力を入れて身体を水平に向けながら両手両足を広げる

時速約280kmで降下中に姿勢を大幅に自分の意思で変えるなど通常は不可能だが、戦術人形の膂力を最大限に活かすことでそれを可能としている

因みにその為の技術体系を築いたのはHK416だったりする

兎も角モシン・ナガンは空中で姿勢を変えると降下速度を落とす、着陸へ向けて心の準備をしていく

やがて地面が近付いて来た頃、彼女は肩口にある紐を思いつ切り引いた

するとパラシュートが展開され、身体に凄まじい衝撃がかかると同時に落下速度が大幅に低下する

そのままパラシュートを操りながら砂浜へ綺麗に着陸した彼女は素早く降下用の道具を仕舞い込み、腰に装着していたライフルケースから己の半身とも言える銃を取り出すと事前に指定されていた合流ポイントへと急ぐ

10分程の時間を掛けて移動して指定ポイントへと到着するとそこにはスカーレットとFN49がいた

「あら、私が最後だったのね」

「あ、モシンさん。私は運よく進めただけなので……」

「そう謙遜するな。発信機でお前の動きを追っていたが見事な移動だったぞ、ちゃんと実力だ」

「あ、ありがとうございます」

「ちよつと悔しいわね……次やる時は抜かしてみせるわ」

「その意気だ、モシン。さて、いつまでも話してる訳にもいかねえしちやつちやと始めろぞ」

「はい！」

スカーレットの言葉に2人は頷くと彼女の動きに合わせて自分達も得物を手にした

ままその場にしゃがみ込む

彼女達は今回スカーレットの所有する自然豊かな森林にて狩猟を学ぶ為にここまで来ている、先の授業でスナイパーには狩人としての能力が大切であることは説明済みである為そこに疑問を持つことはなかった

「良いか、狩猟に於いて大切なのは自然と共生することだ。自然というものは恵みを与えてくれるが同時に様々な脅威もある、それらの脅威に屈しない為にまずは自然と一体になることを覚えろ」

「自然と一体化……それはどうやれば良いのかしら？」

「一番手っ取り早いのは自然の中で文明の利器を捨てて生きることだな。何の準備も知識も無しでこれをやるとすぐに死ぬが、しっかりと準備をしてからやりやあかなり良い経験になる、そして今回やる手法でもある」

「あれ、銃は良いんですか？」

「本来はダメだが……これが何の為の訓練かを考えると持っていて然るべきだろ。無論銃すらも捨てて生きていってそれから銃を解禁するのも良いが、二度手間だ。効率が悪」

「なるほどね……じゃあ銃だけはOKってこと？」

「後は簡易的な調理器具と住処となる家と最低限の家具だな。それすらも無しで始める

のは出来ないこともねえがリスクがデカすぎる、寧ろそこら辺は後々教えるとする」
「分かりました。ではまずは何をすれば……」

「まずは私に付いて来い、これから私達の家となるログハウスに案内してやる」

「ログハウス……良いわね、実はちよつとこういう生活憧れてたのよ」

モシン・ナガンが少し目を輝かせ、これから行う訓練兼生活に心を躍らせる

事前に軽い説明をしているが、今から暫くの間彼女達3人はこの森林の中で自給自足の生活を営むことになる

ただ自給自足とは言え流石に農業や酪農はしない、農業に関しては訓練の目的上やる意味がないし酪農をすればそれは最早狩猟ではない

気に入った動物を捕獲して飼うくらいは許されるが……安定した生活をする上でそれは足枷となるのでやめておいた方が無難である

それは兎も角彼女達はスカーレットの案内で森の中を進み、1時間程経過した

「……結構遠い所にあるのね。それにしても……」

「ええ、森の中を歩くだけでここまで大変とは……きやつー！」

「つと。しつかりしな、ここら辺は足場も悪いから慎重にな。私も速度は抑えてんだからしつかりと周囲を見ろ」

「す、すいません……ありがとうございます」

「ま、もうちよつとで着くからもう暫く頑張んな」

スカーレットのその言葉通りそれから十数分程で開けた場所と一件の家がある地点に出た

それを見た2人は思わず感嘆の溜息を漏らす

このご時世にこんな手付かずの森林が残っていること自体感動的なことではあるのだが、それ以上に朝の陽光を受けて輝く草木に影が伸びているログハウス……穏やかで静かな空間の中彼女達は目の前にある光景に感動を覚えていた

ここは絶海の孤島であり、世界地図には載っていないが故に第三次世界大戦の影響が最小限で済んでいる上にその後注目されることもなく自然が荒らされることもなかった

誰からも忘れられていた島……スカーレットがここを知っていたのは奇跡に近い、なんせ過去の任務で航空機のエンジントラブルで不時着したが故であるからだ

グリフィンの指揮官として安定して来た頃にこの存在を思い出してエーテルも用いた探索にて発見、その後ここを勝手に私有地として基地の一部の戦力を派遣及び存在を秘匿することで防衛を為してきた

こんな自然の残った島など人に知られれば忽ち欲望のままに壊されてしまうのは目に見えている、彼女はそれを嫌ったし何よりも訓練場所として非常に優秀なのでそんな

ことをされたらたまったものではない

因みに今もこの島には彼女の基地のメンバーの一部が滞在しており離島防衛の為に監視を行っていたりするが、彼女達との合流は偶発的なものを除いて行わないし緊急事態を除いて協力もしない

それは置いといてこれから彼女達は暫くの間この家で共同生活を営む、スカーレットの案内に従いまずは中へ入ってそれぞれ荷物を降ろすことにした

その後着替えて持つてきた携帯食を摂るとスカーレットは2人を外へと連れ出した「さて、初日だしまずは森林に慣れてもらうぞ。これからしこたまこの森を歩いてもらう」

「早速しんどそうね……」

「だな。しかし同時に気分の良いものでもあるぞ、なんとたつてこん時だきやあ争いごとを忘れてこの自然を感じながらゆっくりとした時間を過ごせるんだからな」

「それは魅力的ですね」

「だろ？無論道中で動物に会ったら狩ったりもするぞ。その時その時で必要なことを教えていくからしつかりと吸収するようにな」

「了解！」

「取り敢えずその大きな声を出すのはやめな。動物を驚かせるし存在を感知されりやあ

当然逃げられるぞ」

「あ、そうね……気を付けるわ」

「分かりました……」

「うし、んじやあ行くか!」

その言葉と共にスカーレットは2人を連れて歩き出した

まるで散歩を楽しむかのような雰囲気だがその速度は結構速い、2人は置いて行かないように必死に付いて行くのであった

「なんだか、心が洗われるような感じがするわね……」

「そうですね……ここにずっといたいような気もしてきます」

「気持ちには分かるぜ。私もこの環境は好きだからな」

数時間後、彼女達はまだ歩いていて

FN49とモシン・ナガンも慣れて来たのかスカーレットにしっかりと付いて行つて話をする余裕も出て来ている

「それにしても、ちよつとお腹が減ったわね」

「確かに……つてそう言えば食料持つてきてないんですが大丈夫なのでしょうか？」

「ん、もうそんな時間か……つと？ほほお、こいつは丁度良いな」

スカーレットは何かを見付けたのかその場にしゃがみ込んだ

その行動を2人は疑問に思いつつも彼女と同様の行動を取る

「いきなりしゃがんだりしてどうしたのよ、同志」

「指揮官のことですから疲れたとかではないと思いますが……」

「お前ら、これを見ろ」

「何よ……っつてこれは」

「……糞、でしようか？」

スカールレットが指差す方を見やるとそこには焦げ茶の固形物がいくつか転がっていた

何かしらの動物の糞である

スカールレットは2人の言葉に頷きつつその辺に落ちている小枝で糞を突く

「そうだ、こいつはここらに生息してる鹿の糞だな。それに……うん、まだ新しい」

「あら、そんなことまで分かるのね」

「まあな、見分け方としては水分だ。新しい糞はまだ湿気が多い、古くなると固くなる。そうやって見分けるんだよ」

「なるほど……」

「んでここに新しい糞があるってことは、だ」

「まだ近くにいるってことね？それでその鹿を狩って食事にするってところかしら」

「その通りだ！つうわけでこの足跡を追跡するぞ。見たところ歩てるようだしそこまで遠くには行つてねえだろ。んでここからはなるべく息を潜めて付いて来い、良いな？」

「分かりました」

「んじゃあ、行くぞ」

その後スカーレットは今までよりも速度を上げて移動を開始する

姿勢を低くして足音も殆ど鳴らさず、草木の揺れすらも起こさない

だが流石にFN49とモシン・ナガンはそこまでの技量はないので姿勢と足音を鳴らさないよう気を付けるくらいしか出来なかった

そのまま暫く歩いているとスカーレットが急に止まり、手に持ったM24SWSを構える

それを受けてFN49とモシン・ナガンもその銃口の先を見ると……何も見えなかった

2人の頭に疑問符が浮かび上がる頃、スカーレットは引き金を引く

銃声が轟き、僅かに硝煙が上がる

「今ので仕留められたの？」

「ああ」

「私達には何も見えなかったんですが……」

「まだまだ甘いな。背の高い草に隠れてやがったが、そこにいるぞ。付いて来な」

スカーレットの言葉に半信半疑のまま付いて行き、150m程移動するとそこには血を流して倒れている雄鹿がいた

「ほ、本当にいた……しかも一発で仕留めてるし」

「たりめえだろ、一発で仕留める方が追跡する手間も省けるし何より動物へ与える苦痛が少なくて済む。狩りを行う者として当然のことだ」

「これは……肺と心臓を破壊したのでしょうか」

「良い目をしてるな、その通りだ。さ、こいつを持って帰るぞ」

「持って帰るって……どうやって？」

「んなもん……こうすりゃ良いだろうが」

「……呆れる程の怪力ね、本当に人間なの？」

スカーレットの行動を見てモシン・ナガンは呆れた

そこには仕留めた鹿を肩に担いで悠々と歩き出したスカーレットがいたからだ

彼女はこれ位出来て当然だ、と言いつち先を進んでいく

2人も置いて行かれないように後を付いて行くのであった

「さあて、解体すつか！」

「解体つて……出来るの？」

「出来なきや狩りなんざしねえよ。いたずらに生き物を殺してるだけになるじゃねえか」

「確かにそうですが……」

「ま、見てな」

そう言うときスカーレットはナイフを取り出して毛皮を？いでいく

その手に持ったナイフを見て2人はまたもや疑問符を浮かべるのであった

刀身は漆黒であり、形も綺麗に整えられてはいるが何処か刃物感がない……疑問に思うのも当然であろう

「あの、指揮官……そのナイフはいつたいたいなんでしょう？」

「んあ、これか？そーいや見るのは初めてだったな」

スカーレットは解体をしながらナイフの軽い説明を始める

「こいつは黒曜石のナイフだ。黒曜石つてのは実はガラスの一種でな、結晶構造が中途半端な状態で固定されてるせいで脆くはあるんだがその代わりに上手くやりやあ滅茶苦茶鋭く加工出来る。そうそう、物を切断するには引張応力ひっぱりわりよくつつうのが関係して来てな、これは刃物のように鋭いものを物体に押し当てた時にその物体が接地面を境に自分から引き離れようとする力のことだ。この引張応力が物体の強度を越えた際に物体は切断される、つまり物を切りたきやこの引張応力を強くしてやりや良い訳だな。その方法は主に2つ、1つは刃物を速く動かすこと。刃物を動かす速度が速けりや速い程この力は大きくなる、素人が日本刀を持つても何も斬ることは出来ねえが達人ならスパスパと斬れる要因の1つだな。もう1つは刃先を鋭くすること、これは接地面積を小さくすりやする程『単位面積当たりの力』が大きくなることで引張応力を大きくする訳だ。単分子カッターって聞いたことないか？ありやあ分子一つ分位に鋭いって意味なんだが、当然切れ味は良くなる。んで黒曜石はさつきも言った通りガラスだ、脆いが加工し易いし鉄よりも余程鋭くすることが出来る。それに黒曜石は動物性の油が付着しにくいというのも利点だな、さつき刃を引く速度を速めりや切れ味は良くなると言ったがあれは言い換えれば『強い摩擦を引き起こすこと』によって切断力を高めている』とも言える。しかし生き物を斬れば当然血が付着する、そして血には多量の油が含まれていてな、こ

の油が付着することで摩擦力が減っちゃうんだ。だから日本刀は人を斬ると切れ味が鈍り、すぐにその血を拭き取ってやらなきゃいけない訳だな。だが黒曜石はこの油が付着しにくい、つまりは『切れ味が鈍りにくい』んだ。脆過ぎて武器に転用することは出来ねえが、こうやって動物の解体なんかには有用だぜ。実際脂肪が滅茶苦茶に多い熊の解剖には黒曜石製のメスが使われたりするしな。説明としてはこんなところか、納得したか？」

「え、ええ……分かったわ」

「……まさか、そこまで解説されるとは思ってたんですけど」

「ま、ついだけだついで。それにこの理論を知っておけばナイフで敵を殺す時に役立つたりするぜ、だから頭の端っこにでも留めときな」

「なるほど、無駄にはならないってわけね」

「この世で無駄になる知識なんてもんは存在しねえよ。どんなものでも良いからどんどんと吸収していけ、そいつはいつか役に立つからな。つといたところで解体も終わるだ」

「はやっ!？」

「んでこの鹿肉なんだが……本当なら一ヶ月ほど熟成させた方が旨くなるんだよな。だが……」

「……ごめんなさい、もう我慢出来そうにないわ」

「私も、さつきからお腹が……すいません」

「だろうな。ま、しゃーねえか。んじや調理に移るとすつか!」

「私達は何をすれば良いかしら?」

「お前らは今回使わない部位の肉を保管庫に入れておいてくれ、この家を出て右側にあるデカイ建物がそうだ」

「ああ、あれって保管庫だったんですね。かなり大きいので何か気になってました」

「そうか。んで保管する場所だが入りや分かるだろ」

「分かりやすいってことね、了解よ」

「序に中にある鳩肉を持って来てくれ、そいつも一緒に使っちゃおう」

「鳩って……あの鳩? 美味しいんですか?」

「良く街中にある鳩のことを指してるんならそいつは食べたもんじゃねえな。旨いのは山にいる鳩の方だ」

「なるほどね……ともかく、了解よ」

「頼んだぜ」

その後FN49とモシン・ナガンはスカーレットの言いつけ通りに鹿肉の余りを保管庫に持って行き、代わりに鳩肉を持ってくる

スカーレットは鹿肉と数種類の野菜を使ってスープカレーを作り、鳩肉は燻製にした
そしてそれらを食卓に並べ……

「な、なんて美味しそう……もう我慢なんて出来ないわ！」

「まあそう焦るな、料理はどこにも逃げやしねえからよ」

「そうは言っても、もう……」

「仕方ねえな、んじやもう食うか。ほら、席に着きな」

「ひやつほーい！」

テンションが上がりまくっているモシン・ナガンに若干押されるような形にはなった
が、3人は席に着く

その後食前の挨拶をした後に食事を開始する

スープカレーはとても濃厚で、鳩肉の燻製に合わせてじっくり煮込んだことから鹿肉
も非常に柔らかい

野菜は大きめにカットされていることからまだしつかりとした歯ごたえが残ってお
り、触感の違いも楽しめる

そして別皿に用意された鳩の燻製肉を一口頬張れば忽ち芳醇な香りが口中に広がり、
カレーで染まっていたのを良い具合にリセットしてくれる

無論鳩肉そのものの旨さも堪らない、お互いに濃い味であると言うのにベクトルが違

う為か相性は抜群に良い

余りの美味しさにスカレットやモシン・ナガンのみならずFN49まで何度もおかわりをし、かなりの量があつた料理達は跡形もなく3人の胃袋の中へと消えていた

「はあ……生きてて良かったわ」

「そこまで喜んでくれりやあ作つた甲斐があるつてもんだぜ」

「本当に美味しかったです……でも指揮官が料理出来るのは少し意外でしたね」

「言つてくれるじゃねえか。まあ気持ちは分かるがな……とは言え私が得意なのはこういう自然の中でも出来る豪快な料理だ、繊細なのは苦手だぜ」

「兵士にはそつちの方が良く合うから良いんじゃないかしら。私もこの方が好きだわ」

「そいつは良かった。いずれはお前達もこれくらい出来るようにしてやるから楽しみにしてろ。さて、腹も膨れたことだしちよいと休憩したら格闘訓練でもすつか」

「食後の運動つてわけね、良いじゃない」

「し、指揮官と……大丈夫でしょうか」

「なあに、お前達はWA2000とM200に合格貰つてんだ。その実力を十全に発揮すりゃあ良い、それに……」

「それに？」

「初日だしな、2対1で相手してやるよ。遠慮なんてせず全力で殺しに来な」

「あら……私達程度余裕ってことね？良いわ、それくらい成長したか見せつけてあげる」
「……だ、大丈夫でしょうか」

不安になるFN49を置いてスカーレットとモシン・ナガンは闘気を漲らせていく
とは言え食事をしたばかりであるので実際にやるのはまだ先だが……吐いてしまっ
ては折角の料理が勿体ない

そして1時間程した後には訓練とは名ばかりの戦闘が行われ、数分としないでFN49
とモシン・ナガンは地に這う羽目になったのであった

「つ、強すぎる……何一つ通じないなんて……」

「じ、自信なくしちやいそうです……」

「おいおい、お前らは十分強くなってるぜ？なんてたつて私に2発くらい当てられたじゃ
ねえか、これがこの基地に来たばかりのお前達だったら1秒で今の状態になっ
たらあ」

「……誉め言葉として、受け取っておくわ」

「そうしろそうしろ。さて、軽く運動もしたしちよいと昼寝でもすつか」

「良いですね……陽射しも程よくて、もう眠く……」

「心地良い疲労感もあるし、すぐに寝れそうだわ……ああ、なんて穏やかなのかしら」

「こんだけ良い感じに自然を満喫出来るのは最初の内だけだ、しっかりと味わっておき

な

「はあい……」

その言葉を最後に2人は眠り、スカーレットは寝転がりながら今後のことを考えていく

太陽が身体を温めてくれるのを感じながらじつくりと考え毎に耽る、いつもの殺伐とした世界から離れてゆつたりと過ごす時のなんと良いことか

彼女もこの時間を堪能し、数十分後に2人を起こしてもう一度森の散策へと出掛ける。今度はその辺に生えている野草や木の実などから食べられるもの、というより美味しいものを教えていく

戦術人形である彼女達には殆どの毒が効かないのは授業でも説明した通りである、なので人間には食べられないものでも彼女達ならば食用に出来る

特にキノコは美味しいけど毒があつて人間には食べられないものが多数あるためそこを重点的に教えていくのであつた

そして夜が訪れ、彼女達は道中でスカーレットが上下二連散弾銃で仕留めた鳩数匹を持ち帰り丸焼きにして食べる

その後は星が瞬く夜空を眺めて過ごし、夜が更けて来た頃にログハウスへと戻り床に就く

ログハウスには二段ベッドが2つ置いてあり、FN49が下でモシン・ナガンが上に入った

羽毛をふんだんに使った布団はとても柔らかく、疲れた彼女達の身体を優しく包み込む

すぐに寝入った彼女達をスカートレットは見届けると、自身も空いているベッドにその身を横たえて眠りに就くのであった

小話その7 PPKお嬢様の御戯れ

S09H基地管轄街イシス

そこはスカーレットによって訓練されたLSPと、そのLSPによって訓練を施されたイシス警備隊の活躍により非常に治安が良くなっている

だからと言って犯罪が起こらないというわけではなく、軽犯罪はそれなりに発生しているし時折この街の豊かな物資を狙った大型の事件も起こることはある

しかしその度にイシス警備隊とLSPの手によって犯罪者達は投獄されるか殺されるか基地に持ち帰られて尋問からの拷問処刑されている、例外はない

急に何が言いたいのかと言うと、それは……

「立て籠もつとる犯人共に告ぐ、とつと諦めて投降しい！今ならまだ比較的軽い罰で済ませたるさかい」

「そうそう、これ以上足掻いたって無駄なんだからさ。こつちも早く仕事終わらせたいし出てきなよ」

「私情駄々洩れですよ870さん……お気持ちちは分かりますが、真面目にやりましょう

「？」

「大丈夫だよ、この程度でどうにかなる程やわな訓練してないしね〜」

LSPが絶賛立て籠もりを実行する犯罪者達を追い詰めていた

彼らは麻薬密売を行っていたところをイシス警備隊によって発見され逃走を開始、同建物内に追い込んだところでLSPが合流してイシス警備隊は周辺の封鎖と人払いを行っていた

幸い人質を取られているわけでもないのでさっさと突貫しても良かったのだが、花梨の実地訓練も兼ねて彼女を連れてくるために少し時間稼ぎをしている

『「こちらPSG―1、花梨と共に狙撃地点に着きました」』

「了解や、これで準備は整ったな。よし……犯人どもお！これ以上警告を無視するならウチが突撃すんでえ!!」

花梨達が到着したことでガリルは様子を一変させて犯罪者達に最後の警告を行う

だが彼らが投降する様子はない、それを受けてガリルは1つ溜息を吐き……銃を構える

「しやあないな……ほなウチが突撃して制圧して来るから周辺を固めといてな」

「りようか〜い、行つてらっしやい隊長様♪」

「了解です！」

「よし……行くでゴラアア!!」

その言葉と共にガリルは建物に突撃し、鍵の掛かったドアを蹴り飛ばして突入した中には既に拳銃を構えている男3人と女2人がいたが、彼らが発砲するより先にガリルは銃床で顎を砕いて1人無力化する

犯罪者の持つっていた拳銃は地面に落ちた所を踏みつけて外に蹴り飛ばし、即座にMP5が回収した

そこまで来てようやく犯罪者達が拳銃を撃つが、ガリルは彼らが視認出来ない程の速度で遮蔽物へ隠れる

更に犯罪者達の持つている拳銃が次々と弾かれていき、彼らは手首や指が折れた痛み
に呻く

「消えただと……ぐうっ!」

「何処行きやがった……!?!」

「ここや、阿呆共」

「な……」

遮蔽物に隠れた後にガリルは外周を周るように移動して彼らの背後を取っていた驚きに塗れている顔を晒した彼らをそのままフルオートで弾をばら撒くことで一気に無力化する

後で情報を聞き出す為に何人かは生かしておく必要があるため、ガリルは男2人と女1人を除いてその場で射殺した

生き残らせた3人はそのままナイロン製の結束バンドを用いて拘束し、基地までの護送を目的とした装甲車を運転して来た79式に引き渡す

その後彼女達は彼らが持っていた麻薬の回収や現場の後始末などに追われ、忙しく動くのであった

「お、俺たちをどうするつもりだ？」

「これから尋問するに決まっていますわ。まあ……ちよつと楽しませて頂きますけどね？」

S09H基地内に存在する尋問室

取れることのない血の臭いが充満するその部屋に2人の男と1人の女が椅子に拘束されていた

そしてその場で唯一立っているのはこの基地所属のPPK、彼女は上品に笑いながら男の質問に答えている

後半の言葉に女が身体を震わせるが、その様子を見たPPKは綺麗な笑みを浮かべて彼女に近付いて行く

「貴女、怖がっているのかしら？」

「や、やめて……近付かないで……！」

「良いですわあ、その表情……とても唆られますわ」

PPKはうつとりとした表情で女の顔を撫でるとスカートの中から己の半身となる拳銃を取り出した

それに反応して女が軽く悲鳴を上げるがそれはPPKにとって心地よいBGMに過

ぎない

このまま女を尋問しようとも思ったが、やりたいことがあるPPKは左に居る男の方へと歩み寄る

「さて……これから貴方達に質問をしますわ。答えても答えなくてもどつちでも構いませんわ、答ええないなら楽しませて頂くだけですしね？」

「……………」

「では一つ目、貴方達が持っていたあの麻薬……コカインですわね。とても上質なものでしたが……あれを一体どこで手に入れましたの？」

「し、知らない……」

「あらら……まあ良いですわ、さつきも言った通り答ええないなら楽しませて頂くだけですわあ」

「……な、何をするつもウヴオツ！」

男が開いた口にPPKは拳銃を振り込んだ

何故かサプレッサーを装着しているのでその気になれば喉奥まで差し込んで窒息させることも可能だろう

男もそれを察したのか必死な表情でサプレッサーを外に吐き出そうとするが、当然こんな状態では確な抵抗は出来ない

そんな男に対してPPKは顔を近付けると嘔く様に屈辱的なことを告げる

「さあ、これを舐めなさい」

「……っ!？」

「まるで娼婦が殿方のモノを熱り立たせるように、ねつとりと……ね？」

「……っ!！」

PPKが男にさせようとしているのは所謂銃フェラというものだ

銃口を咥えさせ、舐めさせる……だがそれをするにはサブコンパクトのPPKでは短すぎる

その為だけにわざわざサブレッツサーを装着しているのだ

そしてPPKは指をトリガーに掛けており、一定のリズムで僅かに引き絞ったり緩めたりを繰り返している

やらなければこのまま撃ち抜く、男がPPKの意思を理解するのに時間はかからなかった

男は顔を歪めながらも渋々といった感じで顔を前後させ始めた

「……その程度ですの？つまらないですわね、もう撃ってしまいませんか」

「……っ!……っ!！」

「そう、それは嫌ですのね……なら、やることはお分かりですわよねえ？ほら、もつと舌

も動かさなさい」

PPKが心底つまらなそうな顔をして非常に冷たい声で告げると男が何かを訴えるように呻く

それを受けてPPKは再び笑みを浮かべると男の顎と頬に左手の指を添えて撫でながらしつかりとしやぶるように言うと、男は観念したのかそれとも死の恐怖からか必死になつてやり始めた

「あら、やれば出来るじゃないですの。良い調子ですわよ、そうそのまま……うふふ、必死にしゃぶつててまるで本当の娼婦みたいですよお？それにしてもお上手ですわね、もしかして経験がおありなのかしら」

「……………っ!!」

「……その目はなんですかの？娼婦は娼婦らしくモノに夢中になつてなさい!!」

「ウゲエツ！オア……!」

PPKの言葉に反応して男が反抗的な顔をする、彼女は拳銃を喉に突き入れる

男は堪らず吐き出そうとするがPPKの手によって無理矢理奥に押し込まれているせいでそれも出来ない

数十秒程突き入れた後に元の位置まで銃を戻すと、PPKは男に告げる

「次にそんな顔をしたら容赦なく撃ちますわよ。分かったなら早く続きをなささい、私

が満足出来たら抜いてあげますわ」

「ケホツ、カホ……………」

「そうそう、その調子ですわ。ねっとり、絡みつく様に……ほら舌で外側をグルグル舐め回したり……………ああ、良いですわぁ♡」

PPKは銃フェラを再開した男の様子にうっとりとしだし、続けていく内に段々とその顔が紅潮してきた

見れば僅かに身体が震えていて、何かに耐えるかのようだ

そのまま暫くは血の臭いが充満する部屋を水音と吐息だけが支配した

「とつてもお上手ですわよぉ……………ああ、達してしまっそうですわ♡ほら、前後運動を速めてもっと吸い付いて……………そうそう、そんな感じですよわぁ。とてもお下品な火男ひよっこが顔も素敵ですわよぉ……………ああ、だめえ……………達して、達してしまいますわぁああああああ♡♡♡

ア、ハア……………♡」

「……………っ！」

PPKの身体の震えは段々と大きくなっていき、前傾していく

そして限界に達したPPKは身体を大きく後ろに逸らせながら盛大にイッた

その証拠に彼女の脚には透明な液体が絡みつき、床を濡らしている

彼女の身体は全身に力が入り、人工筋肉が収縮した

脚は内股で掌にも力が入ってキュツと握り締める

……そう、拳銃のトリガーに、指を掛けた状態で、握り締めたのだ

トリガーの動きに連動してトリガーバーが前進し、そのトリガーバーに引つ張られる形でコッキングピースが動く

そしてコッキングピースがハンマーブロックを押し上げてロックの解除されたハンマーが落ち、ファイヤリングピンを叩いてファイヤリングピンが薬莖の底にある雷管フライマーを叩く

雷管が叩かれたことで極小規模の爆発が発生、薬莖内部に存在する無煙火薬に火が付き爆燃と呼ばれる現象を起こして一瞬の内に火薬の殆どが燃え尽きる

その結果個体から気体への状態変化『昇華』が発生し、一気に体積が膨張することに より内部の圧力が劇的に高まる

高まり過ぎた圧力によりガスは逃げ場を求めて弾頭を押し……銃身とサブレッサーを通った弾頭は銃口から飛び出し、当然の帰結として男の鳴管の上を通り過ぎてうなじの辺りから突き抜けた

因みにサブレッサーを装着すると延長バレルとしても働く為、初速は僅かに（数%程度）上昇する

だがそれでも男の命を奪うには余りにも非力、被弾箇所も箇所のためこのまま放置すれ

ば男が死ぬのに8時間前後かかるだろう

「あは……さいつつつつこうですわあ♡♡♡」

しかしそんなことは絶頂の余韻に浸っているPPKには関係のないことだ

恍惚とした顔を隠すこともせず、左手を自身の頬に当ててエビぞりのように背筋を逸らしたまま細かく震えている

やがて身体をささえることも出来なくなったのかその身体が地面に崩れ落ち、女の子座り状態となった

PPKが僅かにでも正気を取り戻すのに暫くの間がかかり、絶頂の余韻から抜け出した彼女は自身の銃を見つめる

「ああ、やってしまいましたわ……これをやってしまうとサプレッサーのお手入れが大変ですのに……ああ、でも………」

PPKはぼそぼそと呟くと今度は自分がサプレッサーを啜え、舐め回し始める

サプレッサーに付着した男の血と肉片を大層美味しそうに舐め取ってまた恍惚とした表情になった

サプレッサー内部に侵入した肉片も逃すまいと吸い出すのに必死だ

たっぷりと時間をかけてサプレッサーをある程度綺麗にしたPPKは震える膝に力を入れて立ち上がり、今度は女の前へと歩み寄る

「ひっ!」

「さあ、今度は貴女の番ですわよ。あのコカイン、何処で手に入れましたの?」

「し、知らない! 本当に知らないのよ!!」

「うーん、また答えてもらえませんかね……仕方ないですわあ♪」

「信じて!! わ、私達は下つ端で何の情報も持たされてないの!!」

「そ、そうだ! だからこんなことしても無意味なんだよ、だから……」

女に続き右にいる男も必死に弁明するが、PPKはそれを聞き入れることはなかった。彼女にとって情報を持つてゐる持つてないは関係ない、ただ自身の欲を満たしたいだけなのだ

「あらら、それが本当のことだとしてもどうでも良いですわ。だって私は今とても昂つていますもの♡」

「そ、そんな……!」

「ところで貴女……ゲテ物の娼館は御存じ?」

「……え? い、いきなり何を……」

「そこには通常では考えられないような娼婦たちがいますのよ。中でも人気なのは……先天性疾患で眼球を喪失した女性ですの」

「眼を……?」

時に痛覚を鈍感にし、先程まで死にかけていた人間が元気に走り回れるような状態へするもの

物によっては腕が千切れかけている人間が自分でその腕を千切り取り、高揚した笑い声を上げながら嬉々として暴れまわる程だ

しかし今彼女が用いたのは純粋な覚醒剤、ただ意識をハッキリとさせ感覚を寧ろ鋭敏にする

その結果女の感じる痛みは増し、更に覚醒剤の効果によって痛みで意識を失うことも出来なければ薬の効果が段々と効いて来て余計にハッキリとした意識で増していく痛みに絶叫するしかない

そのままPPKは覚醒剤の効果が切れて女が失神するまでの間サプレッサーを眼球に突き刺し、それが終われば空いた穴に指や舌を入れて楽しむ

勿論左目にも同様のことを行った

やがて女の意識が途切れるとPPKは女へ向いていた興味を残った男へと向けた

「やっ……」

「く、来るなあー！そ、それに俺に同じようなことをしたら本当に何も話せなくなるぞ!!
そ、そそそそれでも良いのかあ!?!」

男は必死に頭を回してなんとか危機から逃れようとするが、PPKは余裕の表情を崩

さない

PPKとしてはお楽しみが出来ればそれで良いし、それに男が幾ら口を紡ごうが情報を吐かせる手段を持っているのだ

この男の言うことに反応して辞めるわけがない

「あらあら凄い剣幕ですわね。確かに貴方に同じことをしては情報を引き出せませんわ」

「だ、だろう!?だから……」

「でもざあんねん、貴方がその気になっても強制的に喋ってもらえとつても素敵なお薬がありますのお♪」

「……は?く、薬?」

「これですわ」

PPKは覚醒剤が入っていたのとはまた違うポケットからまた注射器を取り出した中には白い液体が入っている

「な、なんだよそれ……」

「自白剤ですわ、聞いたことがありますか?」

「じはく……つておいまさか!やめ、やめろお!!」

「うふふ♪そんなに怖がつて……大丈夫ですわよ、ちよつと廃人になってその後燃料に

相手は強大であり、ただの犯罪組織と思つて相手すれば被害を被るか……いや、それ以前に尻尾すら掴めないだろう

そのことを確認したPPKはMDRへと通信を入れる

この所少し傷心していたし、やり甲斐のある仕事と共に組織を潰せた暁にはその報酬と称して好きだけ人間を食わせてやろうと思つて彼女に情報の収集を頼んだ

この通信に彼女は大層喜び、意気込んでこの仕事を遂行し始めた

とは言え幾らMDRでもここまで情報の隠蔽に優れた組織ともなると簡単には見付からない、情報部の人形総出で行うことになるだろう

きつとFive—sevenやFALもその足とハニートラップを駆使してそこら中を歩き回ることになる、これは彼女達を労わる為に指揮官やクレアと掛け合つておこう

そう考えたPPKは指揮官に通信を入れ……ようとして彼女が今孤島にいることを思い出し、先にクレアへと通信を繋げるのであつた

実践編：狩猟訓練②

「おら起きろお前ら！狩の時間だ!!」

「おわわわわわわわ!!」

まだ外も暗い時間、スカーレットはいきなり大声を上げる

それを受けてモシン・ナガンは何事かと己の銃を抱えながら起き上がり、FN49は完全に混乱して声も上げられずにいる

「ふむ、モシンは一応反応出来たか。FN49は何も出来てねえみたいだが、まあそりやそうなるわな」

「な、なんなのよ一体……敵襲かと思ったじゃないの」

「朝早く起きたらろ？」

「それはそうだけど……」

「兎に角起きたんならさっさと準備しろ！今日はお前らに狩猟の心得を叩き込んでやる」

スカーレットの言葉を聞いたFN49とモシン・ナガンは身体を完全に起こして身支度を済ませる

2人共いつもの服ではなくハンターらしい素朴な服に着替えて朝ごはんを食べる、因みにメニニューはジンギスカンとレタスのサラダに特製ソースをかけたものである

食べ終わると各々銃を担いでログハウスを出る、その際にスカーレットはライフルではなく上下二連散弾銃を担ぐ

そのままスカーレットは森の中へずんずんと歩いていき、2人はそれに必死に付いて行くと、途中で立ち止まった

「何かあったの？」

「見ろ」

「それは……糞ですね。昨日も見ましたが」

「湿気が多い……ってことはまだ新しい？」

「そうだ。だがこれは昨日の糞とは違う、分かるか？」

そう言われた2人はスカーレットの指差す先にある糞をじっくりと眺める

確かに昨日見た糞よりも眺めで、1つしか落ちていない

僅かに白い部分もあるが、それだけだ

それ以上の情報は見えて来ない2人は素直にそのことを報告する

するとスカーレットは僅かに感心したように息を吐いた

「ほう……そこまで分かるなら十分だ。要するにこの糞は昨日の鹿とはまた別の生き物

の糞ってことだな。んでこいつは狐の糞だ、犬や狸の糞と似てるからちよいとした見分け方を言っておく。まず狐は溜め糞をしない、要するに一個一個がバラバラに落ちてることが多いんだな。これは狸の糞との差別化だ。そして野生の狐は野鼠を食ってることが多いから鼠の毛や歯が糞に紛れてることが多い、この白いのは鼠の歯だな。それに近くで見ると細かい毛も紛れてるだろ？犬の糞は犬種にもよるが、ドッグフードを食ってる場合は他よりも白いが……野生にんなのはあんまないからな。野生の犬の場合には狐と見比べるのは難しいぜ、まあどつちにしろ食えるから狩る価値はあるんだけだな

「ふ、糞にも詳しいのね……てか犬も食べるのか……」

「あんまり想像したくないような……」

「なあに言ってるんだ？その内虫も食わせるつてのに犬くらいで足踏みしてんじやねえよ」

「「……は？」」

スカーレットの言葉に2人の時間が止まる

虫を食う、確かにスカーレットはそう言った

そういう文化があるのは2人共知っているが、自分が食べるとは微塵にも思っていないのだ

「ね、ねえ指揮官……さっき言ったのって……」

「ああ、ガチだ」

「う、嘘ですよね？そんなの……」

「このご時世虫は貴重な食料だし苦手意識さえ克服出来りやあかなり旨い御馳走だぜ。それに私の基地に所属してる奴は全員虫を食うどころか調理出来るように訓練している、諦めな」

「……………」

絶望、2人の表情を言葉で表すのなら正しくその言葉が最も適切だろう

絶望に暮れる2人を無視してスカーレットは講義を続ける

「それと見るべきはこの足跡だ。ただ単にあつちの方に得物があるとかそんな程度で終わらすのはヌーブだな、それ以外にも様々なことが分かる。一番デカいのは足跡の深さと大きさだ。デカけりやデカい程得物のサイズもデカくなる。深い場合は体重が重かったり☑️足跡が付いた時点で☑️地面がぬかるんでいたなどの情報を知ることが可能だ。糞からも古い新しいは分かるが、足跡からも分かる。踏みつぶされてない落ち葉とか雑草がどれくらいあるとか、な。更に今回は狐だと確定してるから見る必要はないのかもしれないが、足跡から動物を同定することも可能だ。特に蹄の有無は一発で分かるぜ。蹄が無い場合は比較的下側が半球状になるが、蹄がある時は比較的四角だな」

「な、なるほど……追跡するだけじゃないのね」

「たりめえだ。これを応用すると敵兵の足跡を見付けた時にただそれだけで様々なことを知ることが出来る。足跡の間隔と数から敵兵の人数、深さから装備の多さや運搬物の重量とかな。人数が2人でも足跡が異様に深いなら何か重量物を運んでることが分かるし、外骨格やパワードスーツの類かもしれないねえ。気を引き締めた方が良さだろうな」

「そういうことですか……狩猟がスナイパーに必要な素質を鍛えられるってこういうことなんですね」

スカーレットの話聞いて2人は感心する

そこから彼女達はスカーレットの話熱心に聞いてそれをメモしていく

ある程度話をし終えたスカーレットは追跡するぞと言いつつ足跡の追跡を始める

2人も急いでそれに続こうとして「足音立てまくるんじゃないやねえ」と怒られて静かに付いて行くのであった

「ねえ、指揮官……あれ」

「お、気付いたか。良い目をしてるなモシン」

暫く後、歩いているとモシン・ナガンがスカーレットに小声で話しかけてきた

それに対してスカーレットも小声で誉め言葉を送る

その様子にFN49は何が何だか分からない様子だ

「何のことでしよう?」

「あれを見てみな」

「ん?あれは……」

スカーレットの指し示す先を見てみると僅かに何かが揺れたような気がしたFN4

9は目を凝らす

しかしその先に何があるのかハッキリとは分からなかった

それにスカーレットは特に落胆を見せることなくモシン・ナガンに指示を出す

「モシン、やれ」

「分かったわ……でも当てられるか分からないわよ」

「構わねえよ」

モシン・ナガンはスリングで肩に負っていた己の半身を前に持つて来て kneeling supported positionを取る

座学で学んだことを早速活かして己のモノとしている様子にスカーレットは僅かに微笑んだ

そんな彼女には気付くことなくモシン・ナガンは銃を構えて呼吸を整える……数秒した後轟音が響いた

するといつの間にか双眼鏡を覗いていたスカーレットが満足そうに口を開く

「上出来だ、一撃で仕留めたな」

「スパシーバー！」

「もしかして……先程の足跡の主ですか？」

「そうだ。あそこの木陰で休んでたぜ」

「良く見えましたね、モシンさん」

「運が良かったのよ。ちよこつと頭を動かした時にそつちを見てたからね」

「そうだとしても見えるのはホンの僅かだった筈だ。それを見逃すことなく捉え、ただの草木の揺れとは違うと判断出来たのは紛れもねえお前の実力だろうが。ここは胸を張るところだぜ」

「そう、そうね……ありがとう」

掛け値なしの賞賛を送るスカーレットにモシン・ナガンは少し照れ気味だ

話しながら仕留めた得物に近付くと、綺麗にヘッドショットが決まって頭の上半分が吹き飛んだ狐の死骸があった

その悲惨な光景にFN49とモシン・ナガンは心を痛めるがスカーレットは痛みを感じずの間もなく意識を吹き飛ばせたんだ、寧ろ優しい殺し方だけと言いつつ

おまけに、この程度で心痛めてつと戦場じややっていけねえと言われた2人は納得したのか表情を少し明るくした

その後は仕留めた狐を持ち帰り、スカーレットが2人に解体の仕方を教えながら実践させる

その日の昼食は狐肉、と言いたいところだが狐は肉食性だ

肉食動物の肉は筋張っていて固く、食すには基本的に向いていない

この狐は剥いだ毛皮を利用して獣の臭いを纏う術を教える為の教材となり、残った肉は熊を誘き出すための罠用に保管されることとなった

その為昼食には保管庫内にあった猪の肉を使ったステーキとなり、これもまたスカーレットが2人へと教えながら作らせた

慣れない作業にヘトヘトになる2人だったが食事を摂るとその美味しさに疲れが取れるのを感じ、少しの休憩の後は先日と同様にスカーレットの格闘訓練を受けることと

なった

そしてボコられた2人はそのまま休憩することなく周囲を一望出来る櫓に登らされ、そこで距離目測の実地訓練を受ける

その後はそのままレンジカードの作成、櫓から観測出来る範囲内に存在するLP/O Pとして優れた地点の発見に移動……移動後にはまたレンジカードを作成しそのままスナイパーズハイドの構築と休みなく次々と動かされる

先日とは打って変わって色々とさせられることに疑問を感じつつもそれをスカールレットにぶつけることは出来ない、何故ならこの時のスカールレットの様子は正しく鬼教官であり少しでも逆らえば蹴りが飛んできそうな気配があつたからだ

常に僅かな殺気を纏いながら2人に指示を出し様々な訓練を施し、ミスがあれば檄を飛ばす

この日だけでもスカールレットは2人にレンジカードを数十枚以上描かせ、否が応でも描くことに慣れさせた

そして夜には夜間行動に於ける訓練を施し、スナイパーやスポッターとして作戦を実施する際の動きを叩き込む

翌日もまた早朝から2人は叩き起こされ朝に狩り、昼に格闘とレンジカードと作戦行動及びハイド構築、夜にまた作戦行動や夜間の距離目測に夜間狙撃訓練など……一

気に様々なことをさせられる

今までとは比べ物にならない位の密度だ、これにより本当の訓練が開始されたかと感じる2人だったが……その答えはNOだ

濃密な訓練が始まって3日が経った夜、2人が疲労により寝静まるのを見計らってからスカーレットは外に出てとある相手に通信を掛ける

「予定より早い、明日の夜頼む」

『おや、こりやまた性急だね。基礎訓練はもう良いのかい?』

「ああ、もう十分だ。あれだけ出来るなら……そろそろこの基地の本当の訓練って奴を味合わせても良い頃合いだろうよ」

『うわあ、悪人顔してるのが容易に想像出来る……ともかく了解! 64式と89式にも話しておくよ』

「頼んだぜ、あいつらに地獄の洗礼を受けさせてやれ」

『任せなさい! 試作機の本気って奴を見せてやるわ♪』

「てめえも今悪人顔してんだろ……まあ良い、遠慮は要らねえから全力でやれ。良いな?」

『はい! それじゃあね、指揮官』

「おう」

通信を切つたスカーレットはニヤリと笑みを浮かべると闇夜の森の中へと消えていく

何も知らないFN49とモシン・ナガンはログハウスですやすやと眠り続けるのであつた

人形用の睡眠薬が盛られていたことにも気付くことはないままに

実践編：狩猟訓練③

「よし、書けたわよ同志」

「私も書けました」

「どれどれ……良い感じに書けてるな、これなら実際の戦場でもそれなりには書けるはずだ。この短期間で成長したな」

翌日、夕方に近い時間にスカーレットはFN49とモシン・ナガンを連れて森の中へ潜みレンジカードを書かせていた

2人共この数日の間にメキメキと成長し、しつかりとしたレンジカードを作成出来るようになっていた

その結果にスカーレットは笑顔で2人を褒め、誉められた2人も嬉しそうにはにかむ彼女達はレンジカードの作成以外にも様々な能力をこの短期間で上げている、スカーレットの鬼教官な態度にも少しは慣れたのか程良い緊張感を生む要素として受け入れていた

そんな2人に気を良くしたのかスカーレットは少し早いものここで一旦訓練を止めて夜まで自由時間にすると言い放つ

FN49とモシン・ナガンは自分達の努力が認められてスカーレットの態度が軟化したのだと思いたい喜んで

これが伏線であるということも知らずに

それからスカーレットは2人を連れてログハウスまで戻ると用事があるから夜まで戻ってこない、夕食は適当に作って食っておけと言って何処かへと行ってしまった

FN49とモシン・ナガンは唐突な行動に疑問を持つも、彼女も指揮官であり本来多忙な身であることを思い出して納得した

その後2人はまだ夕食には早い時間だからということと格闘訓練を行うことにした
切っ掛けはFN49が「そう言えばやったことありませんね」という発言をしたことである

結果は僅かにFN49が競り勝った

変幻自在な彼女の蹴りをモシン・ナガンが躲し損ねたことが勝因となった

「まさか負けるなんてね…随分と強くなってるじゃない」

「そうは言ってもギリギリでしたよ…あそこで当たっていたら負けてたのは私の方でしたし……」

勝ったFN49ではあるが、無事という訳ではない

彼女も少なからず傷を受けており、特にモシン・ナガンの右掌打が炸裂した左肩を痛

そうに擦っていた

その後彼女達が休憩して夕食でも作ろうかと話した時、それは起きた

「っ!!何?」

「銃撃です!遮蔽物に!!」

いきなり破裂音がしたかと思うと土が抉れて周囲に土煙が舞う

それが銃撃によるものだと思早く察したFN49はモシン・ナガンに注意を促しながら倉庫の裏まで走る

倉庫の外壁には金属が用いられている為ログハウスよりも貫通する可能性が低いだろうという判断だ

そんな彼女の様子に意識をすぐさま切り替えたモシン・ナガンはFN49とは違う方向から倉庫の裏へと走り抜ける

これはターゲットがそれぞれ違う方向へ移動することで射手にどちらを狙うかを迷ませたり、少なくとも片方だけでも遮蔽へ隠れられるようにする為の動きだ

射撃音は聞こえないがそれでも銃弾が飛んで来る方向は分かる、不規則にジグザグと走りながら銃撃を回避して2人共倉庫の裏まで回り込むことが出来た

「急になんだったのよ!」

「私にも分かりませんよ……でも恐らくは……」

「…あの指揮官ならやりそうね」

「やっぱりそう思います?」

「勿論、常識何てこれっぽっちも通用しないもの」

FN49とモシン・ナガンはこの銃撃をスカーレットによるものと断定し、唐突に有無を云わせぬ強烈な訓練が始まったのだと判断した

それは半分正解であり、半分不正解である……確かにこれはスカーレットによる急な襲撃へ対する対応力を磨く為の訓練ではあるが、撃っているのは彼女ではない

『様子はどうか?』

「まずまずって言ったところだね。悪くはないけど一瞬固まった、これが戦場だったら死んでるかも」

FN49とモシン・ナガンのいる地点より300m離れた地点にて、大木と同化している少女が銃を構えたままスカーレットと通信をしていた

vertical supported positionであるにも関わらず事に銃を安定させており、2人の居る場所へ的確に撃ち込んでいた

『そうか。なら容赦なく追い込んでやれ』

「了解!……あーあ、ご愁傷様だね新人ちゃん達。でもこれも訓練だし恨みつこなしつてことで……64式、89式!」

「はい」「はーい！」

スカールレットとの通信を終えた少女が小さくも鋭く声を発すると2人の少女がそれに応える

グリフィンの戦術人形、64式自動小銃と89式自動小銃だ

彼女達は自分達を呼んだ少女の近くの木の上におり、声を掛けられると同時に飛び降りてそのまま地面に身を伏せる

それだけの激しい動きを音を殆ど立てることなく実行する所からその身軽さが窺える

彼女達が降りて来たことを確認した少女は指示を出す

「ダミー総動員で山狩りするよ。64式は南東から、89式は北西方向からお願い」

「了解です！」

「貴女はどうするの？20式」

「私はこのまま真つ直ぐ銃撃しながら追い込んでいく。私が注意を引くから2人は気付かれないようにね」

「分かった。あの子達も結構優秀らしいから返り討ちに遭わないようにね」

「そうだね、気を付ける。それじゃあ……行動開始！」

各々が己のやることを理解したら後は行動するのみである

20式自動小銃の指示により64式自動小銃と89式自動小銃は分散させて隠しておいたダミーへと指示を出し、それぞれの方向へ散って行く

「さて、私も行動しなきゃね……君達の実力、見極めさせてもらおうよ？」

20式自動小銃、彼女はIOPよりスカーレットのS09H基地へと派遣されている新規戦術人形の試作機だ

半身となる銃は2020年に日本の自衛隊にて正式採用されたアサルトライフルであり、それまでの89式と比べてかなりのモダナイズが施されていた

日本の国産銃らしい明らかなデメリットもあつたものの、全体的に完成度の高い銃であつたのは間違いない

特に目を見張るのはその防錆性と排水性であろう、明らかに離島防衛を意識して作られているのが分かる

それを証明するかのように採用が決まった後も水陸機動団や中央即応連隊、第一空挺部隊など水辺での戦闘がありそうだったり特殊な任務に就く特殊部隊から配備されていた

特殊作戦群？あそこは別格である、分かりやすいデメリットを抱えた銃など使うわけがない

そんな当銃を扱う為に開発されたのが彼女だ、コーラップス汚染によつて海戦こそ起

こらないとは言えひよつとしたら何か有用性があるかもしれない

そしてその価値を見出し適切な訓練を施せる者……となればスカーレットの名前が一番上がるのは想像に難くないだろう

こうして彼女はスカーレットの基地へと派遣され、そこで強烈な訓練を受けて今では第一線で活躍する戦術人形の1人である

現在はスカーレットが保有する孤島の警備任務に就いており、既に2ヶ月が経った来月にはまた基地に戻るがこの孤島全域の地形は完璧に理解している、それを活かして今回は新人2人を苛め……訓練しようというわけである

また同じ日本の国産銃で自衛隊に正式採用された経歴を持つ64式自動小銃と89式自動小銃とは馬が合い、普段から一緒に過ごすことが多いようだ

経歴的には彼女は一番新参者ではあるものの、メンタルモデルやボディは一番お姉さんに作られている関係か彼女が2人を纏めている姿が良く目撃されている

そして今回もこの訓練を行うにあたって彼女が隊長となり指揮を執ることとなった(ふーん、想定してたよりも良い動きするじゃない。最初こそ固まってたけど意識の切り替えさえ出来ればここまで動けるのね)

現在20式はFN49とモシン・ナガンを追い詰めるべくダミーと共に銃撃をしながら移動をしている

ただ撃つのではなく自身の誘導したい方向へ行かせるよう退路を断ちながら撃っているのだが、あまり上手くいっていなかった

原因はモシン・ナガンが巻き上げる土煙による視界妨害だ……彼女は倉庫の裏手へと回った際に手近にあったシャベルを拾い、逃げながら土を掘って勢い良く上へ向かって振り上げることで土煙を発生させている

対してFN49はポーチの中にも仕舞っていたのかカモフラージュネットを上から被ることで隠密効果を得ていた、普段と違って地味な色合いの服の為視認性がかなり下がっていて見失いそうになる

この基地の試験突破組には及ばないものの、その場にあるものを上手く使って更に連携までしてなんとか攪乱しようとしてくる

その様子に20式自動小銃は嬉しそうに笑みを浮かべる……思っていたよりも手応えのある得物に出会えたことを喜ぶ、戦闘狂の笑みを

彼女はスカーレットの獐猛さに影響されたのか割と狩りを楽しむタイプである、相手が想定より強いのならば……ギアを上げれば良い

20式自動小銃はこれまで不規則に行っていた射撃をピタリと途絶えさせる、案の定FN49とモシン・ナガンは警戒こそしているもののこちらの意図が読めず困惑している

その隙に彼女は音を立てることなく次の行動を開始するのであった

「急に銃撃が止んだ……？まさか諦めた訳じゃないでしょうに」

「何をして来るか分かりませんね……周囲を警戒しながら移動しますか？」

一方FN49とモシン・ナガンは先程までかなり厭らしいタイミング、厭らしい位置へと的確に撃ってくる銃撃が止まったことに少々不安が募っていた

彼女達の中にはまず間違いなくスカーレットが追って来ているという先入観がある、20式自動小銃が敵が複数いることを悟らせないようダミーとの同時発砲をしないように立ち回っていた所為だ

だからこそあのスカーレットがいきなり銃撃を止めたという事実には冷や汗が流れ出

て来る……何をして来るのか全く想像が付かないのだ

だがいつまでもここで固まっているわけにもいかない、それが悪手であることは分かり切っている

もしもここでずっと身を潜めていたところで気付かない内に接近して来てホンの僅かにでも隙を見せた瞬間倒されるのが目に見えている……それにそんなことをしたら後でスカーレットによる鉄拳が待っているだろう

「訓練で学んだことをもつと活かしやがれ、このド阿呆が!!」という幻聴まで聞こえる程だ、想像したらちよつと身震いして来た

だからここに固まらず、移動することは確定しているのだが……ここで一つ問題がある

「そうね……でも、何処に行けば良いのかしら」

「……言われてみれば。どうすれば良いんでしょう、これ」

そう、行く当てがないのだ

ここは絶海の孤島、逃げ場など最初から存在しないしまだ1週間程しか滞在していない彼女達では島の全容も把握出来ていない

知っている範囲など極僅かであるし、なんだったら既に未知の領域に來ている

ここで暮らす中でスカーレットよりこの島には危険生物もいることを教わっている

彼女達は下手な場所へ行けば余計に危険であることを理解していた

動くに動けない、しかし動かなければ活路は拓けない……そんな状況の中彼女達が出した結論は

「隠密に徹しながら元の場所へ戻りましょう、多分それが一番安全です」

「……スリップ・ザ・ストリームの応用つて訳ね、了解よ。あの指揮官相手にどこまで通じるか分からないけど……」

「何もしないよりは」

「遥かにマシね」

元のログハウスまで戻り、そこで潜伏することに決めたようである

その為に追跡して来る敵に偽の逃走経路を追わせてその隙に離脱を図る『スリップ・ザ・ストリーム』を行う、しかしこの手法は本来河川を用いるが彼女達の近くにそのようなものは存在しない

そこで彼女達は河川を用いずに偽の逃走経路を追わせるという作戦に出た

訓練でもやったことなどないぶっつけ本番のリスキーな行為だ、正直成功などしないであろうが今取れる最善の手段はそれであろうと判断したのである

行動指針を決めた彼女達はまず周囲を観察し、一定範囲内に敵性存在がないことを確認する

確認が取れたら行動開始だ、今まで逃げていた方向へ向けて身を潜めながら進むことで草を倒していく

一定距離まで進んだら2人共それぞれ違う方向へ進み、暫くしてから自身の倒した草の跡を辿って戻って来た

今のところ順調に事は運んでいる、上手くいつていることが逆に怖くもあるが……四の五の言つてはいられない

その後彼女達は元の地点まで戻るとそこから更に来た道に戻っていく

この時草木に変化を齎さない様に、それでいながら周囲への警戒を厳かにすることも忘れない

スカーレットから見ればまだまだ拙いものではあるが……彼女達の発想自体は良いし、ぶつつけ本番でこれだけの動きが出来るなら2人を するようなことはしないであろう

だがしかし、それは決して逃走手段として十分なものではなかった

「きやあつーちよ、何よこれ！」

「モシンさ……くうっ！」

警戒しながら進む2人であったが、モシン・ナガンの足首が急にロープで絡め取られて木の枝に吊り下げられる

それを見て即座にナイフを抜いて救出しようと試みるFN49であったが、背後から殺気を感じて振り返って見てみればナイフが複数飛んで来ていた

右手のナイフと左脚の蹴りによって3本は叩き落としたが、処理しきれなかったナイフが右腕と左肩に深々と突き刺さる

特に左肩に刺さったナイフは人形の身体に於ける重要部位に損傷を負わせ、FN49は左腕を動かすことが出来なくなってしまった

「FN49!?!この、こんな拘束くらいっ自力でえ!!!」

それを視界の端に捉えていたモシン・ナガンは足のホルスターからナイフを引き抜くと身体を揺らして反動を利用して自身の脚を拘束しているロープ切断し、地面へ向かって落下を開始する

それと同時に趣味の悪い仮面で素顔を隠した人物が両手にナイフを持って凄まじい速度で接近して来た

モシン・ナガンは空中で猫ひねりを行い体勢を整えるとそのまま襲い掛かって来た人物へ対して沈槌勁を放つ

しかしそれは避けられた上に右脛を斬りつけられ、人工肉がパツクリと開いてしまう程の損傷を負わされた

襲撃者の方へ目をやったモシン・ナガンは驚愕する、なんせその身長から明らかにス

カーレットではないことが分かったのだ

訓練じゃなくて本場の襲撃……その可能性が浮上したことを理解した彼女はM200より教わった呼吸法で意識を落ち着かせると同時に人工筋肉を震わせる

襲撃者がナイフを構えるのを捉えたモシン・ナガンは左脚だけで地面を蹴り襲撃者へ向けて突撃した

ナイフが振るわれ全身を斬り裂いていくもそれに反応することなく彼女は右拳を襲撃者の腹部へ向けて打ち付ける

その拳は襲撃者の腹を抉り抜いて貫通し、その感触を以てモシン・ナガンは襲撃者が人形であることを確信する

人形であるならばダミーリンクが存在していても可笑しくない……そう考えた彼女がFN49の方へと目を向けると、そこでは2体の襲撃者を相手に応戦している彼女の姿があった

こっちは片付いたからすぐに参戦……しようとしたモシン・ナガンは首に異物感を感じ、その場で倒れてしまう

「な、に……が……っ!？」

倒れた彼女はその視界に別の人影を見た

先程の襲撃者とは明らかに違う、何より……その姿には見覚えがあった、ありすぎた

長い髪を編んで三つ編みを二つ作っている、服装こそ見慣れないものだがそれは間違
いなく以前に配属されていた基地にもいる□仲間□の姿である

「う………そ、でしよ」

「ごめんね、これがこのやり方なのよ」

モシン・ナガンは自分の視界に映る64式自動小銃の姿に動揺を隠せないでいた

仲間とは言え自分が所属するのは軍事基地、訓練で怪我を負わせることは普通にある

しかしこれは明らかに度を越えている……なにせ彼女の首には折れた木の太枝が刺
さっているのだ

それが電脳と身体制御コアを繋いでいる導線を切断し、彼女は身体を動かさなくなっ
てしまった

電脳に損傷がないため死にはしないがこれではもう死んでいるのと大して変わり
はない……痛覚信号を遮断しても首に異物感が残っている所為で大変気持ち悪く、寧ろ死
んだ方がマシだとさえ感じる

しかも64式自動小銃はモシン・ナガンが最早動けないと分かるや否やFN49の方
へと近付き、謎の襲撃者と共に彼女へ攻撃を仕掛ける

襲撃者達のナイフを捌くので手一杯だった彼女は後ろより加えられた不意打ちに対
応することが出来ず、体勢を崩されて拘束されてしまう

そして襲撃者達のナイフを首、胸、腹、脇へ突き刺されたFN49は身体に力が入らなくなり、倒れた

しかしやはりと言うべきか、人形としての生命活動を止めないよう絶妙に調整されたその刺し方によって彼女もまた意識を手放してはいない

それを見た襲撃者がマスクを外すと下から現れたのは綺麗に整った少女の顔、それも全く同じ顔だ

やはりダミールリンクを用いた人形による襲撃……仮面を被っていた人形に見覚えはないがきつと彼女もスカーレットの基地にいる人形なのだろうとモシン・ナガンは当たりを付ける

仲間なのに……同じ基地の所属なのに……そういった思いがグルグルと渦巻いている彼女の元へ64式自動小銃が戻って来た

「考えてることは分かるわ。疑問に思うのも当たり前だし、答えてあげる……『仲間だからよ』」

その言葉に反応しようとして……しかし急激な眠気に襲われた彼女の口から出てくるのは意味を為さないただの音にしか成りはしなかった

しやがみ込んだ64式自動小銃がモシン・ナガンの首へ人形用鎮静剤を撃ち込んだのだ、FN49へも仮面の襲撃者……20式自動小銃が同じように処置をしていた

やがて2人は完全にスリープモードへと移行し、意識を手放すのであった

「て言うかいつも思うんだけどその仮面は何？」

「え、カツコよくない？」

「……悪趣味」

「分かってないなあ、64式は」

「出来れば分かりたくないんだけど…」

『ちよつとお、私が到着する前に片を付けないで下さいよ！わたしだってお2人と立ち合いたかったのに!!』

「遊びじゃないのよ？89式」

『分かってますよ！それでもやりたいじゃないですか!』

「だからって…」

「まあまあそう硬くならないの、64式。89式には遠くまで行ってもらったのに結局は何もさせてあげられなかったんだから愚痴位聞いてあげようよ。そうだ、次の機会には89式に譲ってあげる!」

『ホント!?わぁーい、20式大好き!!』

「全く……現金なんだから」

「そう言いつつそんな彼女のことを可愛く思ってしまう64式お姉ちゃんなのであった」

「変なナレーション入れないで!」

『和気藹々とするのも良いがさっさと仕事しろ、もうへりの離陸準備は出来てんぞ』

「分かってるって。今全力で運んでるしもうすぐ……よし、着いた！」

「それじゃ、後は頼むわね指揮官」

「任せときな。そつちこそ、頼んだぜ」

「あいよ」

「了解」

『わかりました〜！』

幕間：スカーレットの訓練方針

闇

そう表現するしかない謎の空間、何処を見渡せども何も見ること能わず

そんな空間を一人の少女が走っていた

息が切れ、脚が縛れそうになつても必死に走る……何かから逃げているような容貌であるが、実際彼女は逃げていた

脚を止めれば追いつかれ、殺される……そう確信しているが故にもう限界を迎えているであろう身体に鞭打つて少女は走る

少しでも速く、少しでも遠くへ——その一心で動く彼女の脚は、しかし突然にその動きを止めた

何かが少女の脚に絡まり、それでも走ろうとした彼女はこけたのだ

一体何が……そう思つた少女は足元を見やり——短く悲鳴を上げる

そこには生気を感じられない目をした人形が居て彼女の脚を掴んでいた

その人形は頭が半壊しており目も片方が潰れている……非常に不気味なことこの上ない

少女は必死になってその手を放そうと脚をバタつかせるもびくともせず、放れることはなかった

このままじゃ×アイツ×に追いつかれて殺される——死を予感した少女は更に必死になり身体を起こして手も使おうとして……更なる異常に気付く

身体が、少ししか起き上がらない

嫌な予感が背筋を走る、少女は見たくない気持ち在必死に抑えながら恐る恐る自身の右腕の方を見やると……右腕を人形が掴んでいるのが見えた

しかもこの人形は頭の上半分が吹き飛んでいる、こんな状態では最早動くことは不可能なはず……にも関わらず口元に弧を描きながらその人形はこちらの腕を掴んで放さない

何がどうなっているのか分からず完全にパニックになった少女は、ジタバタと暴れることしか出来なくなる

しかしその少女の動きは左腕に纏わりついた人形の発した言葉によつてピタリと止まる

——ねえ、私達を殺して楽しかった？——

その言葉を聞いた少女はゆっくりとした動きで改めて自身の身体を拘束している人形達を見る

そしてようやく気付いた、その人形達は皆鉄血工造の人形達だったのだ

今まで見ることにすらしていなかった左腕には建設家……ハイエンドモデルの人形すら居た

確かに少女はグリフィンの戦術人形として鉄血の人形達を狩って来た、時にはハイエンドとの戦闘もあつた

快勝とは言えずとも勝利をもぎ取り、それを仲間と共に喜んでいた

その行為はなるほど、確かにただの殺害でしかない

いくら人類の為、護る為と言えどやっていることは意思ある存在へ銃を向け……殺すだけ

しかしそれは鉄血工造の戦術人形達が何故か人類へ反旗を翻したのが原因であり、それがなければこんなことにはならなかった……それでも殺しは殺し

最早少女の頭の中はパニックになり過ぎて同じ考えがずっとグルグルと回っていた
そうこうしている内に少女が忘れ、そして恐れていたアイツがやって来る

——これが君が今までしてきたことだよ。そしてこれからも続けていくこと——

その声に少女は自分がこの存在から逃げていたことを思い出す、もう遅い

見上げた先にはもうアイツが……返り血で染まった不気味な仮面を付けた彼女が
がすぐそこまで迫っていた

その事実には少女は——身体から力を抜いた

パニックを通り越して諦観に支配されてしまったのだ

自分が今までそうして来たように、自分もまたこうして無残に殺される……抵抗能わず、残酷に

——ふうん、諦めるんだ。思ってたより骨がないね……ガツカリだよ——

少女はそれを受け入れた、少女自身はそれを潔い覚悟から来るものだと思っていたが……
☒彼女☒はそれがお気に召さなかったらしい

その声には明らかな落胆の色が見て取れたのだ

だがもう少女には何もかもがどうでも良かった、もう全て投げ出して楽になってしまいたい——その一心しかありはしない

——そういう選択をするんだね。じゃあ終わらせてあげる……バイバイ——

☒彼女☒はその言葉と共に徐に銃を持ち上げて銃口を少女の胸へ向ける

そしてトリガーに指を掛けて……次の瞬間、銃口より飛び出した銃弾が少女の胸を引き裂いて身体へと侵入し——

「……っ！！！！」

S09H基地の整備室、そこに存在する複数のベッドの1つで少女——モシン・ナガンは勢い良く身体を起こした

前身に嫌な汗が流れていて呼吸が乱れに乱れているのを自覚する……いやそれよりも、今のはまさか——

「……起きたね。気分はどうだい——なんて、聞くまでもないか」

声が聞こえる

そちらを見やればこの基地の整備部門部長、イーサン・ウィリアムズがいつも通り微笑みを湛えながら彼女の方を見ていた

最早訳が分からない……仲間だと思っていた相手に殺されかけ、人形が見ない筈の夢を見て、そこから覚めてみればこの基地どころかこの世界でも指折りの優しさを持つイーサンがこちらを見て笑っている

モシン・ナガンは思考回路がグチャグチャになり過ぎて言葉紡ぐことすら出来ないでいた

それを察してなのか彼の方から話しかけてくる

「まあ、そりゃ訳が分からないよね……やるだけやつといて説明を僕に投げるんだから、スカーレットも人遣いが荒いよね？」

「——っ」

「まだ話せはしないかな？ それじゃあ勝手に説明しちゃうよ。まずね……」

その後の彼の話を要約するところだ

現在彼女が疑問に思っているのは何故仲間なのに彼処まで残忍な攻撃を加えるのか、そしてそこまでしておいて何故殺さないのかという点とさつきまで見ていたあれは何だったのかという点の2つ

1つ目に関してはスカーレットの訓練方針である

彼女は「死ぬ一歩手前まで追い込む」という方針を持っており、また彼女自身もそうやって鍛えられてきた

モシン・ナガンに加えられた過剰な攻撃はまさにそれ、死にはしないが死んでも可笑しくはない……そんな目に遭わせる為に敢えてああしたのだ

勿論酷いことであるし文句も出るだろうがそれらをスカーレットは全て退けて来た

曰く「軍の訓練じゃ死人が出ることも珍しくはねえ。実際私も訓練に耐えられずに死んでいった奴を何人も見て来てらあ……それに比べりや死なないという一線を決して超えない私の訓練方針は優しいまであるぞ？」とのこと

付け加えておくと普通の訓練であれば死人が出ることはあまりない、しかし特殊部隊に入るとなれば話は別だ

選抜試験の段階で死ぬことも珍しい事態ではない……それに比べてスカーレットは決して死人を出さないのだから確かに優しいのかもしれない

だからこそこの基地での本当の訓練は殺し合い一歩手前のものとなり、実弾を仲間へ向けて撃つことすらする

そしてそれを乗り越えた者がスカーレットの試験へと挑み……そこでは実際に殺される

この基地で行われるロビン・セイジはスカーレットが本当の敵として対峙し、実戦を経験させる為に行われる性質を持つているが故である

2つ目の疑問、夢を見ない筈の人形が何故夢のようなものを見ていたのか——これはイーサンの仕業だ

人形の整備士としてメンタルモデルにすらアクセス出来る彼がそこを弄って疑似的な夢を見せていたのだ

何故こんなことをするのか、それは「殺す」ということがどんな意味を持つのか……それを自覚させる為である

モシン・ナガンが見ていた夢、あれは過去に彼女が関わって来た作戦にて殺してきた鉄血の人形達が殺した彼女へ向けて恨みを向けて無慈悲に殺してくる——それを思い知らせるものだ

人形とは言え疑似感情プログラムが組み込まれている、故に殺された彼女達にも意思があり☒生きている☒ことを自覚させる必要があった

それを為すのがイーサンが見せる夢の目的である

この経験を通して殺す、いや……「殺される」ことの意味を否が応でも理解させ、その上で兵士として歩む覚悟があるのか否かを問うもの

もしもここで覚悟が潰えたのなら兵士ではなく別の道へ進むことも出来る

実際そうした道を歩んだ者もこの基地には多く存在する

話を聞いたモシン・ナガンは少し放心していた

それもそうだろう、PMCとして現在最も成功しているグリフィンとてここまでやる基地が何処にあると言うのか……少なくとも彼女は話にも聞いたことはない

改めて自分がかなりヤバイ基地に来てしまったのだと自覚する

それでもここを去ろうという気にはなれなかった

こんなにも狂っている基地など普通は見捨てて然るべきだというのに、何故だろうか……分らない

——お師匠やFN49に対する想い？それもあるだろう——

——ここに居れば間違いなく強くなれるから？それもある——

だが本当の理由は恐らく……モシン・ナガンは納得してしまっているのだ

スカーレットの掲げる理想、その理想を体現する為の方針に対して

知らず知らずの内に彼女もまたこの基地に染まり、スカーレットの影響を多分に受けているということなのだろう

その証拠に——今彼女の顔には笑みが浮かんでいる

それを自覚した彼女の答えなどもう決まっている

モシン・ナガンはしっかりとイーサンの方を向き、獰猛な笑みを以て答えを示す

「良いじゃない、やってやるわよ。こんな程度のプレッシャーでどうにかなるなんて思わないで頂戴」

「……スカーレットが好みそうな眼の色をしているね。良いだろう、君も覚悟を新たにすることをスカーレットに伝えておくよ」

少しだけ寂しそうな表情をしたイーサンの返答に引つ掛かりを覚えたモシン・ナガンはそう言えばと思いい出す

F N 49はどうであつたのだろうか——イーサンの言葉通りに受け取るのであれば彼女もまた覚悟を決めたのだろうか

その予想に対してイーサンは肯定の意を示した

どうやらF N 49は実戦経験がなかったことからより簡易的な夢をイーサンが作成して見せたらしく、モシン・ナガンよりも目覚めが早かつたらしい

彼女の行方を聞けば既にスカーレットの下へと向かっているとのこと、こうしちゃいられないわとモシン・ナガンも身支度を整えだす

そんな彼女の背中へ向けてイーサンは顔を向けることなく最後の質問をする

「——本当に、良いんだね？」

「ええ、構わないわ。私は戦術人形……人間に仇為す者を狩る殺戮兵器よ。その為には手段なんて選ばない——この基地のあり方の方が正しいって、それを思い出せたもの」

「そうか……少し、残念だけど良い兵士だね。それじゃあ、励むんだよ」

「言われるまでもないわ。そうそう、これから何度もお世話になるだろうし改めて挨拶

させて頂戴……私はモシン・ナガン、鉄血を屠る者よ」

「……僕はイーサン・ウィリアムズ、しがたない整備士だよ。これからもよろしくね」

「ええ、よろしく願ひするわ！それじゃあ、またね」

「ああ、またね」

その言葉を最後にモシン・ナガンは整備室を後にする

その様子を見ていたイーサンは回転椅子を回してモニターへ向き直り、溜息を一つ吐く

「彼女は☒そっち方面☒に覚醒したか……FN49とは違う方向性だけど良い兵士になるのは間違いのないねあれは。にしても——」

背凭れに身体を預けながら彼は独り言ちる

その呟きを聞く者は誰もいないが、誰かが聞いていればそれに全行程の意を示したであろう

「あそこまでスカーレットに似た覚醒を迎えた子なんて初めて見たな」

訓練の終わり

「ねえあれって……」

「うん……多分そうだと思う」

「マジ？まさかあの子が……？」

S09H基地の廊下、いつも賑やかではあるが今日は少し様子が違っていた

皆が1人の人形を見ながらヒソヒソと小声で話している、普通であればまず見受けられない光景だ

人形のみならず基地に雇用されている人間も話の渦中にいる少女を見て、その変わりように驚いている

その中には勿論彼女達の姿もあった

「ねえ、ゆかりん……あの子ってあんな感じだったっけ？」

「いえ、違ったはずです……一体何があったのでしょうか……？」

「モシンさん、でしたよね？カフェで見た時とは雰囲気違いますね」

「せやな……何があったらここまで変わるんや」

「変わり過ぎてて言葉が出ないんだけど……」

「……若干怖いんですけど」

ゆかり達も変わり果てた彼女の姿を見て驚愕を隠せないでいる

そんな彼女達の元へ2人の人形が近付いて来た

「やつほく、驚いてるねえ」

「まあ無理もないわね、私も正直驚いてるし」

UMP45とUMP9だ

2人は日本組へ近付くと気さくに話しかける

「UMPさん。何だかあまり驚いているようには見えないんですけど……」

「そうね、私達は何があつたのか知ってるしね」

「え、ホンマか！せやったら教えてくれんか？モシンはんに何があつたんや」

「良いよ〜！えつとねえ……」

それから2人は彼女達へ何があつたのかを簡潔に教えた

噂されている少女、モシン・ナガンはスカーレットによる訓練を受け、その最終段階にて篩いに掛けられたのだと

スカーレットによるこの篩いは孤島にて行われたあの残酷な戦闘とその後の悪夢のことである

この篩いに掛けられた者はその後の展開が3種類に分かれることになる

意気消沈して恐怖に震える者、気丈に振る舞って前を見据えるようになる者、そして……覚醒する者

殆どは前者の2つに収まるが、極稀に覚醒する者が現れる……それがモシン・ナガンなのだ

覚醒を経た者は身に纏うオーラが変化し、実力を二段階も三段階も飛躍させる

この基地の試験突破組でも覚醒をした者は少なく、今まで覚醒したのは一〇〇式機関短銃とPPKのみである

そう、ミレニアム8の面々ですら覚醒を経た者はいないのだ

この基地で3人目の覚醒者、それはもう基地がざわざわとするのも仕方がないものだろう

しかもその覚醒の仕方がスカーレットと同じ方向性ともなれば話題にするなど言う方が無理な話だ

それを聞いたことで事情を理解したゆかり達は改めて彼女の背中を見る

もう遠くに行ってしまったて小さくなっていたが、それでも感じるその圧倒的なオーラにゆかりですら怯みそうになる

(これがスカーレットさんの篩いを生き残って覚醒した人……格が違いますね)

日本組の中でも最も戦闘力に秀でているゆかりが絶対に敵わないと感じる程に今の

モシン・ナガンは強くなっている

以前の彼女であればやりようはあった、苦戦はするかもしれないが十分勝機はあったのだ

しかし今はもう勝機を見出せそうにない、短い時間でここまで成長した彼女を見てゆかりは身震いする

そしてゆかりは同時に気付いた、この篩いの真の意味を

このスカーレットによる篩いは優秀な者を見出す為のものではない、寧ろ戦いに向かない者を炙り出して戦火から遠ざける為のものであると

この基地にも少なくない人形達がこの篩いに掛けられ、恐怖に落ちてしまっている
そしてマガルやPPSh—41を初めとして落ちてしまった者が他の所で活躍しているのもこの基地の特徴だ

要は戦いに向かない者を戦場には出したくないというスカーレットの非常に不器用な優しさ故の篩いなのである

そんな篩いにかけられその上で覚醒を果たしたモシン・ナガンは真つすぐ司令室へ向かっていった

その道中で様々な人形から好機の目線とヒソヒソ話をされるがそれも気にならない
そんな些細なことに心を乱される程今の彼女は薄くはない、特に今は目覚めたばかり

なのもあつて気炎を吐く程に気合いに満ち満ちている

覇気を隠すこともなく正しく威風堂々といった様子で廊下を突き進み、司令室の前まで辿り着く

モシン・ナガンは帽子の位置を直すとドアを開けた

中にはスカーレット、WA2000、M200、FN49が居て全員が彼女の方を見てその顔を驚愕に染めている

「これは……驚いたわね」

「そうだね、イーサンさんから連絡は受けただけど……」

「モシンさん……その、変わりましたね」

スカーレット以外の3人が三者三様の言葉でモシンへ声を掛ける

そんな中でスカーレットだけは未だ声を出していなかった

その事にちよつとした疑問は感じつつもモシン・ナガンは宣言する

「モシン・ナガン、鉄血を屠る者。これからも全力でいかせてもらうわよ」

獰猛な笑みを顔に浮かべ、マントを翻しながら犬歯を見せて高らかに宣言した彼女に一同はそれぞれの反応を返した

WA2000は不敵な笑みを、M200は微笑みを、FN49は気おくれした様に不安げな表情を、そして……

を飛び出して行った

その後格闘訓練場でスカーレットに喰らい付くモシン・ナガンの姿が多数の人形に目撃されたことで暫くの間この基地は騒然となる

それもその筈、まだまだ新人と言つて差し支えない彼女があのスカーレットを相手に拮抗しているのだ

当然スカーレットはまだ全力を出してはいない、だがそれでも到底新人に至れる限界を遥か後方に置き去りにしていることは確かである

最終的にはスカーレットの膝蹴りを鳩尾に叩き込まれて沈んだが、そんなスカーレットは額から血を流している

モシン・ナガンの崩拳を躲し損ねて額の皮膚を切つたのだ、その事実にはスカーレットは心の底から嬉しそうに嗤う

期待していた新人が自分の予想を遥かに超える成長を遂げ、これからも更なる成長をしていく……そんな未来を思うと嬉しくて嬉しくて仕方がないのだ

その後簡易的な治療を受けたスカーレットは再び司令室でモシン・ナガンとFN49へ話をする事にした

「さて、モシンの奴が覚醒したとあつて思わずテンションが上がり過ぎちまつたが話がある。まずお前達へ課す訓練の第一段階は終了だ、2人共合格といったところだな」

「ま、当然よね」

「あ、ありがとうございます！」

「とは言えそれはあくまでも第一段階だ。ここを乗り越えられたのは喜ばしいことだが、ここからが辛いぞ。これからお前達は自分の力で実力を高めていってもらおう。当然WA2000を初めとした他の人形に訓練を見てもらうのは自由だ、だが頼り過ぎることとはするなよ。しっかり自主性を持った上で行動しろ、私も手が空いてる時は相手してやるから励むんだな」

「はい！」

「せいぜい吠え面かかせられるよう頑張るわ」

「ハッ！良い啖呵切るじゃねえか、そういうのは好みだぜ。だが時期が時期だ、そろそろ私は世界種子貯蔵庫の件で動かにならん。暫くはお前達の様子を見てやれねえし突発的な任務も入るだろう、一刻も早くお前達に仕事を任せられるようになってくれよ」

「了解！」

「良い返事だ。そんじゃ、今日は解散だ！この後は自由にしな」

その言葉を皮切りにモシン・ナガンとFN49は司令室を後にし、WA2000とM200の元へと向かう

そのまま2人に隠密行動の訓練を乞うが、WA2000は世界種子貯蔵庫の件で仕事

がある為M200が1人で行うことになった

そしてWA2000は司令室へと向かい、そこでスカーレットと共にクルーガーとヘリアントスと通信を行う

「確認するが、今日から3日後なんだな？」

『そうだ。こちらでも色々準備が整い、後は集合するのみだ』

「それなりに時間がかかったわね、でもまあ仕方ないか……」

『そうだな、それに関しては済まない。急な変更だったのだ』

「まさか腰の重い正規軍がここまで積極的に動くとは思わなかったぜ。私の古巣もやるべきややるじゃねえか」

そう、元々正規軍は各地のELIDへの対処で手を貸すことは出来ないことになってきたのだが事情が変わったらしい

なんでも対処する筈だったELIDが何者かの手によって粗方討滅されたく、手が空いたのだとか

正規軍の索敵すらも掻い潜ってELIDのみを狩り取る謎の存在に危機を感じるものの、都合が良いことに変わりはないし世界種子貯蔵庫の件も重要案件だ

それらを鑑みた結果予定を変更してこの基地と協力して作戦に当たることとなった
それから幾度か言葉を交わして会議は終了となり、スカーレットはWA2000と共に

に作戦に加える人員の最終決定に向けて話をする

とは言え元より殆ど固めていた為にそれもすんなりと終わり、個々へ連絡を回すと後は決行の日を待つだけとなった

スカーレットは椅子に凭れ掛かり、今も北極で粘っている仲間達のことを想う

(本当にありがたいな……もうすぐ、迎えに行つてやるから待つててくれよ)

この時のスカーレットは予想だにしていなかった、北極で死力を尽くした上で窮地に陥れられることを